ごあいさつ

この冊子は、京都大学人文科学研究所において日夜進められている研究活動の最先端を、みなさまにごく気軽に、たのしみながらご高覧いただけるよう編集したものです。

わたしどもの研究所は、1929年に前身の一つである東方文化学院京都研究所が設立されて以来、今年で75周年を迎えました。この間、日本をとりまく状況の大きな変動にともない、研究所もその姿をさまざまに変えてきましたが、人文学の世界でたえず新しいフロンティアを切り開き、重厚でリライアブルな研究成果を生み出していくという使命には、いささかも揺るぎはありませんでした。

研究所で行われている知的生産は、二つのカテゴリーに分かれます。一つは個人研究であり、いま一つは共同研究です。研究者一人一人の自由な発想にもとづく個人研究は、学を楽しみながら課題を心ゆくまで掘り下げることで、研究を通底の域にまで深めることを可能にします。一方、当該分野の多くの研究者が幅広く連携して進められる共同研究は、互いを啓発しあいながら新しい視野を獲得し、新たな問題群を発見して挑戦していく切磋琢磨の場を提供します。この冊子では、前半で研究スタッフ全員の個人研究について、後半で現在進行中の共同研究班について、そのモチーフと現状を図版もまじえて紹介しています。興味の趣くままにページを繰っていただければ幸いです。

今年はまた国立大学法人スタートの年でもあります。わたくしどもは、これを機会に三つの面でよりいっそうの伸展をはかります。まず人文学の分野において国際的な研究拠点としての機能をいっそう高めるために、「人文学国際研究センター」を設置します。つぎに人材養成機能を強化することをめざして、おもにポスドクの研究者（博士学位取得済の特別研究員など）を受け入れて中堅の人材に育て上げる「人文学高等研究院」を設置するとともに、大学院教育においても後継者の養成にさらに踏み込んだ努力をする所存です。そして研究成果の社会への還元をより促すため、夏期公開講座、開所記念講演会などの開催で培ってきたノウハウを活かして、「人文研アカデミー」などの新しい試みにも着手します。

来るべき2029年の百周年にむけて最後の四半世紀へ歩を進めるに当たり、わたくしどもはこの冊子に過去への省察と未来への展望も織り込んでみました。みなさまの忌憚のないご意見、ご批判とともに、あたたかいご理解とご支援をたまわりますようお願いして、巻頭のごあいさつといたします。

2004年11月

京都大学人文科学研究所長　森　時彦

人文科学研究のフロンティア

京都大学人文科学研究所要覧 2004年

目次

ごあいさつ　森　時彦　1
21世紀人文科学のフロンティア　4
新たな研究体制へ　8
75年の歩み　制度の流れ――沿革　10
75年の歩み　研究の流れ　12
共同研究一覧　14
原典会読と共同研究　18
図書　20
漢字情報研究センター　22
海外学術調査・国際交流　27
公開講座・講演会の紹介　30
出版物　32
21世紀COEプログラム●東アジア世界の人文情報学研究教育拠点
漢字文化の全き継承と発展のために　37
教育への貢献　38
人文科学研究協会　39

個人研究

■人文学研究部

教授
詩のことばの総合的な認識へ　フランスの詩学　宇佐美齊　40
言葉の森を分け入って　文学理論の研究　大浦康介　42
働く機械と読む機械　フランス革命と近代的主体の成立　富永茂樹　44
粘土版が語るシュメール社会　シュメールの行政・経済文書の研究　前川和也　46
人類学のフロント・ラインを歩く　在日米軍を中心とする軍事共同体の人類学的研究　田中雅一　48
文献学のダイナミックス　ヴェーダ文献の生成と伝承の研究　藤井正人　50
植民地支配と「人の支配」　近代朝鮮の政治と社会　水野直樹　52
「知のトポロジー」を求めて　近代東アジアにおける日本の法と政治　山室信一　54
文明の中のいのちのかたち　前近代の文明史的研究　横山俊夫　56

助教授
19世紀音楽とヴィルトゥオーレ　音楽におけるロマン派とメロドラマ的音楽　岡田暁生　82
Colonial Office文書が示唆するもの　戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク　籠谷直人　84
ゲノム研究と生命観・人間観　現代社会における生物学・生命科学　加藤和人　86
「労働者の保守党支持」の深層　19世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム　小関　隆　88
古都・「伝統」・文化財　近代天皇制の文化史的研究　高木博志　90
レンブラントから光琳へ　近代日本の芸術と西洋　高階絵里加　92
人間の範疇化と序列化　人種・エスニシティ論　竹沢泰子　94

助手
植民地朝鮮の「政治空間」と日本人社会　近代朝鮮在住日本人社会の研究　李　昇燁　116
ソコニイルコト　近代日本民俗誌システムの研究　菊地　暁　118
「わざ」の豊かさを捉える　身体技法の認識論　倉島　哲　119
カースト社会を生きるムスリム　南アジア・ムスリム社会の社会構造　小牧幸代　120
数世紀を比較史的視点から分析　近世ヨーロッパの国際金融研究　坂本優一郎　121
現代身体論の史的背景をさぐる　近代西洋医学発展史研究および身体論　田中祐理子　123
学校／説教／僧侶、そして〈奇人〉へ　近代日本における教育／教化／宗教の関係史　谷川　穣　124
トラクターが触知したナチズム　ナチスドイツの農業問題　藤原辰史　127
近代批評、あるいは思惟と存在のはざま　ポール・ヴァレリーと20世紀の思想　森本淳生　133

■東方学研究部

教授

「其れ厳として上に在り」
先秦時代の金文 浅原達郎 58

はじかれ、こぼれおちるもの
清代の文化と社会 井波陵一 60

財政システムから見た帝国統治
近代中国の財政と社会 岩井茂樹 62

中国民間の語り物文芸
中国の小説、演劇及び説唱文学の歴史 金 文京 64

神話と儀礼
中国古代の伝承文化研究 小南一郎 66

中国美術の様式と意味
五千年美術の様式的、図象学的研究 曾布川寛 68

敦煌写本に見る学校と教材
敦煌写本の言語史的研究 高田時雄 70

長寿のサイエンス
中国伝統科学の思想史的考察 武田時昌 72

空間造形の伝統を原点に遡る
中国建築の様式・技法・空間 田中 淡 74

刑罰とシルクロード
中国古代中世の法制 冨谷 至 76

道気神三位一体の宗教――道教
道教思想研究 麥谷邦夫 78

中華世界と工業化社会
近代中国の綿紡績業 森 時彦 80

助教授

漢文化圏と藏文化圏の境界へ
川西走廊の漢藏諸語の記述研究 池田 巧 96

世界最大の政党の歩み
中国共産党史の研究 石川禎浩 98

アフガニスタンとイスラーム
イスラーム東漸史の研究 稲葉 穣 100

電子仏典の三界
仏教研究知識ベース――禅仏教を例として Wittern, Christian 102

清代道教の実像
清代の道教龍門派の歴史及び内丹の研究 Esposito, Monica 104

国家はどのように誕生したのか
古代中国の考古学研究 岡村秀典 106

異文化のフュージョン
インド・中国における仏教の学術と実践 船山 徹 108

中国木簡学の現在
秦漢時代の制度 宮宅 潔 110

朝鮮史における「流品」思想の展開
高麗官僚制度研究 矢木 毅 112

漢字と漢字コードのはざまで
文字コード理論 安岡孝一 114

助手

北宋仏教美術から見える世界
中国仏教絵画の研究 大原嘉豊 117

怪を志す小説？
中国魏晋南北朝志怪の成立背景 佐野誠子 122

民族間交流と言語接触
客家語およびその周辺言語の記述研究 中西裕樹 125

南北朝史の再検討にむけて――制度史の観点から
中国古代中世の官制史 藤井律之 126

中国近世史を読みなおす
中国近世の国家支配の研究 古松崇志 128

イスラーム世界における南アジア
ムガル朝時代の歴史叙述の研究 真下裕之 129

文化像の再構築
モンゴル時代の文化政策と出版活動 宮 紀子 130

華南海域世界の変動
近代華南沿海地域の社会経済変動 村上 衛 131

さまざまな文字を自由にコンピューターで扱うために
文字定義情報に基づく文書表現系に関する研究 守岡知彦 132

中華文明の黄昏を超えて
明代後期「北虜南倭」時代の中国社会 山崎 岳 134

■人文研共同研究私見 斎藤清明 135

共同研究

■人文学研究部

フランスへの眼差し、日本への眼差し
日仏交渉の研究 宇佐美齊 140

あなたは贈り物を捨てられますか？
フェティシズム研究の射程 田中雅一 142

国家形成の比較研究
発掘、文献研究の新成果から国家形成の理論構築へ 前川和也 144

寄せて上げる人文学
身体の近代 菊地 暁 146

近代日本とアジア
領事館警察の研究 水野直樹 148

文明化をもたらす言語をもとめて
文明と言語 横山俊夫 150

実在性と概念がいかに交錯するのか
人種の表象と表現をめぐる学際的研究 竹沢泰子 152

生活世界の大変貌
1960年代の研究 富永茂樹 154

京都に見る近代の射程
近代京都研究 丸山 宏 156

長期の広域秩序の解明にむけて
アジア・ネットワークの研究 籠谷直人 158

空間の再審
人文・社会科学の新基軸を求めて 山室信一 160

■東方学研究部

古代、中世美術と石窟寺院の研究
中国美術の図象学 曾布川寛 162

インド往還
王玄策研究 高田時雄 164

疑古と釈古とのはざまに
中国文明の形成 小南一郎 166

中国の生活空間と造形
住まいと暮らしにみる伝統的中国文化の特質 田中 淡 168

儒仏道三教交渉の諸相
三教交渉の研究 麥谷邦夫 170

過渡期の文字資料を読む
三国時代の出土文字資料 井波陵一、冨谷 至 172

中国近現代史研究の国際拠点
20世紀中国の社会システム 森 時彦 174

漢字、テキスト、そしてテキスト処理
漢字情報学の構築 安岡孝一 176

曰古――むかしむかし
中国古代の基礎資料 浅原達郎 178

陰陽五行のサイエンス
科学と占いの中国的パラダイム 武田時昌 180

マークアップ
理論と実践 Wittern, Christian 182

半世紀後の再研究
元代の法制 岩井茂樹 184

東アジア民衆文化を読み解く
中国近世日用類書の研究 金 文京 186

研究業績一覧 188
個人研究一覧 202
施設 203
歴代職員 204
組織・所員 206
研究・教育経費 207

21世紀人文科学のフロンティア

21世紀を迎えた今日、他の学問分野と同様に、人文科学もあらたな課題を抱えている。複雑化・多様化しつつある現代社会において、人文科学が果たす役割は何か。人類のながい歴史の中で生み出されてきた文化現象を考察の対象とする人文科学は、今後いかなる課題に取り組み、どのような方向に進もうとするのか。

人文科学研究所は70年以上にわたって蓄積されてきた成果の上に立ちつつ、今あらたな一歩を踏み出そうとしている。

共同研究 ―知の協働―

テーマごとに研究者を組織しておこなわれる共同研究は、今日、各分野でひろくおこなわれている。毎週あるいは隔週、異なった分野の班員が集まってテキストの会読や研究報告、討論を重ね、3〜5年の期間終了後に、論文集や校訂テキスト、訳注などを公刊して研究成果を社会に還元する――こうした共同研究の方法が、人文科学、社会科学の分野においてきわめて有効な方法であることを国際的に認知させたのは、「人文研の共同研究」であったと自負している。

共同研究は、現在も、また将来においても、研究所の研究活動の主軸である。研究所スタッフ、京都大学内の研究者、そして主に関西地方在住の研究者が参加して運営されてきたが、近年は海外の研究者の参加も多くなり、国際共同研究の様相を帯びる研究班も増えている。人文科学研究所は今後も、共同研究の体制を強め、広い視野からの議論と緻密な分析を重ね合わせることにより、新たな研究成果を生み出していくことをめざしている。

また、文化そのものが全地球的な情報化社会の到来のなかで変化しつつある今日、人間の文化を対象とする人文科学研究においても、この潮流に即してあらたな手段、方法が模索されるべきであろう。現在、われわれは、実験的な共同研究のあり方を模索し、研究組織と方法、および課題設定の両面から、あらたな時代の共同研究を切りひらこうとしている。これが、共同研究のパイオニアである人文科学研究所が担おうとする第一の課題である。

フィールドワーク　―知の探査―

20世紀の人文科学が、すでに成熟しつつあった文献学を超え、あるいはそれをさらに深化させることができたのは、文字以外の考古遺物や未知の文献資料の発見、また社会や文化現象についての未だ書かれざる知見の獲得によるところが大きい。探検としてはじまった踏査が重ねられるなかで、各分野において科学的なフィールドワークの方法が確立され、その成果が利用されるようになったことは、人文科学におおきな革新をもたらした。

わが国における組織的な海外学術調査は、旧東方文化研究所や統合後の人文科学研究所によって切りひらかれたといっても過言ではない。戦前、戦後にわたって、中国、西南アジア、アフリカ、ヨーロッパの各地域において学術調査の経験と実績が積み重ねられてきている。現在では、海外におけるフィールドワークや文献調査が日常的に多様におこなわれるようになったために、大規模な調査隊の組織派遣というスタイルはとられていない。近年の特徴としては、海外の研究者との国際的な共同プロジェクトの一環としてフィールドワークがおこなわれることが多い。また、歴史的な文献資料の知見と現時点での現地調査の成果を相補的に用いて、文明地域の研究を進展させようとする研究手法も模索されている。現地調査による未知の資料の発掘、あらたな知見の獲得を通じて、これまでの伝統を踏まえながら視野を拡げつつ、国際的な水準に立つ研究成果をあげることをめざしている。

研究組織と展望

文献学および資料批判は、つねに人文科学の基盤である。共同研究とフィールドワークという方法をこの基盤と接続させながら、人文科学研究所は、21世紀における人文科学のフロンティアに突き進もうとしている。人文学研究部と東方学研究部がその推進力を生みだす研究組織である。

●人文学研究部

人文学研究部は、旧日本部、旧西洋部が地域別の編成をとっていたのを改め、研究の対象となる文化現象と研究方法にもとづいて、新しい時代の人文科学を切りひらく体制をととのえている。

新たな知の領域を開拓する――近年、学問研究のあり方に対する疑問が投げかけられている。狭い専門領域に閉じこもって、他の分野との関連を顧みない研究のあり方は、学問の社会的役割を軽視するものとして批判されて当然であろう。人文科学の分野においてもそれはあてはまる。

このような傾向を克服することを目指して、人文科学・社会科学の領域だけでなく、自然科学・生命科学など先端諸科学との対話をも視野に入れて、新たな研究領域を開拓していく。

文化のダイナミックスを考察する――複雑化した現代の文化状況をいかにとらえるか。それは現代に生きるわれわれにとって大きな課題であり、それなしには新たな文化の創造は不可能であろう。そのためには、文化のダイナミックスを歴史的・理論的に考察することが不可欠である。

文化のありようを、その生成、発展、消滅の過程において、そして多様な社会活動（宗教、政治、芸術など）との関わりの中においてとらえることを通じて、文化のダイナミックスを考察する。

異文化の接触と融合を解明する――グローバル化の時代を迎えて、人文科学のあり方も変容を迫られている。ヒト、モノ、カネ、そして情報の移動・流通は文化の様相を大きく変化させ、知のあり方にたいして根本的な問いを突きつけているのだ。われわれはこの問いに応え、異なる文化の接触・融合・変容などの問題を考察することによって、グローバル化時代の知の形成・発展をめざす。

●東方学研究部

東方学研究部は、その前身である東方文化研究所、さらに遡れば東方文化学院京都研究所以来、中国古典学の分野で世界最高レベルの業績を多数生み出してきた。中国文化に対する深い敬意と理解を基調としながら、しかも厳格な文献実証主義の方法論に支えられた、独特の学風の結実であったと言える。

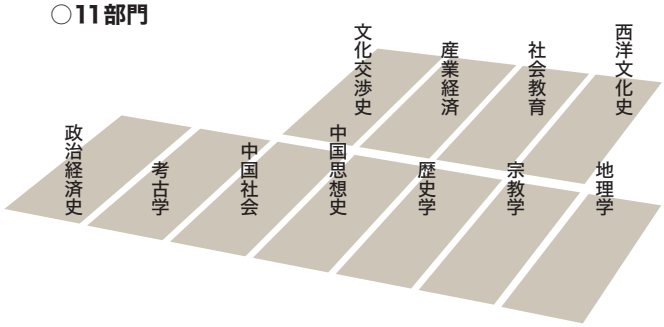
創設期からの7部門に加え、1970年代以降、現代中国、宗教史、言語史の3部門を増設したほか、附属施設として1965年に東洋学文献センターが設立されており、古代から近現代までの中国をあらゆる角度から研究し、その成果を世界に発信する体制が整った。2000年４月の改組で、東洋学文献センターは「漢字情報研究センター」として生まれ変わり、言語、文献、文物、情報の４分野において、漢字情報処理システムの研究開発と漢字文化を基盤とする中国学の情報発信を進めつつある。また、従来の部門のうち文化交渉史を出土文献、中国社会を礼制習俗、歴史地理を制度史系、現代中国を新学史系に改編して、新しい視角から総合的に中国研究を推進するシステムを確立したのである。

しかし東方学研究部では、この組織改革で十分であるとは判断せず、中国学をとりまく内外の状況を見据えながら、21世紀の中国学はいかにあるべきかを巡って、引き続き検討を進めている。今後日本の中国学が切り開くべきフロンティアとして、漢字文化と情報科学の融合をはかる漢字情報学の開拓、文献研究と実地調査の結合をめざし、フィールドワークを活用する研究分野の確立、歴史的なパースペクティブから現代中国社会の深層にせまる現代中国研究の深化、さらに哲史文の枠組みを超えて中国文明の総体を考究する総合的研究の推進など、いくつかの新しい領域への展開が構想されている。そして東方学研究部では目下、京都大学の関係部局、さらには国内外の関係機関とも緊密に協力しながら、21世紀に相応しい中国学の研究・教育体制を構築する新たな方途を模索しているところである。

新たな研究体制へ

再発足期

○11部門

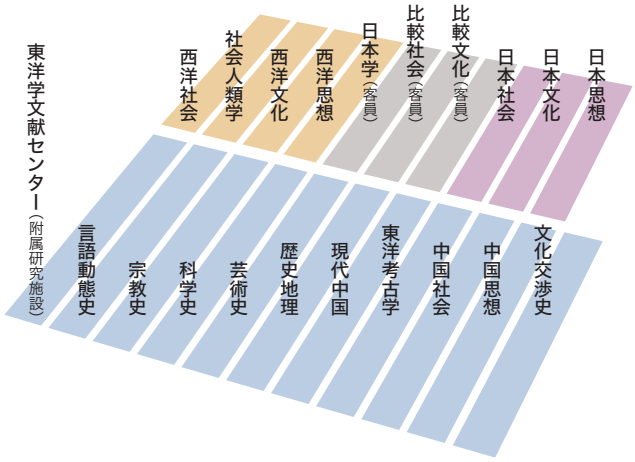


東方文化研究所、人文科学研究所、西洋文化研究所の合併による再発足（昭24）。原典の緻密な考証と注釈による中国研究、学際的共同研究による日本近代化の研究、ヨーロッパの社会、思想、文化の研究。

問題点
・部門の不足
・部門間の有機的連関の欠如

2000年3月まで

○20部門（3客員部門）1附属施設

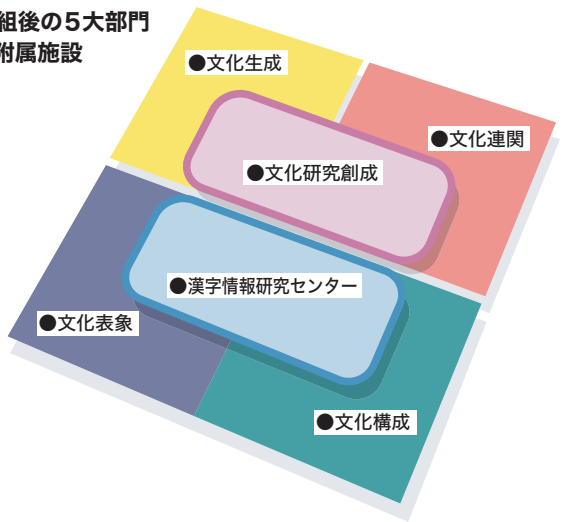


共同研究体制のさらなる展開。世界史的視点に基づく日本、中国、西洋の研究の展開、対象領域の拡大（ヨーロッパ文化の古層としての古代シュメール、ヴェーダ文献の研究、東アジア関係史の研究、中国近現代史、中国語史の実証的研究など）。附属東洋学文献センター（昭40）の設置による東洋学文献の情報サービス、データベース化の開始と発展。

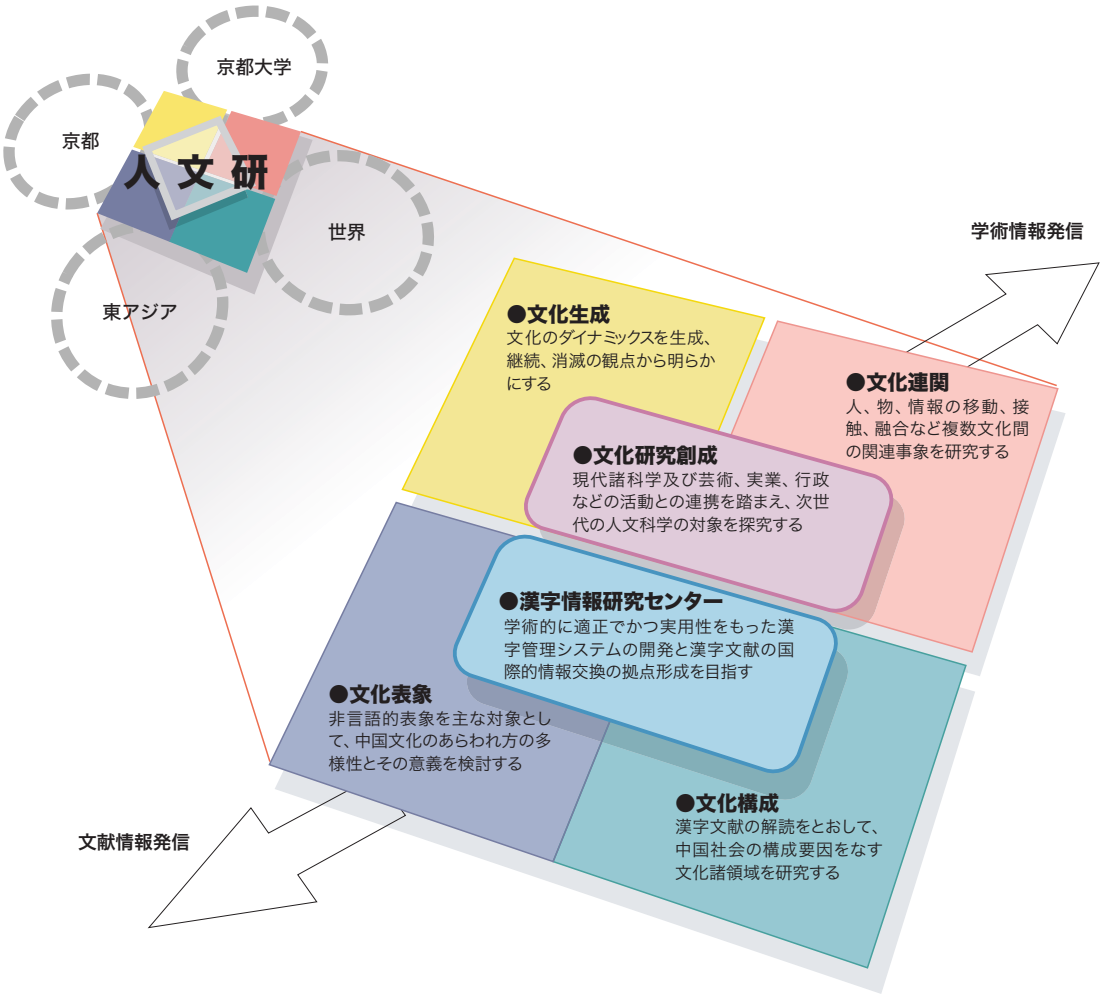
問題点
・学術的・社会的要請と制度の乖離
・情報発信機能の不備
・学内研究・教育活動との連携の不充分

現在

○改組後の5大部門
1附属施設



特色
・21世紀の人文科学を創造する実験場
・東洋学を中心とした学術情報の国際的拠点
・大学附置研究所という地位を活かした国際的共同研究の広場



改組の理念と運営

2000年春、人文科学研究所は大幅な組織改革をおこなった。20世紀後半の生命科学の進展が旧来の人間観を根底から揺るがせ、また、人の生命を支える環境そのものも技術革新の無限連鎖により激変している時、社会や文化を研究する視点や方法もおのずと旧来のままではすまされなくなったからである。

当研究所の研究組織は、1949年の再編以来、研究部門増を重ね、改革直前には、17部門、3客員部門、1附属施設となっていた。しかしそれは、20世紀初めまでにほぼ形をととのえた近代人文科学の領域分類に沿った小研究部門群、すなわち一人の教授を核とする研究単位による編成であった。そのため、多年の運営上の工夫にもかかわらず、時代の趨勢と響き合う、高度に学際的な研究課題の撰択や、その成果をふまえての社会への語りかけは困難になっていた。

新しい組織では、各専門分野で深められる知識が、人類文化の過去、現在、未来にわたる全体的、統合的な関心に緊密につながるよう、数名の教授を核とする大研究部門制をしいた。すなわち、京都大学内の先端科学や学外の芸術活動と連携しつつ、所内の諸領域の協力のもとに新たな文化研究の方法をさぐる「文化研究創成研究部門」、諸文化の生成、継続、消滅の動態を新たな視点から研究する「文化生成研究部門」、非言語的素材を通して中国文化のありようを考察する「文化表象研究部門」、漢字文献の解読を通して中国文化のありようを検討する「文化構成研究部門」、多文化間の人、物、情報の連関事象を人類史的にとらえなおす「文化連関研究部門」の5部門である。

また、当研究所の対外展開を漢字情報のデジタル化により支えるものとして、従来の附属施設「東洋学文献センター」を拡充、情報科学研究機能も加え、「漢字情報研究センター」に改編した。

なお当研究所はこれまで、古典学、歴史学、実地調査を柱に、緊密な人間関係のもと、国際性、持続性の高い共同研究を展開し、個人研究においても、既成の学がとりあげなかった実験的課題に長期にわたり挑戦してきた。そのような過程で深められた、人文学的関心と東方学的関心とは、学の範疇としては次元を異にするものの、相互に刺激を与えつつ共存し、当研究所の創造力の源泉をなしてきた。この態勢を新機構でも活かすため、運営内規上の工夫として、旧日本部、西洋部を人文学研究部（含、文化研究創成、文化生成、文化連関の各研究部門）に、旧東方部を東方学研究部（含、文化表象、文化構成の各研究部門、漢字情報研究センター）に再編した。もちろん共同研究の多くは、両研究部にまたがって展開している。

制度の流れ——沿革

現在の京都大学人文科学研究所は、1939年に設立された同名の研究所（旧人文）と、東方文化研究所及び西洋文化研究所が合体して、1949年1月に発足した研究機関であり、3研究所のそれまでの業績を継承しつつ、世界文化に関する人文科学の総合研究を行うことを、その目的としている。

東方文化研究所

統合された3研究所の中で最も歴史が古い東方文化研究所は、1929年、中国文化を中心とした学術研究を目的として、外務省から助成金をうけ、東京と京都に設立された東方文化学院の京都研究所の後身である。東方文化学院京都研究所は発足当初は研究員4名、助手4名にすぎず、所屋も京都大学文学部陳列館の一隅を借用していたが、1930年11月、北白川小倉町50番地（現東小倉町47番地）に新所屋が完成した。現在も本研究所附属の漢字情報研究センターとして使用されている白亜の建物がそれである。ちなみに、この建物は、研究所評議員濱田耕作の創意をもとに、東畑謙三氏が設計したスパニッシュ・ロマネスク様式の、極めてユニークなもので、今日に至るまで世人の注目を集めている。

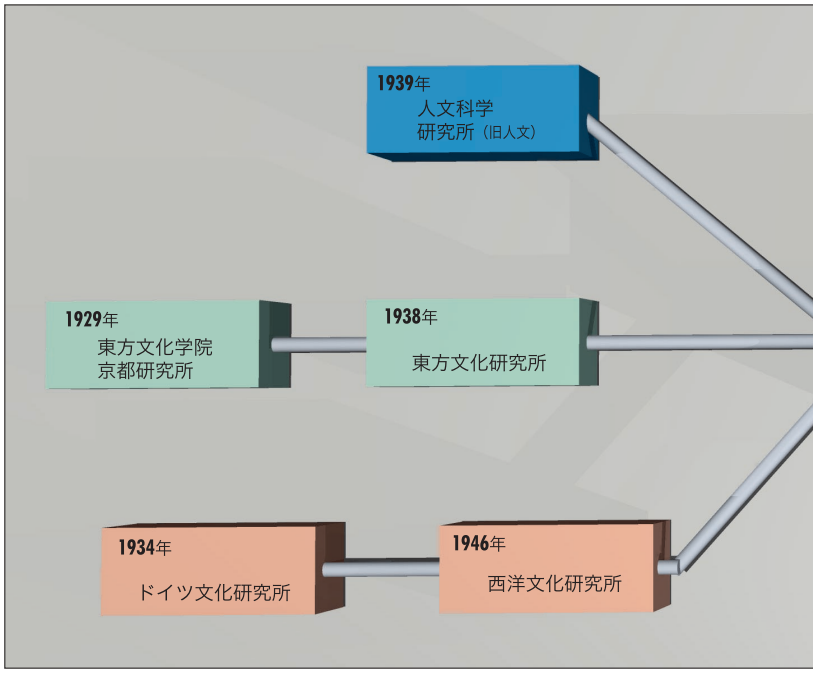
1938年4月、東方文化学院が改組され、京都研究所は独立して東方文化研究所と改称された。この頃には、研究員、副研究員、助手、嘱託員など30名以上の所員が、経学・文学、宗教、天文・暦算、歴史、地理、考古の6研究室に分属して研究活動に従事する体制も整っていた。なお東方文化学院時代の所長は狩野直喜であり、東方文化研究所時代の所長は松本文三郎と羽田亨であった。

西洋文化研究所

一方、西洋文化研究所は、1934年に民間団体として設立されたドイツ文化研究所（吉田牛ノ宮町1番地）を、1946年に改組した研究機関で、数名の研究員を委嘱して、イギリス・アメリカ・ドイツ等の文化の研究に従事することになっていた。しかし、所屋をはじめ3000冊をこえるドイツ関係の書籍を含む一切の設備が、占領軍に接収されたため、その活動を停止せざるを得ず、結局土地所屋は接収解除とともに京都大学に寄付され、すでに発足していた現在の人文科学研究所の所属に帰した。なお、この所屋も村野藤吾氏の設計にかかる昭和建築史における特色ある建物であったが、維持管理をはじめとした種々の問題のため、1974年に残念ながらとりこわされた。

旧人文科学研究所

最後に旧人文科学研究所は、東亜に関する人文科学の総合研究を行う目的で、京都大学の附属研究所として1939年に設立された。翌年より産業経済・社会および教育・文化交渉史などからなる研究体制が整い、京都大学の文・法・経済・農の各学部の支援をうけながら、教授1名、助教授5名、兼任所員13名で発足した。所屋には大学本部構内の中央図書館西北の木造2階建の建物（現在ではとりこわされてしまった）が充てられた。なお統合に至るまでの所長は、小島祐馬、高坂正顕、安部健夫であった。



三研究所の統合と人文科学研究所の発足

さて、旧人文科学研究所を中核として、東方文化研究所と西洋文化研究所を統合しようという動きは1946年末にはじまる。翌年に入り、西洋文化研究所を解散し、建物・設備をすべて京都大学に寄付しようとする同研究所理事会の意向をうけ、当時の京都大学総長鳥養利三郎は、東方文化研究所長羽田亨らと協議して旧人文と東方文化、西洋文化を一つにした大研究所設立の実現に動きだした。こうして、1948年4月、まず東方文化研究所が外務省から文部省（京都大学）の所管にうつされ、ついで同年11月20日3研究所を代表するかたちの3所員による公開講演を契機として事実上の統合が成立し、翌年、11部門、教授11名、助教授14名、助手19名からなる新しい人文科学研究所が正式に発足した。その後、社会人類学（1959年）、西洋思想（1964年）、日本文化（1969年）、現代中国（1975年）、比較文化（客員1978年）、宗教史（1980年）、比較社会（1981年）、日本学（客員1985年）、言語史（1988年）の各部門が増設された。なお、比較社会部門、日本学部門は、客員部門として外国人を招聘して運用されることになった。このほか1965年には附属施設として東洋学文献センターが設けられた。

1979年は本研究所の前身の一つの東方文化研究所が創立されてから満50周年を迎えたため、11月9日に創立50周年記念式典が催され、詳細な沿革を誌した『人文科学研究所50年』が出版された。

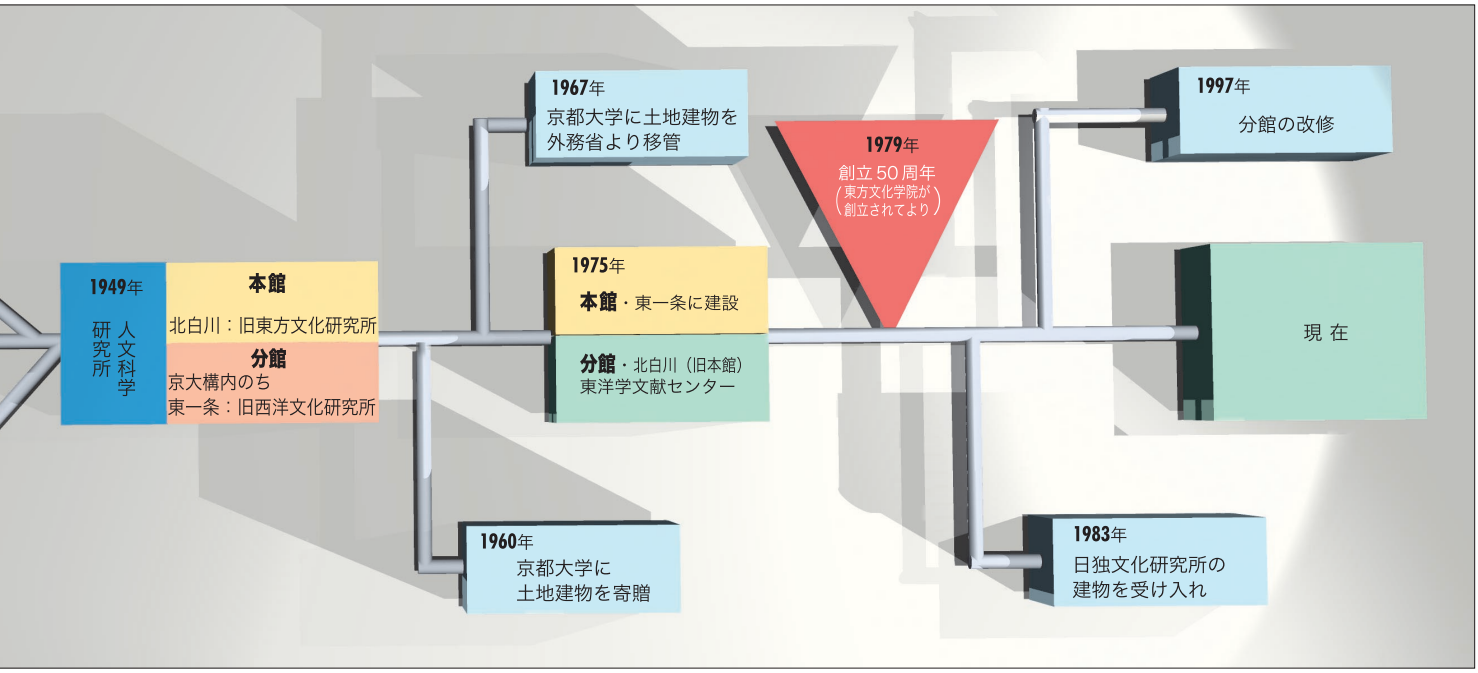
研究所の改組

2000年4月、人文科学研究所は研究のいっそうの発展を目指し、また時代の要請に応えるために、全面的な改組を行なった。この結果、従来の小部門の制度を改め、5部門、1附属研究施設からなる大部門制をとることになった。研究の遂行と運営の便宜上、これらは人文学研究部、東方学研究部の2部にわけられ、所員は個人研究のテーマを持つと同時に共同研究に参加する義務を負う。本研究所の一つの特色をなす共同研究は、すでに東方文化研究所、旧人文科学研究所時代からの歴史を持つが、特に統合・改組以後は部・部門相互間、あるいは学際的な共同研究を組むことによって、学問が過度に専門化する弊害を防ごうとしている。

施設の変遷

西洋文化研究所の建物が接収解除になったのちは、北白川の旧東方文化研究所を「本館」として、事務室と東方部関係の研究室と書庫を置き、東一条の旧西洋文化研究所の建物を「分館」として、日本部と西洋部の研究室と書庫を置いていた。しかし、東洋学文献センターの設置、収蔵図書及び資料の増加、あるいは部門増などによる研究所の規模の拡大などのため「分館」を改築して新しい総合所屋を建設する気運が熟し、1975年秋に東一条に4階建の新所屋が完成した。

それ以後は、事務機構と研究室は新館にまとめられ、これを「本館」とし、北白川の旧本館は、主として東洋学文献センター（2000年4月から漢字情報研究センター）の施設として利用され「分館」と呼ばれるよう改められた。このほか、1983年に「本館」の西に隣接していた、日独文化研究所（ゲーテ・インスティチュート）の移転に伴ない、その敷地・建物を使用できるようになり、「西館」と称して共同研究室、複写などの機器室、書庫などを新設した。



研究の流れ

東方 研究の流れ

思想・文学系列

(支那哲学倫理学)	(経学文学研究室)	(中国思想史)
狩野直喜　倉石武四郎	吉川幸次郎	
(支那宗教史)	(宗教研究室)	(宗教学)
松本文三郎	塚本善隆	塚本善隆
		(中国文学)

歴史系列

(支那法制及び経済史)	(歴史研究室)	(中国社会)
桑原隲蔵	内藤乾吉	貝塚茂樹
		(文化交渉史)
		安部健夫　岩村　忍
(支那人文地理学)	(地理研究室)	(地理学)
小川琢治	森　鹿三	森　鹿三

文物・考古系列

(支那考古学)	(考古研究室)	(考古学)
濱田耕作	水野清一	水野清一
(支那美術史)		
澤村専太郎		
(支那科学史)	(天文暦算研究室)	
新城新蔵	能田忠亮	

日本 研究の流れ

日本近代化

柏　祐賢

西洋 研究の流れ

社会人類学

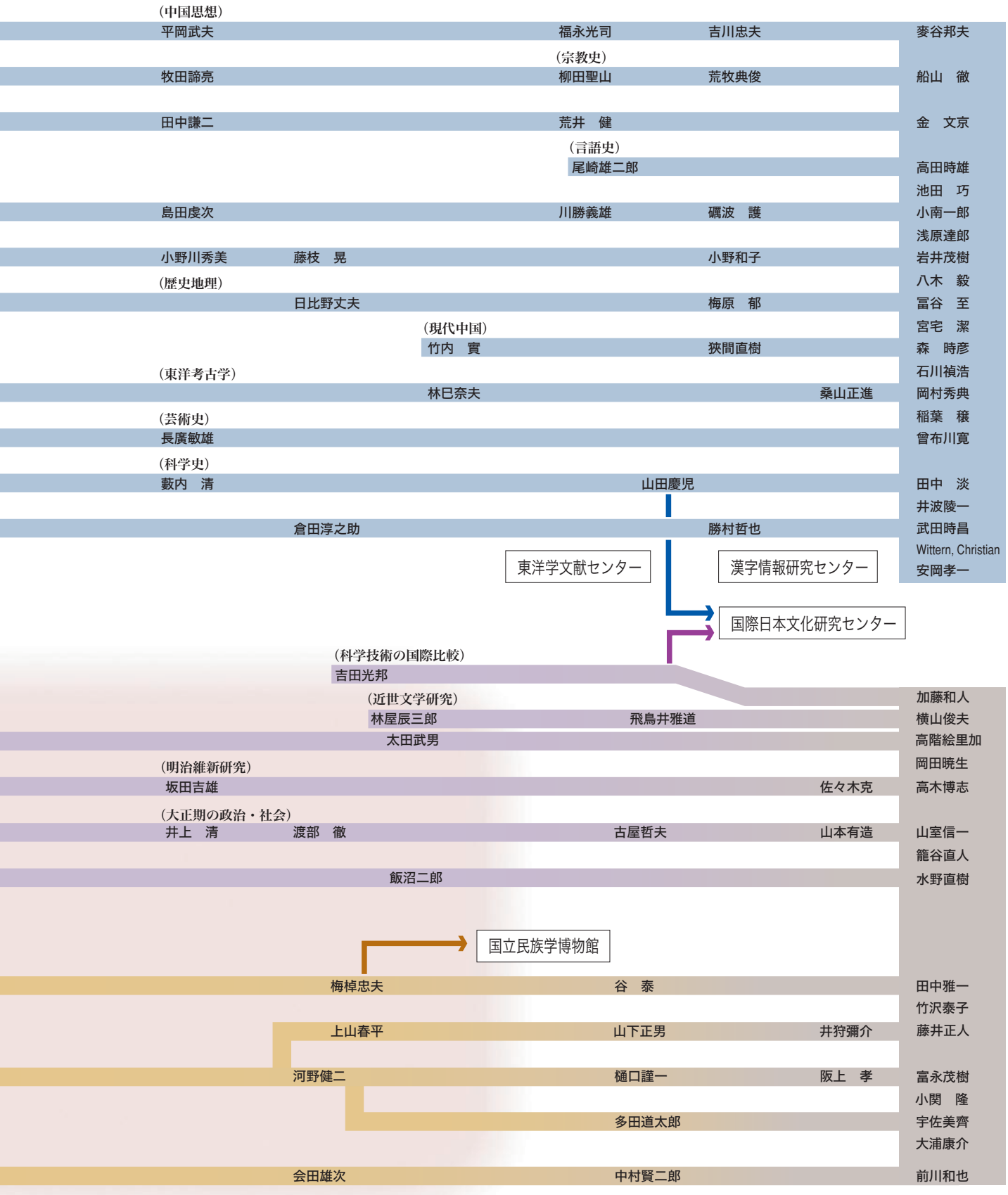
今西錦司

18~19世紀ヨーロッパ

桑原武夫

前近代ヨーロッパ

清水盛光


(中国思想)
平岡武夫
福永光司
吉川忠夫
麥谷邦夫
(宗教史)
牧田諦亮
柳田聖山
荒牧典俊
船山　徹
田中謙二
荒井　健
金　文京
(言語史)
尾崎雄二郎
高田時雄
池田　巧
島田虔次
川勝義雄
礪波　護
小南一郎
浅原達郎
小野川秀美
藤枝　晃
小野和子
岩井茂樹
(歴史地理)
八木　毅
日比野丈夫
梅原　郁
冨谷　至
(現代中国)
宮宅　潔
竹内　實
狭間直樹
森　時彦
(東洋考古学)
石川禎浩
林巳奈夫
桑山正進
岡村秀典
(芸術史)
稲葉　穣
長廣敏雄
曾布川寛
(科学史)
藪内　清
山田慶児
田中　淡
井波陵一
倉田淳之助
勝村哲也
武田時昌
Wittern, Christian
東洋学文献センター
漢字情報研究センター
安岡孝一
国際日本文化研究センター
(科学技術の国際比較)
吉田光邦
(近世文学研究)
加藤和人
林屋辰三郎
飛鳥井雅道
横山俊夫
太田武男
高階絵里加
(明治維新研究)
岡田暁生
坂田吉雄
佐々木克
高木博志
(大正期の政治・社会)
井上　清
渡部　徹
古屋哲夫
山本有造
山室信一
籠谷直人
飯沼二郎
水野直樹
国立民族学博物館
梅棹忠夫
谷　泰
田中雅一
竹沢泰子
上山春平
山下正男
井狩彌介
藤井正人
河野健二
樋口謹一
阪上　孝
冨永茂樹
小関　隆
多田道太郎
宇佐美齊
大浦康介
会田雄次
中村賢二郎
前川和也

共同研究

本研究所の特色の一つである共同研究は、現在24の班によって行なわれている。３年から５年１サイクル、毎週または隔週に開かれている。

【2004年共同研究班】 ＊印は毎週、その他は隔週

曜日	研究班名	班長名	研究場所	部名
月	日仏文化交渉の研究	宇佐美教授	401号室	人文部
	フェティシズム研究の射程	田中雅一教授	西館会議室	人文部
	空間の再審―人文・社会科学の新基軸を求めて―	山室教授	401号室	人文部
	中国美術の図像学	曾布川教授	分館会議室	東方部
	王玄策研究	高田教授	分館会議室	東方部
火	国家形成の比較研究	前川教授	西館会議室	人文部
	元代の法制	岩井教授	分館会議室	東方部
	マークアップ―理論と実践―	ウィッテルン助教授	分館会議室	東方部
	中国近世日用類書の研究	金教授	分館応接室	東方部
	中国文明の形成	小南教授	西館会議室	東方部
	中国の生活空間と造形	田中淡教授	分館会議室	東方部
	漢字情報学の構築	安岡助教授	分館応接室	東方部
水	身体の近代	菊地助手	西館会議室	人文部
	領事館警察の研究	水野教授	212号室	人文部
	文明と言語	横山教授	西館会議室・三才学林	人文部
	三教交渉の研究	麥谷教授	分館会議室	東方部
金	人種の表象と表現をめぐる学際的研究	竹沢助教授	西館会議室	人文部
	1960年代の研究	富永教授	西館会議室	人文部
	近代京都研究	丸山教授	西館会議室	人文部
	アジアネットワークの研究	籠谷助教授	西館会議室	人文部
＊	三国時代の出土文字資料	井波教授、冨谷教授	分館会議室	東方部
	20世紀中国の社会システム	森教授	分館会議室	東方部
＊	中国古代の基礎史料	浅原教授	分館応接室	東方部
	陰陽五行のサイエンス	武田教授	分館応接室	東方部

【過去の共同研究班】

旧日本部

題目	期間	班長
日本の近代化	1949～1951	柏　祐賢 →重松俊明
日本の近代化－歴史班－	1951～1953	坂田吉雄
日本の近代化－現代社会班－	1951～1953	重松俊明
明治社会の研究（明治20年代のナショナリズム）－意識班－	1954～1957	坂田吉雄
大正7年米騒動の研究－機構班－	1954～1957	井上　清
明治社会の研究	1957～1963	坂田吉雄
大正期の政治と社会	1957～1966	井上　清
明治の日本人	1963～1966	坂田吉雄
日本・中国近代化の比較研究	1966～1969	坂田吉雄
1920年代の政治と社会	1966～1969	井上　清
社会運動の研究 I	1966～1973	渡部　徹
家族問題の研究 I　夫婦問題	1966～1969	太田武男
大正・昭和初期の時代思潮と世論	1969～1973	井上　清
家族問題の研究II　親子問題	1969～1974	太田武男
社会科学における電算機の利用法	1969～1973	三宅一郎
日本における市民文化の研究 I　化政文化の研究	1971～1973	林屋辰三郎
1930年前後の政治と社会	1973～1976	井上　清
日本における市民文化の形成II　幕末文化の研究	1973～1976	林屋辰三郎
現代都市の研究	1973～1976	三宅一郎 →太田武男
家族問題の研究III　相続問題	1975～1979	太田武男
日中戦争期の政治と社会	1976～1979	井上　清 →古屋哲夫
日本における市民文化の形成III　文明開化の研究	1976～1978	林屋辰三郎
日本帝国主義の朝鮮支配	1976～1979	飯沼二郎
社会運動の研究II	1973～1981	渡部　徹
国民文化の成立I　国権と民権	1978～1981	飛鳥井雅道
家族問題の研究VI　家事紛争	1979～1981	太田武男
植民地期・朝鮮の抵抗運動	1979～1981	飯沼二郎
軍部の政治史的研究	1979～1983	古屋哲夫
19世紀日本の情報と社会変動	1981～1984	吉田光邦
国民文化の成立II　ナショナリズムの諸相	1982～1987	飛鳥井雅道
近代日本の政治運動	1983～1987	古屋哲夫
19世紀の文明史的研究	1985～1988	横山俊夫
「満洲国」の研究	1987～1992	山本有造
近代日本のアジア認識	1988～1992	古屋哲夫
貝原益軒とその時代	1988～1992	横山俊夫
明治維新期の研究	1988～1992	佐々木克
文学から何が見えてくるか	1989～1994	飛鳥井雅道
近世前期における政治的主要人物の居所と行動	1990～1994	藤井譲治
近代東アジア世界の構造連関	1992～1996	古屋哲夫 →山室信一
転換期における個人と組織	1992～1995	佐々木克
「大東亜共栄圏」の経済構造	1993～1997	山本有造
異言語接触の場としての19世紀日本	1994～1997	斎藤希史
日・中・朝間の相互認識と誤解の表象	1996～1998	山室信一／フォーゲル
言語力の諸相―試行的事例研究―	1997～1998	横山俊夫
帝国の研究	1998～2001	山本有造

旧西洋部

題目	期間	班長
ルソー研究	1949～1950	桑原武夫
フランス百科全書の研究	1950～1953	桑原武夫
18世紀思想とフランス革命	1953～1957	桑原武夫
村落共同体の比較研究	1955～1960	清水盛光
コミュニケーションの基礎理論	1957～1960	上山春平
中江兆民の思想	1957～1960	桑原武夫
文学理論の研究	1960～1966	桑原武夫
霊長類におけるカルチュアとパーソナリティ	1957～1963	今西錦司
人類の比較社会学的研究	1963～1966	今西錦司
西洋近代思想の研究	1966～1969	桑原武夫 →河野健二
封建国家の比較研究	1966～1969	会田雄次
重層社会の人類学的研究	1966～1969	梅棹忠夫
19世紀フランス社会思想の研究	1969～1973	河野健二
アフリカ社会の研究	1969～1973	梅棹忠夫
文明の比較社会人類学的研究	1969～1973	梅棹忠夫
理論人類学の研究	1969～1973	梅棹忠夫
異端運動の研究	1969～1973	会田雄次
現代における知識の意味	1969～1974	藤岡喜愛 →竹内成明 →樺山紘一
知識人層と社会	1973～1976	会田雄次
フランス第二帝政期の研究	1973～1976	河野健二
西洋近世論理思想の研究	1973～1976	上山春平
社会と文化との比較人類学的研究	1974～1977	谷　泰
人類学における方法論の研究	1974～1977	谷　泰
社会編成の比較人類学的研究	1975～1978	谷　泰
前近代における社会動態	1976～1979	会田雄次
1930年代のヨーロッパ	1976～1979	河野健二
人文学の方法	1976～1979	上山春平
生活様式と関係行動	1977～1980	谷　泰
公共的価値の研究	1979～1983	上山春平
都市の社会史I	1979～1982	中村賢二郎
モンテスキュー研究	1979～1983	樋口謹一
ボードレール「悪の華」註釈	1975～1983	多田道太郎
1848年の研究	1981～1983	阪上　孝
場面行動の通文化比較	1981～1984	谷　泰
都市の社会史II	1982～1984	中村賢二郎
象徴体系の構造論的研究	1982～1984	山下正男
18世紀ヨーロッパの空間認識	1983～1987	樋口謹一
ボードレール研究	1984～1987	多田道太郎
国家の比較史的研究	1985～1989	中村賢二郎
諸宗教の比較論的研究	1985～1989	山下正男
民族誌記述の方法をめぐって	1986～1989	谷　泰
知識と秩序―近代におけるその再編過程―	1987～1990	阪上　孝
伝統文化の構造―古代インドとインド・ヨーロッパ諸民族の文化比較―	1987～1991	井狩彌介
フランス・ロマン主義の研究	1987～1991	宇佐美齊
家族とハウスホールドの比較史的研究	1989～1992	前川和也
法的思考の研究	1989～1992	山下正男
知識と秩序II―近代社会とエリート層の再編成―	1990～1994	阪上　孝
儀礼的暴力の研究	1990～1994	田中雅一

題目	期間	班長
コミュニケーションの自然誌	1991～1994	谷　泰
古典インドの法と社会	1991～1995	井狩彌介
記号・意味・文学	1991～1994	大浦康介
ステイタスと職業	1992～1995	前川和也
正義システムの諸相	1992～1995	山下正男
象徴主義の研究	1993～1997	宇佐美齊
コミュニケーションの自然誌II	1994 ～1997	谷　泰
主体・自己・情動構築の文化的特質	1994～1997	田中雅一
近代社会における研究者の組織化 ―研究所・学会・学派―	1994～1998	阪上　孝
インド文化史の諸問題 ―古代王権とその周辺―	1995～1998	井狩彌介
コミュニケーションの社会史	1995～1998	前川和也
1789年人権宣言成立過程の研究	1997～2000	富永茂樹
アヴァンギャルド芸術の研究	1997～2001	宇佐美齊
空間と移動の社会史	1998～2001	前川和也
インド文化史の諸問題 ―テクスト伝承と写本―	1999～2001	井狩彌介
サーマヴェーダ基礎資料集成	1999～2001	藤井正人

人文学研究部

題目	期間	班長
明治維新期の社会と情報	1996～2003	佐々木克
日本の植民地支配－朝鮮と台湾－	1998～2002	水野直樹
「進化論」と社会	1999～2002	阪上　孝
テクストの政治学 －危機の時代における理論と批評－	1999～2002	森本淳生
安定社会と言語	1999～2002	横山俊夫
ポルノグラフィー研究 ―エロスとその表象をめぐって―	1999～2002	大浦康介
文化相渉活動の諸相とその担い手	2000 ～2003	山室信一
ヴェーダ後期の言語と宗教 ―ヴァードゥーラ・アヌアーキアーナの研究―	2001 ～2004	井狩彌介
記憶と歴史－満洲縁故者の場合－	2002 ～2004	山本有造

東方部

題目	期間	班長
清代奏疏中の社会経済資料の集成 （雍正硃批論旨の研究）	1949～1971	安部健夫 →宮崎市定 →小野川秀美
清朝の文献特に地誌による中国慣行の蒐集 （中国の庶民生活に現われた習俗慣行の研究）	1949～1952	清水盛光
中国仏教芸術の研究	1949～1968	水野清一
中国技術史（中国古代科学技術史）	1949～1957	藪内　清
東京夢華録の校註翻訳	1949～1950	入矢義高
資治通鑑研究（資治通鑑唐紀の研究）	1949～1952	貝塚茂樹
古典の校注と索引の編纂	1949～1956	平岡武夫
中国中世思想の研究	1950～1960	塚本善隆
元典章の研究	1950～1969	岩村　忍
居延漢簡の研究	1951～1956	森　鹿三
史記六国表の研究	1954～1956	貝塚茂樹
比較農業史研究	1954～1956	天野元之助
中東の研究	1955～1957	岩村　忍
両周金文編年の研究	1956～1960	貝塚茂樹
古典の校注	1956～1963	平岡武夫
史料・索引の編集	1956～1963	平岡武夫
中国中世科学技術史の研究	1957～1962	藪内　清
魏晋南北朝地方制度の研究	1957～1964	森　鹿三
中国近世に於ける文献学の発展過程	1958～1970	倉田淳之助 →竺沙雅章 →川勝義雄
弘明集の研究	1960～1970	塚本善隆 →牧田諦亮
漢代の美術と思想	1960～1964	長廣敏雄
周礼考工記の研究	1961～1964	貝塚茂樹
元曲の研究	1961～1969	田中謙二
中国近世科学技術史の研究	1962～1969	藪内　清
白氏文集の校定	1963～1973	平岡武夫
唐代史料・索引の編集	1963～1969	平岡武夫
漢魏六朝の美術と思想	1964～1969	長廣敏雄
水経注疏訂補	1964～1970	森　鹿三
戦後新獲の青銅器資料の研究	1965～1968	貝塚茂樹
辛亥革命の研究	1966～1973	島田虔次 →小野川秀美
嘉靖・万暦時代の研究	1968～1971	島田虔次
中国古文書学の体系化	1968～1971	藤枝　晃
中国金石資料の研究	1968～1970	日比野丈夫
敦煌写本の研究	1970～1975	藤枝　晃
朱子研究	1970～1975	田中謙二
天下郡国利病書の研究	1970～1975	日比野丈夫
隋唐の思想と社会	1970～1975	福永光司
漢代文物の研究	1970～1975	林巳奈夫
科学者列伝の研究	1970～1975	山田慶兒
中国仏教史学史の研究	1972～1975	牧田諦亮
五四運動の研究	1973～1978	島田虔次 →森　時彦 →狭間直樹
朱子語類の研究	1975～1976	田中謙二
近世中国の歴史地理学的研究	1975～1977	日比野丈夫
晩唐文学	1975～1978	荒井　健
博物志の研究	1975～1977	山田慶兒
漢書の研究	1975～1978	川勝義雄 →梅原　郁

題目	期間	班長
清代経学の研究	1976～1979	尾崎雄二郎
中国中世の文化と社会	1975～1980	川勝義雄
現代中国の政治過程と民衆の意識	1975～1980	竹内　實
先秦時代文物の研究	1975～1980	林巳奈夫
明清社会の変革に関する研究	1975～1980	小野和子
新発現科学史資料の研究	1977～1982	山田慶兒
李商隠研究	1978～1981	荒井　健
中国近世都市の社会と文化	1978～1983	梅原　郁
民国初期の文化と社会	1978～1983	狭間直樹
小学研究	1979～1982	尾崎雄二郎
隋唐時代の道教と仏教	1979～1981	福永光司
中国戦国時代出土文物の研究	1980～1983	林巳奈夫
禅の文化	1979～1984	柳田聖山
現代中国の社会と文化	1980～1985	竹内　實
明代の政治と社会	1981～1984	小野和子
中国貴族制社会の研究	1981～1986	川勝義雄 →礪波　護
李義山七律注釈	1981～1984	荒井　健
目録学の諸問題	1982～1988	尾崎雄二郎
古代中国の科学	1982～1987	山田慶兒
六朝・隋唐時代の道仏論争	1982～1986	吉川忠夫
石刻資料の研究・整理	1983～1986	梅原　郁
国民革命の研究	1983～1988	狭間直樹
中国文明の諸源流	1983～1986	林巳奈夫
行歴僧伝にみえる中央アジアとインド	1983～1986	桑山正進
漢語方言史における言語層問題	1983～1986	平田昌司
禅の文化（第2期）	1984～1986	柳田聖山
江南文人の研究	1984～1986	荒井　健
転形期の中国	1985～1987	竹内　實
古史新証	1986～1989	林巳奈夫
4－8 世紀の中央アジアと北西インド	1986～1991	桑山正進
中国近世の法制と社会	1986～1991	梅原　郁
六朝道教の研究	1986～1991	吉川忠夫
中国中世の文物	1986～1991	礪波　護
文人の生活	1986～1991	荒井　健
中国科学史文献研究	1987～1990	山田慶兒
1920年代の中国	1988～1993	狭間直樹
中国古代礼制研究	1989～1994	小南一郎
中国語史の資料と方法	1990～1993	高田時雄
六朝美術の研究	1990～1995	曾布川寛
法顕傳研究―5世紀の中央アジアとインド―	1991～1996	桑山正進
前近代中国の法制	1991～1996	梅原　郁
中国技術史の研究	1991～1996	田中　淡
明末清初の社会と文化	1991～1995	小野和子
六朝道教の研究 II	1991～1996	吉川忠夫
秦漢隋唐の文物資料	1991～1996	礪波　護
中華文人の生活	1991～1993	荒井　健
中国音韻史の研究	1993～1998	高田時雄
梁啓超の研究―その日本を媒介とした西洋近代認識について―	1993～1996	狭間直樹
中国近代の都市と農村	1993～1998	森　時彦
北朝後半期仏教思想史研究	1994～1999	荒牧典俊
中国の礼制と礼学	1994～2000	小南一郎
文献と情報	1994～2000	勝村哲也
唐宋美術の研究	1995～2000	曾布川寛
唐代宗教の研究	1996～2000	吉川忠夫
辺境出土木簡の研究	1996～2000	冨谷　至
周氏冥通記研究	1998～2000	麥谷邦夫
中国共産主義と日本―思想・運動・戦争―	1997～2001	狭間直樹

東方学研究部

題目	期間	班長
訳経僧伝研究	1996～2002	桑山正進
中国技術の伝統	1996～2002	田中　淡
16・17世紀アジアにおける言語接触	1998～2002	高田時雄
中国近代化の動態構造	1998～2003	森　時彦
元代の社会と文化	2000 ～2003	金　文京
『帰真総義』の研究	2000 ～2003	濱田正美
中国近世社会の秩序形成	2000 ～2003	岩井茂樹
漢字情報基礎論の試み	2001 ～2004	武田時昌
中国近世法制資料の研究	2003 ～2004	岩井茂樹

共通

題目	期間	班長
封建社会の比較研究	1960～1966	清水盛光
アジアとヨーロッパにおける革命の比較研究	1960～1963	桑原武夫
産業革命と現代社会	1963～1966	飯沼二郎
世界資本主義の研究	1966～1969	飯沼二郎

客員

題目	期間	班長
住居における聖なる空間の比較研究	1978～1981	上田　篤
日本領事報告の研究	1982～1985	角山　栄
明清時代の国家と社会	1985～1988	岩見　宏 →谷口規矩雄
漢代出土文字資料の研究	1988～1991	永田英正
人文学のアナトミー	1991～1994	山田慶兒
東アジアの日常における両界媒介事象の研究	1994～1997	三浦國雄
植民地主義と人類学	1997～2000	山路勝彦

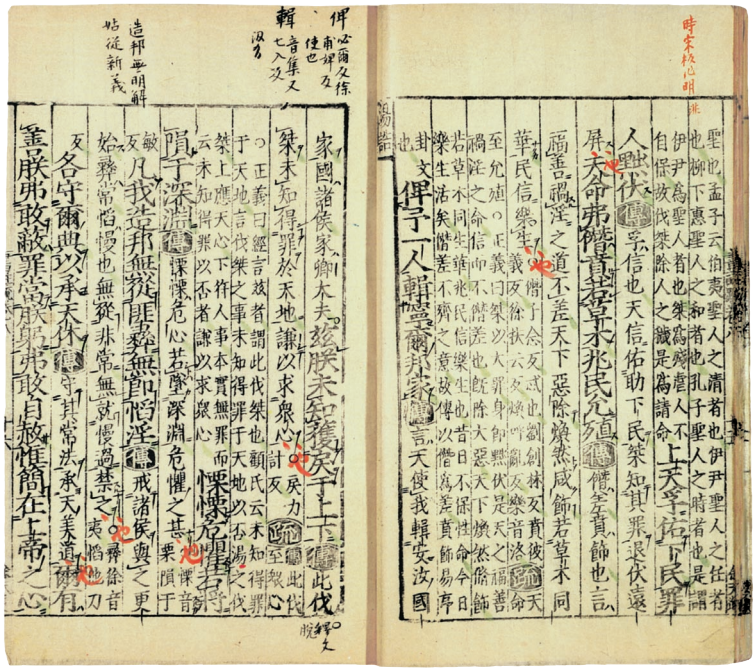
原典会読と共同研究

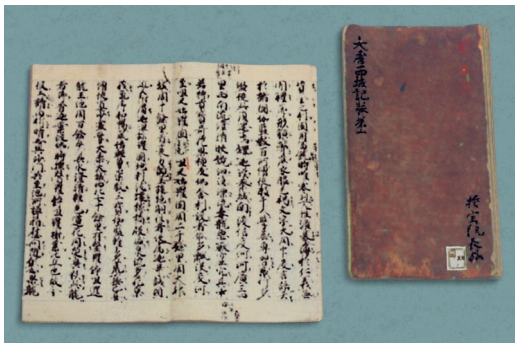
東方学研究部の前身である東方文化学院京都研究所は、中国文化の真髄を理解するための純学問的研究をめざして設立された。昭和初期、日中関係の悪化をはじめ、周囲の情況がそれと逆行してゆくなかで、時流に流されぬ学問的遺産が蓄積されていったのは、先学所員たちのなみなみならぬ努力の賜物であった。

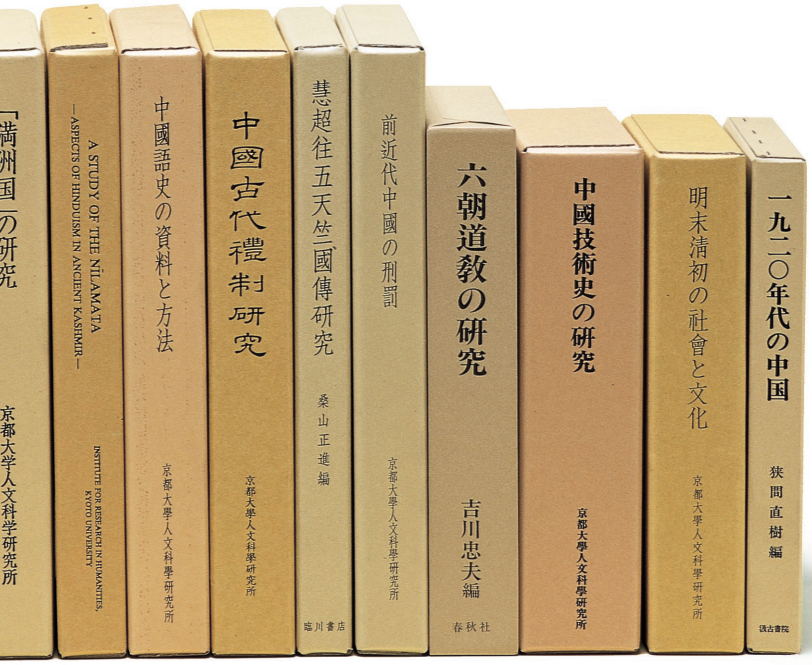
ここではまず、基礎的な文献資料の収集と整理、その校訂と一部は索引作成などが着手され、それらを土台として重要文献の会読がなされた。ここでいう会読とは複数の専門家による高い水準の共同研究にほかならず、その過程において論文や研究報告がものされ、会読の結果、校訂と訳注が生まれ、場合によって索引が作られる。現在の東方学研究部の共同研究班の多くは、こうした原典会読方式のうえにたち、自由討論を加えるスタイルをとっている。

共同研究の会読方式のほかに、東方学研究部の研究体制のいまひとつの特色として共同研究室がある。東方文化学院の初期においては、所員はあらかじめ認められた研究題目に従って、3年ごとに研究報告を提出し、所長、評議員（指導員）の審査をうけて公刊する個人研究が中心であった。しかし、経学文学（現在の哲学文学）、歴史、宗教、考古美術、天文暦算（現在の科学史）、歴史地理の6研究室において、それぞれの分野での会読が定着してゆくと、その効率的な推進のためにも研究室の果す役割が増大していった。こうして1938年の東方文化研究所改組以後は、個人研究の指導員制度はやめられ、研究室単位の研究体制に比重がうつる。

現在でも各共同研究室には関係文献や工具書類が常備されていて、東方学研究部共同研究班のいわば根拠地となっている。会読を軸とした共同研究は正式には1935年から、経学文学と天文暦算の研究室ではじまった。前者の成果は『尚書正義定本』に、後者は『漢書律暦志の研究』として世に問われた。経学文学研究室ではほかに元代の戯曲である「元曲」の研究を進め、さらに戦後には長い歳月をかけて全12冊におよぶ『唐







代研究のしおり』を刊行する一方、白居易、李商隠などいくつかの作品を会読してきた。現在科学史と改称された天文暦算研究室の活動は戦後とくに盛んで、『天工開物』の研究をはじめ、時代時代の重要文献を会読しつつ数冊の中国科学技術史の論文集をまとめた。近年では、新発現の出土資料を使った中国医学の研究が行なわれた。

歴史研究室では殷代甲骨文字、難解な元代の法典・行政文書集『元典章』、尨大な量の清代の『雍正硃批諭旨』などの会読と研究が行なわれてきた。また旧現代中国部門の設置以来、五四運動から毛沢東時代まで研究班の幅を広げている。歴史地理は『水経注』の研究のほか、居延漢簡、石刻資料、都市研究などを手がけ、宗教では六朝から唐代に重点をおき、儒・仏・道教それぞれの専門知識を必要とする難解な諸文献を解読しつつ、『肇論研究』などをまとめてきた。考古美術が石窟寺院の調査とともに中国青銅器研究の先端的研究を行なっていることは広く知られるところであろう。

1949年の統合のあと、旧日本部と旧西洋部はそれぞれ一部一班のかたちで共同研究班をスタートした。日本部柏祐賢の「日本の近代化」班と西洋部桑原武夫の「ルソー研究」班がそれである。この日本近代と18世紀フランスは、今日でも依然として両部の主要な研究対象としてとりあげられている。共同研究は所員を中心に所外の専門研究者の協力をえて、3年のサイクルで成果をまとめてゆく方式のもので、つぎつぎと目ざましい業績がだされたこともあって、人文科学研究所といえば共同研究、というイメージを人びとにうえつけた。専門の枠にとらわれず、自由な共同討議を通じて新しい問題をほりおこす方法は、人文科学の共同研究のあり方のひとつのモデルともなったのである。やがて旧日本部は、思想・文化に重点をおく通称「意識」班と、経済・社会をとりあげる「機構」班にわかれ、それぞれ明治維新、米騒動を研究して報告書をあらわした。一方旧西洋部も、しだいに研究領域をひろげ、社会人類学などの部門を増設して内容を多彩にしてゆく。

こうして1969年までに、両部とも思想、文化、社会の三部門ずつをそろえ、旧日本部では江戸時代末期の文化や現代の家族問題、旧西洋部では中世社会史や20世紀の政治史などの共同研究班も組織されるようになった。1981年度から外国人客員部門として増設された比較社会部門及び1985年度増設の日本学部門は、各国の研究者たちが直接本所の共同研究に一定期間、しかも継続的に参加できる道をひらいた。

図書

本研究所の蔵書は2004年3月31日現在約53万冊、そのうち人文学研究部の書籍（和書・洋書）が本館に、東方学研究部の書籍（漢籍・和書・洋書）が分館に所蔵されている。これまでの共同研究とのかかわりで人文学研究部には明治維新、第一次世界大戦後の社会・労働問題、第二次世界大戦期の諸問題や家族問題関係の書籍が多く、18-19世紀のフランス文献も集まっている。最近では、近代日本と東アジアに関わる文献、明治初期の西欧人の日本見聞記や万国博覧会関係の図録集などの収集等にも注意が向けられている。東方学研究部のものは旧東方文化研究所と旧人文科学研究所の漢籍が主軸で、旧中国関係の文献の収蔵では世界有数の質量を誇る。民国時代の蔵書家陶湘氏の旧蔵漢籍約28,000冊を中核とし、とくに叢書が完備している。研究に直接役立つことを指標に、貴重書よりも信頼できる版本を網羅的に補充する方針がとられ、1948年には漢籍総数97,000冊に達した。統合により旧人文科学研究所の漢籍47,000冊を加え、その後も鋭意充実に努めている。

文庫として、村本文庫、中江文庫、矢野文庫、松本文庫、内藤文庫、サン＝シモン・フーリエ文庫、桑原文庫、河野文庫、田中文庫、安文庫等がある。本研究所の2004年3月現在の蔵書数は、和書138,907冊、中国書313,997冊、洋書77,039冊、合計529,943冊であり、また逐次刊行物の所蔵タイトル数は、和文2,299種、中文2,765種、朝鮮・韓国文89種、欧文742種である。

図書の整理（分類）は和洋書および主として辛亥革命以後の中国書については日本十進分類法により、漢籍を中心とする蔵書は、経学・史学・諸子・詩文の書籍をそれぞれ収める経・史・子・集の四部の他に、各部にわたる書籍を収める叢書部を加えた五部分類法によっている。

本図書室も国立情報学研究所の主管する「学術情報ネットワーク」に参加し、1988年6月から受け入れた和洋書を、端末機により目録作成し、同研究所「総合目録データベース」形成の一翼をになっている。また辛亥革命以後の中国書についても、2002年4月より同様に入力を開始した。

●蔵書統計 ◆収蔵書　年代別内訳

年	和文	中国文	欧文	計（冊）
1955	22,837	58,974	1,201	83,012
1967	45,733	187,650	21,573	254,956
1975	64,167	214,231	31,866	310,264
1986	97,150	265,239	49,623	412,012
1995	122,470	293,732	65,838	482,040
2000	131,630	305,994	73,685	511,309

●特殊文庫

◆**村本文庫**
村本英秀氏（元朝日新聞社員）旧蔵書　漢籍　8,484冊

◆**中江文庫**
中江丑吉氏旧蔵書　漢籍　6,037冊
洋書　728冊

◆**松本文庫**
松本文三郎氏（京都大学名誉教授）旧蔵書　和書　3,389冊
漢籍　6,471冊
洋書　1,069冊

◆**内藤文庫**
内藤虎次郎氏（京都大学名誉教授）旧蔵書　漢籍　1,636冊
和書　100冊
洋書　271冊

◆**矢野文庫**
矢野仁一氏（京都大学名誉教授）旧蔵書　和漢洋書　697冊

◆**サン＝シモン・フーリエ文庫**
洋書　211冊

◆**桑原文庫**
桑原武夫氏（京都大学名誉教授）旧蔵書　洋書　1,047冊

◆**田中文庫**
田中峰雄氏（甲南大学教授）旧蔵書　洋書　947冊

◆**河野文庫**
河野健二氏（京都大学名誉教授）旧蔵書　洋書　647冊

◆**安文庫**
安　秉珆氏（朝鮮史研究者）旧蔵書　1,161冊

●京都大学人文科学研究所図書室利用規程（平成６年３月10日 制定）

改正　平成12年１月27日
平成15年11月27日

（趣旨）
第１条　京都大学人文科学研究所図書室（以下「図書室」という。）の利用は、この規程に定めるところによる。

（図書資料）
第２条　図書室に、次の図書その他の資料（以下「図書資料」という。）を置く。
①　貴重書
②　普通図書
③　参考図書
④　逐次刊行物
⑤　視聴覚資料
⑥　その他の資料

（利用者）
第３条　図書室を利用できる者（以下「利用者」という。）は、次の各号に掲げる者とする。
①　本研究所の教職員
②　本研究所の名誉教授及び名誉所員
③　本研究所の元教職員、非常勤講師、非常勤教職員、招へい外国人学者、内地研究員、外国人共同研究者及びこれに準ずる者
④　本研究所の共同研究班参加者、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
⑤　本研究所以外の本学教職員（名誉教授を含む）、研修員、研究生及びこれに準ずる者
⑥　本学の大学院生及び学生
⑦　図書室の利用を申し出た学外者

（開室時間）
第４条　図書室の開室時間は、月曜日から金曜日までの午前９時から正午及び午後１時から午後５時までとする。
２　所長が特に必要と認めたときは、前項に定める開室時間を変更することがある。

（休室日）
第５条　図書室の休室日は、次のとおりとする。
①　土曜日及び日曜日
②　国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号。以下「祝日法」という。）に規定する休日
③　本学創立記念日（６月18日）
④　本研究所創立記念行事開催日
⑤　８月１日から８月15日
⑥　12月26日から翌年１月５日
⑦　毎月末日（末日が土曜日、日曜日又は祝日法に規定する休日に当たるときは、次の開室日）
２　所長が特に必要と認めたときは、臨時に休室又は開室することがある。

（利用方法）
第６条　図書室利用の方法は、次のとおりとする。
①　閲覧
②　貸出
③　書庫内検索
④　参考調査

（閲覧）
第７条　閲覧は、所定の場所で行うものとする。
第８条　利用者は、次のとおり図書資料を閲覧することができる。ただし、試験期間中において閲覧室が非常に混雑している等、本研究所の教育・研究に支障をきたすおそれがある場合においては、図書資料の閲覧利用を制限することがある。
①　開架図書は、閲覧室で自由に閲覧することができる。
②　書庫内図書及び視聴覚資料については、所定の手続きを経て所定の場所で閲覧することができる。
２　次の各号に掲げる場合においては、閲覧を制限することがある。
①　図書資料に独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号。以下「情報公開法」という。）第５条第１号、第２号及び第４号イに掲げる情報が記録されていると認められる場合（当該情報が記録されている部分に限る。）
②　図書資料の全部又は一部を一定の期間公にしないことを条件に個人又は情報公開法第５条第２号に規定する法人等から寄贈又は寄託を受けている場合（当該期間が経過するまでの間に限る。）
③　図書資料の原本を利用させることにより当該原本の破損若しくはその汚損を生じるおそれがある場合又は当該資料が現に使用されている場合

（貸出）
第９条　第３条第１号から第６号に掲げる者は、図書資料の貸出を受けることができる。ただし、次の各号に掲げる図書資料の貸出は行わない。
①　貴重書
②　事典、辞書及び目録類の参考図書
③　視聴覚資料
④　その他所長が特に指定したもの

（貸出の手続き）
第10条　貸出（一時帯出を含む）を希望する者は、職員証又は学生証その他所属、身分を証明するもの（以下、「身分証」という。）を提示し、所定の手続きを経なければならない。

（貸出期間及び冊数）
第11条　図書資料の貸出期間及び冊数は、次のとおりとする。
①　本研究所の教職員
期間の制限はない。冊数の制限はない。
②　本研究所の名誉教授及び名誉所員
１年以内　30冊以内
③　本研究所の元教職員、非常勤講師、非常勤教職員、招へい外国人学者、内地研究員、外国人共同研究者、共同研究班参加者、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
１月以内　30冊以内
④　本研究所以外の本学教職員（名誉教授を含む）、研修員、研究生、大学院生及びこれに準ずる者
１月以内　５冊以内
⑤　本学の学生
２週間以内　３冊以内
２　第3条第2号から第6号に掲げる者への製本雑誌の貸出期間は、その日に限り一時帯出することができる。
３　第３条第１号に掲げる者への未製本雑誌の貸出期間は、次の開室日までとする。又第３条第２号から第６号に掲げる者については、その日に限り一時帯出することができる。
４　所長が特に必要と認めたときは、貸出期間及び冊数を変更することがある。

（転貸の禁止）
第12条　利用者は、貸出中の図書資料を他の者に転貸してはならない。

（返却）
第13条　貸出を受けた図書資料は、貸出期間内に返却しなければならない。
２　利用者は、貸出期間内であってもその利用資格を失ったときは、ただちに借用している図書資料を返却しなければならない。
３　所長が特に必要と認めたときは、貸出中の図書資料の返却を求めることがある。

（書庫内検索）
第14条　書庫内検索は、第３条第１号から第３号に掲げる者に限り、掛員に身分証を提示して入庫することができる。

（参考調査）
第15条　利用者は、教育又は研究を目的とする場合に限り、所定の手続きにより学術に係る調査及び情報の提供を依頼することができる。
２　前項の調査を求められた場合において、特に経費又は時間を要し、他の業務に支障をきたすおそれのある調査については、回答を行わない。

（事故の届出及び処置）
第16条　利用者は、利用している図書資料に汚損、破損又は紛失等の事故を生じさせたときは、ただちにその旨を所長に届け出なければならない。
２　所長は、前項の事故を生じさせた利用者に弁償を求めることができる。

（利用の停止）
第17条　この規程に違反した者には、図書室の利用を停止することがある。

（雑　則）
第18条　利用者の閲覧に供するため、図書資料の目録及びこの規程を常時閲覧室に備え付けるものとする。
第19条　この規程に定めるもののほか、規程の実施に関し必要な事項は、所長が別に定める。

附則（平成６年３月10日制定）
１　この規程は、平成6年4月1日から施行する。
２　京都大学人文科学研究所図書・資料取扱規程（昭和25年6月8日制定）は廃止する。

附則（平成12年１月27日制定）
１　この規程は、平成12年４月１日から施行する。
２　本研究所附属漢字情報研究センター図書資料の利用は、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター利用規程による。

附則（平成15年11月27日制定）
この規程は、平成16年４月１日から施行する。

漢字情報研究センター

附属研究施設

Ⅰ　沿革

1962年5月、日本学術会議は人文・社会科学を振興する一方策として、学術情報体制の整備問題を取り上げ、各専門分野における学術資料を完全に収集し、これを研究者の共同利用に供するという、ドキュメンテーション・センター構想を政府に勧告した。こうした要請に応えて、当時の文部省は「人文・社会科学専門文献センター案」を作成し、1963年度から66年度にかけて、全国に5つの文献センターを設置した。1965年4月、京都大学人文科学研究所の附属施設として開設された東洋学文献センターもその一つである。

同センターは、東洋学に関する文献・資料を収集、整理して、研究者の共同利用に供すること、および東洋学に関する学術情報活動を活発に行うことを主たる目的とした。

前者については、東方文化学院京都研究所の創設以来、学問的実用書を整備することを目的として収集された、漢籍をはじめとする人文科学研究所所蔵の東洋学に関係する資料を広く内外の研究者に公開するとともに、それまで比較的手薄だった分野、たとえば中国の地方志や明人の文集などの資料についても、写真複製の方法によって他の機関から系統的に受け入れることで充実をはかってきた。

後者については、これも東方文化学院京都研究所設立後まもなく、1935年4月にその第１冊が編集された『東洋史研究文献類目』を継承して、世界で発表される、東洋学に関する多数の論文および単行本を年次ごとにまとめ、内容によって分類し、さらに著者索引を附した『東洋学文献類目』を、現在に至るまで毎年刊行している。また、1963年に出版された『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』の後を承ける形で、人文科学研究所創立50周年の記念事業として、1979年、同所が『京都大学人文科学研究所漢籍目録』を刊行した際にも中心的役割を果たし、利用者の便宜をはかってきた。

『東洋学文献類目』は、1981年度版以降、すでにデータベース化されており、東洋学、とりわけ中国学におけるコンピュータ利用の先駆けを成した。しかし、厖大な量の歴史資料・文献のデジタル化が急速に進み、人文諸科学の性格さえ変わりつつある欧米に比べると、東洋学文献センターが共同利用に供する資料の中核たる漢字文献の場合、そのデジタル化は著しく立ち遅れていると言わざるを得ない。この情況は、漢字によって受け継がれてきた文化にとって、その将来を左右する大きな問題であり、当然のことながら、東洋学に関する学術情報活動の拠点たる同センターにおいても、その担うべき役割について再検討を迫られることとなった。

漢字文献の公開およびその国際的情報交換を円滑に行うためには、現行のコード系に依存しない大量の漢字の利用を可能にし、学術的に適正な漢字管理システムを早急に開発する必要がある。そのためには、漢字に関する専門的知識を有し、漢字文献を正しく読み解くことのできる研究者のみならず、漢字の属性を踏まえた漢字文献データベースの高度化を実現し得る情報工学系の研究者をスタッフに加えることも不可欠である。

以上のような見地に基づいて、東洋学文献センターを漢字文献の国際的情報交換の拠点にふさわしい組織に拡大改組することとなり、教授2・助教授2・助手2に教官定員が増強され、2000年4月、漢字情報研究センターとして新たなスタートを切るに至った。

II　事業活動

１．資料収集・閲覧・複写・保存

センターが収集した文献および人文科学研究所が所蔵する東洋学関係の文献を、別に定める利用規程に従って公開し、閲覧、複写、参考業務などを行う。

２．出版

１）東洋学に関する論文および単行本を年次ごとにまとめ、内容によって分類し、さらに著者索引を附した『東洋学文献類目』を出版し

ている。なお、1981年度版以降はデータベース化されており、Web上で直接検索できる。

http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db/CHINA3/

2）漢字情報処理に関する各種の提言、およびセンターの活動状況を掲載した広報誌『漢字と情報』を発行している（年2回）。この広報誌はＰＤＦファイルで読むこともできる。

http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/publications/

3）漢籍担当職員講習会用テキストとして、「京都大学人文科学研究所漢籍カード作成要領」および「中国目録学　四部分類法について」を作成している。

4）人文科学研究所の共同研究、および国内外での調査活動に基づいて作成された目録・索引等を、『東洋学文献センター叢刊』（2001年度に『東方学資料叢刊』と改称）と銘打って出版している。

3．漢籍担当職員講習会

文部科学省と共催で、漢籍整理に携わる図書館職員等を対象に、毎年秋、五日間の講習会を開いている。10月開催の初級コースでは、「漢籍目録が読める」「従来のカード方式と同じ要領でパソコン入力ができる」ことを、11月開催の中級コースでは、初級コース受講の成果を踏まえつつ、「漢籍に関する様々な知識を高める」ことを目標とする。また、両コースともに整理実習に重きを置いている。

4．TOKYO 漢籍 SEMINAR

文部科学省の後援を得て、2004年度より「TOKYO漢籍SEMINAR」を開催する。本研究所の中国学研究の成果を分かりやすく解説することにより、多くの人々に漢字文化全般に関する理解や漢籍整理に対する興味を深めてもらうことを目的としている。（年１回）

5．「東洋学へのコンピュータ利用」研究セミナー

東洋学へのコンピュータ利用に関する先端的な研究が発表されている。（京都大学学術情報メディアデンターと共催、年１回）

6．全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナー

東京大学大学院法学政治学研究科附属外国法文献センター、一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センター、神戸大学経済経営研究所附属政策研究リエゾンセンター、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターと共催で、上記のセミナーを年１回開催している。

7．漢字文献データベース

1）センターのホームページにおいて、下記のデータベースを公開している。

東洋学文献類目
京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料
西域行記
地図
東方学デジタル図書館

2）全国漢籍データベース

国立情報学研究所および東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターとともに、全国漢籍データベース協議会の幹事機関となり、全国の大学図書館や公共図書館に呼びかけて漢籍目録の総合データベース構築を進めている。2001年7月、具体的な入力作業に着手し、2004年3月現在、約40万件のデータを公開するに至っている。

8．漢字処理システムの開発

数千年の伝統を有する東アジア文化圏において、漢字はその発展の中心

的役割を担ってきた。歴史的変化や地理的拡大により、文化の厚みや広がりが増していくのに並行して、漢字そのものも、時代や地域の必要性に応じて様々な変化を遂げ、その字数は拡大の一途をたどってきた。たとえどんなに短期間であれ、また小規模な範囲であれ、一つの漢字が生み出され、それが使用されるということは、とりもなおさず、その漢字を必要とする生活が存在したということであり、また、新たな文化的試みが成されたということでもある。

そうした営みを十分に尊重し、人類の歴史の一環としてトータルに跡づけていくためには、無限に変容・増殖を遂げる漢字について、これまでの言語学的研究成果を踏まえた上で、字形・字音・字義を綿密に調査することが必要であり、さらには時代もしくは地域といったキメの細かい視点から、これら三つの要素が一つの漢字の特徴をどのように際だたせているか、という点にも注目しなければならない。

そのためには、一つの漢字についてできるだけ多くの分類指標を用いることが求められる。発音、画数、部首など周知の検索法はもちろんのこと、その漢字を実際に使用した文献の時代や地域を特定すれば、この漢字セット自体が漢字の歴史を明らかにできるようになる。これこそ漢字の戸籍簿と呼ぶにふさわしく、学術的にも非常に有用なものとなるだろう。

●漢字情報研究センター利用規程

平成15年12月８日制定

（趣旨）
第１条　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター（以下「センター」という。）が保有する東洋学関係の文献その他の資料（以下「図書資料」という。）の利用は、この規程の定めるところによる。

（図書資料）
第２条　センターに、次の図書資料を置く。
① 貴重書
② 普通書
③ 参考図書
④ 逐次刊行物
⑤ その他の資料

（利用者）
第３条　図書資料は、一般の利用に供するものとする。

（閲覧場所）
第４条　図書資料の閲覧は、閲覧室内で行うものとする。

（開室時間）
第５条　閲覧室の開室時間は、月曜日から金曜日までの午前９時30分から正午及び午後１時から４時30分までとする。ただし、図書資料の出納は午後４時までとする。

（休室日）
第６条　閲覧室の休室日は、次のとおりとする。
① 土曜日及び日曜日
② 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号。以下「祝日法」という。）に規定する休日
③ 本学創立記念日（６月18日）
④ 夏期曝涼（８月１日から８月15日）
⑤ 年末年始（12月26日から翌年１月５日）
⑥ 毎月末日（末日が土曜日、日曜日又は祝日法に規定する休日にあたるときは、次の開室日）
２　センター長が、特に必要と認めたときは、臨時に閲覧室の業務の一部又は全部を休止することがある。

（閲覧室利用登録）
第７条　京都大学人文科学研究所の教職員以外の利用者が閲覧室の利用を希望する場合は、所定の京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター閲覧室利用申込書を閲覧室の受付（以下「閲覧受付」という。）に提出し、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター閲覧室利用カード（以下「利用カード」という。）の交付を受けるものとする。ただし、申込みの日に限って利用を希望する者については、利用カードの交付を省略することができる。
２　利用カードの交付を受けた者は、次回以降閲覧室に入室する際、利用カードを閲覧受付に提出するものとする。
３　利用カードの有効期間は、交付日の属する年度の末日を超えない範囲内でセンター長が定める。

（自由閲覧）
第８条　開架の図書資料は、閲覧室で自由に閲覧することができる。

（書庫内図書資料の閲覧）
第９条　書庫内の図書資料の閲覧を希望する者は、閲覧申込票を閲覧受付に提出するものとする。
２　同時に閲覧できる図書資料は、５点以内とする。
３　図書資料の返却は、閲覧受付において掛員の確認を得て行うものとする。

（閲覧の制限）
第10条　センター長は、次の各号に掲げる場合においては、閲覧を制限することができる。
① 図書資料に独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号。以下「情報公開法」という。）第５条第１号、第２号及び第４号イに掲げる情報が記録されていると認められる場合（当該情報が記録されている部分に限る。）
② 図書資料の全部又は一部を一定の期間公にしないことを条件に個人又は情報公開法第５条第２号に規程する法人等から寄贈又は寄託を受けている場合（当該期間が経過するまでの間に限る。）
③ 図書資料の原本を利用させることにより当該原本の破損もしくはその汚損を生じるおそれがある場合又は当該資料が現に使用されている場合

（利用の制限）
第11条　閲覧室が非常に混雑している場合等、本センターの教育・研究活動に支障をきたすおそれがある場合においては、センター長は閲覧室の利用を制限することができる。

（複写）
第12条　利用者は複写を依頼することができる。ただし、次に掲げる場合には図書資料の複写は行わない。
① 著作権の侵害となるおそれのあるとき
② 図書資料が複写により破損するおそれのあるとき
③ 特に時間を要し、他の業務に支障を生ずるおそれのあるとき
２　複写を依頼しようとする者は、所定の複写申請書を閲覧受付に提出し、センター長の承認を受けなければならない。
３　複写料金の取扱いについては、別に定める。

（貸出）
第13条　貸出は、原則としてこれを行わない。ただし、センター長が特に必要と認めた場合にはこの限りではない。

（利用者の責任）
第14条　利用者は、図書資料に含まれる情報を利用することによって著作権、プライバシー等第三者の権利利益を侵害したときは、その一切の責任を負うものとする。

（参考調査）
第15条　利用者は、教育又は研究を目的とする場合に限り、所定の手続きにより学術にかかる調査及び情報の提供を依頼することができる。ただし、次に掲げる場合には参考調査を行わないことができる。
① 図書資料の鑑定、解読若しくは翻訳、学習課題の回答その他のセンターの業務として対応することが適当でないと認められるとき
② 回答に著しく費用又は時間を要することが明らかである場合等、他の業務の遂行に著しい支障を及ぼすおそれがあるとき

（弁償の責任）
第16条　利用者は、その責に帰すべき事由により、施設、物品又は図書資料を滅失し、破損し、若しくは汚損したときは、その損害を賠償するものとする。

（利用の停止）
第17条　センター長は、他の利用者に迷惑を及ぼした者又は及ぼすおそれのある者並びに図書資料を滅失、破損若しくは汚損を生じさせた者又は生じさせるおそれのある者に対して、退室を命じ、又は入室を拒否することができる。
２　センター長は、この規則若しくはその他の規則に違反し、又はセンター長の指示に従わない者に対して、図書資料の利用を停止することができる。

（雑則）
第18条　利用者の閲覧に供するため、図書資料の目録及びこの規程を常時閲覧室内に備え付けるものとする。

第19条　この規程に定めるもののほか、規程の実施に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

（改正）
第20条　この規程の改正は、センター専門委員会の議を経て、センター長がこれを行う。

附則
１、この規程は、平成16年４月１日から施行する。
２、漢字情報研究センター図書室利用規程（平成12年４月１日制定、平成13年３月７日改正）は廃止する。

海外学術調査・国際交流

◆◆◆　海外学術調査

●カラコルム・ヒンズークシ学術調査
（1955年）
●イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査
（1959～1965年）
●アフリカ類人猿学術調査
（1961～1966年）
●ヨーロッパ学術調査
（1967～1972年）
●地中海文化圏の社会と文化に関する学術調査
（1975年）
●ユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究
（1977～1982年）
●ヴァードゥーラ・シュラウタスートラの研究
（1992年）
●ガンダーラ仏寺構成の再検討
（1994～1996年）
●欧州所蔵中央アジア出現簡牘他法制文書の総合的調査
（1994～1995年）
●イタリアにおける漢籍所在調査
（1995～1997年）
●中国古代都市の形成に関する考古学的調査
（1995～2000年）
●スウェン・ヘディン将来考古学術資料の総合的研究
（1996～1998年）
●ヴァードゥーラ学派現存諸写本の蒐集と同派諸文献の研究
（1996年）
●久米島諸家文書群の文化史的解明
（1996～2002年）
●東・東南アジアの消滅の危機に瀕した言語の現地調査
（2000～2001年）
●西南中国からヒマラヤ地域のチベット系少数言語の記述研究
（2000～2001年）
●現存ヴェーダ文献伝承の調査と資料収集
（2001～2003年）

海外における学術調査は、東方学研究部の前身である東方文化研究所時代、1936年の中国響堂山や龍門の石窟寺院の調査研究以来、ながい歴史をもつ。とりわけ1938年から1944年まで七次におよぶ山西省雲岡石窟の学術調査は、考古・美術の両面から行なわれた緻密な学術調査として世界的に名高い。戦後、全30冊の報告書を刊行し、考古学の水野清一と芸術史の長廣敏雄は、1952年学士院恩賜賞の栄誉にあずかった。戦後、中国での調査が不可能になり、水野らはあたらしい調査の舞台を三大文明の交わる西南アジアにうつして、中国仏教美術の源流を探ろうとした。1959年から七次にわたるイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査がそれであり、7冊の大部な報告書に成果がまとめられている。

旧西洋部では、人類学の今西錦司が1961年に京都大学アフリカ学術調査隊の隊長となって活躍した。さらに1967年から72年には、桑原武夫、会田雄次、梅棹忠夫らを中心として三次におよぶヨーロッパ学術調査隊が派遣された。それはあたらしい視角からヨーロッパを比較の対象として見つめ直そうとした学術調査であった。フランス・イタリア・スペイン・イギリス・スイスをはじめ、ユーゴスラヴィアからトルコまで含み、村落にはいって民衆の生活意識に直接ふれようとする意欲的なものであった。1975年以降は、谷泰らが人類学の立場を加えて、調査にとりくんだ。1975年の地中海文化圏の社会と文化に関する学術調査と、1977年から82年にいたるユーラシア南部有畜社会の比較文化史研究の二つがそれである。また、旧日本部を主軸とした国内の実態調査も1951年以降たびたび実施され、山村や漁村、都市の生活意識、家族問題など、ユニークな実態調査報告書がまとめられている。

近年は研究所として大規模な調査隊を組織することはなくなったが、所員がリーダーとなって国内外の研究機関・研究者との共同のプロジェクトを推進することは、各分野でさかんに行なわれている。

文化人類学の竹沢泰子は、神戸のNGOと共同で、ブラジルにおいて各地の日系人団体関係者を対象に、日本への就労移住に関して聞き取り調査を始めている。また、ヴェーダ学の井狩彌介・藤井正人は、現存ヴェーダ伝承とその社会組織の調査、ヴェーダ写本の蒐集を目的とする国際プロジェクトを立ち上げ、インド現地調査を継続して行なっている。文化史の横山俊夫は、久米島の未公開家文書群の学際的解読を、所内研究者、本学理系研究者、沖縄県ならびに

中国福建省在住の研究者などと共同で推進、前近代東アジア文化の重層を新たな方法で解明する試みを始めている。現代生命科学を研究対象とする加藤和人は、アジア諸国におけるゲノム研究の歴史と現状に関する調査研究を2002年春から実施している。

考古学の桑山正進は、ガンダーラの現存ストゥーパについて建築細部要素を正確に実測し、それを基礎にほかの諸要素を加味してストゥーパ建築に対する従来の編年を再検討し、さらにガンダーラ仏教文化の全体像を見通そうとした。岡村秀典は「中国古代都市の形成」を課題として、農学や建築学の研究者を交えた調査隊を組織し、現地の研究機関と共同で、まず長江中流域の竜山時代の城郭をもつ湖北省陰湘城遺跡、ついで黄河中流域の殷代の城郭をもつ河南省府城遺跡の発掘調査を実施した。中国の出土文書および簡牘について、梅原郁はイギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン所在の出土漢文文字文書の総合的調査をすすめ、それをもとに冨谷至は引き続いて主としてスウェーデンのスウェン・ヘディンコレクションに関する国際共同研究を組織し、2001年秋には、「楼蘭出土文字資料100周年紀年」のシンポジウムをスウェーデン大使館との共催で行なった。また、冨谷は2002年から04年まで奈良シルクロード財団の研究助成のもと、河西回廊の漢代遺跡にかんして、甘粛省考古文物研究所との共同研究を行なった。言語史の高田時雄は、1995年以来、ローマ国立中央図書館及びナポリ東洋大学と共同してイタリア各地に所蔵される漢籍および中国学資料の所在調査を行なってきたが、2001年からはその調査対象範囲をスペイン・ポルトガルなど南欧諸国に拡大して調査を続行している。記述言語学の池田巧は、西南中国の山岳地帯に話されるチベット系諸語の調査研究をすすめ、その類型構造の諸特徴を明らかにしつつある。

■受入外国人研究者

平成10年度(1998)～平成15年度(2003)

国名	外国人研究員(客員)	招聘学者など	ゲストスピーカーなど	計
中国	6	29	27	62
台湾	2	11	17	30
韓国	4	17	10	31
シンガポール		1	2	3
インド	1		1	2
マレーシア			1	1
ミャンマー		2		2
アメリカ	2	10	17	29
カナダ		2	1	3
連合王国	6	7	6	19
スウェーデン	2	2	10	14
フィンランド	2		1	3
オランダ	2		1	3
スイス		5		5
オーストリア	2			2
ドイツ	2	4	2	8
フランス	3	3	6	12
イタリア		5	2	7
ギリシャ			1	1
ハンガリー			1	1
ニュージーランド		1		1
オーストラリア		1	2	3
合計	34	100	108	242

＊人数は延人数

◆◆◆ 国際交流

本所の国際交流はきわめて活発に行なわれている。中国との交流は戦前から密接であったが、最近では長期の研修留学を含めて相互の往来が絶えない。また中国学を専攻する欧米の大学院学生を研修員として受入れることも慣行化している。日本学の分野でも海外の研究者との繋りは緊密で、共同研究への外国人出席者もかなり多い。一方所員の海外渡航も活発で、若手研究者の多くは海外研修、留学を経験している。

1981年度から新設の比較社会部門と1985年増設の日本学部門は、外国人客員部門として使われ、交流の幅はさらに広がった。創立70周年にあたる1999年には、海外から多数の研究者を招いて4つの国際シンポジウムを開催するなど、国際的な学術交流の拠点としての本研究所の役割はますます重要なものとなりつつある。

■外国人研究員（客員）　平成12年度（2000）～平成15年度（2003）

国籍	氏名	現職（受入時）	期間
ｽｳｪｰﾃﾞﾝ	Staffan Rosen	ストックホルム大学東洋言語研究所教授	2000. 2～2000. 8
台湾	張　啓雄	中央研究院近代史研究所　研究員	2000. 5～2000. 8
アメリカ	Louise Young	ニューヨーク大学歴史学部　助教授	2000.9～2000.11
フランス	Marcel Henaff	カリフォルニア大学　教授	2000.10～2001.6
大韓民国	権　泰檍	ソウル大学校　人文大学　教授	2000.12～2001.3
連合王国	Ian James McMullen	オックスフォード大学　講師	2001. 3～2001. 6
連合王国	John Breen	ロンドン大学東洋アフリカ研究院　上級講師	2001.7～2001.12
中国	楊　天石	中国社会科学院近代史研究所研究員	2001. 7～2002. 1
中国	張　翔	復旦大学人文学院　歴史系　教授	2002. 1～2002. 4
オランダ	Jan Van Bremen	ライデン大学ジャパン・コリア研究センター講師	2002. 2～2002. 7
インド	TANKHA, Brij Mohan	デリー大学講師	2002.4～2002.7
中国	張　廣達	北京大学中国古代史研究中心教授	2002.8～2003.2
大韓民国	辛　珠柏	成均館大学校ＢＫ21研究助教授	2003.1～2003.7
オーストリア	FRÜHSTÜCK, Sabine Maria	カリフォルニア大学サンタバーバラ校準教授	2003.3～2003.8
台湾	林　満紅	中央研究院 近代史研究所研究員	2003.8～2004.1
中国	王　維坤	西北大学文博学院教授	2003.9～2004.3
大韓民国	李　俊植	延世大学校国学研究院研究教授	2004.2～2004.7

■招聘外国人学者・共同研究者　平成13年度（2001）～平成15年度（2003）

京都大学招聘外国人学者等受入れ要項（1977年３月22日）が制定され、いわゆる勤務の契約によらない外国人の研究者を招聘外国人学者または外国人共同研究者として受入れることが可能になった。受入れ資格等は同要項によるほか研究所内規に定めてあるが、過去６年間に受入れた学者は次のとおりである。

国籍	氏名	現職（受入時）	期間
中国	黄　留珠	西北大学歴史系教授	01.3.20～01. 5.19
ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ	MARKHAM, Elizabeth Jane	アーカンソー大学（米国）教授	01.6.10～01. 7.31
ドイツ	WOLPERT, Rembrandt Friedrich	アーカンソー大学（米国）教授	01.6.10～01. 7.31
中国	宮　長為	中国社会科学院歴史研究所副研究員	01. 6.15～01. 7. 8
アメリカ	AMES, Christopher Allen	ミシガン大学人類学科博士課程	01. 7. 3～01. 8.24
台湾	蔡　榮婷	国立中正大学中国文学系副教授	01.7.26～01. 8.26
ｽｳｴｰﾃﾞﾝ	KARLSSON, Anders	ロンドン大学アジアアフリカ学部講師	01. 8.10～01. 9.21
台湾	呉　文星	台湾師範大学歴史系教授兼系主任	01. 9.1～01.11.30
中国	楊　雨青	中国人民大学歴史系副教授	01. 9.16～01. 9.30
中国	牟　発松	武漢大学人文学院歴史系教授	01.12.1～02. 5.30
連合王国	KORNICKI, Peter Francis	ケンブリッジ大学教授	02. 1. 5～02. 4.10
大韓民国	李　鐘旼	延世大学校社会発展研究所専門研究員	01.12.25～03.2.28
イタリア	VERARDI, Giovanni	ナポリ東洋大学アジア学部教授	02.3.2～02.3.31
大韓民国	徐　碩培	カリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史学部博士課程	02.4.1～03.3.31
ミャンマー	San Tun	ヤンゴン大学講師	02.5.7～03.4.6
中国	李　暁	中国上海芸術研究所研究員	02.5.12～03.3.11
中国	陳　金華	カナダブリティッシュコロンビア大学助教授	027.1～02.8.27
台湾	鄭　阿財	国立中正大学中国文学系教授	02.7.10～02.7.29
台湾	朱　鳳玉	国立嘉義大学中国文学系教授	02.7.10～02.7.29
台湾	蔡　榮婷	国立中正大学中国文学系副教授	02.7.10～02.7.29
大韓民国	CHOI, Kyeong-Hee	シカゴ大学東アジア言語・文化学部助教授	02.7.12～02.8.11
中国	阿　風	中国社会科学院歴史研究所副研究員	02.8.27～02.11.24
台湾	呉　春宜	国立高雄第一科学技術大学助教授	02.9.1～03.2.28
大韓民国	金　美賢	成均館大学校BK21儒教文化圏研究団研究助教	02.9.10～03.9.9
中国	徐　庭雲	中央民族大学歴史系教授	02.9.13～03.2.14
ｽｳｪｰﾃﾞﾝ	MA, Li	Link ping大学助教授	02.11.29～02.12.26
ドイツ	DEEG, Max	ウィーン大学組織神学研究所宗教学教授	03.2.2～03.2.21
スイス	Tschudin, Jean-Jacques	パリ第７大学LCAO（東アジア言語･文明学科）教授	03.3.15～ 03.4.11
中国	秦　小麗	陝西省考古学研究所助理研究員	03.4.1～05.3.31
大韓民国	韓　亘熙	国史編纂委員会編史研究士	03.4.14～03.12.20
台湾	黄　蘭翔	中央研究院台湾史研究所籌備處副研究員	03.8.1～ 03.9.30
中国	汪　利平	ミネソタ大学準教授	03.8.6～03.9.2
大韓民国	林　炳徳	忠北大学校人文大学史学科副教授	03.8.11～ 04.2.28
中国	阿　風	中国社会科学院歴史研究所副研究員	03.9.3～03.12.1
大韓民国	金　孝眞	ハーバード大学人類学科博士課程	03.9.12～04.9.11
中国	汪　利平	ミネソタ大学準教授	03.9.19～04.9.18
中国	彭　建英	西北大学文博学院講師	03.10.6～04.3.31
連合王国	FERGUSON, Harvie	グラスゴー大学社会学部教授	03.10.15～04.5.31
中国	桑　兵	中山大学歴史系教授	03.10.21～03.12.4
日本	池上英子	ニュー・スクール大学大学院教授	03.11.10～04.1.10
台湾	黄　寛重	中央研究院歴史語言研究所研究員兼所長	03.11.20～ 03.12.19
中国	Jue Chen	カンタベリー大学講師	04.1.12～04.2.15
アメリカ	Kenneth James Ruoff	ポーランド州立大学助教授	04.1.5～04.8.31
台湾	劉　苑如	台湾中央研究院中国文哲研究所副研究員	04.3.31～04.4.26

公開講座・講演会の紹介

本研究所においては、定例の公開講演会として、開所記念講演と夏期公開講座を行っているほか、年度末に停年退職となる所員がある年には記念講演会をも行っている。「開所記念講演」は、11月9日の開所記念日を祝して、毎年3名の講師が出て実施する。「夏期公開講座」は、原則として、毎年7月の第2週の金曜日、土曜日の2日間、4〜6名の講師によって、統一テーマのもとに、主として一般市民を対象にした講演を行っている。

過去の開所記念講演会一覧

1994 (H6) 年11月17日：

- ●ミメーシスの政治学――「啓蒙の弁証法」の思想圏　上野成利
- ●貝原益軒――内向きの宇宙　横山俊夫
- ●「世説新語」の美学――才から情へ　小南一郎

1995 (H7) 年11月16日：

- ●経典の偽作と戒律――梵網経をめぐって　船山　徹
- ●読む機械――啓蒙思想と活字メディア　富永茂樹
- ●「満洲国」の終焉　山本有造

1996 (H8) 年11月7日：

- ●ローレンツ・フォン・シュタインと明治日本　瀧井一博
- ●王国維の学問について　井波陵一
- ●ヴァードウーラ学派の新写本について
  ――失われた古代インド祭式文献の再発見　井狩彌介

1997 (H9) 年11月6日：

- ●中世ヴェネツィアにおける市民の「家」
  ――都市国家理解に向けて　高田京比子
- ●1930年代の日本とジェントルマン資本主義
  ――綿業通商摩擦問題を中心に　籠谷直人
- ●『大乗起信論』批判――阿梨耶識は如来蔵にあらず　荒牧典俊

1998 (H10) 年11月5日：

- ●ト辞の法表現　森賀一恵
- ●軍事共同社会の文化人類学――宗教とジェンダー　田中雅一
- ●徳川慶喜と戊辰戦争　佐々木克

1999 (H11) 年11月18日：

- ●中国近代における帝国主義と国民国家　狭間直樹
- ●西学の伝来と明清時代の実学思想　杜　石然
- ●時間解釈と日本の影響――中国近代における
  過去・現在・未来の概念　マリアンヌ・パスチド-ブルギエール

2000 (H12) 年11月16日：

- ●簸箕（ホキ）の名物學　木島史雄
- ●祭式と輪廻――古代インド再生説の展開　藤井正人
- ●元曲「盆児鬼」考――しゃべるお碗の話　金　文京

2001 (H13) 年11月15日：

- ●ポール・ヴァレリーと表象の危機　森本淳生
- ●肖像と記憶――横山大観《陶靖節》をめぐって　高階絵里加
- ●明代「嘉靖四十一年賦役黄冊」の語るもの　岩井茂樹

2002 (H14) 年11月7日：

- ●元代江南の禅宗と日本五山
  ――「勅修百丈清規」の成立と流伝　古松崇志
- ●漢字コードの誕生　安岡孝一
- ●中原中也とランボー　宇佐美齊

2003 (H15) 年11月6日：

- ●日本民俗写真史ノート　菊地　暁
- ●中国古代法が語るもの　宮宅　潔
- ●図像からみた古代メソポタミアの王権　前川和也

過去の夏期公開講座一覧

1995 (H7) 年「物語としての過去」

7月7日：

●自伝のトポス――六朝士大夫の私語りから　齋藤希史
●現代インドの宗教ナショナリズムが語る過去　田中雅一
●バビン共和国盛衰記――近世ポーランドのパロディ国家　小山　哲

7月8日：

●「犬と中国人は入るべからず」――上海租界伝説　石川禎浩
●「統治の書」と十一十二世紀の東方イスラーム世界　稲葉　穣
●王昭君の物語――片思いの文学　金　文京

1996 (H8) 年「歴史研究の新しい地平」

7月5日：

●アジアの海と日本
――地域の連鎖のなかで働く人々を見つめて　籠谷直人
●中国の古代を掘る――日中共同発掘の現場から　岡村秀典

7月6日：

●士族は没落したか？　落合弘樹
●歴史における事実と真実
――孫文の三民主義と毛沢東の解釈を例として　狭間直樹

1997 (H9) 年「メイド・イン・ジャパンの亜細亜」

7月4日：

●アジア伝説――神功皇后からハリマオまで　山室信一
●江戸期庶民の朝鮮像　ロナルド・トビ（イリノイ大学教授）

7月5日：

●明治漢学者のみた儒教の祖国　陶　徳民（関西大学助教授）
●日本語論のなかのアジア像　安田敏朗

1998 (H10) 年「モノとしての書物」

7月10日：

●古代メソポタミアの粘土板　前川和也
●古代中国の木簡――紙より優れた書写材料　冨谷　至
●『百万塔陀羅尼』の語るところ　勝村哲也

7月11日：

●中国古典籍のブックデザイン　木島史雄
●日用百科の使われ方――十九世紀の日本　横山俊夫
●印刷文化と手稿（マニュスクリ）
――ヴァレリーをめぐって　森本淳生

1999 (H11) 年「時のデザイン」

7月9日：

●明治維新と古代文化の復興　高木博志
●漢元年の惑星集合　浅原達郎

7月10日：

●臨床医学における時間の知――中国医学の窓から　東郷俊宏
●創造のとき・進化のとき――ダーウィンを中心に　阪上　孝

2000 (H12) 年「人種・民族・階級」

7月7日：

●「人種」は存在するか――文化人類学から語り直す　竹沢泰子
●西南中国の民族と言語――社会言語学の視点から　池田　巧

7月8日：

●故郷でインドを想い眠る
――前近代におけるインドとイスラーム世界の人的交流　眞下裕之
●インドのイスラーム教徒とカースト制度
――身分の高い「民族」と低い「民族」の分類をめぐって　小牧幸代

2001 (H13) 年「ヒトと環境のサイエンス」

7月6日：

●長寿のサイエンス　武田時昌
●ヒトゲノムと新しい人間観　加藤和人

7月7日：

●鳥は言葉を発するか――聞きなしを考える　小林博行
●北京：都市と環境　岩井茂樹

2002 (H14) 年「生活の中の植民地主義」

7月5日：

●朝鮮人の名前と植民地支配　水野直樹
●植民地支配・身体規律・健康　鄭　根埴（韓国・全南大学教授）

7月6日：

●植民地における神社参拝　駒込　武（京都大学教育学部助教授）
●台湾先住民と日本語教育
――阿里山ツオウ族の戦前・戦後　松田吉郎（兵庫教育大学教授）

2003 (H15) 年「人文学と生命（いのち）」

7月4日：

●霊魂のゆくえ――魂の古代と現代　小南一郎
●古代インドの生と死の観念――ヴェーダの祭式世界から　井狩彌介

7月5日：

●皮膚ともぐさの間にあるもの
――伝統医学にみる「からだ」と「いのち」　東郷俊宏
●問い直される生命観――現代の生命科学が提示するもの　加藤和人

2004 (H16) 年「記念日の創造」

7月2日：

●記憶を造形する命日
――ベンジャミン・ディズレイリとプリムローズ　小関　隆
●フェンスの中の記念と祈念――米陸軍生誕舞踏会　田中雅一
●中国の祭日と死者を巡る物語り　佐野誠子
●思い出せない苦悩――中国共産党の記念日　石川禎浩

過去の退官記念講演会一覧

1994 (H6) 年3月17日：

●近代日本の「満洲」認識　古屋哲夫

1995 (H7) 年3月16日：

●明末清初のレジスタンス　小野和子

1997 (H9) 年3月13日：

●王安石の周辺－宋代の史料－　梅原　郁
●だれそれはしかじかであることを知らない
－会話における異化経験と関与－　谷　泰

1998 (H10) 年3月19日：

●中江兆民の位置－明治精神史のなかで－　飛鳥井雅道

2000 (H12) 年3月9日：

●行動のアイデンティティと環境　勝村哲也
●中国思想史において仏教思想とは……　荒牧典俊
●小さな発見の喜び　吉川忠夫

2003 (H15) 年3月20日：

●啓蒙時代の他者認識　阪上　孝
●未開からワイルド・サイドへ
――人類学における他者像の変貌　田中雅一

2004 (H16) 年3月4日：

●私の数量経済史研究　山本有造
●改革者としての薩摩藩　佐々木克
●ヴェーダ文献の写本探索　井狩彌介

出版物

出版物は定期刊行物としての「紀要」、『東洋学文献類目』と不定期の研究報告にわけられる。紀要には邦文の『東方学報』『人文学報』と欧文の『ZINBUN』がある。『東方学報』は1931年に創刊され、以後毎年少なくとも一冊を出し、現在76冊にいたっている。東方学研究部所員の論文が中心で、日本の東洋学界を代表する雑誌のひとつといってよいだろう。旧人文からは戦前『東亜人文学報』、戦後は『人文科学』が刊行されていた。1950年11月以後、旧日本部と旧西洋部所員の研究発表誌として『人文学報』が出版されており、現在88号を数える。また1975年より欧文紀要『ZINBUN』が加えられ、両部所員が交代で執筆し、現在36冊に達している。『東洋学文献類目』は1935年に始まる『東洋史研究文献類目』を1966年に改称したもので、各年度ごとの日本、中国、欧米の東洋学関係の論文と研究書を網羅した目録である。本書は内外の学界から需要が多く、既刊2001年度まで57冊を数える。不定期刊行物としては所員の個人研究と共同研究班の研究報告があり、最近では毎年平均4、5点が公刊され、旧東方文化以来合わせて170点をこえる。このほかイラン・アフガニスタン・パキスタンの学術調査報告、38冊に及ぶ内外調査の報告書なども逐次公刊されている。

人文科学研究所研究報告

変異するダーウィニズム ―進化論と社会―	2003	阪上　孝編
帝国の研究―原理・類型・関係―	2003	山本有造編
植民地主義と人類学	2002	山路勝彦・ 田中雅一編
コミュニケーションの社会史	2001	前川和也編
ヤージュニャヴァルキヤ法典	2002	井狩彌介・ 渡瀬信之訳注
研究者の組織化 ―その諸相（『人文学報』第84号）	2001	阪上　孝編
ダーウィン以後の人文・社会科学	2001	阪上　孝・ 上野成利編
アヴァンギャルドの世紀	2001	宇佐美齊編
中國の禮制と禮學	2001	小南一郎編
明清時代の音韻學	2001	高田時雄編
中国近代の都市と農村	2001	森　時彦編
人文・社会科学と自然科学の 対話の試み	2000	阪上　孝・ 上野成利編
それぞれの明治維新 ー変革期の生き方ー	2000	佐々木克編
唐代の宗教	2000	吉川忠夫編
眞誥研究（譯注篇）	2000	吉川忠夫・ 麥谷邦夫編
共同研究　梁啓超 ―西洋近代思想受容と明治日本―	1999	狭間直樹編
長物志ー明代文人の生活と意見	1999	荒井健他訳注
六朝道教の研究	1998	吉川忠夫編
暴力の文化人類学	1998	田中雅一編著
中國技術史の研究	1998	田中　淡編
象徴主義の光と影	1997	宇佐美齊編著
THE MAIN STUPA OF SHAH-JI-KI DHE-RI A Chronological Outlook	1997	桑山正進編
統治技法の近代	1997	阪上　孝編著
コミュニケーションの自然誌	1997	谷　泰編
ステイタスと職業	1997	前川和也編
文学をいかに語るか	1996	大浦康介編
前近代中国の刑罰	1996	梅原　郁編
明末清初の社會と文化	1996	小野和子編
注釈漂荒紀事	1996	飛鳥井雅道・ 齋藤希史編
貝原益軒―天地和楽の文明学―	1995	横山俊夫編
中國古代禮制研究	1995	小南一郎編
一九二〇年代の中国	1995	狭間直樹編
人文学のアナトミー	1995	阪上　孝・ 山田慶兒編
近代日本のアジア認識	1994	古屋哲夫編
中華文人の生活	1994	荒井　健編
中國語史の資料と方法	1994	高田時雄編
漢代石刻集成 本文篇、圖版・釋文篇	1994	永田英正
A Study of the Nilamata-Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir.	1994	井狩彌介編
法的思考の研究	1993	山下正男編
「満洲国」の研究	1993	山本有造編

中國近世の法制と社會	1993	梅原　郁編
中國中世の文物	1993	礪波　護編
家族・世帯・家門 工業化以前の世界から	1993	前川和也編・著
慧超往五天竺國傳研究	1992	桑山正進編
中國國民革命の研究	1992	狹間直樹編
中國古道教史研究	1992	吉川忠夫編
視覚の一九世紀 ―人間・技術・文明―	1992	横山俊夫編
文化を読む	1991	谷　泰編
中國古代科學史論續編	1991	山田慶兒・ 田中　淡編
供犠と霊力 (Patrons, devotees and goddesses)	1991	田中雅一著
フランス・ロマン主義と現代	1991	字佐美齊編
カーピシー=ガンダーラ史研究	1990	桑山正進著
明末清初期の研究	1989	岩見　宏・ 谷口規矩雄編
中國古代科學史論	1989	山田慶兒編
国家―理念と制度―	1989	中村賢二郎編
轉形期の中國	1988	竹内　實編
空間の世紀	1988	樋口謹一編
漢語史の諸問題	1988	尾崎雄二郎・ 平田昌司編
ボードレール　詩の冥府	1988	多田道太郎編
中國貴族制社會の研究	1987	川勝義雄・ 礪波　護編
西南ユーラシア農牧文化複合における 栽培植物と家畜Ⅰ・Ⅱ（欧文）	1987	谷　泰・ 阪本寧男編
社会的相互行為の研究	1987	谷　泰編
歴史のなかの都市―続都市の社会史	1986	中村賢二郎編
日本領事報告の研究	1986	角山　栄編
名公書判清明集	1986	梅原郁譯注
ボードレール「悪の花」註釈上・下	1986	多田道太郎編
戰國時代出土文物の研究	1985	林巳奈夫編
新發現中國科學史資料の研究 譯註篇，論考篇	1985	山田慶兒編
19世紀日本の情報と社会変動	1985	吉田光邦編
1848国家装置と民衆	1985	阪上　孝編
日中戰争史研究	1984	古屋哲夫編
中國近世の都市と文化	1984	梅原　郁編
国民文化の形成	1984	飛鳥井雅道編
国家と価値	1984	上山春平編
モンテスキュー研究	1984	樋口謹一編
明清時代の政治と社會	1983	小野和子編
都市の社会史	1983	中村賢二郎編
空間の原型	1983	上田　篤・ 多田道太郎・ 中岡義介編
五四運動の研究全５函	1982～1992	島田虔次・ 竹内　實・ 狹間直樹・ 森　時彦編
中國中世の宗教と文化	1982	福永光司編
植民地期朝鮮の社会と抵抗	1982	飯沼二郎・ 姜　在彦編

前近代における都市と社会層	1981	中村賢二郎編
近代朝鮮の社会と思想	1981	飯沼二郎・ 姜　在彦編
ヒスパーヌス論理学綱要 ―その研究と翻訳―	1981	山下正男著
1930年代日本共産主義運動史論	1981	渡部　徹編
ヨーロッパ―1930年代	1980	河野健二編
文明開化の研究	1979	林屋辰三郎編
人類学方法論の研究	1979	谷　泰編
現代の遺言問題	1979	太田武男編
幕末文化の研究	1978	林屋辰三郎編
中國の科學と科學者	1978	山田慶兒編
知識人層と社会	1978	会田雄次・ 中村賢二郎編
辛亥革命の研究	1978	小野川秀美・ 島田虔次編
ヨーロッパの社会と文化	1977	会田雄次・ 梅棹忠夫編
フランス・ブルジョア社会の成立 ―第二帝政期の研究―	1977	河野健二編
元曲選釋第３、４集	1976、77	吉川幸次郎・ 入矢義高・ 田中謙二注
疑經研究	1976	牧田諦亮著
漢代の文物	1976	林巳奈夫編
化政文化の研究	1976	林屋辰三郎編
現代の親子問題	1975	太田武男編
雲岡石窟續補―第十八洞實測圖―	1975	水野清一・ 田中重雄圖・ 日比野丈夫解説
異端運動の研究	1974	会田雄次・ 中村賢二郎編
プルードン研究	1974	河野健二編
弘明集研究全3巻	1973～75	牧田諦亮校記譯注
日本社会主義運動史論	1973	渡部　徹・ 飛鳥井雅道編
世界史のなかの明治維新 ―外国人の視角から―	1973	坂田吉雄・ 吉田光邦編

社会科学のための統計パッケージ	1973	三宅一郎編著
中國殷周時代の武器	1972	林巳奈夫著
大正期の急進的自由主義	1972	井上　清・渡部　徹編
白氏文集全３册	1971〜73	平岡武夫・今井清校定
明清時代の科學技術史	1970	薮内　清・吉田光邦編
世界資本主義の歴史構造	1970	河野健二・飯沼二郎編
現代の離婚問題	1970	太田武男編
ルソー論集	1970	桑原武夫編
六朝時代美術の研究	1969	長廣敏雄著
明治前期の農業教育	1969	飯沼二郎著
大正期の政治と社会	1969	井上　清編
モンゴル社会経済史の研究	1968	岩村　忍著
文学理論の研究	1967	桑原武夫編
封建国家の権力構造	1967	清水盛光・会田雄次編
宋元時代の科學技術史	1967	薮内　清編
世界資本主義の形成	1967	河野健二・飯沼二郎編
中江兆民の研究	1966	桑原武夫編
大正デモクラシーの研究	1966	松尾尊兌著
漢代畫象の研究	1966	長廣敏雄編
校定本元典章刑部全２册	1964、72	岩村　忍・田中謙二編
ブルジョワ革命の比較研究	1964	桑原武夫編
中國中世科學技術史の研究	1963	薮内　清編
魏書釋老志の研究	1961	塚本善隆著
封建社会と共同体	1961	清水盛光・会田雄次編
日本技術史研究	1961	吉田光邦著
家族法研究	1961	太田武男著
慧遠研究全２巻	1960、62	木村英一編
清末政治思想研究	1960	小野川秀美著
米騒動の研究全５巻	1959〜62	井上　清・渡部　徹編
京都大學人文科學研究所藏甲骨文字全２巻３册	1959〜60	貝塚茂樹著
京都地方労働運動史	1959	渡部　徹編著
フランス革命の研究	1959	桑原武夫編
明治前半期のナショナリズム	1958	坂田吉雄編
ルネサンスの美術と社会	1957	会田雄次著
林業地帯	1956	京大人文科学研究所林業問題研究会編
離婚原因の研究	1956	太田武男著
山西古蹟志	1956	水野清一・日比野丈夫著
立杭窯の研究	1955	薮内　清編
肇論研究	1955	塚本善隆編
西ウイグル国史の研究	1955	安部健夫著
日本労働組合運動史	1954	渡部　徹著
フランス百科全書の研究	1954	桑原武夫編
天工開物の研究	1953	薮内　清編
戦国武士	1952	坂田吉雄著
雲岡石窟全16巻	1951〜56	水野清一・長廣敏雄著
元曲選釋第１、２集	1951、52	吉川幸次郎・入矢義高・田中謙二注
ルソー研究	1951	桑原武夫編
飛天の藝術	1949	長廣敏雄著
漢書律曆志の研究	1947	能田忠亮・薮内　清著
經書の成立	1946	平岡武夫著
隋唐曆法史の研究	1944	薮内　清著
北支農村經濟社會の構造とその展開	1944	柏　祐賢著
古代支那工藝史に於ける帶鉤の研究	1943	長廣敏雄著
龍門石窟の研究	1941	水野清一・長廣敏雄編
古銅器形態の考古學的研究	1940	梅原末治著
尚書正義定本全８册	1939〜43	經學文學研究室編
古韵研究	1939	高畑彦次郎著
禮記月令天文攷	1938	能田忠亮著
日清役後支那外交史	1937	矢野仁一著
宋本禮記疏校記	1937	常盤井賢十著
周秦漢三代の古紐研究上・下	1937	高畑彦次郎著
支那と佛蘭西美術工藝	1937	小林太市郎著
響堂山石窟―河北河南省境における北齊時代の石窟寺院―	1937	水野清一・長廣敏雄著
戰國式銅器の研究	1936	梅原末治著
漢以前古鏡の研究	1936	梅原末治著
左傳賈服注擿逸	1936	重澤俊郎著
支那山水畫史―自顧愷之至荊浩―同附圖	1934	伊勢專一郎著

共同研究資料叢刊

第7号　The Kyoto/Seoul Symposium on Linguistic Challenges in the Modern Sciences: First Movement
eds. Yokoyama Toshio & Kim Yung Sik　2002

第6号　資料　権利の宣言－1789
富永茂樹編　2001

第5号　A Prelude-Symposium for Future Seoul/Kyoto Symposia on Language Problems in the Modern Sciences
eds. Kim Yung Sik & Yokoyama Toshio　2001

第4号　言語力の諸相 ―試行的共同研究報告―
横山俊夫編　2000

第3号　人文・社会科学と自然科学の対話の試み
－進化論を主題として－
阪上　孝・上野成利編　2000

第2号　京都大学人文科学研究所70周年記念国際シンポジウム
人文学の新時代－現代自然科学との対話をもとめて－
横山俊夫・小林博行編　2000

第1号　国際シンポジウム
日本・中国・朝鮮間の相互認識と誤解の表象　討議集
山室信一編　1998

調査報告

第38号 日用百科型節用集の使われ方――地小口手沢相の電算画像処理による使用類型析出の試み　横山俊夫・小島三弘・杉田繁治

第37号 近世前期政治主要人物の居所と行動　藤井譲治

第36号 明治中期読売新聞文芸関係記事目録　平田由美

第35号 京都市内およびその周辺の中世城郭　山下正男

第34号 京都大学人文科学研究所蔵日本関係欧文図書総覧　横山俊夫

第33号 パシュトゥン遊牧民の牧畜生活　松井　健

第32号 続・トレギエでの対話　桑原武夫

第31号 都市政治家の行動と意見　三宅一郎・福島徳寿郎・村松岐夫

第30号 都市行政組織の構造と動態　三宅一郎・福島徳寿郎

第29号 都市における家族の生活　太田武男・藤岡喜愛・野川照夫・井上忠司

第28号 イタリア中部山村の調査報告　谷　泰・梅棹忠夫

第27号 山村における家族の生活　太田武男・井上忠司

第26号 トレギエでの対話　桑原武夫

第25号 ロールシャハ・テストによるパーソナリティーの調査（IV）　藤岡喜愛

第24号 バスク関係文献資料集　梅棹忠夫・竹内成明

第23号 イギリス地域社会における面接調査記録　加藤秀俊

第22号 現代女性の結婚観・離婚観　太田武男・加藤秀俊

第21号 近世先進地域の農業構造　中村　哲

第20号 続・近世後進地域の農村構造　清水盛光・前田正治

第19号 近世後進地域の農村構造　清水盛光・前田正治

第18号 ロールシャハ反応集　藤岡喜愛

第17号 漁村の経済構造と生活意識　河野健二

第16号 漁民の生活条件と生活意識　河野健二

第15号 西日本の酒造杜氏集団　篠田　統

第14号 Rorschach TestによるPersonalityの調査（III）　藤岡喜愛

第13号 但馬における大土地所有の形成と変遷（VI）　河野健二・溝川喜一・森口兼二

第12号 山村における青年の生活　重松俊明

第11号 但馬における大土地所有の形成と変遷（V）　後藤　靖

第10号 但馬における大土地所有の形成と変遷（IV）　杉之原寿一

第9号　Rorschach TestによるPersonalityの調査（II）　今西錦司・富川盛道・牧　康夫・藤岡喜愛

第8号　Rorschach TestによるPersonalityの調査（I）　藤岡喜愛

第7号　但馬における大土地所有の形成と変遷（III）　後藤　靖・高尾一彦

第6号　農業協同組合の実態　安達生恒・松浦龍雄

第5号　農村における潜在失業の実態　安達生恒・野村良樹

第4号　農漁村における内縁の実態　太田武男

第3号　農村近代化の現段階に関する調査報告　森口兼二

第2号　但馬における大土地所有の形成と変遷(II)(上)(下)　天野元之助・梅渓　昇

第1号　但馬における大土地所有の形成と変遷(I)　宮川　満・溝川喜一・田中　裕

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告

1962年 ハイバクとカシュミール・スマスト――アフガニスタンとパキスタンにおける石窟寺院の調査　水野清一編

1967年 ハザール-スムとフィール-ハーナ――アフガニスタンにおける石窟遺跡の調査　水野清一編

1968年 ドゥルマン・テペとラルマ――アフガニスタンにおける仏教遺跡の調査　水野清一編

1969年 メハサンダ――パキスタンにおける仏教寺院の調査　水野清一編

1970年 チャカラク・テペ――北部アフガニスタンにおける城塞遺跡の発掘　水野清一編

1971年 バサーワルとジェラーラーバード-カーブル――アフガニスタン東南部における仏教石窟と仏塔の調査　水野清一編

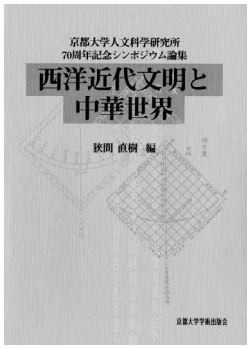
1978年 タレリ――ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告　水野清一・樋口隆康編

資料集・索引等

漢字情報研究センター東方学資料叢刊第11冊		
周氏冥通記研究譯注編	2003	麥谷邦夫・吉川忠夫編
周氏冥通記研究索引	2003	麥谷邦夫・吉川忠夫編
漢字情報研究センター東方学資料叢刊第10冊 善隣協会・善隣訳書館関係資料 ―徳島県立図書館所蔵「岡本韋庵先生文書」所収―	2002	狭間直樹編
東洋学文献センター叢刊第9冊 龍門石窟石刻集成	2000	曾布川寛編
東洋学文献センター叢刊第8冊 京都大学人文科学研究所所蔵 中江丑吉文庫目録	1999	山室信一編
東洋学文献センター叢刊第7冊 梵蒂岡図書館所蔵漢籍目録補編	1997	高田時雄編
東洋学文献センター叢刊第6冊 中国造園史文献目録	1997	田中　淡編
東洋学文献センター索引叢刊第5冊 元史百官志索引	1996	徳永洋介編
復社姓氏索引	1995	小野和子編
東洋学文献センター索引叢刊第4冊 宋會要輯稿編年索引	1995	梅原　郁編
東洋学文献センター索引叢刊第3冊 中國叢書綜録未收日藏書目稿	1995	李　鋭清編
東洋学文献センター索引叢刊第2冊 法顯傳索引	1994	桑山正進・高田時雄編
満洲国人事法令年表大同元年～康徳二年	1992	古屋哲夫編
中国近現代論争年表上・下	1992	竹内　實編
五四運動の研究総索引	1992	狭間直樹・森　時彦編
「満洲」関係経済文献目録	1992	山本有造編
眞誥索引	1991	麥谷邦夫編
慶元條法事類語彙輯覧	1990	梅原　郁編
禪の文化　資料編	1988	柳田聖山編
東洋学文献センター索引叢刊第1冊 李義山文索引	1984	荒井　健編
日本新聞五四報道資料集成	1983	
西田幾多郎全蔵書目録	1983	山下正男編
家族法判例・文献集成（続編） ―戦後家族法の歩み―	1982	太田武男編
毛沢東著作年表上巻	1981	
祖堂集索引全3冊	1980～84	柳田聖山編
毛沢東著作年表下巻語彙索引篇	1980	
京都大学人文科学研究所漢籍目録上・下	1979、80	
東京夢華録夢粱録等語彙索引	1979	梅原　郁編
淮南子索引	1975	鈴木隆一編
家族法判例・文献集成 ―戦後家族法学の歩み―	1975	太田武男編
宋元學案・宋元學案補遺 人名字號別名索引	1974	衣川　強編
京都大学人文科学研究所欧文図書目録（昭和14年12月～25年3月）	1974	
京都大学人文科学研究所和漢図書目録（昭和14年12月～25年3月）	1973	
遼金元人傳記索引	1972	梅原　郁・衣川　強編
明史職官志索引稿	1972	歴史研究室編
家族問題文献集成欧文編	1972	太田武男・米山俊直・松尾恒子・井上忠司編
民報索引全2巻	1970、72	小野川秀美編
家族問題文献集成 ―戦後家族問題研究の歩み―	1970	太田武男・加藤秀俊・井上忠司編
家族法文献集成―戦後家族法学の歩み―	1969	太田武男編
家族法判例集成 ―日本家族法判例の系譜―追録	1969	太田武男編
家族法判例集成 ―日本家族法判例の系譜―	1964	太田武男編
家族法判例集成 ―日本家族法判例の系譜　追録1―3	1965～68	太田武男編
本邦殘存典籍による輯佚資料集成正・續	1968	新美　寛・鈴木隆一編
京都大學人文科學研究所藏甲骨文字索引	1968	貝塚茂樹編
京都大學人文科學研究所漢籍分類目録坿 書名人名通檢上・下	1963、65	
後漢書語彙集成全3巻	1960～62	藤田至善編
金史語彙集成全3巻	1960～62	小野川秀美編
唐代研究のしおり　特集全4巻	1957～59	斯波六郎編
唐代研究のしおり全12巻	1955～65	平岡武夫・市原亨吉・今井　清・花房英樹編
東方文化研究所漢籍分類目録坿 書名人名通檢全2巻	1943、45	
東方文化研究所續増漢籍目録	1941	
宋代茶法研究資料	1941	佐伯　富編
東方文化學院京都研究所漢籍目録	1938	
册府元龜（奉使部・外臣部）索引	1938	宇都宮清吉・内藤戊申編

シンポジウム論集

西洋近代文明と中華世界
――京都大学人文科学研究所70周年記念シンポジウム論集
2001　狭間直樹編



東アジア世界の人文情報学研究教育拠点

漢字文化の全き継承と発展のために

21世紀COEプログラム

拠点リーダー● 高田時雄

本拠点の目指すものは純然たる情報科学でもなければ、従来の人文科学や社会科学でもなく、新しい学際領域としての東アジア人文情報学である。中国や日本をはじめとする東アジア諸国では長期にわたり漢字を媒体として、豊かな文化を育んできたが、その伝統文化を体現する東アジア人文学は21世紀の情報化社会において大きなチャレンジを受けている。新しい情報化された世界においても十全に伝統を保持し、新たな発展を目指すため、東アジア人文学を情報学によって新たに再編成し、そのための方法と理論の確立をおこなうことが強く要請されているのである。

本拠点形成計画では、漢字の研究を柱にしつつ、情報学的手法によって漢字文化圏における人文学研究を再編成することを目的とする。それはデジタル化によって失われる部分も含めたトータルな漢字文献の保持再生であり、端的にいえば漢字文化の全き継承と発展である。そのためには、第一に漢字を中心とする東アジア諸言語の構造の体系的研究や多字化・多言語化・国際化などの情報化技術等、実際的な意味で漢字を情報化するための基礎研究が必要となるが、その他にも漢字文献データベースの新技術の積極的開発や、東アジア規模で人文情報学を担う人材の育成、さらには漢字と社会とのかかわりを啓発していくこと等、与えられた課題は非常に多い。

≪ 実施計画 ≫

本計画は、有機的連関性をもつ以下の３つのプログラムから構成される。

1. 東アジアの文字に関する人文情報学的研究

東アジア世界では漢字以外にも、漢字から派生したり、漢字と密接な関係を有する諸種の文字が生起し、また今日でも用いられている。それら諸種の文字を扱うための人文情報学的研究をおこなうと同時に、それらの知識と技術の教育をおこなう。

2. 漢字文献ナリッジベースの構築

漢字文献研究の重層化・高度化に欠かせない「知の宝庫」として、漢字文献ナリッジベースを構築し、伝統的な知識と最先端技術の融合の中で、21世紀における新しい東アジア学のあり方、漢字文化の記述の方法を追求する。

3. 東アジア人文情報学人材育成プログラム

国際連携やセミナーの開催などを通じて、これまでの研究・教育を発展的に継承した質の高い教育システムの構築をおこない、人文学と情報学を横断する教育の場を作り上げ、漢字文化の全般的ボトムアップを図る。

≪ 活動の記録と予定 ≫

2003年11月
「書体・組版ワークショップ」

2004年２月
「オープン・フォーラム：“漢字文化の今”（第１回）」

2004年２月
「唐代ナリッジベースの可能性」ワークショップ

2004年９月
「2004年度東アジア人文情報学サマーセミナー“インターネット時代の人文学の技術”」

2004年11月
「中國宗教文獻研究國際シンポジウム」

2005年１月
「日中共同シンポジウム“漢字文献資料庫的新技術”」を北京にて開催（中国国家図書館との共催）

2005年２月
「オープン・フォーラム：“漢字文化の今”（第２回）」（京都新聞社と共催）

なお本プログラムの諸活動は、ホームページや、ニューズレター『漢字と文化』を通じて広く公開されている。
http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/

教育への貢献

人文科学研究所は個人研究、共同研究をはじめとする多彩な研究活動に軸をおく一方、新しい世代の研究者を育成する教育活動にも、以下のようなかたちで力を注いでいる。

1● 学内の協力講座としては、全部門および漢字情報研究センターから17名の教授、助教授が、文学研究科において文献文化学専攻・文献文化論、思想文化学専攻・思想文化論、歴史文化学専攻・歴史文化論、現代文化学専攻・現代文化論などを担当している。また文化研究創成研究部門および文化表象研究部門から各１名の教授が、協力講座に準ずるかたちで人間・環境学研究科を支援している（共生文明学専攻・環境構成論および文化人類学)。

2● また近年の学内の新制度による、大学院教育への協力も生まれてきた。2002年度より文化研究創成研究部門から１名の教授が、地球環境学堂・学舎・三才学林の流動教員（地球文明論授業担当および三才学林での学際教育支援活動担当）として「両任」のかたちで、また2004年度は文化研究創成研究部門から２名の助教授が、生命科学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に併任で協力している。

3● 上記以外の大学院担当としては、毎年度約10名の教授、助教授が、文学研究科もしくは経済学研究科に、主として授業担当のかたちで協力し、学内非常勤講師としては、毎年度４名の助教授または助手が、文学研究科、経済学研究科に出講している。

4● その他、全学共通教育の担当は、講義を毎年度３科目、また新入生を対象とする少人数セミナー、いわゆる「ポケット・ゼミ」については、2002年度以降８科目を提供している。

5● さらに特筆を要するのは、本研究所では、学内外の博士後期課程以上の学生に共同研究という、研究科では経験できない研究活動の場を提供し、会読によりテキストを深く読む訓練を積んだ学際的で広い視野をもつ若手研究者の養成に努めていることである。詳細は、本要覧の「共同研究」各班解説に付された「班員一覧」を参照されたい。また同「一覧」および本要覧「国際交流」の項に見られるように、国外からの研究生、国内外の研修員ならびに学術振興会の特別研究員を広く受け入れて、共同研究への参加、資料会読や論文執筆に関する個人指導など、若手研究者が研鑽を深める数々の機会を提供しており、国外諸大学に提出される博士論文、教授資格論文などの核心部分の形成に、本研究所が貢献している事例はほぼ毎年のように見られる。

6● なお2003年度採択の21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」では、人間・環境学研究科、文学研究科などの大学院生に対して、人文情報学の知識普及に努めている。定期開催の研究班への参加や、事業担当者が大学院生を帯同して行う、外国における実地研修もその一例であるが、2004年９月には、集中的に人文情報学の能力を向上させる目的で、サマーセミナー「インターネット時代の人文学の技術（スキル）」を開催した。

人文科学研究協会

この財団法人の前身である東方文化研究援護会は、1946年３月、東方文化研究所長、羽田亨氏によって設立され、「東洋における人文科学研究」の助成を主たる目的として事業を行っていた。1949年１月、東方文化研究所は、「世界文化に関する人文科学の総合研究」を設置目的とする京都大学人文科学研究所に統合されることとなり、東方文化研究援護会もまた、より広い範囲の人文科学研究の奨励助成を目的とする必要が生じ、変更手続きをすすめ、1962年11月に財団法人「人文科学研究協会」が認可され発足した。

本協会は、したがってその目的を「広く人文科学の研究を奨励助成し、もって学術および文化の発展に寄与すること」（寄附行為第３条）とし、事業所を京都大学人文科学研究所内に置き、以下の事業を行っている（同第４条）。

① 人文科学に関する研究を行う者に対する助成
② 人文科学に関する研究機関に対する援助
③ 人文科学に関する文献の刊行及び刊行費の補助
④ 人文科学に関する学術講演会の開催及び補助
⑤ その他前条の目的を達成するために必要な事業

なお、初代理事長には、当時の京都大学総長平沢興氏が、常任理事には当時の人文科学研究所長の桑原武夫氏が就任した。その後、理事長には歴代の元所長が、常任理事には現職所長が就任してきた。現在は、桑山正進名誉教授が理事長、森時彦人文科学研究所長が常任理事にあたっている。

2002年度以降のおもな事業内容はつぎのとおりである。

○研究者助成

海外出張者への国際交流活動推進費補助／中国渡航２件、
インドネシア・東チモール渡航１件

○文献刊行及び刊行費への補助

『東方学報』２冊、『東洋学文献類目』３冊
「夏期公開講座講演集」市販本出版補助１冊／『生活の中の植民地主義』

○学術講演会の開催及び補助

夏期公開講座、通算６日間
学術講演会

2002. 10. 1　孫欽善北京大学古文献研究所長
「中国古文献学と文献整理」

2002. 10. 9　J=L. Steinmetz ナント大学教授
「散文詩の二重の起源」

2003. 3.25　D. Skre オスロ大学人文学部考古学科教授
「ヴァイキング期ノルウェーの初期集住地について」

2004. 7.22　F. Marmande パリ第七大学教授
「ジャズと表現―レクチャーとエキジビションで語るジャズの情念と愛―」
（京都大学総合博物館と共催）

○国際学術交流支援

国際シンポジウム開催ならびに英文報告書作成費補助／
「現代科学術語の再構築：　ソウル／京都シンポジウム」１件

○人文科学研究奨励賞

2002. 11.11 後藤静夫氏　国立文楽劇場普及養成課長（宝塚市）
「『文楽・人形浄瑠璃の現在』等に示される、日本の伝統話し芸をめぐる研究」に対して

2004. 2.23　穴沢咏光氏　（財）穴沢病院長（会津若松市）
「汎ユーラシア的な考古学研究と日本考古学の国際化」に対して

これらの事業のための資金は、研究所を今日まで支えられた先学諸氏や篤志家の寄付金と、研究報告書その他が一般出版社によって刊行された場合、その印税収入の一部を醵出する方法などによって築いてきたものである。なお、さらなる事業拡充のために、2002年度より研究所教官（現、教員）の寄附募集を行なったところ多数の応募があり、それをうけて、当財団理事や名誉所員の方々からの賛同寄付もいただいたことを謝意とともに記しておきたい。

詩のことばの総合的な認識へ

フランスの詩学

1942年生、1967年、京都大学大学院文学研究科修士課程修了

教授◆宇佐美 齊（うさみ ひとし）

詩学ということばには多分に曖昧さがつきまとう。そしてそのためにしばしば誤解がともなう。ちなみに手近の漢和辞典によれば、「詩の學問」(『諸橋大漢和辞典』）あるいは「詩について研究する学問」(『角川漢和中辞典』）と定義されており、対象の所在と方法論への真摯な問いを失わないかぎり、疑義の入り込む余地はない。けれどもことばは転用によって豊かさを獲得することがある反面、濫用されるとついには擦り切れて生来の輝きと重みとを喪失する。近年しばしば書名などで見かける「××の詩学」のような表現は、ひと昔まえなら「××の美学」とでもいったであろうようなニュアンスで用いられている。おそらくは、否応なしに制度としての学問分野を想起させる古色蒼然とした「美学」を、どことなく曖昧で多義性を有するがゆえにいくらか風通しがよさそうに見える「詩学」に、置き換えてみたに過ぎない。その目新しさがこのさき急速に古びないという保証はどこにもないだろう。

この転用には明らかに欧文脈の影響が見てとれる。たとえば今日ほとんど例外なく「詩学」と訳されるフランス語 la poétique は、「詩の」ないしは「詩的な」を意味する形容詞 poétique に由来する。ところがこの形容詞に定冠詞 le を添えた男性名詞 le poétique は、いうまでもなく「詩的なもの」を意味するから、これが学問研究の領域を示す女性名詞 la poétique になると、「詩的なものの研究」もしくは「詩的世界の研究」を指すことになる。当然、対象は詩のテクストに限らず、それ以外のさまざまな文学ジャンルのテクストはもちろんのこと、さらには言語によらない表象一般（たとえば音楽、造形芸術、映像表現など）にまで拡大され得るだろう。

■西欧における古典的詩学

西欧におけるアリストテレスいらいの古典的詩学は、いずれも劇と叙事詩、とりわけ悲劇を中心に据えた論述であった。詩人は「歌う人」であるよりは「作る人」であり、「構成する人」でなければならなかった。そこで論じられなければならなかったことは、まず韻文の成り立ちと作品の構成であり、ミメーシス（模倣・再現）理論であり、ひいては虚構論であった。このような「詩学」の伝統は、「修辞学」や「作詩法」のそれと時に競合し、時に相補い合いながら、20世紀における「詩学」の展開にまでつながっている。たとえば1937年からその死にいたる1945年まで、コレージュ・ド・フランスで「詩学」講義を担当したポール・ヴァレリーによれば、「詩学」という語はその語源に従って「ことばが同時にその実質でありその方法でもある作品の創造、または構成に関するすべてのことを指し示す名称」と理解すべきであり、その場合は当然のことながらこの語は「詩にかかわる規則の集積とか、美的規範などの狭い意味ではない」ことになる。

ヴァレリーによって再確認されたこの基本路線は、20世紀中葉におけるロマン・ヤコブソンやロラン・バルトなどの言語学的詩学研究への道をひらくものであったし、そしておそらくは、「詩学（あるいは詩の認識）は本質的に詩を書くことの実践に結びついている」とするメショニックらの現代詩学の可能領域をも、前もって保証するものであっただろう。ただしここで忘れてならないのは、この基本路線から外れたところで大きな足跡を残して、後世に新しい詩学への道を暗示したガストン・バシュラールの存在である。『空間の詩学』や『夢想の詩学』などの著作を通して彼がおこなったイメージ分析のさまざまな試みは、19世紀後半から20世紀前半へかけての「詩のことばの転換」、すなわちミッシェル・ビュトールのいわゆる「リュートからイメージへ」の転換と絡んで、今後ますますその重要性を増すであろう。

■近代における詩のことばの大きな転換

以上のような概括からも明らかなように、ヨーロッパ詩学の主流が永年にわたって等閑視してきたものは、喜劇や歌謡などの俗文学であり、とりわけ叙情詩であった。テクストあるいは表象一般の詩的性格に着目し

つつ文学あるいは諸芸術の存立の基盤を問うことを任務とする、いわば拡大された意味での詩学ではなく、「詩の本質、形式、技法などを考究する学問」(『小学館日本国語大辞典』)という、この漢語系列の日本語の本義に立ち返って詩学の可能領域を模索するならば、たとえば次のような二つの方向から詩の根拠を問う道が、私たちの目前に大きくクローズ・アップされてくる。(1)一方で詩歌の起源をにらみながら、他方で近代における詩のことばの大きな転換(上記の「リュートからイメージへ」)をどのように考えるべきか。(2)さらにまた、詩のことばを受容の現場から多角的に考察することによって得られる新しい認識とは何か。

　第一の問いは、私がこれまでにおこなってきたフランス近代詩研究に深く根ざしている。すなわちロマン派からシュルレアリスムにいたる詩史上のきわめて重大な事件が二つある。第一は19世紀初頭における散文詩の成立とその後の発展であり、第二は1870年前後における自由韻律詩の出現である。具体的にいうならば、前者はアロイジユス・ベルトランによって創始され、シャルル・ボードレールによって確立をみたサブ・ジャンルであり、後者はランボーの後期韻文詩や『イリュミナシオン』中の二篇の冒険的な試みによって、フランス詩史上に初めて登場したと目される詩句の形式であるが、両者は韻文の衰退という事象と絡んで密接に関連しあっている。近代フランス文学史上に特異な花を咲かせた散文詩という文学ジャンルは、ボードレールの衣鉢を継いだランボー、ロートレアモン、マラルメ等によりその可能領域を大幅に拡張することを得たばかりか、さらにはポンジュ、ミショー等の20世紀詩人にまで受け継がれる詩法の大きな歴史的な流れを生み出した。この散文詩の成立と発展の根拠を自由韻律詩の生成と発展(もちろんこれは日本近代詩における口語自由詩の問題と連動する)に注目しながら考察すると、おのずから新しい詩学の課題が見えてくる。すなわち韻律法の破壊と存続の問題をにらみながら、リズムと音色に基づくいわゆる「音楽性」の追求と、今世紀初頭に新たにクローズ・アップされた「イメージの詩学」の出現とをどのように関連づけて読み解くか、という問題である。

■詩のことばの受容と新しい詩学への展望

　第二の問いもまた、私がこれまでにおこなってきたボードレール、ランボー、アポリネールなどのフランス近代詩人にかかわる翻訳と注釈の試みの現場からの発想に深くかかわる。そこでたえず意識されたものは、詩のことばの多義性と意味の揺らぎに由来する豊かさであり、読者あるいは享受者がもたらす思いがけない発見と付加価値の重要性である。一篇の詩を読むとき、私たちがそこに自らの心をうつして読みとっているというのは、おそらく本当である。どのように精緻に組み立てられた「言語装置」も、この一点を閑却しているかぎり、無益な玩具となり終るだろう。私たちは一篇の詩を、あるいは一冊の書物を読むことを通して、それらがなければたぶん垣間みることもできなかったであろうような、自己あるいは自己が所属する集団の一面を対象化してとらえ、それをきっかけにして新しい精神生活を自覚的に生きる。詩のことば(あるいはいっそひらきなおって文学言語といってしまっても同じことなのであるが)の豊かさの証でもあるところの、曖昧と意味の揺らぎについて考察し、さらには受容の問題を実践的かつ理論的に追尋することを通して私たちが手にいれることが出来るのは、生を見据える鏡とでもいうべきそのような想像(創造)力への鍵であるに違いない。

Après le Déluge.
Aussitôt que l'idée du Déluge se fut rassise,
Un lièvre s'arrêta dans les sainfoins et les clochettes mouvantes
et dit sa prière à l'arc-en-ciel à travers la toile de l'araignée.
Oh ! les pierres précieuses qui se cachaient, — les fleurs qui
regardaient déjà.
Dans la grande rue sale les étals se dressèrent, et l'on tira
les barques vers la mer étagée là-haut comme sur les gravures.
Le sang coula, chez Barbe-Bleue, — aux abattoirs, — dans les cirques,
où le sceau de Dieu blêmit les fenêtres. Le sang et le lait coulèrent.
Les castors bâtirent. Les "mazagrans" fumèrent dans les estaminets.
Dans la grande maison de vitres encore ruisselante les enfants
en deuil regardèrent les merveilleuses images.
Une porte claqua, et sur la place du hameau, l'enfant tourna
ses bras, compris des girouettes et des coqs des clochers de partout,
sous l'éclatante giboulée.
Madame *** établit un piano dans les Alpes. La messe et les
premières communions se célébrèrent aux cent mille autels de la
cathédrale.
Les caravanes partirent. Et le Splendide Hôtel fut bâti
dans le chaos de glaces et de nuit du pôle.
Depuis lors, la Lune entendit les chacals piaulant par les
déserts de thym, — et les églogues en sabots grognant dans le verger.
Puis, dans la futaie violette, bourgeonnante, Eucharis me dit que
c'était le printemps.
— Sourds, étang, — Écume, roule sur le pont, et par-dessus les
bois ; — draps noirs et orgues, — éclairs et tonnerre, — montez et
roulez ; — Eaux et tristesses, montez et relevez les Déluges.
Car depuis qu'ils se sont dissipés, — oh les pierres précieuses
s'enfouissant, et les fleurs ouvertes ! — c'est un ennui ! et la
Reine, la Sorcière qui allume sa braise dans le pot de terre,
ne voudra jamais nous raconter ce qu'elle sait, et que nous ignorons.

フランス近代詩の転換点と目されるアルチュール・ランボーの散文詩集『イリュミナシオン』の一篇「大洪水のあと」自筆原稿(フランス国立図書館蔵)。

言葉の森を分け入って

文学理論の研究

おおうらやすすけ
教授◆大浦康介

1951年生、1986年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得、Ph. D.（パリ第7大学）

「専門は？」と訊ねられると、最近は迷わず「文学理論」と答えることにしている。もともと気が多い方なので、そう言い切るのは正確を欠くことではあるが、また「文学理論」という言葉が定着していないなか、そう言われても内心首を傾げる人が多いにちがいないが、この語のプロモーションのためにも、あえてそう言うことにしている。

文学研究者のなかでも、文学理論家を自称する者は少ない。しかも彼らのうちにも、文学理論の定義についてこれといったコンセンサスがあるわけではない。以下に述べるのは、したがって、少なくとも私にとっての「文学理論とはなにか」である。

■批評と文学史

文学研究としてすぐに思いつくのは、文献学や解釈学といった文学プロパーではない学問を別にすれば、批評と文学史だろう。しかし、これらがすぐれて近代的な学問であるということは案外知られていないかもしれない。批評の成立には、かけがえのない個人（「天才」）の創造の賜物としての作品という概念が不可欠である（著作権などという考え方もつまるところそこに由来している）。フランスでは19世紀は批評の時代だといわれるが、その代表的批評家サント＝ブーヴが問題にしたのは、つづめていえば、作家の生きざまや心理や時代背景とその作品創造とのあいだの照応関係だった。「人と作品」を重視するこの態度は、フランスに限らず、その後の批評の方向を決定づけることとなる。逆にいえば、われわれの学校の読書感想文や国語の試験で「作者の意図」が問われることの根は意外に深いのである。

クロード・ロシュ「本」

一方、文学史は「フランス文学史」、「イギリス文学史」というように、ふつう国単位で考えられるものであり、それは当然「国文学」の意識と密接に結びついている。しかも「国文学」の意識は、往々にして、多少とも対外的な国家意識そのものに後押しされているか、あるいは逆にそれを牽引する役目を担わされている。テリー・イーグルトンが指摘しているように、イギリスで「英文学」が教育の場で認知されるようになったのは19世紀後半、古典文献学の牙城だった大学でそれが研究対象として定着したのは第一次大戦後である。その背景には宗教的権威の失墜や植民地をめぐる諸国間の抗争があった。それより前、内憂外患の危機に晒されていたドイツでは、18世紀末以来、ロマン派の文学者や知識人が、国家統一・国民統合の夢を先取りするかたちでドイツ精神の顕揚につとめたが、その過程で生まれたのが「ドイツ学（ゲルマニスティック）」というディシプリンだった。グリム兄弟らのドイツ語学や文学史的研究はそうした文脈のなかに位置づけられる。

文学史はいかにイデオロギッシュでありうるかということだが、それだけではない。文学史は方法論的にも多くの問題を抱えている。要するにそれは、ほとんどの場合、いくつものミニ作家論を時系列に沿って、ジャンルごと、世紀ごとに並べ、その上に「何々主義」を被せて、その変遷を一種の発展史観でまとめたものにすぎない。しかも主として創作者の歴史であって、読者一般の嗜好やジャンル観の変遷の歴史はそこには欠落している。20世紀前半のフランスでも、大学での文学研究の主流は、のちに先導者の名をとって「ランソン流」と呼ばれた文学史的研究だったが、その実質は、ロラン・バ

ルトが喝破したように、実証主義の鎧をまとった「人と作品」の思想だった。

■文学理論とはなにか

文学研究は20世紀に入って大きく「言語論的展開」を遂げる。そこでは文学が一個の言語による構築物として見直されることになる。ありていにいえば、それまで精神性を付与され、ひとつの理念として膨張の一途をたどってきた文学が、自らの言語的現実に引き戻されたということである。こうした動きを代表するロシア・フォルマリズム、ニュー・クリティシズム、構造主義の用語でいえば、文学が「技法」として、「ページの上の言葉」として、「構造」を抽出すべき言説として問題にされるようになったということだ。

そこでは日常言語との対比において文学言語の特質が問われた。言語には発信者もいれば受信者もいる。そこで発せられるメッセージを運ぶには通信路が必要だし、またその理解にはコードやコンテクストが参照されなければならない。ロマン・ヤコブソンは、こうしたコミュニケーション図式のなかに文学言語を置き、その「機能」を、メッセージそのもの（表現形式）に重きをおく「詩的機能」と定義した。要するに文学言語においては「なにを」よりも「いかに」の方が重要だとしたのである。

文学はなるほど特定のかたちをもった言説である。そのかたちも、日常言語との距離も、ジャンルによって、また作品によって異なるが、日常言語が伝達を目的とした、「透明な」言語であるとしたら、日常言語からもっとも遠い、もっとも「不透明な」――その意味でもっとも文学的な――言語は、詩の言語だろう。詩を翻訳したり、要約したりするのがとくに難しいのはそのためである。それは単に詩型や韻律から来ているのではない。たとえば詩におけるメタファーは、まず本義があって、その間接的・装飾的表現として用いられているのではない。そこでは意味を重層的に畳み込んだ、本義がかぎりなく遠のいてゆくようなメタファーそのものの質量こそが本質的なのである。

フォルマリズムや構造主義が〈意味〉を捨象したと考えるのはまちがっている。ただ従来の批評では（作品の）「意味はなにか」が問われたのに対して、そこでは（文学において）「意味はいかにして可能か」が問われたのである。これを問う学問は、創始者アリストテレスに倣って「詩学」と呼ばれた。これが、基本的には、私のいう文学理論である。文学理論は批評を排除するものではない（批評もマルクス主義やフロイト理論の影響下で独自の発展を遂げた）。両者はむしろ相互補完的な関係にある。

文学理論は、作品分析にもとづきつつも、作品より上位のカテゴリー――ジャンル、物語、フィクションなど――を主対象とする。フランス構造主義以降しばらく隆盛をみた物語学（ナラトロジー）はその一例である。これに先鞭をつけたのはプロップのロシア民話の研究だが、構造主義的アプローチはもともとこうしたフォークロアに属するような集団的・非個人的な文学と相性がいいのであって、このことはこのアプローチが人類学者たちと共有されたことと無縁ではない。そこでは「物語る人間」、いやもっと根本的に「意味する人間 homo significans」（バルト）が探究されたのである。フィクション論に興味をもち、それをまとめることを目前の課題としている私自身の立場からいえば、「演ずる人間（ふりをする人間）homo fingens」の探究ということになる。

■文学はいま

文学研究にとって、いまは「冷めた」時代である。方法的にも「なんでもあり」の時代だ。作家の評伝はあいかわらず売れる（むろん相対的な話だが）。文学史は大した改良もないまま再生産されつづけている。しかし、それらも含めて「文学」なのである。フォルマリズムの決定的な過ちは、文学が純粋に作品テクストだけで成り立ちうると考えたことだった。

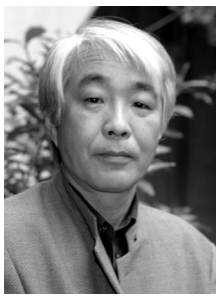
文学はいまやその「生産・流通・消費」の回路をはなれて、また作品を取り巻くさまざまなメディアの言説をはなれて、さらには読書習慣や教育のあり方をはなれて論じることはできない。使用言語と民族や国籍の関係もますます複雑になりつつある（リービ英雄、カズオ・イシグロ、多和田葉子らを見よ）。文学研究者にいまほど複眼的な視点が求められている時代はないといえる。

それでも基本はやはり言語である。言語、とりわけ文学言語は奥行きをもった立体だと、私はよく学生にいう。「深読み」という言葉があるが、それは書き手の心理を穿つことと解されるべきではない。言語じたいが抱える深淵というものがあるのである。それは「独創性」が発揮される場ではない。そこには〈読者〉もいれば〈他者〉もいる。無意識の引用もあれば狡知をきわめた戦略もある。言葉の森を分け入って……。あいまいな言い方かもしれないが、私にとっての研究の喜びは、そうした散策の道すがらの思いがけない発見をおいてはない。

働く機械と読む機械

フランス革命と近代的主体の成立

教授◆富永茂樹（とみながしげき）



1950年生、1980年京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。知識社会学

新たに到来した社会における政治システムとして代表制を構想するエマニュエル・シエースは、フランス革命がはじまる以前から、社会のなかには2種類の人間しか存在しないと考えていた。「生産者と生産の道具となる人間、知力ある人間と受動的な力しかもたない労働者、教育ある市民と教育を受ける時間も手段も与えられてはいない補助的存在」である。それぞれの区別のうちの後者は別のテクストでは「労働の機械」とさえ呼ばれることになる。生産の道具、補助的存在、労働の機械とは、よくもひどいことを言ってくれたものである。

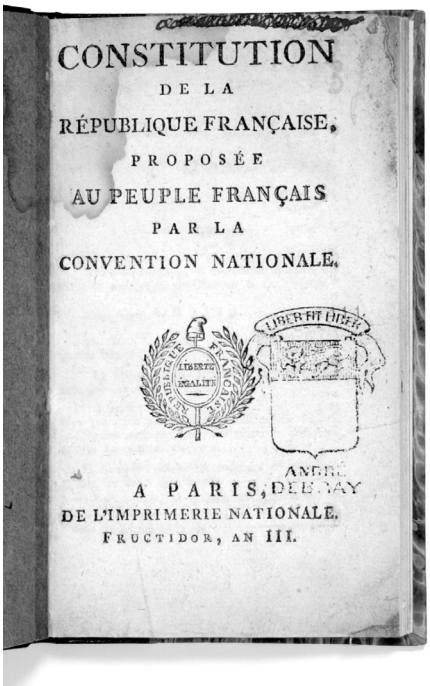
■市民になること

もっとも、労働するだけで精一杯の者にも市民としての基本的な権利、法による人身や所有の保護まで拒まれるわけではない。それどころか「みずからの必要を充たす力のない状態にある市民は、いかなる者も同朋市民の扶助を求める権利を有する」という、今日の福祉国家の理念にまでつながりそうな条文を、シエースは「人間と市民の権利の宣言」の彼自身の草案のなかに挿入していた(『資料 権利の宣言――1789』京都大学人文科学研究所、2001年を参照)。

さらには、さしあたりは政治的代表制に参加できるだけの余裕をもたないいわゆる「非能動市民」も、そうした状態が永遠につづくわけではないと考えられていた可能性がある。同じとき女性には選挙権は認められなかったのだが、シエースによればそれは「現在の状態では」という断わりを付けてのことであった。また彼の同僚議員のひとりは選挙資格をめぐる議会の論議のなかで次のように述べるだろう。「能動市民の資格の獲得は困難ではない。……それはあらゆるフランス人にとって競争心の的、労働の動機、勤勉への刺激となる。」労働する機械と呼ばれながらも、同じ人間ははまさに労働に従事することによって、機械である状態から脱出する可能性をもってもいるのだった。

このような発想が直接に反映したのかどうかはわからないけれども、いわゆる共和国3年の憲法、つまりテルミドールの反動を経て1795年に新たに制定される、フランス革命がはじまってから数えるなら3度目の憲法には、市民の政治参加の資格を詳細に定めた第2編が設けられ、その第16条では「青年は読み書きかつ機械的な仕事を営むができると証明できなければ、市民名簿に登録できない」ことが明記された。

この憲法第2編は他にも精神障害者でない（自身の理性を使用することができる）こと、破産者や奉公人でない（他社に従属しない、自律的な存在である）ことなど、それぞれ興味深い条件をいくつか提示しているのだが、政治権のために読み書きの能力と労働の能力を要求するというのは、近代憲法のなかではごく珍しいことであると思われる。ただし、この条項は共和国12年、つまり8年後から施行されることになっており、5年後にはナポレオン・ボナパルトのクーデタで総裁政府自体が潰えてしまうので、ここで提唱されたことは実施されはしなかったことを付け加えておかなくてはならない。


CONSTITUTION
DE LA
RÉPUBLIQUE FRANÇAISE,
PROPOSÉE
AU PEUPLE FRANÇAIS
PAR LA
CONVENTION NATIONALE.

A PARIS,
DE L'IMPRIMERIE NATIONALE.
FRUCTIDOR, AN III.

第16条で読み書きと仕事の能力を政治権の条件として要求した憲法の扉。最終行に「3年フリュクティドール」とあるとおり、制定されたときの版。筆者蔵。

市民であること、政治的主体となることの要件として働くことが求められているのはすでに理解できるであろうが、読み書きの能力がこれと並べられていることについてはどんな意味があるのだろうか。ここにはフランス革命が18世

紀の啓蒙の理念と密接に結びついたものであるとする発想を明確に見てとれる。あるいは啓蒙思想の最後の世代に属し、啓蒙を革命へとつないだ象徴的な人物であるコンドルセの影を感じないわけにはいかない。

■啓蒙と革命

革命がはじまってまもなく、新しい社会のなかで公教育が重要な争点のひとつとして認識されるにしたがって、コンドルセはこの問題を検討する委員会の中心的人物となって、『公教育にかんする5つの覚書』を執筆し、それにもとづいた報告を1792年の4月を議会で行う。主題が公教育であるかぎりにおいて、まず採りあげられるべきことがらが学校教育であることはもちろんだが、彼は書物を読むことによる「独学」にも目を向けた、あるいはむしろこちらを強調すると言ってさえよい構想をもっていた。

学問によっては、教室で教えなくとも、独りで書物を読んで学ぶことが充分に可能なものもある、とコンドルセは述べる。たとえば数学である。彼はまた『覚書』の別のところで、古代のギリシァやローマの教育と近代のそれとを対比させて、前者の直接民主政のもとでは演説が重要な役割を果たすこととの関連で雄弁術を学ぶことが重視されたが、これは人間の情念に訴えかけるものであるのにたいして、後者の教育では情念よりも理性をそだてまた作動させる読書のほうが有効なコミュニケイションとなるとも語る。さらに93年の逃亡中に書きつづけられ、その死後に出版された『人間精神の進歩の歴史』でも、彼がグーテンベルグによる活字印刷の発明の意義に注目していたことはよく知られている。

ちょうどこれに呼応するかのように、議会では法の作成や周知が口頭による議論ではなく読書をつうじてなされるべきであること、また逆にフランスのように多数の人口をかかえる国（これははじめにふれた政治的代表制を採用するための前提でもある）では、個人の意見の表明は書物その他の刊行をつうじて行えば充分であることなどがことあるごとに主張されていた。これにたいして市民が直接に参加する集会での討論こそが教育にとっても世論の形成にとっても意味をもつと反論する者もいたが、しかし時代の趨勢は活字メディアのほうをいっそう評価する方向をさしていたのだった。

■活字の効用

コンドルセによれば活字印刷は、話し言葉にくらべて、また手で書かれた文書にくらべても、空間的拡がりと時間的持続の点ではるかに大きな情報伝達を実現するものであった。だが活字印刷の利点はそれだけにはとどまらない。活字を読むことは多くの場合「孤独」で「沈黙」した状態でなされるのであり、そのような行為は理性による「冷静で厳しい判断」を可能にするのだと、この哲学者は言う。こうした表現はすでに革命の以前から、たとえばマルゼルブが印刷物の流通をとおして形成される世論なるものの存在を「至高の法定」と呼んで評価したさいに用いていたものを受け継いでいるにほかならない。

同じ頃に『啓蒙とはなにか』のなかで議論することの重要な意義を説くカントもまた、「読書する公衆に向けて、著書や論文をとおして自説を主張する知識人」こそが「理性の公的な使用」を行う「世界市民社会」の一員であると述べて、活字メディアによる議論を推奨するという同じ発想を共有していた。もっとも、このケーニスベルグの哲学者によれば、議論することの完全な自由は啓蒙専制君主フレデリック２世への服従とにひき替えによってのみ保証されるものではあったのだが。

ところで理性に使用にともなう冷静な判断と彼らが言うとき、この冷静は「冷淡」や「冷酷」さらに物理的には「冷たい、寒い」とも言いかえることができる。沈黙し、孤独で、冷却した世界がここに顔を現す。読み書きを行う人間とは、まるで機械のような属性を免れることができないだろう。共和国3年憲法にしたがえば、シエースたちの言う労働する機械は労働することで経済的にも時間的にも余裕を見いだして、市民となり政治的権利を獲得するにいたるとともに、しかし他方で読書する機械、タイプライターのことをフランス語ではmachine à écrire書く機械と言うのだが、これにならうなら「machine à lire読む機械」でありつづけるのである。

18世紀の末にシエースやコンドルセの手で示された人間の姿が、また結局のところ実施されはしなかったが少なくともひとたびは憲法の条文として明文化されたことがらが、多少なりとも近代以降の社会における政治的主体のありようを規定しているのだとすれば、その近代を完全に抜け出せたわけではなく、したがってフランス革命が残した問題の圏域内に依然としてとどまっているわれわれもまた、働く機械、そして読む機械にほかならないことが、この時代のいくつかのテクストと出会うことをとおして明確にわかってくることだろう。

粘土板が語るシュメール社会

シュメール行政・経済文書の研究

1942年生、1968年、京都大学文学研究科博士課程中退

教授◆前川和也（まえかわかずや）

古代メソポタミアでは、記録媒体として粘土板が用いられた。現在までに出土した粘土板は、50万点にもおよぶ。そして出土テキストのなかでもっとも数が多いのは、いわゆる行政・経済記録である。公的あるいは私的な大組織が所有する物品や家畜、奴隷などが点検され、数えられ、また耕地の面積が計算され、耕作に必要な穀物や収穫物が計量されて、粘土板に書きのこされたのである。

最古の粘土板群は、前3100年頃にメソポタミア最南部の都市ウルクで、シュメール人によって書かれたのだが、それらの大部分は行政・経済文書であった。当時のウルクでは、大組織（王宮ないしは神殿）が巨大化しつつあり、文字記録なしでは、その日常的な管理・運営を行なうことができなくなったのである。その後シュメール人は前2000年頃まで南部メソポタミアで都市生活を営むが、シュメール人ほど見事な行政・経済文書をのこした民族は、他にいない。わたしは、これらの粘土板記録を公刊し、あるいは解析する仕事に従事している。

■なぜラガシュ(ギルス)文書か

旧約聖書の淵源をさぐるために楔形文字研究がはじまったという事情もあって、欧米の学者の多くは、出土文書のなかでは、広義の文学テキストを研究対象とした。わたしがこの仕事をはじめたときには、海外ではシュメールの行政・経済文書はほとんど無視されていた。ただ、わが国では京都大学の中原与茂九郎教授（1900〜1988）が、日本人がシュメール行政・経済文書を研究することの意義を、熱意をこめて学生に説かれていた。わたしがシュメール学に足を踏みいれたのは、まちがいなく中原先生の情熱に感動してのことである。

数多くのシュメールの行政・経済文書のなかでは、初期王朝期IIIb （都市国家時代末：前2370年頃）のラガシュ都市国家の主地区ギルス、そして統一王朝時代（ウル第三王朝時代：前2100〜2000年頃）の属州ギルスから出土した粘土板群がもっとも精彩にとんでいる。ラガシュ都市国家は４セトゥルメント（ギルス、ラガシュ、ニナ、グアッバ）が連合して成立したのであって、他都市国家よりは格段に規模が大きかった。そのため、ギルス出土のテキストは、記録内容のスケールの大きさ、記述の精密性といった点で、他都市の文書を圧倒している。げんに、シュメール都市についての古典学説は、都市国家時代末のギルス文書を基礎として成立したのだし、またウル第三王朝時代のギルス文書は、属州がどのように統治されたかにかんして、じつに詳細な情報を与えてくれる。

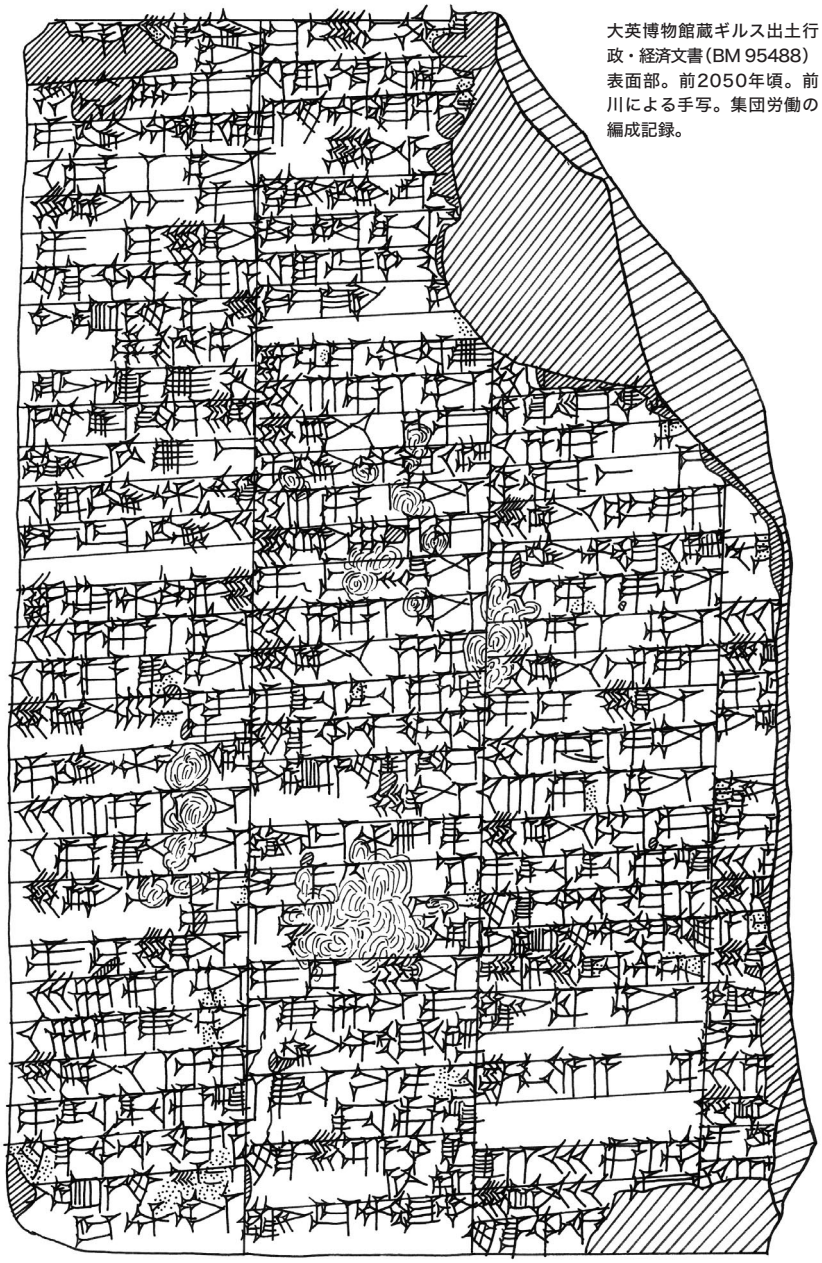
■「発掘」し、手写し、そして読む

古典学説によれば、都市国家時代末のギルス文書は、ラガシュ第二の規模の神殿であったバウ神殿の経営記録であった。そしてシュメール都市では、都市を所有する神家族のために、地上の支配者家族が、神々の「家」（神殿）を管理しているのだという。シュメール都市とは、このような神殿組織の複合体だというのである。けれども、このような理解はまったく誤まっている。わたしは、都市国家時代末のギルス文書に頻出する「バウ神殿」とは、ほとんどイデオロギー上のフィクションであり、文書は支配者妃の「家」の管理記録であると考えている。わたしは約1800枚の既刊テキストを利用して、1970年代はじめにこの結論に到達したのであるが、その後は、この時代のギルス文書はさほど多くは刊行されていない。そしてわたしの主張は、いま世界の学界でほぼ受け入れられているようにみえる。

シュメール統一王朝時代（ウル第三王朝）にかんしては、ギルス、ウル、ウンマ、ニップル、プズリシュ・ダガンの諸遺跡から、無数の粘土板が出土している。そして1970年代にはいると、ウンマとプズリシュ・ダガンの文書が出版されはじめた。けれどもギルス文書、とりわけ大型の粘土板は大英博物館やイスタンブール考古博物館などに死蔵されたままであった。

ちなみに大英博物館は10万をこえる粘土板をもっているが、そのうち２万ないし３万点がウル第三王朝時代のギルス文書ではなかろうか。イスタンブール考古学博物館の約８万点にのぼる所蔵テキストのうち、約５割はギルス出土だという。数があまりにも多いので、テキストが未整理のまま放置されていたのが実情である。

わたしが両博物館の文書庫を「発掘」して、ウル第三王朝時代ギルスの粘土板を調査し、重要な文書を手写できたのは、さいわいなことであった。手写とは、粘土板を白熱電燈で照らしつつ、表面に刻まれた楔形文字サインを、ひとつづつサイズを測定しながら、紙に写しとっていく作業をいう。大きな粘土板は、縦、横ともに30センチをこえる。手写には、忍耐と、そして時間とが要求される。わたしは主として夏休みを利用して、ロンドンやイスタンブールでこの作業に従事してきたのだけれども、この20年間で、約150枚の大英博物館手写テキストを公刊できただけである。ただし、一枚の大型粘土板は、数百枚の小粘土板を書きうつすことで成立するのだし、またたとえ数センチといったサイズの粘土板であっても、記されている情報がたいへん貴重なこともある。わたしは、そのような重要なテキストだけを選び出したはずである。ギルス文書には属州が経営する穀物耕地にかんするあらゆる情報が記録されているし、運河や用水路の建設・修復についての記述も豊富である。みずから「発掘」した文書を利用して、シュメール農業経営の全体像をわたしが解明できたのは、ほんとうに幸運であった。



大英博物館蔵ギルス出土行政・経済文書(BM 95488)表面部。前2050年頃。前川による手写。集団労働の編成記録。

■私的な世界のなかへ

ところで、シュメールの行政・経済文書は、公的な組織の管理のために書かれたのであるから、これを用いては、シュメール人の私的な世界を復元することはできないと思われていた。けれどもわたしは、公権力によって没収された私的財産の明細帳とでもよべるテキストが多数出土していることに、最近になって気がついた。これらの多くは、新王が即位する前後の日付をもっている。新王は、政敵たち、すなわち首都や地方の皇族、有力貴族の財産の没収をはかったのであろう。これらの記録を「発見」したとき、わたしは、私的経済の実態の理解や政治史の復元作業、これまでは不可能と思われていた研究分野に足を踏みいれることができると確信した。

術語と数字が羅列されているだけといってよい、まことに無味乾燥なテキストを読んでいくうちに、わたしは、多くの書記と出あうことができた。書記の書き癖、腕前の違いなどが、しだいに判別できるようになったからである。ところで、わたしは、彼らの心のなかにまで入っていけるのだろうか。その可能性を求めて、そしてもちろん、新しい書記、新しい粘土板とめぐりあうためにも、わたしは、これからもロンドンに出かけていくだろう。

人類学のフロント・ラインを歩く

在日米軍を中心とする軍事共同体の人類学的研究

教授◆田中雅一（たなかまさかず）

1955年生、1986年、ロンドン大学経済政治学院（LSE）博士課程学位取得（Ph.D.）

手元に2つの新聞記事がある。ひとつはロンドンのタミル移民を読者とする『ニュー・ライフ』（1984年9月21日）掲載記事「日本とヒンドゥー教――結びつき」で、簡単な記事とともに調査時の写真が紹介されている（右ページ）。私はロンドン大学の学生で、1982年6月から翌年の11月までのおよそ17ヶ月間、スリランカ西海岸に住むタミル漁民たちの生活を理解するために住み込み調査をしていた。もうひとつは1998年5月、佐世保にある米軍基地に調査に行き、逆取材を受けたときの記事だ（下）。これは国防省の日刊新聞『星条旗新聞（スターズ・アンド・スプライツ）』（太平洋版、5月27日）に掲載された。ネクタイをつけた顔写真で、フォーマルな印象が強い。一方はロンドンのタミル人向け、他方は世界中に駐留している米軍人向け新聞と、われわれの時代を特徴づける地球化（グローバリゼーション）の現象を示唆している。しかし、ここで取りあげたいのは、この二つの調査の間に起こった人類学をとりまく変化だ。

Anthropologist focuses on U.S. bases in Japan

BY GLENN SCOTT
Stripes Sasebo Bureau Chief

SASEBO NAVAL BASE, Japan — U.S. military bases are a well-known part of life in Japan, yet Masakazu Tanaka says researchers have rarely paused to study the obvious.

Tanaka, a cultural anthropologist from Kyoto University, is out to change that. He is busy conducting interviews at all of the major U.S. bases here for what he calls an unusual study of American life in U.S. enclaves around Japan.

He hopes to publish a book on

TANAKA

erless ethnic groups, he said.

The U.S. bases are neither, he noted, and yet they represent a kind of cultural blind spot for many Japanese people, including social scientists.

"We know many U.S. military people are here," he said, "but we don't think that this is a

国防省による『星条旗新聞（スターズ・アンド・スプライツ）』（太平洋版）の第一面を飾った記事。その後三つの新聞に転載され、世界中の米軍関係者から調査協力を申し出るメールが来た。

■タミル人とともに

人類学は研究の典型と言える学問である。実験室や図書室にこもらないで、外に出て資料を収集する。一般に人類学の調査はおよそ1年半から2年の長期に渡っておこなわれるが、そのときわれわれに期待されるのはGoing Native（現地人のようにふるまう）というものだ。

わたしがタミル人漁村をフィールドに選んだ理由はヒンドゥー社会では農村に比べて漁村の調査が手つかずに近い状態であったからだ。農村や巡礼地での調査で論じられてきたヒンドゥー教やカースト制度に関する議論を漁村で検討してみよう。そこに認められるのはきわめてストレートな問題意識だった。

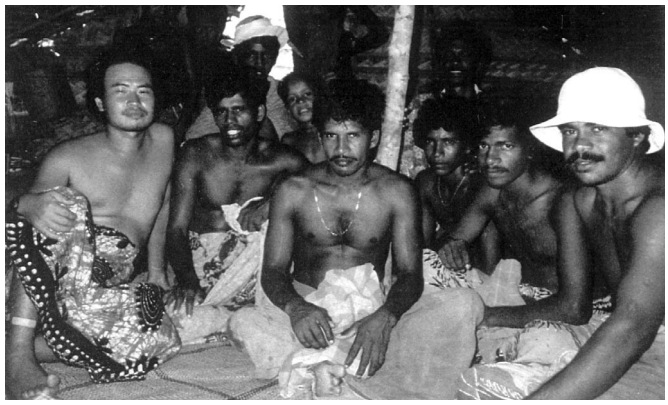
スリランカに住み始めてちょうど1年がたったころ、あの「7月の暴動」が勃発し、およそ5000人のタミル人が虐殺され、かれらがおかれている地位の危うさを痛感することになる。タミル語を母語とするヒンドゥー漁民を対象としていたので、仏教徒が支配的なスリランカの、まさに周辺的世界に目覚めたのである。その後、タミル人独立をめぐる民族紛争とテロ事件が激化し、多くのタミル難民が隣国のインド、さらに第三国を介して北米や欧州へと流れ、ホスト社会の最下層に組み込まれていった。

1988年の暮れ、わたしはフィールドを南インドに移し、高い地位のバラモン・カーストを相手に調査を始める。しかし、かれらも政治経済的にはけっして恵まれた存在ではなかった。なぜなら、南インドでは反バラモン意識が強く、バラモンたちはさまざまな差別を受けてきたからだ。かれらは50年以上前から地方政府と寺院の管理権をめぐって対立を続けていた。

わたしはおよそ20年間にわたってタミル人と付き合うことで多くのことを学んだ。しかし、わたしは、いくつかの困難を感じ始めていた。そのひとつがいわゆるオリエンタリズム批判である。

■サバルタン探しが始まった

オリエンタリズム批判とは何か。それは、パレスチナ出身のエドワード・サイードの主著『オリエンタリズム』から始まった。単純に言えばつぎのようになろう。東洋学（オリエンタリズム）を典型とする異文化を対象とする学問は、西洋の優位さを確立し、またそれを確認するような形で異文化についての知識を獲得し、それを描いてきた。そこに植民地支配を助長・正当化する政治性――たとえば東洋（オリエント）の文明は過去のものであり、その発展は西洋の助けによってのみ可能だ――を認めることは困難ではない。否定的な他者像は、よりダイナミックで日々進歩しているという西洋の自己像を補完し、これを支える。とするなら、当然同じ批判が人類学にも妥当する。オリエンタリズムに陥ることなく他者について語る資格があるのか。この問いに自信を持って「イエス」と答えられる人類学者は少数であろう。ただ、以下の二つの反論が考えられる。



『ニュー・ライフ』の記事に転載されたスナップ写真。私はパテッィクの腰巻きをつけ、上半身は裸。

人類学のフィールドワークはけっして一方的なものではない。西欧で生まれた学問用語で装備していたとしても、われわれの考え方の偏りがフィールドで出会う他者との交渉を通じて変化していく可能性が存在するからだ。

もうひとつは、声なき人々の存在である。人類学がかつて「未開社会」とみなされた第三世界以外で調査する場合でも、そのフィールドは、農民や都市の低所得者層、あるいは少数民族などの周縁に位置する人々である。同じ理由から女性や身障者、同性愛者なども研究対象に含まれる。私の調査したタミル漁民や司祭はその典型である。グラムシに由来する最近の流行言葉を使用するなら、人類学が追いかけてきたのはサバルタンだった。この流れは、当該社会で抑圧されている人々の声を代わって、代弁しようとするのが人類学であるという主張へとつながる。彼らがわれわれ人類学者の介入を求めているのだから、オリエンタリズム批判は見当違いだ、というわけだ。

しかし、ほんとうにこの二点は反論になっているのか。フィールドワークでの交渉的関係の経験はその通りだとしても、最終的な成果はこうした貴重な経験を隠蔽したり、否定していないだろうか。また、サバルタン自身が、代表・表象する人類学者を求めていると想定することこそ一方的な権力関係に基づく思いこみでしかないのではないか。そして当該社会の複雑な権力関係を無視することにならないだろうか。

■軍事人類学の構想

以上の問題意識から、在日米軍基地をとらえ直すと、軍関係者をサバルタンと呼ぶことははばかられる。世界最強の軍隊は、おおいに自らを語る術を持ち合わせている。もちろん、だからといって基地研究がオリエンタリズム批判の克服になるとはかぎらない。だが、すくなくとも自覚ある人類学者がこぞってサバルタン探しのゲームに参加し、実現不可能な解決を書き散らすといった閉塞状態から人類学を救い出すことができるのではないか。

最後に基地調査について私の問題意識を紹介したい。まず言えることは、わたしたちは在日米軍だけでなく軍隊についてほとんど何も知らない、ということだ。私たちの米軍についての知識は、軍事、政治（協定）、そして基地周辺の風俗やスキャンダルについてのマスコミ報道にかぎられている。わたしは基地に足を運び、取材を重ねることで、基地に住む女性兵士と軍人の妻との比較、軍隊特有の定期的な移動、基地内にある大学のカリキュラム、イスラームのイマームを含むさまざまな聖職者（従軍牧師）たちの活動、日本各地への観光、基地内の新聞などに注目してきた。これらはいわばマスコミが無視してきた基地の日常生活を垣間見せるものである。そして、その各々がジェンダー理論や政教分離問題へと展開することになった。

人類学の方法も対象も、そしてさまざまな支配的パラダイムも刻々と変わっていく。そのなかで、いかにしてオリエンタリズム批判に真摯に取り組み、現実から乖離することなく、理論的な問題に取り組むことが可能か。開発人類学や観光人類学といった分野は、このような意識のもとで近年生まれてきた。いままさに始まろうとしている軍事人類学anthropology of militaryという分野もいつの日か市民権を得ることを切に望みたい。

文献学のダイナミクス

ヴェーダ文献の生成と伝承の研究

教授◆藤井正人（ふじいまさと）

1954年生、1986年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学

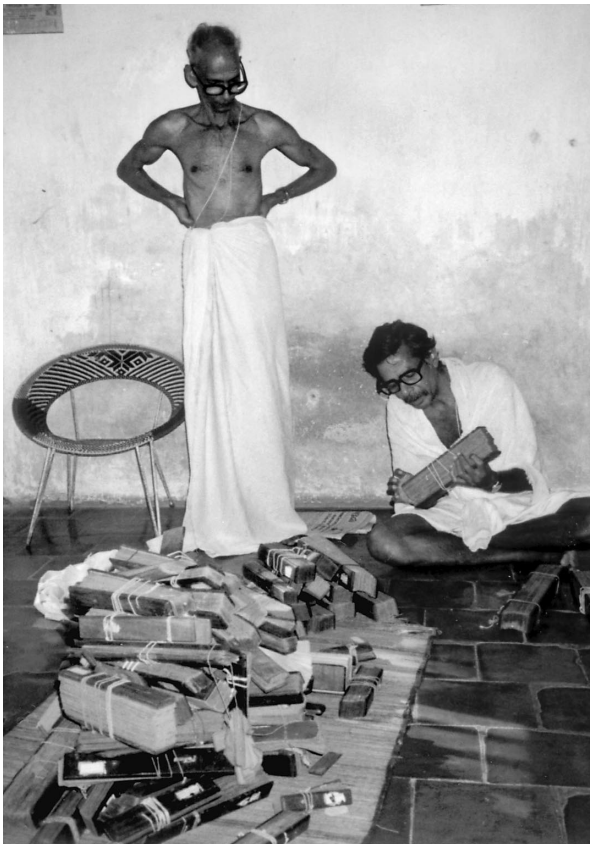
どこか遠くの寺院の拡声器から流れてくるのか、夜明け前から始まった単調なメロディーの宗教歌で目を覚ました。このインドの小さな村をくり返し訪れるようになって十年以上にもなるのに、いつも到着の翌朝には、異境への流浪感とでもいうような感覚を覚える。この感覚は、日本からこの南インドの村に到達するのに数日を要するという地理的な隔たりだけからくるものではなかった。古代インドの文献を研究する中で次第次第に深く入り込み、巡ることになったインドの文献文化のジャングルの時間と空間の広がりが、古代の北インドの平原から現代の南インドの山あいへとつづいていて、その広がりが自分をこの異境の土地へ連れて来たという思いも、この感覚の中に含まれていた。

■ウパニシャッドからサーマヴェーダへ

ヴェーダと総称される古代インドの宗教儀礼文献の中に、サーマヴェーダという祭式歌詠を主題とする文献群がある。十数年前、最も古いウパニシャッド(哲学書）かもしれないという漠然とした思いから取り組み始めた一つのテキストが、たまたまサーマヴェーダという特殊な文献群に属していたことが、その後の研究を思わぬ方向へと向かわせることになった。そのテキストは、語句の意味は何とかわかるが内容がさっぱり理解できない奇妙なしろものであった。謎めいた言葉や、何かを暗示するかのような文章で満ち満ちていた。たとえば、次のような一節がある。

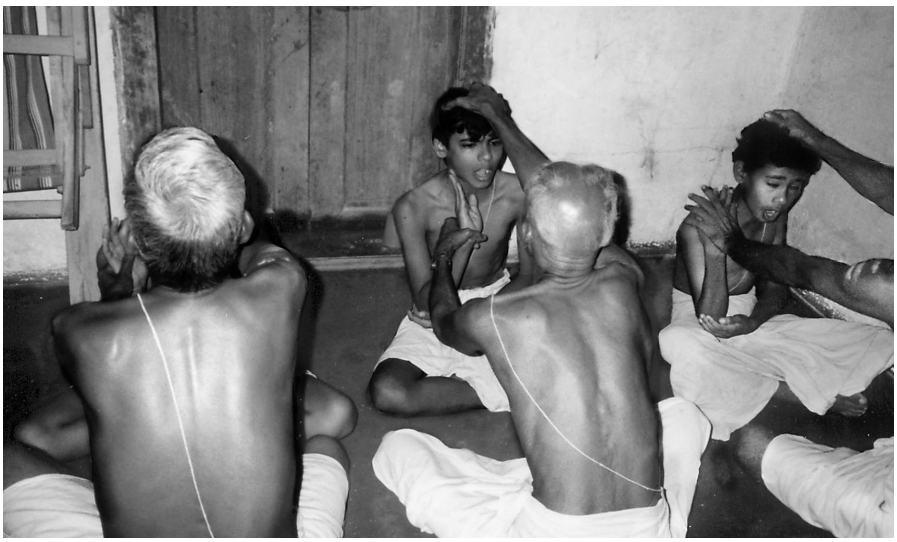
「(ケーシン・ダールビヤ王は死んだ伯父に森の中で出会う。王は生前と同じ姿の伯父を抱擁しようとするが、伯父のからだは煙のごとくとらえることができない。）彼（王）は言った、『以前にあなたがもっていた姿を、あなたはいま持っている。それなのに、私はあなたを抱擁しようにもとらえることができない』と。『そのとおりだ』と、[伯父は］言った、『歌詠を知るバラモンが、私のために歌詠を歌った。身体のない歌詠によって、彼は私の身体を振り払った。その歌詠を知る者がひとのためにその歌詠を歌うと、彼はそのひとをまさに諸神格と同じ世界に赴かせるのだ』と。」

ここに語られている「身体のない歌詠」とは何なのか、テキストには何の説明も書かれていない。ある種の特殊な歌詠に関係していることは予想できたが、はたしてそれが何かが特定できなかった。同じように、多くの箇所が曖昧模糊としたまま残された。このテキストを正確に読解するには、テキストの背後に存在する事実を探りあてるよりほかはないと痛感して、このテキストが属するサーマヴェーダという文献群と、その文献群が関係する祭式歌詠について研究することに意を決した。このようにして、もともとの専門であるウパニシャッドのほかに、サーマヴェーダをも研究するようになった。また、サーマヴェーダの歌詠が行われた古代インドのヴェーダ祭式をも研究の対象に加え



伝承者の家に保存されているヴェーダ写本の山。現地の現代文字で書かれているが、言語は古代のヴェーダ語。写本の素材はシュロの葉。（1985年撮影）

た。ウパニシャッドからサーマヴェーダ、そしてヴェーダ祭式へと研究の幅を広げることになったが、そのことによって、最古のウパニシャッドとその哲学思想が、先行する祭式文献やそこに現われた祭式をめぐる思弁と深く結び付いていることを、具体的な祭式の事例を通して明らかにすることが可能となった。(ちなみに、上述の「身体のない歌詠」は、古代インドの宗教歌詠に起こったある変化に関係していた。すなわち、本来、歌詞をのせて歌われるべき歌詠から、実際に詠唱される祭式の場において可能な限り歌詞を取り除こうとする動きが起こり、ついにはある種の歌詠では、すべての歌詞を捨て去り、歌詞に代わって、ある一つの音だけで歌詠を歌うことが行なわれるようになった。この新しい神秘的な歌詠法の秘義を、死者が現世の身体を離れることに関連づけて語ることが、先の一節の趣旨だったのである。)



サーマヴェーダの伝授。手と上半身の動きは歌詠の個々の音調に対応していて、身体を通して複雑で長い歌詠を正確に覚えていく。このような伝授はこの村では今は見ることができない。(1985年 撮影)

■現存サーマヴェーダ伝承

研究の範囲はさらに、古代から現代へ、北インドから南インドへと、時間と空間の上でも広がることになった。古代に北インドで成立したヴェーダは、その後、三千年にわたって写本と口承によって連綿と伝えられ、細々とではあるが今も広くインドの各地で伝承されている。しかしヴェーダの伝承は近年急速におとろえ、特に前述のウパニシャッドが属するジャイミニーヤ派サーマヴェーダの伝承は、南インドのいくつかの土地でわずかに存続しているだけである。このウパニシャッドのテキスト校訂のために新たな資料を得ようと、はじめてタミルナードゥ州とケーララ州の伝承地に入ったのは十六年前。幸いそこで未知の写本を複数入手することができたが、同時に、ジャイミニーヤ派サーマヴェーダの伝承そのものが消滅の危機にあることも知った。写本の多くは朽ちるか散逸するかし、口承も、今は亡き極めて高齢の数人の学匠たちのみが全体を保持し、やはり高齢の彼らの弟子たちが部分的に伝承を受け継いでいるだけになっていた。細々と続いていた次世代への伝授もその後すぐに完全にすたれてしまった。そこでそれ以来、海外の研究者とも協力しながら、現存のサーマヴェーダ伝承を総体的に調査しつつ、写本などの文字資料の収集と、実際の歌詠行為の録音と録画を継続的に行なってきた。ヴェーダの他の分野に比してサーマヴェーダの研究は著しく遅れていたが、このような現地での継続的な資料収集の成果を踏まえて、複数の専門家による本格的な共同研究が、近年ようやく開始される運びとなった。それぞれが独自に収集したオリジナルの資料をもとに、それらを統一的に整理し編集することによって、サーマヴェーダの基礎資料を集成することを目的とした研究プロジェクトが立ち上がったのである。

■ヴェーダの生成と伝承

このサーマヴェーダの共同研究と並行して、現存のヴェーダ伝承の総合的な、より広い範囲の調査と研究を目的とした国際共同研究が発足し、それにも加わることになった。各々が専門とするヴェーダの伝承を同時並行的に調査・研究し、その成果を総合することによって、現代のインドで急速に衰えつつあるヴェーダ伝承の現状を把握し記録するとともに、広範な最新の情報に基づいた、各伝承の継承過程と各伝承間の関係に関する基礎データを提供することを意図している。この共同研究の成果と、碑文などに基づくヴェーダ伝承の史的研究とが統合されることによって、ヴェーダの伝承プロセスに光があてられることになるだろう。かくして今後の研究の針路は、ヴェーダ文献の成立史研究と現存ヴェーダ伝承の研究を有機的に結び合わせることによって、インドの基層文化の一つであるヴェーダの生成とインド各地への伝播と、古代から現代に至る伝承と変化を動態的に研究するダイナミクスの方向へ向いている。

植民地支配と「人の支配」

近代朝鮮の政治と社会

教授◆水野直樹（みずのなおき）
1950年生、1981年、京都大学大学院文学研究科博士課程修了

朝鮮に対する日本の植民地支配については、これまで土地・農産物の収奪、鉄道の開発など、経済的な側面から分析・考察する研究が盛んであった。あるいは、民族運動に対して日本がどのように対応し弾圧したか、を解明する研究が行なわれてきた。

しかしながら、植民地を支配する以上、そこに住む人々をどのように支配・管理するか、という問題が当然出てくる。住民をいかに把握し管理するのか、あるいは、人の移動に対して、どのように対応するのか、植民地支配の成否はこの点にかかっていたといってもよい。植民地支配末期に行なわれる労働者の動員や徴兵などもこれに関わっている。このような「人の支配」と呼ぶべき問題に関する研究はこれまであまり盛んではなかった。

最近、私が取り組んでいるのは、この「人の支配」をさまざまな側面から解明するという課題である。

■日本型戸籍制度の導入

「人の支配」という面でまず考えられるのは、植民地住民の登録である。朝鮮を完全な植民地として支配することになる「韓国併合」（1910年）の前年、当時の大韓帝国政府に「民籍法」を制定させて、1909年から10年にかけて民籍の編製を行なった。これは、日本の戸籍制度を導入したものと考えられているが、内容的にはまだ日本の戸籍とはかなり違いのあるものであった。民籍の様式は、当時の日本の戸籍にほぼそのままならったものであったが、日本では「族称」（士族・華族など）欄があるのに対して、朝鮮の民籍には「本貫」（父系氏族発祥の地名）欄が存在していた。

当初民籍を作成した際、女性については名の記載は省略して、本貫と父姓を記すだけでよいとされた。それ以前、奴婢出身者を除く成人女性は戸籍に名を登録されることはなく、日常生活でも、「誰々ちゃんのお母さん」というような呼び方がされ、個人名を呼ばれることがなかったからである。

さらに、奴婢出身者については、独立の民籍を作らず、主人の家の民籍の後に「附籍」という形で記載するなど、日本の戸籍制度とは違いが見られた。

しかし、日本側は朝鮮の住民を不完全な内容でも民籍に登録することによって、人の把握を容易にしようとしたのである。民籍簿は、抗日ゲリラである義兵を弾圧する際にも、一般住民とゲリラ容疑者を判別するために利用された。

日本側は、朝鮮人の民籍を編製した上で、これを実態に合わせて整備していく作業を進め、1923年に朝鮮戸籍令を施行した。これによって日本型の戸籍制度の導入が完了したと考えることができる。

■植民地支配秩序の基礎

植民地に戸籍制度を導入し、住民の登録を行なったのは、植民地支配を維持するためであった。個々の住民の身分関係を把握するにとどまらず、植民地支配秩序の中で支配者／被支配者の関係を維持・固定化することにも戸籍は使われた。

日本「内地」戸籍に登録される者が「内地人」（＝日本人）であり、朝鮮戸籍に登録される者が「朝鮮人」であるとされ、相互の戸籍移動は原則として禁止されていた。戸籍が厳密に分けられることによって、支配者としての「内地人」、被支配者としての朝鮮人という上下関係が法的に保証された。植民地朝鮮では、日本人と朝鮮人とでは異なる法律が適用される場合もあり、官吏・教員などの給与、教育、就職その他さまざまな社会的関係において、差別的な支配構造が厳然として存在していたが、その基礎にあったのが戸籍の違いであったのである。

■日本人風姓名の禁止

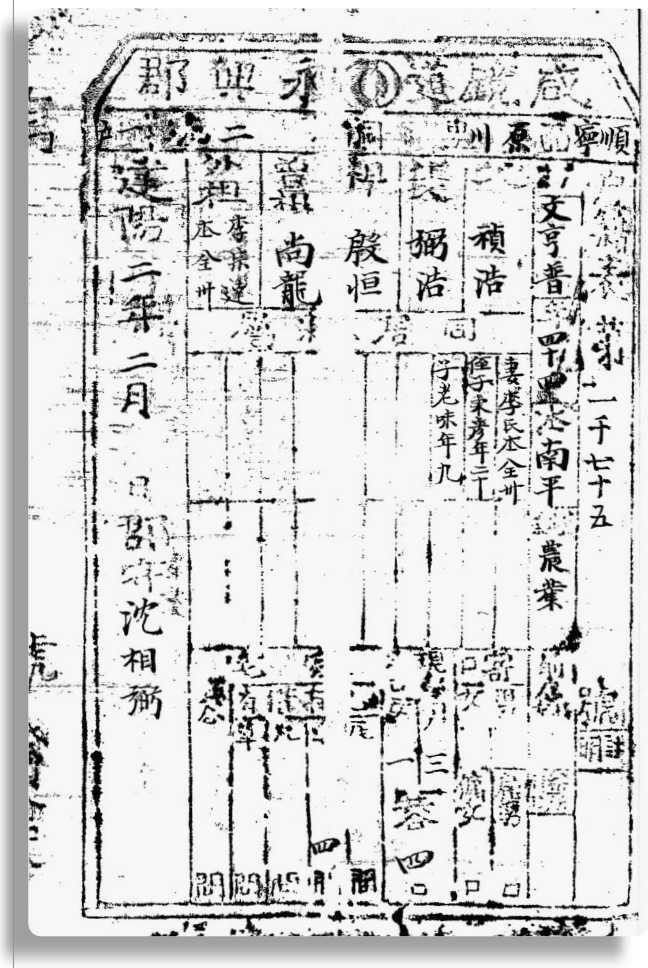
民籍あるいは戸籍に記載される朝鮮人の名前に関わっても、日本側は「人の支配」を目的とする政策をとった。朝鮮支配と名前というと、「創氏改名」がよく知られ、中学校の歴史教科書にも記述があるが、「創氏改名」が実施された1940年までの名前に対する日本

の政策についてはほとんど知られることがない。民籍や戸籍のあり方を調べているうちに、私自身も意外に思う事実を「発見」した。「創氏改名」以前、日本当局は朝鮮人が日本人的な姓名を名乗ること、正確には民籍・戸籍上の姓名を日本人風のものにすることを禁止していたという事実である。

その経緯をさらに追求していくと、「韓国併合」直後に一部の朝鮮人官吏・警察官などが自分の姓名を日本人風の姓名に改め、それを民籍に登録したのに対して、朝鮮総督府当局は、これを禁止する措置をとった事実が明らかとなる。1911年に制定した朝鮮総督府令で姓名改称を許可制にし、その運用に当たっては朝鮮人が「内地人〔=日本人〕ニ紛ハシキ姓名」に改めようとしても、それを許可しないという方針を打ち出したのである。すでに日本人風の姓名に変えている者に対しては、元の朝鮮名に戻すよう圧力をかけ、さらに新たに生れた子どもに名をつける際にも、「内地人ニ紛ハシキ名」をつけさせないという方針で臨んだ。

しかし、そもそも日本人の名前というが曖昧なものであったため、日本人の名前、朝鮮人の名前の境界線をどこに引くか、は当局者を悩ませる困難な問題であった。その後も、「内地人ニ紛ハシキ名」をめぐっては民籍（戸籍）実務者から数多くの疑義が出されている。

植民地当局が日本人的姓名を禁止したのは、日本人と朝鮮人との識別を容易にするためであった。日本人と朝鮮人とでは、顔かたち、皮膚の色などでは識別ができない上に、名前まで同じようになると、区別ができなくなってしまうおそれがある。日本人と朝鮮人との間には、戸籍の違いにもとづいて法的な処遇その他の点で区別・差別がなされていたが、それを容易になし得るものとして名前の差異化が図られたのである。



1897年に作成された朝鮮の戸籍。妻には名が記されておらず、子は「老味」（ノミ=奴）と漢字の当て字で幼名が記されている。（京都大学総合博物館所蔵）

■固有語名の制限

名前に対する政策でもう一つ興味深いことは、朝鮮総督府当局は漢字語でない朝鮮の固有語による命名を制限したことである。植民地支配以前の時期、子どもの名前（幼名）や奴婢の名前には固有語によるものがかなり見られた。例えば、女子では「アギ」（赤ちゃんの意）、男子では「トル」（岩の意）などが多かったが、中には「ケットン」（犬の糞）とか「ノミ」（奴）とかの名前が漢字の当て字で戸籍登録されている者もいた。成人になると、男子は改名し、女性は名を名乗らない、というのが朝鮮の慣習であった。

「併合」直前に民籍を作成した際には、日本側はこのような幼名を認め、ハングルで記載することも許可したが、その後、これらの名前は「名ト認ムベカラザル称呼」であるとして、民籍・戸籍への登録を許可しない方針をとった。ハングルによる登録も認めないこととした。

「名ト認ムベカラザル称呼」とされたものの多くは、朝鮮固有語による名であったが、それは何を意味するのであろうか。名前に個人識別の機能を持たせるという目的もあったが、私はそれだけではないと考えている。漢字名であれば日本人にも字義がわかり読むこともできるが、固有語名だと日本人にはその意味を理解することが難しい。被支配者である朝鮮人同士では意味がわかっても、支配者である日本人（警察官や学校教師など）には理解できない名があるという状況は、支配秩序を維持する上で問題だ、と日本当局は考えたのではないだろうか。

植民地支配下で「人の支配」を実現することは、支配対象者の存在のあり方や文化をも規定し変えていくことになったといえよう。名前に対する政策はそのことを象徴的に示すものである。

「知のトポロジー」を求めて

近代東アジアにおける日本の法と政治

教授◆山室信一（やまむろしんいち）
1951年生、1975年、東京大学法学部政治学科卒業

「近代日本とは世界にとって、アジアにとっていかなる存在であったのか。その思想的存在意義とは何でありえたのか」という、きわめて素朴で茫漠とした、それゆえに同時にまた根源的でもありうる、この問題意識がわたしの出発点であり、最終的に明らかにしてみたい研究課題である。

この近代日本の思想的位相をアジアを含む世界史の展開のなかで、いかなるものとして捉えるかという問いには、近代という時間の継起とアジアそして世界という空間の広がりとがいかなる連関性をもっており、この二つにして一つの問題を、思想はいかに捉えることが可能かという問題性が孕まれている。この一見、抽象的とも響く課題は、しかし、例えば近代日本の思想史に則してみれば、文明開化の論理とそれに対する国粋保存主義の思想的対抗として提起されてきたことがらでもあり、あるいはポジ像としてではなくネガ像としてならばアジア主義や“近代の超克”ないし“世界史の哲学”の議論として容易に想起されることがらであろう。

もちろん、それらが直面し解こうとした課題とわたしにとっての課題とは、時代も空間のありかたも異なった思想的布置状況に置かれている以上、同一ではありえない。あるいは、「問いを立てることができたとき、解答の半ばは見出されている」という先人の言葉が正しいのならば、問いをいかに立てうるか、という問いを問い続けているに止まっているというのが実状であるというべきであるのかもしれない。

■欧米－日本－アジアをめぐる思想連鎖

とはいえ、近代日本が欧米やアジアにいかに係わってきたかについては、たとえば、近代世界を17世紀以降の西欧に生まれた主権・国民国家という国家間システムが、全地球を覆っていった過程と看做し、その相互交渉のなかで生じた思想的軋轢や同化さらには異種交雑のありようなどを辿ることによって、事象の一面を捉えることができるのではないかというのがわたしの想定である。しかも、主権・国民国家とは国制であることによって、それを定礎し運営するための制度知を必要とするとともに、また国民統合の体系であることによって、自らのアイデンティティーを弁証するための歴史や文化、空間認識などについての学知を必須の要因と成立している。この主権・国民国家形成と近代諸学の制度化の絡み合いが、いかなる欧米やアジアとの相互交渉のなかで生じ、それがいかなる波及効果をもたらしてきたのかを明らかにすることは、上記の課題に接近するためのひとつの方法とはなりうるはずである。

そこで、これを検討するひとつの視角として設定したのが思想連鎖であり、具体的には、これを留学生・お雇い外国人教師・トランスナショナルな結社そして翻訳・演説などの媒体さらには植民地統治などを回路として進められてきたものとして分析している。

その思想連鎖において重要な分析対象となるのは、欧米においてもけっして一様ではない主権・国民国家形成において、日本がどの国を模範国として、またいかなる理論に準拠することによってそれが可能となったかを明らかにすることであり、さらにその日本がアジアのなかで欧米からの思想連鎖の結節環として現出してくる過程とその特徴とはなにか、という問題である。この点に関して、清末・民初の中国における日本留学生と日本人お雇い教師（日人教習）を担い手として進められた制度形成のためにいかなる法典の翻訳がおこなわれたのか、またそれらを支えた法政理論が日本でのいかなる講義録や著作・論文などに準拠していたのか、などの関連について調査と分析を現在は進めている。特に、法政大学速成科や早稲田大学清国留学生部などの講義録をもとにした『法政彙編』や『政法講義』などの刊行物と日本留学生が帰国後に各地で設立した法政学堂の講義録などとの比較を行うことに関心があるが、今のところその史料の発見が課題となっている。

■思想連鎖と植民帝国・日本のなかの満洲国

そして、この日本の法制に準拠して推進された清末・民初の制度形成と明治法政学の継受は、辛亥革命にも

拘わらず、法典の欠如ゆえに援用されて中華民国を経由し、そこから分離・独立したとされる満洲国へとさらに準用されていくことによって、数奇な運命を辿っていったが、その統治様式や制度がいかに遷移（succession）し、その担い手がいかに周流（circulation）することによって総体としての植民帝国・日本が形作られていったのかを改めて位置づけ直すことが、わたしにとってのもう一つの重要なテーマである満洲国研究の課題である。この課題については、満洲国建国とともに、既存の植民地であった台湾や朝鮮からいかなる制度や担い手が流入したかをすでに検討しており、今後は満洲国から蒙古や中国の淪陥地区そして大東亜共栄圏への流出の実態を明らかにしていくことになるが、特に蒙古から新疆さらに中央アジアへの拡張を視野に入れて促進されたイスラーム研究やトゥラン民族運動との関連などについて埋もれた史実が次第に判明してきている。

さて、こうしたアジアにおける日本の国制や法政理論、さらには諸学の展開を跡づけていくと作業と並行して行わなければならないのは、日本の主権・国民国家形成においていかなる事態が生じたのかについての理論および実態についての多面的な検討であり、そもそも国民国家と近代デモクラシーそのものがどの程度の普遍性をもつものか、という次元にまで立ち戻って考え直す段階にきていることも、また間違いない。

「妹背山婦庭訓」で雛鳥に扮した快楽亭ブラック（左）。彼は講談師として欧米の社会や風俗の実態を語りかけた。

しかしながら、この点については、たんに「新たなる帝国」の時代の到来を予言するだけでは、理論的には、おそらく不毛に終わるであろう。そのため、国民国家と植民帝国としての二重性をもった明治国家についての概念的な整理が必須の課題となっており、国民国家としては幼態成熟ではありながら帝国的国家構成を採った日本の国制展開の歴史的意義について私見を提示していきたいと思っている。

以上のような諸問題についての新たな視角による検討や概念的整序とともに、そうした対象についての史料の整備と刊行も併せて進める必要があるが、そのひとつとして、近代西欧の知のありかたを日本社会に初めて体系的に紹介し、そこにおける知識人や知識社会のありかたを示して「近代」像の形成に大きな影響を与えたものとしてきわめて重要な『明六雑誌』の本文を校訂し、注を付した文庫版として提供する作業を十数年にわたって行ってきており、できるだけ早く43号全てについての公刊すべく期している。

■もう一つの思想空間としての大衆演芸の世界

しかし、他方、『明六雑誌』に典型的に示される啓蒙思想活動などの欧米からの水平的な知の将来によってのみ近代日本の主権・国民国家は形成されたわけではない。むしろ、重要であったのはこうした欧米の実態を見聞したり、外国語を修得して翻訳などをおこなった官僚や留学生たちによってもたらされた欧米近代についての情報を、垂直的に伝達したトランスミッターとしての役割を果たした人々の存在であり、そこにおける知の循環の実相である。この局面については、イタリア歌劇やイギリス小説などの翻案ものによって資本主義社会の現実と日本社会への警告を語った三遊亭円朝などの落語家、松林伯円やイギリス人快楽亭ブラックなどの講談師たちの活動に関心をもって史料を蒐集してきた。そして、このような伝統芸能などを媒体として、新たな知識や世界についての情報を津々浦々にまで普及させたのは、日本だけに限らずヴェトナムなどにも見られたものでもあることなどに留意して、今後はさらに類似の現象を捜しながら、そこに見出される異同を明らかにしつつ、オーラル・メディアが思想空間を創り出していく意味についても考えていきたい。

こうした研究の総体としてわたしがめざしているのが、「知のトポロジー」とでも名付けるべき研究領域である。

文明の中のいのちのかたち

前近代日本の文明史的研究

教授◆横山俊夫（よこやまとしお）
1947年生、1983年、オックスフォード大学大学院 D. Phil.（近代史）

文明とは、社会がたんに緻密に編成されているだけの状態ではない。古く『易』に出るこの語は15世紀日本の年号にもなった。ものごとが天地人三才にわたり文（あや）をなし安定して光明をはなつのが文明である。そして文をなすかたちが礼。偶然にも近代西欧語のシヴィリザシオンが、シヴィリテの観念を核にもつのと共通。ただ後者は、天地にわたるよりも人に偏る。

■地球規模の文明化がまたれている

古典的な文明観をあえて活かそうとする筆者の立場から見て、産業革命以降「文明」と称する社会は、その名に値する体をまだなさない。いずれも安定より変革、礼より武断をこととして勝者のみ輝き、かかわったいのちの多くを闇に置いてきた。新世紀の人類の課題は、自ら手にした強すぎる技術の制御も含め、いかに地球規模の文明をもたらすかにある。それには工業化以前の18、19世紀の日本の人びとのいのちのかたちが、人類史上貴重な事例として浮かび上がりそうである。生産、消費、情報すべて細かく抑制されながら、闇一色ではなかったからである。

1859年英国刊の『エルギン卿遣中日使節録』に浅草群集図がある。通商条約交渉を終えた使節一行が浅草寺に出かけると、老若男女が所せましと詰めかけた。その群集の「礼儀正しさ」と「明るさ」に驚き描かれたもの。卿は妻への手紙で、西欧ではそのような振舞いは莫大な富をつぎ込まねば身につかないと評した。

ところで「礼儀作法」は和製の四字熟語。敬意を表わすしぐさ、話法、文づかいなどのうち、望ましいとされた型を言う。敬う対象には、人のほか、神仏や生きもの、うつわも含まれる。作法がかなえば、その場の人やものの高低親疎が定まり、当事者に和楽をもたらすとされた。中国の礼制が「天子」以下、支配層の宇宙論的序列化のための厳格な差別を主眼に展開し、庶民とは長く無縁であったのに比べ、日本の礼儀作法は、そのような儀礼とも遠くでつながりながら、私的なつきあいを洗練させる型として行われ、15世紀以降、階層を越えた広がりを示す。とくに17世紀末から各地に作法熱が出現、「日本ハ礼儀敦厚ノ君子国」との自慢も飛び交う。長崎の西川如見によれば、「公家武家の礼法」に倣おうとの町人の動きは「ついに一国の風俗となりゆく」ほどであった。

■天地人があやをなすための手引き

じつは、文（あや）をなす生きかたを当時の人びとに指南した書物が２種あった。対人の礼、とくに書き言葉については『節用集（せつようしゅう）』が、天地神仏への礼は『大雑書（おおざっしょ）』が教えた。前者は江戸期に四百近い版が作られ、後者も同時期に百を越す版が確認されている。多くの場合、両書ひと組で読者に三才和楽の作法を示した。

節用集は15世紀来のイロハ引き和漢辞書。17世紀に出版が本格化。巷で漢字語を雅につづる必要が増すにつれて内容もふくらみ、18世紀には、小笠原諸礼、立花や茶の湯指南、手紙文例から名乗り字選びまで載せ、日用百般の礼法書となる。

大雑書は、陰陽家の新旧の伝を大胆に箇条書きした刷り本として17世紀はじめに登場。干支や二十八宿などの暦注解説から、大歳や豹尾といった「星の精」の方位、旅立ちの日選びや男女相性占いなどをかかげた。さらに17世紀末からは、年中行事や各種運勢判断も加え、しだいに、あらゆる「怖い」神がみを怒らせない作法の百科となる。これらの書物は、全国の町在や浦に必ずいた役方や物知りの男女に活用された。

■手引き書の下小口の手沢がかたる

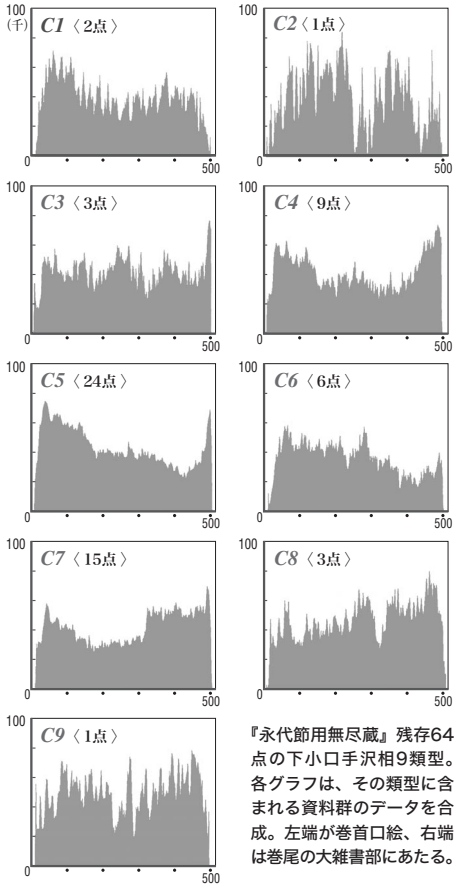
今それらが各地の文庫に眠る。手にとれば、かつての持ち主や周囲の人びとのこだわりが、１冊ごとに異なる手ずれの痕となって残る。数年間の調査で、『永代節用無尽蔵』が19世紀にもっとも広く利用されたものとして浮かび上がった。1830年代に大冊化をとげ、大雑書記事も巻末に充実させた総合作法書となる。その各地残存諸版数十点を対象に、それぞれの下小口の中程が示す手ずれ痕の濃淡分布を精密撮影したものを

節用集各種。大冊の口絵には吉野や富士がよく載せられた。前列右『永代節用無尽蔵』1831年版、左1849年版。下小口の手沢が使用者のこだわりを物語る。

スキャナーで計量化、データベースを作成。それをコンピューターで各丁下端の濃度累積値グラフに変換、各グラフの形状差を、旧蔵者の生業を伏せたまま純数理的に解析、分類してみたところ、９類型が抽出された。うち、特徴を検討できるだけの事例数をもつ６類型を、つぎのように名付けた。「寡筆尚古型」「中筆持古型」「多筆崇雅型」「多筆不古型」「中筆喜仏型」「多筆洒脱型」（右図では順に、*C3, C4, C5, C6, C7, C8*）。いずれも使用者の階層や活動地域との相関は低い。

さてこれらの類型のうち、数の上では、「多筆崇雅型」と「中筆喜仏型」が目立った。前者は最上級好み。歌仙や武仙にあこがれ、自ら神仏になりたがる。陰陽道とも広くつきあう。後者は、あの世思い。雅の世界に興味をもつが、つつしみ深く、自足洗練をこととする。陰陽道の一部に実用上の関心を示す。

文明史の観点から注目されるのは19世紀半ば。そのころ、「多筆崇雅型」と「中筆喜仏型」とが数で均衡するだけでなく、他の四類型も共存している。やがて「多筆崇雅型」が他をしのぎ、日本社会は深い変動期に向かう。



『永代節用無尽蔵』残存64点の下小口手沢相9類型。各グラフは、その類型に含まれる資料群のデータを合成。左端が巻首口絵、右端は巻尾の大雑書部にあたる。

■明るさを支えたしくみをさぐる

節用集と大雑書が、雅語選びから占いや呪(まじな)いにいたるまで、いわゆる「御所風」を勧めたことはたしかである。筆者のいう前近代日本の kugefication の流れに棹さすものであった。ただ当時の人びとは、それによって一色には染まらなかった。記録や伝承によれば、これらの書を喜ぶ多数にまじって、笑う仁もいた。両書が説く躾(しつけ)は、逸脱者を闇に追う硬さをもたなかったといえる。「当流無礼法」や「道化節用」といったもじりの滑稽が、雅俗の明るい共存を助けている。

そこで、文明史の観点からは、これらの書物が作法を伝えたしくみの解明が重要となる。以下のような仮説を検討中である。まずそれは、いわば幕の内弁当式ではなかったか。つまり好みにこだわりつつ全体も見わたせ、自分の位置をも納得するしくみ。これは国を挙げての最敬礼訓練のような型嵌めの対極にある。そのうえ、根幹にあった陰陽五行説による相性相克思考も、好みをそだてるのに役だっていたであろう。何事につけ、個の属性より組み合わせの質を問うからである。あるいは、良きことばとは「おりふしとむかふ人による」と安原貞室が説いたような、いわば時処位目利きという当時の都会の習いも、この傾向を後押ししていたか。それは、雅俗を測るに単純な物差しを押しつけない姿勢であった。

いのちを活かしやすい手引き書と、それが利用されるにふさわしい環境がそろっていたと言えそうであるが、より詳細な調査が、とくに「中筆喜仏型」の事例を中心になされなければならないであろう。

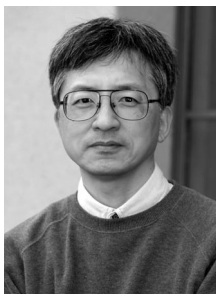
■地球文明論へ

かつて陰陽道が神としたものを今ながめれば、鰯ノ頭モ信心とつぶやきたくなるものも多い。しかし、広大な時空にまたがり四方八方を気遣うその作法のありようは、地球環境をあやうくする現代の無数の危険への国際作法の模索に、多様な刺激をあたえうる。

じつは、このような知見も現代の地球規模の文明化構想に有効に活かせるよう、本学新設の大学院地球環境学堂に「三才学林」が発足。筆者はその学林にも籍を置き、先端科学技術の適切な国際制御という切実な課題のまえで、上記のような、かつての小規模な閉鎖系安定社会の事例をどのように理論化しうるかを、生態学や工学との国際共同の中で考えはじめている。

「其れ厳として上に在り」

先秦時代の金文



教授◆浅原達郎（あさはらたつろう）
1955年生、1982年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退

中国先秦時代の青銅器の銘文（金文）に、「厳在上」もしくは「其厳在上」という表現が見える。いまのところ西周後期の用例しかなく、たとえば、

丕顕皇祖考、穆々克哲厥徳、厳在上、広啓厥孫子于下……　（番生簋）

……用昭格丕顕祖考先王、々々（先王）其厳在上、翕々豐々、降余多福……　（獣鐘）

……皇考厳在上、異在下、豐々翕々、降旅多福……　（虢叔旅鐘）

はその例である。天上にあるご先祖さまについていうことがほとんどで、漢文式に訓読すれば「厳として上に在り」あるいは「其れ厳として上に在り」ということになろう。

金文における「其」の字には、ありふれたふたつの用法がある。ひとつは、代名詞としての用法で、訓読すれば「其の」となるもの。「択其吉金（其の吉金を択んで）」というのがもっとも多い用例だろう。もうひとつは感動詞的用法とでもいうのだろうか、訓読すれば「其れ」となるもの、たとえば「其萬年子々孫々永宝用（其れ萬年子々孫々永く宝として用いよ）」という銘文末尾の決まり文句にある「其」はその例で、将来に対する希望や予測、ときには勧告の気持ちをあらわす。西周時代には、後者の用例がほとんどであり、前者の用例は西周最末期にやっと現われ、東周時代になるとその数が増していく傾向にある。

「其厳在上」の「其」はそのふたつの用法のどちらであろうか。あるいは代名詞的用法と見て、「其の厳は上に在り」と訓読する解釈も一見なりたちそうにみえる。その場合、「厳」は、先祖の霊をさす名詞であり、また「在上」の主語である。実際、そう解釈するひとも、いないわけではない。しかし

王人聡「西周金文“厳在上”解－并述周人的祖先神観念」『考古』1998.1

がすでに論ずるように、『詩経』小雅・六月の「有厳有翼」と虢叔旅鐘の「厳在上、異在下」との比較から、「厳」も「翼（異）」もなんらかの状態をあらわす語であることはまちがいなく、「厳」を先祖の霊をさす名詞とする解釈はなりたたない。「厳在上、異在下」とは、先祖が天上にあって下界の子孫を厳格に見守っているさまと、下界の子孫がまたそれを神妙に受けいれるさまとを、表現しているのである。

その王人聡氏は、「其厳在上」の「其」を、語気を強める作用をもつ助詞とみておられる。つまりさきほどの後者の用法であり、先祖に対して「厳として上に在ってほしい」と願う気持ちを表わしているということになろう。しかし先祖の天上におけるありさまに注文をつけるというのも、なんとなくしっくりこない。

最近発見されたやはり西周後期の晋侯蘇鐘の銘文に、

……用昭格前文人、々々々（前文人）其厳在上、廙々在下、豐々翕々、降余多福……

の句がある。ただし「廙」字の下のくりかえしの記号を、この銘文を公表した上海博物館の馬承源氏はみとめておられない。わたしが『上海博物館集刊』第七期（1996.06）に掲載された拓本と写真をみたところ、まちがいなくそれはある。意味としては「小心翼々」の「翼々」にあたるのだから、くりかえし記号があっておかしくはない。それをみとめない理由があるとしたら、文例を同じくする虢叔旅鐘の「異」の下にそれがなく、またこの句のなかで対になるところの「厳」の下にもそれがないこと、であろう。

しかし晋侯蘇鐘の「廙」字の下にくりかえしがあるという事実を出発点として考えてみると、逆に虢叔旅鐘の「厳」字の上に「其」字がないということが意味をもってくる。つまりくりかえしのあるなしと、「其」のあるなしとが、晋侯蘇鐘と虢叔旅鐘との間で対応関係をもっているのである。くりかえしと「其」とは、なにか共通する役割をはたしているのではないだろうか。

状態をあらわすことばをつくるために、くりかえしを用いるのは、古代の漢語においてごく普通の手法である。別に古代漢語に限らず、現代漢語にもあれば、

「其厳在上、翼々在下」
（晋侯蘇鐘銘文の文字をもとにして作成）

日本語にもある。中国の古典のなかでこういった例が多く使われているのは、『詩経』で、「関関たる雎鳩」や「桃の夭夭たる」をはじめとして、全篇いたるところに見い出すことができる。また、くりかえすときに、まったく同じものをくりかえすとは限らなくて、ある程度似ているもののくりかえしというのもある。ある程度似ているということのわかりやすい例としては、双声と畳韻がある。

さて、状態をあらわすことばをつくるにはもうひとつの方法があって、それは字を前後に付加するものである。くりかえしとこの前付け後付け方式との関連は、むかしから多くの学者によって議論されてきた。そのひとつの到達点をしめすのが、周法高氏の『中国古代語法　構詞編』（歴史語言研究所専刊之三十九，1962.08）であり、実例をふんだんに引いて整理してある。

後につく字には、「然」「如」「爾」「乎」「焉」などがあって、「茫然」「突如」「莞爾」「断乎」「忽焉」など、いまでも使われる場合がある。もちろん『詩経』にも多くの例が見える。これがくりかえしと同時に用いられて、たとえば「茫茫然」となることもある。ついでにいうと、「徒然」を「つれづれ」にあてたわれわれの先祖たちのセンスには、敬意をはらいたい。

一方、なにか文字が前について、それで状態をあらわすことばをつくることもある。『詩経』に見える例では、前につく字は「有」「其」「斯」などがある。さきほど例に引いた六月の「有厳有翼」はまさに「有」の字のついた例であり、これはくりかえしを使って「厳々翼々」といったりするのと同等の表現であると、王人聡氏はちゃんと注意しておられる。つまり、『詩経』の鄭玄の注釈が「厳なるものが有れば翼なるものも有る」という解釈をしているのはまちがいで、おごそかでうやうやしいさまを「有厳たり有翼たり」と表現しているにすぎないのである。

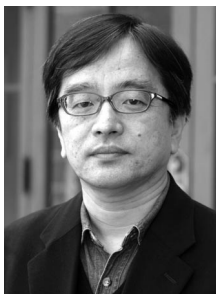
となれば、「其厳在上」の「其」も、「厳」という状態をあらわすために前についた「其」だ、という解釈が考慮されてよい。『詩経』中の「其」のつく例としては、「北風其涼」（邶風・北風）、「零雨其濛」（豳風・東山）などがよく挙げられている。「其涼」や「其濛」は、北風のひえびえとしたさまや小雨のぽつぽつと降るさまをあらわしている。ただし、『詩経』ではこの種の「其」が句の途中にしか来ることがないのに、金文では「其厳在上」が文頭に来る例もわずかにある点は、気になるところである。しかし、東周時代の叔夷鐘に「又敢在帝所」とあるときの「又敢」はすなわち「有厳」であるが、『詩経』中の「有厳」は、さきにあげた小雅・六月の「有厳有翼」以外にも、「有厳天子」（大雅・常武）、「下民有厳」（商頌・殷武）の例があり、すべて状態をあらわすために付加された「有」だと考えられる。「在上」と「在帝所」とが同じことをいっていることは、王人聡氏が指摘するとおり。すると「有厳在帝所」の「有」がそうであるのと同様に、「其厳在上」の「其」も、状態をあらわすことばを作るという機能をはたしていると、まずは考えてよいのではないだろうか。

そうしてみると、虢叔旅鐘では、「厳在上、異在下」と、単一の文字で表現していたものを、晋侯蘇鐘では、「其厳在上、翼々在下」と、「其」字の付加やくりかえしを使って、多音節的に表現していることになる。漢文式の訓読はそれでもなお「其れ厳として」とするよりないのだろうが、しかし「其厳」を一語とみて、「其厳として上に在り、翼々として下にあり」と読んでもよいくらいのところだという感覚は、もってしかるべきだと思われる。

金文に限らず、古文字資料の解読の際には、晋侯蘇鐘のくりかえし記号のような孤立した小さな事実が、直接には関係しないところに、思いがけない視界を開いてくれることがある。われわれが積み重ねていかなければならないのは、資料そのものではなく、こうした小さな知見なのだということは、やっとわかってきたのであるが。

はじかれ、こぼれおちるもの

清代の文化と社会



教授◆井波陵一（いなみりょういち）

1953年生、1980年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退

高校時代、18世紀半ばに誕生した『紅楼夢』という口語体長編小説に出会ったことがきっかけで、中国文学を専攻した。「紅迷」と呼ばれる熱狂的読者を数多く生み出し、中国で圧倒的な人気を誇るこの作品に、私もまた深くのめり込み、その結果、この作品の魅力あるいは本質を何とか自分なりに解き明かしてみたいと考えたのである。卒業論文でヒロインの林黛玉を取り上げた時、サブタイトルに「日常的解体を越えんとして」という、今では気恥ずかしくなるような言葉を選んだのは、吉本隆明の有名な言葉を借りるなら、「関係の絶対性」の前に敗北を余儀なくされた彼女の、それでも最後まで崩れ去ることのなかった叛逆と抵抗の姿勢を、しかしながら叛逆という言葉がどことなく漂わせる「カッコよさ」をあくまで拒絶した上で、論じてみたかったからだろう。そうしたヒロイン像の中に、「書く」ことに対する作者のこだわりを窺うこともできたと思う。時あたかも70年代半ば、「砦の上」から「三畳一間」に押し込められる閉塞状況の中で、「なだれ落ちる」ことに対して一応ささやかな抵抗を試みていたのかも知れない。「解体」という言葉が、高橋和巳の『わが解体』とまったく無関係であったとは言い難いことも、おそらく確かである。

『紅楼夢』のもう一人のヒロイン晴雯。封建的秩序が強いる理想の侍女像に目もくれなかった彼女には、「狡猾に秩序をぬって歩く」ことなどできなかった。

■『紅楼夢』から王国維へ

それ以後、「前近代を総括し、近代への道を開く」作品として『紅楼夢』をとらえてきたが、80年代半ば、新たな足場を与えてくれる人物が現れた。1904年、中国初の本格的な『紅楼夢』批評を敢行した王国維である。従来まともな文学として扱われてこなかった口語体小説の代表である『紅楼夢』を、彼はショーペンハウアーの哲学に依拠しながら正面切って論じ、その価値を大いに顕彰した。今日では東西の哲学や美学の融合を試み、従来の文学観を覆した意欲的な仕事として高く評価されている。しかし、その一篇の評論が『紅楼夢』解釈の新たな一歩を導いてくれたというわけではない。そうではなくて、彼の全仕事、とりわけ『紅楼夢』とは最も縁遠い中国史研究の意義を考えた時、そこに論証の当否を越えた、一つの歴史哲学のようなものが浮かび上がって来たのである。甲骨学であれ簡牘学であれ、また他の諸分野であれ、今日のレベルに立った上で彼の結論の妥当性を専門家として吟味する力は私には無いが、それでも全体を通観してみると、篤実で偉大な実証主義者という一般的な評価とは違う何かを感じざるを得ない。

王国維が構築しようとした中国史は、今日に至る発展経過を合理的に説明して「偉大な」歴史、すなわちいつでも現在をゴールとする現状追認型の大きな物語を作るのではなく、むしろ反対に、ともすれば生み出されがちな大きな物語に向けて、その内部に軋みやヒビ割れを生じさせる小さな事実の潜在的破壊力を引き出し、歴史解釈の重層化、多元化を絶えず試み、新たな可能性を探ろうとするものであった。とめどなく「愛国主義」に転落していく歴史観とは雲泥の差がある。この点こそ、彼があまたの実証主義者と一線を画する所以にほかならない。こう

した試みは当時の中国において突出したものであり、今日においても十分に理解されているとは言い難い。ちなみに『紅楼夢』の場合、封建的礼教規範という「大きな物語」に対して、林黛玉は「小さな事実の潜在的破壊力」となった。

■「雑」の威力

王国維の仕事をこのようにとらえるに至った一つの要因として、東洋学文献センターの助手だった当時、センターの事業である「漢籍担当職員講習会」に携わる必要上、漢籍の分類の歴史について自分なりに考えてみたということがある。漢籍の分類における最も重要な概念は、じつは分類の断念を意味する「雑」ではないかというのが、私の結論である。四部分類には「雑」という文字を含む部門が少なくない。「雑」には貶める意味だけが染みついているのではなく、分類する側の「手に負えない」といった悲鳴も混じり込んでいる。遠くは『史記』、近くは叢書の分類の変遷などがその典型的な例だろう。吉川幸次郎によれば、王国維の著作についても同じことが言える。内藤湖南の言葉を借りるなら、「えたいが知れない」として周辺に置き去りにされたものが、やがて既成の秩序や体系を根底から覆していく。「雑」にすら入れてもらえなかった『紅楼夢』を取り上げたように、王国維はそうしたダイナミズムに鋭く反応した。それを象徴する彼の用語は、「劇」（はげしい）だろう。文学関係で言えば、伸びゆくものの力強さを何よりも印象づけた彼の著作は、口語体小説と同じく、かつての中国ではまともな文学として扱われてこなかった戯曲の発展の歴史をたどった『宋元戯曲考』である。当該分野の専門家でもないのに、私がその翻訳を試みたのは、その著作のもつ潜在的破壊力に一も二もなく圧倒されたからだと思っている。

『宋元戯曲考』に、「元の戯曲の素晴らしい点はどこにあるのか。一言で言えば、自然ということに尽きる。古今の大文学はどれも自然という点ですぐれているのだが、元の戯曲ほど顕著なものはない。元の戯曲の作者はおしなべて地位や学問が無かったし、戯曲を作っても、それを永遠に残そうとか、しかるべき人に伝えようとかいった気持ちも持たなかった。彼らは感興の赴くままに制作して、自ら楽しみ人を楽しませたのである。筋立ての拙さなど問題とはせず、思想のお粗末さなどはばからず、人物の矛盾した点など顧みなかった。彼らはただ胸中の感慨と時代状況を描写したにすぎないが、誠実な思考とすぐれた気迫がしばしばその間に流露したのである」という一節がある。猥雑で荒削りなもの、決して文化の殿堂に色目を使わないもの——『宋元戯曲考』に登場する芸達者たちは、おのずからロックンロール第一世代を連想させた（今では「ロックの殿堂」があるけれど）。とりわけ土の匂いのするアメリカンロック、なかでもザ・バンドの作品は、『宋元戯曲考』に引かれた数々の「愉快で逞しい」エピソードに思いをめぐらす際に、大きな参考となった。ザ・バンドの音楽は「古くて新しい」と評されるが、それは王国維の基本姿勢と一致する。はるかに響き合う形で、かたやアメリカ、かたや中国を顧みたと言えようか。

■王国維からベンヤミン、長崎浩へ

王国維が志した「歴史解釈の重層化、多元化」を考える時、ヴァルター・ベンヤミンの思想はきわめて刺激的である。ベンヤミンの「根源」と王国維の「大」は、歴史をどのようにとらえるかという問題に関して、どこかで繋がっているのではないか。常識的には「国学大師」あたりで落ち着きそうな王国維評価に異議を唱えようとすれば、思い切った冒険も必要だろう。というわけで、それに関連して、能力不足は十分自覚しているものの、中国におけるベンヤミン研究の現状を一度確かめてみたいと思っている。フランクフルト学派に関する研究は中国でも比較的盛んだが、ベンヤミンの場合、マルクス主義とユダヤ神秘思想の二項対立、しかも前者はプラス、後者はマイナスという「予測できる」評価をどのくらい越えているか、そのあたりが興味深い。

『紅楼夢』や王国維（ベンヤミンもそうだが）を論ずる際に避けて通れないのが「近代」である。中国の場合、「反帝反封建」の大衆政治運動が一つの重要な位置を占めるが、長崎浩の『叛乱論』や『政治の現象学あるいはアジテーターの遍歴史』に依拠することで、「進歩」と「落後」のもっともらしい組み合わせとは全く違う角度から、たとえば義和団運動なら義和団運動を考えてみることはできないだろうか。これまた相当の力量を要する仕事であり、あえなく挫折してしまうかも知れないが、できれば何とかしたいと思っている。分類の「雑」をシステムに揺さぶりをかける外部と捉える考え方についても、『叛乱論』から学ぶところは大きかった。

最終的には再び『紅楼夢』に戻るつもりだが、それがどのような形で実現するか、今のところ自分でもよく分からない。

財政システムから見た帝国統治

近世中国の財政と社会

1955年生、1983年、京都大学大学院文学研究科博士課程中退

教授◆岩井茂樹（いわい しげき）

紀元前221年、秦の始皇帝は国土をすべて直轄地とし、皇帝が任命した官僚を送って統治する郡県制をはじめた。われわれにとってもなじみ深い「県」の文字は、もともと「縣」と書かれ、その意味は「懸」（懸ける、ぶら下げる）と同じである。郡-県、州-県、省-府-州・県と時代によって異なるが、中間にいくつかの県を束ねる上位の機構をはさみながら、中央政府に「懸けられ」、その数1500前後におよぶ県を、網の目のように全土にかぶせる。これが、20世紀までつづいた帝政中国の地方統治の枠組みだった。

■親民官と刑名銭穀

中央から派遣された知県、つまり県の長官は「親民官」あるいは「民の父母」とよばれた。皇帝を頂点とする官の権力は、いくつかの経路をへて、県という政治空間のなかで、民草がかたちづくる社会に接続するわけである。

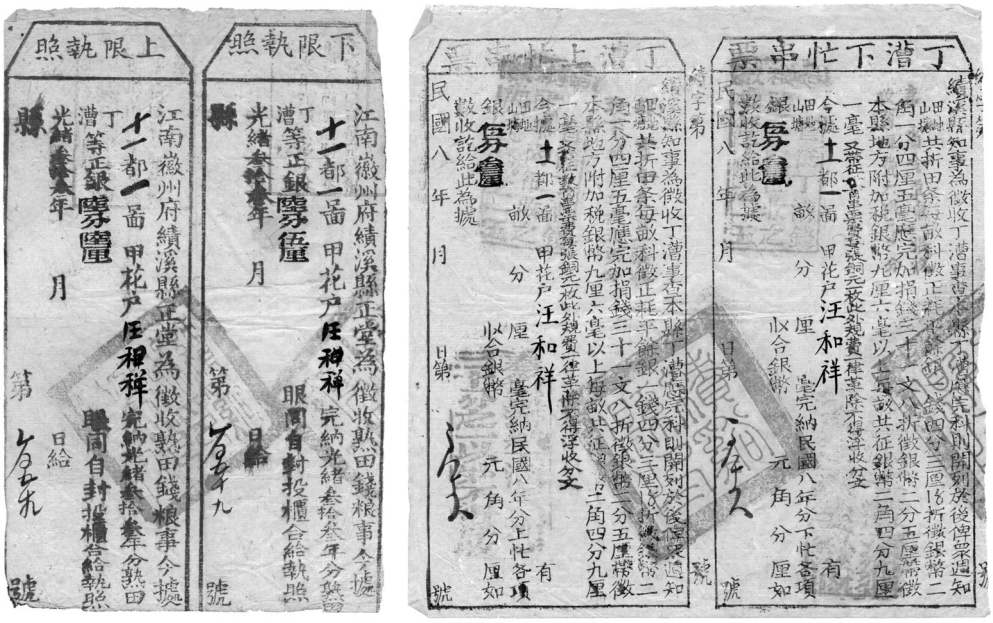
このように官が親しく民に臨む場であった県には、城壁でかこまれた県城があり、その中心には、森厳とした大門の奥に、堂々かつ黒々とした甍の波をつらねる県の官府があった。取調中の犯罪者を放り込んでおく監獄や、取り立てた税物を保管する倉庫や銀庫もその中にあり、民がおいそれと足を踏みいれることのできる場所ではない。知県は、天の命を受けて万民に君臨する皇帝の代理人でもある。その知県が鎮座する役所なのだから、親民だとか民の父母などという言い方とは裏腹に、民の側から見れば、県の官府は超然として近寄りがたい場所であっただろう。

統治権力の経路の末端を束ねる知県は、都市神である城隍の祭祀、科挙・学校などの文教から治安維持、反乱鎮圧まで、地域のありとあらゆる業務の責任を負っていた。しかし、官僚としての仕事の中核は、「刑名」と「銭穀」にあった。その文字面からもうかがえるように、刑名とは警察・裁判のことであり、銭穀とは税務・財政のことである。明清時代に数多く出版された地方官のマニュアル＝官箴書のなかには、『刑銭指南』『刑錢必覧』『刑錢指掌』など、刑名と銭穀を書名に掲げるものがある。これほど直截的でなく、いささか典雅な書名を冠する書物も、紐を解けばやはり「刑」と「銭」なのである。

知県は、進士合格者のなかで中下位の成績の者がまず最初に任命されるポストでもあった。今まで、儒教の経典や歴史・詩文の勉強に明け暮れていた駆け出しの官僚に、「刑名」「銭穀」の専門知識やそれを処理する能力があるはずがないし、そもそも中国の科挙官僚は、法務や財政など何らかの専門家であることによって官僚として選抜されるのではない。たとえば、事件捜査や裁判の指揮、律例の条文にそった判決案の作成など専門的な仕事は、知県が私的に抱える秘書（＝幕友）のなかに「刑名師爺」がいて、これに片づけてもらう。税務・財政にしても、煩雑な実務は官府の吏員たる胥吏が処理するのであるし、「銭穀師爺」を抱えておけば知県自らが指揮を執らなくてもすむわけである。

しかし、これらは県の官府のもっとも中核的な業務であるのだから、その責任を負うべき知県が「刑名」「銭穀」の仕事について茫然無知であるようでは困る。知県の権力をぬすみとり、懐を暖めようと狙っている胥吏や衙役に足下をすくわれることも、官僚は警戒せねばならなかった。行政末端における司法や財政にかかわる仕事の勘所をしっかりと押さえておくことは、実務家ではない科挙官僚にとっても必要であった。こうした官僚の需要を満たすために、「刑」と「銭」の指南書が数多く著されたのである。胥吏はもちろんのこと、ほとんどそれ専門の職業となっていった幕友などは、現場のなかで父子相伝、あるいは先輩の教導によってたたき上げの技能を獲得するのが通例であり、かれらは印刷された指南書などとくに必要としなかったであろう。

しかし、科挙試験の受験生からいきなりエリート官僚に上昇してしまう官僚は、現場のなかで仕事を覚える機会もない。しかし、本を読むのはお手の物。科挙の受験参考書類には及ばないもの、めでたくそれを卒



清～民国期の田賦納付証明。光緒33年（1907）の「執照」（左）と民国8年（1919）の「串票」（右）。ともに、安徽省徽州府績溪県　納税額を手書ではなく印で記すのは改竄を防ぐため。

業し地方官となった官僚にとって「刑名」「銭穀」についての指南書は必携の書物であっただろう。

■「官法は遠く、蛮法は近し」

これまで説明したことを裏側からみると、地方の社会にとって、皇帝の親任をへて送りこまれてきた官僚とは、裁判官として紛争や事件を片づけ、租税や役務を取り立てて統治機構を維持する、その働きにおいて「親民官」「民の父母」であった。中国では、社会とそれを統治する機構とは、もっぱら司法と財政の二点をつうじて相互に作用したといって過言ではない。この二点において、統治する側と統治される側とは、確かに「親しい」のであるが、父母と子供のように優しく円満なものではけっしてなかった。統治する側の強制や暴力もまた、この二点において日常的に発揮されたからである。そもそも「刑名」については、礼と法の体系それ自体に強制や暴力が組み込まれているし、現実の制度運営はいっそう暴力にたよるという性格があるが、それは「銭穀」においても同じようなものであった。

中国では、朝廷を中核とする統治機構が官有の資産を保有し、そこからの収益によって、みずからを維持するために経済的資源を獲得するという国家経済の仕組み――ヨーロッパ中世から近世初頭にかけての家産国家のような――は発達しなかった。帝室の財政でさえ固有の収益源に頼ることが少なかった。それは、「普天王土」つまり天の下はすべて本来的に王者のものであって、国土あまねく貢賦をだす義務があるとされたからである。朝廷がとくに収益のための資産をもって自らを養わねばならないというのは理屈にあわない。そこで、普遍的な租税の徴収にもとづく公的な財政システムが発達することになった。人は、借りている土地の地代や借金の利子、あるいは資産の所有者に帰属すべき収益を納付することは、経済上の双務的な義務として受けいれる。しかし、「普天王土」と言われても、みずからの投資によって獲得し、私有している土地について、賦税の負担を求められ、また自分のためにあるべき自分の労働力をもって、官府の必要とする役務の提供を求められると、どうであろうか。「普天王土」であるがゆえに、実際にはほとんど「無産」となっていた中国の国家は、なだめすかしてでも民からひろく租税を徴収しなければ成り立たない。こうして、小は租税徴収の現場である地方の官僚を「銭穀」によって勤務評定することから、大は帝国全体の収支バランスがとれるように財政計画をたて、地方で得られた資金や物資の移動を実現することまで含む、大規模な財政システムが形成された。

さらに言えば、近代国家の財政システムとは異なり、法定的な財政が国家の活動すべてを賄っていたわけではない。法定的な財政の硬直性を補うものとして、種々の非正規の課徴がおこなわれ、それは正規の財政に匹敵するほどの規模があった。こうした非正規の課徴の多くは、形式的には違法なものであった。こうした要素を含む財政システムを動かしていくためには、制度化された暴力、利益による誘導、税務や徴収の請け負いなどの方法が動員されざるをえなかった。

このように、財政システムの研究をつうじて、中国の伝統的な制度が内包する興味深い構造を見いだすこと、また集権体制のもとにおける国家-社会関係の特質や変遷を探ることが、この研究の目的である。

中国民間の語り物文芸

中国の小説、演劇及び説唱文学の歴史

教授◆金　文京

1952年生、1979年、京都大学大学院博士課程単位取得退学

中国の文学といえば、杜甫や李白の漢詩、あるいは『三国志』『水滸伝』などの小説を大方の人が思い浮かべるであろう。漢詩や漢文は学校でも習ったことがあるし、『三国志』などの小説は、原作を読んだことはなくとも、映画やテレビ、漫画などで、大体のストーリーや主要な登場人物は知っている。日本は千年以上にわたり、中国文化の影響を受けて来たのであるから、中国文学は日本人にとってもっとも馴染みの深い文学であるはずである。少なくとも中国人ならだれでもが知っている有名な作品やその中の登場人物で、こちらが聞いたこともないというようなことはなかろう、と思い込んでいる人は少なくないにちがいない。しかしそれは大きな錯覚なのである。

たとえば包拯という人をご存じだろうか。この人物は十一世紀の北宋時代に実在した政治家であるが、後世ではもっぱら名裁判官として有名で、『包公案』『竜図公案』など、彼にまつわる名裁判物語集は民間で広く好まれ、あたかも日本の大岡越前のように、中国では現在でもテレビドラマの主人公にもなっているほど、だれ一人知らぬ人とていない民衆のヒーローである。しかし日本では、一般にはほとんど知られていないであろう。包拯はふつう包公の名で親しまれているが、包公と聞いて、ああああれね、と思う人がいれば、その人はよほどの中国通にちがいない。中国の一般の人がよく知っている物語は、このように日本ではあまり知られていないことが多い。それはなぜであろう。

包拯の話など中国の民間で人気のある物語には、むろん小説など文字で書かれた作品もあるが、それらがよく知られているのは、むしろお芝居や講談、それに語り物などの芸能によってである。ところが日本における中国文化の受容は、江戸時代に鎖国政策をとっていたこともあって、ほとんどが書物によっており、文字で書かれていない口頭の芸能などを知る機会はあまりなかった。中国人が日常的に親しんできた物語が、日本で知られていない理由のひとつはそこにある。やや大袈裟に言えば、実際の中国と日本人が理解する中国との間にはギャップがあるということになろう。

■語り物は低レベルな文学か

中国は芝居と語り物の国である。京劇は日本でもよく知られているが、実際には各地にその地方独特の地方劇があって、現在でもそれぞれ盛んに上演されている。芝居とちがって、ひとりでどこででも演じることのできる語り物はさらに多種多様で、代表的なものだけでも北方の「大鼓」や「鼓詞」、江南の「弾詞」、広東の「木魚書」などが、それぞれに特色を競いあっている。これら各地方の語り物の由来は、文献的にはせいぜい二三百年程度しかたどれないが、実際にはそれよりはるかに長い歴史をもっていると考えられる。たとえば敦煌の石窟から発見された唐代の文献の中には「変文」とよばれる当時の語り物の写本が含まれているが、「変文」と現在の語り物との間には、文体や内容の面で少なからず共通点が見られる。しかし敦煌の「変文」写本は偶然に発見されたものであって、代々大切に伝えられて来たものではない。民間の語り物は文字化されることが少ない上、たとえ文字化されても写本の段階でとどまることが多く、近世になって出版が盛んになるまでは、印刷された書物として広く流布し、保存されることはまれであった。

民間の語り物がなぜ出版されなかったかというと、それは中国人自身もそれを重要なものとは思わなかったからであった。中国の知識人にとって、文学とは文言で書かれたいわゆる漢詩、漢文であって、近世になると口語で書かれた一部の小説や戯曲が評価されることになるが、語り物はさらにそれよりレベルの低いものであって、わざわざ出版して保存するほどの価値のないものと見なされて来た。口語や方言を多用し、内容的にも荒唐無稽な語り物は、まともに相手にされなかったのである。

古典文学、純文学と通俗文学、娯楽文学の差は、いつの時代、どこの国にもあることだが、過去の中国ほどその落差が激しかった地域、時代はおそらくないで

あろう。中国の民間文学が日本にあまり紹介されなかった理由の一端は、実はそこにもある。ギャップは中国自体にも存在したわけである。

■あらゆる文学の源泉

語り物は、中国風に言えば、「大雅の堂に登らざる」低レベルの文学であった。しかしそれは、あたかも低奏通音のように中国文学全体の流れの中で響いており、さまざまな高級文学の源泉ともなっている。語り物は、韻文の歌と散文のせりふを交互に繰り返すことによって物語をかたる体裁をとるため、現在の中国では説唱文学、または講唱文学と呼ばれているが、その歌詞の部分の形式は古典詩（いわゆる漢詩）と基本的に同じであって、両者は発生的に深い関係があると考えられる。またその散文によるせりふの部分が増大し、歌詞を圧倒したところに小説が生まれた。中国の旧小説がみな一人称の語りの形式を取り、時に詩をまじえるのは、語り物の名残であろう。さらに語り手一人がさまざまな登場人物のせりふを語るのではなく、複数の俳優が役柄を分担し、所作をともなって演じれば、語り物はそのまま演劇、戯曲になるだろう。実際、中国の演劇の多くは語り物が転化したものであった。京劇など中国の伝統演劇が、すべて歌とせりふによるオペラ形式であるのはそのためである。したがって中国文学の各ジャンルの発生とその相互の関係を考えるためには、語り物についての考察が欠かせないのである。

『花関索伝』のテキスト。1478年に北京で出版され、1967年に上海近郊の明代の墓の枕もとで発見された。あの世でじっくり読むつもりだったのだろう。

そもそも語り物は、世界的にみてもきわめて古い文学ジャンルであり、内容、形式ともに古代の神話や英雄叙事詩の世界にさかのぼるものであった。19世紀末に西洋の文学に初めて接した中国の知識人は、西洋文学にあって中国にないものは神話と英雄叙事詩であると考えたが、それは民間の語り物に対する認識が欠けていたからであった。語り物の中には神話的要素や英雄にまつわる伝説が豊富にみられるのである。たとえば近年発見された『花関索伝』という15世紀の語り物の作品は、『三国志』でお馴染みの関羽の実在しない息子である花関索を主人公とし、その異常な誕生から悲劇的な死にいたるまでの波乱万丈の生涯を描いた、『三国志』とは内容的におよそ無関係な英雄叙事詩であった。

■もうひとつの中国像

明治以後の日本の知識人の中には、日本は長らく中国の文化的影響を強く受けたが、日本文化は中国文化とは本質的に別のものであって、むしろ西洋に近いという考えがあるであろう。それは脱亜入欧をめざす近代日本の戦略とも合致するものであった。しかしそこで日本人が自明のものとして思い描いた中国像には、実は大きな偏りがあったのである。語り物に代表される中国の民間文化は、日本や西洋のそれと意外に似ている。中国文化は神のいない文化であると言われて来たが、それは儒教など高級文化での話であって、中国の民間は神さまであふれている。中国各時代の語り物を通じて、知られざるもうひとつの中国像を探り、先に述べた二つのギャップを少しでも埋めたい、それが研究者としての私のひそかな野心である。

神話と儀礼

中国古代の伝承文化研究

教授◆小南一郎（こみなみいちろう）
1942年生、1969年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学

神話をいかなるものと規定するか、あるいは神話で語られている内容をいかに理解するかについては、さまざまな理論がある。神話をいかなるものと考えるかは、その時代が人間の文化をいかに理解したのかを端的に示す指標ともなるだろう。そうして、現在にもまた、神話について、新しい考え方を提出する書物が次々と出版されている。そうした新しい説のすべてに目を通すことはもとより不可能なのであるが、今日の神話理解の、おおよその方向はうかがうことができる。たとえば、古くより神話の典型だとされて来た、ギリシャ神話や日本神話は、決して神話を代表するようなものではないというのが、現在では、共通の了解事項となっていると言ってよいであろう。人間的な感情と行動で物語りを演じているギリシャの神々や、神々の系譜づけがはっきりしている日本神話は、本来の神話ではなく、神話的な本質の上に、後世的な価値観、あるいは政治的な意図などが加わって作り上げられたものなのである。

■王朝誕生の神話

そうだとすると、元来の神話の本質はどこにあり、その元来の神話は、社会の中で、いかなる働きを持っていたのであろう。わたしは、神話を儀礼と結びつけて理解しようとする立場に立っている。神話の儀礼主義的解釈は、すでに過去のものとなった理論だとされるかも知れない。確かに、すべての神話を儀礼と結びつけて解釈しようとすれば無理な点が生ずるに違いない。しかし、現実の社会の中で機能する神話を考えようとするとき、神話と儀礼との密接な関係は、強調しても強調しすぎることはないと考えるのである。

中国には、なぜまとまった形での神話が存在しないのかが、中国文学史の最初の章で論じられ、その理由として、儒家的な合理主義が神話を十分に発達させなかったのだといった理由づけがなされていることが少なくない。確かに、神や英雄たちの人間像を鮮明に定着した神話は、古代中国には多くなかったようである。しかし、これは、あくまでも神話の文学的理解にもとづいた評価であって、儀礼を視点として中国神話を観るとき、まったく異なった様相が見えて来るであろう。

儀礼の本質は、宇宙論的な体系や機能に関わるものであって、宇宙の創造やその働きを儀礼の場に再現する。そうした儀礼に関わる個別の神の名は、あまり重要ではない。それゆえ、おなじ筋書きを持つ神話については、登場する神や英雄の名が異なっていても、その背後に共通する儀礼の存在を想定してみることが可能なのである。

一例を挙げれば、中国の少なからざる王朝の始祖伝説は、共通のパターンを持っていることに気がつくであろう。殷王朝の始祖の契については、その母親が野原に出て、水浴びをした際に、ツバメが落としていったタマゴを呑んで、契を孕んだのだとされる。周王朝の始祖の后稷については、「詩経」にも歌われているように、母親が野原に出て、巨人の足跡を見つけ、その足跡を踏んで、后稷を身ごもったとされている。さらに時代が下って、漢の高祖の劉邦は、その母親が、大きな湿地帯にいたとき、夢で神と交わって生まれたとされる。父親が見に行ったところ、母親には蛟竜がまとわりついているのが見えたと、「史記」高祖本紀に記されている。

これらの始祖伝説から、共通する筋書きを抜き出すことは容易であろう。いずれの場合にも、王朝の始祖にあたる女性が、水辺に近い野原に出て、そこで見えない存在と交わり、初代の王を生んだとされているのである。その見えない存在が、天に属する神霊だと考えられていたであろうことは、殷の始祖の母親が、高い台の上にあって、ツバメのタマゴを呑んで身ごもったとされていることからも推測できるだろう。

こうした神話に直接に関連していたであろう儀礼については、それを生の形で記録した文献は見つけがたい。ただ、中国古代で行なわれていた高禖の祭祀が、そうした儀礼の一端をかいま見させてくれる。「礼記」月令篇によれば、春の半ば、ツバメがやって来る日に、

郊外にある高禖をまつる。天子も、后妃たちをひきいてその場に臨み、高禖の前で、孕んでいる妃に弓矢を授けるとされている。こうした儀礼を参考にすれば、神話の中で、王朝の始祖の母親が野原に出て孕んだとされている、その季節は春であったと意識されていただろうことが知られる。高禖の祭祀では、すでに孕んでいる妃が大切にされているが、その元来の目的は、妃たちが、野原に出て、天上の神霊と交わり、子孫を授かることにあったのであろう。

高禖儀礼の基本的な要素は、始祖神話だけに見えるものではなかった。たとえば、中国古代の農耕生活と密接に関連した歌垣の風俗も、こうした儀礼と関わるものであった。春の半ばのころ、若い男女が野原に出て、歌の遣り取りをしたあと、仲良くなる。「詩経」鄭風、溱洧（しんわい）の詩にも見えるように、そうした歌垣では、若者たちは二人して川を渡る。王朝の始祖神話で、母親が水辺の野原で神霊と交わったとされることと、歌垣の際の川渡りとは、同様の神話的機能を背景にするものであって、水が生命力の伝達を媒介するという神話的観念を共通の基礎にしたものであったと考えられるのである。

歌垣の風習や王朝の始祖神話に共通しているのは、古代中国人たちが懐いていた神話的な生命観であった。その基本観念が儀礼を通して、動的なものとして表現されるのである。そうした儀礼に結びついた観念を空間化して言えば、人々の生活の場の周辺を区切るものとして、川の流れがある。春の季節になると、小高い山を介して地上に降った神霊（生命力）は、川のかなたの野原に留まるとされた。人々は、川を渡って、その野原に行き、そこで生命力を身に付けたあと、みずからの生活の場にもどった。そのようにすることによって、人間世界には多産がもたらされ、農作物の豊饒も約束されると考えられたのである。

戦国時代楚墓出土の帛画。鳳と竜と女性（巫女？）。

■野合で生まれた孔子

儒家の始祖、孔子について、野合で生まれたのだとする説が、「史記」の孔子世家に見えている。ただ、後世の儒者たちにとって、自分たちの教団の始祖である孔子先生が野合で生まれたのでは体裁が悪いと考えられたのであろう、これは本当の野合ではないのだとの説明がなされている。父親が老年であったのに、きわめて若い妻をめとり、その間に孔子が生まれた。礼が定めている結婚の年齢に外れていたので野合といったのだなどと苦しい解釈が付けられているのである。しかし、孔子世家では、尼山に祈って孔子が生まれたとされており（それで孔子の名は仲尼と呼ばれる）、実際がどうであったかはわからないにしろ、こうした物語りを伝承した人々は、母親が尼山に篭って野合をし、孔子を授かったと考えていたことは確かであろう。最近の民俗誌にも、子供の授からない女性が、たとえば陝西省の驪山に篭り、野合をして子供を授かるという風習が記録されている。

興味深いのは、孔子が野合で生まれたという伝説を伝えた人々が、けっして孔子を貶めようとしていたのではなく、むしろそれを誇りにしていたであろうことである。王朝の始祖たちと同様に、孔子もまた、天の精霊と交わった母親から生まれた、天の申し子だと受けとめられていた。こうした伝説もまた、上に分析した、春の野原での生命力獲得の儀礼を背景にしたものであって、その背後の神話的な意味合いを無視し、後世的な道徳観で論じてみても、そうした伝承が持っていた元来の働きを理解することはできない。

ちなみに、唐代の「封氏聞見記」を読んでいたら、一般民衆の婦人たちが、孔子廟で子供を授かるよう祈願し、裸になって、孔子が坐る長椅子の上に登ったりすると書かれていた。こうした中国中世の民衆的な風習も、上述の、春の野に出て子供を祈願する儀礼と、全くは無関係でなく、孔子が野合で生まれたとする伝説とも、どこかでつながり合っていたのであろう。

中国美術の様式と意味

五千年美術の様式的、図像学的研究

1945年生、1973年、京都大学大学院文学研究科博士課程中退

教授◆曾布川 寛（そぶかわ ひろし）

中国の造形美術は先史時代から現代に至るまで、独自の発展を示し、我々の前によこたわっている。数千年にわたる悠久の歴史を誇るだけにその量たるや膨大なものがあり、更に日々新しいものを生み出すとともに、埋蔵文物の盛んな発掘によって絶えず資料を増やしつつある。またその質は、四大文明の一翼を担うだけに早くから高度の水準を示し、驚異的な優品を数多く作り出している。加えて周辺の異民族との接触による異文明の流入は、中華思想を唱えながらも造形の様相を変化あるものにしている。

対象とするのはこの中国美術全体である。古代、或いは先史時代の作品であるからといって敬遠すべきではない。これらはその出現の契機こそ考古学の発掘によるとはいえ、人類の造形活動にもとづく所産であることは後代のそれと何ら変わりない。むしろ、古代、先史であることを理由に考古学にゆだねて考察の埒外に締め出したところに、昨今の美術史の貧困があるといっても過言ではない。これは現代美術についても同様であり、いかに混迷の度を深めているとはいえ、眼をそむけることは美術史にとって有益でない。造形美術の歴史は常に新しいイメージ、ヴィジョンの追求の積み重ねであり、スパンの長さ、多様さはむしろ誇るべき財産である。ともすれば、近世、近代を基準に考えがちであるが、ある一時期の基準だけで評価するべきでないと考える。

■様式史と図像学

このような中国美術に対して様式史と図像学の方法でもって取り組む。概して古代、中世の美術の考察には図像学が有効であり、近世以後の美術は様式史が有効といえる。ともに形によって成り立ち、造形の歴史であることに変わりないが、後者は題材よりも形そのものをいかに作るか、もしくはそれらをいかに構成するかに主眼が置かれる。しかし、同じものを形作っても、時代により、作者により違いが生ずることは免れず、様式史はそこに着目して時代様式、個人様式を問題とし、また芸術作品としての優劣を論ずる。つまりその作品がいつの時代のいつの時期に作られたか、或いはどの作者がいつ頃作ったかを問題とし、類例によって弁別するのである。

これに対して前者、すなわち古代、中世の美術の場合は、様式史も確かに重要であるが、それが一体何を表しているのかということの方がより優先すべき問題となる。近世以後の美術と異なり、作られたものは全てそれ自体意味内容を有しており、そこに表された意味内容は、現代の我々にとって必ずしも自明のことではないからである。つまり作品の背後に、神話伝説、宗教的儀軌などが隠れており、それらを解明することなしに作品の理解はあり得ない。この意味内容を解き明かそうとするのが図像学である。

筆者はこれまで近世以後の美術については、主に絵画、とりわけ山水画を取り上げ、五代北宋の荊浩、関同、郭忠恕、許道寧、郭熙、或いは元の黄公望、明の董其昌、清の八大山人、弘仁、江南都市絵画、揚州八怪、また近百年絵画などを扱ってきた。これらは主として上述の様式史に基づく個人様式、あるいは画家の伝記などの観点から論じたものである。

また古代・中世の美術については、出土文物と佛教美術を取り上げた。出土文物では、秦の始皇帝陵兵馬俑、漢代の馬王堆漢墓帛画、画像石・画像磚墓、銅鏡、南朝帝陵の石獣、磚画などを論じた。漢代の画像石・画像磚については、画像一点一点の図像学的な内容の検討は従来もなされてきたが、その画像が墓のどの位置に置かれ、全体がどのような構成であり、何を表していたか、復原的な見地から考察した。これは南朝帝陵の石獣の場合も同様であり、南斉と梁の帝陵区である丹陽において、一角と二角の麒麟がどのように配置されていたか、フィールド調査を踏まえての研究であった。これら石獣には南朝独特のしなやかな造形感覚がみられたが、同じく帝陵墓室を飾った竹林七賢図や羽人戯虎図などの磚画は、中国絵画史上、一つの黄金時代を築いた南朝絵画の紛れもない産物であり、

江蘇省丹陽前艾廟の帝陵参道入口左側に置かれた石獣（体長3.15m）。南斉武帝（493年没）の景安陵のものと推定される。柔らかい曲線美が特徴。

顧愷之や陸探微といった名画家を想起させるものがあった。一方、仏教美術に関しては石窟寺院に限定し、北魏から唐代にかけて造像の行われた龍門石窟、北斉時代の響堂山石窟などを扱った。石窟寺院の場合は、未だ厳密な編年がなされておらず様式にも言及したが、主要な目的は尊像名の比定や背後の仏教思想など、図像学的観点からの考察であった。

さて、出土文物は、当時の宇宙観や死生観を示した馬王堆の帛画がその典型的な例であるように、これまで文献などに依る限り全く知られていなかった世界を開示することがある。図像学の醍醐味はまさにここにあり、そのためには文献史料の博捜はもとより、図像の綿密な観察が要求される。いま図像学研究の一例として、現在扱っている新石器時代の良渚文化と殷代の三星堆祭祀坑について述べてみよう。

■良渚文化玉器と三星堆祭祀坑銅器の図像学

近年、浙江省の杭州を中心に江蘇省、安徽省一帯に広がる良渚文化遺跡の発掘はめざましいものがあり、ある研究者によって玉器文化と呼ばれたほどに、大量の玉器が相次いで出土している。これらの玉器は主に祭器や装身具として用いられたものであるが、器形自体が特異であるだけでなく、表面には往々神人、獣面、鳥類といった奇異な紋様が精細に刻されている。この良渚文化玉器の紋様は、これに先立つ浙江余姚の河姆渡文化の遺物にみられる紋様や、山東の大汶口文化の陶刻紋様などと併せ考える必要があるが、殷以前の新石器文化の重要な一面を物語る資料として、図像学の興味をそそるに十分な内容を有している。

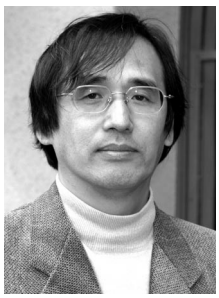
また、四川成都の北方40キロの広漢三星堆で発見された祭祀坑の遺物は、まさに図像の宝庫といった感を禁じ得ない。これまで全く類例のない青銅の造形遺物が数多く出土し、なかには４メートル近い青銅製の大型神樹や、幅が１メートル以上にも及ぶ、両眼が棒状に突き出た大型面具なども含まれている。興味深いのは、多くの研究者によって指摘された太陽崇拝との関係であり、上述の大型銅神樹も数羽の鳥が枝に止まって、大地の東にあり太陽が昇るという扶桑説も出ている。しかるに、同出の遺物としては他にも巨大な銅立人像（高262cm）、銅獣冠人物像、或いは神殿をミニチュア的にかたどった銅神壇などもあり、これらと総合的に解釈する必要があるばかりか、人類学、民族学、神話学などを援用して、より広い見地からの考察が求められている。

いずれにしても、長江の下流と上流に位置する良渚文化と三星堆文化は、従来の黄河流域の仰韶文化、龍山文化、更に殷文化を中心とする考え方からすれば、傍系、辺境に属する文化である。この旧来の考えかた自体訂正の余地がなくもないが、たとえ傍系、辺境の文化であっても、資料の扱い方次第で、その実態がより鮮明になるだけでなく、黄河流域の文化に対しても、青銅器の饕餮紋などの研究に有益な資料を提供する筈である。認識の具としての図像学の出番もそこにあるといえる。

羽状冠をつけた神人と大きな目玉の怪獣が合体した像。玉琮（高8.8cm）の側面に細かく線刻されている。浙江省餘杭反山出土、新石器・良渚文化。

敦煌写本に見る学校と教材

敦煌写本の言語史的研究



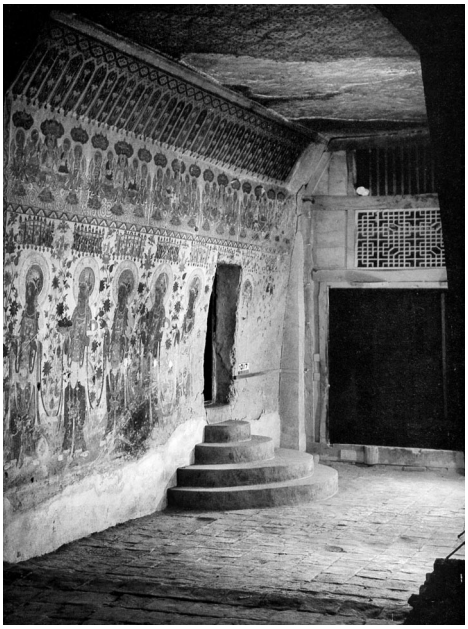
教授◆高田時雄（たかた ときお）

1949年生、1979年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得、1980年、Ph. D. (EHESS, Paris)

ことばは特に教えられずとも、自然に習いおぼえるものである。敦煌にも土地のことばがあり、人々はこのお国なまりをこどもの自分から身につけて育った。しかし官途に就くにせよ、寺に入って経を読むにせよ、まずは文字を識ることが先決であり、書物を読むためにはまたその発音を覚えなければならなかった。敦煌で文字の学習や字音の習得がどのように行われていたのかを、写本を通じて瞥見してみよう。

■学校

さて唐の制度では、都に国学、太学があり、地方には州県ごとに学校が置かれていた。早く敦煌写本中に発見された『沙州図経』（巻三、P2005）に州学、県学（さらに医学）が見えるから、敦煌にも確かに学校が設置されていたことがわかる。これらはすべて城内にあり、州（の衙門）から西に300歩のところに、それぞれ隣接してあった。P3274の『御注孝経』末尾に「天宝元年（742）十一月八日於郡学写了」とある。ここで郡学というのは州学のことで、これは州学の学生によって写された写本ということになる。またP2643『古文尚書』の末には「乾元二年（759）正月廿六日、義学生王老子写了、故記之耳」とあり、この時代、敦煌には官立の州県学以外に義学のあったことがわかる。この義学というものが、後世のような、義捐金によってまかなわれ、学資を徴収しない学校であったのかどうかは、よくわからないが、いずれにせよ官立ではなかったと思われる。しかし、これらの学校はいわば中・高等教育機関であり、当然すでにある程度の書物が読めることが前提になっていた。それに対して識字にはじまる初等教育は具体的にどのような機関で行われていたのだろうか。玄宗の開元二十六年（738）に、毎郷のうち里ごとに一学を置いて、先生を選び教授させることにしたという。これは政府が初等教育機関の整備に自覚的に着手したことを示すものである。しかしそれ以前にも、この種の童蒙教育を行う場は必要とされていたに違いないから、民間の篤志家が簡単な塾を経営するようなことはあったとしても不思議ではない。時代が下るものでは、「丁亥年（987）三月九日定難坊巷学郎崔定興自手書記之」（S4307『新集厳父教』）というような例が見える。これは敦煌県城内の「定難坊」地区にあった学校の生徒が書いたものであり、上述の里学に類した初級の学校であった可能性がある。



敦煌莫高窟第16窟の内から外を見たところ。左側に穿たれた穴が第17窟への入り口で、そこに大量の写本が封蔵されていた。

■寺学と学士郎

敦煌が8世紀の80年代に新興吐蕃王朝の支配下に入り、長安とのパイプが切れてしまうと、学校のありようも変化を余儀なくされた。写本の題記から見ると、この時期以降にはしばしば某寺学郎、某寺学士、某寺学士郎のような名称が現れてくるようになる。すなわち寺院が学校としての機能を持ち始めてきたのである。それまでの学校制度はすでに崩壊している。かといって吐蕃の軍政下では、漢字漢文の教育を主とする伝統的な学塾を運営することは表立っては憚られたであろう。寺院のなかでならば、仏典の抄写読誦に藉口してそれが可能であった。まさしく寺子屋と称してよい存在である。写本に見えるものを挙げても、龍興寺、三界寺、浄土寺、霊図寺、永安寺、蓮台寺、金光明寺などに寺学の存在したことがわかる。この傾向は、敦煌が吐蕃のくびきから脱して独立を勝

ち得たのち一層顕著なものとなったようである。9世紀後半の張氏帰義軍の時代、10世紀の曹氏帰義軍の時代ともに寺学は隆盛を誇った。この時期、敦煌の支配者は中原王朝から帰義軍節度使に任命され、この地方の行政を依託されるかたちになってはいたが、実際には独立国家であり、時とともにその独立傾向は強くなっていった。この時代、敦煌の支配者の子弟も、普通には寺学で学ぶことになっていた。S707の『孝経』は、末尾に「同光三年乙酉歳十一月八日三界寺学仕郎郎君曹元深写記」とあり、後年、帰義軍節度使となった曹元深が、同光三年（925）三界寺の学士郎であった時に用いた教科書である。学仕郎の後に見える「郎君」の語は本来主人の子を指すことばであり、日本語にすれば「おぼっちゃま」に当たる。

■教材

寺学で用いられた教材にはどのようなものがあっただろう。後世の童蒙教科書のチャンピオンである「三百千」のうち、出現のもっとも遅い『三字経』こそ見いだせないが、『百家姓』『千字文』はともに敦煌写本中に存在している。特に『千字文』の普及は著しいものがあり、一字づつ何度も繰り返し書き写して練習に用いた反故紙は非常な数に上っている。本文の「天地玄黄」からではなく、かならず「千字文敕員外散騎侍郎周興嗣次韻」から始めるのは、塾の先生がそのように暗唱させたからであろう。『千字文』以外には、敦煌では『開蒙要訓』『太公家教』『武王家教』『新集文詞九経抄』などが比較的多く用いられているが、その他にも碑伝文や邈真賛（一種の伝記）などもふくめ臨機応変に各種の教材が用いられた。

興味深いのは、近世の中国で「三百千」のそのまた前に、初歩の初歩として、筆画をならわせるために用いた「上大人、孔乙己....」の字句が、敦煌写本にも現れていることである（P3145他）。敦煌の人々も、最初は先生が朱字で書いて与えるこうした教材を、敷き写しにして字を覚えたことと思われる。少し字を覚えると『孝経』を読まされることが多かった。『孝経』は天宝三載十二月の敕に「いまより以後、宜しく天下に令して家ごとに孝経一本を蔵し、精勤教習せしむべし。学校の中にてもますます伝受を加えよ」というとおり、その学習は敦煌でも広く行われた。

■字音の学習

すべての漢字の発音を知ることは、今日でもなかなか難しい。『切韻』のような韻書を見れば反切によって音が示されているから、その使用に習熟していれば字音を見つけだすことができる。しかし幾つかの字を習い覚えたばかりの子どもには、その作業は困難であったに違いない。なによりも帰義軍時代になると『切韻』などという書物は、よほどの学者の家でなければあまり見かけないようになっていた。四川あたりで印刷された詳しい注のある『切韻』は敦煌にも入ってきてはいたが、子どもの手に渡るような代物ではなかった。同様に『玉篇』のような字書も敦煌ではほとんど用いられなかった。帰義軍期の敦煌に行われたのは、『俗務要名林』のような分類体の日常語彙集か、あるいは『字宝』のほうな俗字字書であった。これらの字書は、日常のことばをどのような字で書けばよいのかを示す指針ではあり得ても、漢字一字一字の発音を調べるには全く役に立たなかった。ではどうして文字の音を知ったかといえば、もうこれは先生か年長者に尋ねるしかない。こうして発音の分からない難字を書き連ねたものが、敦煌写本中にはたくさん残っている。発音は反切ではなく、単刀直入に同音、あるいは近似音の漢字によって記されていることがほとんである。適当な機会に恵まれなかったためか、余白を空けたまま音の付いていないままの写本も多い。

めずらしい字音をたずねる手紙が残されている(S5778)。きわめて分かりにくいことばで書かれているが、大意は以下のとおりである。「兄上、翟氏の家譜ですが、読んでもよくわかりません。まことに具合のわるいことです。炫沼....などの八字は、どの韻にあるのか、皆目わかりません。願わくは、（これらが）何の字なのか、探してやって呉れませんか」。翟氏の家譜というのは、たぶん自家の宗譜であろう。そこに読めない字が出るので、兄に訊ねているのである。兄はおそらく韻書か字書を持っていて、反切の読める人なのであろう。

字音に関連して付言すれば、上述したように半ば独立国家であった帰義軍期の敦煌では、ことばに対する意識にもかなりの変化が見られるようになった。唐の盛時には、役所の公事にも、仏寺の仏典読誦にも、少なくとも公式の場では都長安の発音が用いられいたものが、なににによらずお国なまりで済ませられるようになってきた。つまり、土地のことばが敦煌国の標準語としての地位を築くようになってきたのである。だから、書物を読むときの字音もお国なまりの発音であり、難字音注にもそれは反映されている。上の字音をたずねた手紙の返事には、おそらく敦煌の発音で音が付けて返されたことであろう。

長寿のサイエンス

中国伝統科学の思想史的考察

教授◆武田時昌（たけだ ときまさ）
1954年生、1985年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退

科学技術の進歩は実に著しい。機械文明による社会生活の利便性は日々増進している。数十年前までのように伝染病で死亡する恐怖からも解放され、長く生きながらえるための環境と医療を手にしている。だが、誤謬だらけの伝統科学しか知らなかった古代人よりも幸福であると実感しているだろうか、生を養うすぐれた知恵を持っていると自負できるであろうか。

科学研究の成果を求めようとするなら、伝統科学は過去の遺物にすぎない。しかし、科学知識として有効に作用していた学問的特質とその社会的背景を探っていけば、現代人が見失っている何かに気づくことがあるかもしれない。人類社会の将来において、伝統科学の復権があるならば、中国の科学文化の構造を究明し、その本質がどのようなものであったのかを思索しようとすることも、少しは意義のあることかもしれない。

■科学技術史から科学思想史へ

自然科学の歴史を叙述しようとすると、科学的成果の発明、発見を跡づける業績史と科学者列伝が中心的な話題となる。しかも、現代科学から見た真理が評価の基準になり、迷信や虚妄が絡みついている言説には擬似科学のレッテルを貼ってしまいがちである。伝統科学から近代科学への輝かしい発展を系譜づける目的ならば、それで十分かもしれない。

しかし、天才科学者のすぐれた知見が異端視され、ずっと後にならないと認められないことは稀なことではない。また、高度な理論書がすぐに世の人々に読まれるようになるわけでもない。近代化への道標ではなく、人々に生きる知恵として活用される科学知識にスポットを当てるならば、当時に信奉され、強く影響を及ぼしていた「サイエンス」は今日から見た伝統科学とは別物であるかもしれない。

科学史、技術史も広義の歴史学の一翼であるという視座で捉えれば、科学理論の構造を明らかにすると同時に、それを生み出した社会的、思想的な背景を明らかにし、社会にどのように浸透していったかを考察する必要があるように思われる。

中国科学史で言えば、藪内清、ジョセフ・ニーダム両博士を中心に究明してきた科学技術史から科学思想史、科学文化史、あるいは東アジア比較科学史へと転換させていくべき時期に来ているのである。

■黎明期の科学書の大発見

中国科学の基礎が形成されたのは、漢代である。数学では『九章算術』、医学では『黄帝内経』、本草学では『神農本草経』等々、各分野で基礎となる著作が編纂された。その水準はきわめて高く、他の文明圏よりも自然科学が発達していたと言っても過言ではない。

しかし、それらの著作には、大きな謎がある。何時、何処で、誰によって編纂されたのかまったくわかっていないのである。それらの著作は、いずれもそれまでの研究を集大成した感がある。ところが、史書にはそうした試みやそれに関わった研究者集団の存在はほとんど語られておらず、書物だけが前漢末から後漢初にかけて忽然と姿を現す。

とりわけ『黄帝内経』の場合は、後続の医書と比較すると、さらに疑問は深まる。理論体系的記述は、羅列的、実用的になり、大きな落差がある。内経医学の理論構造は、漢代に流行した陰陽五行説を複合的に応用した難解なものである。これを基礎理論として学び、臨床の現場に応用しようとするのは至難の業であっただろう。だから、中国医学は『黄帝内経』の編纂から確かにスタートするものの、これと比肩する理論書は二度と著されることはなく、むしろ『黄帝内経』を最終的な到達点とする回帰曲線を描いているのである。

前漢と後漢の間は、王莽が政権を簒奪して、新王朝を樹立した悪名高き時代であるから、文化的な事績が史書から抹殺された可能性は十分にある。思想界でも原始儒家思想が経学を中心とする総合学術的な政治思想へと成長する大変革が進行していた。だから、自然科学の分野でもいわゆる科学革命と呼べるような大いなる飛躍があったのかもしれない。

しかしながら、漢代を顕彰するあまりに、それ以前は未発達な時代であるとし、三国時代以降の流れについても実用科学への傾斜で理解してしまうのは早計である。

というのも、1973年に長沙馬王堆漢墓から、1984年に江陵張家山漢墓から、多種の科学書が出土し、黎明期の科学を探る資料が得られたからである。

発見された書物は、数学では『算数書』、天文暦学では『五星占』『天文気象雑占』、医学では『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』、本草学では『五十二病方』等々であり、導引行気や房中術等の養生書も多数含まれていた。それらは漢代の基礎理論書の前身であり、中国科学の起源と形成に新しい証言が得られた。

『黄帝内経』について言えば、経脈篇で述べる十二経脈説は、出土した灸経の十一脈説を加筆したものであることがわかった。つまり、内経医学の針療法の基本である経脈と経穴は、灸療法の理論を借用し、改変したものであることが判明したのである。そのことを指摘するだけでも、これまでの定説を覆し、再考を促す衝撃的な大発見であったことが理解できるだろう。

馬王堆漢墓出土「導引図」の一部。後漢末の名医華陀が考案したとされる五禽戯の始原的な姿も描かれている。添え書きから疾病の療法にも応用したことがわかる。

■生を養う古代人の知恵

科学知識の伝播と世俗化という視点で見れば、新出土資料に、三国時代以降の著作に受け継がれた言説が多数存在することも大いに注目すべきである。漢代の著作の特異性を再検討し、先秦から漢初と三国時代以降の科学文化の連続性を議論する必要があるのである。

養生術関連の書物にはその傾向が強く見受けられる。養生思想とは、心身の健康を増進して長生きを達成するための技法、生き方を探究するものであるが、その思想的ルーツは老子の自然哲学にある。

老子は、文明社会に背を向ける「無の哲学」で知られているが、同時に人生最大の価値を天寿を全うすること見出し、身を損なう人為的営為を斥け、自然の中でありのままに生きる「生の哲学」を唱えた。そして、その弟子に長生術を実践的に追求する一派が分岐した。

先秦の養生思想については開祖とされた彭祖の伝説が語られるだけであった。ところが、新出土資料の内容を吟味すると、後漢末に成立した道教の発展過程で登場する丹薬服用（外丹）や瞑想（内丹）の様々な身体技法は、姿を変えているものの、基本的なアイデアと理論の骨子は先秦時代に確立していたことがはっきりした。しかも内経医学成立以前の医学理論と身体観を基盤にしたものであった。つまり、生を養う古代人の知恵は、本質的には変容することなく、ずっと後世まで時を超えて綿々と語り継がれていたのである。

貝原益軒の『養生訓』を例に挙げればわかるように、養生書の特色として、日常生活を健康に暮らすための便利な手引き書であるから、新しい科学的知見に富んでいるというよりも、内容は啓蒙的、通俗的である。したがって、これまで科学史の研究対象としては脇に置かれていたが、人々に医学知識を伝達するうえでは大きな役割を果たしたことを見逃してはならない。しかも、健康の維持や長寿の達成には医学、薬学の知識だけではなく、文化的行為全般にわたって幅広い思索を必要とし、生きていくための知恵に結集させようとする方向性を持っている。

科学知識と文学、芸術、哲学の精華との統合は、細分化しがちな学問の弱点を補完するものであり、サイエンスがめざすべき理想がそこにある。しかし、口で言うほど生やさしくはなく、今日でも長寿のサイエンスと呼べるものはまだ成立していない。その実現を希求するならば、時を超えて受け継がれてきた古代人の叡智に大いに学ぶべきものがあるように思われる。

空間造形の伝統を原点に遡る

中国建築の様式・技法・空間

教授◆田中 淡（たなか たん）

1946年生　1971年、東京大学大学院工学系研究科博士課程中退、東大工博

北京の紫禁城は、明・清両代の王朝にわたって国家の政治中枢であった。北海公園の団城に聳え立つラマ塔形式の白塔から遠望してみると、黄色琉璃瓦で葺かれた宮殿建築群の屋根が前後左右何層にも重なり、黄金の甍が波を打っているかのような壮観である。この迫力ある景観にこそ中国建築特有の空間構成の特色が隠されている。二重、三重に、四重、五重にと建物の周囲を厳重に取り囲む周壁、回廊、門、付属建物などの建築群からなる複合体が形成されている。輻輳しながら、整然と構成された中庭群は、あたかも幾重にもめぐらされた迷宮のようであり、また外界からの出入を拒否する堅固な殻のようにも見えることだろう。

紫禁城は、中心を構成する外朝の太和・保和・中和三大殿および背後の内朝をはじめ、全体の配置や規模は基本的には明朝創建の伝統を受け継いでいるが、現在残っている建物はほとんど清朝に再建されたものである。つまり、中国五千年の歴史のうえでは最末期に属する宮殿建築である。ところが、実年代は晩期のものであっても、その構成原理は実際にはきわめて古い伝統にもとづいている。

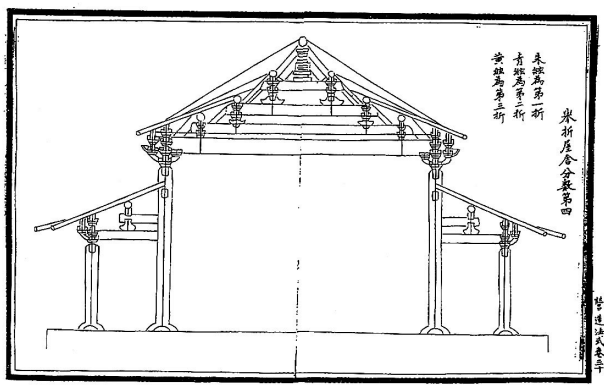
■失われた実例と考古発現

中国の建築は、その悠久な歴史にもかかわらず、実際にはあまり古い実物は残っていない。木造建築は、山西省五台県の仏光寺大殿（857年）など、唐代末期以前に建てられた遺構は全部で5棟。塼（せん）造や石造の佛塔も5〜6世紀の各１例を除くと隋・唐時代以降のものしかない。現存する実物に頼っていただけでは悠久の歴史の全体像を大きく見誤ることになる。ただ近年続々とおこなわれた建築遺跡の発掘調査によって、すでに失われた古代建築の情況について、かなり知ることができるようになった。考古学の成果は、中国建築が非常に早い時期からすでに高度な水準に到達していることを如実にしめした。

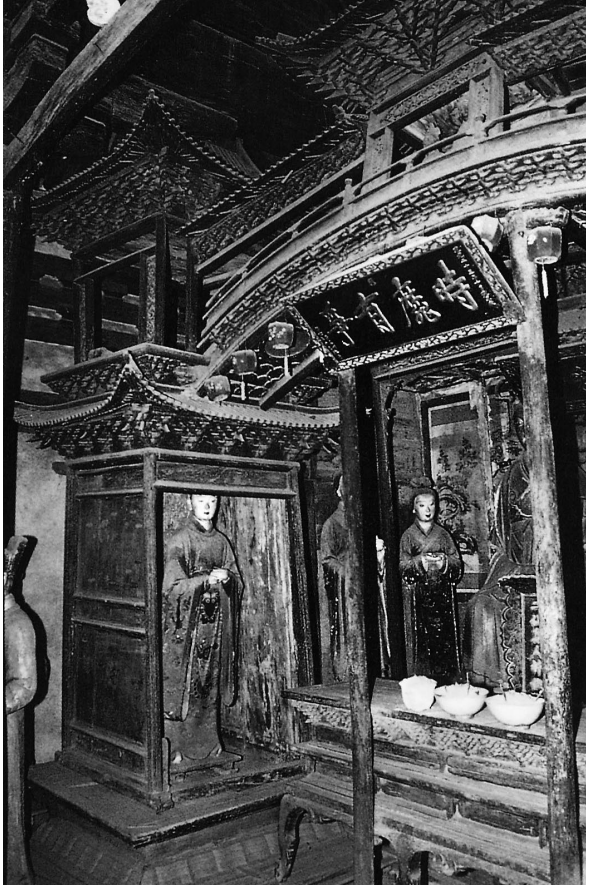
紫禁城の中庭群構成は、仏教の寺、道教の観、儒教の廟でも、大学、官衙、住宅の場合でも、基本的な配置原則は共通する。華北の典型的な住宅の配置形式は、四合院という、東西南北に建物を配して中庭をとり囲み、それを南北方向の中軸線上に2〜3、または4〜5ブロック、大きな邸宅ではそれ以上重ねる形式で、北京や河北・山西など各地に数おおく残る。巨大規模の宮殿群は、その原則を究極まで組み合わせたものである。このような建築配置は、陝西省の発掘遺構によって、西周時代初期の宗廟にまでさかのぼることが判明した。時代を通ずる不変的な原則は、平面形態だけでなく、構造技法や装飾手法の面でも見られる。世界に例のないほど悠久かつ持続的で、ところが遺構＝実例にふさわしいものがない。私の研究は、実物遺構・考古資料・文献史料を駆使することによって、資料不足を補おうとする試行錯誤の繰り返しである。

■悠久の伝統を宋代の建築書からさかのぼる

歴史にふさわしい建築遺構が著しく乏しい反面、中国には厖大な量の文献史料が残る。漢文化のあらゆる面に通ずることだけれども、建築について特記すべきは、世界的にも類例を見ない詳細な記述からなる大部の専門書が現存していることである。北宋の高級建築官僚であった李誡が1100年に完成、その3年後に頒布された『営造法式』である。本書は、全36巻の詳細で厖大な建築要覧であり、従来その重点である大木作制



『營造法式』「挙折」図。垂木を折り繋いで緩やかな反り屋根を形成する特有の手法。上から順に下に一定の率で引渡し、反りをつくる。石印本（1920年版）の図。各弦に朱・青・黄線の記入があるように、宋代の初版は多色刷であった。



二仙観大殿内の道帳（北宋・1097年、山西省晋城市）　上党地方の伝説上の姉妹を祀る祠廟。空中高く架けられたアーチ橋と天宮楼閣は『営造法式』にも記載があり、北魏洛陽で盛行したという飛閣・浮道は実在したことを雄弁に物語る。

度、すなわち木造建築に関する技術的な記述の部分にのみ研究の興味が集中してきた。しかし現実には『営造法式』は宮殿や檀廟などをはじめ主要な官営建築全般にわたる工程の経済統制を主眼として編まれた要覧であるから、その対象は華麗な木造建築の技術的・藝術的要素のみではない。記述は、石造アーチ排水溝から、庭園の亭、仏寺道観の内部に設けられる厨子の類まで、ほとんど全域をカバーする。本書の価値は、じつはこの広範な内容を包括している点にある。さらに、この本には著者李誡自身が冒頭に、自序・看詳・総釈という編著方針の総則にあたる部分を付している。中国では普通の流儀であるけれども、この部分には著者自身のメッセージがもっとも濃厚な密度で反映されているはずである、にもかかわらず従来本書はその建築技術的な側面ばかりが強調されてきた。専門家からすれば当然かも知れないが、古典解釈としては相当奇異なことだ。

とくに総釈の部分は本文全般に通用する術語定義集を兼ねたもので、実際には古典文献史料から代表的な用語や概念の記載を採録した最古の建築辞彙である。900年前の建築家が、当時より1000年以上前の古典に見える空間・建物類型の概念、術語の定義を明記し、必要に応じて宋代に通用した用語や現場で取材した俗語の注記まで加えたもので、単なる用語集の範囲をはるかに超えるものである。この部分は建築史家にとって難解であるため、完璧に無視されてきたが、残存する実物遺構が著しく乏しい中国建築史の本来の面貌を正確に蘇らせるためには絶対無視することはできない。私はすでに中国内外の学者がまったく触れようとしなかった主要部分の解読に初めて着手した。ひとり建築史のみならず、中国文献学にも些かの貢献をなし得ると信ずるからである。

■造園の失われた原像を古典文献に求める

庭園は、空間造形としては突出して中国文化の特質が表現された分野といっていい。しかし、造営年代の古い実物遺構がほとんど現存せず、歴史学では当然であるはずの史料批判の手続きをなぜか一切免除されたまま扱われ、加えて考古発掘の成果さえ皆無に等しいため、清代以降の再建にかかる江南地方の庭園が中国の造園藝術の伝統を代表するものかのように誤解されている点では、建築史の分野よりはるかに悲惨な情況である。蘇州や揚州に現存する数々の名園とされる実例は確かにその伝統の終着点でこそあれ、それら最末期の駄作をもって古代以来の深遠なる思想的背景に支えられた、優雅あるいは怪奇な中国庭園の空間藝術の特質を理解しようとするのは、もはや無謀というほかない。現存する近代の遺構のあたえるインパクトがあまりにも強烈であるために、しばしば恣意的解釈を生みやすく、真摯な研究対象にはなりにくかったことも事実だ。近代科学としての造園史が実質上まったく発育することがなかった所以でもある。

歴史的には、中国における人工的景観の造営は、秦始皇帝が咸陽に築いた苑囿が確実な最古の例証であり、以来、漢の武帝の拡張した上林苑などが最初の高潮期であった。魏晋南北朝時代の自然風尚を志向した文人庭園の盛行、隋唐時代の初期的爛熟期を経て、北宋の徽宗のとき太湖石の奇観を頻用する特異な造園の風潮の転機が訪れた。現在私たちが見る江南の名園は往時を隔たること甚しく、庭園の風格はいま想像するものとは異質であったことは明白である。造園史研究の困難は計り知れないほどだ。私はしかし、だからこそ、ここでも原点に還り、中国特有の豊富な文献史料から原点に遡及しようとする。断片的な記載を拾い集め、中国造園史料集成（秦漢－六朝）を刊行しようとしたのは、基礎文献を容易に使える工具を制作提供し、低劣な水準に甘んじてきたこの分野を、すくなくとも初歩的レベルに高め、中国造園藝術の特質を論ずるための実質的議論を基礎から始めたいからである。

刑罰とシルクロード

中国古代中世の法制

教授◆富谷（とみや） 至（いたる）

1952年生、1979年、京都大学文学部文学研究科博士課程中退

紀元前221年にはじまる秦帝国は、驚くべき合理性を備えた法体系を有していた。秦の法、つまり秦律の具体的内容はこれまでほとんど分からなかったが、近年中国各地から出土する木簡、竹簡から次第にその内容が明らかになっていったのであり、そこから浮かび上がってきた姿が、こういった法体系であり、刑罰制度であった。

■法制史研究の課題

この秦の法制は、ほぼそのまま漢帝国の法（律）と刑罰制度として引き継がれていく。秦漢の刑罰は死刑と労役刑が基軸となっており、贖刑、罰金刑もこの労役刑の外側に位置するものであった。こういった中国古代の刑罰制度の実態とその基本的理念を明らかにしたのが、『秦漢刑罰制度の研究』（1998　同朋舎）であり、これは1996年に京都大学文学部に提出した学位請求論文を公表したものにほかならない。

大学卒業後、私は秦漢時代、つまり中国古代史を研究分野においてきたが、上記拙著でもって古代法制史から魏晋南北朝の法制研究へとその対象を移すことにした。秦漢時代法制史の研究が完結したからでは、決してない。陸続たる新出の出土文字資料は秦漢時代の法制研究を塗り替えるものであり、今後私の不十分な研究成果は修正を余儀なくされるに違いない。そのことは承知している。ただ、法制史の研究は限られた時代・王朝の個別の法制度、私の場合には刑罰制度だが、その考証に終始するのではない。中国において罪とはどう考えられてきたのか、刑罰の目的とは何であったのか、中国の法制度を受け継いだ日本の法制度がどう展開していたのか、さらには東洋と西洋の刑罰制度・刑罰思想の相違を考えること、とりもなおさずそれは東アジアの法制を明らかにすることであり、中国および日本の現代法の研究に結びつく。それが法制史を専攻する者に与えられた課題だと私は考えている。

その課題に取り組むためには、秦漢の法創設の時代から順次、時代を下って考証を進めていく法制度の通史的研究を通して、東アジア世界の法制度、刑罰制度を有機的に研究していかねばならない。今日生じている教育刑、保護主義の問題、死刑制度、刑罰適用をめぐる東洋と西洋の軋轢、我が国の死刑制度をめぐる議論の本質もそこから照射することができるのではない

ドラローシュ作「レディ・ジェーングレーの処刑」（ロンドン・ナショナルギャラリー所蔵）、拙著『古代中国の刑罰―髑髏（されこうべ）が語るもの』（中公新書）

だろうか。

これが理想である。しかし、言うは易し。この研究計画は残された時間と能力を考慮にいれないものと言わねばならない。せめて唐代に至るまでの六朝の刑罰体系と変遷を明らかにし、漢の法制がどのように改変され、唐の制度に流れ込み、さらには日本の律令にどの様に受容されたのかの考察は、少なくとも取り組まねばならない課題と自覚する。そこには、漢民族の刑罰に与えた異民族の影響という問題もよこたわっている。「魏晋南北朝刑罰制度の研究」が目下の研究課題の中心的柱である。

実は、これまで私は二足の草鞋を履いてきた。その一足は上記の法制史研究であるが、今ひとつは簡牘史料にかんする研究、いわば古文書学研究ともいえるものである。

■簡牘・流沙の遺跡、そしてシルクロード学

世界において紙（paper）は、2世紀、後漢の時代に蔡倫によって作られた。蔡倫以前にすでに中国には紙は存在していたのであるが、そこに字を書くための材料としての紙は、2世紀以後の出現と見て差し支えない。

紙以前には一般的に文字は竹や木の札に書かれていた。所謂「竹簡」「木簡」と称されるもので、これらを総称して「簡牘」と我々は呼んでいる。この簡牘は、河西回廊、ゴビ砂漠さらにはタクラマカン砂漠の紀元前2世紀から紀元後4世紀にかけて漢代から晋代の漢人王朝が築いた軍事防衛施設遺址から20世紀になって出土し、やがて中国内地の古墓からもでてきて現在ではその数十万片以上にものぼる。

簡牘の、特に辺境砂漠地帯から出土した簡牘の内容はその大部分が行政・司法文書、簿籍の類であることから法制史研究には必須の資料であり、そこから簡牘とのつきあいが始まったのである。

ただこの簡牘の研究は法制史、制度史の資料だけでなく、またそこに書かれている記述内容だけが分析の対象となるだけでなく、書跡、材料、記述のされ方、さらにはその簡が送達されてきたのか、コピーとしてとられ保管されていたものか、それとも練習用に習書されたものかを判断せねばならない。また一本の木簡がどうしてその遺跡から出土するのか、出土した遺跡はいったいどういった機能の施設だったのかを明らかにせねばならない。そういった分析は記述の内容にとどまらず、簡牘の形状、書体、墨跡の濃淡に残るわずかな証拠を見つけだし、それを帰納的に分析し、またそのほかの証拠とともに総合的に解明する。まさしく、簡牘学は犯罪現場に残されたわずかな痕跡、証拠を探し出しそれを分析し犯人を洗い出す犯罪捜査と同じだといってよかろう。古代史は推理小説だとよく言われるが、虚構が許される推理小説よりも、対象が現実であるが故にいっそう厳しい。

タリム盆地、ジグダ・ボルン北西の砂漠（ホーカン・ヴォルケスト撮影）、編著『流沙出土の文字資料―楼蘭尼雅文書を中心に』（京都大学学術出版会）から。

今日も点々と残る流沙の遺跡は中国王朝がおいた軍事・行政施設であったが、とりわけ簡牘が使われていた時代にはどの様な文書が逓伝され、また各施設はどの様に機能していたのか、それらを解明することは外交、軍事をも含めた東西交流を明らかにすることに他ならない。東と西を結ぶ政治、文化、宗教の考察、それはシルクロードのうえでの交流史であり、最近には「シルクロード学 Silkroadology」という語が使われている。

ところで、シルクロード学は、なにも中央アジアだけを対象とするのではない。

話を簡牘学にもどすと、中国で20世紀の初めに木簡が出土したのち、間もなくにして日本でも出現し、今日にいたるまで平城京木簡、長屋王木簡など陸続として発掘されてきている。「木簡」「木簡学」という語はすでにその市民権をえ、中学・高校の教科書にも登場する。この日本における書写材料の一つである木簡、その起源はどこにあるのだろう。中国の木簡？　しかし、日本木簡の時代は7、8世紀にあたるが、中国では唐の時代、書写材料は紙に代わっていた。日本も正倉院文書でも分かるように紙も使われていたが、河西回廊シルクロードから出土した木簡が時代を経て受け継がれて日本の木簡へと繋がっていったのか、それとも中国木簡との関係はなかったのか。

「遣唐使は唐の都で木簡を目にしたのだろうか」、私の興味はここにある。

道気神三位一体の宗教――道教

道教思想研究

教授◆麥谷邦夫（むぎたにくにお）
1948年生、1977年、東京大学大学院人文科学研究科中国哲学専修課程博士課程単位取得

諸宗教における神の本質やそのありかたは、それを生み育んできた文化の背後にある民族性や歴史性に規定されて多種多様である。中国においては、祖先祭祀と天帝信仰とを核とする儒教が国家祭祀と結びついて古くから存在したが、2世紀末には神仙思想や巫呪術などを基盤とする道教が成立し、それとほぼ並行して仏教が中国社会に定着し始める。以後、中国の宗教はこの三教が鼎立する形で歴史を刻んできた。なかでも道教は、その教理形成にあたって、民族的土着的要素を基盤としながら、同時に外来の仏教教理の影響をも強く受けてきた。しかし、道教教理の形成過程で中核的役割をはたしてきたのは、道家の「道」の哲学と中国思想の共通基盤的役割をになってきた「気」の思想とであった。

■「道」の哲学と「気」の思想

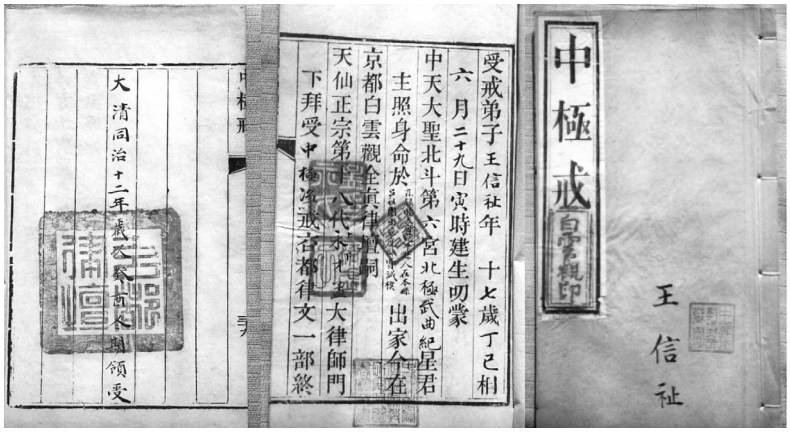
「道」こそが世界の根源的真理ないし実在であるとしてその思想哲学を構成したのは、老子を筆頭とする道家の徒であった。『老子』に説かれる「道」は、相対有限の世界を超越した唯一絶対の存在であり、言語表現や感覚では決してその本質を捉えることができない。しかし、いかなるかたちも持たないというその絶対的な無限定性のゆえに、「道」はこの世界の根柢にあって絶えず万物を生成変化させ、おのずからなる世界秩序を支えていくことができるとされた。そして、この「道」の真の在り方を理解し、この「道」と一体となることによって、はじめて人間の究極至善の生が確立されるというのが老子に代表される道家思想の根幹であり、それをうけた道教教理の目指す最高の境地でもある。

『老子』と並んで道家思想を代表する『荘子』は、万物の中に「道」が普遍的に含まれていると主張したが、その背後には、万物の生成は「道」から始まるという道家の生成論が存在する。『老子』第四十二章は、「道が一気を生じ、一気が陰陽二気を生じ、陰陽二気が交わって陰陽沖和の三気を生じ、その三気が万物を生みだす。万物は陰気を負い陽気を抱き、沖和の気によって調和を保っている」と世界の生成を説いている。この世界の生成を「気」に担わせる思想は、儒家道家といった学派の相違を越えて中国思想の共通基盤をなしていた。こうした基盤の上に、後漢時代には「道」から混元の一気である「元気」が生じ、「元気」が「陰陽」の二気を分出し、陰陽二気が混りあった沖和の気との三気から天地人（万物）が生ずるという生成論が説かれ、一般に承認されるようになる。このことを裏返せば、万物は「気」によって構成されるが、万物の「気」はさかのぼると混元の一気に帰着し、その混元の一気こそは「道」の根源性を現実の世界で具体的に顕現しているのだということになる。こうして、「道」が万物の中に普遍的に含まれていることの根拠を、万物が「(元) 気」から構成されていることに求める主張が説かれだし、次第に「道」そのものよりも「気」に関心が向けられる傾向が見られるようになる。

茅山道教の符書。符の起源は古く漢代にまでさかのぼる。文字を図像化し、その「気」を作用させて呪術的な力を発揮する。一種の書芸術でもある。

■道気神の三位一体

道教教理の体系化が進められると、「道」と「気」と「神」という道教教理の根幹をなす三者の関係に対する教理的追究が行われ、「道とは気である」あるいは「道は気を根本とする」という説が主張されるようになる。その結果、このことを一語で表明する「道気」という独特な概念が形成されて、「道」と「気」、「神」と「気」の同一性が説かれるようになり、さらには「気」を媒介項とすることによって、「道」と「神」との同一性が説かれるようになる。六朝期の『老子』注釈書の一つである『想爾注』に、道教の最高神のひとつである太上老君に関して、「一は形象を消散すれば気となり、形象を結べば太上老君となる」というのは、このような思想を反映したものである。つまり、道教教理の展開につれて、神々の世界と人間の世界との関係、すなわち道教の宗教的世界観を明確に表明する必要が生じた。その際、道教は古典的生成論に基づきながらその宗教的生成論を構成する道を選択したために、「道」を始元とする古典的生成論の宗教的神秘化が進められ、「道」と「神」とは、生成論において対等の位置を占めるようになったのである。こうして「道気」という新しい概念を軸として「道」と「気」と「神」とを三位一体とする道教の宗教哲学が成立するにいたる。



道教の十方叢林である北京白雲観の玄都律壇で受戒した王信祉に与えられた「中極戒」本。十七歳の王信祉はこの受戒によって正式の道士となった。

このように、道教教理では、「道」と「気」と「神」とが究極の実在の理法、形象、神格という三つの側面を意味し、究極においては三位一体の存在としての「道気」に帰着するとされた。この「神」とは「気」にほかならないという説は、他の諸宗教には見られない道教独自の教説である。六朝後半からの教理体系化の過程では、全般的に仏教教理学の影響を極めて強く受けたにもかかわらず、その根幹をなす「神」の本質規定については決して仏教の所説を受容しなかったところに、道教教理の独自性と中国における「気」の思想の強力な伝統を見いだすことができる。

■神仙道術と気

道教徒の最終目的は、本来、不老不死を実現して神仙世界に昇ることにあった。その後、仏教の影響下に死後の昇仙の道も用意されるようにはなるが、不老不死は常に道教のメイン・テーマであり続けた。それを実現する手段として、水銀化合物を原料として不老不死の丹薬や黄金を錬成する錬丹術（外丹）、水銀化合物のかわりに体内の気を循環融合させて体内に丹薬を形成する内丹術、天地の根元の気を体内に取り入れ循環させることによって不死を達成する服気導引術、体内に存在し人間の生命活動を維持している体内神と交感し、自己の身体そのものを神的存在に転化させる内観存思の術、大地の混濁した陰気を含む穀物の摂取を忌避して体内の気を純化させる辟穀術、体内の精気を脳に循環させて生命の活性化を図る還精補脳術、性的技法によって男女の陰陽二気を摂取調和させて長生を図る房中術などのさまざまな技法すなわち神仙道術が生みだされ実行されてきた。

これらの道術は、いずれも上記の道気神三位一体説を理論的背景にもち、基本的には「気」の操作を通じて不老不死を達成し昇仙しようとするものであって、「気」の概念を抜きにしては、道教は成りたたないといっても過言ではない。同時に「気」の概念を共通項としながら、古代の医学思想との間に相互の影響関係が見られる。道教における五蔵神説は内経医学の反映であり、また、中国において長期にわたって解剖医学が発達せず、道教系統の「五蔵図」に類似のものが継承されてきたことなどは、その典型的な例であろう。

長い道教の歴史の中では、教理も道術も時代を反映してさまざまなヴァリエーションを生じてきた。しかし、終始一貫して変化しない核心は、「気」の概念を核とする道気神の三位一体説であり、このような道教教理の本質を理解することは、同時に「気」の思想を基盤とする中国文化そのものを理解することにもつながるのである。

中華世界と工業化社会

近代中国の綿紡績業

1947年生、1974年、京都大学大学院文学研究科博士課程中退

教授◆森（もり） 時彦（ときひこ）

沙市から重慶への航路の難所、三峡を曳航されて遡行するジャンク。竹で編んだ長大なロープを大勢の引き手が曳いている。

1896年3月日本は、下関講和条約締結にともなって開港された沙市に領事館を開設した。長江中流に位置する沙市は、三峡をチャネルとする湖北省と四川省との間の商品流通におけるハブ港であった。湖北東部で産する荊州土布（手織綿布）、綿花などの在来綿製品が沙市から、100人を超える引き手に曳航されるジャンクで三峡を遡上して四川に送られた。帰りのジャンクには、四川の自貢などで在来技法により生産されていた井塩（地下深くにねむる海水を竹製のパイプで汲み上げ、同時に噴出する天然ガスを燃やして煮つめた塩）が満載され、沙市を経由して湖北一帯に供給された。同じ時期にイギリスのある商工会議所が派遣した視察団は、「華西（中国西部）のマンチェスター」との印象的な比喩で、沙市における在来綿製品取引の繁盛振りをその報告書に記録している。

一方、当時の領事館は、今ふうに言えばマーケット・リサーチに多大のエネルギーを傾注したが、特に沙市は日清戦争の結果獲得した新しい市場であった関係から、その調査は念入りを極め、風俗習慣から商工業、金融にまで及んだ。すでに工業化の離陸態勢に入った明治30年代の日本人にとっても、沙市の在来産業は畏敬の念をもって観察される対象だった。なかでも山西票号、銭荘など在来金融機関については、「由来支那ハ最モ金融機関ノ発達セル所ナレバ随テ銀行業ノ進歩ハ又実ニ驚ク許リ」との率直な感想が残されている。

■工業化の波

現在の工業化社会は18世紀後半以降のイギリス産業革命に端を発する。産業革命は機械力による大量生産を実現したことで、工業ばかりでなく商業、金融、さらには社会システム全体にまで変革をもたらした。この工業化社会が出現する以前、中国は政治、文化は言うにおよばず、産業の面でも東アジア世界をリードする立場にあった。

冒頭に述べた日清戦争後の沙市の情形は、中国がイギリスに発する工業化の波にいままさに洗われ始めようとしていた時期の姿にほかならない。そこには工業化以前にありながら、ほぼ日本に匹敵する人口をかかえる四川省に三峡を越えて、荊州土布、綿花などの在来綿製品を一手に供給する巨大な集散市場と、その膨大な商品流通を支える在来金融機関の発達ぶりが描き出されている。当時の沙市における荊州土布の取引量は、白木綿に限って推計すると、日本全国に綿工業製品を供給していた大阪の取引量に十分匹敵、あるいはそれを凌駕する規模だった。「華西のマンチェスター」と称されたのも由なしとはしない。

以上のような沙市の事例が象徴するように、工業化以前の段階で世界の最高水準に屹立していた中国社会は、やがて西洋近代のもたらした工業化という命題に

直面して、長期にわたる試行錯誤の途を歩み始める。中国近代史の分野では、従来から西洋近代と伝統中国の葛藤というパラダイムに多大の関心が払われてきたものの、その多くは国民国家形成の問題を中心とする政治あるいは学術、文化の面からのアプローチに終始してきた。しかし、そもそも近代工業化社会の基点となった産業革命において、そのリード役を果たしたのは綿工業にほかならず、また工業化の波が世界に及んでいく過程でも綿工業が最先端に位置した事実を想起すれば、綿業を中心にすえて中華世界と近代化の問題にアプローチしてみるのも無意味ではなかろう。

四川省の奥地を肩に担いで輸送される綿花俵。たぶん綿花問屋の名称であろうが、「萬泰東記」から「義泰源行」との文字がプリントされている。

■中国綿業の近代化過程

中国綿業が近代化される過程は、大きく二つの段階に分かれる。第一の段階は、アジアで最初に近代紡績業が勃興したインドから大量の機械製綿糸が輸入されるようになった結果、中国農村の在来織布業において原料綿糸が従来の土糸（手紡糸）からインド製の機械製綿糸に転換していく段階だ。それまで整綿、紡糸、整経、織布の全工程をほぼ一貫して処理していた農村家内手工業の在来織布業に、半製品の機械製綿糸が無制限に供給されうるようになったのにともない、生産、流通、消費の各面で変化が起こった。機械製綿糸の普及につれ、在来綿業が変容していくプロセスと言える。大雑把な推計では、中国在来織布業の600万担と見込まれる原料綿糸のうち、19世紀末までにほぼ3分の2が機械製綿糸に転換された計算になる。そこで、インドの機械製綿糸が中国農村市場へ本格的に流入しはじめた1880年代から19世紀末までを「中国在来綿業の再編段階」と措定する。

第二の段階は、「中国近代綿業の成長段階」だ。中国農村在来織布業は原料綿糸を機械製綿糸に転換した後も、主に10〜20番手の太糸を用いて旧式織機による厚手土布の生産を継続した。この生産形態を中国綿業の「在来セクター」と呼ぶ。これに対して20世紀初頭になると、直隷省高陽県の事例のように、同じ農村手工業でも足踏み織機（鉄輪機）のようなやや近代的な織機を生産用具にして、40番手前後の細糸を原料綿糸に使用する改良土布（薄手機械製綿布の代替品）の生産に転換する農村も現れてくる。さらに沿海地方の都市部を中心に、力織機を設置した近代的な織布工場や兼営織布にのりだす紡績工場などが次々に登場してくる。従来はほとんど見られなかった問屋制家内手工業、さらにはマニュファクチュア、機械制綿工業など、前近代には無かったという意味での「近代的な」生産形態が登場した。これらを「近代セクター」と呼んで、「在来セクター」と区別する。

「近代セクター」の萌芽はすでに20世紀初頭からみられるが、その形成は第一次世界大戦を契機に顕著となり、さらに本格的な成長を始めるのは「1923年恐慌（太糸の生産過剰による紡績不況）」以降となる。したがって第二の段階は、1920年代から30年代にかけての時期ということになる。敢えて時期区分すれば、1880〜1900年を「在来綿業再編期」、1900〜1920年を「近代綿業萌芽期」あるいは「過渡期」、そして1920〜1937年を「近代綿業成長期」とすることも可能だ。

■アジアサイズの視点

第一段階の引き金となった機械製綿糸の流入は、イギリスによる世界市場形成の過程で、アメリカ南北戦争が引き起こした綿花飢饉を背景として、植民地インドに近代紡績業が急速に勃興したことが発端となった。また第二段階では、1880年代にイギリスモデルの近代紡績業を立ち上げた日本が、日清戦争を契機に綿工業製品の対中国向け商品輸出を本格化させ、さらに第一次世界大戦以降「在華紡（日本巨大紡績企業の中国現地工場）」という形の大規模な対中国向け資本輸出を推し進めたことが、近代セクターの形成に深くかかわる要因となった。こうして中国綿業の近代化過程は、工業化の波がアジアサイズで引き起こした連鎖反応の一環として展開することになった。

19世紀後半から20世紀前半にかけて展開された中華世界の工業化への歩みは、1980年代以降再び加速しはじめた。かつて出現した問題群は、1世紀の時間の隔たりを超えて今また、その装いを新たにしながらもやはりアジアサイズで分析すべき対象として再び立ち現れている。この研究テーマは、中華世界の近代化というパースペクティブから現代中国がかかえる問題の深層を照射する試みとも言える。

19世紀音楽とヴィルトゥオーソ

音楽におけるロマン派とメロドラマ的音楽

助教授◆岡田暁生（おかだあけお）
1960年生、1988年、大阪大学文学部博士課程修了。文学博士

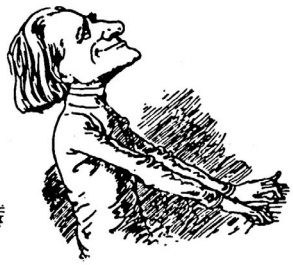
西洋音楽の19世紀は、いわば裏と表がある。一般に「ロマン派」と呼ばれるこの時代の音楽の表看板（ファサード）は、言うまでもなく、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、ショパン、リスト、ブラームス、ワーグナーといった、「偉大な作曲家」の系譜だ。世界に冠たる大作曲家たちの列伝――従来の音楽史研究はロマン派の時代を、いわば「偉人たちのいかめしいブロンズの胸像が並んでいる空想の博物館の一室」として表象し、「ベートーヴェンの遺産がいかにシューベルトへ継承され、シューマンやブラームスやワーグナーにおいてそれがどのように更なる展開を見せたか？」という「世界に冠たるヨーロッパ音楽帝国」の物語として語ろうとしてきた。だが同時に、19世紀ヨーロッパ音楽には、きわめて雑然とした、散文的で、キッチュじみた裏の顔があることを見落としてはならない。それは音楽の大衆娯楽化であり、音楽産業の成立であり、音楽教育のマス化であり、そして作曲／演奏における「はったり」や「機械化」の横行である。

こうした19世紀における西洋音楽の質の変化は、恐らくそれを支える社会階層の交代に伴って生じたものだと考えてよいだろう。そもそも18世紀までの西洋の芸術音楽は、専ら教会と貴族の音楽として発展してきた（要するにそれは「文字が読める」人々のための音楽だったのであり、従ってそれが楽譜に「書かれる」音楽として発達したのも当然であった）。だがフランス革命以後、新たに勃興してきた上流ブルジョアたちが、19世紀における芸術音楽の主要なパトロンとなる。「上流ブルジョア」と言えば聞こえはいいが、その大半は要するに成金企業家たちである。何から何までかつての貴族の生活様式を模倣したがる彼らにとって、娘にピアノを習わせ、オペラ座の予約席を購入し、演奏会に通うことは、自らのステータスシンボルの証だったのである。

Liszt erscheint, den Hochmut seines Lächelns durch die Sutane gemildert. – Beifallsorkan

Erste Akkorde. Er wendet den Kopf, um sich des Publikums zu vergewissern…

schließt die Augen und scheint nur für sich selbst zu spielen



Pianissimo: Der heilige Franz von Assisi spricht mit den Vögeln

Hamlet-Grübeleien, Faustisches Wühlen, Seufzer…

Erinnerungen: Chopin, George Sand, Jugend, Mondschein, Liebe…

伝説のピアニスト、フランツ・リスト。彼に代表されるヴィルトゥオーソ・ピアニストは、近代的な「スター」の原型だったと考えてよいだろう。

■ヴィルトゥオーソ現象

こうした19世紀における芸術音楽の世俗ブランド化を象徴するのが、ヴィルトゥオーソ現象である。「ヴィルトゥオーソ」とは、簡単に言えば超絶技巧を売り物にするスター演奏家である。ヴァイオリンのニコロ・パガニーニやピアノのフランツ・リストはその典型で、19世紀の音楽愛好家の大多数が熱中したのは――ベートーヴェンやシューベルトやブラームスといった「真面目な」作曲家ではなく――こうしたヴィルトゥオーソたちだった。例えばフランツ・リストは3000の座席をもつパリのオペラ座でピアノ・リサイタルを行ったが

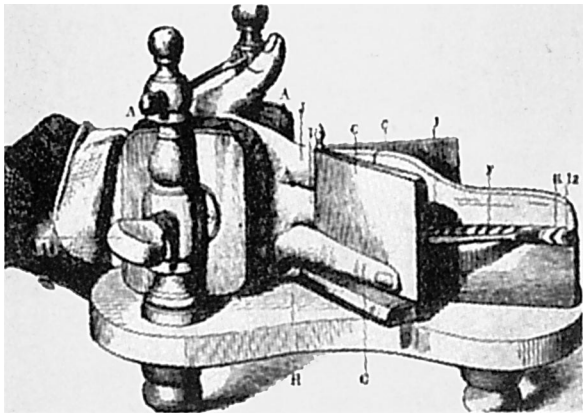
(1837年)、これは二重の意味で前代未聞の出来事だった。まず第一に、それまでの演奏会はせいぜい300席くらいのホールで行うのが常であった。そして第二に、それまでの演奏会は「まず歌手が２曲ほど歌い、その次にヴァイオリニストが演奏し、オーケストラの演奏をはさんでから、最後にピアニストが何曲か弾く」という、いわば「五目演奏会」が普通であって、「２時間ぶっ通しで１人が弾く」という「リサイタル」という制度は存在していなかった。つまりリストのリサイタルは、「大観客」を相手に途方もないことをやってみせる「スター」というものの誕生を告げる出来事だったのである。

「大観客」の誕生は、19世紀における音楽のありように根本的な変化をもたらす。つまり彼らを「圧倒」するための「効果」と「技術」とが徹底的に追求されるようになり始めるのである。何はともあれ聴衆を熱狂させ拍手喝采を得た者が勝ち――こうした（必ずしも音楽の「質」ということとは無関係な）サクセス至上主義が、19世紀音楽を規定するようになり始めるのである。

■ピアニストになりたい！

事実、19世紀くらい短期間に途方もなく演奏技術が複雑になっていった時代は、他にはない。19世紀の作曲家／演奏家は、いわば機械の新技術を開発するような感覚で、新しい演奏技術を追求するようになった。「技術開発」こそが「大観客」を「あっと言わせる」ための最も手っ取り早い「効果」なのである。19世紀初頭に活躍したウィーンの名ピアノ教師カール・ツェルニーは、「いずれにせよ我々が相手にしなければならないのは、音楽を理解して心を動かすのではなく、『まあ、すごい！』と言わせることの方が簡単な連中、つまり玉石混淆の大聴衆なのだ」と書いている。そして無数の少年少女たちが、いつの日かスターになることを夢見て演奏技術の習得に血眼になる、そんな時代が訪れる。

こうした時代の風潮を反映する典型的なジャンルが「練習曲」である。その名の通り、これは「指の練習をするための」曲だ。このような目的のための作品は、18世紀までは存在しなかった。指の練習は音楽表現の練習や音楽理論の学習と一体で行うべきものだというのが、それまでの考え方だった。指の技術だけを取り出して、それのみを徹底的に鍛えるなどという発想は、19世紀に入って初めて現れたものなのである。「音楽的な表現」など後回しでいいから、ライバルたちより少しでも先に、手っ取り早く指の技術をマスターしてしまった方が勝ち――練習曲というジャンルの中に、こうした経済効率の原理と弱肉強食の思想を見ることはたやすい。



指と指の間を出来るだけ大きく広げることが出来るようにする目的で作られた器具だが、これを使って指を壊したピアニストも続出した。

■分解・反復・増強の思想

こうした「練習曲」の構成は常に単純である（技術的には拷問のように難しかったりするのだが）。つまり様々な曲に必ず出てくる難しい技術を短いパターンに還元し、それを延々と繰り返して弾かせるのである。そして反復していくうちに徐々にテンポを速め、音量を大きくしていくようにといった指示があるのが常だ。ドレドレミレミレ――ドレドレミレミレ――ドレドレミレミレ……。ピアノを習っていた人なら必ず子供の頃にやらされていたはずの「ツェルニー」や「ハノン」といった練習曲は、すべてこのパターンで作られている。

身体運動を短いパターンに分解還元し、それを号令にあわせて反復し、それによって筋肉を増強するという発想――思い出すべきは、19世紀がまた「体操」が誕生した時代でもあったということであろう。ドイツのグーツムースおよびヤーンが考案した「トゥルネン」という体操が、「心身ともに健全な国民を育成する」という理念のもと、ヨーロッパ各国の学校教育で取り入れられるようになったのは、練習曲の成立とまさに同じ時代だったのである。ちなみに「体操」と言えば、鉄棒や鉄アレイ等の筋肉増強のための器具がつきものであるが、音楽においても事情は同様だった。19世紀には上図で示したような指の筋肉を鍛える器具が大量に作られたのである。ほとんど中世の拷問用の道具のような奇怪な器具の数々――これらもまた、「偉大なる19世紀ロマン派音楽」というファサードの影に隠された、その「裏の顔」であった。

Colonial Office文書が示唆するもの

戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク

助教授◆籠谷直人（かごたになおと）

1959年生、1986年、一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得

1930年代は、世界的な不況と戦争の時代として語られる。そのなかで、日本は、財政（軍事）支出を増やすことで、経済を刺激し、32年の後半から、不況からの脱出をはかる。しかし、円の切り下げによる日本の輸出拡大が、あまりにも急激であったことが国際的な通商摩擦問題を引き起こした。

■日本は「孤立」したか？

低廉な日本製品は、不況にあえぐヨーロッパの植民地（南アジア、東南アジア）では歓迎されたが、他方で、ヨーロッパ本国の製品を締め出すことになったからである。なかでもイギリスは、自国の綿工業ランカシャーの利害を守るべく、植民地政府の関税率の引き上げを通して、日本製品への追い討ちをかけた。イギリスが、32年にオタワ連邦会議をひらき、その勢力圏のあいだの関税を低くし、他国には高い関税を課する「ブロック」経済政策を採用したことは有名である。このブロックによって、日本製品は締め出され、世界経済からの「孤立」化を余儀なくされた、と考えられてきた。そして、孤立した日本は、多様な選択肢を与えられることなく、結局、豊富な資源と市場を求めて、中国大陸への更なる侵略（37年の日中全面戦争）を試みることになる。30年代前半の経済的な対立が、30年代後半の深刻な政治的対立につながるという歴史的解釈が生まれる。孤立と暴力の間に有意な関係を探ろうとする解釈は、「忠臣蔵」に代表されるように、日本人の好むところである。しかし、この解釈は、ひとつ間違えば、暴力の「正当化」につながりはしないか？日本は、ヨーロッパの先進国に「虐められ、止むを得ない戦争」を選んだのだろうか？

■「日本製品は有益であり、課税に値する」（CO852文書より）

はたして、30年代前半の日本は、本当に孤立していたのか？　イギリス公文書館（Public Record Office）に保管されている植民地省（Colonial Office）文書（http://www.pro.gov.uk/にて検索可能）を読むなかで、そうした疑問を改めてもった。30年代の英領植民地が直面していた経済問題は、本国からの投資をうける借金国であったところから、利子・配当などの本国への定期的支払いを滞りなく履行することであった。植民地の債務不履行（default）という金融利害問題は、当時の基軸通貨ともいえるポンドの信任問題にもつながる可能性を有した。基軸通貨としてのポンド・スターリングの広がりは、ランカシャーの綿製品の市場圏よりも、広大であった。そこで、植民地からの毎年の定期的な支払いを履行させるために、本国が植民地に課した経済政策の一つが、植民地の本国に対する為替レートを高めに設定し、その水準で固定することであった。植民地の強い通貨は、本国への支払いを容易にするからである。もっとも、高い通貨は、現地にデフレ圧力を加え、かえってナショナリズムを高揚させる。

そして、注意したいのは、こうしたイギリス本国の強制を背景に、日本と英領植民地の間に、通貨政策の対照性がうまれてきたことである。基軸通貨ポンドに対して、割高に設定された植民地通貨圏（インドの場合、25年から、1シリング6ペンスに固定）と、日本のような通貨切り下げ圏（32年から、1シリング2ペンスでリンク）の対照である。まるで、断層のような通貨圏の対照は、後者から前者への輸出を促進させる。なかでも、こうした通貨政策の対照に強く反応したのが、中国人、インド人などのアジア人商人のネットワークであった。低廉な日本製品は、消費購買力の疲弊した植民地の人々には必要不可欠であり、商人にとっても仕入れコストの低さから、日本製品の取引は有益であった。そして、この有益な日本製品取引に、ヨーロッパの商人も乗り出すようになる。植民地の強い通貨をもってすれば、日本製品は容易に仕入れることができたからである。

本国の金融利害に即して、植民地に課された第二の政策は、植民地国家財政を均衡させることであった。

「Y.Kojima」サイン入り「神戸港眺望」、1938（昭和13）年、油彩キャンバス（部分）。作者は不明だが、1938年頃の神戸の風景であることは間違いない。当時の貿易の賑わいを記録するものとして描かれた（神戸市立博物館蔵）。

そのためには、支出を切り詰め、歳入を維持することが求められた。支出の削減は、現地にデフレ圧力を加えたが、歳入を維持するなかで、重要視されたのが、関税収入であった。19世紀には、地税収入が重要であったが、ナショナリズムの高揚する20世紀には、土地からの収入は期待できなくなった。むしろ植民地の工業化を促すような輸入関税が、収入とナショナリズムの両立を果たしうるものであった。そして、関税収入を高めるうえにおいて、日本製品の輸入は絶好の課税対象であった。植民地政府にとって、日本製品は排斥の対象ではなく、むしろ「課税に値する」dutiable対象として歓迎されたのである。

■日本の市場開放

そして、第三の政策は、植民地の貿易収支を黒字に維持することであった。この黒字が支払いの源泉となるものであれば、第一次産品の輸出を通した黒字の維持は決定的であった。イギリス本国も、この点を認識しており、ブロック政策の根幹といわれるオタワ協定も、本国が自治領・植民地から第一次産品を積極的に購入する体制をつくりだしていた。しかし、イギリス本国とその帝国圏内で、必ずしも必要とされない第一次産品については、帝国圏外に販路を見出す努力が求められた。そこで、大不況からいち早く回復した日本に対して、市場開放をもとめる圧力が加えられたのである。

日本綿製品の輸入規制を議論したと言われる、33年の日印会商でも、日本綿製品の輸入割当量と関税率の問題は、交渉の早い段階で決着しており、むしろ、争点となったのは、インド棉花をめぐる日本の市場開放であった。当時の日本綿業界では、薄地の布の生産に適した長繊維のアメリカ棉花を求めており、短繊維のインド棉花の恒常的な購入に躊躇する傾向があった。しかし、日本政府の代表団は、協定締結を通して、インド棉花の定期的な購入を約束する。協定は、改定を通して、39年まで有効であったことを考えれば、日本と英領インドを通した通商的な相互依存関係は維持され、業界を拘束したのである。

日本製品が、現地人の財布に見合うものであり、商人にとってその取引が有益であり、そして植民地財政にとっては課税に値するものである限り、日本の通商的浸透は、大いに歓迎された。イギリスのブロック政策は、植民地の現状に即して、むしろ開放性を有したのである。また、日本は、第一次産品をめぐる市場開放問題においても、協調的な姿勢を示した。30年代の日本は、世界的に孤立するのではなく、ヨーロッパ植民地との通商的な相互依存を維持し、あわせて、イギリスのポンド防衛に貢献したのである。政治的対立を用意するような、経済的対立（孤立）は存在しなかったのである。侵略の論理は、別にさぐる必要があろう。

ゲノム研究と生命観・人間観

現代社会における生物学・生命科学

助教授◆加藤和人（かとうかずと）
1961年生、1989年、京都大学大学院理学研究科博士後期課程生物物理学専攻修了。理学博士

遺伝情報を担う物質であるDNAの２重らせん構造が、J.ワトソンとF.クリックという二人の科学者によって解明され、発表されたのは1953年のことである。以来、半世紀足らずの間に、遺伝はもちろん、細胞増殖や免疫から個体発生に至るまで、あらゆる生命現象の基礎となる仕組みが、分子のレベルで明らかになってきた。1990年代に入ってからは、生物の持つ遺伝情報の総体であるゲノムを解読するゲノム研究が本格化し、2001年には当初の予定よりもはるかに早く、ヒトゲノムのおおよその解読結果が発表された。

人類が作り上げてきた文明の歴史の長さから見れば、ほんの一瞬とも言える短い時間のあいだに、我々は、様々な生物、そして人間自身の遺伝情報の詳細を解明し、望むならばそれを人為的に改変する能力を手に入れたのである。このような生物学・生命科学の爆発的な発展が、現代および将来の社会にとってどのような意味を持つかについては、とてもまだ整理された状態にあるとは言えない。

生命科学と言えば、一般に、医療や農業などの応用分野への影響に注目が集まっている。だが、人間や生物のゲノムを分析することで、進化の歴史をこれまでにない具体的な形で調べられるようになったことや、人間とは何か、生命とは何か、といった問いを考える際に役立つ知識が、様々な研究から生まれていることを認識することは重要である。

このように、応用分野から、思想、歴史研究まで、広範な分野に影響を与えようとしている生物学・生命科学の歴史と現状を探り、研究の発展が社会の中で持つ意味を分析することを、私の研究は目指している。

■生命観・人間観の変化を追う

近代科学の発展とともに、我々の自然観・人間観は大きく変化してきた。20世紀に入っても、その変化は続いているが、私はこれまで、20世紀後半の分子生物学やゲノム研究の影響を中心に調べてきた。

なお、ここでは「生物学」は生物を対象とする学問全体を指し、「生命科学」はその中でより普遍的な原理を探求する分野を指す。私は、生命科学を中心にしながら、生物学全体を対象に研究を進めている。（両者をまとめて「生物学・生命科学」と表記する）

分子生物学やゲノム研究の発展に注目すると、20世紀後半は、３つの時期に分けることができる。まず、ワトソン・クリックの発見が行われた1950年代から、その後の60年代にかけては、分子生物学が発展し、すべての生物に共通の原理としての遺伝の仕組みが明らかになった時期である。研究から生まれた機械論的見方は、J・モノーの『偶然と必然』などを通し、思想界にまで大きな衝撃を与えた。

けれども、当時はまだ、遺伝以外の生命現象、例えば個体発生や免疫、神経の機能などは謎に包まれており、生物だけの未知の原理が見つかるのではないかという期待が持たれていた。70年代から80年代にかけては、それらの現象が本格的に研究されるようになった時代である。その結果、個々の現象に関わる遺伝子が次々と明らかになり、一見複雑に見える現象も基本的には理解可能で、生物は物理化学の法則に支配された物質的存在だと見なされるようになっていった。また、酵母から昆虫、人間まで、系統上遠く離れた生物同士に同じ遺伝子が多数見つかり、生物としての人間は特殊な存在ではなく、他の生物と様々な仕組みを共有する一つの生物種だということが示されていった。

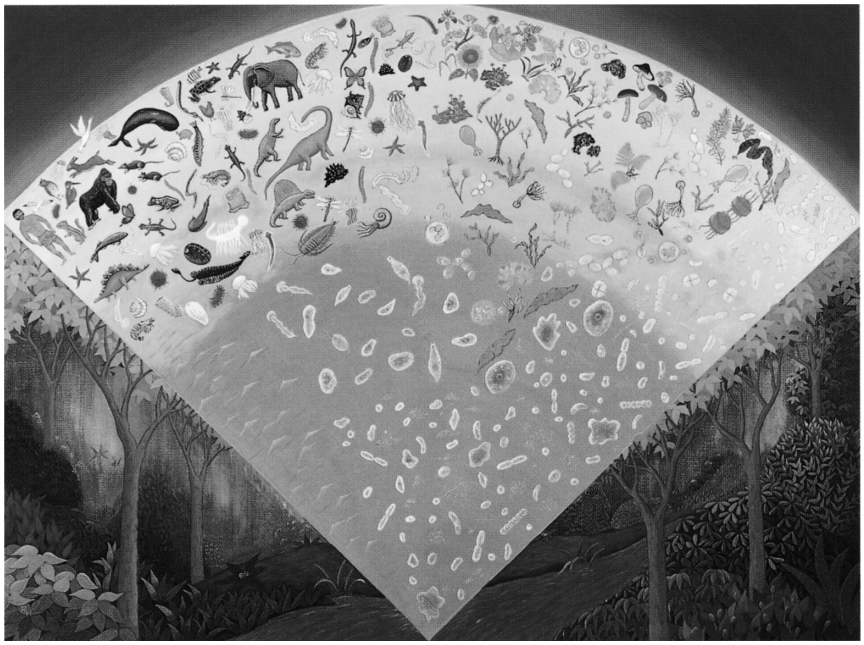
90年代に入ると、いよいよゲノム研究が本格化する。微生物からヒトまで、様々な生物が持つ遺伝情報の全体が丸ごと解読され、遺伝子の総数が次々と明らかになっていく。

そのことが意味するのは、生物が物質的存在であることに加え、その基盤をなすのが有限の情報であることがわかったことだ。もちろん、一次元の情報にすぎないゲノムが解読されても生物のすべてはわからない。また、生物としての人間の理解と、人間の文化の理解は別である。精神活動の理解もこれからの課題だ。だが、少なくとも自然科学の対象としての人間や生物は、

半世紀前の「神秘的な存在」から、相当程度に「理解できる存在」へと変化した。その点が、おそらくこの半世紀に起こった生命観・人間観の最大の変化である。近年発展の著しい先端医療技術やバイオテクノロジーは、まさにこのような、人間や生物を「物質的存在」と見る思想に支えられている。

■科学研究の現場を歩く

現在は、生命観・人間観の変化とその意味を、生物学・生命科学全体を視野に入れ、さらに詳しく調べようとしている。例えば、上述のように、分子生物学やゲノム研究の発展により、生物や人間を物質的存在とする見方が広がったのは確かだが、同時に、これらの分野と進化学・人類学などとの共同研究から、生物や人間が長い時間をかけて進化してきた「歴史的存在」であることを示す事実が次々と明らかになっていることは重要だ。生物や人間は物質的存在であるとは言え、合理的に設計された人工の機械とは異なり、進化の歴史を背負った「無駄の多い存在」だというのが、現代の生物学・生命科学が示す生命像なのである。



「生命誌絵巻」　多様な生物が長い時間の中で誕生した様子を表現。扇の要が生命の起源、縁が現在を表す。（JT生命誌研究館蔵。発案：中村桂子、協力：団まりな、絵：橋本律子）

私は、そのような視点から先端医療技術やバイオテクノロジーをとらえ直せば、人間や生物を単なる「分子機械」と見るのではなく、多様性や個性を尊重し、バランスの取れた技術の開発や利用が可能になるのではないかと考えている。新しく発展する進化研究が持つ意味を、今後、詳しく検討していきたい。

ところで、研究の歴史や生命観・人間観の変化、社会への影響などを調べるには、情報収集の方法が問題になる。私の場合、広く時代をさかのぼる際には当然、文献を重視するが、1980年代以降の研究に関しては、できる限り研究の現場で情報を収集している。

そうした観点に立ち、特に2002年度からは、これまで体系的な調査があまり行われていない、日本とアジア諸国を中心としたゲノム研究の歴史と社会への影響に関する調査研究を、本格的に開始する予定である。日本および、近年、ゲノム研究に活発に取り組むようになったアジアの数ヶ国（中国、韓国、シンガポール他）を対象に、研究者への聞き取り調査や研究機関、マスコミ等での情報収集などを行い、ゲノム研究の各国での発展の経緯と、社会や文化との相互作用の様子を分析する。その中から、アジア各国の最先端の科学との関わり方や、ゲノム研究から生まれる生命観・人間観が各国の市民の考え方や行動に与える影響なども見えてくるかも知れないと期待している。

■科学のコミュニケーション

最後に、これまで述べた研究と平行して調べようとしている問題がある。それは、科学研究の経過や成果がどのように表現され、伝達されるかという問題だ。具体的には、研究によって新しく発見された物質や現象、概念に対し、どのような用語が使われるかという専門用語の名づけの問題と、研究を専門家あるいは専門外の人に紹介するために、どのような映像が作られたかという映像表現の問題である。専門用語については翻訳の問題にも注目しており、「進化」や「ゲノム」などの言語間での表現の違いにも注目している。

言葉であれ、映像であれ、いずれも科学者のコミュニティーが、専門外の人々とどのようにコミュニケーションしているか（きたか）を具体的に知る手段として優れていると考えており、現地調査などの際に情報や資料を収集し、いずれ体系的な分析を行いたい。

以上、いくつかの異なる角度からの研究を同時に進めているのが現状であるが、それらが、やがて現代の生物学・生命科学の発展の歴史と、社会との相互作用を総合的に捉えるための基礎となることを期待して、研究を積み重ねていきたい。

「労働者の保守党支持」の深層

19世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム

助教授◆小関（こせき） 隆（たかし）

1960年生、1991年、一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学

1883年4月19日のロンドンは、プリムローズの花で溢れかえっていた。花屋の店頭はもちろんのこと、クラブやレストランの窓辺、ウェストミンスターの議員たちや道行く人々の胸元、さらには馬車を牽く馬の耳、等々、そこここにプリムローズが見られたという。プリムローズは元首相ベンジャミン・ディズレイリが愛した花とされ（実のところはかなり疑わしい）、彼の２回目の命日にあたって、人々は追憶の気持ちを慎ましい花に込めたのである。以降、４月19日＝「プリムローズ・デイ」にディズレイリの銅像をプリムローズで飾りつけることが慣習になっていく。

■ポピュラー・コンサヴァティズム

プリムローズに彩られたこの日のロンドンの光景は、まもなく到来する「保守党支配の時代」を予告していたのかもしれない。1886年８月から1905年12月まで（1892-95年の成果の乏しい自由党政権期を除いて）、1846年以来数十年間にわたりほとんど「万年野党」だった保守党が政権を掌握しつづけ、19-20世紀転換期は保守党の黄金時代となる。

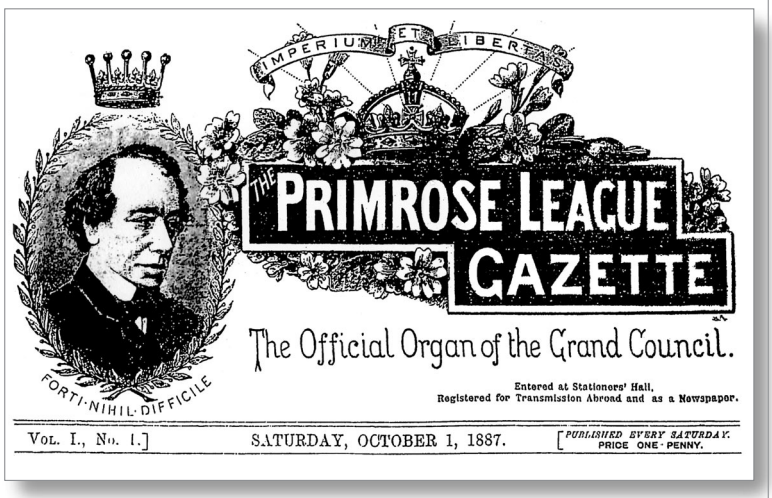
注目されるべきは、「保守党支配の時代」が、史上初めて有権者の過半数を労働者が占めるに至った直後に到来していることである。労働者と保守党、親和性の高い関係にあるとは見なされないのが普通だろう。同時代においても、保守党の行く末を憂慮する見方が支配的だった。ところが実際には、選挙権を得た労働者たちのうち約3分の1は保守党に票を投じ、彼らの票が保守党の得票の約半分を占めた。「保守党支配の時代」は労働者の保守党支持、すなわちポピュラー・コンサヴァティズムを抜きにしてはありえなかったのである。

それでは、ポピュラー・コンサヴァティズムという現象をどう理解すればいいのだろうか？　従来最も広く用いられてきたのは、労働者に備わる敬譲の態度による説明と労働者が示すプラグマティズムによる説明である。いずれの説明にもそれなりの説得力が認められるが、同時に、あまりにも一般的かつ没歴史的であるという印象もまた否めない。世紀転換期イギリスの労働者の間で、どのようにして敬譲やプラグマティズムが喚起・維持されたのか、どのようにしてそれが保守党支持へと導かれたのか、こうした問いは依然として残されたままである。さらに、敬譲やプラグマティズムとは異なる角度からポピュラー・コンサヴァティズムを把握する余地もあるだろう。

■プリムローズ・リーグ

「保守党支配の時代」のイギリス社会の重大な特徴の一つに、「アソシエイションの文化」がある。世紀転換期のシティズンたちは、多様なヴォランタリ・アソシエイションを形成し、そこで余暇時間を送ることを人生の当然の選択肢としていたのであり、社会のさまざまな領域でこれらのアソシエイションが無視しえない影響力を行使していた（小関編『世紀転換期イギリスの人びと』人文書院を参照）。

とりわけ注目されるアソシエイションがプリムローズ・リーグである。冒頭で見た1883年４月19日の光景にインスパイアされた一部の保守党政治家たちが中



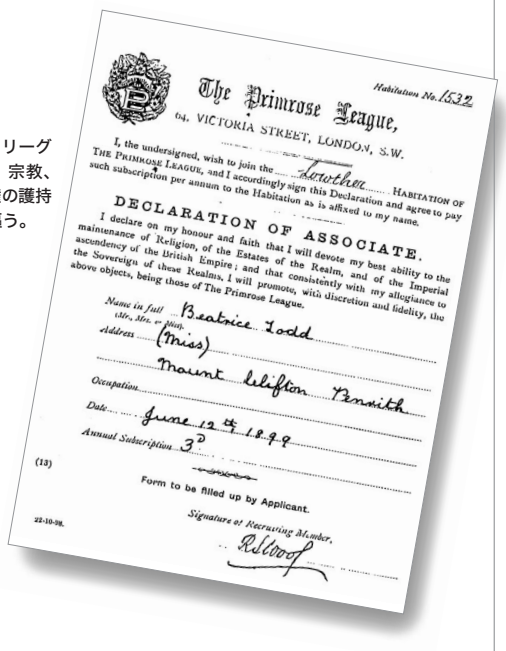
プリムローズ・リーグの機関紙『プリムローズ・リーグ・ガゼット』（創刊号）。
ディズレイリの肖像とプリムローズの花がデザインの中核を成している。

心となり、ディズレイリの政治路線の継承を旗印として同年11月に設立したプリムローズ・リーグは、「保守党支配の時代」のポピュラー・コンサヴァティズムを涵養・動員し、それを保守党支持へと導くにあたって、きわめて重要な役割を果たした（1913年以前は保守党から形式的に独立していたが、実際にはきわめて従順だった）。メンバー数は1891年には約100万、20世紀を迎える頃には約150万に達しており（半数近くは女性）、数字の信憑性についてはやや疑問が残るものの、プリムローズ・リーグがヴィクトリア時代で最大の政治団体であったという事実はまず争われない。

プリムローズ・リーグに関して特筆されるべきは、メンバーの約90パーセントを労働者が占めたことである。そして、多くの労働者を惹きつけていく際に最大の吸引力を発揮したのが、当時の政治団体としては斬新な社交やレクリエイションを重視するプリムローズ・リーグの活動スタイルであった。エンタテインメントの夕べ、パーティ、ピクニック、といったイヴェント（そこには政治的なメッセージが巧みに織り込まれてもいた）は、多くの労働者にとって抗いがたい魅力をもっており、しばしば地域社会のレクリエイション・センターとなったプリムローズ・リーグは、労働者の日常生活の中へと浸透していくことができた。しかも、こうしたイヴェントには、自らの邸宅をパーティやピクニックの会場として提供したり、あるいは労働者メンバーと杯を交わしたり、といったかたちで、プリムローズ・リーグの指導者の役割を担うことが多かった地域社会の有力者たちも積極的に参加した。階級間の協調や階級をこえた結束が演出されたのである。プリムローズ・リーグを舞台とするレクリエイションの共有を通じて醸成される貴族やジェントルマンから労働者までの一体感、ここにポピュラー・コンサヴァティズムの重大な基盤があったのではなかろうか？　労働者たちの日常的なアソシエイション生活からポピュラー・コンサヴァティズムを理解しようと試みることは、見当外れではないはずである。

■アイルランド問題

もう一つ注目しておきたいのは、「保守党支配の時代」で最大の政治的トピックがアイルランド問題（アイルランド自治（ホーム・ルール）の是非）だったことである。そもそも、「保守党支配の時代」の端緒は自由党政権による自治法案（1886年）提出とそれに伴う自由党の分裂にあり、また、プリムローズ・リーグを見ても、自治法案をめぐる情勢が緊迫した時期にメンバー数を急増させ、一気に大規模な政治団体へと前進している。アイルランド問題の浮上が、ポピュラー・コンサヴァティズムの広がりに一役買っていたわけである。


The Primrose League,
64, VICTORIA STREET, LONDON, S.W.
Habitation No. 1532
I, the undersigned, wish to join the Dorothea Habitation of the Primrose League, and I accordingly sign this Declaration and agree to pay such subscription per annum to the Habitation as is affixed to my name.
DECLARATION OF ASSOCIATE.
I declare on my honour and faith that I will devote my best ability to the maintenance of Religion, of the Estates of the Realm, and of the Imperial ascendency of the British Empire; and that consistently with my allegiance to the Sovereign of these Realms, I will promote, with discretion and fidelity, the above objects, being those of The Primrose League.
Name in full Beatrice Todd
(Mr., Mrs. or Miss.)
Address (Miss) Mount Lilifton Penrith
Occupation
Date June 12th 1899
Annual Subscription 3d
(13)
Form to be filled up by Applicant.
Signature of Recruiting Member.
22-10-98.

プリムローズ・リーグの加入誓約書。宗教、国制、帝国覇権の護持を3大目標に謳う。

労働者からの支持調達の重要性が飛躍的に大きくなっていた時代であるから、アイルランド自治に反対する陣営としても、労働者の耳に心地よいプロパガンダを展開する必要があった。そして、プロパガンダの常套手段となっていたのが、アイルランド人、とりわけナショナリストがいかに悪辣で劣等であるかをステロタイプ化して提示することだった。ステロタイプ化の有力な切り口として活用された人種や宗教は優劣の認識（優秀なアングロ・サクソン、プロテスタント、劣等なケルト、カソリック）と強く結びついており、プロパガンダのターゲットとされた労働者たちはそこに優越感（自分たちはアイルランド人より優れているのだという）の根拠を見出し、容易ならざる日々の生活の中でささやかな自己満足に浸ることが許されたのである。ポピュラー・コンサヴァティズムの浸透力は、誰もが抱え込み、同時になんとか抑制している他者を蔑視する感情を安心感とともに解放する機能に、大いに支えられていたように思われる。

＊

ポピュラー・コンサヴァティズムへの関心の高まりはイギリスにおいてもごく最近の現象であり、その決定的な契機はサッチャリズムの経験であった。サッチャリズムの政治文化は依然として過去のものとはなっていないし、日本においてもポピュリズムに依拠した保守的言説が猛威をふるっている。ポピュラー・コンサヴァティズムを労働者の日常生活に引きつけて理解しようとする研究を通じて、現代の閉塞的な状況に対し一石を投じる、この種の言挙げは面映くて苦手なのだが、研究の背後にこんな気持ちもなくはないことを少々照れながら認めてしまおう。

古都・「伝統」・文化財

近代天皇制の文化史的研究

助教授◆高木博志（たかぎひろし）

1959年生、1988年、立命館大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学

福沢諭吉は、「帝室論」（1882年）のなかで、文化君主論を提起する。イギリス流の王室を理想とし、皇室を政治の世界から隔離し、書画・彫刻・挿花・茶の湯・蒔絵塗物などの諸伎芸を保護するものである。「尊王論」（1888年）でも、「古を尚び、旧きを懐かしむ」人情が帝室を護るのに必要とした上で、神社仏閣・石碑・古城跡・古戦場などの史蹟・名勝の保存を主張する。そうした皇室のあり方は、近代に実現される。

皇室は、明治期を通じて、能楽や雅楽や茶の湯などを保護し、代表的な芸術家を帝室技芸員として取り込み、歌舞伎や講談を天覧し、大相撲に「国技」の名を冠する。さらに美術至上主義ではあるが、皇室が文化を保護する理念をあらわす、東京・奈良・京都の三帝室博物館（1900年）を成立させる。

■国際社会と「伝統」文化

さて文化を保護する天皇像は、明治初年の廃仏毀釈の嵐がおさまり、1880年代以降の、立憲制の形成期にあらわれる。それは国際社会を射程においた、日本独自の文化の創造とかかわっていた。

井上馨が主導した1883〜7年の鹿鳴館の外交は、極端な洋風の舞踏会や園遊会として繰り広げられたが、これだけでは欧米から見れば、アジアの「未開な」小国が欧米の「猿まね」をするにすぎない。

同時代のオーストリアの戴冠式においては、すでにガス灯があるのに、わざわざたいまつを燃やしたり、ウィーンの教会で王が貧民の汚れた足を洗い、妃がそれを拭くといった、デモンストレーションを国民の眼前で行なう。これがオーストリア王室らしさなのである。ロシアの戴冠式も、首都ペテルスブルグではなく、「伝統」ある聖なる都モスクワでおこなうのが、ロマノフ家流なのである。今日、イギリスらしいと思っている王室儀礼のほとんどが、19世紀のビクトリア女王時代以降に創られた「伝統」であるという。19世紀ヨーロッパに単一の「ヨーロッパ文化」があったわけでなく、ロシアはロシアらしさを、オーストリアはオーストリアらしさを創り出し、その固有な文化や歴史を国際社会に向かって誇示したのである。19世紀の国際社会は、列強が固有な国民文化を誇示しあう相克の場であったのだ。そうした現状を認識した、日本の政治家や官僚は、皇室とかかわった日本独自の文化的「伝統」を創り出し保護してゆく。

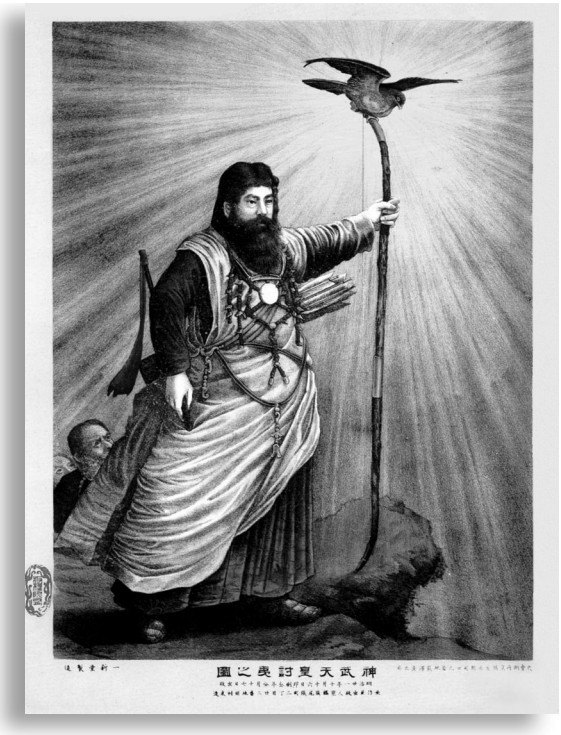
■古都奈良、京都の創出

ここでは古都奈良や京都の、文化の創造ないし復興について素描する。

文久期に公武合体運動の中で本格的な治定・整備作業が始まった天皇陵は、1889年大日本帝国憲法発布直後に、すべて確定される。伊藤博文は、万世一系の皇統を有する帝国は、外交上の信用にかかわるゆえに、歴代山陵の所在を明らかにすべしと主張する。すべての天皇陵の確定により、神武天皇以来の歴史的「伝統」が、目に見える形で欧米列強に誇示できるという戦略である。

神武陵の畝傍山山麓（橿原市）における創造は、「神武創業」という明治維新の理念を視覚化するものであった。文久3年（1863）田んぼの真ん中に、盛り土された円墳が突如、1万5062両という破格の費用をかけて、つくりだされる。隣接して橿原神宮が立憲制に呼応し創設される。神武陵・橿原神宮を含み込む畝傍山山麓は、1890年代から「皇紀2600年」の1940年まで、神苑として整備・拡張されてゆく。そして近世には地域社会の民間信仰の対象であった神武さんは、明治天皇やヨーロッパ君主に擬せられる武人としての神武天皇像へと、転換してゆく（図版）。

さて1880年代には、いったん廃物毀釈で廃寺となり僧侶が春日神社の神職となった、興福寺が再興される。それは藤原氏の末裔である華族（近衛・九条・西園寺など）の権威づけのため、貴族院設立を射程においたものだった。東大寺の傾きかけた大仏殿も、明治から大正期にかけて補修されてゆく。法隆寺も1878年に、経済的疲弊を皇室への献納宝物（御物になる）により



「神武天皇討夷之図」（1888年）。「神武創業」を理念とする明治維新後、神武天皇は、明治天皇の軍人化とパラレルに、西欧君主的な武人像となる。

乗り切り、1万円の下賜金をえる。大和三山の万葉の景観は、周辺諸村入会地の皇室御料地への編入により創り出されるし、嵐山や吉野山の景観も復興されてゆく。

京都では、明治2年（1869）の東京「奠都」により荒廃した京都御苑が、1877年（明治10）以降、整備されてゆく。京都御苑という「伝統」空間において、即位・大嘗祭が施行されることになる。また賀茂祭や石清水放生会など平安時代以来の祭や、後七日御修法といった仏教儀礼が再興される。

この時期にはフエノロサや岡倉天心により、古代以来の文化財・美術の調査、顕彰の作業がはじまる。とくに1888年からの全国臨時宝物調査は、はじめての体系的な全国調査である。仏像・絵画・工芸などの1点1点に、年代・作者・美の等級・ジャンルを確定してゆく。仏像は信仰の対象から美術の対象へと、価値観を転換する。そして流派・伝統の墨守ではなく、創り出すことこそが美術であるとの原理論や、洋画に対する日本画概念の登場も、この頃である。こうした基礎作業を通じて、推古時代（飛鳥文化）・天智時代（白鳳文化）・天平時代・貞観時代・藤原時代（国風文化）・鎌倉時代などといった、時代区分を有する天心の「日本美術史」（1890年）の叙述が可能となる。

古都論からいえば、「日本美術史」の成立により、古代・平安・鎌倉時代といった時間軸の流れと、奈良・京都・関東という空間的地平が、交差することになる。京都については、国がはじまる古代の奈良に対して、日本固有で優美な宮廷文化=国風文化を、京都イメージとして特化してゆくことになる。たとえば1893年のシカゴ博覧会において、国家を代表する日本パビリオンは、宇治の平等院を模した鳳凰殿であった。

■日清・日露戦争と日本文化

日清・日露戦争という対外戦争を通じて、日本はアジアという他者、欧米という他者と向き合い、そのなかで「日本文化」を確定してゆく。国語や「武士道」概念を生みだす。初詣、神前結婚式といった国民的神道儀礼が生成する。全国の城跡や小学校・師団に、戦勝紀念として、国花となった桜（ソメイヨシノ）を植えてゆく（図版）。1897年の古社寺保存法では、国家が美をランクづける「国宝」概念を生みだし、パリ万国博覧会（1900年）という外からの視線のもと、はじめて活字となった日本美術史、『稿本日本帝国美術略史』を編む。京都では、平安遷都1100年（1895年）を祝い、『平安通志』・平安神宮などを通じて、「優美」な幻想の平安文化をつくりだしてゆく。

日露戦後は、一人一人の国民を教化し、総力戦に対応する社会をつくりだす時代である。1915年に東京帝国大学教授黒板勝美は、たとえ史実でなくても、楠木正成親子の桜井の別れのように、国民を教化しうる伝説は、スイスのウィリアム・テルの伝説同様に顕彰に値すると断じる。こうした南北朝正閏論争以後の、国民教化を主眼とする20世紀の歴史学=「国史」の登場は、全国に神武天皇の神話上の足跡をたどり碑を建てる昭和期の神武天皇聖蹟調査、さらに今日の『新しい歴史教科書』へとつながってゆく。

そして近代に創り出された古都奈良、京都のあり方も、天皇制の政治文化として現代の問題である。

日清戦勝記念に植えられた弘前城の桜（1915年撮影）

レンブラントから光琳へ

近代日本の芸術と西洋

助教授◆高階絵里加（たかしなえりか）
1996年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得

黒船来航以来とくに明治期においては、日本は西洋の技術・文明をとり入れることに邁進を続けたが、西洋の科学技術導入の反面、自国の伝統的な精神的価値が失われることへの危機感が、和魂洋才の思想となってあらわれる。なかでも美術・工芸の分野においては、早くも明治10年代より伝統復興が提唱され、洋画排斥運動が盛んになる流れの中で、日本の伝統技法のみを教科とする東京美術学校の開設という事態をもたらした。従来このような動きは単純に欧化主義への反動としての「国粋主義」と見なされ、西欧派と伝統派の対立という図式による歴史解釈が支配的であったが、実際にはそれは単なる伝統復帰ではなく、西洋文明の力を充分に認め、ときにはそれを利用しながら新しい日本美術を生み出そうとする困難な試みであった。

竹内栖鳳《ヴェニスの月》
明治37年
紙本墨画・軸装
220.0×174.5cm
高島屋史料館蔵

■明治日本美術の選択

もともと日本の洋画は、高橋由一の時代から、迫真的な現実再現という写実表現において、それまでの日本の伝統絵画にはなかった威力を発揮してきた。ところが、明治10年代半ばに「妙想（idea）」の理念を持ち込んだフェノロサの影響や、実際にヨーロッパでアカデミックな西洋の絵画を学んで帰ってきた芸術家たちの指導により、20年代にかけては、本来の正統な西洋絵画の伝統である思想や理念の表現、あるいは構想力を必要とする非現実世界の描写が、たとえば歴史画の隆盛というような現象となってあらわれる。

明治20年代から30年代にかけては、西洋の技術と日本の伝統の融合により新しい日本の美術を創造するさまざまな試みが、とりわけ熱心に行われた時代であったといえる。当時の芸術家や美術指導者たちのなかには、すでに実際に欧米に赴いてその技法や理念を勉強してきた者もあり、国家による美術の制度化がすすめられてゆく。

明治29年には美術学校に西洋画科が設置され、30年代に入るとフランスのアカデミズムだけではなく、イギリスのラファエロ前派、イタリア15世紀絵画やオランダ絵画、あるいは中世や18世紀の美術などさまざまな時代の多様な流派が紹介されるようになり、いわば多元化してゆく価値の中から「何を」「どのように」描くべきかの問題が、再び大きくクローズアップされてくる。20年代に盛んであった歴史画論争は「日本の絵画は何を描くべきか」についての最初の真剣な議論であったが、その後、直接ヨーロッパ近代の芸術に接し帰国する者が増えるにつれて、新しい写実表現とともに、理念よりは感覚的な、あるいは装飾的な表現の模索が行われるようになる。

いうまでもなく、19世紀後半から20世紀にかけての西欧における感覚性や装飾性の追求の背景には、日本の影響も少なくはなかったため、印象派やバルビゾン派やラファエロ前派に日本人が親近感を覚えるのはごく自然な心の動きでもあった。しかし、一見日本の絵画に近いように見える西洋近代芸術も、眼には見えないがその根には全く異なる長く深い伝統を持っている。深い哲学的瞑想の伝統をもつ真の意味での西洋の正統な絵画は、日本の伝統や風土とはあまりにもかけ離れており、そのまま「移植」することはほぼ不可能であった。表面的で、深い思索は行わず、日々楽しければそれでよい日本人にふさわしいのは、明るく美しい色彩の、わかりやすい装飾的な絵画であると、黒田清輝はいう。ここから黒田のあの「レンブラントではなく、光琳になろうで

はないか！」（明治30年、『国民の友』英語版）という、悲痛なまでの叫びが出てくるのである。

■「第三の道」模索の実態

では、1880年代以降大きな変化を迎えた西洋から日本が学びうるものは何か、これが明治30年代の新たな絵画の問題であった。

それはひとり洋画のみの抱える課題ではなく、新しい伝統の創造を目指す点においては日本画にとっても同じように深刻な課題であり、さらにそれは、新聞や雑誌による美術ジャーナリズムの発達や地域間の交流により、京都を中心とする関西の画家たちにとってもまた、本質的な問題として受け止められたのであった。

竹内栖鳳の《ヴェニスの月》は、高島屋の依嘱によりびろうど友禅壁掛けの下絵として、明治37年に描かれた（完成品は明治43年の日英博覧会に出品）。三枚組みで注文されたこの壁掛け下絵は〈世界三景（雪月花）〉をあらわすもので、〈アメリカ（雪）〉は山元春挙の《ロッキーの雪》、〈日本（花）〉は都路華香の《吉野の桜》、そして〈ヨーロッパ（月）〉が栖鳳の《ヴェニスの月》であった。下絵とはいえほぼ実物大（縦2.2×横1.75m）の堂々たる絵画作品であり、水墨のみで広がりのある空間と湿潤な大気を巧みに描き出している。とりわけ実際に絵を前にして驚くのは、画面下方の水面が、観る者まで包み込んでさらに続いてゆくような存在感をもって迫ってくる点であろう。私たちはあたかも水の上をたゆたいながら、輝く水面を見つめているような錯覚にとらわれる。

この自然な奥行きと広がりのつくる空間や、湿り気さえ感じられそうな大気の表現を、栖鳳はどこから学んだのだろう。明治33年から34年にかけてのヨーロッパ旅行でのコローやターナーとの出会いがそのきっかけとなったとは間違いないが、栖鳳の西洋への関心は、それ以前から高かった。渡欧前の明治30年前後には、独自に西洋の美術理論や解剖学について勉強している。当時西欧の絵画技法を日本画にとり入れる新しい試みを行っていた岡倉天心傘下の横山大観や菱田春草と並んで日本絵画協会展に出品してもいるし、同じ頃

川村清雄《ヴェニス風景》
明治9〜14年頃
油彩・板
91.2×45.3cm
山岡コレクション

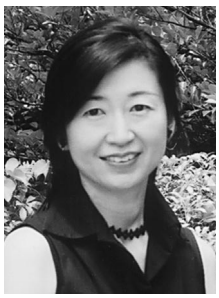
白馬会の目指していた新しい光や大気の表現にも注目していたはずである（栖鳳は油彩画も残している）。パリでも会っている浅井忠とは写真術の話もしたであろうし、その清新な風景表現に示唆されるところもあっただろう。さらに、西洋絵画の写実の真髄を理解し、いっぽう俳句もものした栖鳳は、おそらく子規の提唱する「写生」の絵画における問題にも無関心ではなかったに違いない。四条派という写実の精神の伝統をもつ京都の出身である栖鳳は、西洋の衝撃に驚嘆し圧倒されるようなことはなく、あくまで日本画家としての立場から、西洋に何を学ぶべきかを冷静に見きわめようとした。

東京においても，東西美術の本質を知る画家にとって、技法はあくまで画家の創意の手段として用いられるべきものであった。洋画家である川村清雄の《ヴェニス風景》は、留学先の現地で明治10年代に描かれたものだが，空の部分などは木の板目が透けて見えるほど薄く油絵具を塗り、建物は奥行きを否定するかのように画面と平行に配置され、さらに、遠近感を強調することになる建物の境目を隠すように木の緑色の色面を置き、そのうえ遠近の法則からいえば本来画面の奥には置かないはずの強い色である赤を一番奥の船の帆に用いるなど、多くの要素が西欧的な絵画観というものを否定している。画面が縦長であるのも（川村は帰国後も日本家屋にあうような極端に横長の作品を多く描いている）、そのひとつのあらわれであろう。もちろんこれが、19歳より10年間本場で学んだ川村にとっての一つの選択であったことはいうまでもない。30年代、新しい日本絵画の描法を模索していた天心に、日本画の絵画材料も西洋をお手本に改良してゆくべきかどうか尋ねられたとき、川村は「従来の日本絵具其儘にても、油絵ほどの効果を呈するに充分なるべければ，之が改良は敢て目下の急務にあらず」と答えている。

栖鳳や川村の選んだ方法は、「日本画」「洋画」という枠組みでは捉えきれない。明治30年代を中心とする「第三の道」模索の実態に、伝統と近代、日本と西洋、美術と文学、そして地域間の交流といった立体的な視点から検討を加え、日本近代化の本質を探りたい。

人間の範疇化と序列化

人種・エスニシティ論



助教授◆竹沢泰子（たけざわやすこ）

1989年、ワシントン大学大学院人類学研究科博士課程修了 Ph.D

人が皮膚色の異なる他の人間に対してその差異を強く意識するのは、人間の普遍的な認知に基づくものなのであろうか。アフリカ人を「黒人」、ヨーロッパ人を「白人」とする呼称は、可視性の高いものを分類しようとする人間の生来的行為の一部として捉えるべきなのであろうか。

私が「人種」概念という巨大なテーマに関心を寄せるようになったのは、一つには1990年代以後の欧米の社会科学において最も盛んなテーマの一つとなっているという学問的潮流による影響がある。しかしそれ以上に、今日の社会現象を常に意識しながら研究を行う者として、エスニシティ研究や日系人研究を含めそれまで携わっていた研究の延長線上で直面せざるをえない根本的問題であったからである。

百科事典や教科書では今日においても「民族」と対比させて「人種」は生物学的概念であると明記しているが、欧米は無論のこと、ごく最近では日本においても専門家の間では、生物学的概念としての有効性はもたないというのが一般的見解となっている。ただ1994年アメリカでベストセラーになった『ベル曲線』のように、知能指数、行動パタン、さらには疫病率などにも白人と黒人の間に生来的な人種的差異が存在するとする「人種」肯定論の主張も一部には根強く残っている。

■皮膚の色と遺伝子

2001年2月にヒトのゲノム解読の結果が発表されたが、それによりヒトは99.9パーセントDNAの塩基配列レベルにおいて同一であることが明らかとなった。0.1パーセントの差異は個体差であり集団間差は限りなくゼロに近くなるという。我々がしばしば目にする諸集団間の系統関係を示す系統樹であるが、ヒトには系統樹の枝に含意されるような相互の区別や特異性はなく、実際のサンプルの選出方法や数、ラベリングにも問題がある場合が多く、最近では人種論との関連では系統樹を疑問視する声も少なくない。ヒトの共通性より差異に注目し続けている研究者の関心の表れともいえよう。

そもそも人種(race)という概念は、身体形質、とくに皮膚色を重視して、人間をいくつかの集団に分類するものであるが、例えば、フィージーの人々がアフリカのいずれの集団よりも東アジアの集団に遺伝学的には近いことなどは、皮膚色の類似がDNAの塩基配列レベルと無関係である例である。人種概念の基盤は、ユダヤ=キリスト教的世界観やヨーロッパにおける古代からの他者観や哲学によって築かれている。しかし、身体形質に基づく範疇化や偏見は古代から存在するものの、それに基づく明瞭な序列化が規定されていくのは、あくまでも西欧の植民地化以降のことであり、人種概念が近代の産物と呼ばれるゆえんである。

今日に至るまで日本や他の諸国において人種言説の根幹をなしているものに、18世紀後半に発表されたヨハン・J・ブルーメンバッハの「コーカサスないし白色人種」「モンゴルないし黄色人種」「エチオピアないし黒色人種」などの5分類がある。当時の時代的脈略に照らせば、人類は一つの種であり、人種間の差異は変異に過ぎないと主張したブルーメンバッハは、イギリス啓蒙主義に影響されたリベラルな立場に位置づけられる。しかしこれらの近代科学の祖も完全に自民族中心主義から自由であったわけではない。リンネやビュッフォンもさることながら、頭蓋学の祖と呼ばれるブルーメンバッハでさえ、自ら命名したコーカソイド人種はすべての「原」型であり、その分岐した二方向にモンゴロイド人種とエチオピア人種があり、さらにコーカソイドとそれら二つの人種の中間としてアメリカ人種、マレー人種を位置づけた。また「類型」という概念を築いたキュビエは、コーカソイドは、「その卵形の頭の美しさ」で際立ち、「最も高度に文明化され」「一般的に他国を支配下におき」、すべての原型であるとする。「黒人」については、「顔の下部分が突き出ており、唇が厚く、サルに酷似している」と記述しており、3人種間の優劣を前提としていた。これらの「近

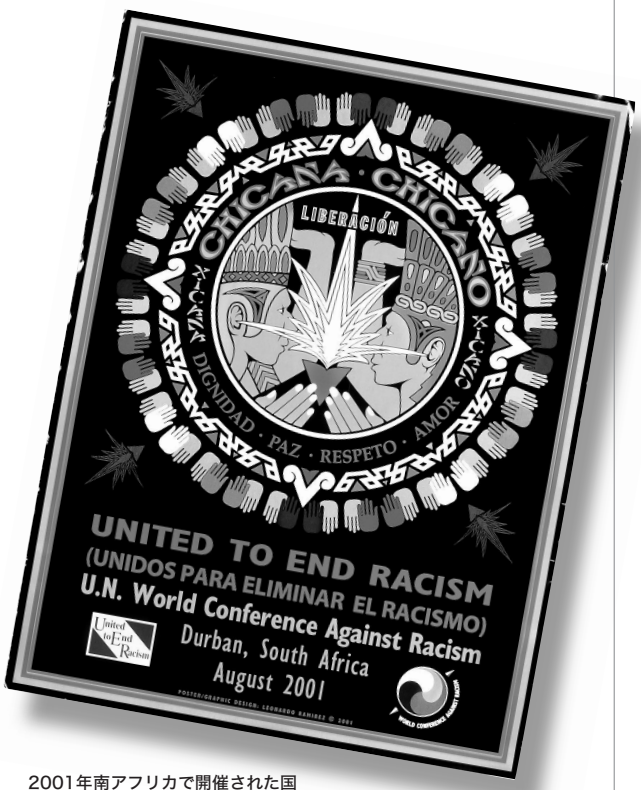
代科学の父祖」が西欧中心的世界観に束縛された分類を提示していたことは、当時の時代背景を考えれば特異なことではない。しかしこの時期のこのような分類の根幹を我々がほぼそのまま「生物学的概念」として継承し、西欧中心的価値観を基軸とした人種言説に身をおいている。他方、その後の奴隷制や植民地主義において搾取や抑圧の正当化に利用された科学的人種主義の弊害が今なお第三世界(欧米のマイノリティを含む)において貧困、疫病、低い識字率、そしてマイノリティに対して存続するさまざまな差別形態として見受けられるのである。今日のグローバリゼーションは世界における貧富の格差に一層拍車をかけている。人種問題は永久に消滅しないかもしれないが、現代の歪みを少しでも是正する鍵は、歴史を紐解くことにあり、人種について人文科学・社会科学の問題として研究する意義はそのようなところにあると私は考えている。

■世界観としての「人種」

そもそも肌の色が白くもない自己のヨーロッパ人に「白色」を当てはめ、アフリカ人を「黒色」で認識するのは、「白」が善、純潔、光、真実などの肯定的意味合いを、「黒色」が悪、穢れ、闇、虚実などの否定的意味合いを伴う、ユダヤ=キリスト教文化圏の色のイデオロギーの反映である。現実には世界には、ヨーロッパ人を「赤色」として認識する地域も稀ではなく(例えば、セネガル、ザイール、チベット、ミクロネシアなどの一部)、日本人や中国人などをヨーロッパ人とともに「白色」と認識する地域も少なくない(リベリア、ザイール、インド、パプアニューギニアなどの一部)。そもそも皮膚色を他者認識の上で重要視する文化圏は世界のなかにおいては一部にしか過ぎないのである。日本でも南蛮屏風などを見ると当時はヨーロッパ人の髪の色や鼻の形などが誇張されることがあっても、皮膚色に関しては日本女性の方がむしろ白く描かれるのが一般的であったことが想起されよう。このように知の言説となっている人種分類も、あくまでも他者をいかに認識し、分類するかという一種の西欧中心的な世界観に過ぎないのである。

■アメリカにおける人種化

私自身は、人種という概念の形成・発展過程に関心を払う一方、アメリカ合衆国における人種の境界の変容やステレオタイプ(固定イメージ)をも個別の事例として研究を進めている。現在国勢調査で人種として列記される「白人」「黒人」「インディアン」「アジア系」



2001年南アフリカで開催された国連反人種主義世界会議では、150ヶ国から6000人以上が参加し、人種差別撤廃に向けて連帯を呼びかけた

も、歴史的に個々の集団の境界は大きな変容を遂げている。例えば「アジア系」のなかには、インド系、フィリピン系、日系などを含み、言語や身体形質、慣習なども互いに大きく異なる多様な集団によって構成されている。インド系は第二次世界大戦前、日系や中国系と同様アジアからの移民として「帰化不能外国人」という差別的な法的身分であったにもかかわらず、戦後は日本との抗戦努力が認められ、「白人」のなかに含められた。しかし1980年の国勢調査からマイノリティに対する積極的措置の対象となるべく、自ら運動して「アジア系」というマイノリティのグループに含まれるようになった。日本人や中国人も「白い人」と見なされ、その定義にそって帰化権を認められた事例も数多く存在する。アジア系の範囲が徐々に規定されていくのは20世紀前半であるが、それと同時に「白人」の範囲が徐々に狭まり、「白人」「黒人」といった二極構造の性格が強まるのもやはりその頃なのである。アメリカにおける人種化は、国民化の過程において綱引きのような力関係の作用のなかで形成されていったと理解できる。

今後はジェンダーや階級との交錯についても研究を深めたいと考えている。さらにステレオタイプについても、認知と絡めながら考察していく必要がある。人間が何を基準に他者だと認知し、何をもって境界線の線引きを行うのか、そしてそれが何故なのか、ライフワークとして追っていきたい。

漢文化圏と藏（チベット）文化圏の境界へ

川西走廊の漢藏諸語の記述研究

助教授◆池田（いけだ）　巧（たくみ）

1962年生、1993年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学

四川省の西の山岳地帯は、ヒマラヤから続く褶曲山脈の東端にあたり、その北は平均標高が二千メートルを越える青藏高原へと繋がっていく。険しい山々の間をいく筋もの河川が流れ、その谷あいの草地を中心に半農半牧のチベット系の民族が暮らしている。今日では中国の経済発展とともに内陸へと延びる道路が整備され、資源の往来が活発になるにつれて漢民族の流入も多くなったとはいえ、漢語がチベット世界へ浸透していくのは容易ではなかった。この地域を通る山の道がチベット文化を運ぶ幹線道路であることは昔も今も変わらない。

■漢文化圏とチベット文化圏の境界

四川省の西北の高原地帯は半農半牧の生業形態を基礎とするチベット文化圏、東の低平地（四川盆地）は農耕民である漢文化圏であるが、その境界に位置する山岳地帯には、岷江・大渡河・雅礱江・金沙江・瀾滄江・怒江の六本の大河が南北方向に平行して流れ、各河川に沿った渓谷には道が通じ、民族移動のルートとなってきた。この地域に居住する人々の間には、生業、建築、宗教、食習慣など暮らしの隅々にまでチベット文化の深い影響が及んでいるけれども、チベット語とは異なるさまざまな言語を話すエスニックサブグループが存在する。中国の民族研究の宝庫として知られるこのフィールドは、社会人類学者の費孝通氏によって〈川西民族走廊〉と命名されている。

言語の地理分布を見てみると、北からペマ〈白馬〉語、チアン〈羌〉語、ギャロン〈嘉戎〉語、ダウ〈道孚〉語、グイチョン〈貴瓊〉語、ヂャバ〈扎壩〉語、チュユ〈却域〉語、ムニャ〈木雅〉語、アルス〈爾蘇〉語、ルズ〈呂蘇〉語、ナムイ〈納木義〉語、シヒン〈史興〉語、プミ〈普米〉語、イ〈彝〉語、ナシ〈納西〉語と、すこしずつ重なりあいながらいくつもの島を形成しているかのようである。このうちチアン〈羌〉族、プミ〈普米〉族、イ〈彝〉族、ナシ〈納西〉族が独立した民族として認定されているが、他は大部分がチベット族とされてきたため、近年になってようやく「発見」された言語もあって、現地調査による記述報告が蓄積され、音韻／語彙／文法の基本構造が少しずつ明らかになりつつあるものの、その地理分布、使用人口、下位方言、共通語との機能分担など不明な点も少なくない。

■類型構造の発展のメカニズムの探究

これらの言語はそれぞれ、漢文化とチベット文化の影響を大きく受けながらも独自の発展を遂げてきた。同地のチベット諸語が相互に如何なる影響関係をもち、どのような歴史的発展をたどってきたかについての研究は、古い時代の文献資料がほとんど残されていないために困難が多い。私の研究の基本的な方向は、現地調査を行なうことによって、個別の方言について主として音韻論・形態論レベルの共時的な分析を通じ、その諸特徴を明らかにするとともに、近隣の方言との比較や文献資料との対応などから、より古い段階の状態を推定して歴史的な変遷の過程を跡付け、同地域の諸言語の類型構造の発展のメカニズムを探究することにある。

互いにほとんど理解し得ないほど異なる言語でありながら、音韻／語彙／文法の各レベルにおいて共通した類型構造が存在する事実はきわめて興味深い。これらの言語が話されている地域は、漢文化圏においてもチベット文化圏においても辺境地域であるが、中央地域では失われてしまった文化的な諸特徴が辺境地域に残されていて、それが歴史の空白の復元に貢献した例は少なくない。〈川西民族走廊〉の諸言語の類型構造の研究は、現代の口語では痕跡的にしか反映されないチベット文語に見られる豊富な動詞の接辞の意味と機能や、文献記録しか残されていない西夏語の文法構造の解明にもヒントとなる有益な情報を提供するものとして大きな貢献が期待されている。今後、各言語の語彙や文法、方言の研究がさらに進めば、民族学、建築学、生態学などの協力を得て、今日のような言語のモ

〈川西民族走廊〉の諸語が分布する羌系の文化圏では、家畜と同居するチベット式の住宅に、要塞状の多角形の塔を配した独特の様式を目にすることができる。

ザイク的分布が成立するに到った歴史的経緯や言語間の類似と多様性を生じた諸要因なども近い将来に明らかにすることができるだろう。

■人類文化の理解への啓発

文献研究と活きた言語の調査研究との大きな違いは何だろうか。自らの民族語を民族文字で記録した文献記録は、誤りが少なく信頼性が非常に高いいっぽうで、規範に拘束されたり、言語活動の限定されたある一面しか記述されないという問題がある。何より歴史文献は、記述されたものが全てであって、記述されなかった問題を検証する術はない。それに対して活きた言語や社会の研究は「検証が可能である」という点が最大の利点である。とはいえ現地調査では先入観や誤認などのさまざまな要因により観察に誤りを生じやすいことにも十分な注意を払わなくてはならない。

日本から遠く離れた四川省の山岳地帯の言語の研究は、私たちの社会や文化とは一見何の関わりもないように思える。しかしグローバルな視点で考えるなら、人類文化を理解するための啓発性の高いテーマが少なからずあり、それは注目に値する。一例を挙げるなら、同地域の言語のいくつかは「確認性」と呼ばれる文法範疇を有する。「確認性」とはごく大まかに言えば、何かについて述べるにあたり、「話し手が見て確認した事柄」なのか、あるいは「伝聞などによる未確認情報の伝達」なのかを、日本語の「です」「ます」に相当する述語部分に異なる文法形式を使って表現するのである。

かつては日本語にもこの「確認性」という文法範疇が存在していたとされる。いわゆる古文において使われていた直接経験にもとづく過去の助動詞「き」に対して、回想の助動詞とされる「けり」の用法上の違いがこの「確認性」に近いものであったらしい。〈川西民族走廊〉諸言語に見られる「確認性」はこれとはやや異なったタイプで、自らが体験したか否かが重要であって、確認の手段として「過去を回想する」ことは主たる問題ではない。

このように今日でも活きて使われている〈川西民族走廊〉諸言語に見られる「確認性」を表す文法構造そのものが、人類の編み出した情報伝達の範疇化の方法のひとつとして、考究に値する興味深い現象であるばかりでなく、現代日本語では失われてしまった「確認性」とはどのようなことなのかをより明確に理解する上で、非常に重要な参考情報となり得る可能性もあるのである。

■現地調査により見えてくる事実

〈川西民族走廊〉諸言語の話し手の大多数はチベット族であるから民族の言語であるチベット語を使う権利は保証されている。しかし民族語よりもさらに下位レベルで使われ、文字をもたない「土地のことば」には、社会構造が生み出す消滅への潜在的な脅威がある。「土地のことば」の話し手の数については、統計データがなく不明だが、数千人規模の少数言語がほとんどだと予想される。しかし中国の民族政策によって保護されるのは民族の地域共通語（つまりチベット語カム方言）までであって、現地の人々の真の母語である「土地のことば」についての政策的配慮はない。教育および社会生活での利便を考えると漢語の優勢は圧倒的であり、たとえ現在の話し手人口が数千人を数えようとも、漢語を優先的に習得する次の世代が「土地のことば」を母語として自由に操ることができなくなったとき、言語とともに伝承されてきた独自の民族文化が極めて短期間のうちに消滅の危機に瀕する可能性があることも、フィールド調査の結果によって知り得たいまひとつの現実である。人類の貴重な文化遺産とも言える〈川西民族走廊〉の諸言語の調査とその構造の解明が急がれる所以である。

世界最大の政党の歩み

中国共産党史の研究

助教授◆石川禎浩（いしかわよしひろ）
1963年生、1990年、京都大学大学院文学研究科修士課程修了

世界で最も人口の多い国が中国だということは、よく知られている。もう少し頭を働かせれば、世界で最も党員の多い政党が中国共産党（中共）であることも、自然に理解できるだろう。現在、その党員数はゆうに６千万を越え、イギリス、フランスなど欧州主要各国の人口すら上回っている。この巨大政権党は今日、圧倒的な存在感で中国に君臨し、しばしば国際政治にも大きな影響を及ぼしているが、かの政党の活動が如何なるものかについては、その図体の大きさに比して、なかなか伝わってこない。さらに、その歴史となると、革命政党に見られるある種の秘密主義にわざわいされ、不明な点が多く、それが何やら怪しげな陰謀説や権力闘争説とむすびつけて理解されることも少なくない。「竹のカーテン」と呼ばれたひと頃に比べれば、近年少しは情報公開も進んだが、それでも同党の歩みが多くのヴェールに包まれていることに変わりはない。

■毛沢東以前の中国共産党

中国共産党の歩みは、1920年にソビエト・ロシアと国際共産主義組織たるコミンテルンからの働きかけをうけ、上海で陳独秀を中心とする急進的知識人が結集したことにはじまる。翌1921年には第一回の党大会が上海の租界で開催されたが、当時の党員は全国でわずかに53人であった。現在の６千万超という数字からすれば、ほとんど無に等しい人数だが、この党は結成から５、６年の間に急成長し、全国政治に影響をあたえるに至る。孫文の率いる中国国民党との合作（統一戦線）、そしてその両党による革命運動、すなわち国民革命の時期である。国民党と共産党との協力関係は、1927年半ば国民革命のさなかに破綻をきたすことになるが、その後も両党は時に不倶戴天の敵同士として、また時に外敵の侵略に抗する共闘主体として、常に現代中国政治を左右する二大勢力であり続けた。現在の海峡両岸問題――いわゆる中台統一問題――をはじめとして、この両党の関係史が濃い影をおとす現代中国の時事問題は意外なほど多い。1920年代の共産党の歴史にかんする叙述すら、往々にして現代性や政治性を帯びる所以である。

中国共産党の歴史といえば、誰しもが毛沢東の名前を思い浮かべるだろう。かれは党の最初期からのメンバーであり、たしかに1976年にこの世を去るまで、党の中心であり続けた。だが、毛沢東は結党当初からその最高指導者であったわけではない。かれが幾多の試練と挫折をのりこえて、共産党の実質的指導者になったのは、結党から十数年を経た1930年代の半ば、その権威が絶対化したのは1940年代以降であり、それ以前の共産党は、いわゆる「毛沢東の共産党」とは相当に異質のものであった。ごく簡単にいえば、毛沢東以前の中国共産党とは、「コミンテルンの中国支部」としての党であったと概括してもよいだろう。

1930年代以降の共産党の歴史が、常に「毛沢東」という固有名詞と共にあるとすれば、それ以前の歴史は、しばしば「コミンテルン」という言葉とともに叙述される。その結党過程にしても、国民党との合作にしても、またその合作崩壊にしても、いずれもコミンテルンの影響を抜きにしては語ることができない。否、より正確に言えば、単にコミンテルンにとどまらず、多くの国際的契機や影響を抜きにしては、中国共産党の歴史はそもそも成り立ち得ないのである。毛沢東時代の共産党が社会主義の土着化（中国化）といった点から説明できるとすれば、それ以前の共産党の歴史は、わが国を含めたアジア社会運動史、あるいは国際社会主義運動史の中に置いてこそ、はじめて全貌が見えてくるのである。

■内外資料の相互参照による歴史研究

わたしの研究の基本的な方向は、中国の共産党史や近代政治史、思想史を中国一国史の枠組みから解き放ち、日本や欧米の社会運動史と結びつけて相互対照・相互比較しながら、複眼的に理解しようとすることにある。中国共産党の歴史を政策決定レベルで解明しようとすることは、党中央の会議録などが原則として公

開されておらず、またそれら文書の公開に明確な基準がないため、困難が多い。一例を挙げれば、1920年代の党中央の議事録ですら、その存在は知られているものの、まったく公開されていない。その会議出席者がすでに四半世紀も前に、一人残らずこの世を去っているにもかかわらずである。では、この党の歩みは外部の者には到底描き得ないのかと言えば、そう悲観的になる必要はない。初期の中国共産党は、まさに国際的契機の中に誕生し、活動したがゆえに、多くの足跡や資料を国外に残してくれているからである。

中共の初期指導者たちは、実によく海外の文献を渉猟していた。かれらが当時発表した社会主義関連の文章をよく注意して読むと、それが海外で発表された文章を焼きなおしたり、参照したりして書かれていることが少なくない。結党時期、つまりマルクス主義が本格的に伝播し始めた時期には、その傾向はとりわけ顕著で、中でも河上肇、堺利彦、山川均ら同時代の日本の社会主義研究が中国の共産主義者に大きな影響を与えていたことが確認できる。中国における近代西洋思想の受容が日本、あるいは日本語文献経由であったことは、よく知られているが、それら西洋思想の中でも特に難解をもって知られるマルクス主義の受容、つまり中国共産党の成立要因に、日本人社会主義者の媒介作用が看取できるのである。

上海にある中国共産党第一回大会会場跡。1921年7月末に毛沢東を含む13人の中共党員がここに集まり、最初の大会を行った。人民共和国成立後に確認、復元された。

さらに言えば、かれら中共の初期指導者が注意を払ったのは、日本の文献ばかりではなかった。日本人社会主義者の文章はマルクス主義学説の理解に有用ではあっても、ソビエト・ロシアや「共産党」なるものイメージに関しては情報を欠いていたため、中共の初期指導者たちは、同時代の欧米社会主義政党の文献を取り寄せて、そこから有用な情報を得ようとしている。中共創立時期の党機関誌の表紙デザインがアメリカ社会党のシンボル・マークやイギリス共産党の機関誌の体裁の模倣であったという興味深い事実は、かれら初期の党員が貪欲に国外に知識を求め、そしてそれら国外の社会主義運動と中国の運動とを重ね合わせていたことを、我々に教えてくれる。たとえ中共中央のトップレベルの機密資料が公開されていなくても、手に入る内外資料をつき合わせていけば、中共自身すら気づいていない史実――例えば、先の党機関誌の表紙デザイン――を掘り起こすことができるのである。

■歴史研究を通じて透かし見える現代中国

中国共産党が国外に残した重要資料の最たるものは、モスクワにある旧コミンテルン・アルヒーフである。中共は1943年のコミンテルン解散まで、党の活動記録や重要会議記録をはじめとして、定期的にモスクワのコミンテルン本部に報告を送っていた。重要会議記録の中には、中国語版が伝存せず、コミンテルンに送られたロシア語版（あるいはドイツ語版）のみが残っている場合もある。コミンテルンに残された各国共産党の重要文書は、長らく閉ざされたものだったが、周知のように、ソ連の解体後に相当程度公開され、現代史研究に大きな衝撃を与えている。

この旧コミンテルン・アルヒーフは中共党史の空白を埋め、ひいては現代史を書き換える可能性を秘めている。実をいえば、中国が公開していない機密資料のうち、1940年代以前のものの相当部分は、人民共和国成立後にソ連より返還されたコミンテルン・アルヒーフからなっている。つまり、中国共産党が歴史資料の門戸を閉ざし続けようとも、今やその旧本家筋の方の資料が世にあらわれてしまっているのである。むろん、新中国成立後の資料の多くは中国国内にしかないから、モスクワの資料によって中共の歴史がすべてあきらかになるわけではない。だが、旧ソ連の資料がソ連共産党の解散まで秘匿されたように、中国の資料もまた、中国共産党による統治の終焉を待たなければ公開されないのだろうか。中国国内においても、情報公開を求める声は近年とみに高まっている。冷戦時代のような情報の封鎖と独占は、もはや通用しまい。中国共産党の歴史を探る研究は、情報公開のゆくえとあわせて、この世界最大の政党の行く末を注視する営みでもある。

アフガニスタンとイスラーム

イスラーム東漸史の研究

助教授◆稲葉 穣（いなば みのる）

1961年生、1988年、京都大学大学院文学研究科博士課程研究指導認定

2001年9月にアメリカで起きたテロ事件以来、アフガニスタンに関する情報量は飛躍的に増加し、アフガニスタンという国がどこにあるのか、どんな地形をしているのか、などといった基本的な事柄についていちいち説明せずともよくなってきた。ただ、そこが狂信的イスラーム教徒とテロリストの跳梁跋扈する地であるというイメージも形成されつつあるのは憂慮すべき事でもある。私のこれまでの研究は、このアフガニスタンという地域の特性の探求を縦軸に、イスラームという信仰、文明システムの拡大伝播のあり方を横軸に構成されている。

■アフガニスタンと三つの世界

現在のアフガニスタンは1979年のソ連軍侵攻以来20年以上に及ぶ内戦と混乱の最中にある。おかげでアフガニスタンをフィールドとしながら、私は未だに同地に足を踏み入れたことがない。わずかにパキスタンとの国境に近いハイバル峠を訪れて、その山並みを遠望したことがあるだけだ。現在のアフガニスタンの混迷を現出している一因はその複雑な民族、言語、文化状況にあると言われるが、歴史的にそれを産み出してきたのは他ならぬそのアフガニスタンの山並みである。

アフガニスタン中央部には「中央アフガン山塊」と呼ばれる険しい山並みがあり、それが北東部でヒンドゥークシュ山脈と連結している。これらは平均標高三千メートルを越える険阻な山岳地域であり、古来人々の接近を拒んできた。いきおい人や物の通る交通路もこの山塊を周回する形で成立した。もう少し視野を広げてみると、アフガニスタンは南アジア、西アジア、中央アジアという異なる文化世界、歴史世界の接点に位置していることがわかる。この三つの世界は、この山塊、山脈を環状に巡る道において結びついているのである。アレクサンドロス率いるギリシア人、サカやエフタルやテュルクといった中央アジアの遊牧部族など様々な勢力がこの道を通って南アジアや西アジアへ向かった。逆に仏教僧や商人達は南アジアや西アジアから中央アジアへ向けてこの道を辿った。数多の人や物が、この道の上を通って東西へ、南北へ移動を繰り返してきたのである。その状況を評してかつてはアフガニスタンを「文明の十字路」と呼んだりもした。その呼称が適当かどうかは措くとしても、上述のような複雑な民族、言語、文化状況は、この地で絶えず繰り返されてきた人や物の動きの結果であると考えてよい。

しかしこのような状況は一方で、この地域あるいはこの環状の道全体を支配下に治める統一勢力の出現を困難なものとしてきた。北部は中央アジアの、西部は西アジアの、東南部は南アジアの勢力の政治的文化的影響下にあることが多かったためである。アフガニスタン自生の政権によってこの地域が統一的に支配されるのは10世紀、イスラーム勢力がこの地に及んでからのことであり、私のこれまでの研究の焦点もその時代にあてられてきた。

■アフガニスタンのイスラーム化

イスラーム勢力がアフガニスタンの地に初めて到達したのは早く西暦の７世紀後半のことであった。しかしアフガニスタン北部においてはエフタルおよび西突厥系部族の抵抗により、また東部においてはやはり７世紀にカーブルを中心に成立したテュルク系政権のゆえに、イスラーム勢力の更なる進出は阻まれ続けた。ところがほぼ３世紀の時を経て同地の本格的イスラーム化をもたらしたのも、中央アジアから到来したイスラーム化したテュルクの軍事集団であった。10世紀末東部アフガニスタンのガズナ（現在のガズニ）の地に成立したガズナ朝はテュルク系グラーム集団を中核とし、アラブ、クルド、ダイラム、インドといった様々な傭兵達から構成される強力な軍隊を持つ国家であった。ガズナ朝はその軍事力を用いてアフガニスタン全域を制圧し、さらに北は中央アジアから南はアラビア海沿岸、西はイラン高原西部から東はパンジャーブに至る広大な領域を支配下におさめたが、その活発な征服活動は、アフガニスタン中央部や北西インドといっ

ハイバル峠からアフガニスタンの山並を遠望する（1994年）。

た地域のイスラーム化の端緒となると同時に、中央アジア方面から南下する人々に新たな活躍の場を提供することにもなった。

制度面でのガズナ朝の特質は、君主を中心とする宮廷組織がそのまま軍の最高司令部を形成するという意味での軍事国家であったことであり、テュルク系軍人達は宮廷内の様々な役職を務めながら、同時に軍司令官としても活動した。私はこれをアフガニスタンにおける西アジア的制度・文化と中央アジア的軍事システムの融合の一例であると考えている。そしてその融合は、強力なガズナ朝軍という存在を産み出し、イスラームの新たなる拡大にエネルギーを付与したのである。

信仰面から見ると、ガズナ朝時代以降、アフガニスタンや北インドにおいてイスラームが土着の宗教や社会とどのような関係をもったのかが問題となる。そもそもガズナ朝以前、アフガニスタンから北西インドの地では仏教とヒンドゥー教という南アジア宗教文化が支配的であった。そのような地域を征服したガズナ朝は、偶像崇拝の多神教徒に対する聖戦を旗印に支配領域を拡大していったこともあり、あくまでもイスラーム的な支配者として人民に臨んでいたようである。王は積極的に領域内各地にウラマーを置き、モスクを建設していったのである。その結果、少なくともガズナのまちの民は比較的速やかにイスラームを受容していったようにも見える。しかし彼らのイスラーム受容がどのような背景によるものであったのか、どのようなレヴェルにおいてのものであったのか、という点を直接示す情報は残念ながら極めて乏しい。というより、ほとんどない。そういった状況下で、我々はどのような研究を行いうるのだろうか。

■道は東へ、遥かに遠く

そのようなことを考えながらアフガニスタンから東方を眺めると、陸上と海上に大きく二本の道が延びているのが見える。陸路中央アジアを経て、また海上ではインド亜大陸沿岸部から東南アジア島嶼海域を経て、この道は遠く中国に至る。アフガニスタンから発するこの二つの道に沿ってイスラームの東方への拡大、伝播の過程を追ってみたいというのが、現在の私の関心である。もちろんそれぞれの地域によって、利用できる資料も得られる情報も様々であろう。例えば中国におけるイスラーム初伝に関わる伝承は唐代にその初源を置くものが多いが、実際に文献上から、安史の乱に際してアラブ兵が唐朝の援軍として到来したことが知れる。一方中国に比して文献情報が希薄な中央アジアやインド洋海域に関しては、後代の伝承の検討や聖者信仰に関わるフィールドワークなどが有効であろう。いずれにせよアフガニスタンのみならず、このような広範な地域を対象に、イスラームとムスリム・コミュニティーの東漸に関わる多種多様な情報を、できるだけ多く蒐集、比較検討していくことが肝要だと考えている。そのような地道な作業を経てはじめて、イスラームの伝播と各地域における受容の初期の様相に関わるなんらかの「モデル」が構築できるかもしれないからだ。そしてその「モデル」を援用することで、アフガニスタン、中国等、個別地域の個別事例を逆に検討することも可能になるだろう。もっと大風呂敷を広げるなら、そのような研究はもしかしたら、同じ道を東へ向かった先達たる仏教の拡大伝播のあり方との比較研究の材料を提供してくれるかもしれない。しかし現実には歩むべき道は遥かに遠く、道の先にある筈の中国の姿は、かつて見たアフガニスタンの山並みにも増しておぼろげに霞んでいるようでもあるのだが。

電子仏典の三界

仏教研究知識ベース―禅仏教を例として

助教授◆Wittern, Christian（ウィッテルン　クリスティアン）

1962年生、博士（哲学、ゲッティンゲン大学大学院哲学研究部中国学科　1998年3月10日）

我々の文化遺産のデジタル化、すなわちテキストや芸術作品、音楽やその他の文明の所産を電算機でデータ処理できる形態にすることは、21世紀の初めにおける大いなる挑戦の一つである。保存すべきものを削除してしまわないよう、そして来るべき世代がこの豊かな遺産のすべてにアクセスできるように、我々は慎重にデータ処理しなければならない。

印刷技術に基づくこれまでの出版活動での主な関心の一つは、よりきれいな作品、つまり印刷した書物の外観に向けられた。そのためにタイポグラフィ、レイアウト、ブック・デザイン等新たな芸術形式が現れた。それに対してデジタル媒体においては、外観は自由に変えられる、つまり出版者ではなく、使用者によって決定される。従ってデジタル媒体の世界では内容である正しい情報だけが極めて重要である。

しかし、デジタル化の過程において、印刷した書物であれ、あるいはフレスコ画や石像彫刻であれ、祖先たちが彼らの文明の所産を保存するために新しいメディアを使い始めたときと違って、我々はフォーム（表現形式）を与えるのにメディアのプロパティーに頼ることはできない。デジタル化したいものを、無限に繰り返される意味のないビットの流れに他ならない機械言語に翻訳するために、アーキテクチュアー（理論構成）とフォーム（形）を創り出さなければならないのである。

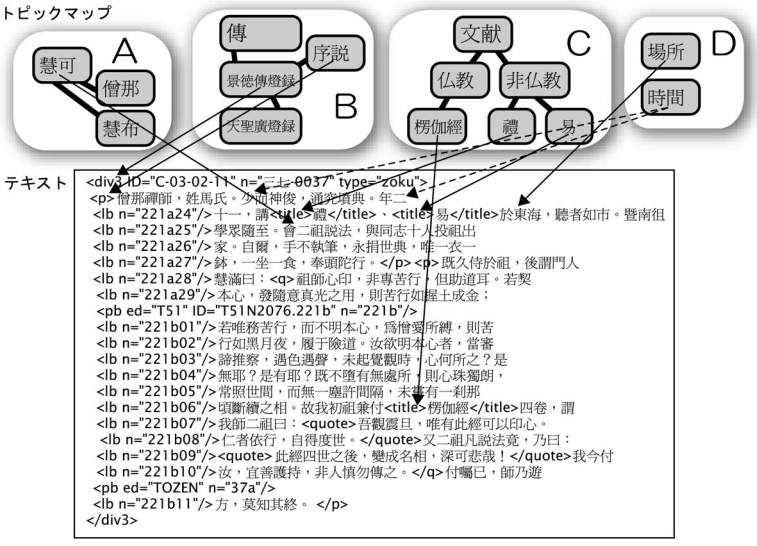
この新しい媒体によって、すぐ自分なりの表現形式を見つけられると思うとすればそれは楽観的である。歴史上、社会全般に同じように決定的な影響を及ぼしたのは、例えば中世紀ヨーロッパの活版印刷或は18世紀以来の産業革命化である。そしてそれらは数十年してから一般社会に影響を与え始めた。

ここで紹介する研究はこの文脈において理解するべきだと思われる。すなわちこの研究は、仏教に関する資料の電子化を出発点として、電子化された資料の周りに新たな基礎構造を築くことを試み、それに基づいて仏教伝統の広い宇宙を、対話形式で調査できる環境を作成しようとしている。仏教は長い歴史を持ち、数多くの国々と言語の障壁を越えて豊かな文献伝統を擁している。電子化によって文明を新たに捉え直すという目的にとっては思わず釣り込まれる例である。

この電子化と電子資料の整理は三つの階層（世界）で考えられている：一番基礎となる文字の世界、それに基づいてできたテキストの世界、さらにテキスト内容を踏まえて新たに電子資料を形成する知識の世界の三界である。

■文字

最初の挑戦は電子化の過程そのものである。仏教の経典は数多くの言語で書かれているし、この言語の内には複雑な、デジタル形式では然るべき取り扱いの難しい文字表現を持つ言語が少なくない。コンピューターの中でうまく使用するためには文字の外観だけでなく、文字の本質、つまり意味と文字の間の関係を数値データにエンコードする必要がある。例えば『為』と『爲』、或は『帰』と『歸』と言う文字は外観こそ多少違うが同じ意味を表す文字である。そのためコンピューターの内部で両方とも同じ数値を与えるべきである



禅宗トピックマップ（上方）と《景德傳燈録》第三卷、僧那禅師伝（下方）。

が、実際は違う数値となっている。これによって情報単位としての処理は難しくなる。もちろん外観の違う文字を表示する必要もあるが、情報単位としての文字と表示単位としての文字を別々に取り扱うという二段構造で考えた方が良いだろうと思われる。

■テキストに「しるし」を付ける方法（マークアップ）

本を読んでいる読者は、頭の中でそのテキストを分析して、意味のある単位で切る事によってテキストの内容を理解する。本を読みながら切れた単位を示す為に『点』を打つ習慣を持つ人もいる。『点』を打つ事はコンピュータにはできないが、電子テキストが構造的な分析とセマンティックな分析をその中に含んでいれば、情報処理には非常に役に立つ。それによってより正確な検索が可能になるのである。

単なる『点』を入れる事では、機械処理の為の情報としては足りない。そこで『点』のかわりにHTMLのようなタグを電子テキストに入れる。こうしたタグは現代の印刷物に使われている句読点に近い用途、つまりテキストを意味の単位（例えば文、句、引用文など）に切るだけではなく、単位のセマンティックスも表す事になる。一つの例をあげると、この文章の題名は本文より少し大きく、太字で書いてあるが、これはただの外観である。電子テキストでは題名である事を示す為に<題名>と言うタグを入れると、機械でもその事が判るから様々な活用がでる。大きな電子文庫の中では<題名>の内容だけを検索対象にしたり、文庫の参照文献を簡単にリストアップしたりもできる。

マークアップを使って、テキストにタグを入れる事は機械処理には便利であるが、実際どういうタグをどのように入れたらよいか？　この問題については、人文科学の様々な分野の数百人規模の国際的な共同プロジェクトであるText Encoding Initiative （TEI,テキスト電子化協会）が、1987年以来、タグ集の編集を進めて来た。これはあらゆる言語、あらゆる時代のテキストへの対応を目指した400 種類を越える、大きく又広く使われているタグ集である。

電子仏典において初めてTEIのタグ集を使ってマークアップ済の電子テキストが公開されたのは、1995年に出版された花園大学国際禅学研究所のZenBase CD1に収蔵された《五燈會元》であろう。1998年以来、台湾の中華電子仏典協会（CBETA）は《大正新修大蔵経》の正蔵55巻と敦煌文献を収蔵した第85巻を電子化する作業を始めたが、そこでもTEIのタグ集が採用された。筆者は今禅宗の各伝燈録にマークアップを付ける作業の最中である。図の下方に一部分を例としてあげた。

■知識ベースに向けて

このように大量のテキスト・コレクションが次々と生まれ続ける事は間違いない。原典の電子テキストだけでなく、地名、人名、百科事典、文献目録、地図などの参考図書も既に電子化され、或は直接電子資料として作られている。こうした資料をまとめて、一括りで利用できるような事を考えたい。

書物を目録に載せて書誌を作成する事は、印刷技術よりもっと古い活動であり、中国の正史、あるいは仏教の経典目録はその例となる。中国ではこうした事のために所謂《四部分類》がよく使われている。複数の分類を使用可能とする為にはカード目録が導入された。電子資料の世界でも目録化は早くから使われた資料整理方法であるが、交換性を上げるためにメタデータの規準もつくられた。ただこうした電子目録は、従来の書誌やカード目録と同様、資料の外観の分類に過ぎない、つまり資料の中身まで示すことはできないのである。

目録学や索引作成等に基づいて、新たな知識を表現するための規準は1993年より開発され2000年に国際規格となった、所謂トピックマップ（Topic Map, ISO/IEC 13250）規格である。トピックマップもマークアップ言語の一つのボキャブラリであり、実際あるものの全てをコンピュータの中で表現するための言語である。

図の上方には現在編集中の禅宗トピックマップから一部分をあげた。A〜Dは違う種類のトピックを示す。下方のテキストとの関係は矢印で示すが、実際のトピックマップは超連結子を採用している。ここではトピックとして法系、伝記、文献と時空の四種類だけ取り上げ、トピック間の連結は黒線で表すが、実際のトピックマップは様々な関係を設定している。

こうしたトピックマップには数多くの活用法がある。例えば僧那禅師の伝記に記載する文献のタイトルは<title>と言うタグを付けてある。これで簡単に記載する文献を探せる。トピックマップにはこうしたタイトルが仏典と非仏典に分類されているので、例えば非仏典だけを処理する事もすぐにできる。

電子資料の機械処理は初歩の段階にあり、将来の展開は予想できない。但しどんな展開にせよ、一歩一歩進んで行くものであるので、トピックマップとマークアップは現段階では最も合理的な方法だろうと思われる。

清代道教の実像

清代の道教龍門派の歴史及び内丹の研究

1993年、フランスパリ第七大学東洋文学博士

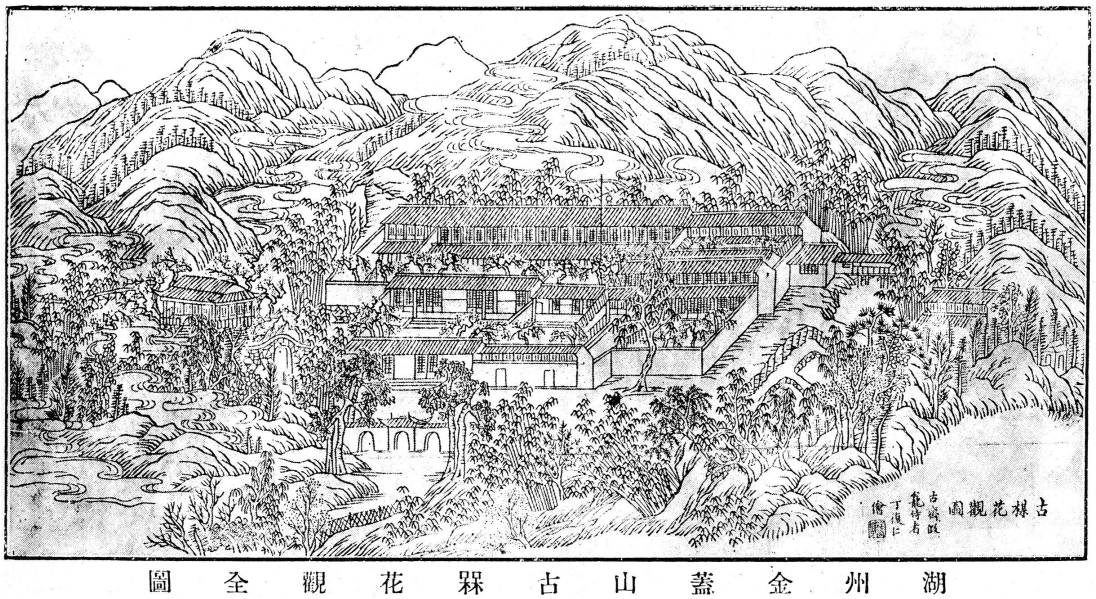
助教授◆Esposito, Monica（エスポジト　モニカ）

清代における道教の状況はどうであったのか、また、その役割は何だったのか、そして清代にどのような道教経典が著されたのか。中国道教の歴史に関する様々な手引書や昨今の清代道教に関する研究を繙くと、清代道教がしばしば明代道教と共に述べられていることに驚く。一般的には、この最後の二つの王朝における道教は、衰退の一途を辿り、消滅するか否かの瀬戸際であったと考えられている。よく議論に上るのは、当時の道教の宮廷における二次的な役割、明代及び清代に共通する宗教統制の政策、そして漸進的な道教信仰の通俗化といった問題である。所謂民間信仰と言ったものと混ざり合うことによって、道教は次第にそのアイデンティティを失っていった、と考えられているわけである。

もしも、最近出版された研究書の中で、こうした点が明清期における道教の特徴として位置づけられているならば、それは当時の道教の実状とかけ離れているといえる。実際のところ情報源の殆どは、宮廷やそれを取り巻く人々によって伝えられた公文書に基づいている、ということに注意するべきであろう。例えば、明清期に中国を訪れた宣教師による報告は、彼らと宮廷との関係や、宣教師の儒教に対する独特の見解などを反映しており、そのために偏ったものになっている。結果的に宣教師は、論理的で道徳的な儒教の教えとは対照的に、道教と仏教は主流から外れた、迷信に満ちた教えであるとし、道教と仏教に対する儒教的な見解を伝えたのである。こうしたことから、宮廷以外の資料、例えば道教徒自身の言葉を伝える資料を研究する必要があることは明らかである。そのような研究は、手付かずのことが多いこの分野における、我々の知識と理解を深めるために、不可欠なのである。

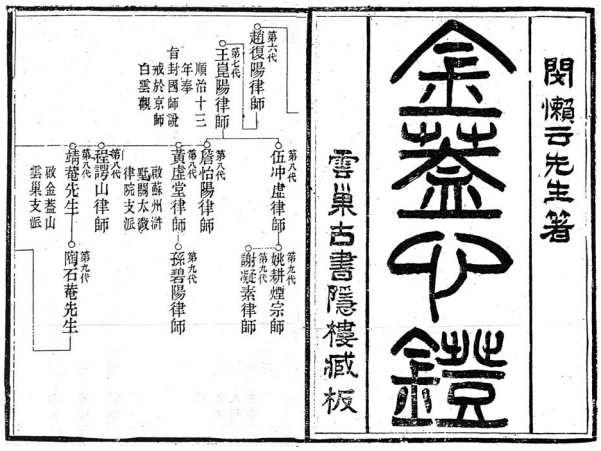
■閔一得による『金蓋心燈』と『古書隠樓藏書』

道教龍門派第十一代目の師である閔一得（1758-1836）によって書かれた『金蓋心燈』には、江南で活躍した龍門派の道士たちの細かな伝記が含まれており、明清期の道教に光を当てるうえで注目すべき資料である。『金蓋心燈』に収められている大部分の伝記には、著名な鮑廷博（1728-1814）による註がつけられ、鮑錕（fl. 1814）によって校訂されている。このテキストは、浙江省湖州金蓋山の雲巣廟にある古書隠樓で、1821年に始めて刊行された。その後、災害のために版元の版木が壊れてしまったため、補遺を付けた8巻本の体裁で1876年に再版されている。この、1876



湖州金蓋山古梅花観全圖（『道統源流』所収）古梅花観は浙江省湖州近郊に現存している。

閔一得（1758-1836）名は笣專、字は補之、小艮、道號は懶雲、呉興（浙江省湖州）の人。龍門派第十一代の祖師。



『金蓋心燈』の「龍門正宗流傳支派圖」。

年の再版本は、パリのコレージュ・ド・フランスの図書館に所蔵されている。この再版本は、杜潔祥によって編集された『道教文獻』(台北：丹青圖書、1983年)の第10巻と第11巻および『藏外道書』の第31巻にも収められている。

『金蓋心燈』の版木が所蔵され、また後に壊された場所である雲巣廟は今日も浙江省湖州の街の近くに存続している。『道統源流』に含まれるひとつの図に見られるように、この廟は当時「古梅花觀」と呼ばれていた。しかし、村人たちは今でも、そこを単に雲巣廟と呼ぶ。この廟は1987年に再び開かれた。私がその直後にここを訪ねた時、多くの建物に損傷は有るものの、その配置はおおよそ『湖州金蓋山古梅花觀全圖』に記されているままであった。呂洞賓に捧げられた中央の純陽宮の壁に、『金蓋心燈』の中に見られる碑の残片を発見した。碑には、この宮が呂洞賓に奉納された歴史的経緯が記されている。また、別の壁は毛主席への賛歌で美しく装われていた。ただ、『湖州金蓋山古梅花觀全圖』と大きく違っていることが一つある。今日では、なんと山の頂上に大きなテレビアンテナが設置されているのである。これでは竹林の中を散策すると言われる、神仙たちの逍遙が妨げられるのではないであろうか。ともかく、そうした神仙たちの中でも、最も崇拝されているのが呂洞賓なのである。『金蓋心燈』の再版に寄せられた沈秉成による序（1873）によれば金蓋山は仙人呂洞賓の訪れる真の聖域であるからこそ、閔一得はこの地に隠遁したのである。もちろん、仙人呂洞賓が訪れたのはテレビアンテナが取り付けられるよりずっと前のことである。

■龍門派の歴史と思想に関する基本資料

こうして、閔一得はこの金蓋山そしてこの地の道教伝統の歴史を書きとめることを決心したのである。ちょうど禅の『傳燈』のように、『金蓋心燈』の中で閔一得は、「道譜」を図示しながら、系図の形で龍門派の起源と発展を記したのである。道祖の玄元皇帝老子と道宗の祖である呂洞賓から始まり、この系譜は龍門派の特徴的なアイデンティティを伝えるように構想されている。更に、禅の『傳燈』と同様、『金蓋心燈』にも「龍門正宗流傳支派圖」という系譜を含み、その正統的な、連綿とした伝統が表現されている。最初の六祖に続く第七祖の王常月（崑陽?-1680）以下、江南など中国各地の支派が記録されている。禅の『傳燈』にあまりにも似ているので、閔一得も同じような、つまり龍門派の伝統を“国の護持のために”奨励するという目的で本書を著したのであろうか、と思うかもしれない。

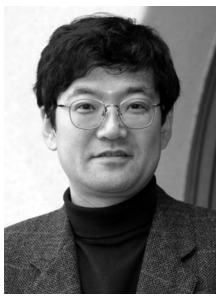
ともかくこのようにして、龍門派の空想的な系譜体系が作られ、閔一得の示した指針のもと、学者や門弟たちによって後世へと伝えられていった。官界から身を引いた閔一得は、南中国の“正統的”龍門派の自己像を振興した鍵となる人物なのである。

閔一得は龍門派を規格化された傳授戒法と道院規則、傳授戒儀礼に関する清規を持つ、首都における制度化された道教として描き出しただけではない。彼は龍門派を、特別な儀礼、コスモロジーに基づいた内丹説、養生、そして道徳を実らせる教理的な伝統そのものとしても表現している。こうしたことは、閔一得によるもう一つの著作、『古書隱樓藏書』によって立証されている。

『古書隱樓藏書』は、清代道教の世界観の理解に欠かせない基本資料であり、龍門派の内丹法以外にも、清代道教全体の思想・コスモロジー・儀礼制度・信仰などに関する豊富な情報が含まれている。この資料の研究によって、清代道教の主な特徴、清代道教と密教及び儒教との関係などを明らかにすることが私に課せられた使命なのである。

国家はどのように誕生したのか

古代中国の考古学研究



おかむらひでのり
助教授◆岡村秀典

1957年生、1985年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退

殷周時代の社会と文化を基礎に成立した礼制は、戦国から前漢代の儒家たちによって『周礼』や『礼記』などの経典に体系化され、中国固有の国家システムとして歴代の王朝に継承されていった。それは人びとの生活をひろく規制するとともに意味づけを与える価値体系となり、また日本をはじめとする中国の周辺地域にも大きな影響を与えてきた。この礼制の成立過程を考古学の方法によって跡づけながら、国家とは何か、国家はどのようにして生まれたのか、といった課題に取り組んでみよう。

■肉食からみた礼制の形成

戦国・秦漢代に編纂された礼書によると、さまざまな儀礼に用いる肉は、王や諸侯は牛・羊・豚、卿大夫の身分では羊・豚、士の身分では豚を用いるとされ、身分によって用いる肉の種類が定まっていた。この規定が実際におこなわれていたのか否かを明らかにする方法のひとつが動物考古学である。遺跡を発掘すると、人びとが食べた動物の骨がゴミ坑などから出土する。その骨から動物の種類と量を分析すると、新石器時代はほとんどの遺跡で豚がもっとも多く食用されたことがわかる。家畜の豚は、繁殖能力とエネルギー効率に優れ、食性がひろいので飼いやすく、黄河流域の農村では近年まで農耕の副業として自給自足的な豚の畜産と消費がおこなわれた。今日の中華料理で豚肉が主に用いられているのも、そこに大きな理由がある。ところが殷王朝の都である河南省鄭州城遺跡や殷墟遺跡から出土する動物骨では牛が過半を占め、とくに殷墟の王宮付近では牛の比率が98%に達している。これは殷の王権によって牛が特化され、豚の自給自足を基本とする農耕社会のなかに、牛をもっぱら消費する都市が出現したことを示している。

河南省府城遺跡から出土した殷前期のト骨片。牛の肩胛骨の錐で凹ませたところを焼灼し、神意を占った。殷代に牛は神意を伝える媒介として重視された。

春秋・戦国時代には、肉を煮た銅鼎をそのまま墓に副葬することが普遍的にみられるようになる。たとえば、戦国前期の諸侯墓である湖北省曾侯乙墓では20点の銅鼎から牛・羊・豚・鶏・雁・魚など各種の動物骨が出土し、卿身分の墓と考えられる春秋後期の河南省下寺２号墓では17点の銅鼎から牛・羊・豚の骨が出土している。このような事例によって、礼書にいうような社会身分と用いた肉の種類との対応関係を検証することができ、春秋中期ごろからしだいに礼制が確立してきたことがわかる。

■畜産と動物供犠からみた王権の成立

殷代にはまた、祭祀の犠牲として大量の家畜が消費された。殷墟出土の甲骨文には、王室の祭祀にいちどに数頭から数十頭、多いばあいには数百から千頭を犠牲にすることが占われている。実際の考古資料をみると、宗廟と考えられる殷墟小屯遺跡では、建物の基壇をつくる途中で計16基の坑を掘って牛40体、羊107体、犬98体を埋め、殷王の墓地である殷墟西北岡では30基の坑に計117体の馬を埋めていた。いずれも一部だけの発掘であるから、全体では想像を絶する数の犠牲が神に捧げられたと考えられる。新石器時代にも小家畜の豚や犬を生け贄にする儀礼がおこなわれていたが、殷の王室では農村に普及していた豚ではなく大家畜の牛や馬を用いるとともに、それを大量に生け贄にすることをはじめたのである。

草食性の馬・牛・羊は群居性をもつため、その飼養には広大な牧草地での大規模かつ専業的な管理のほうが効率的であり、王室は国家体制を整備するなかでその直接的な経営にのりだした。西周金文や礼書によると、戦争のなかで重要な役割をもつ馬は為政者の直接的な管理のもとで飼養され、祭祀と儀礼のなかで大量に消費される牛や羊も専属の役人がその管理をおこなった。殷墟の甲骨文には

殷王自ら牛の飼養を監察したことが記されている。大家畜の牛や馬は、豚と比べて消費財としての経済性は劣る反面、権威をあらわす威信財としての価値は高く、王権によってその価値がいっそう高められたのである。

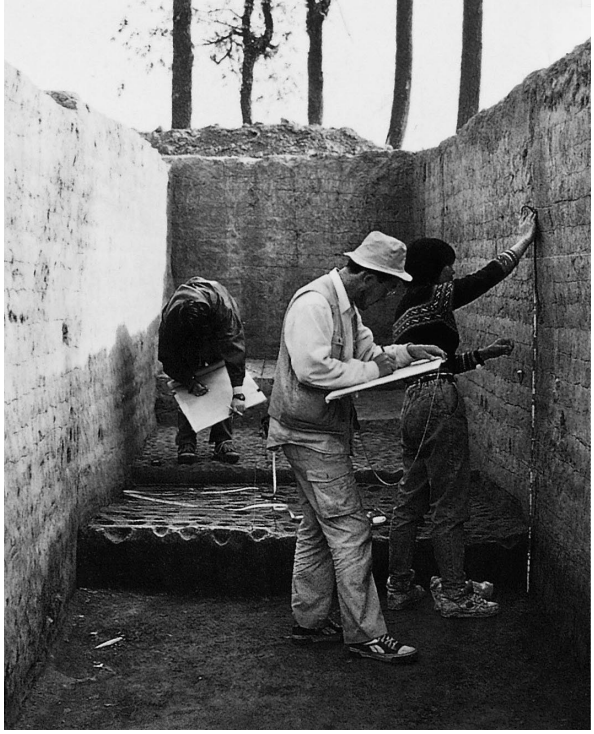
殷王権は祭祀や儀礼のなかで大家畜の牛や馬を惜しげもなく蕩尽し、その損失を補うに足る大規模な畜産業を組織化したのである。自給自足的な農耕社会のなかから生みだされた、このような祭儀をめぐる生産と消費のシステムが殷の国家であった。

■考古学からみた都市の形成

祭儀と消費のセンターとして成立した都市は、城壁に囲まれた軍事的な拠点でもあった。国家の「國」という字が人や邑を指す「口」と武器の「戈」とを四角の城壁で囲っているように、多くの人が集住し、武器と城壁で戦争に備えたのが国であると考えられ、漢代では自らを「城郭の民」と呼んで城郭に中国文明の誇りを強調したのであった。このような城郭は考古学の調査対象となりやすいため、わたしは新石器時代から殷周時代にいたる各時代の城郭遺跡について中国の研究者と共同でフィールド調査を継続している。

紀元前6000年ごろに溝と低い土塁をめぐらせた集落が中国の各地にあらわれ、農業の発達と集団間の争いが激しくなるにつれて、前3000年ごろには大きな城壁をもつ城郭集落に成長する。新石器時代で最大の湖北省石家河遺跡は1100×1200mの城郭があり、これを頂点として大小の集落が階層的に秩序づけられた社会が成立したのである。しかし、この段階の城郭は自然地形に合わせた不規則な形であり、強力な王権をものがたる遺構や遺物が出土していないことから、農民たちが自衛のために城郭を築いたと考えられる。

ところが、前2000年ごろには各地に自立していた城郭集落のほとんどが廃絶し、それに代わるように黄河中流域に新しい王朝が誕生する。殷前期の王都である河南省鄭州城は1870×1700m（内城）、河南省偃師城は1710×1240mの巨大な長方形の城郭をもち、偃師城の中央には儀式の場としての中庭をもつ大型宮殿が少なくとも８基あり、城郭の西南部には200m四方の土塀で囲まれた倉庫群があった。また、鄭州城は内城郭の東北部に宮殿区があり、外城郭には青銅器や土器を製作する手工業工房、庶民たちの住居、権力を象徴する青銅器や玉器を副葬した貴族墓が分布していた。このような王都の規模と構造から、それは政治・経済・文化の中心として機能した都市と考えることができる。さらに、殷王朝は北と南の辺境に支配の拠点となる小城郭を設置している。４か所で発見されている城郭はいずれも王都の10分の１以下の規模であるが、内部には大型の宮殿があり、辺境を守る軍事的な役割のほかに地域を支配する政治的な拠点として機能していたと考えられる。たとえば、わたしが調査した河南省府城遺跡のばあい、１辺が276mの整った正方形の城郭の中央に70×30mほどの宮殿があり、それは儀式の場としての中庭をもつ南北２院の構造であった。この城壁と宮殿の基礎は土を層ごとに突き固める版築技法によって念入りにつくられ、しかもきちんと真北を向くように設計されていた。殷代の王都と地方の城郭にみられたこのような計画性に、都市と国家の成立過程におけるひとつの重要な画期があるだろう。

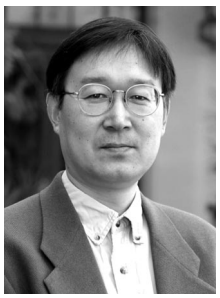


河南省府城遺跡の城壁断面の調査風景。地下１mぐらいのところから層ごとに土を棒で突き固めて城壁を築いているため、鉄のクワでも発掘は容易ではない。壁面の横線は城壁の土層、地面の小さな穴は棒で突き固めた跡。

以上のように、紀元前1600年ごろに成立した殷王朝は、中国の国家形成における、ひとつの大きな画期であった。豚の自給自足を基本とする農耕社会のなかに、馬・牛・羊などの大規模な牧場を経営し、祭祀や儀礼のなかでそれを大量に消費する組織が成立した。その組織はまた、農村とは異質な空間としての都市を創出した。都市は、権力者たちの居住の場であっただけでなく、儀礼の場としての宮殿、儀礼用の道具である青銅器や玉器をつくる工房、さまざまな富を蓄えておく倉庫、そうした儀礼に奉仕する人びとの住居などが集まり、高い城壁でその富と権力が守られたのである。さらに、地方にも従属する支配者たちの都市が生まれ、都市に住む貴族たちの間に上下の身分秩序がつくりだされていった。これが中国固有の国家システムである礼制の成立過程であろう。

異文化のフュージョン

インド・中国における仏教の学術と実践



助教授◆船山 徹（ふなやま とおる）

1961年生、1988年7月京都大学大学院文学研究科博士課程中退

仏教学（buddhist studies, buddhismuskunde）という研究領域があるのをご存じだろうか。僧侶になるための素養を身につける科目ではない。仏教に関わる様々な事象を、他の分野と同じように、人文科学の一つとしてあつかうのだ。少々大げさにいえば、この世を仏教という視点から切り取る精神的営みといってよいかもしれない。

その昔、アジアの至るところでは仏教が生きていた。今の日本のような葬式行事を主とするものではなく、われわれが生きるための指針として、時には目には見えない対象を説き示し、それに働きかけるパワーをもつ教説として、社会のなかにちゃんと生きていた。

仏教は宗教であったにとどまらない。今風にいえば哲学でもあり、仏教国家においては学問そのものであり、また、文学や美術をうみだし、実社会と関係して時には政治を左右することもあった。また仏教は科学思想でもあった。驚くなかれ、仏教は独自の原子理論も宇宙観ももっていた。つまり仏教はたんに宗教というよりも、一大文化体系だったのだ。仏教学はこのような仏教の総体を研究対象とするが、研究の基本がどこにあるかといえば、「教説」であり、それを記す「典籍」すなわち経律論をたんねんに読む作業が中心となる。

私の仕事はそうした仏教学の片隅にある。対象へのアプローチの仕方はいろいろあるだろうが、私の場合は、巨大な文化体系としての仏教に、インドと中国の双方から切り込もうと試みている。インド仏教の研究には、中国仏教研究において重要な具体性と歴史性の観点を取り入れ、他方、中国仏教研究においては、仏教史を中国内部の事象としてみるのではなく、たえずインドと交渉してきた結果として捉え、また文献をよむ際にはインド学の手法にもとづいて漢文仏典を読みとくことによって、インド学と中国学の利点をなるべく生かせるよう努めている。こうしてインド仏教と中国仏教を、それぞれ、〈学の形成〉と〈実践〉をキーワードとして、異なる視点から検討している。研究対象とする時代は広めにとっても4〜5世紀から９世紀頃にかけての五百年にすぎないが、このころのインドや中国の思想史は、面白さは底知れず、まったく知的興味のつきないことばかりである。

■インド仏教知識論

インド仏教のなかで私が学生の頃からずっと研究をすすめている領域は「仏教知識論」と呼ばれる。一般にはなじみが薄いと思うが、仏教知識論は、大乗仏教の唯識派に属したディグナーガが6世紀前半頃に提唱し、それを継承発展するかたちでダルマキールティが7世紀中ごろ、基本となる知の枠組みをほぼ完成した。その後8世紀の後半になると、知識論はシャーンタラクシタと直弟子のカマラシーラによって、唯識とならぶ大乗仏教の雄である中観派にも採用され、唯識と中観という大乗思想の二大学派の両方にとって学問上の基盤となる理論となった。さらに、チベットの学問仏教はシャーンタラクシタとカマラシーラによって開かれたから、インド仏教知識論はチベット仏教の基盤とも言えるものだ。

それでは仏教知識論とはなにか。それは、われわれが対象世界を正しく知るために有効な知識手段として、〈知覚〉と〈推理〉の二つのみを意義あるものと認定し、その二つを徹底的に探求することを通じて、客観的な〈モノ〉と主観的な〈われ〉の真実の姿を知り、そして最終的に〈悟り〉に到達しようとする、そうした知の体系なのである。それゆえ、知識論の根本課題は、知覚とはなにか、推理とはなにかを知ることであり、それらの定義、種類、そこから排除されるもの（疑似知覚、誤った推理）等々にかんして、仏教以外の人々も巻き込んで活発な議論がなされ、多くの重要な文献が編まれた。

たとえば知覚はこう定義される。「知覚とは、思慮分別をはなれ、誤りのない認識である。思慮分別とは、言葉と結合し得る表象を伴う認識のことである」。この定義との関わりのもと、様々な事象が議論され、答

ガンダーラの仏寺、ラニガト遺跡（パキスタン）。このような山上の伽藍のなかで、人々は何を考え、何をおこなっていたのだろうか。

えが確定されていった。論点はたとえば――知覚の対象は何か、普遍かそれとも個別か。言葉を話せない生まれたての乳児にも思慮分別はあるとすべきか。猫などの動物にも思慮分別はあるか。いつも毛髪状のものが眼前にちらつく飛蚊症の人や、白いものでも黄色く見えてしまうという重度の黄疸患者の場合、彼らの視覚像は正しいか誤りか。ある知覚像に誤りがある場合、その誤りは何に起因するか、感覚器官かそれとも思慮分別の仕業か。ブッダは全知者であるという場合、彼は何を知覚対象とするのか、ありとあらゆる個別的存在かそれとも単一の普遍か。われわれが日常普通に見ているモノは諸原子か、諸原子の集積体か、それ以外か。言葉の対象は何か。などなど。

このように、仏教知識論がとりあつかうテーマは、今風にいえば認識論・論理学・形而上学・分析哲学・言語理論などの哲学や認知心理学と重なる、興味深いものである。私はとくに、唯識や中観といった異なる思想体系が知識論を基盤に統合されてゆく8世紀末頃の思想状況の形成に最大の関心があり、それを上述のカマラシーラが残した諸著作を通じて解明できるのではないかと考え、研究をすすめている。とりわけこの一、二年に集中して調査しているのは、いわゆるヨーガ行者（瞑想中の人間）の認識が知覚論としてどのようにあつかわれるかである。これは、経験主義と超常現象、哲学と宗教の接点にある問題だ。

■六朝時代の中国仏教史研究

いっぽう、これとは別に研究をすすめているテーマがもうひとつある。それは、六朝仏教史、とりわけ5〜6世紀にかけての中国仏教がどのように形成されたかである。いわゆる漢訳仏典の翻訳者として、5世紀初頭の鳩摩羅什（くまらじゅう）と唐の玄奘（げんじょう、664年没）の名はひろく知られていよう。両者はそれぞれ「旧訳」（くやく）と「新訳」を代表する人物であるが、鳩摩羅什の没後から玄奘が登場するまでの間には、実にいろいろな人物がインドと中国の間を往来し、思想と社会に影響をあたえた。また、この時代の仏教史それ自体にも重層的発展がみられる。

鳩摩羅什以降の仏教史は、南斉時代にひとつの頂点をむかえ、それが有名な梁の武帝の時代に継承されたのではないかという見通しを私はもっている。さらにその後、6世紀の華北では地論宗が形成され、江南では梁末から陳にかけて真諦というインド人が到来するなどして、それまで中国では知られていなかった唯識思想に俄に注目が集まり、それが初唐の玄奘らの法相宗教理学へと連なってゆくのであるが、このうち私が当面解明したいのは、鳩摩羅什以降、梁代にいたる思想史形成の過程である。具体的には、5〜6世紀の仏教思想史を、戒律の受容と展開、典籍の執筆と当時の研究体制の関係、仏教の実践形態としての儀礼の問題、など幾つかの柱に分けて考察を進めている。

私個人にとって、インド仏教知識論の醍醐味は、サンスクリット語の特性を生かした、切れ味の鋭い、きわめて緻密な分析的思考にある（この点に関する限り、悲しいかな中国仏教はインドの比ではない）。他方、中国仏教史の醍醐味は、仏教に関わる様々な要素がつながり、一つの体系としてまとめられてゆく総合化の妙味、および、インド仏教ではまず考えられない、空恐ろしいまでに細かな具体的現実が文献に記述されている点にある。

私自身の個人研究として、インド仏教研究と中国仏教研究は目下直結するものではないが、仏教思想史という過去の壮大な文化体系を理解するために、相互補完的に機能している。

中国木簡学の現在

秦漢時代の制度史

助教授◆宮宅 潔（みやけ きよし）
1969年生、1997年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学

我が国では平城京跡などから多くの木簡が出土し、最近でも新聞紙上を賑わせている。同様に、中国各地の遺跡からも竹簡・木簡が続々と見つかっていて、それらを扱った研究、「簡牘学」も盛んとなっている。表題に「木簡学」と挙げたのは、こちらの方が日本では通りがよいからで、中国ではむしろ簡牘学と呼ぶのが普通である。「簡」は竹の札、「牘」は木の札。

本来ならば、簡牘そのものの分析を中心に据えた研究が「簡牘学」なのであろうが、史料に乏しい秦漢時代史研究にあっては、法律・官制・経済などを考察の対象にすると、簡牘史料を避けて通ることはできない。個人研究のテーマである「秦漢時代の制度史」研究も、簡牘学と深い関わりを持っている。

■地下の墓室と辺境の砦

地中に埋もれた簡牘は、通常であれば朽ちてしまう。それが朽ちることなく発見されるには、いくつかの条件を満たす必要があり、それゆえ自ずと出土場所も限られてくる。中国南方の墓葬から多くの簡牘が発見されているのは、埋葬後の早い時期から墓室に水が入り込み、簡牘が水に浸かったことに因る。古井戸址からの出土例もあり、朽ちなかった理由は墓葬と同じである。変わったところでは、沼地の中に簡便な小屋を建ててあったような遺構からも、簡牘が発見されている。報告書には明記されないけれども、おそらくこれはトイレの遺構で、その下層から出土した簡牘は、トイレットペーパー代わりに使用された後、水中に投げ込まれたものであろう。

水のおかげで朽ちなかったものもあれば、その正反対の場合もある。20世紀の初頭より、中国西北辺の漢代遺跡から多くの簡牘が発見されてきた。それら遺跡はゴビ、あるいはタクラマカン砂漠のただ中にあり、強烈に乾燥した気候の下に置かれている。簡牘はそのおかげで朽ちなかった。いわば簡牘のミイラである。この地域では、烽火台址、穀物倉庫址、関所址、と様々な遺跡から簡牘が出土しているが、その多くが廃棄されたもので、遺構周辺の堆積物の山、つまりはゴミ捨て場、あるいはトイレの址から見つかっている。また冬場は寒さが厳しい砂漠地帯のこと、使用済みの簡牘は燃料としても利用され、燃えかすのような簡牘も出土している。

これらのうち、現在利用できる簡牘の大多数を占めるのが、墓葬出土の簡と西北辺境出土の簡である。古井戸から出たものも決して少量ではないが、その殆どがいまだ公開されていない。

■墓葬出土簡の「限界」

墓葬出土簡には書籍や副葬品リストが多く含まれる。黄泉の国での死者の無聊を慰めるためか、死後の世界においても役に立つと考えられたのか、思想書・兵法書・占いの書などが副葬された。こうした書籍の仲間と言えるだろうか、墓葬からは法律関係の文書も多く見つかっている。当時は死後も生前と同じ職務に従事するものと考えられていて、そのために必要な文書を副葬したのだ、といわれている。これら法律文書には秦漢時代の法律条文も含まれており、当時の刑罰制度や、諸制度が法律上如何に規定されていたのか知るための、貴重な手掛かりとなっている。

ただし墓葬出土簡、とりわけ法律文書を扱う際に留意せねばならないのは、それが完全な一次史料ではないという点である。一例を挙げて説明しよう。

裁判記録を集成した文書が湖北省の前漢墓から出土している。文書の中には墓葬とほぼ同時代の裁判記録も収められ、かつこの墓からは法律条文も大量に出土した。これらの事実に拠って、墓主は司法官僚であると推測し、この裁判記録は現在の判例集にあたるものだ、という説明がなされることもある。当時は判例集も法源として頒布され、判決を下す際には参照されたのだ、との想像もふくらむ。ところがこの裁判記録には、墓主の時代よりもかなり昔の名判決、われわれの感覚からいえば「大岡裁き」のような「判例」も収められていた。そうなると、この文書が判例集であった

可能性は低くなり、そもそも実際にあった裁判の記録なのかどうかすら、疑わしくなってくる。その他の法律文書も、それらが役所址から出土したのならいざ知らず、個人の墓から出土したものである以上、同様の扱いにくさがある。各々の法律条文は実効力を持ったものだったのか、役所にあった法文を正確に写したものなのか、と疑い始めればきりがない。墓葬出土簡が貴重な史料であることは間違いないが、その使用法には留意が必要なのである。

■辺境出土簡の現在

一方、墓葬出土簡と違い、正真正銘の一次史料として扱えるのが辺境出土簡の強みである。砂漠の砦で見つかった文書や帳簿は、実際の行政事務のなかで作成され、やがて廃棄されたものであるから、間違いなく漢代の現実を写し取っている。辺境防備の施設で作成されたものなので、内容は長城の見回り、烽火の伝達、兵士への食糧給付、等々に関わるものが多い。とはいえ、辺境の施設と雖も、それは漢帝国の行政組織の一部であるから、俸給の支給・勤務評定や人事異動・業務記録の報告などは、全国に共通するやり方で行われた。たとえば、役人が病気になれば「病書」が提出され、病気で欠勤した期間は勤務日数に数えられない。逆に弓矢の試験で好成績を収めると、勤務日数がいくらか増やしてもらえる。そうして積み重ねられた日数は、他の功績とともに勤務評定の目安となり、昇進を左右することになる。こうした仕組みは辺境でも都の長安でも同じであったろう。史書に見える「病を移して臥す」といった表現も、実際の「病書」を念頭に置けば、非常に具体的に理解することができる。

辺境出土簡研究の歴史を振り返ると、これまでに二度の大きな変化があった。第一の変化を引き起こしたのは、居延漢簡の写真図版、および出土地点の公表である。甘粛省エチナ河中・下流域の漢代遺跡から出土した居延漢簡は、出土数の多さで敦煌漢簡（甘粛省敦煌市の、疏勒河沿いの漢代遺跡から出土）を遙かに凌駕し、辺境出土簡研究の中心となる史料であるが、最初は釈文と整理番号が公表されたのみで、それがどのような簡に、どのような書体で書かれていたのか、あるいはどの遺跡から出土したのか、知り得なかった。しかし1957年に図版が、1959年に出土地が公表されると、従来とは違う手法が試みられはじめた。たとえば特定の場所（機関）から出土した簡を集成し、その機関が行政機構のなかで果たした役割を分析する、といった手法も、ここにきてようやく可能となったのである。

コロナ衛星写真の画像。エチナ河（黒河）を挟んで、右に見えるのがA35遺跡（肩水都尉府址）。対岸にはK824遺跡の城郭が見える。(U. S. Geological Survey, EROS Data Center, Sioux Falls, SD, USA.)

第二の変化は、現在も進行中であるが、簡牘実物や遺跡現地へのアクセスが次第に容易になってきたことに因る。

図版が公表されたとはいえ、やはり写真には限界がある。とりわけ側面や裏面も含めた簡牘全体の形状は、実物を観察しなければ分からない。現在、大英図書館や台湾中央研究院に所蔵された敦煌・居延漢簡は閲覧することができ、大英図書館のそれについては、簡牘表面、裏面のカラー写真が、web上に公開されている。これらを利用して、簡牘の形態を論じた研究が現れてきた。とりわけ割り符に関する研究が進み、これまで普通の木札とされてきた簡のなかに、実際には太めの簡を２枚に下ろして作成された、割り符の片割れが含まれていることが知られるようになった。

一方、中国大陸に所蔵されている簡は、依然としてその閲覧が容易でない。だがその代わり、遺跡の現地調査が徐々に可能となってきた。従来、中国西北辺は軍事的にデリケートな地域であったため、外国人の立ち入りには制限があった。その厳しさが緩み、なお且つ幾つかの遺跡は観光資源として開発された結果、現地に立つことが容易になっている。遺跡周辺の環境や諸遺跡の配置について実地に知見を得、歴史地理学的な考察を進める道が開けてきたのである。

さらに近年では、わざわざ現地に赴かなくとも、日本に居ながらにして遺跡の配置やその形状について、かなり正確な知見が得られるようになった。アメリカのコロナ偵察衛星によって撮影された写真が、1995年に機密解除され、利用可能となったためである。いわゆる「衛星考古学」が展開していくなかでも、辺境出土簡はその重要度を増していくことであろう。

朝鮮史における「流品」思想の展開

高麗官僚制度研究

助教授◆矢木 毅（やぎ たけし）
1964年生、1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学

大唐玄宗皇帝の御世、ある時、帝が秘苑の北楼に登って眺望を楽しんでいると、不届きにも、一人の酔っぱらいが渭水のほとりに寝転んでいた。「あれは何者じゃ。」左右のものは誰も知らない。さっそく使者を遣わして引っ捕らえようとしたところ、諧謔で名高いわざおぎ（優人）の黄幡綽が進み出て、「あれは勤務年限を満了した書記（令史）でございます。」という。「お前、どうしてそれを知っているのじゃ。」黄幡綽が答えていうには、「あと一転すれば、『入流』でございます。」帝は大笑いして御勘気を解かれた（唐・趙璘撰『因話録』巻四）。

蛇足を附け加えていえば、「一転」というのは「昇進」という官庁用語であると同時に「寝返りを打つ」という意味でもあり、「入流」というのは、高等官（流内官）への昇進を意味すると同時に「河に落ちる」という意味でもある。この当意即妙の掛詞によって、黄幡綽が一人の酔っぱらいを災難から救った、という話だ。

■「流品」とは

官職を高等官と判任官、あるいは上級職と一般職などに区別することは、今日でも広く一般的に行われていることであるが、それは業務上必要とされる専門的な訓練や経歴などの条件を満たしているかどうかによる区別であって、それ自体は必ずしも社会的な身分の相違を意味しているわけではない。しかし、中国唐朝や、唐朝の制度を継受した高麗朝の官僚制度においては、高等官に相当する「流内官」と、判任官に相当する「流外官」との間に厳格な身分上の区別があり、たとえ件の酔っぱらいがもう一転して入流を果たしたとしても、社会的には流内官を構成する「貴族」の仲間入りを果たすことはできなかった。

こうした士庶の区別、言い換えれば、貴族と平民との社会的・身分的な区別に立脚して、貴族社会の内部には一流と二流、また清流と濁流というような、さまざまな階層上の差等の意識が生じていった。ここに、貴族社会におけるグループ（流）ごとの上下の等級（品）、すなわち「流品」の思想が形成されていく。

「流品」とは、本来、官職における九等級の官階（九品、九流）によって規定されるべきものであるが、実際には官職を離れて当該官人の家門的背景（族望）によって規定される側面の方が強い。中国中世（魏晋南北朝〜隋唐時代）におけるこの「流品」思想の発達については、宮崎市定『九品官人法の研究』に詳述されているとおりである。

■新羅の「骨品制度」と高麗の「貴族社会」

同じ頃、朝鮮半島の新羅においても、一種の流品思想に基づく「骨品制度」というものが存在した。新羅の支配層は「聖骨」「真骨」などの王族と、「六頭品」「五頭品」「四頭品」などの有力貴族によって構成され、骨品によって就任し得る官職や、昇進の上限などが厳格に定められていたのである。

骨品とは新羅の有力氏族をその族勢によって序列化し、それぞれの門地を固定化することによって、王権による支配の安定と永続とを図った制度なのであろう。したがって、この骨品制下の新羅の官僚制度においては、たとえ個々の官僚がどれだけ有能であったとしても、出身氏族の族勢という裏づけがなければ、その人物は充分に自らの能力を発揮することができなかった。ここに新羅における官僚制度の古代的な限界があり、またその崩壊の要因がある。

骨品制度のもとで慶州貴族を中心とする支配秩序から疎外されていた地方豪族の勢力は、10世紀に入ると、同じく開城方面の地方豪族の出身である王建のもとに糾合され、新王朝・高麗を支える支配貴族層、ないしはその官僚層として再編成されていった。高麗では地方豪族の子弟を広く中央の文武官僚層に取り込むための装置として、朝鮮史上、初めて「科挙」を行ったり、「府兵制」を採用したりしたが、こうして形成されていった高麗の文武官僚層は、やがてその母体である地方豪族層（郷吏層）との距離を広め、世代を重ね

るごとに中央門閥貴族としての特権的な地歩を固めていくことになった。

高麗における「貴族社会」形成の背景としては、高麗の科挙が「詞章」を中心とするサロン的な学風に基づいていたことや、したがって、その及第者も大半は中央の文化を満喫した貴族の子弟によって占められていたことなどを挙げることができるだろう。

こうして一旦成立した門閥貴族としての地位は、科挙と併用して行われた「門蔭」の制度によっても保障され、貴族の子弟は、ほぼ自動的に官人の身分を獲得することになっていた。代々世襲されていく家柄の高下によって、いわゆる「流品」の思想が本格的に成立していったのもこの頃であろう。

■「新興士大夫」の登場

12世紀に全盛を迎えた高麗の貴族社会は、13世紀に入ると、一転して受難の時代を迎える。奢侈・享楽に流れる貴族たちへの反発から起こった「武臣の乱」より以降、民衆の反乱、モンゴルの侵略などが相次ぎ、高麗の文化・文藝は、往時の隆盛を一旦は喪失してしまった。しかし、崔氏政権下における相対的な政治の安定を背景として、また元朝への服属を契機とする王権の伸張を背景として、高麗の支配秩序は次第に安定を取り戻し、文化・文藝においても新しい思潮が巻き起こってくる。

高麗国驪興郡神勒寺大蔵閣記（高麗・李崇仁撰）。大蔵経奉納の発願者は李穀・李穡の父子。いずれも高麗末を代表する儒仏兼通の大儒であった。

何より、14世紀に入って中国・元朝から朱子学が東伝してきたことは、従来、「詞章」を中心に展開してきた高麗の学術が、「経術」中心のそれへと転換していく最も重要な契機となったといってよいだろう。この時期、李穀に代表されるような、郷吏階層出身の儒臣が目立って多く活躍するようになってくるのも、どちらかといえば田舎向きの学問である「経学」（朱子学）が、地方の郷吏階層にまで幅広く浸透し、かれらの政治的・社会的な進出を促していたことの証左といえる。

この時期の「新興士大夫」たちは、多くは儒仏兼修の知識人であって、その点において後世の崇儒斥仏の知識人たちとは性格を異にしていた。とはいえ、朱子学の受容と定着において、彼等の果たした役割は決して低く評価すべきものではない。

■朝鮮朝への展望

新興階層の台頭は、しかし、科挙のみならず、軍功や恩倖などによっても促された。このことは必然的に「流品」の混淆を招き、貴族社会の内部に混乱を引き起こさずにはおかない。このとき、門閥的な貴族主義ではない、精神的な貴族主義を標榜する一群の官僚たちが、朱子学の政治的・社会的イデオロギーを旗印に、新たに「流品」の整飭を図ろうとした。

高麗朝から朝鮮朝への王朝交替が、朱子学のイデオロギーに基づくというのは言い古された言説である。しかし、それは政治的な革命ではあっても、真に社会的・経済的な革命を伴うものではなかった。社会の習俗は依然として仏教、ないしはシャーマニズムによって支配されていたし、科挙制度における「経術」主義の理念も、次第に「詞章」の復興の陰に霞んでいった。

こうした中で、朝鮮朝も16世紀に入ると、改めて朱子学の理想をつかみ直し、政治や社会の習俗をその根底から改めていこうとするものと、現状を追認するなかで政治・社会の安定を図ろうとするものとの対立が生じていく。前者は自らを「士流」と自負し、後者を「流俗」と呼んで軽蔑した。

この近世・知識人社会における「士流」の自意識こそが、中世・貴族社会におけるそれとは別の意味で新たな「流品」の思想を生み、かの激烈な「党争」を展開していくことになるのだ。

漢字と漢字コードのはざまで

文字コード理論

助教授◆安岡孝一（やすおかこういち）

1965年生、1990年、京都大学大学院修士課程（情報工学）修了、1997年、京都大学博士（工学）取得

「JISコードを昔の活字棚（文選工がそこから活字を選び取って活版を作っていった）に例えると、現在のコンピュータが内蔵している活字棚は極めて固定的で融通の効かないものだといえる。」(勝村哲也・丹羽正之「理想的な大漢字とは」『漢字典』京都漢字研究会、1994年5月)

「コンピューターの内部には、色々な文字の字形を集めた活字棚があります。この活字棚に並んだ字形データには、やはり一つ一つ番号が振られています。」(吉目木晴彦「いま、何が、なぜ問われているのか」『電脳文化と漢字のゆくえ』平凡社、1998年1月)

漢字コードに関する文献を調べていると、しばしばこういう記述に出くわす。このような形で、漢字コードを活字棚にたとえるのは、たしかに世人の興味を引きやすい。しかし、この手の記述は、漢字コードの説明としては非常に危険であり、多くの誤解を生みかねない。というのも漢字コードは、そもそも印刷のために作られたものではなく、したがって本来、活字棚とは何の関係もないからである。

■漢字コードは通信のためにある

文字を符号（コード）に変換する手法は、通信技術とともに発展してきた。特に、電信の分野においては、符号化手法の良否が、通信に必要なコストを左右する。ゼマーリンクの電信機では、アルファベット26文字を通信するのに、52本もの通信線を必要としていたが、モールス符号の発明は、これをたった2本にまで縮小してしまった。さらに、ボード符号の登場は、複数の通信を時分割で1本の通信線に流す事を、可能にしたのである。

漢字コードもまた、通信技術とともに発達してきた。世界で最初に実用化された漢字コードは、中国の電報コードであり、その起源は清朝末期にまで遡る。これに遅れること約半世紀、新聞社間の漢字テレックスに使用されたCO.-59が、日本初の公的な漢字コードである。日本で現在広く用いられている漢字コードJISX0208が、JIS C 6226『情報交換用漢字符号系』として制定されるのは、CO.-59のさらに19年後。この、電報→テレックス→情報交換、という流れが、まさに電気通信技術の発達に即しているのである。

文字コードと活字棚が決定的に異なるのは、文字を符号化する作業は必ず文字の抽象化を伴う、という点である。たとえばボード符号では、送信文に記されている字形が「A」であっても「*A*」であっても「**A**」であっても、「○●●●●」と符号化される。それどころか、「a」であっても「*á*」であっても「ä」であっても、やはり「○●●●●」である。つまりボード符号においては、「○●●●●」というコードは「Aという文字概念」に振られているのであって、個々の字形差やあるいは大文字小文字の差などというものは捨象されるのである。漢字コードにおいても、同様である。たとえば電報コードでは、送信文に記されている字形が「吉」であっても「吉」であっても「吉」であっても「吉」であっても、「0679」と符号化される。あるいは「國」であっても「国」であっても「國」であっても「国」であっても、「0948」と符号化される。すなわち、活字棚においては当然のように分離されている字形差が、文字コードにおいては同一視されることになるのである。

文字コードと活字棚の違いは、文字コードが「文字の一意な符号化」を要求するという点にも現れる。文字の一意な符号化とは、つまり、符号表の中に同じ文字がダブって入っていてはいけない、ということである。たとえば、電報コードで「穴」を「4494」で符号化すると決めたならば、別の「1340」なんてところに「穴」があってはならないのである。送信側はどちらを使ったらいいのか混乱してしまうし、符号空間は一般に有限なのだから、それを100%活用するためには、同じ文字がダブって入っているのはムダである。この点が、同一の活字を必要に応じて複数収容せねばならない活字棚と、文字コードとの、大きな違いである。

■日本の漢字コードの不幸

「今回標準化されたのは、ある機械の出口から次の機械の入口までのあいだに存在する漢字情報に用いる、漢字の字種とその符号である。機械の内部符号やその処理方式を規制するものではない。」(西村恕彦「漢字のJIS」『標準化ジャーナル』No.171　日本規格協会、1978年5月)

JIS C 6226『情報交換用漢字符号系』は、その名の通り、情報交換用の漢字コードであった。文字コードは、そもそも通信に用いるためのものであり、それを機械間の情報交換にまで拡張して、標準化したというだけのことである。印刷とは何の関係もない。しかしJIS C 6226は、情報交換に使われる以前に、「JW-10」というワープロの内部コードに採用されてしまった。これが、日本の漢字コードの不幸の始まりである。

ワープロというのは、文書を清書するための機械だから、印刷機能は不可欠である。それゆえ、印刷機能に即した内部処理を考案し、それに合わせた内部コードを実装すべきである。ところがあろうことか、日本のワープロ製作者たちは、ワープロの内部コードに、印刷とは何の関係もない情報交換用の漢字コードを充ててしまった。しかも、JIS C 6226の規格票を印刷するために用いた字形に似せて、ワープロの印刷字形を製作してしまったのである。「吉」も「吉」も「吉」も「吉」も「21-40」で符号化される、というJIS C 6226の思想は無視され、「吉」と「21-40」が1対1に対応しているかのような誤解を、世にばらまくこととなったのである。ただし、JIS C 6226の方にも問題がなかったわけではない。JIS C 6226は、文字概念を符号化することを目指していながら、その実「字形にかなりの違いがあり、区別する習慣の認められるもの」には、別々のコードを割り振っている。たとえば「国」と「國」は、それぞれ「25-81」と「52-02」に別々に符号化される。JIS C 6226が字形を規定している、という誤解は、このあたりから生じたものだと考えられる。

刪去重複字備考表

說明

有■記號者係刪去之字，其原來電碼在電碼新編內加一×記號，表示業已刪去，惟此項電碼暫不補字，以免誤會。

刪去重複字備考表

民国24年(1935)刊行の電報コード表では、それまでにダブってしまっていた漢字の削除がおこなわれた。文字の一意な符号化を目指す努力の跡である。

漢字コードはそもそも情報交換に用いるためのものであり、そこでおこなわれる符号化には、文字の抽象化という概念が不可欠である。したがって、漢字コードを印刷という局面で論ずるのは、文字コードの本質を全く理解していない輩の愚行に過ぎない。しかし、漢字コードがワープロやパソコンのためにあるという誤解は、日本中に広く蔓延している。それを端的に表しているのが、常用漢字表以外の漢字に対して印刷標準字体を示した、以下の国語審議会答申である。

「情報機器に搭載される表外漢字の字体については、表外漢字字体表の趣旨が生かされることが望ましい。このことは、国内の文字コードや国際的な文字コードの問題と直接かかわっており、将来的に文字コードの見直しがある場合、表外漢字字体表の趣旨が生かせる形での改訂が望まれる。」(国語審議会『表外漢字字体表』前文、2000年12月)

■漢字コードの未来

ここまで誤解が進んでしまった漢字コードを、元のあるべき姿に引き戻すのは、まず無理であろう。それならば逆に、出力字形を字形のまま1字1字何らかの形で符号化し、それと漢字コードの各文字との関係を情報交換する仕掛けは考えられないだろうか。さらに、漢字コードそれ自身は、情報交換や通信という枷から解き放ち、文字概念の抽象的表現としてのみ用いることはできないだろうか。このやり方であれば、漢字コードはむしろ検索という用途に適したものとなり、しかも表示や印刷の字形は、漢字コードとは別に自由に設定できるはずである。つまり、この仕掛けがうまくいけば、「国吉」も「国吉」も「國吉」も「國吉」も全く同じように検索ができると同時に、字形は自由に使い分けがきくのである。

ただし現実には、漢字における文字概念は、一部が重なりあった複雑な構造を持っている。つまり単純な1対多の階層化による符号化表現では、必要な概念構造を、必要な字形を用いて表すことができない、ということを意味する。かと言って、多対多のネットワーク構造を持ち込むと、一般にはとても使うことができない、いわば好事家だけの符号化表現となりかねない。また、現在すでに用いられている漢字コードや、フォント実装技術との間の「わたり」を付けなければ、現状のデータ資産を移行できなくなってしまう。これらの問題をどう解決するか。今後の研究の発展に期待されたい。

植民地朝鮮の「政治空間」と日本人社会

個人研究

近代朝鮮在住日本人社会の研究

助手◆李 昇燁（い すんよぶ）

1972年生、2004年、京都大学文学研究科博士後期課程研究指導認定退学

日本の朝鮮植民地支配にともなって、多くの日本人が海を渡って朝鮮半島に移住して行った。1910年の「韓国併合」当時約17万人であった日本人の数は、朝鮮統治の安定化とともに増加していき、1940年代には70万人を上回るようになった。

朝鮮に在住する日本人は、朝鮮人社会とは別に、一つの「植民者社会」を形成していった。大都市を中心に日本人町が作られ、日本人の商店街や学校が設けられたが、多くの場合、一つの都市内においても、朝鮮人と日本人の居住区域ははっきりと分離されていた。これは朝鮮人社会とは勿論、日本「内地」の社会とも異なるものであった。文化面で例をあげれば、「朝鮮っ子」と呼ばれた朝鮮生れ・育ちの二世たちは、独特の方言を使うことさえあったという。朝鮮語から影響を受けた表現として、「チョッコン」(ちょっと)、「チョコマン」（小さい）などがそれである。

さて、朝鮮在住の日本人社会を政治的側面から見ると、二つの異なる立場にあることがわかる。朝鮮人に対する「支配民族」としての一面と共に、朝鮮総督府を頂点とする統治権力に対する「被治者」としての一面を同時に持っていたのである。朝鮮人の抵抗運動に対しては、支配ブロックの一員として統治権力と利害関係を共にするが、日本政府および朝鮮総督府の政策などについては、朝鮮人のエリートと協力して政治的な要求を発するのであった。すなわち、統治権力側とも、朝鮮人側とも、対立と協力の二重的関係をもっていたと言えよう。

■統治権力との関係、朝鮮人との関係

このような二重的関係は、統治権力側の視点からも窺える。朝鮮在住日本人社会は植民地支配を堅固なものにするための人的資源として保護育成の対象である同時に、朝鮮人に対する差別や暴行で朝鮮人の感情を悪化させて、果てには朝鮮支配の安定を害するおそれのある取締の対象でもあった。

府協議会（のち府会）や道評議会（のち道会）などの地方自治機構は、日本人および朝鮮人の地域エリートによる政治的議論・活動の空間として機能した。写真は京城府協議会。

その実例としてあげられるのが、朝鮮民衆の最大抵抗運動であった三・一運動（1919年）に直面した日本人社会の対応と動向である。朝鮮人の大規模な示威運動が勃発すると、各地の日本人社会は自衛団を組織して警戒をし、さらには軍警と協力して示威を鎮圧した。このような日本人社会の活動は、未曾有の抵抗運動に直面して鎮圧に苦労していた統治権力側には歓迎すべき動きである一方で、自衛団活動がエスカレートして民族間の衝突を激化させる恐れのあるものでもあった。当時の京城府尹（ソウル市長にあたる）が管内の日本人町洞総代（町内会長にあたる）に対する訓示で、「内地人［＝日本人］ニシテ不安ヲ感スル所ヨリ警察官ニ助力シ又ハ軽率ナル行動ニ出ルカ如キコトハ最モ慎マサルヘカラス」と強く警告した事実もある。

一方、彼らの朝鮮人社会に対する対立と協力の二重構造にも注目しなければならない。1920年代に盛んになった各種の政治運動の中で、日本人および朝鮮人の地域エリート集団は活動を共にする。参政権要求、朝鮮財政問題、地方自治制度などが重要なイシューとして取り上げられ、民族を超える協力の下で運動が行われる。しかし、おおむね同じ要求をもって行われたように見える運動の裏面には、民族的利害関係の差異による葛藤が存在していたのである。ひとことで「参政権」といっても、日本人側は朝鮮から帝国議会議員を選出する方法を、朝鮮人側は朝鮮に自治議会を設立する方法を望んでいたことからもわかるように、異なる利害関係に基づいた同床異夢の協力であったと言えよう。

最近、歴史研究者の間では「支配」と「抵抗」の二項対立構図で植民地朝鮮の社会を説明することは多くの限界を持っているとの批判の声があり、またその克服が試みられている。植民地に存在していた「政治空間」のダイナミズムを把握すること、またその背景にあった各集団の利害関係を究明することは第一の課題である。朝鮮在住日本人社会の研究は、その一つの糸口になると思われる。

北宋仏教美術から見える世界

個人研究

中国仏教絵画の研究

助手◆大原嘉豊（おおはらよしとよ）

1971年生、1999年、京都大学大学院文学研究科博士課程修了、2000年京都大学博士（文学）

私は、中国仏教絵画を扱うとしても、北宋時代を中心として研究を進めたいと考えている。ここで、研究の意義を問う声があがると思う、中国仏教美術は唐代に最盛を迎えたはずであり、何故北宋という「衰退期」を特に選択するのか、と。

確かに、現代の視覚経験と密通したこの審美観に抵抗する術を、私は持ち合わせていない。が、北宋は中国近世秩序の完成期であり、その美術は最も「中国的」美術と称され、後代への影響も強く、一つの規範として存在した点に特色がある。また、東アジアの求心力として存在し続けた中国の美術は、近代以前は常に周辺諸国に、程度の差はあれ、波乱を与え続けた点で、中国国内のみにとどまらない問題を孕み、それは特に請来伝世遺品を多数抱える日本美術の問題とも直結する。

山西省高平市開化寺大雄宝殿南正面全景。紹聖３年（1096）竣工。内部東壁面には華厳経変が、西には報恩経変が描かれる。（2001年撮影）

それでは、何故、特に仏教絵画を主対象とするのか。先ほど中国が東アジア国際秩序の中心にあるとした。ここで周辺圏への文化伝播の状況をどうデザインするかが問題となる。

殊に、北宋においては、それが唐の如き政治性に比重が高く、且つ中国の圧倒的勢威に裏付けられた国際秩序の崩壊を受けた後である点は注意せねばならない。且つ、遼・金の華北征服王朝の存在は看過できない面がある。また、これと並行する周辺諸国の民族的自立という事実にも目を向けねばならない。これら諸事実は、唐美術で論じられるような単純な中央放射型の東アジア美術影響論の成立を阻んでいる。ではどうすればよいのか。ここでは豊富な史料を有する「仏教」という媒介項目を設定する。なぜなら、仏教絵画は、単に「芸術作品」として各地にもたらされたのではなく、その造形の背後に存する教理の受容が前提となっているからである。絶対的残存遺品の少ない制限下で、その点を面に広げ、仏教という限定はあるものの、一つの体系を作る戦略と考えて欲しい。ここでは、１つの大きな枠組みについて批判的に検討を加えることをねらいとする。すなわち、かつての満州への帝国主義的進出により喚起された、ここを根拠とした遼の文化の東アジアへの影響論である。これを祖述するのに、遼の中華的意思を根拠にする見解もあるが、交易ルートや遼の辺境の胡族国家的性格はこれと齟齬するという問題があり、東アジアの国際関係性の把握が緊要と考える。

■具体的研究対象は華厳経美術

それでは、美術史である以上、何を研究するのか。私は唐代から南宋代に至る華厳経美術を設定する。何故か。それは、指標として相応しい極めて特異な図像が存在し、且つその遺品（彫刻も含む）が、中国内では山西、江南、四川、国外では遼、西夏、南詔大理国、高麗、日本と、遺品はさまで多くはないが、この時期の東アジア世界全般に分布しているからである。その特異な図像とは、両手を左右脇で屈し掌を上に向ける盧舎那仏の図像である。この図像に関しては、日本伝存遺品に着目した研究が1960年代に既に存する。すなわち、鎌倉時代初頭の明恵による所謂「厳密」の美術にその図像例があり、その華厳思想のルーツをたどる形で、高麗・南宋の経路が遺例の捜索と並行して明らかにされたのである。が、中国側史料の公表の進展に伴い、その経路とは異なる地域の作例が知られるようになり、これらとの関連の把握が必要と考える。特に、北宋後期の山西高平市開化寺大雄宝殿東面壁画の華厳経変は重要であり、これを中心に考察する。なんとなれば、山西は、唐以来華厳信仰の有数の拠点であり、南宋以降隆盛を迎えた北宋初頭に勃興した江南華厳信仰の淵源だからであり、その保守的様式といい、この図像型式の系譜の先駆的な発現形態と見なされうるからである。これらを、近年進みつつある宋代華厳研究の進捗と併せて総合的に検討することで、冒頭の問題の解明を図りたいと考えている。

個人研究

ソコニイルコト

近代日本民俗誌システムの研究

助手◆菊地（きくち） 暁（あきら）

1969年生、1999年、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻博士課程修了、博士(文学)

人々が生きるために必要な常識は、狭い集団の中においては、さほど意識化されることはない。そこにゆらぎが生じるのが「近代」にほかならない。ヒト、モノ、カネ、情報がグローバルに運動する近代世界システムの最中、人々は自らの「当たり前」から引き剥がされ、自らの常識が他者にとっては決して「当たり前」ではないことを意識化せざるをえなくなる。

この意識化の重要な担い手の一人が、日本民俗学の創始者・柳田国男(1875-1962)である。柳田は、近代化の中で人々の生活が急変しているにもかかわらず、文字資料が、その偏った部分しか示さないことへの苛立ちを隠さない。そして柳田は、普通の人々が日々の生活で培ってきたモノ(民具、民家…)、コトバ(伝説、昔話…)、ワザ(祭礼、芸能…)の中に、失われた全体性への回路があること示そうとする。民俗学とは、近代の、そして文字の彼方へと失われた全体性を回復させる企図なのである。とはいえ、その方法的基礎たる採集と比較は、扱う対象がどれほど「伝統的」に見えようとも、紛れもなく「近代的」である。その意味で、民俗学とは、一見「近代」に抗するようにみえながら、実のところ「記述する近代」にほかならない。

柳田の呼びかけに応じた民俗学徒たちは、全国各地の農山漁村に赴き、失われた全体性を目指して調査と記述を試みる。しかし、その地が彼らの脳裏にどれほど「伝統的」と思われたとしても、それは紛れもなく民俗学徒と同じ時代を生きる「記述される近代」にほかならない。

例えばこの写真は、石川県奥能登地方に伝えられる「あえのこと」を撮影したものである。この行事は、農家の主人が「田の神様」を自宅に迎え入れ、御膳やお風呂で饗応し、その年の収穫を感謝するとともに、翌年の豊作を祈願するものである。稲作民族・日本人の稲に対する素朴な信仰を体現した、典型的な農耕儀礼として民俗学においても注目度は高い。敬虔な祈りを捧げる一家の姿に「伝統性」を感得することはきわめて容易だろう。

しかし、この写真があるということは、決して「伝統的」ではない。その写真のこちら側には、カメラを所有する資本があり、写真を使いこなす知識があり、それらを運用して「民俗」を対象化する主体の欲望がある。そうした資本、知識、欲望に晒された人々の意識は、「伝統性」とは決定的に隔たっているはずだ。なにしろ、彼らが祈りを捧げるべき「田の神様」の位置に立っているのは、カメラを携えた写真家にほかならないのだから。

「近代」から免れた「伝統」を求める民俗学徒が遭遇するのは、不可避的に、近代に直面した人々の現実である。民俗学とは、「記述する近代」と「記述される近代」の、矛盾と葛藤に満ちた交渉にほかならず、それは結局のところ、近代日本の軌跡にほかならない。この状況を「近代日本民俗誌システム」として概念化し、立体的に記述していくことが、本研究のねらいである。

もちろん、民俗学の根幹たる現地調査の無効性を訴えたくてこのような研究をしているわけではない。人々の生きたリアリティを捕捉しようと、文字通り体当たりで対象と向かい合う調査者の姿勢は真摯であり、敬意に値する。しかし、その向かい合い方が体当たりであるだけに、転んだ時のずっこけ方も甚だしい。本研究は、調査者が「ソコニイルコト」の意味、その可能性と限界性を、歴史的に位置付け、新たな展望を切り開くための試みなのである。

あえのこと、石川県鳳至郡能都町波並
昭和29年12月5日。芳賀日出男撮影。

個人研究

「わざ」の豊かさを捉える

身体技法の認識論

助手◆倉島 哲（くらしま あきら）

1974年生、2002年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学

「技（わざ）」という言葉は誰もが日常的に使用しているが、目の前の相手の持っている技を捉えることは難しい。だから、映画や小説では小柄な老人が実は武術の達人であったりする。たしかに、フィクションでは技の神秘的な捉え難さが誇張される傾向がある。だが、現実の生活においても、掛け値なしに捉え難く不透明な技を、にもかかわらず何とかして捉えようとする経験はごく一般的ではないだろうか。

■技の捉え難さと豊かさ

たとえば、誰かに仕事を頼まねばならないとき、相手がどれほどの仕事の技を持っているかを判断することは死活問題である。だが、これほど困難な判断はない。相手が技の資格認定を受けていても、いわゆる「ペーパードライバー」におけるように、その資格は技を必ずしも反映していない。同様に、相手の実務経験年数や社会的評価も技を知るための決定的な指標にはなりえないだろう。

このように、実際の技はフィクションにおけるそれに劣らず捉え難いが、それだけに、人々の間で多様な実践を生み出しつづけてきた。たとえば、ある仕事の技を認められたなら、同じ仕事を続けるなかで技を様々に発展させることができる。技を認められなかった場合でも、自分の技を信じてアピール方法を工夫したり、技に問題点を認めて改善に励んだりすることができる。あるいは、技が生かせる別の仕事に新天地を求めることもできるだろう。このような、技をめぐる認識と実践の豊饒性こそ、筆者が第一に捉えたいものである。

■技の客観化と貧困化

だが、技を学術的に捉える従来の試みの多くは、技の豊かさを削ぎ落とすことに熱心だった。運動生理学やバイオメカニクスなど自然科学の諸分野は、モーション・キャプチャをはじめとする様々なテクノロジーによる身体運動の計測・分析によって技を客観化した。同様に、社会学や人類学など社会科学の諸分野は、「身体技法」や「ハビトゥス」という名のもとに、各種の技の階層的・文化的分布と、それに応じた技の言説的・象徴的意味を客観化した。だが、データ空間や言説空間に並べられた技は、現実の実践から切り離され、いわば、殺菌された技である。

筆者の関心は、データ空間や言説空間のなかに表現された技それ自体にあるのではない。むしろ、データ空間や言説空間から隔絶した日常的実践のなかで、技をめぐる豊かな認識や実践が生み出されうるのはなぜかを問いたいのである。

■武術教室という題材

このような関心から、筆者は武術教室のフィールドワークを行っているが、はじめて教室に足を運んだときに次のような疑問を抱いていたことを覚えている。

筆者が調査している武術教室S流の練習風景。先生が１人の生徒を相手に技の手本を見せるのを、他の生徒達が注意深く見ている。

指導者の先生が弟子を投げ飛ばすとき、その技は本当に効いているのか、それとも、弟子が演技しているのか。先生の技が本物であるとしても、型稽古という練習方法によって自分もそれを習得できるのか、それとも、型という表象を真似るだけで終わってしまうのか。そもそも、そのような技を身につけて何になるのか。護身術か、健康法か、それとも、表象の次元での自己満足にしかならないのか。

筆者のみならず、多くの見学者が抱いているこれらの疑問は、どのようにして解決され、回避され、あるいは、忘却されるのだろうか。また、その過程でどのような実践が生み出されるのだろうか。技の捉え難さと豊饒性がともに先鋭化する武術という文化領域の考察によって、これらの二側面のいずれをも捨象しない技の認識論を開拓できるはずである。

個人研究

カースト社会を生きるムスリム

南アジア・ムスリム社会の社会構造

助手◆小牧幸代（こまきさちよ）

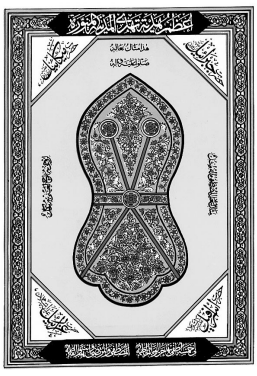
1966年生、1993年、慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了

インドには、カーストと呼ばれる無数の社会集団が存在する。それらは地位、特権、職業の世襲を原則とし、結婚や食事などに関する制限を通じて、集団の排他性と閉鎖性を維持する。カーストとは、「家柄」「血統」を意味するポルトガル語カスタに由来する言葉で、もともとヒンドゥー社会研究に用いられた概念である。しかし、インドではムスリム社会にも類似の集団が観察されることから、比較研究のためにこの概念が援用される。

■ムスリムの「カースト」

唯一神アッラーの前では全てのムスリムが平等であるが、インドのムスリムの間では社会的不平等が一定のレベルにまで制度化されている。「コウム」「ザート」「ビラーダリー」といったムスリム社会集団の単位は、ヒンドゥー社会集団の単位「ジャーティ」、つまりカーストに匹敵しうる。そうした集団の序列を決定する要因は、ヒンドゥー社会研究で盛んに論じられてきたが、統一的な見解はまだ示されていない。ムスリム社会研究の現状も同様であるが、有力なのは祖先の起源またはイスラームへの改宗順に基づく序列を指摘する説である。これは、インドのムスリムを大きく「アシュラーフ（高貴な身分のムスリム）」とそうでない人々に二分する。

アシュラーフにはアラブ、イラン、トルコ（中央アジア）、アフガニスタンなどに祖先の起源があるとされる集団が含まれ、その祖先はインドに到来する前にイスラームに改宗していたとされる。これ以外の人々は様々な職能集団に属しており、その祖先はインドにムスリム支配政権が確立（13世紀初頭）されたのちに改宗したとされる。アシュラーフに分類される集団の名称は祖先またはその出身地や部族の名前を想起させるが、非アシュラーフの場合はヒンドゥー職能カーストと同じことが多い。両者は結婚や社会的交流の面で断絶されており、非アシュラーフの中には地位向上を目指して預言者の教友などに由来する集団名を名乗るものも現れてきた。

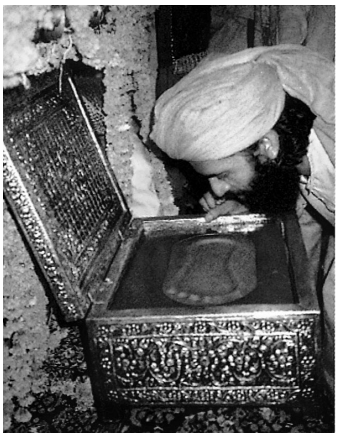


■預言者一族の子孫

さて、アシュラーフの中でも頂点に立つのが、預言者ムハンマドの一族の子孫とされるサイヤド（サイイド）である。サイヤドは少数ながら地主、「聖職者」、政治指導者などとしてある種の特権階級を形成してきた。私が約2年間滞在した北インドの田舎町は人口約5万6千人で、その過半数がムスリムであったが、サイヤドはおよそ1,500人（ムスリム人口の5%にも満たない）ほどであった。

サイヤドは、その血統ゆえに社会において特殊な位置を占める。例えば、イスラームの五行（信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼）のうちの喜捨を、サイヤドは受け取ることができない。そのため、経済的に困窮したサイヤドを支援する際には、喜捨でなく贈与という言葉が用いられる。同時に、サイヤドへの奉仕は善果をもたらすと考えられている。また、理念上、サイヤド女性の結婚相手はサイヤド男性に限定される。アシュラーフに属するもののサイヤドではない男性と結婚し、実父・義父・夫が次々と他界したサイヤド女性については「正しくない結婚が招いた不幸だ」という風評があったくらいである。

サイヤドは、さらに民間信仰の中心ともなりうる。ムスリム聖者の多くはサイヤドである。預言者の髪・遺品・足跡などの信仰においても、それらの来歴や廟建立をめぐる伝承にはサイヤドが必ず登場するのであり、その所有者・管理者もサイヤドである場合が多い。このような視点からインド・イスラーム世界をみると、近年の「イスラーム潮流」とは別の仕方で、預言者との接点を求めるムスリムの姿が浮かび上がってくるのである。



▲バラカ（神の恩寵）が宿るとされる預言者ムハンマドの足跡。これに接吻し個人的祈願をするムスリムの後ろには、長蛇の列ができている。
◀預言者ムハンマドの履き物を象ったステッカータイプのお守り。頭より高い位置の壁などに貼って家内安全・無病息災などを祈念する。

数世紀を比較史的視点から分析

個人研究

近世ヨーロッパの国際金融研究

助手◆坂本優一郎（さかもとゆういちろう）

1970年生、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退

いまこそ、歴史的な思考が必要である。バブル経済が破綻して10年が経とうとしているが、その後遺症を引きずる私たちが目にしているのは、経済のグローバル化であり、マネーゲームの暴走である。しかし、結局、バブルとは何だったのか。グローバル化とは何か。これまで多種多様な議論が提出されているが、これらには共通した欠点があると考えられる。それは過度に現在に偏った近視眼的な眼差しである。たしかに、経済学が歴史的な思考を捨てつつあることを考えれば、これも仕方がないことかもしれない。しかし、いささか迂遠かもしれないが、100年、200年単位でとらえてこそ、また、日本という狭い空間からではなく、まさにグローバルな視野から眺めてこそ、はじめて見えてくるものもあろう。これこそ、本研究の視座である。

■近世的な国際金融構造

まず、現在のグローバル化現象に直結する金融の歴史的起源は、どこに求められるであろうか。それは、近世の西ヨーロッパ、とくに、オランダとイギリスにある。当時、いわゆる重商主義戦争が国家間で断続的に発生したが、戦費の多くが国家による公債によって賄われた。ときには、一回の起債で一年分の国家予算に匹敵する資金が調達されることもあった。むしろ、近世の国家には、莫大な公信用を安全に運用するために、その機構が強化されていったという側面もある。

しかし、重商主義の国別的側面を重視しすぎてはならない。逆説的であるが、国別に閉じた経済システムではなく、むしろ開放的な商業・金融システムを前提にしてこそ、重商主義は成立しえた。たとえば、公債は一国内ですべてが調達されたのではなく、その多くは国外の金融市場、つまりアムステルダムやロンドン・シティで調達された。莫大な資本が、たとえ敵国であろうと、いともたやすく国境を行き交ったのである。

こうした国際的な資本移動を担ったのが、のちに「マーチャント・バンカー」となる大貿易商・金融業者であり、かれらの重層的な商業・金融ネットワークである。その構造や機能は、近世以降の国際金融において、ほぼそのままのかたちで生き残ってきた。この「国際金融における近世的な持続性」こそ、本研究の課題の一つである。

W・ホガース『南海の泡沫』(1721年)。南海泡沫事件は1720年にイギリスで起きた世界初の国際金融恐慌。「バブル」の語源でもある。

■「個人投資家の誕生」

では、こうした資金を提供したのは、誰なのであろうか。18世紀後半になると、国際的な資本移動が大規模化すると同時に、公債保有者の社会層が低下していく。それまで証券投資にむしろ拒絶的な反応を示していた、肉屋、理容師、商店主といった「普通の人びと」が、積極的に証券投資を開始するようになる。さらに、証券「投資」と「投機」の観念が分離するのもまた、まさにこの時期なのである。こうした諸現象の連関を探ることが、ひいては、個人投資家が大きな位置を占める英米型の証券市場・経済構造の歴史的な理解につながる。いわゆる「ヘッジ・ファンド」や、ロンドン・シティ、ウォール・ストリートへの資金を提供しているのは、こうした個人投資家に他ならない。また、最近、「投資信託」を通じた個人投資家による投資を勧める広告・コマーシャルがあふれているにもかかわらず、証券投資にまだなお拒絶感が残存する日本の状況を、比較史的な視点から分析することも可能になる。

産業資本主義を機軸にすえる歴史像では、今日の現象は理解できない。産業革命に先立つ近世に、すでに国際金融構造および証券投資への思考が確立していたことに注目する必要がある。そうすることによって、アジアではなく欧米に国際金融の歴史的起源が存在した意味、日本人の証券投資への姿勢、欧米資本が圧倒的な力を見せている現在のグローバル化現象などが、はじめて大局的に理解できるのである。

怪を志す小説？

中国魏晋南北朝志怪の成立背景

助手◆佐野誠子

2003年、東京大学人文社会系研究科博士課程単位取得退学

私が目下研究対象としているのは「志怪」と呼ばれる書物である。志怪とは中国における怪異の記録である。その怪異とは、幽霊や妖怪が跳梁跋扈するものから、遠い外国の不思議な物産に関する記録まで様々である。そして志怪は中国における小説の祖とされている。そのため、志怪はたびたび「志怪小説」と呼ばれるのであるが、私は敢て「志怪小説」とは呼ばない。単純に志怪、あるいは志怪書と表記している。なぜなら志怪は本来今日の我々が考えるような「小説」として書かれてはいないからだ。志怪を書き記した人々はそれら怪異現象を多少の疑念は懐いていたとしても実際起こった事実として記録している。

これまでこの志怪の成立については、仏教や道教との関わりの指摘や、民間伝承などの観点から論じられることが大半であった。それらの説明が全く誤っている訳ではないが、なぜ当時の人々がここまで怪異に興味を懐いたのか、それをわざわざ書籍としてまとめたのか、その解答が不充分であるように思う。私の疑問は二つある。一つはなぜ魏晋南北朝にこれらの志怪書が盛んに書かれたのか。もう一つはなぜ歴史記録として書かれた怪異が小説として受容されるようになったのか。疑問を解決するためには歴史とは何か、小説とは何かということを改めて考え直す必要がある。

明・梅鼎祚『才鬼記』より「呉王女紫玉」。もとも と晋・干宝『捜神記』に見られる話が明代の鬼（幽霊）にまつわる話のアンソロジーに収録された。

■歴史としての怪異

中国の公式歴史書―正史には五行志という記録がある。五行志には災害や怪異の発生とその発生理由についての考察が記されている。しかし五行志の記録が血の雨が降った、龍が宮殿の門前で闘ったといったものなのに対し、志怪書は幽霊は存在しないと議論で打ち負かした相手が実は幽霊だった、犬が死んだ家族に化けて人々をだましたなどといった話で、同じ怪異といっても両者から受ける印象は全く異なる。五行志も志怪書もありとあらゆる怪異を記録している訳ではないのだ。五行志における記録の基準が五行志が国家の命運に関わる、天が警告として起こした（と当時の人々が考えた）災異を記録することなのに対し、志怪はそのような怪異には大して関心を払わず、怪異に遭遇した当事者にしか関係ない事件が大半を占める。志怪的な怪異の記録は魏晋南北朝より始まる。この変化の背後には何を歴史とみなすかという歴史観の変化が存在している。つまり、漢代以前は歴史とは全て天下国家に関わることであったのに、魏晋になってからは個人的な経験でさえ、歴史を構成する一要素となり得たのである。この歴史観の変化の背景には、人間観の変化があると予測される。

■怪異をめぐる小説史

志怪に収められる怪異の内容がある人物を巡って起こるものだったため、今日我々が志怪を小説的に読むことが可能なのだと考えられる。

唐代になると志怪のみならず「伝奇」と呼ばれる著作が書かれるようになる。「伝奇」は「奇を伝える」と読めるように、人間に化けた狐が登場するような「奇」なることも書かれるが、作品によっては何ら荒唐無稽な記録のない純粋な人間ドラマが描かれる。これまで志怪という怪異を通じて人間を描いてきたものが、唐代に入るとその枠組みから飛び出して、怪異ではない奇を描くようになった。伝奇は既に虚構を意識して書かれた小説と見なせる。

また明代末期には古い書物の再刊が盛んに行われたが、その中で『捜神記』『異苑』といった代表的な志怪書も当時の著作そのままではないが刊行された。そして当時の口語体小説でもこれらの志怪の内容を話の枕に用いたり、また翻案したりと小説的な受容が既に行われていた。この受容と流行を受け清朝になると蒲松齢『聊斎志異』という虚構を意識した怪異小説の傑作が生み出された。このように時代毎の怪異と小説の関係を考えることで、別の視点から中国小説史を記述し直すことも可能ではないかと考えている。

現代身体論の史的背景をさぐる

個人研究

近代西洋医学発展史研究および身体論

助手◆田中祐理子（たなかゆりこ）

1973年生、2000年、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得

今日、人の身体は、大きな変化の波を受けようとしている。近年のゲノム解読の成果が医療の可能性にもたらす劇的なひろがりはその最大のものとなろう。そのほかにもネット世界の飛躍的な進化に伴う言語・情報・物品と個人の関係の本質的な変貌や、コミュニケーションの相手として新たに登場したロボットとの触れ合いなど、私たちの身の回りにはいま、「生きる身体」とは一体何なのかということを、改めて考えさせる場面が次々に起こっている。

■身体とは何か

身体とは何か。その答えは明快でもあり、同時に永遠の謎でもある。私たちは身体を持って生まれ、日々その身体を生きている。冒頭に触れたような科学的進歩や社会環境の変容により、身体の輪郭が揺れることがあるとすれば、それは人間の輪郭や生命の輪郭といった主題へと直結するものとなる。あなたの身体はどれですかと訊かれたならば、私たちは簡単にそれを指差すことができるだろう。しかしその身体が開かれている地平の複雑さ、身体の機能やそれらを通しての身体と世界との関係性、唯一無二である「自分のからだ」の内にある（そしてそれは時に外へと大きく繋がっていく）私たち自身には制御しきれないほどの多様な運動を思うとき、私たちは単に私たちの皮膚を指して、それをこの身体の表面なのだと、言いきることはできないように思われてくるのである。

■身体の人類史と現代史

医療人類学者ファブリーガは、「あらゆる社会の構成員は病いと傷害とに出会い、そしてそれらのもたらすものに対処するための社会的な行動を組織することになる」、そしてそれゆえに、「医学的問題とそれらすべてに対応するための制度は、文化的に普遍なものであると考えることが出来る」と述べている。人類と世界との交渉の一側面として、身体と自然との交渉、つまり「病気」というものをとらえるならば。この病気という危機と取り組むために自らの身体について向き合おうとする人間の知的活動が、極めて古い時代から、様々な形をとり様々な身体像を生み出してきたことを、理解するのは難しくないだろう。身体観には強く世界観・宇宙観が反映される。身体を通して私たちは、永く多彩な人類史の一端へと辿りつくことにもなる。

ところで、そのように考えるならば、20世紀の末までに私たちと身体との間に生まれていた情況というのもまた、極めて特殊で興味深いものであったと言えるのかもしれない。1980年代頃をピークに、「医療権力」という言葉が言われるほど、ひとつの身体観が世界的に権威あるものとなって、ひとびとの身体を囲いこもうとしていると感じられた時期があった。数多あった医療体系のうち、抜きんでて西洋医学は発展し、そして今日までに「現代医学」となった。この医学の獲得した身体像は、同じ「身体」を扱うものでありながら、他のシステムをなべて「代替医療」と呼ばせるまでの力を持つにいたったのである。なぜそんなことが可能だったのだろうか。何がこの差異をもたらしたのだろうか？そのような問いが、ここには発見されるべきなのではないだろうか。

ヴェサリウス『ファブリカ』（1543）表紙

■現代身体論の史的起源を探る

現代にとり、西欧文化の果した役割は大きい。世界・宇宙・歴史そして人間。これらの謎について、その模型を精巧につくりあげることにおいて、西洋は他に類をみない方法論を発展させたと言える。しかしながら、いまこの模型が発展すればするほど、私たちはその模型を超え出るダイナミズムへと結局は帰っていくかのようでもある。身体が経験している変動もまた、その一場面であると考えられる。

16世紀ルネサンス期の解剖学的人体研究を転換期に、やがて独自の生理学を発展させた西洋医学。その歴史を探ることで、今日の私たちの身体の、その深層へと僅かなりとも分け入りたい。

学校／説教／僧侶、そして〈奇人〉へ

個人研究

近代日本における教育／教化／宗教の関係史

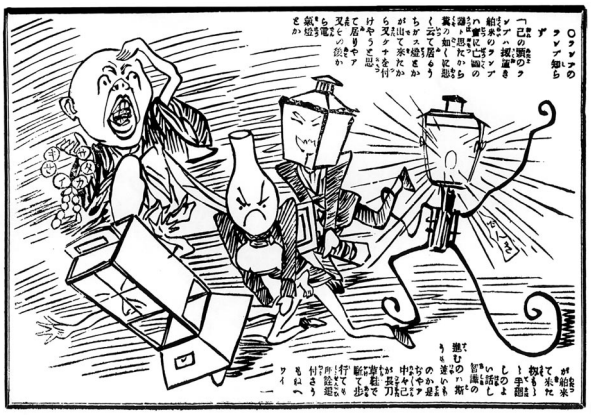
助手◆谷川（たにがわ）　穣（ゆたか）

1973年生、2002年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修認定退学

近代国家が人々を「国民」なるものに仕立て上げるとき、学校教育は最も重要な装置として機能する――この説明に、大きな異論はあるまい。だがこの「常識」は、いかにして生成したのだろうか？　近代日本における学校教育制度の発足は、ひとまず1872（明治5）年の「学制」に求められる。私はこの学校教育の草創期に立ち返り、上記の「常識」の形成過程を探究している。その際、視点を学校教育と宗教、とりわけ仏教との関係に設定してみたい。

■教導職の説教活動

明治前期、それは学校と仏教の交差する場に満ち満ちた時代であった。当時の建白書や新聞・雑誌記事、各府県の公文書をひもとけば、その点は一目瞭然であろう。たとえば、神仏合同の民衆教化政策も、その舞台の一つであった。「学制」と同じ年、政府は10万人以上ともいわれる全国の神官・僧侶を「教導職」に任じ総動員することを発表した。「敬神愛国」などのスローガンを、天皇制国家における人倫道徳として民衆向けに説教させるという、度外れた大計画を敢行したのだ。この計画は実質わずか3年で失敗する。だが、学校教育とは何か、何とは違うのか、という定義・峻別をさまざまに迫る局面を生み出しもした。寺院を説教所と学校校舎のどちらに転用する？　教導職が学校教員を兼務できる？　説教を学校のカリキュラムに組み込んでよい？　興味深い実態が、史料から次々と浮かび上がる。なかでも、下級教導職の等級名と学校の正教員の名称が、ともに「訓導」である点は象徴的だ。当の明治政府さえ、学校教育と教導職の教化とを、はっきり分けて考えていなかったのだから。しかしたとえば埼玉県が、翌1873年に両者を区別すべく教員側の名称を改めたように、現場では教育と教化の峻別が徐々に行われてゆく。私が研究テーマに「・」でなく「／」を用いるのも、それらを意識してのことである。



『団々珍聞』301号（1882年）。「文明開化」の象徴＝ランプと、最も原始的な光＝剃髪の佐田介石（左上）。当時の佐田に対する見方を示す？

■仏教界と学校教育をめぐる諸問題

そんな近代日本形成期、「教育勅語」が発布される明治20年代までを対象にすれば、見えてくる課題は数多い。近世期に村落の知識人であった僧侶が、明治5年以後の民衆教化や教員兼務を通じて見い出す、多様な「教育」の可能性。明治10年代、俗人教育へ関心を示す僧侶の活動。明治20年代における貧民教育と「慈善」の行方、などなど。これらの検討から、仏教界と政府・文教行政の関係へ迫りたい。その関係は、僧侶の個人的な教育活動を押し流し、キリスト教系学校に対する政府の抑圧にも大きな影響を与えてゆくであろう。その道すじは、仏教界が学校教育を「国民」形成装置として認識し受容する過程にほかならない。そしてその探究は、日本社会全般における「常識」定着の行方を見つめる作業でもあるのだ。

■奇人？　佐田介石

ところで、この研究では多くの個性的な僧侶に出会う。佐田介石（1818～82）もその１人。佐田は天文研究と、「ランプ亡国論」などに代表される舶来品排斥論の演説で、明治10年代前半に熱狂的支持を受けたカリスマ僧侶である。その言動から「一種の奇物」と評され、人物事典の類にも名をとどめる。だが、教導職の説教テキストの上梓や、本願寺派教団の内部抗争の影響で天台宗へ転宗したことなどは、ほとんど知られていない。〈奇人〉扱いゆえに、佐田は当時の教化活動の状況や教団史に位置づけられなかったのだ。また、吉野作造が先鞭をつけた佐田研究の歩みもじつに興味深い。大正～昭和初期の明治文化研究や経済史研究の中で「発見」され、戦後には反動のように消え、1970年代以降にはまた研究対象として取り上げられるのである。こうした人物に光を当て、明治前期の仏教と社会、そして近現代日本の史学史・文化研究として掘り下げることも、私を魅惑するテーマである。

個人研究

民族間交流と言語接触

客家語およびその周辺言語の記述研究

助手◆中西裕樹（なかにしひろき）

1970年生、1998年、北京大学大学院修士課程修了

「客家」と書いて「ハッカ」と読む。広東・福建・江西三省を中心に台湾・広西・湖南・四川などに広く分散している、漢族に属するエスニック・グループの名称である。客家人は、北方中国から度重なる戦乱を避けて移住してきた人々で、すでに先住漢族によって開墾されていた平地を避け、山がちな地域に住み着いていったとされる。彼らは「寧賣祖宗田、不賣祖宗言(祖先から受け継いだ田を売っても、言葉は売らない)」という戒めを守りながら移住を重ねてきたと自負しており、その言語――客家語が揺るぎないアイデンティティとなっている。

■客家人とショオ族

言語学的見地からすると、客家語と呼ぶことのできる漢語方言を話しているのはひとり客家人のみではない。福建・浙江・広東・江西・安徽などのやはり山がちな地域に居住するショオ（畲）族という少数民族の大部分が使用している言語も客家語に分類することができる。文化人類学の研究によると、現在の分布では、客家語を話すショオ族がいるところには客家人はおらず、客家人の居住地には客家語を話すショオ族はいない。この一種の棲み分け現象は、現在の客家人の一部にはかつてショオ族だった人々が含まれていた可能性を示唆しているという。つまり、彼らは客家人との交流により客家語を話すようになり、長い年月の間に客家人に同化されてしまったというのだ。現在、客家語を話しているのにもかかわらずショオ族としてのアイデンティティを保っている人々は、客家人と接触し客家語を話すようになった後に客家人がいない地域に移住した人々であるらしい。彼らの話す客家語が周囲の漢族が話す漢語方言とは異なっているために、かえってショオ族のアイデンティティの保持に役立ったというのである。総人口六十万人余りのショオ族のうち、広東省の海豊・恵東・博羅・増城の四県に住んでいる数百人はまだ自民族の言語―ショオ語（ミャオ・ヤオ諸語に属する一言語）を保持しているが、彼らの周囲に住んでいる漢族には客家人が多い。ショオ語を保存している彼らは、自らの言語によって客家人との違いを認識できるために、同化されなかったのだという。この仮説の是非はともかく、言語研究者にとって客家語とショオ語の関係やその接触の様相は、非常に魅力的な研究テーマとなる。

ショオ族の子供達はみなショオ語と客家語のバイリンガル。彼らの話すショオ語は客家語の影響ですでに変容している。大人達はそれを嘆いている。

■言語接触の最前線

私はここ数年、海豊県鵞埠鎮でフィールドワークを行い、客家語とショオ語の記述および鵞埠鎮における言語接触の研究を中心に活動している。鵞埠鎮はまさに言語接触の最前線といってよい。主に使用されているのは客家人の客家語と非客家漢族の母語である尖米語（占米語とも）の二言語だが、海豊県のリンガフランカである閩南語、広東省の共通語とも言える粤語、さらに共通中国語も場面に応じて用いられている。鵞埠鎮の漢族にはこの五言語すべてを流暢に話す人も少なくない。ショオ族は鵞埠鎮に属する紅羅村に住んでおり、全村人口は192人(2000年)。現在のところは老若男女を問わずショオ語を話すことができるが、近年では客家人との通婚も進み、彼らどうしの会話でもショオ語と客家語が場面や話題によって使い分けられている。多くの人は鎮で話される他の言語をマスターしており、合計六種類の言語を操る人もいる。鵞埠鎮の言語状況はこのように複雑であるが、調査の時間は限られている。特に、話者の少ないショオ語は、いま調べなければ記述のないままに滅びてしまうかもしれない。そこで、現在はショオ語の記述を第一に、その合間に客家語を調査するという方法を採っている。幸いなことに紅羅村のショオ族には、自分たちの言語を将来も保存していきたいと望んでいる人が多い。いま私は彼らと共同でショオ語に文字を作成している。今後は、ショオ語の保存への協力も重要な仕事の一つになることだろう。

個人研究

南北朝史の再検討にむけて——制度史の観点から

中国古代中世の官制史

助手◆藤井律之（ふじい のりゆき）

1974年生、1999年、京都大学大学院文学研究科修士課程修了

南北朝史の研究、特に制度に関する研究は宮崎市定『九品官人法の研究』をはじめとして、現在までに充分な蓄積があった。しかし、殷周の青銅器や、秦漢の簡牘、敦煌文書などの出土文字資料が当該時代史の再考を要求したように、南北朝史の再考を促す資料が出土しはじめている。特に問題となるのが北魏前期史(孝文帝以前)である。例えば、1980年に発見された嘎仙洞の祝文と『魏書』礼志の記載とを比較してみると、遊牧系の君主の称号である「可寒(カガン)」「可敦(カトゥン)」や、「闡揚玄風」という道教に関連するタームが『魏書』からは意図的に削除されていることが判明し、依拠すべき文献史料である『魏書』の信頼性が疑われはじめた。そして、『魏書』の信頼性欠如を決定的にしたのが1980年代後半に発見され、1997年に釈文が公開された文成帝南巡碑である。

■文成帝南巡碑の発見

文成帝南巡碑は北魏第四代皇帝、文成帝の和平二年（461）における華北行幸を記録したものである。碑陰には随行したものの官職と姓名が記されていたが、そこから「斛洛真」や「雅楽真」といった、鮮卑語の音写と考えられる官職が多数発見された。また、中央行政機関である尚書省が中華風の官職と鮮卑系の官職が並列される二重状態にあることや、エフタルや突厥などに見られる称号の「テギン（直懃・特勤）」が広い範囲（もっとも元氏に限られているようだが）に与えられていることが明らかとなった。これらのことも、嘎仙洞の時と同じく『魏書』には全く記されていなかった。すなわち、この碑の出現により、北魏前期は従来考えられていたより鮮卑的要素が濃厚であることが判明し、北魏前期史の根本的な見直しと、鮮卑的要素を完全に払拭した孝文帝の漢化政策の実態を再検討する必要が生じたのである。

太武帝東巡碑(人文科学研究所蔵)。拓本が現存する中では北魏最古の石碑。碑額に記されているのは「皇帝東巡之碑」の六文字。

孝文帝以後に関しては南朝も視野に入れる必要がある。孝文帝が漢化政策を推進した際、独自に生み出した制度もあるが、劉昶や王粛など南朝からの亡命者が伝えた諸制度も影響しているからである。南朝が北朝の制度に与えた影響の中で、私が特に重視したいのが散官(階官)である。散官に関する研究は唐代散官の源流である将軍号・大夫号に集中していて、門下省の官職が北朝において散官として用いられていたことに余り注意されてはいない。このことは南朝における門下省の運営方法と密接に関連しているし、西魏・北周の散官序列は南朝の影響を強く受けている。「南風競わず」という言葉通り南朝は北朝に併呑されてしまうが、制度の中に残る「南風」を見極める作業は実は依然として残されたままなのである。

■碑の主題——御射と巡行

如上の状況をふまえて私は現在、南朝・北朝に関する研究を並行して進めている。まず文成帝南巡碑に関しては、碑陰の官職を検討する以外に、碑の主題が持つ意味を探る。この碑は華北行幸の際、皇帝が遠矢を放ち、それを記念するために立てられたものであり、文成帝に前後する太武帝・文宣帝も全く同様のことを行っている。この御射という行為、及び北魏皇帝の行幸は北魏において一体如何なる意味を持っていたのか。幸い、当研究所には太武帝の巡行と御射を記した太武帝東巡碑の拓本があるので、文成帝南巡碑との比較・検討が可能である。南朝に関しては、門下省の運営形態と北朝散官との関連を具体的に明らかにし、南北朝期の三省制度を再考し、隋唐期への展望もあわせて考察する。

今回ここで述べたのは制度史からのアプローチであって、文成帝南巡碑が与えてくれるテーマはこれだけに留まらない。この石碑が今後の南北朝史研究の中心となるのは間違いないだろう。

トラクターが触知したナチズム

個人研究

ナチスドイツの農業問題

助手◆藤原辰史（ふじはらたつし）

1976年生、2002年、京都大学人間・環境学研究科博士課程退学、2004年、京都大学博士（人間・環境学）取得

1935年3月16日、アードルフ・ヒトラーは国防軍の「再建」を宣言し、同年10月1日には徴兵制を復活した。それから数日して、ヒトラーは、数百両の戦車を公開し、スペイン内戦にはその戦車によって編成された機甲師団を実験的に投入したのだった。なぜ、ナチスは、ヴェルサイユ条約で保持を禁止されていたはずの戦車をこれほど迅速に準備することができたのだろうか？

■暗号は「ラス」

スペイン内戦に投入された戦車は、厳密にいえば、装甲戦闘車両Ⅰ号Panzer Kampfwagen Ⅰという。実は、1927年から、つまり、ヒトラーが政権を穫る以前からすでに、国防軍の要請で、このⅠ号戦車が秘密裏に開発されていたのである。それこそが、ナチス・ドイツの急速な軍事化を成功に導いた要因のひとつにほかならない。シャーシーは鉄鋼業のクルップ社、上部構造は自動車産業のダイムラー・ベンツ社が担当した。そのさい、クルップは戦車開発が公然の目に触れぬよう「ラス」という暗号を用いたが、実はこの「ラスLaS」とは、Landwirtschaftlicher Schlepper、すなわち、農用トラクターの頭文字を合成したものだった。クルップ社も、ダイムラー・ベンツ社も、「農用トラクター」製作という名目で契約を結んでいたのであった。

トラクターと戦車は、いわば「分身（ドッペルゲンガー）」であった。第一次世界大戦は、戦闘機、毒ガスなどの最新技術と国民総動員に彩られた近代戦の幕開けを告げるものであったが、モータリゼーションと農業・農民の戦争への動員を担った、戦車＝トラクターは、まさしく近代戦の申し子と呼ぶにふさわしい。戦車は、イギリスのある工兵のアイディアで誕生する。彼は、戦争の膠着状態を打破するため、アメリカのホルト社製のキャタピラー付きトラクターを原型にした装甲車の作成を軍上層部に提案した。その結果、1916年9月15日、ソンムの会戦において、世界ではじめて戦車が導入されたのである。両者とも不整地に適応し、クラッチから変速機を経て履帯式走行装置に至るまで、ほぼ技術移転可能な構造なのである。実際、戦争末期になると、ナチスは、トラクター工場をつぎつぎに戦車工場へと鞍替えするのである。

それとともに、農民の身体も感性も農業と戦争の近代化に馴致していく。1938年、ドイツの景気研究所は、「機械が農村にもたらしたもの」として「農村新兵の国防的有用性増大」を挙げている。つまりナチスは、農民が農業機械の操作に慣れることによって戦時に機器を扱えやすくなる、ということを意識して農業機械の使用を奨励していたのである。もちろん、ユダヤ人虐殺に用いられた毒ガス・チクロンBが穀物倉庫用農薬であり、化学肥料と爆薬の製造がほぼ同じ行程を辿ることも見逃してはならない。

■農業技術史の可能性

わたしがここ5年のあいだに進めてきた研究は、以上のように、トラクター、化学肥料、農薬という、従来無視されがちであった農耕空間の諸要素から自然と人間と社会を逆照射し、それによって、自然史と社会史を融合させる試みである。トラクターは、現在、全人類の生命の基盤を担っているにもかかわらず、その研究はもっぱら機械工学の分野でなされており、社会との関連については未開拓のままである。

だが、例えば日本においても、田植機やコンバインも含め、農業機械は農作業のスピードを劇的に変え、農民たちの負担を一気に軽減し、農村の風景や生活様式までも変容させた。一方で、それは莫大な燃料代や修理代を絶えず要求する。背後には巨大な機械工業および石油化学企業群が控えているからだ。また、ナチス時代、馬の扱いに慣れた老人たちは、若者たちが競って購入する小型トラクターを「流行のがらくた」と受けつけなかった、という調査報告があり、1920年代のソ連では、この「鉄の馬」が「アンチキリスト」として農民たちに畏れられた、という記録が残っている。「熱のこもっていない大地の強姦」とトラクターでの作業風景を表現したのは、トラクター大国・アメリカの小説家スタインベックであった。生活の急速な近代化、軍事技術に馴致する身体、自然に対する感性や迷信と近代化との緊張関係、人間と自然との関係の根本的な改変――このような、農業という枠組みにとどまらない、近代社会のさまざまな問題群が、トラクターというひとつの農具の、100年足らずの歴史のなかに凝縮しているのである。

個人研究

中国近世史を読みなおす

中国近世の国家支配の研究

助手◆古松崇志（ふるまつたかし）

1972年生、1997年、京都大学大学院文学研究科修士課程（東洋史学専修）修了

中国近世の国家による支配の仕組みを政治・制度・文化など多面から考察する。対象とする時代はおおよそ西暦で10世紀より14世紀あたり、すなわち遼（キタイ）と五代・北宋、金（女真）と南宋が対峙した時代からモンゴル帝国の版図に入った時代を経て、明代前期に至るまでをカバーする予定である。

■北方からの衝撃が中国史を変えた時代

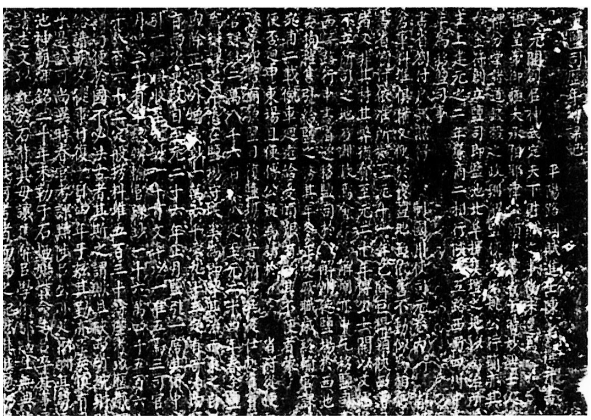
この時代の中国史は、北方から興起した非漢族政権が軍事力で南方の政権を圧倒するという構図をその基調とする。歴史の主役はあくまでも北方から勃興したキタイであり、女真であり、モンゴルであった。もちろん、この時代南に栄えた宋王朝（北宋・南宋）が後の中国文明に及ぼした影響は、とりわけ朱子学をはじめとする文化の側面を中心として小さくなかったが、宋代の政治・文化・制度などを考えていくうえでは、北方勢力との対峙・共存という時代状況をまず念頭に置いておく必要がある。また、モンゴルのうち立てた大元ウルスが中国全土をその版図に入れた時代の中国史研究においては、モンゴル政権による中国支配の実態とその中国社会への影響を明らかにすることが最も肝要である。さらに、明代史については、これまでの研究では「明清」とくくられてきたように、元代との連関で語られることは少なかった。元代と明代をつなぐ視点は、モンゴルによる支配が中国に及ぼした影響を考えるためにも重要であると思われる。

以上のような観点から、現在いくつかの具体的なテーマを設定し研究を進めている。

まず第一が、元代後期に中国歴代王朝の伝統に則って行われた前代王朝の正史編纂事業、すなわち『遼史』『金史』『宋史』の編纂に関する研究である。三史編纂はモンゴル政権が行った一連の文化事業の到達点と言え、編纂過程を詳細に跡づけその本質を明らかにすることは、この時代の歴史研究の中でも最重要課題の一つである。それゆえこれまでも多くの研究がなされてきたが、いずれもその本質を明確にしたものではなく、今後の再検討が求められる。また、これら三史は遼・宋・金各王朝の歴史を知るための根本史料となるものである。ゆえに、三史編纂についての研究は、モンゴル時代以前の中国史を再考するためにもまず押さえておかねばならない点なのである。

第二に、元代後期の江南禅宗教団について、モンゴル大カアンの聖旨（ジャルリク）（おおせ、すなわち口頭による命令を文書化したもので絶対的な権威を持つ）を受けて編纂された国家編纂物『勅修百丈清規』（禅宗寺院の規矩）を中心に考察する。この書物の編纂とその周辺状況に関わる研究は、元代江南中国の政治・文化状況を浮き彫りにする恰好の題材である。また、禅僧が中心となって担ったこの時代の日本と中国の文化交流についても、新たな光を当てることが可能であろう。

第三は、山西省南部に位置する塩の一大生産地、解州塩池についての通史研究である。唐代後半の塩の専売制度導入により、塩の収益の国家財政に占める比重は大きくなり、国家の存立にとり塩池の重要性は高まった。これと軌を一にして、塩の生産を守護し神々を祀る塩池神廟が国家の手によって創建された。以後、宋・金・元・明・清歴代王朝のもと、国家祭祀が連綿と受け継がれていった。塩池神廟には唐代および元〜民国時代までの各時代の碑刻が残されており、またとない史料を提供する。歴代の典籍史料とあわせ検討することにより、経済・財政・社会・礼制（祭祀）など多方面にわたり、唐代以来の塩池の歴史を通覧することが可能となる。塩池一帯の地域（山西省南部から陝西省にかけての地域）は、中国文明発祥の地でもあり中国史上特別な意味を持っており、この地域の研究は単なる地域研究の枠を超え、中国文明そのものを問う試みにもなるものと考えられる。塩池の通史研究をその手始めとしたい。



本研究所所蔵「解塩司新修塩池神廟碑」（1290年立石）碑陰拓影：モンゴル時代における塩池の行政機構に関する実態を示すものとして貴重な史料。

イスラーム世界における南アジア

個人研究

ムガル朝時代の歴史叙述の研究

助手◆真下裕之（ましたひろゆき）

1969年生、1994年、京都大学大学院文学研究科修士課程修了

７世紀のアラビア半島におこったセム的一神教イスラームとその信徒ムスリムは、その後まったく異なる宗教的特質をそなえた南アジア社会に到来し、相次いでムスリム政権を成立させ、独自のインド・イスラーム文化を現出させた。今日の南アジアは、世界のムスリム人口のほぼ３分の１にあたるおよそ４億のムスリムを抱える。このような、南アジア社会におけるイスラームとムスリムのはたらき、そこに見られるイスラーム的普遍性と南アジア的特殊性の実態、そしてイスラーム世界における南アジアの役割、以上を歴史的に明らかにすることが私の研究の最終目標である。そしてイスラームというタテ糸によって、ともすれば地域史の単なる集成となりかねない南アジア史に、首尾一貫したひとつの理解を示せれば、と考えている。

■ムガル朝時代の歴史叙述の研究

南アジア史上のムスリム政権のうち、その支配地域の広さと存続時期の長さから、ムガル朝が最重要のものであることは疑いない。したがってその国制と社会の研究は、南アジアにおけるイスラームについて格好のモデルを提供してくれるはずである。

ムガル朝の基本史料は年代記を中心とする叙述史料であり、主としてペルシア語で編まれたそれらの文献は膨大な数量にのぼる。私の研究の方法は、これら叙述史料個々の史料論を丹念に洗い出すことであり、その内容は徹底的な本文批判および史料批判である。

前者について、ムガル朝に関わる叙述史料の本文批判の研究は、英国統治の要請に発する長い歴史を持つ。しかしかえって、東洋学の草創期に行われた本文批判の成果には、手続き上の欠陥を抱えたものが少なくない。ところが、今日の南アジアにおける学術言語としての英語のプレスティジは、研究者を原典ではなくその英語訳へと向かわせている。このため、通行本原典の手続き上の欠陥と本文の欠点は、研究者の間であまり意識されていないのが現状である。このことが歴史研究の深刻な障害であることは言うまでもない。いまや、諸写本の渉猟とその系譜の確定を踏まえて、良写本にもとづいた本文再建をやり直す必要がある。

一方後者は、本文批判を前提として、著述の経緯と背景、複数著作の相互関係を明らかにし、個々の叙述を同時代の状況に位置付けて、叙述の価値を計る作業である。いわば史家を取り巻く社会と、史学史の探究である。こうした作業は、従来の研究が看過してきたところであり、制度史研究においてさえ、同時代の状況を反映するはずの複数の情報の齟齬は、ほとんど批判の対象になってこなかった。史料論の確立しない「新史料」にもとづく「新事実」が、従来の知見と統合されることなく「集積」されてきた面さえあろう。

■研究の展望

イスラーム社会において史家は多くの場合、他の諸分野にも通じた広い意味での文人であった。したがって史料批判の過程でなされる史家と史料の歴史研究は、学術全般の歴史研究へと開かれている。ムガル朝時代に編纂された貴族列伝、文人列伝などの人名録文献を用いたさらなる研究を進めたい。

ムガル朝アクバル時代の年代記所収の課税統計。各欄に各管区の作物ごとの見込収量評価額の記載。通行活字本一頁の本文と、大英図書館所蔵の古写本（図版）の対応箇所との相違は70点にものぼる。良写本にもとづく本文批判がなお必要な所以である。

また、このような人名録の研究は、南アジアとイスラーム世界諸地域との間の活発な人的交流の実態をも明らかにする。イスラーム世界における南アジアの働きを解明する上で、この問題の研究は非常に興味深い課題である。ムガル朝時代以降の対外関係史は、経済史や植民地史の側面から描かれる傾向が強いが、こうした研究は、そこに別の側面を提供するだろう。

またムガル朝時代の史料状況の特徴は、諸欧語による膨大な数の叙述・記録史料の存在である。これらは時として、イスラーム史料の明かさぬ政治史・制度史を説明する一方、インド洋をめぐる人的交流の実態についても独自の情報を提供する。諸欧語史料を利用しつつも、イスラーム史料に力点を置くことで、欧人の商業史や植民地史に回収されずに、前近代の南アジア史を記述する糸口を模索中である。

個人研究

文化像の再構築

モンゴル時代の文化政策と出版活動

助手◆宮 紀子（みや のりこ）

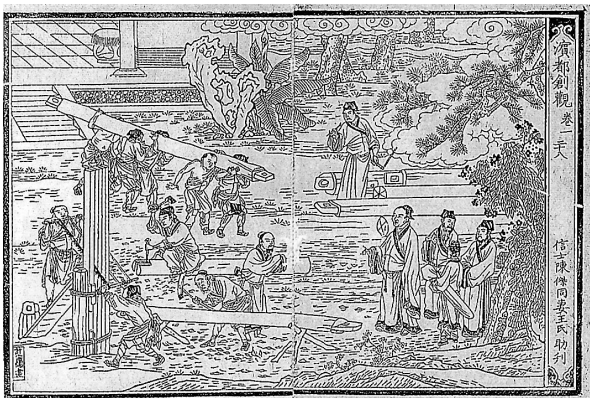
1972年生、1999年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得

チンギス・カンの登場によって幕を開けたモンゴル時代は、従来、モンゴル人の文化に対する無理解、四階級制度による漢族文人の冷遇等によって、中国の伝統文化、価値観が徹底的に破壊された暗黒の時代だとまことしやかに説明されてきた。また、この時代の特徴である白話（口語）文学の隆盛も、不遇な文人の“民間文学”への参与の結果だと理由付けされてきた。

■モンゴルによる空前絶後の出版事業

ところが，低俗な口語の絵本として認識されてきた書物のひとつ『孝経直解』が、ウイグル貴族のセヴィンチュ・カヤが編纂、仁宗アユルバルワダに献呈されたもので、朝廷の儒教文化政策の一環として刊行されたこと、しかも挿絵は当代最高の宮廷書画家であった趙孟頫が作成したことが判明した。この書が出版された1308年頃から、全ページ絵入りの、とくに上図下文式の書物が、カアン（皇帝）の命令によって出版されはじめ、その傾向は、同時代のイスラムを支配したフレグ・ウルス（いわゆるイル・カン国）の写本、ミニアチュールとも呼応する。至治年間（1321～1323）に福建省建安の一書肆から刊行された『三国志平話』等数種の全相平話もこの流れの中にある。平話や元雑劇は、正史にない荒唐無稽な俗伝をそのプロットに含むため、庶民の文化的背景から成立したものとみなされてきた。しかし、そうした俗伝は、実は同時代のより高い知識層である文人、僧侶等の手になる雑史類や詩文にも頻繁に見えている。その他さまざまな書物についても、実際には、カアンおよび現職の高官たちが、意識的かつシステマティックに、率先して編纂、刊行していたことがわかってきた。

そもそも、通念とはことなって、建国以来、歴代カアン、モンゴル諸王、貴族達は、儒教をはじめ文化の保護（具体的には廟祠・寺観・学校の建築・補修、儒者・宗教者の税金・労役の免除、教育活動等）に異様に熱心であった。官民共同の出版も盛んになる。在野の文人たちの著作であっても、優れたものであれば、国家が肩代わりして出版、援助し、またその著者についても文官としてとりたてるシステムが整えられた。出版に際しては、やはりフレグ・ウルスの宰相ラシード・アッディーンがその著『集史』の「中国史」の序文で紹介したように、儒学の教官たちが何度も綿密に校勘し、能筆家を選んで版木に書かせたのであった。こうして中国印刷史上、頂点をきわめたといっても決して過言ではない美本が次々と生み出されたのである。近年、国内外の資料の閲覧条件が好転し、この時代、とくに南中国の出版は、空前絶後の盛況を迎えていたこと、さらに同時代の高麗、日本はもとより、のちの李氏朝鮮、明の文化、政治に多大な影響をあたえたこともわかってきた。13、14世紀モンゴル時代の文化像は、こうした新たな知見をもとに修正、再構築していく必要がある。



『長春大宗師玄風慶会図説文』（天理大学附属天理図書館蔵）。モンゴル朝廷の庇護下にあった全真教の教祖丘処機の伝記で、最も精緻な元刊本のひとつ。

■国と時代を越えて

本研究では、元刊本を中心に、朝鮮版、日本の五山版の典籍、同時代の出土文物、文書、碑刻、美術品も用い、すべて原典資料によって、モンゴル朝廷の諸制度、中央・地方の文人の交流の実態、14世紀の東アジアの文化が確かにほぼ同じタイムスパンで共有されていたのだということを、ひとつひとつ明らかにしていくことを目的とする。なお、モンゴルは、地方志や職官志をはじめ、過去から現在までを見渡せるように整理した書物の編纂を好み、のちの明、清朝廷のように前の政権の記録を故意に抹消したりはしなかった。この時代の政府出版物を検討することによって、南宋、金の政策、文化についても従来とことなった視点、新知見を提供できる可能性が非常に高い。ことに、従来研究が手薄な揚子江以南の地域については、じっさいには膨大な資料があり、南宋から大元ウルス、明まで連続して見渡すことができる。故に「江南の社会文化史」がもうひとつの研究課題となる。

個人研究

華南海域世界の変動

近代華南沿海地域の社会経済変動

助手◆村上 衛（むらかみ えい）

1973年生、2001年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程東アジア歴史社会専門分野単位取得

福建・広東省を中心とする華南沿海地域は、広州、泉州、厦門などの港市を中心として、歴史的に中国の海上交易の中心であった。中国帆船による海上交易活動も福建人・広東人を中心とする華南沿海の人々によって担われ、華南沿海からは主として東南アジア方面に多くの移民が送り出されてきた。現在においても福建・広東系華人は東アジア・東南アジアの経済活動において大きな役割を果たしている。

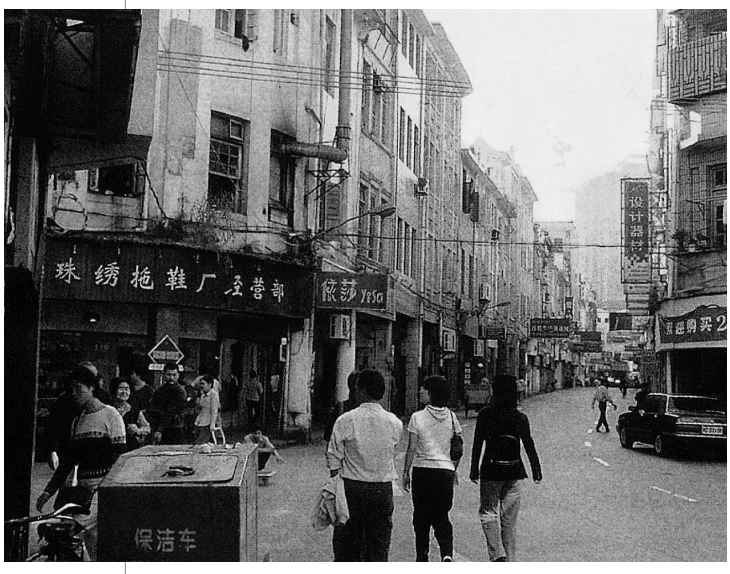
■華南沿海地域の研究とその課題

日本においては1980年代以降のアジア域内交易論の提唱により、主として東アジア沿海部における交易やネットワークを中心とする研究が蓄積されてきており、華南地域についても香港を中心にして研究が進められている。また、日本国内に限らず、近年では華南の諸地域において地域的な歴史研究の蓄積も著しくなってきている。

しかしながら、いくつかの課題も残されている。近代における変動の中で、明清期以来のアジア内の経済関係とその内容が如何に変化したかについての検討は十分ではない。

また、近代はアジア及び華南と欧米を含めた他地域との関係が以前よりも著しく密接になった時期であり、欧米や他地域を含めた広い視点からのアジア域内交易や華南地域史を相対化することも必要であろう。

日本における研究は中国沿海地域と日本を中心とする東アジアとの関係について重視してきた。今後、日本以外との関係が密接である華南については、東アジア以外との関係についての検討も進める必要がある。以上の課題を念頭におき、近代華南沿海地域の社会経済変動について研究を進めている。



現在の福建省厦門市思明西路。アーケード式の騎楼建築は20世紀に入り、華僑投資が活性化する中で建造された。

■華南沿海地域の社会経済変動

19世紀前半、華南沿海地域はアヘン貿易活動をはじめとして、従来の秩序が動揺・崩壊する。開港後の19世紀後半には華南沿海地域においては秩序再編が進むが、19世紀末以降の貿易量の急速な拡大がもたらした経済的変動のなかで、華南の各地域はさらなる変化を迫られることになる。当該期における社会経済変動を捉えるにあたり、二つの方向から作業を進めている。

第一には数量データを用いつつ、近代におけるヒト・モノの流れの変動の全体像を把握する作業である。厦門については清末の厦門における交易構造の変動を福建省南部の商品輸移出と台湾との関係を中心に検討し、厦門を中心とする経済圏が商品流通上崩壊する中で、厦門と中国沿海部・東南アジアとの交易構造には変化がないことを実証し、その背景に華僑送金があることを明らかにした。

第二には、19世紀前半から20世紀初頭にかけての社会秩序の動揺とその再編についての研究である。このうち、開港後の厦門における帰国華僑についての検討を行い、厦門においてイギリス領事の帰国華僑保護が不十分であったことが、厦門小刀会の反乱鎮圧後において福建人の東南アジア展開と定着が進行する一因となったことを明らかにした。今後は、対象とする時代を広げるとともに、地域も厦門以外の地域に拡大する。19世紀前半の中国沿海域における華南沿海住民の交易活動を検討すると同時に、19世紀後半から20世紀初頭にかけての商人組織の再編と変容、沿海の治安の問題、苦力貿易を含めた移民の問題などを重点的に検討していく。その際には、華僑・華人や台湾籍民及び在中外国人と現地中国人との関係を考慮に入れ、華南地域の歴史を東アジア・東南アジアの変動の中に相対的に位置づけていく。

さまざまな文字を自由にコンピューターで扱うために

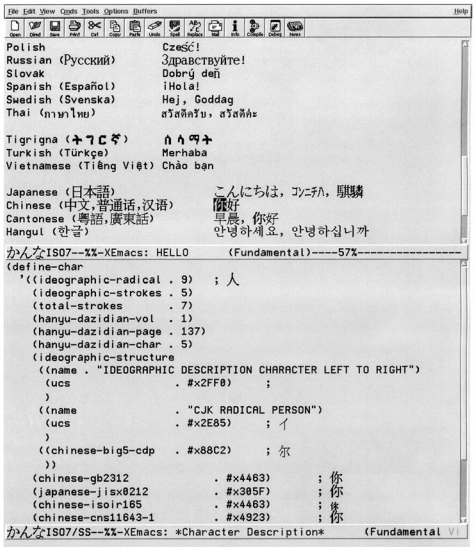
個人研究

文字定義情報に基づく文書表現系に関する研究

助手◆守岡知彦（もりおかともひこ）

1969年生、1999年3月北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了

コンピューターでの文書処理技術とネットワーク技術の発展により、文書の作成や加工が容易になっただけでなく、個人でも容易に印刷や出版ができるようになり、さらには、電子メールなどを使って瞬時に文書をやりとりすることができるようになり、また、WWWなどを使って個人でも簡単に情報を発信できるようになった。このことは単なる技術的利便性を越えて、人類社会の構造をも変えて行こうとしているように見える。しかしながら、インターネット時代の『文字』はこうした利便性と引き替えに前時代の紙と文字が備えていた自由さをある程度犠牲にしている。殊に漢字はコンピューターで扱う場合、使える文字の種類が制約されたり、環境によって文字の形が許容する以上に変わったりと、コンピューター上の『文字』の性質とのギャップが比較的大きい文字の１つであると言えよう。



XEmacs UTF-2000

■符号化文字の原理的な問題点

こうした不自由さの原因の１つは、現在のコンピューターで文字を扱う仕組みにあると考えられる。現在、多くの文字処理システムでは、文字そのものを扱う代わりに、文字に固有の番号を振って、その番号で文字を表す手法を用いている。即ち、コンピューターの中の文字列は文字に振られた番号の列で表現されている。また、文字に関する知識は文字と番号の対応規則である「符号化文字集合」の定義の中に存在し、通常、コンピューターの中には存在しない。このため、コンピューターは少ない記憶量で文字を表現できる半面、コンピューターが扱うことができる文字の種類や文字の概念は符号化文字集合の定義に束縛される。英文で用いるラテン文字のように文字数が少なく個々の文字の同定が容易な用字系(script)の場合、このモデルは適切であり容易に実現できる。しかし、漢字は文字の数が非常に多く、その同定は容易ではない。字形のデザイン差と字体の差と文字の違いは連続的であり、その区別は恣意的なものにならざるを得ない。そのため、さまざまな要求を概ね満たす高品質の符号化文字集合を作るためには非常な労力を要する上、それでも全ての要望を満たすことは事実上不可能になる。

■抜本的な解決のために

このような問題を抜本的に解決するためには、符号化文字集合に基づく文字処理技術に代わるような文字処理技術を研究・開発することが重要であると考えている。従来の手法の問題点はコンピューターの能力が限られていた時代に考え出されたもので、システムは自分が扱っている文字の性質を知らなくてもそれなりに文字を処理できるように設計されている。しかし、これからの強力なコンピュータを前提にすれば、システムは自分が扱っている文字に関する知識を自分自身で知っている方がより柔軟な処理が可能になり望ましいと考えられる。これは、文字に関するエキスパート・システムを作ること、つまり、コンピューター上に仮想の文字学者を生み出すことであろう。このようなシステムのプロトタイプとして我々は現在“XEmacs UTF-2000”と呼ぶシステムを開発している。

■新時代の漢字学へ

このようなシステムを実現するためにはコンピューター・システムを開発するのみならず、そこで使われる文字に関するさまざまな知識をコンピューターが理解可能な形で蓄積して行く必要がある。漢字においては長い時間の間にさまざまな知識と伝統が蓄積されて来たし、20世紀に入ってからは考古学的な発見が新たな知識を付け加えた。このような情報を電子化することによって、漢字の持つ豊かな世界をコンピューター上でも享受できるようになるだろう。これは新時代の漢字学の重要な目的の１つであると思われる。

個人研究

近代批評、あるいは思惟と存在のはざま

ポール・ヴァレリーと20世紀の思想

助手◆森本淳生（もりもとあつお）

1970年生、1996年、京都大学大学院文学研究科博士課程中退

デカルトの有名なコギト「私は考える、故に私は存在する」をもじって、ポール・ヴァレリー（1871-1945）は「ときに私は考える、ときに私は存在する」と述べた。デカルトは「方法的懐疑」のすえに認識と存在の一致を見出したが、ヴァレリーはむしろ両者のあいだに横たわる深い亀裂を見つめつづけた。おそらくここに近代の思考の本質的な特徴があるだろう。私のとりあえずの研究目標は、18世紀末のドイツ・ロマン派からフランス象徴主義をへて現代にいたる批評の流れのなかに「近代」の問題が尖鋭的に現れているという作業仮説を立てたうえで、ヴァレリーのテクストの意味するものを考えることである。

■『カイエ』、あるいは断片的テクスト

ヴァレリーは1892年のいわゆる「ジェノヴァの夜」の「知的クーデター」によって、自己の恋愛感情や性欲を含む一切の精神現象の厳密な理解を志すようになった。そうした試みの場として彼の『カイエ』（フランス語で「ノート」の意）は書き始められたのである。早朝に起床し、コーヒーをすすりながら『カイエ』を書くという作業は彼の死にいたるまで50年以上つづけられ、27000ページほどの膨大なノートが残された。これはしかし、首尾一貫した論述ではなく、そのほとんどが断片的なテクストである。あらゆるものを疑い分析しようとするヴァレリーの志向は自己が書きつけた思索にまでおよび、こうしてテクストは自己否定をくり返しつつ、さまざまに屈折しあるいは照応しあいながら書きつがれていく。

テクストのなかにときにデッサンが現れるのも『カイエ』の特徴である。「行為」を思索の中心にすえたヴァレリーは人間の「手」にも注目していた。

『カイエ』はひとを途方に暮れさせる。いったいどのように読んだらいいのか。われわれは「テクスト」、「書くこと」、「読むこと」について反省することを強いられる。そうした理論的な問題への関心を保持しながら、私は実際に『カイエ』を読む方法として「潜在的な問題系」を設定し、個々の断片をそれとの関係において読み解こうと考えた。そうした問題系はもちろんひとつではない。またそれはヴァレリーのまったくの独創でもない。例えば、当時の心理学を規定していた経験論的=連合論的な考え方が『カイエ』のひとつの問題系をなし、またフランス新カント派を背景としてヴァレリー自身も繙いた『純粋理性批判』がもうひとつの問題系を構成している。詩人として詩作と受容の行為について無関心でありえなかったヴァレリーは、そこにさらに「行為」の問題系をおくだろう。しかし内面世界では「行為」も「主体」も自律的に存在せず、むしろたえざる生成と解体の運動のなかに巻きこまれている。それはある意味で『カイエ』というテクストの運動を反映しているのである。

■批評と社会

以上のようなかたちで『カイエ』を読み進めながら、それと相互補完的ないくつかの問題も考えていきたい。ひとつは、こうした批評精神が現実の社会動向のなかでどのようなポジションをとるかという問題であり、『若きパルク』というヴァレリーの代表作が成功をおさめるプロセス、アカデミー・フランセーズや国際連盟知的協力委員会での彼の活動などが研究の対象となるだろう。もうひとつは、ヴァレリーが近代日本文学に与えた影響、具体的には例えば、小林秀雄における「ヴァレリー問題」を考えることである。

近代批評が「近代」の問題を尖鋭的に表しているとすれば、それを考えることはそのまま「現代」を考えることでもある。「近代」はまだ「克服」されたわけではないのだから。

中華文明の黄昏を超えて

明代後期「北虜南倭」時代の中国社会

助手◆山崎（やまざき）　岳（たけし）

1975年生、2004年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得

吾生日土歳而立　　少喜漢文專自用
心求良知學有明　　辭辨倫理倣兩宋
身居洛陽東山邊　　意在馬遷待法洞
但恐千古風流事　　不使今人胸懷動

■一治一乱の明清革命

魯迅の言葉にいわく、中国人にとって歴史とは、奴隷になりたくてもなれなかった時代と、暫く無事に奴隷であることができた時代の繰り返しである、とか。清朝末期に西洋文明が眼前の現実として迫って来た時、それまで世界の文明の中心を自任してきた中国の栄光はすでに過去のものとなりつつあった。時に独裁権力として、また時には象徴的存在として、二千年の長きにわたって連綿と存在し続けた中国皇帝は辛亥革命に際してあっけなく廃位され、中国の政治的伝統は近代的共和制に取って代わられることとなった。

今を遡ること四百年余り、明代の中国は、清朝末期と同様に外敵の侵入に悩まされていた。蒼き狼の輝かしい伝説を背負ったモンゴル人、やがて来たるべき中原支配を前に日の出の勢いの満州人、地球上のすべての富をスペインと折半しようと企てたポルトガル人、そして寄る辺なき戦国の野武士たちを北京遷都の野望に委ねた豊臣政権等々、史上名だたる征服者たちが、入れ替わり立ち替わり中国の富をねらってその辺境を脅かし続けた。だが、最終的に明朝の末世に幕を引いたのは、それらのうちのいかなる侵入者でもなく、西北地方で起こった貧民の反乱であった。「北虜南倭」と呼ばれる国家的危機は、同時に明朝治下の漢人社会の様々な社会矛盾と表裏一体の関係にあったのである。

王朝にとっての「棄民」は、明清時代を通じて中華と異文化との媒介者であった。爾来幾星霜を経た今日も、「倭寇」的存在は永遠のアポリアとして生き続ける。

清末の人々が、文明の規範を中国の外に求め得たのとは対照的に、明代の人々は、自分たちに優越する文明を持たなかった。彼らは大砲や時計を知っていたが、「近代」を知らなかった。「中華」に対して自他ともに優位を誇るに足る文明を、当時誰ひとり意識することはなかった。つまり、「近代」は西洋においても未だ「近代」と呼ぶべきものではなかったのである。

■結局何が「進歩」したのか

明朝中国が「近代」を生み出さなかったこと、そしてそれを目指すことすらしなかったことは、一切の「前近代」から自らを区別し、不断に「新しい」文明の担い手であることを自任すべく運命づけられた「現代」の高みから見れば、永遠の停滞と映るだろう。当時の人々は産業資本主義を知らず、議会制民主主義を知らなかった。それは、やがてアジア的生産様式とか東洋的専制の名で呼ばれる、「永遠の東洋」に刻印された基本的属性と見なされるだろう。秦漢時代以来二千年間の停滞などとは、いまだにしばしば耳にするし、おそらくこれからもささやかれ続けることだろう。

ならば「北虜南倭」の明末の世にあって、人々は何を恃んで彼らの停滞を生きたのだろうか。彼らは、ただひとえに「前近代」であるがために、理性と呼ぶべきものを知らず、自由とか個人とかそういった「近代的」なものから全くうち捨てられて、人間性の何たるかをも解さず、そしてそれを欲することすらせずに、暴力と迷信の支配する暗黒時代を奴隷同等の存在として生きたのだろうか。今日定義され使用される近代的概念はもちろん「近代的」なものである。そして、定義され確立されていなければ、それらは捉えどころのない散漫な直観として浮遊するほかありえないだろう。ならば、今日いわゆる「前近代」において、それらは畢竟どれほどまでに「存在しなかった」のか。そもそも当時の人々はそれらを必要とせず、自らあえて求めることもなかったのか。だとすればそれは何故か？

今日ほとんど手垢にまみれてしまったかに見えるこうした問いは、「現代」が無条件に「前現代」より勝れているという前提を疑う営みでありうる。時代的条件の如何によって、人間存在はどれほど「進歩」しうるのか。まずは古い手垢を落とすことから始めねばならない。

人文科学研究所（以下、人文研と略す）を訪れると、館内に入ってすぐの掲示コーナーに、小さな紙切れが押しピンで止めてある。A5かB6大のペラの紙で10枚ほど。東一条の本館ではA5で横書き、北白川の別館のは縦書きというちがいがあるのだが。

事務連絡など学内外のいろんなお知らせが張ってある掲示板の一角である。よく見ないと素通りしてしまいそうだが、ここで人文研の共同研究をいちべつできる。

人文研共同研究私見

筆者は人文研を継続して取材してきた。人文研の研究活動を特徴づける共同研究の歴史をふりかえり、21世紀の研究のあり方を取材のなかから考える。

斎藤清明

さいとう・きよあき　1945年和歌山県生まれ。京都大学農学部（農林生物学科）、教育学部卒。71年毎日新聞社入社。高松支局、大阪社会部、科学環境部、京都支局編集委員などを経て現在、総合地球環境学研究所教授。京都大学学士山岳会会員、文部科学省南極地域観測統合推進本部委員。著書に『京大人文研』『今西錦司-自然を求めて』『メタセコイア-昭和天皇の愛した木』『南極発・地球環境レポート』ほか。共著に『ザ・京大』『現場の学問・学問の現場』など。

この紙片には、人文研で進行中の各研究班の予定が記してある。月日、研究題目、担当者、つまり誰が何について発表するのかがわかる。たいてい隔週に催されているが、毎週しているのもある。開始時間は記してあるのだが、終了時間がないのが面白い。

共同研究会が行われる日の本館。その日に催す研究会名が、目につくように、ちょっと大きい目のボードに書き出している。

師走のある日、前川研究班「国家形成の比較研究」が出ていた。桑原久男「南レバントにおける都市の形成と展開」とあった。来聴歓迎と添えてあるので、ちょっとのぞいてみた。

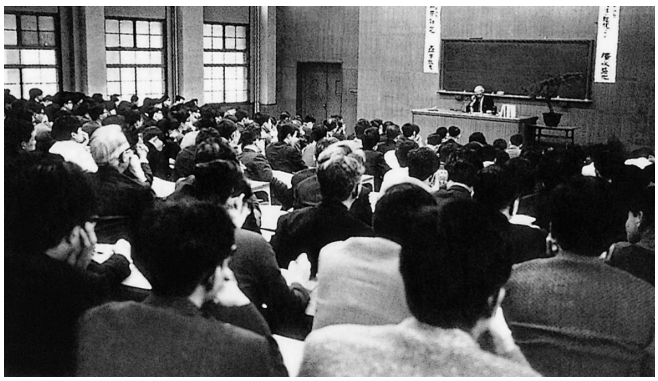
本館の別棟にある、渡り廊下でつながった西館の2階会議室。いかにも奥まった感じがする。大きな楕円形のテーブルを囲んで、十数人が座っていた。分厚い資料コピーが手渡された。イスラエルのガリラヤ湖畔で日本隊が発掘調査を続けている鉄器時代の都市遺跡エン・ゲウの調査成果を、実際に手がけている報告者がスライドを使って話はじめた。このようにして研究会が進んでいく。

とにかくやってみる■

私が人文研の共同研究に関心をもったのは、1968年3月、桑原武夫さんの停年退官記念講演「人文科学における共同研究」を聞いてからである。

このときの会場は人文研でなく法経大教室。学生や教職員だけでなく、一般の来聴者もいた。有名教授の講演に、うわさを聞いて市民が集ってくる時代でもあり、満員の盛況だった。

入口で一枚の紙を渡されたが、講演のレジメではなく、たくさんの名前とその下に丸印がついているだけ。桑原さんが人文研在任中に主宰した共同研究の参加者



法経大教室での桑原武夫の停年退官記念講演

リストだった。横にアイウエヲ順に名前が、飛鳥井雅道さんから吉田光邦さんまで66人が並ぶ。縦には「ルソー研究」から「文学理論の研究」まで6つの共同研究のタイトル。そして、各人の参加した研究に丸印がついていた。飛鳥井4、飯沼二郎1、生島遼一1、井上清2、今西錦司2、上山春平4、梅棹忠夫1、梅原猛1、加藤秀俊1、河野健二5、桑原6、島田虔次2、杉ノ原寿一2、杉本秀太郎1、高橋和巳1、多田道太郎4、田畑茂二郎1、恒藤武二2、角山栄1、鶴見俊輔3、野田又夫2、橋本峰雄2、樋口謹一6、藤岡喜愛3、前川貞次郎3、牧康夫3、松尾尊充2、松田道雄2、森口美都男3、山田慶児1、山田稔2、吉田1など、と。その人数の多さと顔ぶれに目を見張った。

壇上には分厚い6冊の本が並び、桑原さんは「これが私たちの共同研究です」と話し始めた。『ルソー研究』(1951)、『フランス百科全書の研究』(54)『フランス革命の研究』(59)の18世紀フランス研究の3部作に続いて『ブルジョア革命の比較研究』(64)、『中江兆民の研究』(66)、そして『文学理論の研究』(67)。延べ113人が参加した共同研究の成果を、自信をもって語った。面白いエピソードをまじえながら。

共同研究は、とにかくやってみようと始めたのです、というのを聞いて驚いた。「慎重な態度は学問の敵です」というのだ。例えばインドを研究しようと思ったら、まずインドへ行くべし。そして帰ってから本を読む。勉強してから行こうとしたら何年も先のことになってしまう、とにかくやってみなさいと諭すようだった。私はこの直後、貨物船に乗って南太平洋へ半年間出かけたが、桑原さんに煽られたようなもの。

共同研究という学問のやり方についても、「いろんな批判、サロン的であるとか、遊びの要素があるとか、耳学問だとか、非専門的だとか、こういうことは学界用語ではマイナス記号、けなし言葉ですが、私はこれらのマイナスをそろえることによって、ツーテンジャックのように全部をプラスに転化しえるのではないかと思っております」と。

また、学問は学説やイデオロギーなど重要なことがたくさんあるけど、それらを生み出していく人間関係を無視できない。その人間グループの組み方が、きわめて大切な問題である。秀才がたくさん集まればよいというのではない。共同研究にあたってもいろんな仕掛けをしたなどとも。

とにかく、うならされた講演だった。学生時代にこの話を聞いたのが（私事ながら、このときは農学部の4回生で、その後、教育学部に転じ、人文研から移ってきた加藤秀俊さんの教えを受けた。また吉田光邦さんや上山春平さんを受講した)、のちに拙著『京大人文研』(1986）を出すきっかけのひとつになった。

この『京大人文研』では人文研を彩った顔ぶれとともに、共同研究にもかなり触れておいた。その頁をくりながら「輝ける共同研究の歴史」をたどってみたい。

学部から独立した存在ぶり■

そもそも共同研究は、1949年4月に人文研が再発足した際から、研究所の任務として掲げられている。

この時、新しい人文研に統合された旧人文研（所長、安倍健夫）と東方文化研究所（所長、羽田亨)、西洋文化研究所（理事長、鳥養利三郎）の三者の連名による挨拶状の中で次のようにうたっていた。「三研究所は、この度発展的な解消をとげ、新しい人文科学研究所一本として再発足することになりました」「専任のみでも40数名の研究者を擁する一個の新しい『人文科学研究所』として『世界文化の総合研究』のために再生の一歩を踏み出すことができるようになりましたことは、従来ともすれば、そのセクショナリズムのために不振をかこたれてきた人文科学界のために誠に慶賀に堪えないところであります」、そして「研究所は精神的にも、また人事行政的にも飽くまで一体、しかし研究遂行の便宜上これを日本・東方及び西洋の三部門に分ち、所員は原則上、一面個別研究に従事するとともに、他面必ず共同研究にもその責任を分ちあい、もって我が研究所に課せられた本然かつ特殊な使命を充分に果してゆきたいというのであります」、と。

共同研究は次のような研究班が組織されていた。日本部は「日本の近代化」（班長、柏祐賢)、東方部は「東京夢華録の校訂翻訳」（入矢義高）や「清朝の文献特に地誌による中国慣行の蒐集」（清水盛光)、「中国

技術史」（藪内清）、「仏教美術の研究」（水野清一）など7班、西洋部は「ルソー研究」（桑原武夫）。東方部のはそれまでの東方文化研究所から続けられてきた班編成だが、日本部と西洋部は一部一班だった。

新しい人文研（所長、安倍健夫）は、日本部（主任、柏祐賢）、東方部（主任、貝塚茂樹）、西洋部（主任、桑原武夫）の3部11部門（講座）で発足し、大学の附属研究所であることにおいては、旧・人文研と同じかたちであった。しかし、旧・人文研はスタッフの出身学部の法学部や文学部、経済学部、農学部と人事などでも関係が深く、その「出店」のような面もあった。だからこそ、新・人文研は学部から独立した存在ぶりをアピールすることになったのだろう。

蓄積の上に、新しい研究■

研究所は、学生の教育を受け持っている学部とはちがい、研究に専念するところである。この点を強調し、独自性を出さねばならない。ただし、教官が個々に行う研究は、研究所でやろうが学部でしようが同じようなものなので、共同研究が新・人文研の「看板」として掲げられることになる。

記念講演では共同研究の成果が話された

しかも、東方部の前身である東方文化研究所では既に「共同研究」が行われていたのである。それは、中国の文献を何人かで組んで意味を考えながら交代で読み進めていく「会読」という研究方式だった。また、中国古典の目録や索引の作成などという共同作業も行われていた。

東方文化研究所での「共同研究」は、分野をほぼ同じくするメンバーによるものだったが、桑原さんたちが始めた共同研究は、それをもっと拡大したものといえよう。さまざまな分野の研究者を集め、大いに自由討論しながらの。

じつは、これも桑原さんの退官記念講演で聞いたのだが、東北大学助教授時代から吉川幸次郎さんたちの「尚書正義」の研究に憧れをもっていたそうだ。戦中から戦後まもなくまでの5年間の仙台暮らしの間にも、京都の友人の吉川さんや貝塚茂樹さんたち東方文化研究所での研究が気になっていて、あのような学問もやってみたいと思っていたのだ。

この、会読による「尚書正義」研究こそ、東方文化研究所時代からを通じて、人文研の最初の共同研究といえよう。それは、中国の最古の古典のひとつ「書経」についての注釈本の定本をつくる作業だった。まだ東方文化学院京都研究所と名乗っていた1935年4月に経学文学研究室で吉川、倉石武四郎、平岡武夫さんらを中心に行われ、週1回、6年後の41年2月まで続いた。

毎回の会読は『正義』の一節を音読することから始まり、次にこれを日本語の口語訳にし、それから諸本のテクストの異同を校定する討論に移る。このような地道な作業だった。毎回の討論の要点が、「東方学報」（京都）に載り、そして研究所の報告書として経学文学研究室編『尚書正義定本』（和装、全8冊）が39年から43年にかけて出たのである。

会読を軸にした共同研究は、「尚書正義」に取り組んだ経学文学研究室だけでなく、天文暦算研究室でも行われ、能田忠亮・藪内清著『漢書律暦志の研究』(1947）として出ている。

こうした東方文化研究所での蓄積の上に、新しい研究という意気込みで、桑原さんたちの共同研究が始まった。

ルソーと格闘する■

「われわれの研究の特色は、これを共同研究として行なった点にある」と、『ルソー研究』の序言にうたっている。まさに、新しい研究所の船出を示す言葉といえよう。そして、「世界の学界にわずかでも寄与したい」とも。その自負が伝わってくる。

「ルソー研究」は49年4月、新・人文研の発足と同時に始まった。研究班のメンバーは教授の桑原武夫、助教授の前川貞次郎、河野健二、紀篤太郎、鶴見俊輔、助手の杉之原寿一、樋口謹一、多田道太郎の各氏をそろえた西洋部全員8人のほか、所外からも法学部の田畑茂二郎、教養部の生島遼一、文学部の野田又夫と森口美都男、同志社大の恒藤武二の各氏らが参加していた。助手の樋口、多田の両氏は共同研究のために採用されたようなものだったという。

なぜ、ルソーだったのか。いや、ルソーだからこそ、共同研究にうってつけだったという。ルソーのようにいろんな仕事をした先駆者を相手にするには、文学や経済学、法学、教育学など個々の専門家ひとりではやれない、個人研究では無理だと、桑原さんはみていたという。そして、とにかく共同研究をしたかったのだ。

「1年でやっつけよう。終了と同時に研究報告を出す」と、研究のスピードもうたった。毎週金曜日の午

後が共同研究会で、最終的には1年半、59回の研究会を催した。1時から5時までだけでは論じきれず、夕食後にも論議が続き、終われば酒をくみかわす。また、メンバーの関係を密にするため、「日本映画を見る会」や「日本小説を読む会」、英語やフランス語の勉強会も並行して催すという「遊び」も仕組まれていた。

それだけでなく、「会読」にならって、ルソー『社会契約論』の翻訳も並行して進められた。研究会とは別に時間をとって、担当者の訳稿をみんなでたたき合って決定稿を作りあげた。13人の共同による翻訳は、のちに岩波文庫に入る。

共同研究の成果は論文集にするなど、必ず公表することになっている。そのために各人が分担して論文を執筆するのだが、ルソー研究ではその草稿の段階で全員に回覧して検討が加えられた。「つるし上げ」とまで呼ばれた相互批判が。そして、『ルソー研究』が51年6月、岩波書店から刊行された。研究開始から、わずか2年余。みごとなスピード。その秋に毎日出版文化賞も受けた。「ルソーには、夜も昼もなかった」と事務局を担当した樋口さんが回顧しているほど熱気に満ち、「日本の学界に新風を吹き込もうという班長（桑原）の志がその原動力であった」と。

文学理論の共同研究。左から作田啓一、牧康夫、飛鳥井雅道、藤岡喜愛、松田道雄、竹内成明、多田道太郎。後ろ向き左より、橋本峰雄、上山春平

人文研＝共同研究■

もっとも、新しい人文研の共同研究はすべて順調だったわけではない。日本部では「日本の近代化」をテーマに掲げたが、班長は発足間もなく出身学部に戻ったために交代したうえ、大きなテーマだけに具体的に絞り込んだ共同研究には当初はならず、試行錯誤を重ねている。

やがて、思想・文化に重点をおいた「意識」班（班長、坂田吉雄）と、経済・社会の仕組みを取り上げる「機構」班（班長、井上清）の二つのグループにわかれ、それぞれ明治維新、米騒動に精力的に取り組んだ。

その成果は、坂田編『明治前半期のナショナリズム』（1958）、井上・渡部徹編『米騒動の研究』（全5巻、1959〜62）となる。後者は、大正7年に起きた米騒動の全容に膨大な史料を駆使して取り組んだもので、人文研・日本部の存在を示すことになる。その刊行のためには共同研究の例会よりも各人が分担執筆に専念してピッチを上げる努力もしたそうだ。

東方文化研究所からの伝統をになう、人文研の東方部ではどうだろう。戦後すぐに吉川幸次郎さんは文学部教授になって出ているが、哲学文学研究室ではまず『唐代研究のしおり』（全12巻、1955〜65）がすすめられた。暦や地理、作者の伝記、文献の整理、索引の編纂など、唐代の文化研究のための基礎となる資料の整理という地味な作業だった。天文暦算研究室は戦後、科学史研究室と名を変え、まず明代の技術書にとりくみ、藪内清編『天工開物の研究』（1953）を仕上げる。続いて中国の古代から中世、宋元、明清などの科学技術史の研究をまとめていった。また、『雲岡石窟』で52年、水野清一、長広敏雄の両氏が学士院恩賜賞を受けるなど、考古学や芸術史、歴史地理などの研究室でもそれぞれ実績を重ねていった。

こうして人文研の初期の共同研究は、18世紀フランス研究や日本近代化を主な対象にして行われ、東方部の中国研究も引き続いて進められていった。

やがて、それぞれに対象を広げ、さまざまに共同研究が展開されていった様子は、この要覧の「研究の流れ」に示されている。

フランス研究はその後も主なテーマとなったが、18、19世紀だけでなく中世や前近代、さらに20世紀のヨーロッパも対象になる。そして社会人類学などの部門が加わって多彩になっている。日本研究も林屋辰三郎さんらによる近世の文化研究、太田武男さんらの現代の家族問題、吉田光邦さんらの『19世紀日本の情報と社会変動』（85）などの成果となっていく。中国研究も「敦煌文書」から現代史まで幅を広げている。以上、ここに紹介したのは私が興味をもつテーマだけだが、それだけ見てもめざましい。

こうして、人文研といえば共同研究というイメージが定着していった。

フィールド・ワークが基礎■

ところで、私が京都大学総合博物館の「今西錦司の世界」展（2001年12月〜2002年3月）をプロデュースした際に興味深かったのは、人文研における今西錦司さんの共同研究である。

人文研分館で。左から上山春平、伊谷純一郎、梅棹忠夫、今西錦司、川村俊蔵

今西さんは桑原、貝塚さんらと中学時代からの友人ということもあり、発足間もない人文研に理学部から講師として移ってきた。動物社会学に打ち込み、ニホンザルの野外調査を始めたころで、「サルと人文研はどんな関係があるのか」との声も出たそうだが、西洋部に属すことになる。人文研に社会人類学部門が新設される停年5年前までずっと講師だったが、人文研で大きな存在感をもっていた。

今西さんは理学部で霊長類研究グループをつくっていたが、人文研では藤岡喜愛、牧康夫さんらと「霊長類のカルチャーとパーソナリティー」の共同研究を始める。人間だけでなくサルにも文化現象があると追求していく。その一方で、戦後日本における最初の総合的な海外学術調査のカラコラム・ヒンズークシ探検隊を人文研を運営母体として組織し、支隊長として氷河地帯を探検した。人文研でフィールド・ワークを実践したのである。万年講師から教授になると61年、「京大アフリカ学術調査隊」の隊長となり、アフリカ研究を主導していった。

人文研での共同研究は「人類の比較社会学的研究」に展開する。所内の上山春平、飯沼二郎、加藤秀俊、谷泰の各氏のほか、梅棹忠夫、岩田慶治、川喜田二郎、中尾佐助、佐々木高明、米山俊直、和崎洋一の各氏ら、日本に新しい人類学を建設しようというメンバーが集まっていた。そして、その共同研究会では何よりも現地調査した本人の報告が大切にされた。逆に「学界の定説は否定する」「書物の知識は軽蔑する」ことが合言葉のようになり、発表者がきちんと自己主張できないと、「なんやねん、それは」とやゆされたそうだ。このころ和歌山大から加わっていた角山栄さんの近著『「生活史」の発見』に、今西班できたえられた姿が描かれている。

こうして中尾さんの壮大な農業起源論や上山さんらをまじえた照葉樹林文化論、梅棹さんの「文明の生態史観」などが繰り広げられた（ただ、余りにも個性が強いメンバーが多かったせいか、研究会としての最終的なまとまった論文集は出ていない）。

今西さんが停年のあと、梅棹さんが来る。共同研究は「重層社会の人類学的研究」に代わり、いっそう賑やかになる。ヨーロッパ探検（「西ヨーロッパにおける生活意識の調査」）も共同研究で展開された。こうした現地調査は人文研の共同研究を幅の広いものにしている。

地の利とネットワーク■

さて、共同研究はすでに人文研の専売特許ではなくなっている。例えば、梅棹さんたちの国立民族学博物館でも採り入れられ、さらに設立にあたって人文研がメンバー（山田慶児、園田英弘、井上章一の各氏ら）を送り込んだ国際日本文化研究センターでは、共同研究を最優先の研究方式にあげている。そして、多くの学術機関で共同研究をうたったプロジェクトが広く行われている。

それでは、人文研のこれからの共同研究をどう展望すべきだろう。すこし考えてみる。

共同研究方式の硬直化や形式化、領域のちがう専門家どうしの対話がどこまでできるのかなど、古くて新しい問題点はいくつもあるだろう。しかし、人文研の共同研究には、戦後の日本の学術研究をリードしてきた、大きな実績がある。「学問の実験場」を切り開き、社会的にも注目されてきた。また、そこで生み出された成果は個々の研究者の著作にも反映されてきた。

現在、24の共同研究班が行われているが、その数はそれほど変動はないようだ。テキストの基礎的研究を積み上げ、理論を重んじ、自由な発想で討議するなどの、人文研ならではの共同研究だといえよう。

いろんな研究者が集まることで、個人ではできないことをやれる。共同研究はやはり、有効な研究方式であることにはまちがいないだろう。テーマも手法もさまざまに行われてきたように、これからも尽きることはないだろう。しかも、人文研には京都という地の利やネットワークがある。さまざまな大学や研究機関が周辺にあり、また千年の伝統を継ぐ町の人々ともすぐに会え、話ができる。政治の中心から離れていることは思索のためにはいいことだろう。その上、京都には意外といい情報が世界中から入ってくる。

それらを生かして、楽しく、面白くやっていってほしいものだ。共同研究を掲げて再発足してからでも半世紀を越えた人文研の21世紀の新たな歩みに注目したい。

フランスへの眼差し、日本への眼差し

日仏文化交渉の研究

班長◆宇佐美　齊

日仏の文化交渉は、幕末から数えて今日にいたるまでおよそ150年におよぶ。この共同研究の目的は、その実態を、具体的なヒトとモノの交流に着目しながら、多角的に考察することにある。取り扱う時代区分としては、フランスで言えば第２帝政と第３共和政の時代、日本で言えば幕末維新期から昭和10年代あたりまで、を想定している。

端的に言って、日本人にとってのフランス、フランス人にとっての日本とは何であったのか、ということを具体的な文物を手がかりにして、異なった専門分野の研究者が協力して考察することを主眼とする。そこからさらに異文化コミュニケーションが提起する諸問題、例えば翻訳がもたらす効用と誤解、相互理解の恩恵と困難、あるいは文化接触が生む創造性と摩擦による弊害等についても、さらに理解が深められることを期待している。取り扱う主題は当然多岐にわたるが、ここでは具体例として日仏のいずれか一方に軸足を置いた、二つの視点のみを挙げる。

日本におけるフランス詩の輸入と受容

明治中期からこのかた、フランス詩は数世代にわたるすぐれた詩精神によって真摯に受けとめられ、徐々にではあるが確実に私たちの文化のなかに根づいてきた。加えて交通機関の発達や経済事情の変化が西欧との距離を一気に縮め、若い世代が新しいメディアを通して彼の地の歌謡や映像などを気軽に味わい楽しんでいることも、かつての輸入啓蒙期にはおよそ想像もできなかったであろうような素地を、醸成しつつある。けれども先人たちによるそのような努力と、近年における物理的な距離の短縮にもかかわらず、真の内在化をはばむ障壁は依然として存在する。この歴史のちょうど中仕切りに当たる大正末年から昭和初年代の、日本におけるフランス詩受容の実態を振り返ってみることは、決して無駄な試みではないだろう

大正末年の日本近代詩を眺めわたしたときに、まず最初に気づかされるのは、詩の言語がかつてないほど加速度的にナショナルなものからの脱却を志向しはじめたことだろう。新体詩の成立から40年、上田敏や永井荷風による西洋近代詩の輸入紹介からおよそ20年、日本の近代詩は大きな転換点にさしかかっていた。

具体的には口語自由詩と散文詩への傾斜が、もはや文語定形律への後戻りを不可能と観念させるほど、顕著になってきていたことを考えてみればよい。そしてこのことはヨーロッパに源を発するアヴァンギャルド芸術のうねりが、世界同時多発性の様相をつよく帯びる結果を招いていたこととも無関係ではない。未来派やダダイスムが、ときにメッセージの取り違えや誤解をともなってではあれ、わずかの時差で日本にも上陸し、モダニズムの尖端を行く人々につよく意識されるようになったのは、まさにこの時期のことであった。

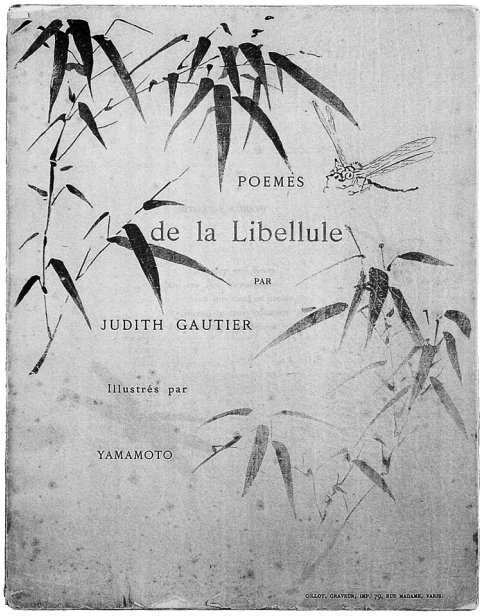
たとえば富永太郎が、フランス近代詩を貪欲に吸収しようとしたのは、旧制二高在学中の大正10年から東京代々木富ヶ谷の自宅で夭折する大正14年までの、わずか数ケ年に過ぎなかった。けれどもこの数ケ年は、その類いまれな集中と密度の高さに加えて、上記の転換点ともぴたりと重なりあうことによって、きわめて重要な意味をもつものであった。富永の遺品「詩帖１」には、たとえばランボーの長篇詩「酔っぱらった船」の原詩第一連が写しとられているが、興味深いことにおのおのの詩行には音節の区切りを示す12の短い下線が施されている。富永がフランス詩を単に頭脳的にではなく、肉声をともなって全身的に咀嚼したことをなまなましく伝える資料といっていい。

同じく富永の遺品である２冊の「フランス詩ノート」からも、彼のフランス詩への情熱がありありと伝わってくる。フランス近代詩の勘所をおさえた、いかにも

豊潤な原詩の抜き書き帖であるが、のびやかなペン字の筆の運びからは、フランス詩を衒学的にではなく、あくまでも自身の嗜好に忠実に選り分け、これをみずからの感覚器官で充分に賞味しつくしたうえで胃袋におさめるひとの、快楽にみちた歓びの歌声が聞こえてくるようである。

この富永と京都で知り合いフランス近代詩の存在を教えられた中原中也は、その富永を追うかのようにして大正14年春に上京する。そこで彼は富永とともに『山繭』の同人であった小林秀雄を知ることになるのであるが、この3人をつなぐ強力な磁場がフランス詩という触媒によって成立していたことに、注目せざるを得ない。富永の早すぎる死によって3者の関係自体はほんのつかの間で終焉するのであるが、その短い時間に発生した電磁波が日本の近代詩におよぼした影響には、はかり知れないものがあったのである。

富永の死後、中原は創作家としての固有の詩語を模索し鍛練してゆく過程で、ランボーの多彩な韻文詩を自在に訳し分けて、やがてこれを『ランボオ詩集』一巻に結実させ、わずかその数ケ月後にこの世に別れを告げる。富永の死に遅れること12年、30年の短い生涯であった。しかしここに私たちは、ひとつの熱い志の焔が受け継がれて後世へと託された確かな証しを見ることができるのである。



1885年にパリで出版された和歌の仏訳選集『蜻蛉集』の表紙。大判の青い厚紙に、鰐皮の浮出しがあり、笹に蜻蛉をあしらった画は、山本芳翠による。

19世紀末フランスが想い描いた日本

1884年にパリで出版された和歌の選集『蜻蛉集』が、本研究に示唆するものは大きい。この詩集は原題をPOEMES DE LA LIBELLULE（蜻蛉の詩篇）といい、貫之、躬恒、興風、千里、重之等から、重朝、景樹にいたる和歌88首のフランス語訳を収める。フランス語のテクストを作成したのは、詩人のジュディット・ゴーチエであり、これにはパリに留学中であった若き日の西園寺公望が原歌の選択から下訳にいたるまで多方面にわたって協力した。表紙絵と挿絵を担当したのは同じくパリに滞在中の山本芳翠であった。

この選集が出版されたのは、フランス近代詩が大きな転換点を迎えたとされる象徴主義の時代であった。この点に注目しながら本訳詩集を、芳翠の挿絵の図像学的な分析をも含めて、くわしく検討することによって見えてくる問題は深くまた広い。美術史上の様式としてのジャポニスムから異文化接触の思想的背景となるオリエンタリズムにいたるまで、問われるべき課題は尽きない。

単にフランス側の問題にとどまらない。たとえば日本近代においてフランス象徴詩がどうしてこれほどまでに好意的に受け入れられたのか。ボードレールやランボーは言うに及ばず、サマンなどマイナーな詩人までが、ほとんどリアルタイムで熱心に受容されたのは、例えば中国近代におけるフランス象徴詩の受容の実態などと比較してみると、著しい特徴をなすものと言わざるを得ない。フランスにおける『蜻蛉集』の出版事情と評価とを参照しながら、日本の古典詩歌から近代詩への連続と非連続の問題を考察することによって、上述の特異な現象がいささかなりとも解きあかされるのではないかと期待する所以である。

以上に述べた二つの事例は、本研究が課題とするもののほんの一部に過ぎない。2002年4月に活動を開始した本研究班は、2006年3月には終了し、4年間にわたる研究成果を報告書にまとめて出版する予定である。

班員一覧（班長は除く）

●所内
大浦康介、岡田暁生、高木博志、高階絵里加、森本淳生、横山俊夫

●学内
松島　征（人環研究科・教授）
吉田　城（文学研究科・教授）

●学外
丹治恆次郎（関学大・法・名誉教授）
小西嘉幸（大阪市大・文学研究科・教授）
柏木隆雄（大阪大・文学研究科・教授）
内藤　高（大阪大・文学研究科・教授）
北村　卓（大阪大・言文・教授）
三野博司（奈良女大・文・教授）
小山俊輔（奈良女大・文・助教授）
柏木加代子（京都市芸大・教授）
近藤秀樹（大阪教育大・非常勤講師）
阪村圭英子（京都市芸大・非常勤講師）
ジャック・ジョリー（英知大・文・教授）
アンヌ・ゴノン（同志社大・言文・助教授）
ピエール・ドゥヴォー（甲南女大・文・教授）
鵜飼敦子（京都大・人環研究科・D.C.）
袴田麻祐子（大阪大・文学研究科・D.C.）
佐野仁美（神戸大・総合人間科学研究科・D.C.）

あなたは贈り物を捨てられますか?

フェティシズム研究の射程

班長◆田中雅一

わたしたちはさまざまなモノ（物、品物、商品、物体）にとりかこまれて生活している。恋人からの手作りの贈り物や遺品など、あなたにとってかけがえのないモノもあるだろうし、また一見あたりまえの日常品が特別の意味をもっているということもあろう。こうしたモノは、文化人類学・社会人類学の分野ではいままで物質文化としてひとまとめに論じられてきた。衣食住とよばれる領域がその典型である。しかし、それだけではモノの特性を十分にとらえられるとは思わない。というのも物質文化という視点は、モノから意味――個人的な意味も文化的な意味も含めて――を排除しているからだ。モノがどのような関係をわれわれ人間にもたらすのか。どんな意味や記憶あるいは欲望を喚起するのか。こうしたモノへの新たな視点をこめてここではモノをフェティッシュとして論じていく。

フェティッシュの発見

フェティッシュfetishは、ラテン語のファクティキウス*facticius*に由来する。これは人工物あるいは作品を意味する。語源を同じくする言葉にフェイクfake、偽物・贋作がある。15世紀後半、航海術の飛躍的な発展によって、おおくのポルトガル商人たちがヨーロッパ世界をあとにした。そして西アフリカの海岸部で現地人たちがさまざまなモノを崇拝の対象にしていることを発見し、これをポルトガル語でフェティッソfetissoと呼んだ。これは妖術などを意味する当時のポルトガル語に由来する。日本語の定訳は呪物あるいは物神である。

17世紀に覇権を握ったオランダでアフリカ産のフェティッシュが流行する。18世紀になるとアフリカを対象とする紀行作品にフェティッシュという名前が登場し、それをテーマとする学術書が現れる。その代表作は1757年に公刊されたシャルル・ド・ブロスCharles de Brosseの『物神の崇拝*Cult des dieux fetiches*』である。丸山圭三郎はフランス語に正式に登録されるのは1669年であると述べ、ディドロとダランベール監修の『百科全書』フェティッシュの項目からつぎのような引用をしている。「アフリカ、ギニアの住民が彼らの神々に与える名前。彼らはそれぞれの地域に一つのフェティッシュを、それぞれの家族に個別的ないくつかのフェティッシュをもっている。この偶像は……時には木であったり猿の頭であったり、あるいはそれに類（たぐい）するものである。」（平凡社『世界百科事典』）

領域横断的アプローチ

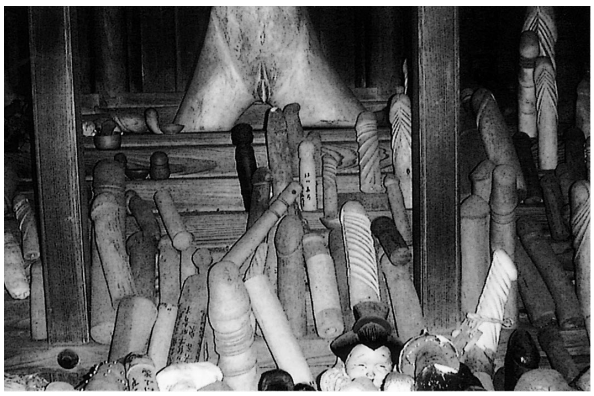
今日一般に使われる性的な意味のフェティッシュという概念は、A.ビネによって最初に記載され、フロイトによって使われた。そこで用いられるフェティシズムは節片症などと訳され、性倒錯のひとつとみなされる。一般に、性的欲望の対象が異性の身体の一部（毛髪、目、口、鼻、足など）や身につけた物品（衣服の一部、下着、靴下など）となって、性欲満足の契機となる場合を指す。

他方、マルクスは資本主義世界での商品や貨幣、資本について、それらが人間の「正常な」生活を犠牲にして、がむしゃらに人を動かす力をもつモノという意味でフェテッィシュという概念を使用した。資本主義社会では、しばしば貨幣や商品が神の位置を占めるからである。もちろん精神分析の場合と異なり、これは単なるメタファーとしての使用であり、それ以上の理論的展開を望むべきではないかもしれない。だが、われわれをとりまくモノの世界とは、なによりも商品の世界であることを考慮すれば、フェティッシュの研究に貨幣、商品、そして（しばしば商品の対立物とされる）贈与など、広義の経済学や経済人類学的研究を含める必要がある。

この研究会では初年度はこれまでのフェティシズムに関わってきた研究領域のレビューを中心に、ド・ブロスの宗教学やモースの贈与論、日本におけるフェティシズム概念の導入の歴史、さらに人類学における最新のモノ論を紹介、吟味してきた。個別の研究報告では、マゾッホや谷崎潤一郎の作品分析、文化財と御物、民俗学における物質文化研究、博物館におけるモノの表象、アジアの民芸品ブーム、ガンダムのプラモデル世界、またイスラームや韓国仏教、ペルーの民俗宗教などにおけるモノと宗教儀礼との関わりなどが取り上げられ、多様なアプローチがみられた。今後は、精神分析におけるフェティシズムや芸術におけるフェティシズムについて議論する予定である。

主体からモノへ

最後に、本プロジェクトがこれまでの研究とどう結びついているのかを明らかにしたい。本研究所はこれまでさまざまなかたちの大型プロジェクトを組織して、多大な成果を上げてきた。そのひとつは文化人類学・社会人類学というフィールドワークを方法論の根幹とするプロジェクトであった。旧社会人類学講座（現人類誌）に属していた今西錦司、梅棹忠夫、谷泰ら代々の所員はアフリカ、中央アジア、ヨーロッパを対象とするプロジェクトを全学レベルで組織し、広義の人類学の発展に寄与してきた。これらの先達の成果を受けて、まず『儀礼的暴力の研究』(1990-94)、『自己、主体、情動の文化的構築』(1994-98)、(以上、田中雅一代表）を組織した。一連の研究で明らかにしたかったのは、人の主体性、あるいはアイデンティティの作られ方と社会との関係である。主体は突然生まれるわけでもなければ、空から降ってくるわけでもない。そこに、他者だけでなくモノとの交流という側面も忘れてはならない。本プロジェクトはまたモノを通じて主体がいかに構築されるのか、という問いをたてることで先行プロジェクトの問題を継承している。ここでモノはたんなる物質ではない。



加太・淡島神社に奉納されている男根群。宗教（信仰）と性（欲望）が交差する世界である。

フェティッシュという概念は、それに関わるわたしたちの欲望を想起する。というのもしばしばモノには(元）所有者の人格が混じり合っているからである。その典型が贈り物だ。わたしたちが贈り物を簡単に捨てられないのは、そこに送り手の人格を認めるからである。どこかにしまっておくか、食べられるものは食べて取り込むしかない。

ここからさらに、それでは商品はどうか、あるいは人格とより密接に関係する身体部位（臓器）についてはどうか、といった問いをたてることが可能となる。モノと人（人格）とは区別しなければならない、しかし、贈り物の例からも明らかなように、モノと人との混交を原始宗教特有のものとみなすことには無理がある。それではその混交は所有によって生まれるのだろうか、それとも制作によって生まれるのだろうか。こうした問いをつぎつぎとうちたて、それらをいわば旗印として混沌としたモノの世界の核心に勇ましく突き進む、というのがこの研究班のヴィジョンである。しかし、現実はどうだろうか。2年目にしてまだ周辺部にとどまり、モノ世界の入り口でどう進んでいけばいいか躊躇している、というのが偽らぬところである。

班員一覧（班長は除く）

●所内

大浦康介、菊地　暁、小牧幸代、高木博志、竹沢泰子、田中祐理子、田辺明生

●学内

足立　明（A・A研究科・教授）
速水洋子（東南アジア・助教授）
松田素二（文学研究科・助教授）

●学外

春日直樹（大阪大・人間科学・教授）
箭内　匡（天理大学・国際文化・助教授）
石井美保（日本学術振興会特別研究員）
宇城輝人（福井県立大学・助教授）
岡田浩樹（神戸大・国際文化・助教授）
金谷美和（日文研・研修員）
川村清志（大阪外国語大・非常勤講師）
窪田幸子（広島大・総合科学・助教授）
佐伯順子（同志社大・文・教授）
斉藤　光（京都精華大・人文・助教授）
田村公江（龍谷大・社会学・助教授）
中谷文美（岡山大・文・助教授）
中谷純江（民博・研修員）
細谷広美（神戸大・国際文化・助教授）
岩谷彩子（日本学術振興会特別研究員）
小池郁子（京都大・人間環境・D.C.）
後藤正憲（大阪大・人間科学・D.C.）
佐藤知久（京都文教大・人間学・講師）
藤本純子（大阪大・文・D.C.）
宮西香穂里（京都大・人間環境・D.C.）
李　雯文（京都大・人間環境・D.C.）

国家形成の比較研究

発掘、文献研究の新成果から国家形成の理論構築へ

班長◆前川和也

古代国家はどのような過程を経て成立したのか。この研究班は、西アジア、中国、インド、日本、南米アンデス地方、太平洋島嶼部などの諸地域における国家形成のプロセスを論じようというのである。

ここ20年ほどのあいだに世界各地で考古学発掘が進み、大量の新情報が蓄積されつつある。いまや、どの地域にかんしても、新情報にもとづいて国家の形成過程を論理化する作業が要請されている。

国家形成の考古学、文献学

考古学研究の進展は、弥生中期から古墳時代にかけての日本列島に、その極端な例をみることができる。年輪年代法が確立し、いっぽうで精密な土器編年ができあがった。両アプローチが統合されて、弥生中期後葉から古墳時代前期までの時期については、いまや年代的な断絶を考えなくてよい。弥生集落の発掘は大発展をとげ、それにともなって地域社会の構造を理論化する作業も進んだ。銅鐸や鏡の研究の進展は、編年の精緻化をもたらしただけでなく、共同体の祭祀や首長権威のありかた、共同体間のネットワーク、政治的あるいは文化的な地域圏の成立と解体、そしてわが国と大陸との関係といった問題の解明に決定的な役割をはたしつつある。土器研究の精密化は、地域間の交流、交易が予想以上に発展していたことをも教えてくれた。周溝墓の発掘は、共同体の構造研究を進めた。そして前方後円墳の成立過程にかかわる研究は、いまや墳墓形態の系譜論をおおきくふみこえる段階に達した。かなりの研究者は、３世紀半ば過ぎの大和の前方後円墳を、諸地域間の対立と連合をへて成立した新たな政治組織（初期国家）の象徴と理解するにいたっている。

文字史料も飛躍的に増大した。木簡発見はその典型的な例である。もはや木簡を無視して奈良時代史を叙述することなど、できはしない。中国では甲骨文や金文のほかに、竹簡も出現して、殷周から秦漢時代の国家社会がよほど詳細にわかってきた。西アジアでは、粘土板の発見が相次いでいる。これらは公的大組織の管理記録であり（行政・経済文書）、これらをもとに初期メソポタミアの国家体制を復元できる。

国家成立のプロセスについての理論も精密かつ多彩になった。日本列島にかんしても、弥生期の環濠集落を都市的な存在とする見方、首長制論を積極的に導入しようとする見解、交易を国家成立の重要なモメントとする立場などが生まれている。ここには、国家が生まれる直前なのだから首長制とよぶといった安易な姿勢、史的唯物論への安直な依存は、もはやみられない。列島の国家形成を総合的にとらえる論議も生まれている。いわゆる七五三論（都出比呂志）は、その成果のひとつである。

人文科学研究所には、日本古代史の研究者はいない。けれどもここには、中国先史・古代の考古学、そして文献にもとづく中国古代史、古代文学、宗教研究の長い伝統がある。スタッフのひとり岡村秀典は、中国の新石器時代、国家形成期の諸遺跡の発掘に従事すると同時に、既存の文献史料や新出土史資料を積極的に利用しつつ、中国文明の形成過程を追求している。また彼の漢鏡の編年研究は、弥生から古墳期にかけての日本列島における首長のネットワーク論に強い影響を与えている。首長のネットワーク形成は、鏡の分与によるところがおおきかったからである。また小南一郎は、金文や古典文学を素材として、中国古代人の精神を読み解く仕事をつづけてきた。研究所には、中国いがいの地域における国家形成に関心をよせるスタッフもいる。まず前川和也は、楔形文字史料とりわけ前３千年紀のシュメール行政・経済文書の解析を専門職とし、古代メソポタミアの家産制的な国家体制の復元に力を注いできた。同時に前川は、メソポタミアをモ

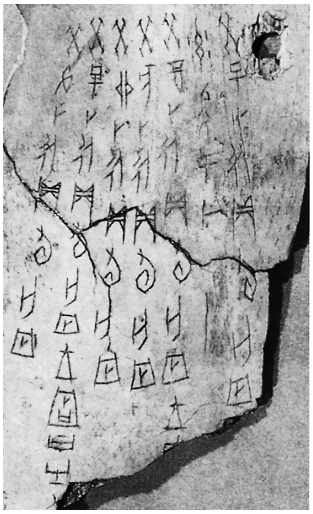
デルとする国家形成論やセトゥルメント・パターン研究にもとづく都市社会形成の諸理論をもあつかっている。また井狩彌介や藤井正人はヴェーダ文学の分析を通して、古代インドの祭式やイデオロギーの復元につとめてきた。スタッフに共通した問題関心は、それぞれの専門地域における国家形成である。ならば、それを対象とする研究会をはじめようではないか。新データをもちよって、新たな国家形成論を構築できるかどうか議論してみようではないか。

関西には、弥生期や古墳形成期を専攻し、同時に列島における政治社会の成立に関心をもつ研究者が少なくない。また日本国家の形成・発展と宗教イデオロギーのかかわりを考古学的にあつかう研究者、近世にいたるまでの空間（セトゥルメントや荘園）考古学の専門家、朝鮮考古学の研究者、そして中国考古学や古代史の専門家も存在する。彼らとともに、東アジア世界の国家形成を討論したらどうだろう。さらにイスラエルの古代都市発掘に従事している研究者、南米アンデスの考古学研究者、太平洋島嶼部のエコロジーと政治社会の進化をあつかう研究者にも加わってもらって、世界各地の国家形成を自由に議論したらよいではないか。考古学者と文献学者が、交流しよう。発掘、文献研究の新成果を国家形成の理論構築に結びつけられないか。新発掘・出土資料の情報を伝える場を作ろう。こうして「国家形成の比較研究」が、2001年に発足した。

共同研究の原点へ

世界のあらゆる地域には、さまざまなタイプの国家生成がみられたであろう。それらを統合するような議論など、できるのだろうか。1970年頃までのさまざまな国家形成論は、その点で、あまりにオプティミスティックであった。けれども、それを克服するために、そして新たな論理を構築するために、その後も努力が続けられていることも、やはり認めておかなければならない。近年の首長制論の進展は、それをよく示している。また世界のそれぞれの地域について、発掘の成果にもとづいて国家形成の道筋が新たにつけられようとしている。その理論の内容は、かつてとは比べものにならないほど精密になっている。日本についてはすでにふれた。南米アンデス考古学の新成果も、その好例である。

われわれのなかでもアプローチ、見通しはかならずしも同一ではない。たとえば前川和也は、メソポタミア都市国家の支配者は、季節的な集団労働の最高編成者であると定義したことがある。前川は、メソポタミア農業の高い生産性を可能にした集団労働体制の成立を重くみたのである。いっぽう岡村秀典は、中国殷代に動物・人間の供犠が極度に発展していたことに注目して、供犠システムの組織者という視点から中国の古代王権をとらえようとしている。ふたりの視点は、統合することができるのか、できないのか。ふたりが扱っている史料（たとえば粘土板文書と甲骨、金文）の性格のちがいにとどまらず、両地域における王権成立のモメントがまるでちがっていたのか。このような疑問に答えるためにも、研究班が組織された。



京都大学人文科学研究所の殷墟出土ト骨。中国の殷王朝では牛骨や亀甲に占いの文字を刻み、神意を問うことによって、まつりごと（政と祭）をおこなった。

考古発掘の進展、文献史料の増加は、考古学、古代史研究のとめどない細分化を生んだ。いまや研究者は、専門分野以外のことになど、かまってはいられない。机を並べる同僚の仕事内容さえわからなくなる。教条論を毛嫌いするあまり、いっさいの理論に背をむけ、みずからの専門作業を大きな流れのなかに位置づけることもしない。そのようなことを少しでも食い止めるためにも、われわれはこの研究班を組織した。われわれは、専門を異にする研究者が集まり議論することが、ひとりひとりの成長にとっても大切だという、共同研究の素朴な原点に立ち返ろうとおもう。

班員一覧（班長は除く）

●所内
小南一郎、岡村秀典、田辺明生、藤井正人、藤井律之

●学内
伊藤淳史（文学研究科・助手）
吉井秀夫（文学研究科・助教授）

●学外
松木武彦（岡山大・文・助教授）
石村　智（京都大・文・D.C.）
宇野隆夫（国際日本文化研究センター・教授）
下垣仁志（京都大・文・D.C）
河野一隆（国立九州博物館設立準備室）
角谷英則（津山工専・講師）
桑原久男（天理大・文・助教授）
佐藤吉文（総合研究大学院大・文化科学研究科・D.C）
関　雄二（国立民族学博物館・助教授）
寺前直人（大阪大・文・助手）
堂山英次郎（大阪大・文・講師）
中谷正和（総合研究大学院大・文化科学研究科・日文研・D.C）
西江清高（南山大・人文・助教授）
橋本英将（元興寺文化財研究所）
菱田哲郎（京都府立大・文・助教授）
深澤芳樹（奈良文化財研究所研究員）
福永伸哉（大阪大・文・助教授）
森下章司（大手前大・人文科学・助教授）
渡辺信一郎（京都府立大・文・教授）

寄せて上げる人文学

共同研究

身体の近代

班長◆菊地　暁

身体とはけったいなものだ。

誰一人同じ身体を持たないという点では人間の不平等性・個別性の根源であり、誰しも一つしか身体を持たないという点では人間の平等性・普遍性の根源でもある。つまるところ人間のなす全ての行為は、身体に基礎づけられ、身体を通して作動し、身体を介して受容される。人間とはどこまでも身体的存在だ。

ということは、逆にいえば、人文学のあらゆる対象を「身体」という切り口から捉え直すことも可能なはずだ。ここで一つ、ラフ・スケッチを試みよう。素材はなんでも良いのだが、さしあたり「寄せて上げるブラ」から考えてみよう。

いわゆる「寄せて上げるブラ」の登場は、確かに一つの衝撃だった。突如として立体感を増した女性の胸元に、鮮烈な印象を抱いた男性も少なくないだろう。1992年、ワコールは「グッドアップブラ」を発売、数十万枚単位で大ヒットと呼ばれる下着業界で年間300万枚以上を出荷、５年間で1000万枚超という記録的大ヒットとなる。1994年、トリンプ・インターナショナル・ジャパンも「天使のブラ」を発売、こちらも3年間で800万枚という驚異的セールスを記録した。今やスタンダードとして定着した感のある「寄せて上げる」だが、その身体の在り様はいかなる契機に支えられているのだろうか。

あくなき計測

まず、「科学と身体」という問題系が考えられるだろう。古来より老・病・死をはじめとした身体の変調は人々の多大なる関心を惹きつけ、ために身体は医学をはじめ人間の知的営為の中に重要な地位を占めてきた。「寄せて上げる」もおそらくその一端だ。

そもそもブラがカバーする乳房とは構造的に不安定な身体部位だ。絶え間ない呼吸運動によって振動する胸筋の上、骨格や筋肉といった安定した支点を持たず、ただ皮膚によってのみ辛うじてつなぎとめられ、不安定きわまりなく揺れ動く皮下脂肪の固まり。その乳房に「形」を与えるという難題に取り組むのがブラである。そこにつぎ込まれるのは、あくなき計測の努力だ。例えばワコールの場合、40年あまりにわたり、毎年1000名以上、累積3万人超の生体計測を実施している。158カ所のポイントを手計測するマルチン式計測、人体を等高線で表すモアレ縞計測、レーザー光線を用いた非接触三次元計測、等々を駆使してこの捉えがたい身体部位の形態や運動特性、加齢による変化などのデータが蓄積されている。この成果が、保形性をもつアモルファス合金、伸縮性の高い合成繊維といった材料工学と結びつくことによって高度な体型補整が実現される。「寄せて上げる」は疑いようもなくテクノロジーの産物だ。

ピッタリとフィットさせる

「行為と身体」という問題系も欠かせない。人間にとって身体は日々を生きる上での「行為の道具」にほかならない。顔を洗う、歯を磨く、服を着る……日常生活は様々な形で身体を用いた慣習的行為の集積であり、その用い方は決して生まれながらのものではなく、ある社会状況において習得されたものである。民族学者マルセル・モースはこれを「身体技法」と名付けたが、「ブラを着ける」という行為もその一つにほかならない。

そもそもブラは、19世紀末の西欧においてウエストのくびれを無理矢理ひねり出すコルセットからの「解放」として登場した下着だが、それが乳房の大きさの個体差に応じたカップという仕組みに到達するのは、ようやく1930年前後のことだ。これ以降、ブラは乳房にピッタリとフィットする下着として確立され、そのための着用法が模索されることとなる。

今日、「ブラを着ける」という行為は極めて複雑な動作の連続だ。「ブラの下側を持ち、からだを大きく前に倒しながら、乳房をカップに合わせ、フックを止める」「からだを前に倒したまま、左手で左のブラの肩ひものつけ根を少し浮かせ、からだはそのままの状態で、右手で左側の乳房を全部包んで、右方向へ引き上げる」……。こうした一連のプロセスをスムーズに遂行することは、着用者とって極めて当たり前なことなのだが、その当たり前さとは裏腹に実は極めて歴史的な出来事だ。

「谷間」の発見

「表現と身体」という問題系も重要だ。文学、美術、音楽、舞踏、演劇、映画……様々な芸術形式はそれぞれに特徴的な身体の表現を産み出し、また、そうした創造作業において身体は表現の手段としてしばしば決定的な役割を果たしてきた。「寄せて上げる」も一つの表現にほかならない。

ブラを着けるということは、同時に、ブラに相応しい身体イメージを獲得するということだ。ボディ・ラインを際立たせることの多い洋装下着は、身体そのもののフォルムを美とする西欧的審美観と不可分だ。そして、そうした審美観を持ち合わせていなかった日本人は、洋装とともに「プロポーション」といった新たな身体イメージを受容することになる。

その意味で、「寄せて上げる」はまさにエポック・メイキングだった。90年代、下着業界はキャッチコピーにこぞって「谷間」を取り上げた。「よてせあげて、谷間クッキリ」「ふんわり寄せても、谷間ができた」……。ボディ・コンシャスの果てに身体それ自体のファッション化が押し進められるなか、「谷間」は新たな女性美とエロスの特権的トポスとして謳い上げられる。「谷間」のあるカラダ。それは、日本人が極めて最近に獲得した新たな表象だ。

商品の語る身体

最後に、「制度と身体」という問題系を忘れることはできない。人間が身体的存在である以上、あらゆる社会システムは客体としての「身体」という課題に直面する。学校教育、労務管理、軍隊、医療、衛生……これらは全ての政治・経済・社会制度は、身体のコントロールという課題をそれぞれの領域で実現している。そして、「寄せて上げる」もこれと無縁ではない。

グローバリゼーションが叫ばれる昨今、下着業界も新たな生産拠点と市場を求めて海外進出が盛んだ。下着メーカーは新たな進出先で地元女性の計測に取り組み、その身体的特徴を抽出し、それに応じた製品の生産・販売を進めている。

やや唐突な連想になるが、グローバル・パワーが世界各地に展開し、その土地の身体を計測するという出来事は決してこれが最初ではない。およそ百年前、「人体計測学」という科学の知を携えた人々が帝国の拡大に従って各地を訪れ、現地人を計測し、その結果から「人種的特徴」を同定していった。後にこうした「科学的」成果はレイシズムとして糾弾されることになるのだが、今日、グローバル化する世界の中、下着という商品とともに産み出される身体的特徴の表象が、かつての「人体計測学」とどれだけ乖離し、どれだけ重なるのか、決して予断を許さない。

商品の語る身体の姿。それは決して無垢でニュートラルなものではない。

人文学を寄せて上げる

今日、日本国内において年間7000万枚、1000億円あまりのブラが出荷されているという。個人差はあるものの1個（1組？）1キログラム前後の皮下脂肪の固まりをめぐって、これだけのマーケットが動き、テクノロジーが投入され、私たちの日常的行為や美意識が揺り動かされている現実は、やはり、ただ事ではない。「身体」という問題の広がりは、この一事をもってしても明かだろう。

そしてこのことは、細分化極まりない今日の学問状況に根底的な問いを突きつける。それは、「人間」のホーリスティックな理解という課題だ。人文学の究極的目標が「人間」にあるとするなら、個別専門分野に拡散した今日の人文学は、失われて久しい「人間」という全体性を回復することが切実に求められるはずだ。そしてその時、「人間」が「身体的存在」にほかならない以上、「身体」という問いを共有することは、その有効な試金石となるはずだ。

際限なく弛み広がった今日の人文学を、その初発の問題意識にまで「寄せて上げる」。それがこの研究班の野望にほかならない。

班員一覧（班長は除く）

●所内

大浦康介、岡田暁生、加藤和人、倉島　哲、小牧幸代、坂本優一郎、佐野誠子、高木博志、高階絵里加、竹沢泰子、田中祐理子、谷川　穣、藤原辰史、守岡知彦、森本淳生

近代日本とアジア

領事館警察の研究

班長◆水野直樹

「領事館警察」を「外務省警察」と言い換えても、それについて知っている人、聞いたことのある人はあまりいないであろう。しかし、戦前日本の外交史料を読んでいると、朝鮮や中国で日本の警察が活動していたことを示す記述にしばしば出くわす。領事館警察とは、戦前日本が朝鮮半島や中国（「満洲」を含む）に置いていた公使館・領事館に警察官・巡査が配置されたり、公使館・領事館の中に警察部が設けられたりしたものを指している（明治末年にはバンコクの日本公使館にも警察官が配置されていた）。これらの警察は外務省の管轄であったため、全体として「外務省警察」とも呼ばれる機構を作り出していた。

では、なぜ領事館に警察が置かていたのか。当時の日本は朝鮮・中国などにおいて領事裁判権を有していたが、これを拡大解釈して在留日本人の「保護・取締り」のためには警察が必要だとして、条約上の根拠が薄いまま領事館に警察を設けたのである。

朝鮮では、釜山開港（1877年）当初から日本人居留民保護のため「夜廻」の名目で巡査が派遣されていたが、正式には1880年釜山領事館に警部１名、巡査10名が配置された。その後、元山、仁川、木浦、群山などが開港されると、領事館または領事館分館に警察が置かれることになった。警察の活動は居留地内にとどまることなく、それ以外の地域に巡査などが「出張」するという形で日本人の「保護」にあたると同時に、朝鮮各地の情報収集をも行なった。日露戦争の時期には、日本による鉄道工事を守るために警官の数は急増し、300名近くになった。しかし、1905年の第二次日韓協約（保護条約）によって日本公使館が統監府に、各地領事館が理事庁に改編されると、領事館警察も理事庁警察に変わり、韓国政府の警察権を日本が掌握して行くとともに、朝鮮における領事館警察は姿を消した。

中国では、1884年に上海領事館に2名の巡査が派遣されたのが始まりである。日清戦争後の条約によって、日本は中国から片務的な治外法権を獲得し、それを根拠として天津、蘇州、重慶など各地の領事館に警察官を派遣した。日露戦争後は、満洲の各地に領事館が置かれるとともに、警察官も駐在することになった。

何を「保護・取締り」したか

当初領事館警察が取締りの対象にしたのは、居留地に在留する日本人の「醜態」であった。領事館が制定した取締規則などでは、「帽子をかぶらずに外出する」「醜装で徘徊する」「路上で婦人に戯れる」「裸体をあらわす」などの行為を取締ることが定められている。日本人が朝鮮人・中国人とトラブルを起こすのを抑えるだけでなく、居留地に滞在する西洋人に日本人の「非文明」を目撃されるのを避けるという意味を持っていた。また、日本人売春婦・売春業者など風俗関係の取締り・統制も領事館警察の業務であった。

「保護・取締り」の対象は、当初日本人だけであったが、台湾領有後は台湾人も日本国籍を持つ者としてその対象となり、1905年第二次日韓協約（保護条約）によって韓国の外交権を日本が掌握すると、在外朝鮮人の「保護・取締り」は日本の在外公館の行なうところとなった。とりわけ1920年代以降、中国で展開される朝鮮独立運動の取締りは領事館警察のもっとも重要な任務であった。

朝鮮人が住民の8割を占める間島（ほぼ現在の中国吉林省延辺朝鮮族自治州にあたる）では、1910年代末から領事館分館警察署の分署が農村地帯にも次々と設置された。この地域では、領事館事務を行なう外務省職員の数よりも警官・巡査の数がずっと多かった。例えば、1925年時点で在間島総領事館に勤務する外務省職員は、総領事１人、副領事２人、書記生４人であったのに対し、警察部門は警視１人、警部５人、警

現在の吉林省延辺朝鮮族自治州龍井市内に残る在間島日本総領事館の建物（1922年建造）。地下に留置場、別棟に監獄があった。

部補４人、巡査部長・巡査約80人という大所帯であった。農村地帯に置かれた分署にいたっては警察官だけが駐在するという状態であった。朝鮮独立運動に関する情報収集、運動の取締り、そして一般朝鮮人の管理統制がその任務であった。

さらに中国の共産主義運動・民族運動に関する情報を収集する必要から、中国の領事館に所属する警察官の数は増えていき、1925年で約700名であったのが、1932年には1300名になっている。

領事館警察と近代日本

領事館警察は、戦前の日本が海外に進出する際に、朝鮮・中国との摩擦をやわらげつつ、在留日本人の権益を保護する機能を果すとともに、海外で展開されている朝鮮や台湾の民族運動・共産主義運動を取締り植民地支配を維持する役割をになうものであった。戦時や「非常時」に出動する軍隊とは異なり「平時」に警察力を行使することによって、近代日本のアジアへの拡大を支えたのが、領事館警察であった。

満洲事変あるいは日中戦争後は、領事館警察は日本軍に協力して抗日ゲリラの「討伐」にあたった。満洲国では1937年12月治外法権撤廃と同時に領事館警察も廃止されたが、日本人警察官の大部分は満洲国警察に身分が移された。一方、中国関内では日本占領地が拡大していくと、各地に警察分署あるいは派遣所が設置され、外務省警察は大拡充を見ることになった。

1942年11月に設置された大東亜省が中国との外交事務を扱うことになると、外務省警察は大東亜省警察に改称されたが、実態には大きな変化がなかった。日本敗戦後の1945年10月、大東亜省警察が廃止された時点で、警察官3470名（予算定員4275名）にまで膨れ上がっていたのである。

日本と朝鮮・中国との歴史的関係を扱ったこれまでの研究は、外交関係については多くの業績をあげてきたが、領事館に付随する警察がどのような役割を果したかについては、ほとんど関心を寄せてこなかった。しかし、領事館警察は、在留日本人・朝鮮人・台湾人の身近に存在したものであり、当該地域の朝鮮人・中国人とも直接の接触・交渉をもつものであった。日本と朝鮮・中国との歴史的関係を日常生活のレベルで考えようとするなら、領事館警察の存在は無視しえないものなのである。また在留日本人社会の姿も領事館警察というフィルターを通して新たな側面を見出すことができる。近代日本とアジアとの関係をとらえる上で、領事館警察は大きな位置を占めているといってよい。

このような領事館警察の諸側面を明らかにするために、日本史・朝鮮史・中国史・台湾史・外交史など各分野の研究者が協力して研究を進めている。

班員一覧（班長は除く）

●所内
李　昇燁、石川禎浩、高木博志、村上　衛

●学内
永井　和（文学研究科・教授）

●学外
浅野豊美（中京大・教養・助教授）
イ・ジョンミン（中央大・総合政策・講師）
梶居佳弘（立命館大・法・講師）
桂川光正（大阪産業大・人間環境・教授）
近藤正己（近畿大・文芸・助教授）
宗田昌人（京大・文・D.C.）
副島昭一（和歌山大・教育・教授）
田中隆一（ソウル大・韓国文化研・客員）
長沢一恵（関西大・文・D.C.）
廣岡浄進（大阪大・文・D.C.）
藤永　壮（大阪産業大・人間環境・助教授）
本間千景（佛教大・文学研究科・D.C.）
松田利彦（国際日本文化研究センター・助教授）
Todd Henry（外国人共同研究員）

文明化をもたらす言語をもとめて

文明と言語

班長◆横山俊夫

人の社会が安定し、しかもそれが環境とも文(あや)をなし光明をはなつ状態に赴くとき、言語もまた変容しつつ大きな役割をはたす。その諸相を、さまざまな事例のなかにとらえ、文明をささえる言語にはどのような質がもとめられるのかを明らかにする――これが当研究組織の目的である。ここでいう文明とは、東アジアの古典『易』が久しく示唆しつづけたような、天地人三才が調和して輝く状態であると、あえて意識している。

文明にほど遠い現代

この研究をはじめた背景には、現代社会がかかえる難問への関心がある。いま地球規模で見られるのは、先端科学技術が産みだす利便や相互依存の増幅、因果関係の錯綜が、人びとの身心をかえって萎縮させ、はからずもある種の安定をもたらしそうな兆しである。人類が自ら手に入れた技術力ながら、それが強力になるほど容易には使えなくなるという逆説がひろがる。やがて、強い制御が人間社会にはたらき、今はまだ「野」なるままの技術の暴走が止むのであろうか。

一般に、ものと生きものがかかわり、ことが起き、その繋がりが続いてゆく世界では、構成要素が互いに他者を過度にそこなわぬよう、数多い媒介が幅をきかせる。とりわけ人の社会にあっては言語という媒介がはたす役割は大きい。ところが、現代に忍び込もうとしている安定なるものが、閉塞に向かうことなく、文明と呼ばれるにあたいする状態に至るかどうかは、じつのところ、はなはだ危うい。

というのは、現代社会の専門細分化が、術語や暗号もどきの記号を膨大にふくらませ、言語の門外流通力をおとろえさせるとともに、他方ではそのカタコトが情報通信技術のあと押しで無限に飛び交い、人びとを「文」よりむしろ「武」すなわち問答無用の世界へと走らせる気配が強まっているからである。

まずは基礎研究の蓄積から

このような関心のもとにあつまる隔週の研究会であるが、そこでなされる報告のほとんどは、具体的な事例研究である。語り手は、アジアやヨーロッパの歴史や文学や思想の研究者。言語以外の媒介を駆使する芸能や芸術の通人。いずれも前近代から現代にまたがる。さらに、昆虫類や魚類あるいは類人猿の野外観察者、先端科学批評家など。それぞれの分野での、安定と攪乱、拡大と縮小、凝縮と散逸といった現象についての相互教育と、研究成果の表現についての相互批判が続く。また、共同作業として、17世紀後半、文明化がはじまるころの京都と大坂に花咲いた色道論、『色道大鏡』や『色道諸分 難波鉦』を輪読、非武装をたてまえに賑わいの持続をはかろうとした閉鎖社会での多様な人間模様とそこでかわされた言葉を観察している。

研究班発足までの歩み

この研究組織は、いわば現代の文運を想う運動体として2002年４月から発足した。その起源は、1988年発足の人文研共同研究「貝原益軒とその時代」にさかのぼる。17-18世紀の安定期日本が生んだ文明学を理解するためには、個人や社会の「恒常」より「変化」にひかれる近代の人文科学だけでは歯が立たない。そこで1889年から財団法人京都ゼミナールハウスの支援により、国際セミナー「安定社会の総合研究」を組織。10年間、生態学、物理学、数学の専門家のみならず、林業家や酒造家、芸能者や美術作家も交えた議論を重ねた。そこでの成果が、安定持続社会における、さまざまな媒介の力の発見であった。

数ある媒介のなかでも、人間にとって重いのが時間と言語である。時間については、学術文化交流のための第三セクター組織「株式会社けいはんな」の支援を受け、1992年から2002年まで「マラソンセミナー／

人間・生物・時間」を運営、先端科学と伝統芸能の双方から、時間あるいは時空未分の「間」と文明のかかわりを考えた。また、1996年に雑誌『中央公論』の支援を受けて展開した鼎談「二十一世紀の花鳥風月」は、これら80年代末からの諸活動をふまえての、現代科学の言語表現力を強めるための、すなわちごく今様の風流の可能性をさぐる試みであった。

その後、当研究所の試行的共同研究「言語力の諸相」が1997年から2年間つづいた。また並行して学内先端分野との連携による「新発見事物の名づけをめぐる学内共同のこころみ」、さらに国際シンポジウム「人文学の新時代――現代自然科学との対話をもとめて」へと展開。やがて、実証的な研究蓄積を目指し、1999年4月より共同研究「安定社会と言語」が発足、3年後、それを発展させた当研究組織が生まれた。

『色道古銀買』(1680／京大・文・穎原文庫蔵)に描かれた『難波鉦』評者思案の図。当研究班輪読風景もこれに近きか。

2004年度なかばの概況

この組織の発足直後に行ったのが、ソウル国立大学校の科学史・科学哲学協同課程と共催のシンポジウム「現代科学術語の再構築」であった。科学は文化の一部であること、日韓両国が国語、漢語、英語をかさねて科学研究を進めることは創造力の源泉となること――企画者たちのこのような理解は、前年のソウルでの準備会議以来醸成されていた。開催場所は、当研究組織の蓄積も手伝って2002年春に京大に開設された「三才学林」(大学院地球環境学堂・学舎の研究教育支援のため旧帝大総長官舎を一部改修、「両任」制により、当班長が運営につとめている)であった。会期中、環境学分野からの協力も得て、現行の科学用語改良案や「文明」理念の検討に熱がこもった。

それ以来、人文研や三才学林での研究発表、あるいは「言霊誕生」の名所探訪が続いている。最近の議論は、言語と秩序(対人から対環境まで)の関係を問うものと、言語の虚実転換力による風流を問うものに広がっている。前者では、たとえば、人類史上における言語発生の意味を、近年の霊長類や古人類化石研究を統合して検討するものや、安定社会における語彙安定と雅俗弁別の強まり、用文章類出版の隆盛などについての報告。あるいは、旅人の他国認識における言語的制約の分析や法律用語とNGO活動者の言葉の隔たりを論じるものなど。後者では、たとえば、動物や昆虫の研究において、その動作をあらわす用語が人間の振舞いを語る言葉と同じになる宿命を論じるもの、遺伝子研究の語彙の爆発的増加とのつきあいかたを考えるもの、あるいは、芸能興行や演奏における定型化がもたらす力をさぐるものなどとめまぐるしい。

大学を文明化するこころざし

当研究組織がいま力を注いでいるのは、共著『言語力の今昔』(仮題)のまとめと、『難波鉦』の現代共通語訳ならびに班員各自が得意とする方言訳の完成である。その他、班員が個人としてかかわりながらも、当組織と深く連動している活動としては、学内外での教育活動のほか、「地球環境学懇話会」(2002～／地球環境学堂三才学林主催)、「ゲノムひろば」(2003～／科学研究費特定領域研究ゲノム4領域主催)、「京都文化会議」(2003～／京都府、京都大学、稲盛財団共催)がある。これらに共通する志とは、ひと言でいえば、大学の文明化ということではないだろうか。

班員一覧 (班長は除く)

●所内

宇佐美齊、岡田暁生、加藤和人、金　文京、倉島　哲、武田時昌、田中祐理子、森本淳生、Susan B. Hanley (客員XI '04—II '05／ワシントン大・国際関係学・名誉教授)

●学内

山極壽一 (理学研究科・教授)
遊磨正秀 (生態学研究センター・助教授)

●学外

荒牧典俊 (大谷大・文・教授)
遠藤　彰 (立命館大・理工・教授／人文研非常勤講師　IV '02—)
後藤静夫 (京都市立芸大・日本伝統音楽研究センター・教授)
斎藤清明 (総合地球環境学研究所・教授)
廣瀬千紗子 (同志社女子大・現代社会・教授)
深澤一幸 (大阪大・言語文化・教授)
細田明宏 (日本民俗音楽研究所・研究員)
山岸　敦 (JT生命誌研究館・研究員)

実在性と概念がいかに交錯するのか

人種の表象と表現をめぐる学際的研究

班長◆竹沢泰子

生物学的概念としての「人種」に批判的検討が加えられ、その有効性が否定されてから久しい。しかし人種が、21世紀に入ってもかくも強固に社会的に存在するのはなぜか。そのような人種の実在性を理解する手がかりは、人種の表象と表現にあると考えられる。

人種の表象と非可塑性・可塑性

フランツ・ファノンの『黒い皮膚・白い仮面』のなかに、フランス旧植民地マルチニック出身の彼を見て、白人のこどもが、「ママ、見て、ニグロだよ、ぼくこわい！」と叫ぶ有名な場面がある。「単に他の人間たちのなかのひとりの人間であることを望んでいた」ファノンは、それによって「私の肌の黒さを、私の人種的な特徴を発見した」。個体としてのファノンのなかから「黒い皮膚」が差異として有徴化され、恐怖心と嫌悪感を募らせるものとしての烙印を押される――そのような彼らの日常的経験の反復が、烙印の深い自己内在化をもたらすのである。それはバーバの解釈によれば、白人に、自分がもたないものへの欲望を募らせ、アンビバレントな感情を抱かせるものである。このような露骨な人種差別的体験でなくとも、メディアなどの人種表象は、現代において人種がもっともリアルに存在している領域のひとつである。今日の表象は、主としてマス・メディアを媒体として流通するイメージや、象徴、言説、論争、思想などの形態をとる。

黒人表象をとりあげた『ブラック・ルックス』のなかで、ベル・フックスは、アフリカ系アメリカ人が教育や雇用面で目覚ましい進出を遂げているのとは対照的に、彼らにかんするステレオタイプ的な表象には本質的な変化がみられないと論じている。「雑誌や本を開いても、テレビをつけても、映画を観ても、写真を見ても、黒人は白人至上主義を再強化するようなイメージで描かれている」というのである。とくにアメリカでは、マイノリティの進出が民主主義社会のアイコンとして語られる一方、人種表象のイメージは資本主義社会における消費対象となっており、構造的に再生産を強いられている。

しかし、では人種表象はただ固定的なイメージで、社会のなかの人種主義的な思考の反映にすぎないのだろうか。最近の人種表象の研究では、表象がいかに現実を歪曲するかという問題よりも、カルチュラル・スタディーズなどの影響により、リアリティがいかにマス・メディアによる回路をとおして構築されるに至るかに多大な関心が注がれるようになってきた。

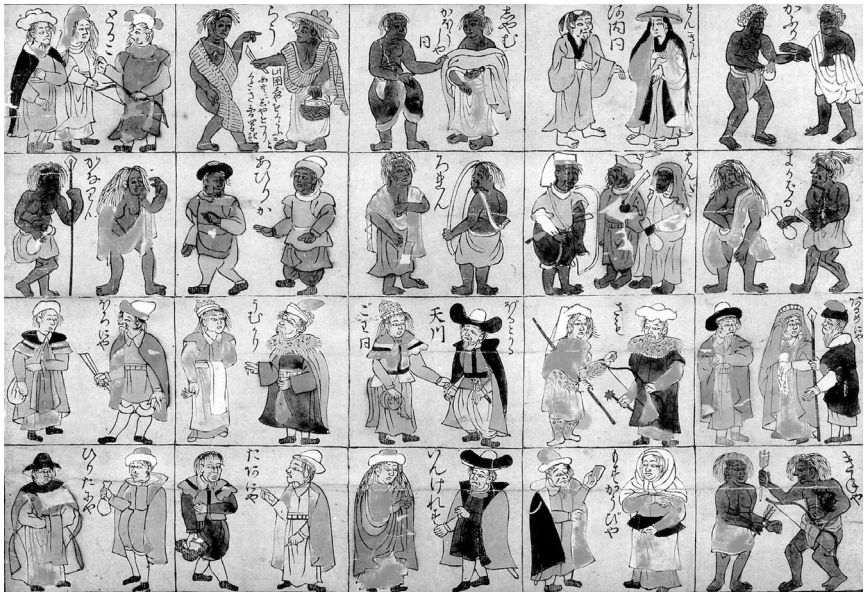
人種の表現と差異の政治学

他方マイノリティは、主流社会において存続する表象によって閉鎖的で固定的な空間に閉じ込められるのではなく、今日においては主体的な表現をとおして表象を打破し、場合によっては逆手にとって自己表現に転化させ、本質自体をも変容させてしまう。マス・メディアに反映されるステレオタイプ的表象や存在自体の透明性に抗して、マイノリティとしてのアイデンティティや自らの差異を表現する場が追求される。それがさらに政治的な形で発展した場合、社会的にマージナルな存在であるマイノリティが、本来ポジショナリティによって多様なアイデンティティを抱えているにもかかわらず、本質主義的な人種アイデンティティでもって「われわれ」を名乗り、差異を強調する。ヨーロッパでもアメリカでもアジアにおいても、「多文化主義」は「人種」（あるいはそのレトリックとしての「文化」）という社会的枠の存在を前提とし、政策がくまれている。しかしたとえば、アファーマティブ・アクション（積極的措置）をめぐっては、人種差別是正か逆差別・逆人種主義か、立場によって解釈や主張が異なる。アメリカでは、「カラーコンシャス」か「カラーブラインド」

か、つまり肌の色が社会的現実を規定することを望むか、肌の色は一切関係ない社会を目指すか、で激しい論争が闘われている。差別を告発する側のマイノリティにとっては、自らの権利獲得・拡大を求めアプロプリエーションやアイデンティティ高揚のために、「人種」は不可欠な概念であり、有力な武器でもあるのだ。

人種の概念と実在性

本共同研究は、社会や文化の諸側面で実在する人種の表象、またマイノリティによる自己の人種的アイデンティティや経験の主体的あるいは戦略的表現、またそれらの社会的作用について考察するものである。



「万国総図・世界人形図」（1652年）に描かれる世界の人々。神戸市立博物館蔵。

本研究は、科学研究費の助成により2001年から2004年まで人文科学研究所で行った「『人種』の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究」（代表竹沢泰子、成果は『人種概念の普遍性を問う』人文書院、2004年）に続く共同研究である。実在性は概念からは切断不可能であるが、人種概念の洗い直しという作業に挑んだ上で、本共同研究は、社会的実在性の解明に主眼をおいている。班員は、文化人類学、自然人類学、科学史、歴史学、社会学、文学、美術史、経済史などの人種やその周辺問題について研究を積み重ねてきた研究者によって構成されている。地域的には、日本、北米、南米、東アジア・南アジア、ヨーロッパ、アフリカの専門家からなる。具体的な研究テーマは、広告や風刺画、絵画などにみられるビジュアルな人種表象、社会言説やマスメディア、文学などのテクストから解読できる人種表象、科学論文から医療の現場に至るまでに散見されるさまざまな集団にかんする科学的言説、社会運動・政治運動、音楽・芸術活動などにみる主体的表現などである。

人種の表象と表現をめぐる問題は、今日の差異の政治学のなかで複雑化している。支配と消費文化の力学によって生産および再生産されつづける表象、差別是正と表象からの解放を求めて生産される表現との交錯により、人種はますますそのリアリティを増している。しかしながらそれにとどまらず、人種概念をめぐる解釈や実践と絡み合って、時として本来性質を異にするものが同一の形態をとる事態も生じている。たとえば、人種によって罹病率の違いが存在するという科学的言説にもとづいて医療の現場で人種の枠にもとづくデータを求める医療従事者も、差異の政治学において自らの人種的アイデンティティや権利拡大を主張するマイノリティも、ともにカラーコンシャスを支持する。逆に、人種間闘争には永遠に答えは見いだせないと人種という概念や思考自体を解体しようとするリベラル派と、自らの既得権保護のために人種にもとづいた優遇政策に反対する保守層がともにカラーブラインドを主張する、といった具合である。表象と表現にみる実在性がいかに概念と交錯して互いに影響を及ぼすのかについても、追求していきたい。

班員一覧（班長は除く）

●所内

石川禎浩、大浦康介、加藤和人、倉島　哲、小関　隆、小牧幸代、高木博志、高階絵里加、田中雅一、田辺明生、藤原辰史

●学内

蘭　信三（留学生センター・助教授）
片山一道（理学研究科・教授）
松田素二（文学研究科・教授）

●学外

石橋　純（東京大・総合文化・助教授）
井野瀬久美恵（甲南大・文・教授）
川島浩平（武蔵大・人文・教授）
北原　恵（甲南大・文・教授）
貴堂嘉之（一橋大・社会学・助教授）
栗本英世（大阪大・人間科学・教授）
黒川みどり（静岡大・教育・教授）
斎藤成也（国立遺伝学研究所・集団遺伝・教授）
坂野　徹（東京理科大・非常勤講師）
坂元ひろ子（一橋大・社会学・教授）
崎山政毅（立命館大・文・助教授）
スチュアート・ヘンリ（放送大・文化情報科学・教授）
冨山一郎（大阪大・文・教授）
水谷　智（神戸市立外国語大・非常勤講師）
渡辺公三（立命館大・文・教授）

生活世界の大変貌

1960年代の研究

班長◆富永茂樹

マルセル・ゴーシェとピエール・ノラがはじめた雑誌『デバ』は1988年に創刊50号を記念して『フランスの思想 : 1945–1988』というたいへん興味深い年表を作った（これは今ではガリマール社から出ているFolioというポケット版の叢書で入手が可能である）。この年表はタイトルどおり第２次大戦後のフランスの思想の流れを追ったものだが、一方ではフランス以外の世界での出来事、また他方では政治や経済のみならず日常生活のなかでのさまざまな事件との関連のなかで思想を位置づけていて、読者はどこを読んでもおもしろい発見に出会える。

個人の研究から国際政治まで

たとえばわれわれの共同研究の報告で、1960年代の前半にパリで勉強をした芸術家が、美術学校での苦労の多かった最初の学期がやっと終了して、みんなで焼き肉パーティーをやろうとしていた日に、本人は腹痛を訴えてベッドに付していたという話題が出た。そしてその日にラジオで聴いたのがアメリカのケネディー大統領の暗殺というニュースであったのが忘れられないという。この話を聞きながら手許の『デバ』の年表の1963年11月のページをふとひもといてみると、学生の腹痛とケネディーの暗殺の、そのわずか数日前にジャック・ラカンがフランス精神分析学会を除名されたという記述が見つかった。そういうおもしろい年表である。

一学生がフランスの美術の世界に接触する最初の一区切りを経験したこと、今ではいろいろとわかってきているが当時はある種の希望を集めていた人物が、キューバ危機を経て、ヴェトナム戦争をはじめたときに突然殺害されこと、今日では無視することのできない一派が精神分析の世界で築かれる出発点が訪れたこと、この３つの出来事のあいだには、いうまでもなく何の直接的なつながりもありはしない。それでも世界のいたるところでさまざまな変化が生じ、それと同時に、あるいは並行して芸術家の形成がなされていったのである。「1960年代の研究」をはじめたとき、まずわれわれの念頭にあったのは、このように一見したところ何の脈絡もないような、個人の経験から国際政治にいたるまで、いくつもの水準で時代の変化をとらえていこうということであった。

1960年代という時代は世界が大きな変化を経験した時代であったことは、世紀があらたまった今、誰しもが認めるところだろう。しかもその変化はとりわけアメリカ文化の影響を受けて地球規模で進行した点でまず重要である。また日本にかんしていうなら、この

フランスの五月革命（1968）時に広く出回ったポスターから。左上：「あまりにも未来を憂える青春」　右上：瓶のラベルには「報道：飲み込まないこと」　左下：工場占拠にたいして肯定の「oui」　右下：五月革命の寵児、ダニエル・コーン＝ベンディット。ドイツ国籍のためフランスから強制退去を命じられる。キャプションには「われわれは皆望まれざる者たち」

変化の大きさは明治維新と太平洋戦争での敗戦がもたらしたそれを凌ぐものであった（場合によっては、応仁の乱以来の変化がここで生じたのだと言うひとさえいる！）。さらに1960年代の社会の変化は、政治や経済の領域でのものである以上に、われわれの生活世界の深いところで認められるものであったことにも注目できるだろう。

テレビ、洗濯機、冷蔵庫など電化製品がこの国にあふれるようになったのがこの時代である。こうした製品どころかビデオやエア・コンに囲まれた環境に生まれた世代には、60年代以前の生活がどのようなものであったか、想像することがむずかしいかもしれない。しかしこの時代を生きていて、ケネディーの暗殺はもちろん、ひょっとすると1965年にルイ・アルテュセールの『甦るマルクス』が出たのを読んで衝撃を受けたひとさえいるかもしれないが、それでも逆に、夕方に冷たいビールが飲めるようになった、ましてや母親や奥さんの家事がたいへん楽になったのがいつのことであったか、はっきりと記憶しているということはかえって少ないのではないだろうか。

この時代の変化と現在

ところが、60年代末あるいは70年代になってこの国で顕著になるいわゆる「中流意識」が形成され、それと無関係ではなしに思想というもののもちうる意味がほとんど空しくなってしまったとして、社会の変化の過程に電化製品という「もの」の急激な普及が一役買っていたとするなら、これは忘れてはならないことであるにちがいない。この時代の変化はやはり、物質から観念、日常生活から国際政治にいたるまでの、さまざまな水準を往き来することをつうじて見えてくるのだと思われる。

社会の変化は政治的事件や思想史上の出来事のように目で見え、言葉で語られることがらのほうが、生活のただなかで生起することにくらべてはっきりと記憶されやすいが、他方でまたその変化を経験したもののほうがかえって自覚しにくいという側面もある。70年代以降に生まれた世代が60年代を知らないのは当然だが、それなら60年代をじっさいに生きた者がその時代の変化をどれだけ正確に受け止めていたかというとけっして定かではないことは、先ほどのテレビや冷蔵庫の記憶が教えてくれるところでもある。ましてや新聞やテレビから与えられる断片的な情報だけで、文化大革命やヴェトナム戦争について充分な認識をもてたひとは同時代にどれだけいたことだろうか。

このような共同研究をはじめた私の年齢が特殊なのであるかもしれない。私は1950年生まれなので、60年代を終始ごくぼんやりとした少年としてすごしてきた。あの時代に周囲の世界でおき、ぼんやりとした少年の耳にも多少は情報が入ってきたことの意味が何であったのか、わかりはじめたのはつい最近のことである。しかし、私よりももっと年長で、大人になって60年代を生きた人たちには、同時代を客観的にとらえることができていたのかどうか。逆にこの時代を知りようのない現在の学生のなかにも、ひょっとすると1960年代の文化に関心をもち、われわれ以上に鋭い洞察力を示す者が現れてくることもありうる。

そしてなによりも、誰にも深くは自覚されなかった変化、情報は入手してもその意味が充分には理解できていなかった変化、そのような1960年代に生じた変化は、いくつもの点で現在の世界のありように直接つながり、あるいはこれを決定づけるものでもあった。われわれが進めているのは、生活文化を中心としたさまざまな領域にまたがる共同研究であると同時に、ある時代をまったく生きていない者、反対に完全に生ききった者、その中間でぼんやりと暮らしてきた者など、いくつもの世代の視点を交えることで、われわれ自身の現在を知るための共同研究でもある。なお、この研究班では随時ニューズレター『Chronicle ’60s』を発行して、ここで発見できたことを所の内外共有することをめざしている。関心がおありのかたにお届けしたいので、事務局まで申し込んでいただきたい。

班員一覧（班長は除く）

●所内

籠谷直人、加藤和人、田中祐理子、藤原辰史、山室信一

●学内

伊従　勉（人間環境学研究科・教授）
大澤真幸（人間環境学研究科・助教授）
加藤幹郎（総合人間・助教授）
大黒弘慈（総合人間・助教授）

●学外

遠藤　徹（同志社大・言語文化教育センター・助教授）
葛山泰央（筑波大・人文社会科学・講師）
川崎博史（ホロニック）
北垣　徹（西南学院大・文・講師）
斎藤　光（精華大・人文・教授）
白鳥義彦（神戸大・文・助教授）
鳴海邦碩（大阪大・工・教授）
成実弘至（京都造形芸術大・芸術・助教授）
半田章二（シィー・ディー・アイ）
疋田正博（シィー・ディー・アイ）
前川真行（大阪女子大・人文・助教授）
松本日之春（京都市立芸術大・音楽・教授）
光永雅明（神戸市立外大・外国語・助教授）
森口邦彦（染色家）

京都に見る近代の射程

共同研究

近代京都研究

班長◆丸山　宏

1994年12月、ユネスコの第18回世界遺産委員会で古都京都の文化財17ヶ所（大津市、宇治市を含む）が「世界遺産」に登録されたことは記憶に新しい。17ヶ所とは、賀茂別雷神社（上賀茂神社）、賀茂御祖神社（下鴨神社）、教王護国寺（東寺）、清水寺、延暦寺[大津市]、醍醐寺、仁和寺、平等院[宇治市]、宇治上神社[宇治市]、高山寺、西芳寺（苔寺）、天竜寺、鹿苑寺（金閣寺）、慈照寺（銀閣寺）、竜安寺、本願寺（西本願寺）、二条城である。ちなみに文化遺産とは「歴史上、芸術上、または、学術上、顕著な普遍的価値を有する記念物、建築物群、記念的意義を有する彫刻および絵画、考古学的な性質の物件および構造物、金石文、洞穴居ならびにこれらの物件の組み合わせで、歴史的、芸術上、または、学術上、顕著な普遍的価値を有するもの」と定義されている。

日本が世界遺産条約（正式には「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」）を締結したのは1992年、先進国としては遅い。世界遺産条約は1972年の国際連合（国連）の教育科学文化機関であるユネスコの総会で採択されたものである。日本は条約採択後20年を経、バブル経済が崩壊し、ようやく条約を締結した。すでに60年代後半からは開発途上国でも経済開発による遺跡・文化財の破壊が問題になってきた。世界遺産条約はとくに経済発展にともなう破壊から「文化遺産」あるいは「自然遺産」を保存、保護するという理念が前面に出される。バブル経済崩壊が結果的には条約締結の契機となったのである。

もちろん上記17ヶ所はすでに文化財保護法により国宝、重要文化財あるいは名勝（特別名勝）に指定されていた。世界遺産の指定は世界標準として普遍的価値付けのヒエラルキーを構築したといってよい。京都はこのパラダイムの中で、世界の文化都市のお墨付きを得る。文化遺産都市京都が再認識されたといえる。

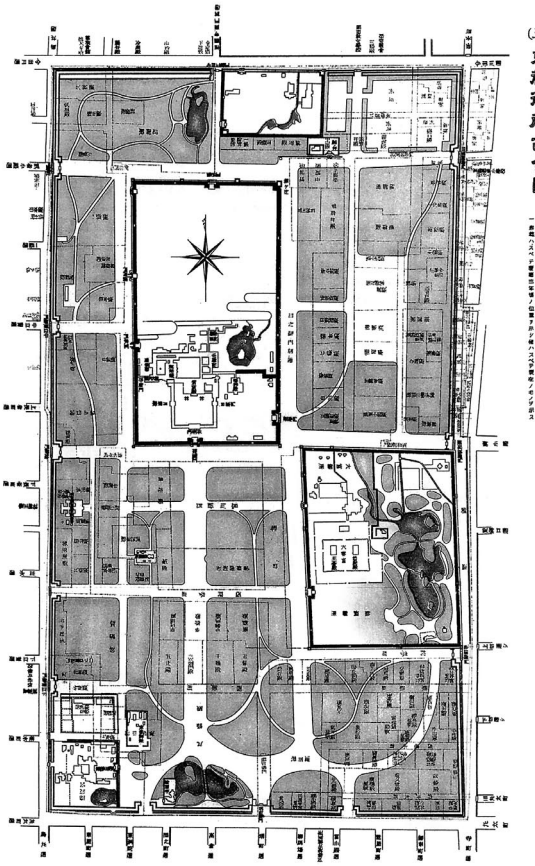
ところで近代京都は上に記したような世界遺産を含む近代以前の歴史遺産、あるいは有形無形の蓄積された“遺産”に対しどのように対応したのであろうか。以下近代京都研究の射程について述べたい。

京都は凋落都市か遺産都市か

京都市は現在、人口約147万、全国第7位に位置している（第51回日本統計年鑑）。人口100万を超える都市は12を数えるが、その中で歴史都市と呼ばれるのは京都だけである。

江戸時代、京都は幕府の直轄都市であり、政治経済の中枢に位置しており、他を圧し、江戸、大坂とともに三都と呼ばれていた。元禄期（1688－1704）の三都はほぼ35万人前後の人口を有していたという。三都の繁栄期は京都の寛永期、大坂の元禄期、江戸の化政期と移っていった。京都は近代を迎える前に漸次衰退していたといえるかもしれないが、それが決定的となったのは東京奠都であった。禁裏御所（京都御所）は廃墟となり、空洞化した。京都の近代は挫折からの出発であった。政治都市から経済都市への転換を求め、空洞化した京都御所内での博覧会を企画し、復興の契機とした。その発想はどこから生まれたのか。京都を律していたものはこの禁裏御所にはじまる宮廷の行事であった。しかし、その建物は東寺や本願寺と比べてもあまりに質素なものである。いや宮廷儀礼のためには簡素な方が有効であるのか。この儀礼があらゆる方面で千年をかけて一つの規範をつくった。その儀礼に伴う様々な有形無形の産業と芸能が生まれる。京都文化の孵卵器である。また、本山を京都においた寺社は全国から浄財をあつめ、芸能のパトロンとなり、あるいは名園を築庭したのである。今日でも宗教法人数は東京に次いで京都が第2位である。宗教都市といえるかもしれない。

宮廷、宗教に関連する産業が生まれ、それを担う職人が集住する町が形成された。厳しい条件下で切磋琢磨し、技術は洗練された。非軍事都市であったことも幸いしたともいえる。厳しい条件といえば今日、俗称「鰻の寝床」の「京の町家」は可能な限り工夫考案された形態を作りだした。坪庭の創意工夫もしかりである。今日の京都の中堅産業の進取性の下地がこのあたりにあるのではないか。また、平安奠都千百年を京都復興の時宜ととらえ、明治28年に第４回内国勧業博覧会を誘致した。その機に平安神宮を創建し、近代の平安奠都を再興しようとした。京都の命運を懸けた事業である。京都はイベントや祭りはお手のものである。儀礼都市として豊富な蓄積と経験があったからこそ、京都復興を願った平安奠都千百年紀念祭で時代祭を創作できたのである。この蓄積は現在、国宝や重要文化財の数からも伺える。東京都についで京都市は国宝207件、重要文化財1743件を有し2位である。(『大都市比較統計表』平成12年度版）しかし、史蹟・名勝の数では京都が１位である。とくに名勝では48件（特別名勝12件を含む）と他を圧している。文化的遺産から見ると突出した都市である。



『大正大禮京都府記事（庶務之部上)』(大正6年刊）に掲載された京都御所周辺図。図中には慶応3年頃の旧公家町の区画割が示されている。

時宜をえると発芽する一千年の文化の「埋土種子」が至る所に散らばっているのが京都である。発芽条件が整えば、予想をはるかにこえるものが誕生する可能性は高い。先端技術分野でもしかりである。埋土種子は物的なもの、人的なもの、あるいは精神的なものもありうる。この埋土種子を探索すべく、近代京都を俎上に載せ、京都の多様な有り様、そのしたたかさを探ってみたい。（この項、京都新聞2002年11月21日掲載の「みやこの近代」プロローグ３を一部改稿）

プレ共同研究

人文研での共同研究開始までに近代京都の研究会は1998年6月に発足した。共同研究班のメンバーでもある伊従勉・高木博志の両氏と近代京都をめぐって、様々な事象を俎上に載せ、研究目的を固定化しない自由闊達な研究会ができないかということではじめたものである。先に述べたように近代の京都には研究対象となる豊富な素材が無尽蔵にある。京都は長期にわたり文化遺産を蓄積し、近代になりそれを対象化できる情況を創り出した。京都という都市をどのように相対化できるのか、普遍性と特殊性を射程に入れながら近代史を中心に分野を越えた研究者が多数参加し、切磋琢磨する集いとなった。

班員一覧（班長は除く）

●所内

大原嘉豊、菊地　暁、金　文京、高木博志、高階絵里加、谷川　穣、水野直樹

●学内

伊従　勉（人間環境学研究科・教授）
金坂清則（人間環境学研究科・教授）
藤原　学（人間環境学研究科・助手）
山田　誠（人間環境学研究科・教授）

●学外

小林丈広（京都市歴史資料館・歴史調査員[主任]・人文研非常勤講師）
秋元せき（京都市歴史資料館・嘱託）
天野太郎（同志社女子大・現代社会・助教授）
イ・ヒャンス（京都造形芸術大・非常勤講師）
石田潤一郎（京都工芸繊維大・工芸・教授）
井上章一（国際日本文化研究センター・教授）
岡村敬二（ノートルダム女子大・人間文化・教授）
長志珠絵（神戸市外大・外国語・助教授）
小野健吉（文化庁・文化財部・主任文化財調査官）
小野芳朗（岡山大・環境理工・教授）
笠原一人（京都工芸繊維大・工芸・助手）
桐浴邦夫（京都建築専門学校・講師）
黒岩康博（京都大・文・D.C.）
才津祐美子（国際日本文化研究センター・COE）
坂口さとこ（京都工芸繊維大・工芸科学・D.C.）
清水愛子（京都工芸繊維大・工芸科学・D.C.）
鈴木栄樹（京都薬科大・薬・助教授）
高久嶺之介（同志社大・人文科学研究所・教授）
田島達也（京都市立芸大・講師）
中川　理（京都工芸繊維大・工芸・教授）
中村武生（佛教大・文・非常勤講師）
並木誠士（京都工芸繊維大・工芸・教授）
原田敬一（佛教大・文・教授）
日向　進（京都工芸繊維大・工芸・教授）
福井純子（立命館大・非常勤講師）
福島栄寿（真宗大谷派教学研究所・研究員）
山田由希代（京都工芸繊維大・工芸科学・D.C.）
芳井敬郎（花園大・文学部長）

長期の広域秩序の解明にむけて

アジア・ネットワークの研究

班長◆籠谷直人

歴史学研究において、「国民（主権）国家」システムの相対化が主張されて、すでに久しい。主権国家とは、領土の確定と保全という「強い領域性」と、主権をもった「国民」形成という「強い関係性」を特徴にしている。このシステムが国際的な基準となりえたのは、この枠内において、信頼関係を高め、安全を保障することによって、取引コストを大きく切り下げる機能がはたらいたからである。しかし、このシステムが、アジアを含めた他の地域に広まるにつれて、領域確保をめぐる国家間の対立に代表されるような「狭隘なナショナリズム」の台頭が問題となった。「地域」とは秩序形成の場ではなく、紛争の場として認識された。しかし、この共同研究においては、商人ネットワークの伸張を通して、広範な地域秩序形成の可能性を問うことを課題としている。

国民国家間システム型通商秩序

17世紀半ばの主権国家間システム形成によって、ヨーロッパの帝国は崩壊した。国民国家のなかにあって、権力と商人は、相互の契約がうまく履行されるように、また借金の踏み倒しがないようにと、裁判所や取引所といった「公共圏」を創造し、取引秩序を維持しようとした。権力と商人は、対峙的であり、権力が貨幣鋳造権の一元化をすすめるなかで、商人たちは、私的所有権の確定、商取引慣行の整備を図り、さらに権力がそうした制度的枠組みを尊重することで、近代的技術の発展や資本蓄積を促進させた。その結果が、工業化であったことはよく知られた事実であろう。

しかし、この国家間システムは、その普及とそれへの抑制という二面性を有した。強い領域性を持つ国家間にあっては、技術や知識の伝播と普及は、むしろ規制される側面をもち、また国家の軍事力競争は、その優越を通して安全保障を調達するが、同時に国家間の戦争につながった。ヨーロッパでは、16−18世紀に遠隔地交易が展開し、オランダとイングランドの二国が覇権を競うものの、ヨーロッパ大陸間にあっては、封建制が強化され、むしろ大陸間の交易は後退した。主権国家間システム型は、本社・本国といった中心を有する遠隔地交易を促進させたが、出先の地域内通商秩序の形成には限界を有したのである。では出先の一つであった「アジア」という地域においては、いかなる通商秩序形成が模索されたのであろうか。

帝国と商人のおりなすネットワーク型通商秩序

アジアにおいては、とくに明清朝の中国では、封建制がなく、あわせて「帝国」による地域市場への規制も弱かった。小農は、商品作物をつくり、手工業に着手し、なかには商人になるものもいた。農村工業が発達し、その発達は農村人口の増加を支えた。ムガル帝国や中華帝国は、ヨーロッパ大陸に匹敵する人口と領域を有する帝国であり、そのなかに個々の地域システムを包摂した。なかでも、中華帝国は、地方権力の貨幣鋳造権を認めず、その財政的・軍事的な拡張に抑制的であった。ヨーロッパのような「強い領域性」をもった権力の登場を規制することで、地方の権力の主権国家的機能を奪取した。ヨーロッパの国民国家の規模に相当する省権力自体も、その商人からの税の支払いをうけることで満足し、あえて財政・金融・産業にかかわる法的規制を整備することに熱心ではなかった。省権力は、帝国の求心力に抗して、積極的に工業化を目指すこともなかったのである。

しかし、帝国が「強い領域性」の地方権力の台頭を認めなかったことは、かえって交易の自由度を高め、商人主導型の通商秩序を東アジア地域に提供することになった。権力にたいして必ずしも対峙的ではない商人たちは、同郷の共通の言語・文化を通してあらゆる

境界線を越える商業ネットワークを伸張させたのである。また清朝が、海禁政策を標榜して軍事行動には出なかったこと、また朝貢関係を通して海域への技術伝播を容認したことも、ある意味でこのネットワークの伸張を支えた。帝国と商人がおりなすネットワーク型の通商秩序は、国民国家間システムのない通商秩序であったが、商業的農業とプロト工業の発展を内容とする市場の発展をうながした点で、ヨーロッパの国家間システム型のそれにひけをとることはなかった。

近代帝国主義の東漸とネットワークの成長

しかし、それでもヨーロッパの国家間システム型の市場秩序に強い関心が集まったのは、そのなかから産業革命に代表される工業化が開始されたからであった。そして、イギリスは、工業化に必要な第一次産品の確保を目的に東漸し、その経済的優位を前提に、アジア地域に「自由貿易原則」を行使した。ここに、アジアの帝国の時代が終焉し、ヨーロッパ中心の近代帝国主義の時代へと移行した。しかし重要なのは、この帝国主義の時代にあっても、アジア商人のネットワークは生き残り、むしろ大きく成長したことである。イギリスが、それまで多様に絡み合っていた通商ルートを、シンガポールと香港の中継港建設を通して束ねたことがネットワークの成長を促したが、あわせてその成長は新しい移民労働者の登場に深く関わっていた。

欧米の帝国主義が、通商秩序としての自由貿易を原則とする以上、植民地経営の財源として関税率の引上げからの財政収入には期待できなかった。また強固な伝統的土地慣行に直面するなかで、土地からの税収入も期待薄であった。それゆえ植民地経営の財源に求められたのが、インド産アヘン取引を通した徴税請負制の導入であった。植民地権力が、アヘンの徴税請負を委託したのは「協力的な華僑商人」であり、大量のアヘンの吸引者として期待されたのが、錫・ゴムなどの第一次産品生産に従事する中国人移民労働者であった。植民地権力にとってみれば、移民労働者の増加は、第一次産品の増産とアヘンの吸引を通した財政収入の増額を意味した点で大きく歓迎された。また、労働者の郷里への送金が「移民労働は儲かる」という情報を運ぶならば、郷里からのさらなる移民を促すことになった。同じ言語と文化を内容とする同郷性によって、人・モノ・カネ・情報の四つの要素が、一体化するならば、商人のネットワークは、それ以前にまして伸張することになった。つまり、客桟（人）・通商網（モノ）・信局（カネ・情報）が、同郷性を通してユニット化するときに、商人のネットワークは、シンガポール・香港・神戸といった19世紀の開港場を拠点に伸張したのである。

はたして、このネットワークは、20世紀の主権国家の時代にあって、どのように変化したのであろうか。共同研究では、帝国とネットワークがおりなす商人主導の通商秩序がアジアに固有であることに注目し、ネットワークの時代的変容・成長を通したアジア広域通商秩序形成について考察したい。

カール・A・トロツキー著『アヘンと帝国（OPIUM AND EMPIRE）』より。

班員一覧（班長は除く）

●所内
岩井茂樹、村上　衛

●学内
小野沢　透（文学研究科・助教授）

●学外
井口治夫（名古屋大・環境学研究科・助教授）
上田貴子（日本学術振興会・特別研究員）
大石高志（神戸市立外国語大・国際関係・助教授）
岡本隆司（京都府立大・文・助教授）
加藤雄三（総合地球環境学研究所・助手）
陳　天璽（国立民族学博物館・助教授）
陳　来幸（兵庫県立大・経・教授）
福岡正章（同志社大・経・講師）
水野祥子（大阪大・文・助手）
溝口　歩（神戸大・総合人間科学・D.C.）
宮田敏之（天理大・国際文化・助教授）
藪下信幸（近畿大・経営・助教授）
脇村孝平（大阪市立大・経・教授）

空間の再審

人文・社会科学の新基軸を求めて

班長◆山室信一

空間とは、時間とともに人間が自己と他者について認知していくための不可欠の要因であり、人間とその社会のあり方を追求すべき人文・社会科学においては、明確な概念規定に基づく体系化が要請されるはずである。

しかしながら、進歩史観・文明史観などの歴史主義とそれに依拠した実証主義を基底として成立してきた欧米近代の人文・社会諸科学においては、時間こそが基軸となっており、対象となる同時代の空間的差異を、文明―未開、進歩―停滞といった時間軸に沿った関係に置き換えることによって空間を捉えることを回避してきたことも否めない。

さらに、グローバリゼーションの進行の中で空間は時間によって測られる時間距離に転化したこと、そして、21世紀に入って顕著化してきた領域的支配を持たない超境界的な「帝国」の支配に目を奪われるあまり、学知や政治における空間の持つ意義が視界から薄れていく趨勢にある。

だが、グローバ化によっても国境という境界線はなおかつ人々の存在態様を規定していくはずである。また、生活様式の平準化が進めば進むほど、気候や生態などの地理的条件、都市や建築などの空間形式の差異のあり方こそが、人間観・社会観そして世界認識のあり方をますます規定していく可能性も否定できない。

その是非はともかく、21世紀における空間がどのような相貌をもって現れるかを探っていくためにも、自然環境と人間活動の関係や、生活空間としての都市・建築などの形成のされ方、そしてさらにそれが世界認識としていかに把握されてきたか、といった空間的・地理的視点を主題として形成されてきた学知と実践知そのものを再審に付し、そこから新たな人文・社会科学の基軸を析出していくことが不可欠なはずである。

この共同研究がめざすものは、現在わたしたちが無意識裡に当然の前提としていることとは何なのか、それ自体をあぶり出し、それを否定したときに何が見えてくるのか、を問い直すことにある。そのために世界が「科学的」な認識の対象として浮かび上がり、学知として自明化していった過程に、いま一度、立ち戻り、その場から再び歩き始めることから辿り直していきたい。レベル・ゼロの地点に帰り、無の場所から始めること、それが、この共同研究の初発のスタンスである。

「空間」の問題性とその対象化に向けて

地域regionという概念の語源であるregioは、至高の権威を授かった王rexが境界を画定し祭事を司る行為としてのregere fines, regre sacraから発しており、また日本において統治を示す概念が空間について知ることである「治す」としていたことなどからも明らかなように、空間をいかに認識し、区切る力を持つかということが、政治的統治のあり方を決する枢要な要因となってきた。

他方、国民国家と植民帝国の形成が同時並行的に進んだ近代においては、空間管理のための技法と実践とによって、資本と政治権力による空間的ゾーニングとその域内での監視体制の強化が進められた。そこにおいては都市計画や国土計画などによって空間とその成員の規律化が行われた。こうした空間の再編成は、同時に自己の認知可能な空間の拡大運動となっていき、その過程において人々は身体的に体感不可能な空間を自己に馴染みやすい空間へと変換することを強いられ、それに伴って人文・社会の諸科学における空間認識の枠組みも変容を迫られてることになっていった。

それでは、このように現前している空間をいかに捉えていけばいいのであろうか。言うまでもなく、空間の問題は、ギリシャ哲学においてそれが「無」であると捉えられたように、それ自体は不可視なものである

という根本的なアポリアを孕んでいる点にある。つまり、無限の広がりをもった空間を、いかに境界づけてきたのか、そこにいかなる問題が、含まれていたのかを検討していく必要がある。なぜなら、「空間」に境界を与え、「区切り出す」に当たっては、その「場」で生じた事態の変化や持続の指標となる「なにか」を欠いては、それを認識できないからである。例えば、「空間とは共存する諸事物の秩序、すなわち同時的なすべての諸事物の存在の秩序である」（ライプニッツ）とするならば、「秩序」とはなにか、それをいかにして認識するのか、「時間」がいかなるものとして認識されたか、が問題となる。また、「同時性」がズレることによって生じる「空間の変化」とは、そこに諸事物の関係の変化による「関係性」の変動を促す「運動」ないし「エネルギー」の存在が想定されている以上、そこから「関係性」や「秩序」とその変化を促す要因をめぐって、それぞれの学問分野において自明とされていた基礎範疇を再構築していく必要が出てくるはずである。

もちろん、空間を区切る要因としては、自然、民族、国家、言語、宗教、風俗、環境、風景、生態系、風土、都市など様々に提起し得るはずである。そのためこの共同研究においては、問題関心を同じくする政治学、経済学、民俗学、宗教学、農学、海域論などの専門知識をもった班員がそれらの問題群を常に自らの研究分野に投げ返しつつ、しかし、そこから従来の個別分科した諸科学や専門分野を越境した地点での収斂を図ることが必須の課題となる。

なるほど、欧米近代における空間論は、「空間は便宜的に解釈される」という数学者ルーマンの言葉に示されたように、単に「物理的・幾何学的空間」のみならず、人間がそこで活動することによって表出されてくる「表象的・感覚的空間」として把握されるという方向性に向けて展開してきた。その結果、近代の学知においては、「空間は予め在るのではなく、存在の空間性ゆえに、空間を発見する」とのハイデッガーの定言や、身体を空間の基点とみるフッサールの現象学のように、人間の感覚や活動を主体として空間を捉えることとなったことは否めない。

しかしながら、そうした見解もまた、ひとつの近代的所産であると考えることがこの共同研究の立場である以上、現象学・解釈学的概念としての世界と幾何学的・物理学的概念としての空間とを共に、同時に視野に入れていくことが、共同研究班においては前提とならざるをえないのである。

この共同研究がめざすもの

こうした前提に立って、この共同研究においては、これまでの学知が誕生し形成されてきた現場に立ち返り、その臨場感を再現していくことを目指すことになる。そこでは住居から、農地、自然環境、景観、都市、植民地、海域、大陸にいたるまで、様々なレベルの空間に投げかけられた近代の思想的営為を網羅的に整理し、従来の人文・社会科学を「空間」という視座から再検討するとともに、「空間」をめぐる思想や概念の意義を具体的な社会的コンテクストから逆照射し、グローバル化する世界に対応した「新しい空間思想」に基づく社会認知理論の構築を試みる。

このような試みによって近代の学知に無意識裡に埋め込まれていた方法的ナショナリズムの問題点を剔りだし、それによって一定の領域を画定しつつも、なお境界を越えざるを得ない性質をもつ学知の今後の在り様を提起できる知の視角を確立していくことをめざしたい。

ただ、この共同研究が志向するところのものは、従来の学説の整理などではけっしてなく、既存のものの一切の峻拒であり、それは新たな認識のために、これまでの視座や用語・概念について徹底的な再審を加え、新たな概念を提起することをめざすことにある。

かくして、この共同研究においては、「空間」という概念を問い直すことを通じて、ありとあらゆる既存の概念や視角に、さらには今ある学問分野やディシプリンに疑問符を付して「考える」という思考態度こそが最優先されている。ここでは、自明なものは、もはや何ものも存在しない。あくまでも「いかに根元的（ラディカル）に疑うか」、その疑う能力こそが班員に要求される資質である。

そうした濃密な「知の空間」「知のアゴラ」あるいは「知の闘争場」を、まさにこの場に創出すること、それもまたこの共同研究が目指すものであり、その空間を創り出すことができれば、目標の大半は達成されたことになる。

班員一覧（班長は除く）

●所内
菊地　暁、坂本優一郎、谷川　穣、中島岳志、藤原辰史

●学外
早瀬晋三（大阪市立大・文・教授）

古代、中世美術と石窟寺院の研究

共同研究

中国美術の図像学

班長◆曾布川 寛

この研究は中国の古代、中世の美術を主に取り扱い、それを図像学の観点から考察する。ここで古代とは先史時代から漢代まで、また中世は三国時代から唐代までをさす。この時代の美術は、後漢時代にインドから伝えられた仏教美術を別にすれば、その資料のほとんどが地下から出土した文物であるので、これらを出土文物として、仏教美術と分けて述べることにする。また特に図像学の方法論を採用するのは、仏教美術も含め、この時代の美術に対してアプローチする最も有効な方法と考えるからである。図像学は、その作品がいかに作られているかという様式よりも、それが何を表しているかという意味内容を追求する学問であるが、この時代の美術作品はその背後に神話伝説や仏教的儀軌などが隠されており、それを解明することなしに作品の理解はありえない。

豊富多彩な出土文物と図像学

中国では考古学による墳墓や遺跡の発掘が盛んに行われ、新しい出土文物が次々と出現している。これらはあたかもタイムカプセルのごとく、後代の人間の手垢に汚されておらず、当時の文化の一端をありのままに開示し、時には従来の認識に対し訂正を迫ることすらある。秦漢時代を例にとれば、陝西臨潼の秦始皇陵兵馬俑坑、西安の前漢景帝陽陵の陪葬坑、湖南長沙の馬王堆漢墓、河北の満城漢墓、広東広州の南越王墓、江蘇徐州獅子山の楚王墓など、枚挙に暇がないほど数多くの大墓が発掘されている。

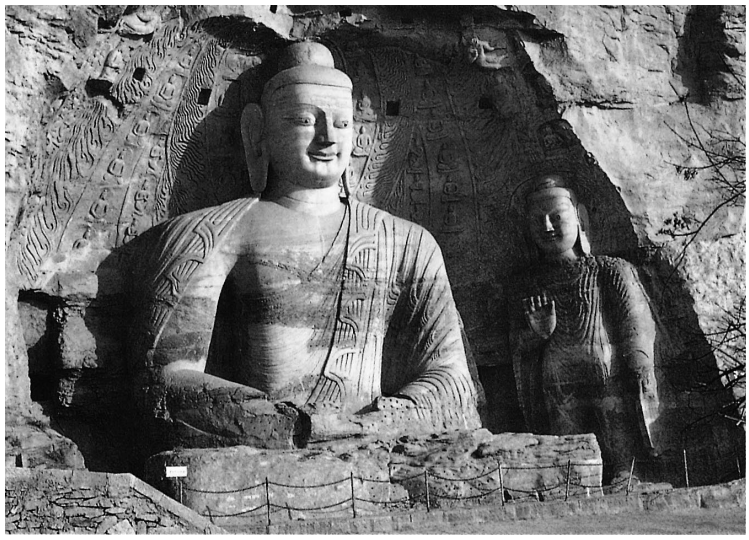
なかでも秦始皇陵兵馬俑坑の場合は、三つの坑に等身大の陶製兵馬俑が七千体余り、極めてリアルに製作され、それぞれ軍陣を組んで整列していた。これこそまさに、戦国乱世の六国を倒し統一した当時最強の軍隊を彫塑という形でまざまざと見せつけるものであった。しかし、せっかくの兵馬俑の出現も、これだけの認識で終わるならば、宝の持ち腐れというほかあるまい。図像学の出番はここからである、この兵馬俑が軍隊であるならば、それは一体どのような性格の軍隊を表しているのか、また膨大な財力と労力とを費やし何を目的に製作したのかを解明しなければならない。そのためには兵馬俑一体一体を厳密に観察するとともに、兵馬俑坑全体、更に始皇帝陵全体としての構想まで考察する必要がある。図像学といえば、平面に描かれた図像や立体の彫像のみと考えがちであるが、兵馬俑坑も始皇帝陵も立派に図像学の対象となりうる。いやおよそ未知の造形的文物は全て図像学の対象となりうるといってもよかろう。こうして図像学の手続きを踏むことにより、この兵馬俑の軍隊が当時の軍制を反映した始皇帝直属の近衛兵であり、始皇帝が創始したという陵寝制度に基づく奇抜な死生観が明らかになるのである。

ほかにも古代、中世の図像学の対象とすべきものは数限りなくある。帛画（絹絵）、漆画、壁画、画像石、画像磚、磚画、線刻画といった絵画類、青銅器、玉器、石や陶による俑といった彫塑類、都城、墓室、祠堂といった建築類などが挙げられる。但しこれらの出土文物で注意すべきは、大部分が墓葬にともなう文物だということである。無論、かって秦や漢の宮殿は壁画や彫像で華麗に飾られていたが、今やそれらはほとんど滅びてしまい、当時の遺物としては墳墓からの出土文物が大半である。これは中国の古代、中世文物を扱う者にとっては、宿命的問題といえる。

総合芸術としての石窟寺院

後漢時代に中国に伝えられた仏教は、後漢末、三国時代には、伝統的な神仙思想に半ば吸収され、仏教美術は未だ小規模かつ稚拙な造像しか行われなかった。しかし時代の進展とともに独立して広範な流行を示

し、貴族、僧侶、時には皇帝をも巻き込んで、大規模な造営活動が行われるようになった。それを端的に示すのが、敦煌、炳霊寺、麦積山、雲岡、龍門、鞏県、天龍山、響堂山などの石窟寺院であり、雲岡、龍門、響堂山などでは皇帝勅願の窟も造営された。またこれら大石窟寺院以外にも、より小規模な石窟は、河北、遼寧、山西、山東、河南、陝西、四川、江蘇、甘粛、新疆などの各地におびただしく散らばっている。奥深い山中での禅観のための窟、都の近くの国家仏教のための窟、或いは仏法を永遠に伝えるための窟と、造られた目的はさまざまであるが、石窟寺院という造像形式がいかに中国仏教に適合し、歓迎されたかがわかろう。もちろん石仏や金銅仏といった単独の仏像も盛んに制作されたが、敦煌莫高窟にみられるように、石窟寺院は単なる仏像彫刻ではなく、彫塑、絵画、建築といった諸ジャンルが一体になった大型の総合芸術である。そこでは当時の広領域の仏教美術が鑑賞できるのみならず、そこに貫かれている施主の仏教観を通して、当時の仏教思想をも垣間見ることができる。



山西省大同の雲岡石窟を代表する第20窟の大佛（高13.4m）。最も早期（460年頃）のもので、前を覆っていた壁が崩れ、過去・現在・未来の三世佛の構成がよくわかる。

このように石窟寺院は図像学にとって恰好の対象といえ、本研究が仏教美術のなかで特に石窟寺院を重視する理由もそこにある。具体的な手続きとしては、まず石窟を構成する個々の像を観察して尊像名を探り、それらが全体として何を表しているのかを解明する。仏像は原則として仏教の経典に説く儀軌に基づいて製作されるものであるが、それ以外にも政変によって中断したり、後世の改変が加えられたり、様々な要素が混入し、その解明はなかなか一筋縄ではいかない。雲岡石窟を例にとれば、この石窟は、戦前に水野清一、長廣敏雄両氏を中心に綿密な調査が行われ、その成果は戦後になって全16巻、33冊にも及ぶ大部な報告書に結実した。けれどもその後、水野、長廣両氏自身によってたびたび訂正がなされたように、各窟の造営時期という様式史的問題を含め、問題はなお山積しているといっても過言ではない。これらの問題を解くためには、美術史のみならず仏教学、歴史学など多くの分野の知識が要求される。また雲岡石窟の造営が北魏前期といった比較的早い時期に行われたことから、インドやガンダーラなどの仏教美術の影響を考慮する必要がある。幸いにも、この班はそれらの研究者にも恵まれており、共同研究にとってふさわしいテーマといえる。

また近年の動きとして、石窟寺院が次々と公開されるようになったのは喜ばしいことである。五胡十六国の北涼時代に開窟されたという武威天梯山を始めとする河西回廊の石窟は、雲岡石窟の研究にとっても重要な意味を帯びている。また四川の安岳や大足などの石窟は主に唐代から宋代にかけて造営され、比較的後代の石窟であるが、インドの後期密教や民間の現世利益的な信仰が流入し、他にみられぬ独特の色彩を帯びている。これらの公開は今後の石窟寺院研究にとっては願ってもない追い風である。

班員一覧（班長は除く）

●所内

大原嘉豊、岡村秀典、金　文京、田中　淡

●学内

宇佐美文理（文学研究科・教授）

●学外

板倉聖哲（東京大・東洋文化研・助教授）
稲本泰生（奈良国立博物館・学芸員）
大内文雄（大谷大・文・教授）
岡田　健（東京文化財研究所・保存計画研究室長）
河野道房（大阪府大・総合科学・助教授）
齋藤龍一（大阪市美・学芸員）
定金計次（京都芸術大・美術・教授）
下野健児（花園大・文・助教授）
鈴木洋保（京都女子大・文・講師）
竹浪　遠（黒川古文化研究所・学芸員）
出川哲朗（東洋陶磁美術館・学芸課長）
外山　潔（泉屋博古館・学芸課長）
中野　徹（黒川古文化研究所・所長）
西林孝浩（立命館大・文・講師）
西上　実（京都国博・資料管理研究室長）
藤岡　穣（大阪大・文学研究科・助教授）
古田真一（帝塚山学院大・文・助教授）
宮崎洋一（広島文教女子大・文・助教授）
山岸公基（奈良教育大・教育・助教授）
山名伸生（京都精華大・人文・助教授）
山中　理（白鶴美術館・学芸課長）
謝　振発（京都大・文・研修員）
厳　雅美（京都大・文・D.C.）
呉　泳三（京都大・文・D.C.）
西尾　歩（大阪府大・人間文化学・D.C.）
吉村富美子（大阪府大・人間文化学・D.C.）

インド往還

共同研究

王玄策研究

班長◆高田時雄

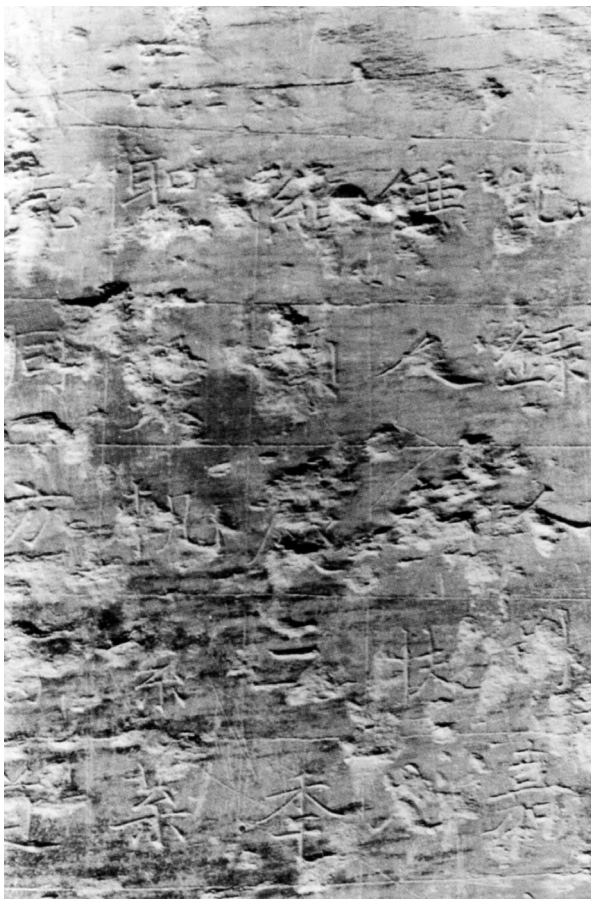
王玄策は謎の多い人物である。7世紀の唐代、彼は生涯に四度もインドへ旅行した。交通の不便な時代に、それだけでも大したことだが、彼は吐蕃の兵を借りインドで戦争をして大勝利を収め、相手の王アルジュナ（阿羅那順）を捕獲すると、長安に連れ帰った。真実がどうであったはともかく、これは正史にも記載されている事件で、根も葉もない絵空事ではなかったであろう。王玄策はまたインドへ行くのに、幹線であったシルクロードを経由しない、いわゆる吐蕃道・ネパール道という路線を開拓し、中国インド間の交通を促進した。王玄策は俗人で外交使節としてインドに往来したのだが、一面仏教の熱心な信者でもあった。ヴァイシャーリー国で維摩の故居を尋ねて、笏で方丈の大きさを測定し、マガダ国では仏足石を写し取り、中国に持ち帰った。それを元にしたレプリカが各地に作られ、信仰の対象となった。仏足石は遣唐使の手を経て日本にも伝わった。奈良薬師寺の仏足石は国宝にもなっている。高宗の時代に、僧尼が君王父母を拝すべきか否かの議論が起こったとき、王玄策は仏教の立場から拝すべきでないことを極力主張した。また砂糖の製法を伝え、長命薬の秘伝をもつバラモンを中国に連れてくるなど、技術移転にも貢献した。要するに、王玄策は唐代初期における中国インドの関係において、三蔵法師玄奘とならぶ重要な存在である。しかし玄奘の『大唐西域記』が今日まで伝わり、貴重な情報源となっているのと比べ、王玄策の著したとされる『中天竺行記』は早く逸してしまったため、そのインド往還の詳細は分からないことが多い。王玄策その人についても、わずかに洛陽の人ということが分かる程度で、生卒年をはじめ、その事績はほとんど不明である。

佚文の収集

さいわい王玄策の旅行記『中天竺行記』の断片（あるいは断片と思われるもの）が諸書に見えている。最初にそれに着目し研究を行ったのは、フランスの仏教学者シルヴァン・レヴィである。レヴィは1900年の『アジア学報』（*Journal Asiatique*）に「王玄策使印度記」（Les missions de Wang Hiuen-ts'e dans l'Inde）を書き、道世『法苑珠林』に見える資料を集成翻訳した。その後、ペリオが『諸経要集』や『集古今仏道論衡』『冊府元亀』の記事を補い、ヒルトが『歴代名画記』の記事を付け加えるなどして資料は次第に増えていった。ここまでは主としてフランスを中心とするヨーロッパ東洋学の業績であったと言えよう。それらを取りまとめたものとして、馮承鈞の「王玄策事輯」が1932年に発表された（『清華学報』8巻1期）。そこに収められた王玄策関係資料はあわせて36条、簡単ながら解説が付され、当時までに知られた関連資料の集大成といえる。我々の研究班では、とりあえず馮氏の資料の順序に基づき、それぞれ原典により関連資料との照合を行い、校訂テキストを作成するとともに、読解と分析とを進めている。1998年に出版された故孫修身氏の『王玄策事迹鉤沈』は、資料の博捜において敬服すべき業績である。新資料も含め、関連情報は細大洩らさず網羅しようとする姿勢が明確で、われわれの研究班でも参考書として常時便利に利用させて頂いている。ただトピックごとに細分された章立ては、重複が多く、且つ前後矛盾する部分もなきにしもあらずで、しばしばその解決に却って時間を空費するようなこともあった。また孫氏は敦煌研究院に居られた方で、議論に敦煌壁画を援用することが多いが、この種の図象資料の扱いは、実は我々にとっては不得手な分野で、今後、虚心に聞くべき部分が多いかも知れない。いずれにせよ孫氏以外にも、近年の王玄策研究の多くが中国学者によって担われているのは注目すべき事実である。

近年の発見

王玄策に関わる近年の一大ニュースは、何と言ってもチベット自治区吉隆県の「大唐天竺使出銘」発見であろう。霍巍氏を中心とする四川大学の考古調査隊がこの摩崖碑を発見したのは1990年6月のことであった。近年建設された水路の浸食によって特に下端部の損傷が激しいものの、「維顕慶三年（658）六月大唐馭天下」に始まる200余りの文字を読みとることが出来る。紛れもなく王玄策当時の実物資料であって、その価値の大きさは疑いようがない。先年、霍氏が我々の研究所を訪問された折、自身で撮影された写真を幾つも披露されたことはなお記憶に新しい。同氏の論文が『東方学報』に掲載され、学界に大きな衝撃を与えたことも、我々にとっては嬉しい出来事であった。碑銘と言うことになると、洛陽の龍門石窟の数多くの造像記の中に王玄策のそれが発見されたことも新展開の一つである。ごく短い碑銘で、且つすでに磨滅して読めない部分があるが、「王玄策□□□□/□□□下及法界/衆生敬造彌勒像/一鋪麟徳二年九/月十五日」と判読される。麟徳二年（665）という年号をもつこの資料は、王玄策の最後の動静を伝えるものでもある。ほかに王玄策の名が現れるものでは、貞観23年（649）12月29日の窖甎銘「和糴副使、左監門長史王玄策」もある。これはすでに陸心源の『唐文続拾』に収録されているものだが、もし確実なものなら、王玄策が第二回の旅行から帰国した年の暮れのこととなる。



「大唐天竺使出銘」の部分

幾つかの課題

さて我々の研究班の課題とする事柄はあらまし以下の通りである。まず第一に、現時点において可能な限り、王玄策に関わるすべての資料の集成を作成することである。そのためには佚文の厳密な校訂を行うとともに、出来る限り個々の佚文間のテキスト継承関係を明らかにすることが重要である。二次的な引用はそれ自身として独自の価値を主張できないことは当然であろう。さらなる課題は、上記校訂テキストに基づき正確な日本語訳と注釈とを提供することである。佚文はすべて断片に過ぎないが、『西域記』などには見えない王玄策独自の情報も少なくないから、一定の貢献は期待できるであろう。さらに会読の過程で浮かび上がった各種の懸案、たとえば王玄策のインド行の回数の問題、果たして四回目の旅行はあったのか否か、また第一回のインド行のルートはシルクロード経由であったのか或いは最初から吐蕃道を利用したのかなど、王玄策のインド往還の実体を出来る限り明らかにしてみたいと考えている。王玄策が辿った吐蕃道はまた吐蕃に嫁した文成公主の歩んだ道でもあり、是非確実なことを知りたいところだが、佚文には一切言及がない。ただ後世の旅行家のルートはやや詳しくわかるので、ある程度の類推は不可能ではないだろう。長命薬の秘伝をもつバラモンの問題も、王玄策の旅行の主たる目的の一であったことからすれば、もう少し立ち入って考察すべき問題であるかも知れない。いずれにせよ課題はいくらも残されている。

班員一覧（班長は除く）

●所内

池田　巧、稲葉　穣、Wittern, C、中西裕樹、船山　徹、真下裕之

●学外

市川良文（龍谷大・非常勤講師）
入澤　崇（龍谷大・経営・教授）
岩尾一史（日本学術振興会特別研究員）
榎本文雄（大阪大・文学研究科・教授）
齊藤隆信（佛教大・文・講師）
辻　正博（滋賀医大・助教授）
Forte, Antonino（ナポリ東洋大・教授）
Vita, Silvio（イタリア東方学研究所・所長）
Palumbo, Antonello（京都大・文・D. C.）

疑古と釈古とのはざまに

中国文明の形成

班長◆小南一郎

20世紀における中国考古学の進展には目を見張るものがあった。19世紀の最末年における甲骨文字資料の発見に引き続き、安陽殷墟遺跡の発掘を通して得られた考古資料は、それまでは伝説でしかなかった殷（商）という時代を、歴史として考察できるものに変えたのである。新中国成立以後に各地で行なわれた発掘は、さらにさかのぼって、殷時代以前にも多くの個別的な文化が存在したことを明らかにし、それぞれの文化の間の時間的な前後関係を確定してきた。少なくとも中原地域においては、新石器文化の初期から歴史時代に至るまでの期間に、どのような文化が、次々と入れ代わりつつ盛衰して来たのかを、年代を追いながら、相当程度にまで具体的に説明することが可能となっているのである。

一方、中国には、古い時代から書き貯められて来た、膨大な量の歴史記録がある。そうした記録の中には、殷周時代以前の歴史に言及する資料も少なくない。春秋時代には、中国の太古に、尭舜などの聖帝の統治する時代があったと信じられており、戦国時期の書物になると、さらにさかのぼって、黄帝、さらには伏羲、神農といった支配者たちが中国を統治した時期があったことが説かれている。こうした歴史記述を、考古学的資料と結びつけて利用することは可能なのであろうか。もし可能であるとすれば、どのような方法を取ればよいのであろう。

文献資料と考古学資料

中国の新石器時代末期から歴史時代に移行する時期の文化を、考古学では、二里頭期、二里岡期、安陽期の三時期に区分して記述している。このうち、安陽期が、殷墟遺跡の時代に相当するのである。この三つの時期区分も、新中国での考古発掘をもとにして作り上げられた年代観であるが、おそらくこの編年に異議を唱える研究者はいないであろう。新しく発見される遺跡や発掘される遺物は、この編年の上に位置づけることが容易であり、そのように位置づけた結果に大きな矛盾が出ないからである。しかし、こうした考古学的な時期区分の上に、たとえば、歴史書に見え、殷王朝の前に存在したとされる夏王朝を位置づけようとすると、途端に問題は紛糾し、さまざまな異説が提出されることになる。

最近では、新石器時代末期の、山西省陶寺遺跡が尭舜の時代に属するものだとする説が、中国で書かれる諸論考の中に、しばしば見られる。そのような想定がなされる手続きを単純化して言えば、次のようなものである。歴史書を使い、年代を逆算してさかのぼってゆくことによって、尭舜の時代の絶対年代を推定する。そのあと、尭舜が活躍したという歴史記述や伝説のある地域の文化や遺跡で、推定された年代と適合するものを探し、その文化を尭舜に関わるものだと判断するのである。もしこの方法を日本の古代史に適用するならば、神武天皇と関係する遺跡や遺物を、弥生（縄文？）時代の文化の中に発見することも可能であろう。

出土遺物を基礎にして考古学の研究が導き出す結論は、特に想像力を働かせすぎたり、理論的な冒険をしたりしないかぎり、客観的な妥当性を備えている。それゆえ、むしろ文献資料を顧慮することなく、考古学を通して得られた知見だけから、中国の文明の起源を記述してみる方が、より確実な古代史を描けるのかも知れない。しかし、幸いにと言うべきか、不幸にと言うべきか、中国には太古の歴史に関する、多くの史料が存在している。文化現象のうち、物質としての形態を持たぬ要素や、たとえ形態を持つものであっても、その材質から、後世に遺物としては遺りにくいものについては、やはり文献資料の記述が、それを考察するに際して、大きな参考となるに違いない。

たとえば青銅器について、純粋に考古学的な方法で形式分類を行ない、それぞれの器形ごとに、出土の位置関係の分析などを通して、その用途を推測するよりも、文献に見える青銅器の名前と対比させて、その具体的な用法を文献記録から知る方が手っ取り早いのである。ただ、文献資料を参照する場合には、それぞれの資料の来歴を詳しく調べ、そうした資料の記述がどの範囲において有効性を持つのかを、厳密に判定する必要があるだろう。多くの文献資料の中から、自説に都合のよいものだけを抜粋してきて、出土遺物と結びつければ、もっともらしい論考をまとめることもできるかも知れない。しかし、現在、中国の古代史研究で求められているのは、なによりも厳密な資料批判であって、安易に出土遺物と文献とを結びつけることには、むしろ弊害が多いのではないだろうか。

二里頭時期の青銅爵（さかずき）　中国における最も古い青銅容器の一つ。軽快で先端を尖らせる造形は、以後の時期の青銅器といささか風格が異なる。

王国維の方法論の検討

この研究班は、中国文明の形成といった大きな名前を掲げてはいるが、中国における文明の形成要因や形成過程について、新しい視点を作り上げることを、必ずしも主要な目的とはしていない（もちろん、そうした方向への可能性を築けるならば幸いだとは思っている）。むしろ、上述のような資料論への検討が、この研究班に集まった多様な分野の人々の、もっともの基礎にある、共通の関心だと言えるのではないだろうか。研究会が個々の班員の研究報告を主体にするのではなく、王国維の『観堂集林』を会読し、その訳注を作る作業を中心にして進められて来たのも、そうした研究班の基本的な性格に由来している（正確にいえば、『観堂集林』を読みますという看板を挙げた研究班に集まってくださった班員たちの関心の中心は、当然のことながら、中国文明形成の謎の解明などにはなく、もっと足が地についた議論を期待していると推測して間違いないだろう）。

王国維は、清朝末年、民国初年の時期に活躍し、中国文化史のさまざまな分野で画期的な成果を挙げた学者であった。その広い学問的関心の中にあって、特に古代史の部面では、新しい出土文物と中国古典に対する深い素養とを結びつけて大きな成果を挙げた。

『観堂集林』にまとめられた諸論考は、そうした成果を凝縮したもので、一つ一つの論考がそれぞれに新しい視野を切り開いている。もちろん王国維が出した結論は、現在から見れば、いろいろと問題がないではない。ただ、問題を的確に指摘し、その問題点をあざやかに解明してみせる王国維の手つきはみごとである。

我々は、王国維の出した結論を信奉するのでもなく、問題解決のあざやかさを賛嘆しようとするのでもない。中国文明の基礎となっている文化的諸要素について、それぞれの特徴をその形成過程の中で考察しようとするとき、出土遺物と文献資料とを重ね合わせて考える必要がある。そうした仕事を、一世紀近くも以前にやって、大きな成果を挙げたのが王国維であった。王国維の論考をじっくり読みなおすことを通じて、その方法論に検討を加え、我々自身の方法論を築きたいと考えているのである。ただ、問題点を見いだすことを可能にしていた王国維の精神の柔軟さと、その論証を支えている中国古典に対する深い素養とには、残念ながら我々は（少なくともわたしは）及びもつかないというのが班長の弱音である。

班員一覧（班長は除く）

●所内

浅原達郎、井波陵一、岡村秀典、佐野誠子、藤井律之、麥谷邦夫

●学外

今井晃樹（奈良文化財研究所）
大川俊隆（大阪産業大・教養・教授）
木島史雄（愛知大・現代中国・助教授）
銭　鴎（同志社大・言語文化・助教授）
泰　小麗（学術振興会外国人特別研究員）
谷口　洋（奈良女子大・文・助教授）
東洋祥丈
仲畑　信（佛教大・非常勤講師）
難波純子（天理大・非常勤講師）
西川利文（佛教大・文・助教授）
間瀬収芳
村田　浩（大阪学院大・非常勤講師）
森賀一恵（富山大・人文・助教授）
山口　円（京都大・文・D.C.）

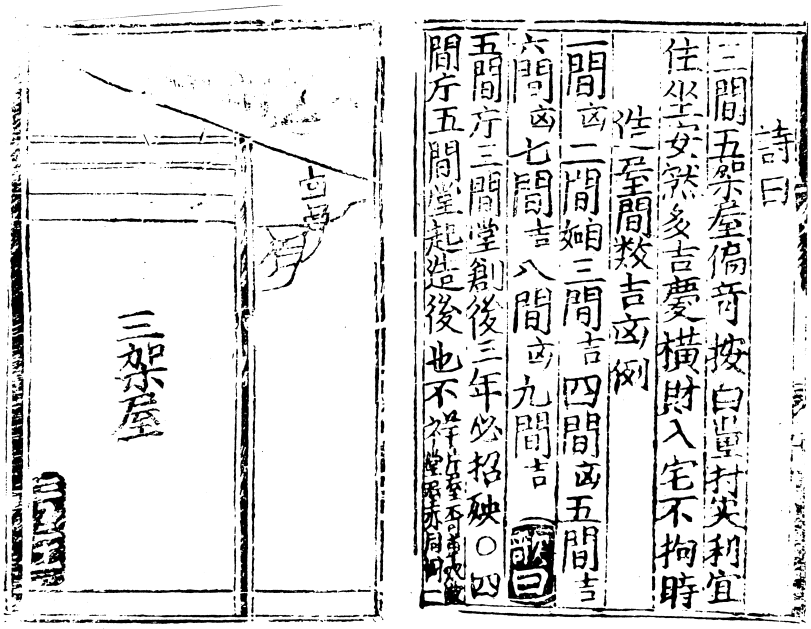
中国の生活空間と造形

住まいと暮らしにみる伝統的中国文化の特質

班長◆田中　淡

私たちの研究会は、中国の伝統的な生活空間とそれに直截的に関わる造形を共通テーマとして措定し、2003年4月からとりあえず２年間という短期間の試験的な共同研究としてスタートした。

「生活空間と造形」という主題は、中国学の方面ではむしろ聞き慣れない部類かもしれないが、具体的にいうと、住まい、都市、宮殿、仏寺、道観、陵墓、庭園、その他、各類型の建築の外部空間・内部空間の造形をイメージしたものである。さらにいえば、住まいそれじたいの根幹の構造だけではなく、あるいは室内の空間構成、主客の座の位置関係、あるいは食事、被服、家具、什器、室内装飾などの暮らしを構成する実体的側面から、衣食住にかかわる諸相をとおして、中国文化特有の要素を模索しようとするのがねらいである。



『魯班経』　明代初期頃の『營造正式』をもとにして清代に彙編された民間の建築技術書。間（正面の柱間の数）、架（梁組を組み重ねる数）の技術的な解説と同時に数の吉凶についての規定も定めている。

住まいと暮らしの伝統的要素

中国の歴史は、一般的にもよく知られるように、ひじょうに古い時代から、近代にいたるまで途絶えることのない厖大な分量の文献史料と相俟って、きわめて精度の高い研究が今日まで蓄積されてきた。ところが、皇帝の宮殿や陵墓における祭祀儀礼の類は別にして、古代の士大夫の住まいに限ってみても、冠婚葬祭のような特殊な儀礼にかかわる部分については特定の文献記載が伝わるとはいえ、それら自身でさえきわめて特殊限定的な目的で記述されたものである。そこから得られるひじょうにかたよった情報には、たとえば実際に古代住居の構造を復元しようとする場合には、その致命的な制約のゆえに著しく歯がゆい思いを強いられるのが実情である。

まして、いま私たちが試みようとしているような、日常生活に関する習俗については、古代から近代にいたるまで、異様なほど文献史料が乏しい。たとえば実際に使用された住居空間や家具の配置、食事や衣服の習慣などは、往時の知識人にとってはそもそも当たり前すぎて、敢えて文章作品に記述する対象とはなりえなかった。元・明時代の日用百科全書や明末清初の文人の著作にようやく断片的な記載が見いだされるにすぎず、また民国年間の風俗研究の一部にようやく著述されるにすぎない。

中国の歴史上の住宅にかんする簡潔な概説書としてよく知られる劉敦楨『中国住宅概説』（1957。邦訳『中国の住宅』）と、劉致平『中国居住建築簡史―城市、住宅、園林』（1990。前者と同様に解放前後の蒐集資料にもとづく原稿を、著者の没後に出版）の両著

は、いまなお数少ない住宅史の先駆的研究に数えられるだろう。しかし、宮殿や仏寺・道観にかんする文献的研究の境地を拓いたことで知られる両先生をもってしても、この分野に限っては、豊富なフィールドと文献の蓄積とを容易く噛み合わせることはできなかったという事実が、何よりもこの領域の研究の難度を示唆していたのである。

その一方、中国全土、各地に残る伝統的住居―日本流にいうと古民家―については、『浙江民居』『雲南民居』『吉林民居』『窯洞民居』のような地方や類型を冠した概説書が1980年代半ば以降出版されてきたが、これらのもとになった調査はほとんど文革前の50年代末から60年代前半にかけて実施されたものであるから、それじたいが現在では貴重な資料となっている。そうした成果をうけて、今日でも、とくに建築学の領域では、中国大陸各地に現存する伝統的住居にかんする調査研究はきわめて盛んに続けられており、研究水準の問題は別として、発表論文点数からいえば、近代建築史とともに圧倒的に他の領域を凌駕しているほどである。しかし、その活況は、歴史研究とはまったく脈を通ずるところがなく、両劉先生以降、両者の成果は交叉することがないままであるのが実態である。

生活空間研究の試み

この研究班では、実際には中国大陸のみに対象を限定することはせず、また建築そのものに限定せず生活空間として対象を設定し、中国学の他の分野、および東アジア、周辺地域の専門家の参加を得て発足した。共同研究としては、上に述べたような研究方法そのものの制約からの解放を目指し、文献学・フィールドワーク・民族学・民俗学と連携しながら、時代も敢えて限定せずに前近代中国をひろく対象として伝統的要素を模索してゆく。すべては白紙の状態からのスタートであるが、私たちには、少なくとも周辺地区あるいは関連分野をも含めれば、フィールド・ワークの経験の豊富な班員も多いし、また文献学の専門家の力強い参加もある。さらに、これまでの共同研究を通じて、技

国宝唐招提寺金堂修理工事現場参観（2003年5月13日）。

術史における伝統的要素の抽出、少数民族地区への漢文化の広がり、その他の具体的な諸相に直結する蓄積があることは、私たちの研究班にとっては有利な条件として作用するであろうと信ずる。その一方で、主題の特性を考慮して、人文研の共同研究だからといって文献に偏重しないように、奈良や京都の修理工事や発掘調査の現場参観の機会も並行して設けてゆく。

班員共通の会読テキストには明末清初の人、方以智撰『通雅』巻38宮室をとりあげる。この書物の宮室篇は、古代以来の字書のそれのように、重要な、あるいは正統的な概念・用語だけではなく、『営造法式』などの建築技術書に特有の専門術語でもなく、むしろ見逃されがちではあるが専門用語ではなく一般に用いられてきた、住空間にかかわる語彙を拾遺した特異な字書である。私たちの研究にヒントをあたえてくれるだろうことを予測してのことである。

中国学としても人文研の共同研究の主題としても、すべて初めての試みではあるけれども、さまざまな専門領域の班員による、フィールドでの成果の検討と、文献の解釈とを通じて、新たな研究の可能性が少しでも見えて来ることをひそかに期している。

班員一覧（班長は除く）

●所内

曾布川　寛、高井たかね、武田時昌

●学内

伊従　勉（人間・環境学研究科・教授）
西垣安比古（人間・環境学研究科・助教授）
山岸常人（工学研究科・助教授）

●学外

渡部　武（東海大・文・教授）
福田美穂（種智院大・非常勤講師）
浅川滋男（鳥取環境大学・環境デザイン・教授）
川本重雄（京都女子大・家政・教授）
黄　蘭翔（中央研究院台湾史研究所・副研究員）
佐藤　実（金沢大・非常勤講師）
白幡洋三郎（国際日本文化研究センター・教授）
外村　中（ヴュルツブルク大・講師）
中島長文（神戸市外大・外国語・教授）
中原健二（佛教大・文・教授）
箱崎和久（奈良文化財研究所・研究員）
細谷　豪（大阪成蹊大・非常勤講師）
堀尾尚志（神戸大・生産環境情報・教授）
吉田雅子（武蔵野美術大・非常勤講師）

儒仏道三教交渉の諸相

三教交渉の研究

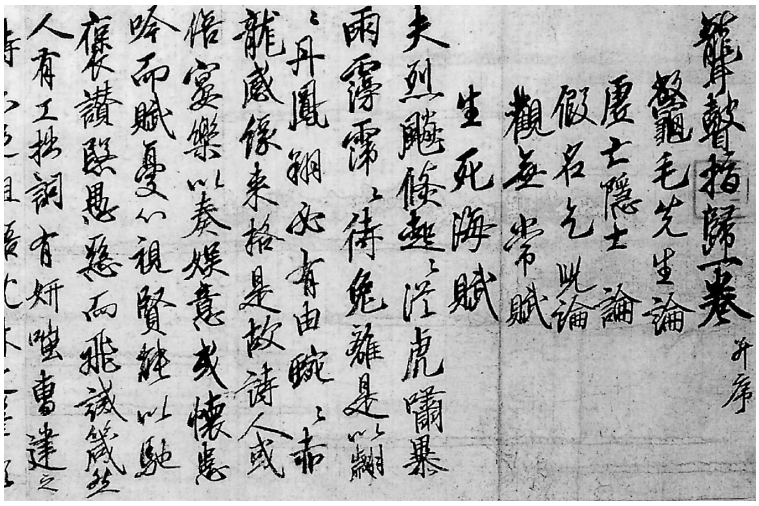
班長◆麥谷邦夫

中国には、主要な宗教が五つ存在する。儒教、仏教、道教、回教、キリスト教である。このうち後二者が普及したのはかなり遅いのに対して、前三者は紀元二世紀後半からさまざまな形で互いに交渉をもちつつ、中国の社会や文化に大きな影響を与えてきた。この三者の相互交渉を称して三教交渉という。

儒教は、孔子によってその基礎が確立された先秦諸子百家のひとつ儒家に起源する。儒家はもともと宗教というより学派というべきものであるが、宗族の間の祖先祭祀や天帝信仰を核とする国家祭祀にかかわる儀礼を重視していた。漢代に入ると、専制国家を支えるイデオロギーとしての地位を確立するとともに、国家祭祀の主要な担い手としてその宗教性を強めて儒教と称されるようになった。仏教は、西域や南海を経由して紀元前後に中国に伝播したと推測されている外来宗教であり、中国社会に根づき始めるのは紀元二世紀に入ってからである。道教は、二世紀末に張角や張陵といった民間の宗教指導者を中心に、古代からのさまざまな呪術や民間信仰を核に形成された教団道教と、秦の始皇帝や漢の武帝が熱心に追求した神仙術の流れを汲むものとが、やがて仏教の影響下に独自の教理と教団組織を形成してきたものである。この三者には、仏教が明確な教祖を有するのに対して、儒道二教は明確な教祖をもたず、中国古代の思想・信仰や習俗などをもとに徐々に歴史的に形成されてきたという違いが存在する。

三教の争い

高度の文明社会を築いていた古代中国に、外来宗教である仏教がもたらされたとき、そこにさまざまな摩擦が生ずるのは避けがたいことであった。仏教が当時の中国人に与えた最大の衝撃は、三世応報の輪廻の思想であったといわれる。しかし、より具体的な問題として仏教批判の的とされたのは、僧侶の出家、剃髪の制であった。儒教の教えでは、子の親に対する最大のつとめは、親が生きている間は親への孝養を尽くすことであり、親が死んだ後は祖先としての祭祀を欠かさないことであった。仏教僧侶の出家の制は、親を捨てて顧みず、子孫を残さずに祖先祭祀を絶やすことにほかならないと考えられ、儒教の教えを根本から否定するものと非難されたのである。また、儒教の重要な徳目である「孝」を専らに説く『孝経』の冒頭には、「身体髪膚、之れを父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝



『聾瞽指帰』（後の『三教指帰』）は、鼈毛先生、虚亡隠士、仮名乞児がそれぞれ儒道仏を代表して議論を闘わせ、仏教の優位を説き明かす書。若き日の空海の代表作。

の始めなり」とあるように、父母から受けた自己の身体を傷つけないことは、「孝」の第一歩とされる。仏教僧侶の剃髪の制もまた「孝」の徳目を根本から否定するものとみなされたのである。かくして、仏教が中国社会に根づき始め、中国人の僧侶が増えだした魏晋以降、この二点に対する儒教の立場からの激しい攻撃が仏教に加えられるようになる。

さらに、僧侶が日常的に朝廷に出入りするようになると、世俗の権威を認めず仏のみを唯一の帰依対象とする仏教は、僧侶が親や皇帝を拝礼すべきかどうかという問題をめぐって、皇帝を頂点とする儒教国家体制との間で激しい軋轢を生じ、「僧尼不拝君親」の論争を闘わすことになる。また、次第に力をつけ始めた道教の側からは、中華の聖人の教えを信ぜずに、夷狄の教えである仏教を信奉することの非を弾劾する「夷華論」が南斉の顧歓によって著され、仏教徒との間に激しい論争を捲き起こした。この他にも、神（魂魄）の不滅と転生を説く仏教に対して、儒教の立場からそれを否定する范縝の「神滅論」をめぐる「神滅不滅」の論争が著名である。

三教論争の記録

こうした三教の間の論争は、魏晋南北朝から隋唐にかけて何次かの高潮を重ねつつ絶えることなく繰り返されてきた。長期にわたる三教論争の経過を仏教擁護の立場から最初に記録したものは、梁・僧祐の手になる『弘明集』十四巻である。唐代に入ると、道家の祖とされる老子（李耳）と同姓である唐王室は、老子こそみずからの祖先であると唱えて道教庇護の姿勢を見せた。これを契機に、王室の庇護を背景に勢力を拡大しようとする道教側とそれに危機感を募らせた仏教側との間の論争が一気に激しさを増した。そこには、教義に関する真剣な論争から単なる誹謗中傷、揚げ足取りに類するものまで、ありとあらゆる論難が見出される。唐の道宣が、『弘明集』の後を補うものとして『広弘明集』三十巻と『集古今仏道論衡』四巻を、同じく玄嶷が『甄正論』三巻を、同じく法琳が『弁正論』八巻と『破邪論』二巻を編んで仏教擁護の立場を発揚し、この時期の三教論争の様相を伝えているのは、かかる歴史的背景によるものである。これらはいずれも仏教擁護の立場からの偏った記録であるという制約はあるが、今となっては貴重な資料であることに違いはない。本研究所における三教交渉の研究はこれらの資料の会読からスタートしたのである。

三教交渉から見えるもの

三教交渉の過程は、互いを非難しあう論争ばかりであったわけではない。とりわけ道教は仏教教理の多大な影響を受けて自己形成を遂げてきたのであるが、仏教もまた儒教や道教の影響を受けて、インド仏教とは似て非なる中国仏教へと変貌してきたのである。この過程で、互いに相手のどのような部分を受容し、どのような部分は受容しなかったのか、その結果、それぞれがどのように変容していったのか。その過程を分析することによって、ふたつの大きな文明それぞれの本質を明かにする手懸りが得られよう。この研究班の目的は、上記の三教論争関係の資料をはじめとするさまざまな資料をもとに、三教交渉の諸相を分析することを通じて、中国の思想・宗教ひいては中国文化そのものの本質がいずこにあるのかを明かにすることである。このような作業の先には、中国を経由して仏教を受容してきた日本文化の本質もおのずから垣間見えてくるに違いない。本研究所では、これまで長期にわたって『弘明集』や『広弘明集』などの会読を進めてその成果を世に問うてきた。その基礎のうえに、本研究班は少しく目を道教側から見た三教交渉の諸相に転じ、六朝隋唐以降現在に至るまで江南の一大道教聖地であり続けた江蘇省茅山に関わる資料集である元・劉大彬編の『茅山志』、その巻二十以下に載せられた金石資料の会読を進めている。

班員一覧（班長は除く）

●所内

Esposito, M.、金　文京、小南一郎、佐野誠子、船山　徹、古松崇志

●学内

宇佐美文理（文学研究科・教授）

●学外

吾妻重二（関西大・文・教授）
神塚淑子（名大・文・教授）
亀田勝見（福井県立大・助教授）
厳　善炤（京都府立大・医・非常勤講師）
古勝隆一（千葉大・文・助教授）
坂内栄夫（岐阜大・教育・助教授）
都築晶子（龍谷大・文・教授）
礪波　護（大谷大・文・教授）
深澤一幸（大阪大・言語文化・教授）
松村　巧（和歌山大・教育・教授）
三浦國雄（大阪市立大・文・教授）
藤井京美（京都女子大・文・非常勤講師）
山田　俊（熊本県大・総合文化・教授）
横手　裕（東京大・文・助教授）
秋岡英行
池平紀子
閻　淑珍（京都大・人環・D.C.）
垣内智之
孫　路易
畑　　忍（大阪市立大D.C.）
山田明広（関西大・文・D.C.）

過渡期の文字資料を読む

共同研究

三国時代の出土文字資料

班長◆井波陵一・冨谷　至

本研究班は辺境出土簡の研究班の後を受け、三国時代の出土文字資料を会読している。中心となる資料は三国時代の簡牘と石刻ではあるが、漢代の辺境出土の文字資料についても引き続き研究を行っているので、三国時代の出土文字資料について触れる前に、我々が取り扱おうとしている辺境出土簡について簡単に述べておきたい。

前回の研究班で主な会読資料としていたのは、敦煌馬圏湾出土の漢簡であったが、その馬圏湾の東に位置する漢代の駅亭の遺跡から２万枚以上の木簡が発見された。出土した木簡の中に含まれていた封検から、駅亭が懸泉置という名前であることが分かった（漢代の文献資料中には懸泉置に関する記載はない)。またそこから出土した文字資料は木簡だけにとどまらない。官署の壁には前漢最末期、平帝元始５年（５）の「使者和中所督察詔書四時月令」が墨書されていたのである。漢代の詔書の頒布プロセスを知る上で、また、現実に施行されることが期待された四時月令と『呂氏春秋』『淮南子』『礼記』など文献資料に見える月令と比較をする上で非常に重要かつ貴重な資料である。また、これまでの辺境出土簡が軍事施設から発見されたのに対し、懸泉置漢簡は駅伝施設という純然たる行政施設から出土したものであり、漢代の駅伝制のみならず、行政制度を解明する大きな手がかりとなるであろう。さらに、当研究班の班員であり、懸泉置の発掘を担当された何双全・柴生芳の両氏からも有意義な情報を得ることができた。図版が出版され次第、懸泉置漢簡の会読に取りかかる予定である。

さて、三国時代に話を戻すと、この時期の主な出土文字資料である簡牘・石刻の両者とも過渡期にあることに注目する必要がある。まず簡牘に関していうと、書写材料を紙が占める割合が増加する。より厳密に言うと、竹簡にかわって紙が用いられる様になり、簡牘は次第にその姿を消していく。一方の石刻に関しては、建安10年（205）に曹操が立碑を禁じたため、地上での立碑が減少し、かわって地下に埋めることを目的とする墓誌が盛んに作られるようになる。墓誌の形式が完成するのは南北朝時代の北魏においてなので、三国時代は墓誌形式の形成期と捉えることができる。

上尊号碑の碑額。この碑、及び、これに続く受禅碑において漢魏交替が高らかに宣言される。三国時代の幕開けを飾る石碑である。

この、竹から紙へ、また地上（墓碑）から地下（墓誌）へという、過渡期の文字資料を読む上で、簡牘資料の方ではまたとない好材料が出土した。1996年、湖南省長沙市走馬楼の古井戸跡から、三国呉の簡牘が発見されたのである。出土地の名をとって走馬楼呉簡と呼ばれるこの簡牘の総数は10万枚以上にも及び、内容も租税関係・司法関係の文書、長沙郡に所属する官吏の名籍など多岐に及ぶ。

枚数や内容もさることながら、我々が関心を寄せたのは三国時代という簡牘と紙の併用時期において、簡牘はどの様に用いられていたかという点であった。

持たざるものとして

走馬楼呉簡の中で最初に出版されたのは嘉禾吏民田家莂と呼ばれる木簡の図版で、莂とは『釈名』に

　莂、別也。大書中央破別之也。

とあって、二つに割ることを前提にした木簡と考えられる。州郡吏及び庶民の姓名と所有する田の総畝数、旱地と収穫があった地の畝数、規定により納めた米・布・銭の額、納付先の倉吏・庫吏の姓名、納付の年月

日が記載内容であった。要するに納税証明書の控えである。そのため記載内容はほぼ一定しており、数も、嘉禾四年（235）と５年の２年分、2000枚程度しかなかった。これをもとに研究班において何度か研究報告を行ったのだが、熟田・余力田・火種田などといった、吏民田家前に見えるタームの語義を確定させようにも、比較材料となるはずの他の走馬楼呉簡が日本ではまだ見ることができないため、書式からアプローチするほか無かったのである。

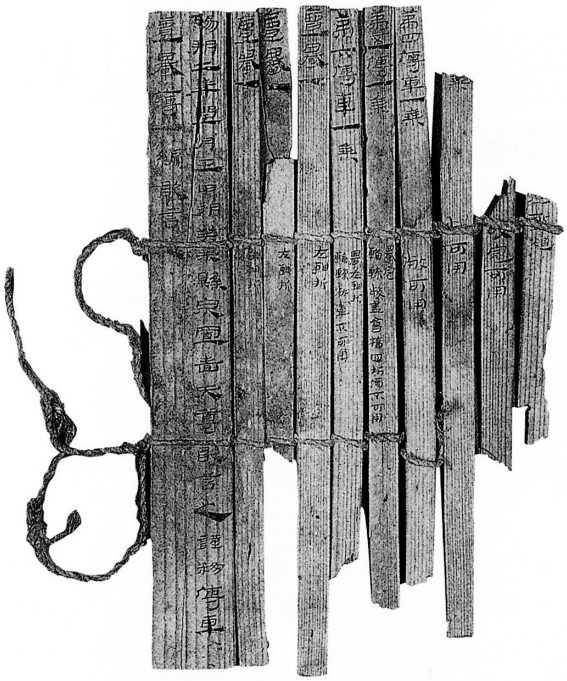
幸いにして、2001年の夏、長沙において国際簡牘学会が開かれた際、湖南省博物館において吏民田家前の実物を、ごく一部、ショーウィンドウ越しではあるが目にすることができた。図版からは知り得ない木簡の厚み、及び加工処理がなされておらず、ささくれだったままの切断面を見て、形態から吏民田家前を把握し直す必要性を痛感した。

現物を実見できず、図版に頼るしかないというのは、日本の中国簡牘研究が有する非常に大きな弱点である。走馬楼呉簡に限らず、今後も様々な簡牘が出土するであろうが、日本では恐らく文字の解釈のみに終始してしまうのではないか。とりわけ数も多く、内容も豊富な走馬楼呉簡の研究ではその傾向が非常に強くなるだろう。

しかし、簡牘はあくまで考古遺物なのであって、形態以外にも、書式や書体、墨色など様々な角度から分析されねばならない。特に走馬楼呉簡に関して言えば、三国時代が簡牘と紙の併用時期であることを常に念頭に置かないと、走馬楼呉簡の本質は把握されないだろう。ただ、我々としては、走馬楼呉簡の図版が着実に出版されるのを期待しつつ、現物を持たざるものとしての方法論を模索するほかはない。

語彙変化と文献資料

一方の石刻に対しては、当研究所所蔵の文字拓本に注釈を施して、『漢代石刻資料集成』の続編に当たるものを作成し、またその成果を当研究所のホームページ上において公開しつつある。



元朔２年（前23）懸泉置伝車亶輿簿。漢代の文書行政を解明する上で大きな手がかりを与えてくれる資料である。

先述した様に三国時代の石刻は立碑の禁が原因で、漢碑の様に立派なものは影を潜め、次第に小型化していくし、刻される字体も隷書から楷書への移行期に当たる。石刻の形態や字体の変化は大変興味深く、また、先行研究も充分に蓄積されている。注目したいのは、漢碑と微妙に異なる語彙である。そのため思いがけない資料とつきあうことになってしまった。

その資料とは『蔡中郎集』である。我々が語句の出典を捜しているとき、四字句などは漢碑を著録した『隷釈』からよりも『蔡中郎集』から見つかることがしばしばある。『蔡中郎集』は、後漢末の文人蔡邕の文集であり、彼が撰した碑文などが多数収められているのだが、一部が散逸してしまったため、現行本には「劉鎮南碑」など、明らかに蔡邕本人の作品ではないものが混入しており、そのまま出典として引用することがためらわれるのである。

恐らく、三国時代において『蔡中郎集』は碑文用のマニュアルとして用いられていたのであろう。今後、『蔡中郎集』のどこまでが蔡邕自身の手になるものか見極め、また、その性格を考慮しつつ、作業を継続したい。

班員一覧（班長は除く）

●所内

藤井律之、宮宅　潔、矢木　毅

●学外

大川俊隆（大阪産業大・教養・教授）
門田　明（ノートルダム女学院高等学校・教諭）
佐藤達郎（大阪樟蔭女子大・助教授）
杉本憲司（佛教大・文・教授）
角谷常子（奈良大・助教授）
鷹取祐司（梅花女子大・非常勤講師）
高村武幸（日本学術振興会特別研究員）
竺沙雅章（京都大・名誉教授）
陳　　波（関西大・非常勤講師）
辻　正博（滋賀医科大・医・助教授）
永田英正（京都大・名誉教授）
藤田高夫（関西大・文・助教授）
吉村昌之（御影工業高等学校・教諭）
米田健志（日本学術振興会特別研究員）
目黒杏子（京都府立大・D.C.）
杉村伸二（関西大・文・D.C.）
鷲尾祐子（立命館大・文・D.C.）
森谷一樹（京都大・文・D.C.）
山口正晃（京都大・文・研修員）
保科季子（京都大・文・D.C.）

中国近現代史研究の国際拠点

20世紀中国の社会システム

班長◆森　時彦

20世紀の中国は、義和団事件による8カ国連合軍の北京占領から辛丑条約締結への過程で幕を開け、世紀もおしつまった最後の段階において、まず香港がイギリスから返還され（1997年）、ついで澳門がポルトガルから返還された（1999年）後に幕を閉じた。激動の世紀は、欧米列強および日本の侵略に対する戦いにその前半のほとんどを費やし、後半は半世紀の歳月をかけて漸く所期の目的を達成したのである。

このような対外関係あるいは政権のあり方からみると、20世紀の中国はあきらかに1949年における中華人民共和国の成立をもって二つの時期に画される。しかし半面、その基底にある社会生活に目をむけると、この年を境に截然と二つの世界に分かれるわけではないことも、また容易に了解できる。「20世紀中国の社会システム」共同研究班は、20世紀のまるまる100年の間に、中国社会はどう変わったのか、あるいはどう変わらなかったのかという問題を、政治、経済、文化などさまざまな側面から解明しようとする試みである。

中国近現代史の共同研究

中国古典の文献実証主義的な研究に重きをおいてきた人文科学研究所東方学研究部では、中国近現代史の共同研究は比較的歴史が浅い。公式には小野川秀美、島田虔次両先生が1966年に組織された「辛亥革命の研究」班を嚆矢とするが、その前史として孫文ら革命派の結成した中国同盟会の機関誌『民報』を輪読する会があった。伝統的な王朝体制の崩壊をもたらした辛亥革命をテーマにとりあげ、しかもその研究の前提となるグルントを形成するために、当該時期のもっとも重要な文献資料を班員全員の分担で精読し、その成果を『民報索引』上・下（1970-72年刊）に凝集したこの研究班の足跡は、以後の中国近代史研究班の雛形となる。その視点はつねに古典的な中華世界の延長線上において近代の諸相をとらえることに注がれ、かつその方法も東方部の古典研究で培われた厳密な文献実証主義の手続きを遵守してきた。

以来、四半世紀以上の間、近代史研究班は辛亥革命とそれに続く五四運動、国民革命など、伝統社会から近代社会への転換の画期となった出来事をテーマにとりあげ、その前後の時期を多角的、集中的に研究する方式で運営されてきた。このような時代横断的な方式による研究班の嚆矢は、1988年から93年にかけて進められた「1920年代の中国」研究班であった。

この間、1975年には念願の現代中国部門が設置され、竹内実先生が「現代中国の政治過程と民衆の意識」、「現代中国の社会と文化」、「転形期の中国」などの研究班を組織して、中国現代史の共同研究に着手された。

境界を越えて

その後1993年4月から、近代史研究班は広領域型（ジェネラル班）と一点集中型（スペシャル班）との両輪で運営されることになった。スペシャル班の方は、狭間直樹先生が「梁啓超の研究―その日本を媒介とした西洋近代認識について」というテーマで研究班を組織し、中国近代における最大の啓蒙家である梁啓超を通して、明治日本に受容された西洋近代学説が清末民初の中国社会に再輸出される知のルートを解明する研究に乗り出された。1997年3月に4年の期間を終えたこの研究班は、『共同研究　梁啓超―西洋近代思想受容と明治日本』（みすず書房　1999年11月刊。2001年3月には北京の社会科学文献出版社から中国語版出版）と題する報告論文集を出版した後も、島田虔次先生の遺志を継いで、丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』（上海人民出版社　1983年）の翻訳・校注という大事業を続け、ついに2004年１－９月隔月で全５巻の日本語訳を岩波書店から刊行するまでにこぎつけた。

中国近現代史の共同研究班が出版した報告論文集、資料集など

いっぽう森は、関西一円のさまざまな分野の研究者を広く募って、ジェネラル班を組織することにした。従来の時代横断的なテーマ設定に代えて、中国近代史をロングスパンで縦断的に切開でき、かつ近代の中国社会を通観するだけではなく、さらに前近代あるいは現代との繋がりをも視野にいれながら、21世紀にまでおよぶ中国史全体の流れの中で近代史をとらえることができるようなテーマ設定が理想であった。これらの条件をクリアするテーマとして最初に取り組んだのは、「中国近代の都市と農村」であった。この研究班は、1993－98年の5年計画で進められ、2001年3月に同名の報告論文集を出版した。その後、1998－2003年の5年間にわたって組織されたジェネラル班は、「中国近代化の動態構造」であった。この研究班も、2004年2月に同名の報告論文集を出版して、計画期間を無事終えることができた。

これを継いで組織した「20世紀中国の社会システム」研究班は、2003－08年の5年計画で進行中であり、広領域型の第三段ということになる。しかしこの研究班は、近代史研究班が暗黙のうちに研究対象時期の下限としてきた1949年という境界を乗り越えて、現代史の領域にまで踏み込む共同研究を進めている。中国近代史と現代史の融合が如何なる新しい研究成果を生みだすのか、4年後には出版されるであろう報告論文集に期待していただきたい。

世界の第一線

中国近現代史の共同研究班は、当面の研究プロジェクトを推進するグループであると同時に、関西一円の中国近現代史研究者にとっては、最先端の研究動向を感知して情報交換するパイロットセンターであり、さらに研究に必要な最新資料を提供するドキュメンテーションセンターでもある。

そのような機能を充実させるため、近現代史研究班では一貫して国際的な協力関係の構築に努力を傾けてきた。外国人研究員（客員教授）では、中国人民大学の戴逸、中共中央文献研究室の金冲及、フランス国立科学研究センターのマリアンヌ・バスティド＝ブルギエール、中国社会科学院近代史研究所の王学荘、楊天石、台湾中央研究院近代史研究所の林満紅などの諸先生、そのほかにもカナダ・ヨーク大学のジェローム・チェン、合衆国・カリフォルニア大学のジョシュア・フォーゲルなどの諸先生に、3－6ヶ月の期間研究班に参加いただき、さらに多数の招聘外国人学者あるいはゲストスピーカーにもお越しいただいて、国際的な共同研究の実績を積み重ねてきた。また最近は中央研究院近代史研究所と学術交流協定を締結し、研究者の交換を含む幅広い国際交流をいっそう強化する体制を整えている。

さらに人文研の共同研究が蒔いた問題意識の種を引き継いで、1995年にはフランスのガルシーで、98年には合衆国のサンタバーバラで国際会議が開催され、結実をみたことも特筆に値する。世界の中国近現代史学界において、人文研の共同研究班は新しい研究の方向をリードする使命も帯びているのである。

班員一覧（班長は除く）

●所内
石川禎浩、岩井茂樹、緒形　康、
籠谷直人、金　文京、村上　衛

●学内
江田憲治（人間環境学研究科・教授）
高嶋　航（文学研究科・助教授）

●学外
陳　来幸（兵庫県立大・商経・教授）
井上充幸（総合地球環境学研・非常勤研究員）
岡本隆司（京都府立大・文・助教授）
片山　剛（大阪大・文・教授）
金丸裕一（立命館大・経済・助教授）
蒲　豊彦（京都橘女子大・文・助教授）
川井　悟（プール大・国際文化・教授）
川尻文彦（帝塚山学院大学・文・助教授）
菊池一隆（大阪教育大・教育・教授）
楠原俊代（同志社大・言語文化・教授）
小島泰雄（神戸市外大・外研・助教授）
小浜正子（日本大・文理・教授）
佐藤仁史（滋賀大・教育・助教授）
柴田哲雄（愛知学院大・教養・講師）
滝田　豪（大阪国際大・法政経・講師）
竹内理樺（近畿大・文芸学部・非常勤講師）
中島勝住（京都精華大・人文・教授）
中村哲夫（神戸学院大・人文・教授）
箱田恵子（京都大・文・COE研究員）
浜田直也（奈良育英高等学校・教諭）
濱田麻矢（神戸大・文・助教授）
吹戸真実（京都大・文・COE研究員）
弁納才一（金沢大・経済・助教授）
細見和弘（立命館大・経済・非常勤講師）
三宅康之（愛知県立大・外国語・助教授）
森　紀子（神戸大・文・教授）
林原文子（関西外大・外国語・助教授）
若杉邦子（仏教大・文・助教授）
糸山大樹（大阪大・文・D.C.）
大坪慶之（大阪大・文・D.C.）
梶原　真（大阪大・文・D.C.）
亀島さち（京都大・文・D.C.）
久保純太郎（神戸大・文化学・D.C.）
田中　剛（神戸大・文化学・D.C.）
田辺章秀（京都大・文・D.C.）
早川　敦（京都大・文・D.C.）
松尾直子（奈良女子大・文・D.C.）
宮原佳昭（京都大・文・D.C.）

漢字、テキスト、そしてテキスト処理

共同研究

漢字情報学の構築

班長◆安岡孝一

旧来の情報科学において、テキストは、文字の一次元のストリームとして表現されてきた。文字はそれぞれ、一定長のビットパターンすなわち文字コードで表現されている。つまり、鑽孔テープでテキストをやりとりしていた時代――ひとまとまりの鑽孔パターンが文字であり、それを一次元に並べたものがテキストであった時代――を、いまだにひきずっているのである。

しかし、現実のテキスト、特に漢字で書かれたテキストは、一次元のストリームで表せるようなそんなナマやさしいものではない。表題や各章の題目、そして版心に記された文字、なんてのは一次元のストリームからハズレた構造である。あるいは、割注やルビなんていう局所的な構造も一次元では表しえないし、漢字自身の持つ意味論的な重層性――異体字と言い換えればわかりやすいだろうか――も、そもそも一次元的ではありえない。

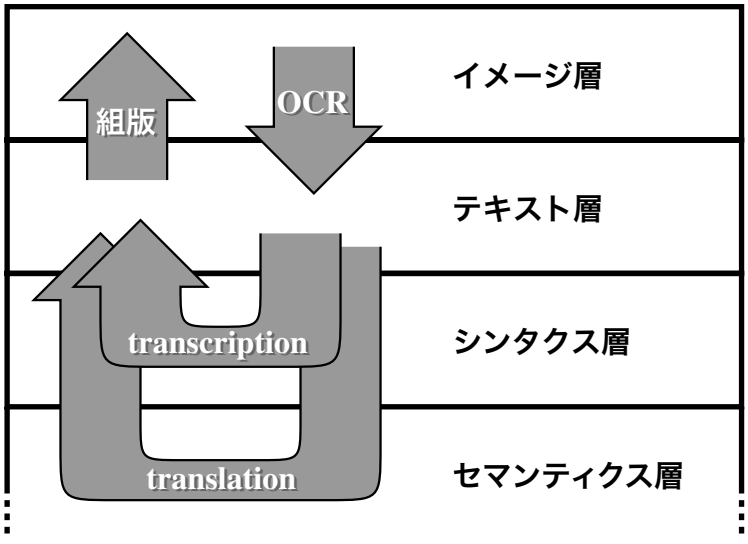
そんな、ある意味タチの悪い漢字テキストを、とにもかくにもコンピュータというマナイタの上に載せて、テキスト処理できるようにしてやろう、というのが、漢字情報学の主眼である。

テキスト情報階層モデル

しかし、一口に「テキスト処理」と言うが、テキストに関する処理は様々である。マークアップは言うに及ばず、組版、形態素解析、OCRなど、テキストにまつわる様々な処理が、テキスト処理の名の下に、ジッパひとからげにされているのが現状である。これらのテキスト処理を交通整理するために、本共同研究班では、テキスト情報階層モデルなるものを、まずはデッチ上げてみた。

テキスト情報階層モデルは、イメージ層、テキスト層、シンタクス層、セマンティクス層の4層から成る。漢字文化の伝統にのっとって、画像層、文字列層、文脈自由層、意味層と呼んでもいいのだが、テキストは文字列なのか、とか、文脈自由ってのはチョムスキーなのか、とか言われそうなので、カタカナでゴマカしておいた。このモデルによれば、組版はテキスト層のデータをイメージ層のデータに変換する処理であり、OCRはその逆である。あるいは、transliterationはテキスト層内部での処理、transcriptionはテキスト層からシンタクス層を通ってまたテキスト層に戻ってくる処理、translationはテキスト層からセマンティクス層に行って戻ってくる処理、なんて言ってみるのもいいだろう。形態素解析はテキスト層からセマンティクス層への変換を目した処理だし、N-gramはそれ自体はシンタクス層どまりである。

もちろん、このテキスト階層情報モデルは万能なものではなく、これを使った場合の問題も多そうである。特にマークアップ技法に関しては、このモデルでは、



テキスト情報階層モデル

どうもうまく説明がつかない。現代の代表的マークアップ技法であるXMLは、このモデルで言えばセマンティクス層からイメージ層まで幅広く扱おうとしているものであるため、逆にこのモデルに乗らないのである。とりあえず本共同研究班では、テキスト処理を分類するための目安として、テキスト階層情報モデルを使ってみよう、という流れになってきている。

漢字をコンピュータ上でどう表現するか

テキストが基本的に文字で構成されている以上、コンピュータ上で文字をどのように表現し、どのように処理するか、という問題を考察する必要がある。漢字に限って言えば、漢字の形音義を、どのようにコンピュータに載せるか、ということになる。

旧来の情報科学では、まず漢字の集合を考え、その集合の各漢字に対して文字コードを割り当てる、というやり方をとってきた。ここでいう漢字の集合とは、漢字の形の集合を意味する。つまり、形を先に規定しておいた上で、形に振られた文字コードに対して音や義を割り当てるのだが、音義は文字コードの領分ではなく、もっぱら使用者の便宜に応じて割り当てればよい、という立場である。しかしこのやり方では、常に漢字の形の集合を先に規定しなければならず、しかも音義はなおざりになることを意味する。

漢字のような、総数が多く、文字どうしの境界がゆるやかで、しかも文字それぞれが音や義を持っている文字集合に対しては、文字コードの概念はそぐわない。どのような情報構造が漢字に向いているかを、漢字情報学では示していく必要があるだろう。

漢字情報学の構築に向けて

漢字情報学を論じるためには、現実の漢字テキスト処理がどのようにおこなわれているのかを、把握する必要がある。特に、コンピュータによってある程度自動化されているが、まだまだ人手が必要、という分野が重要で、そこにはテキスト処理上の問題点が潜んでいるはずである。たとえば、漢字による文字組版を考えてみよう。

文字組版におけるプロの評価尺度は「美しさ」にある。「読みやすさ」と言い換えてもいいだろう。行頭に句読点がこないのも、行末に開きカッコが来ないのも、タイトルや章を強調された字体で組むのも、すべては「美しさ」「読みやすさ」のためである。しかし「美しさ」は定量化しにくい尺度であり、コンピュータによる完全自動化は難しそうである。しかも、漢字による文字組版と言っても、言語や国による差異がある。例を挙げると、段落の始まりは中国においては2字アキが普通だが、日本においては1字アキが普通である。

また、文字組版では「注」において、テキストの非一次元性が如実に現れる。「注」は「本文」の流れとは独立した別の流れを持ったモノで、しかも「本文」の特定の部分に「ぶらさがって」存在している。このぶらさがり具合いを、文字組版は、どのように紙面の上に表現するのか。もっとも簡便な形態は「カッコ書き」であり、多少ポイントを下げて「本文」中に埋め込まれる。これの非常に極端なスタイルが「割注」であり、漢字の矩形性が無ければ成立しえない「注」の表現方法である。「後注」は、「本文」の流れが全部終わってしまった後に「注」の流れを貼り付けるやり方であり、「本文」中に「後注」への「リンク」を何らかの形で埋め込むことになる。「カッコ書き」「割注」「後注」は、いずれも、テキスト全体を何とかして一次元に押し込めようとした場合の「注」の表現方法だと考えることができる。ところが「脚注」は、テキストの一次元化をあっさりとあきらめ、「本文」の流れとは独立に「注」の流れを紙面上に表現する。もちろん「本文」中には何らかの「リンク」が埋め込まれ、「脚注」との仲を取り持つことになる。

現実のテキスト処理は、文字組版一つ取ってみても、さまざまな家内制手工業的な技術が介在している。漢字情報学は、これらの技術を情報学の立場から問い直し、学問の体系の中に組み込んでいくことで、構築されていく。ありていに言えば、コンピュータに載っている技術はどうして載るのか、載っていない技術はどうして載らないのか、漢字テキスト処理において明らかにしよう、という試みである。ただし、漢字テキストと一口に言っても、日本と中国と韓国とで違うし、時代によってももちろん違う。テキスト処理技術のみならず、テキスト文化の差異をも明らかにすることが、漢字情報学の構築には必須だと考えられる。

班員一覧（班長は除く）

●所内
池田　巧、井波陵一、岩井茂樹、Wittern, C.、小林さとみ、高田時雄、武田時昌、守岡知彦、山崎　岳

●学内
柴山　守（東南アジア研究所・教授）

●学外
二階堂善弘（関西大・文・助教授）
師　茂樹（花園大・文・講師）
山花哉夫（京都大・文・OO）

曰古――むかしむかし

中国古代の基礎史料

班長◆浅原達郎

この共同研究班はいくつかの点で異例な研究班といえる。全所員がそれぞれの共同研究について話し合う場において、その異例をめぐってさまざまの意見が交わされ、否定的な意見のあるままに、とりあえず発足させて経過を見ようということで、2004年4月からの開始にこぎつけた。そのことがすでに第一の異例な点である。その場では否定的な意見が半ばを超えていたというのが、わたしの感触であった。

異例な共同研究班

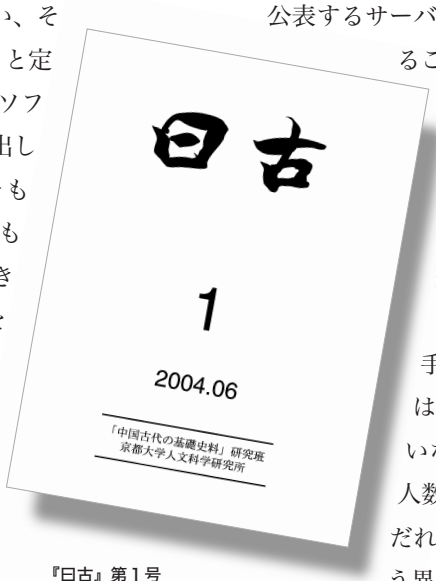
この共同研究班には、到達すべき目標とか、あるいは一点にしぼられた研究テーマとかいうものが、無い。これが第二の異例な点である。いわば、どの山に登るかが決まっていない登山隊のようなもので、もちろん将来はどこかの山に登る意志があるのだが、いまなすべきことは、ふもとでメンバーの体力・技術の向上をめざすことだと考えるのである。どの山に登るかは、そこでどのようなメンバーの成長があるかによらねばならない。中国古代研究というのはまさに、いろいろな分野の学問が絡まりあって、ひとつの山系のようなすがたをなしている。そのなかの中心となる高い山となると、ひとつの学問だけで登ることはできない。ということは、メンバーにどのような学力が身につくかによって、登るべき山も見えてこよう、ということなのである。

つまり、この共同研究班は、中国古代研究を志しはするものの、しかしまだ基本的な学力や知識が足りない、と思っているものたちが集まって、互いに切磋琢磨しながら力をつけていくための場を、提供しようというものである。そこに「中国古代の基礎史料」という看板を掲げたのは、そのとき基本的な論文や史料を地道に読んでいくことを中心課題としよう、というのであり、その点は、研究班としてそれほど異例ではない。ただし班員の多くが、学生である。現在、学部学生が２名、大学院の修士課程に所属するものが２名、この４名は所内の慣習によって、正規の班員に数えることができない。そこで研修員１名と他大学教員１名のおふたりにお願いして、正規の班員として名を列ねていただいている。研究班のなかでは全く同等の立場で参加していただいているのだが、しかし表面上は班長を含めてたった３名の班員しかいないことになる。これが第三の異例な点である。ついでにいうと、班員の多くが学生であるために、週に一度の会合の開催時間は、大学の講義に合わせて、他の研究班とは違った時間に設定されている。些細なことだがこれが第四の異例な点ということになる。

共同研究班は、その研究期間が終了した時点で、研究成果をまとめて公表する義務がある。しかし、当班では、終了時の目標というものが設定されていないので、人文科学研究所の一般の研究班がそうするように、立派な論文集や資料集を最後に公刊する予定は、無い。これが第五の異例な点である。しかし、研究成果の公表は欠かすことのできないことである。そこで、当班としてそのふさわしい方式は、研究班を進めていく過程で、そこで得られたものをこまめに形にしていくことであろうと考えた。この研究班は、班員の多くが、学生であるという立場上、１年単位で参加していただくようにお願いしている。だから、とりあえず３年の研究期間ということになっているが、それは便宜的に定めたものであって、３年後にゴールが待っているわけではない。３年後にどこに到達したかではなく、ひとつひとつのステップをどのように歩んだかが、重要であり、それがわれわれの成果なのである。そこで、それを次のふたつの形に表わしていこうと考えている。まず、週に一度の会合の記録をそのたびに文章にまとめ、それをインターネット上で見ることができるよう

にすることがひとつ。また、ある程度の区切りがついたところで、それを簡単な印刷物にまとめることがもうひとつである。

インターネット上で公開するための準備は、すでに整っていて、実際には公開されている、というのが本当のところである。まだまだ広くアドレスを告知するほどのレベルにはなっていないが、別に隠しているわけではないので、見ようと思えば見ることができる。また、2004年４月の開始からふた月たったいま、ひとつの文章を読み終わったので、その札記をまとめて印刷物を作成したところである。今後、不定期にではあるが、継続して刊行していこうと思い、そこで誌名を『曰古（えつこ）』（むかしむかし）と定めた。印刷物といっても、ワープロソフトで文書を作り、プリンターに打ち出して綴じただけの簡略なものだが、そもそも大量に作らねばならないものでもなく、必要になればいつでも増刷できるのがかえって便利である。予算をかけずにすむのもありがたい。このような継続的な成果の公表は、経常的な支出でまかなうのが理想だからである。インターネット上での公開についても、班員のひとりから、使わなくなったコンピューターをひとつ提供していただいて、サーバーを立ち上げている。性能は見劣りがするけれども、わずかなアクセスに対処するには充分である。



『曰古』第１号
（2004年6月18日刊行）

共同研究室と助手制度

これは、人文科学研究所のなかでも北白川の分館に特徴的なことなのであるが、共同研究室と呼ばれる部屋が６室ほどあり、共同研究班の平生の活動の拠点として機能してきた。定期的に開催される会合だけで、共同研究班が動いているのではない。分館では、共同研究室は助手の個人用の研究室でもあるので、助手は共同研究班とのかかわりのなかで自らを磨く場を、共同研究室のなかに得ることになる。つまり、共同研究班と共同研究室と助手制度とが三位一体の形で補完しあい、そこに理想的とも思える研究環境を作り出しているのである。わたし自身、助手時代、はかりしれない恩恵をそこで得た者のひとりであり、この研究環境がこれからも維持されることを、強く願う。ところが、いまこの「中国古代の基礎史料」班は、どの共同研究室とも無縁である。これが第六の異例な点である。これは単に共同研究室の数が足りないというだけであって、この班のポリシーでもなんでもない。しかし、研究班にとっては、非常に重いことがらである。最初に共同研究班を構想するについては、まずその対策を思案するところから始めなければならなかった。つまり、班員が常時訪れることのできる場所として、共同研究室に代わるなんらかの工夫が必要なのである。そこで、まだ試みの域を出ないが、インターネット上で成果を公表するサーバーに、仮想的な共同研究室を設けてみることにした。意見や情報を交換できる場所、あるいは班員間で図書の貸し借りをする場所、を作ってみたものの、いまのところまだほとんど機能していないようである。しばらくは気長に続けてみるしかないであろう。

共同研究室と無縁であるために、助手制度とも無縁であって、この研究班には、助手という身分を持つ若い研究者がいない。第七の異例な点である。助手の人数にも限りがあるので、研究班に助手がだれもいないという情況が、これからはそう異例ではなくなる時代がくるかもしれない。しかし、コンピューターが助手のかわりをしてくれるわけもなく、目下のところわたしがせいぜい若いつもりになって、助手の役回りをつとめている。案外、助手時代に大きな恩恵にありついた経験が、本能的にそうさせているのかもしれない。これはこれでしばらく続けていくしかないであろう。

思えば、わたしが最初に人文科学研究所の共同研究班に加わったのは、大学の3回生のときのことであった。なぜそのような異例なことが許されたのか、いまもってよくわからない。当時のわたしにそれほどの学力があったのでないことは明白で、数年後には力不足を感じて継続参加を断念した。しかし、あのとき場違いなところに現われた若僧を、なにごともなく受け入れられた当時の班員のかたがたの度量を、いまになって知る。わたしをこの研究班の発足に向かわせた根底には、その班長個人の異例な経験があって、それがこの研究班の第八の異例な点となっているのかもしれない。

班員一覧（班長は除く）

●学外

森賀一恵（富山大・人文・助教授）　**森谷一樹**（京都大・文・研修員）

陰陽五行のサイエンス

科学と占いの中国的パラダイム

班長◆武田時昌

陰陽五行は、万物を構成する基本要素であり、物類の性質、関係性のメカニズムは、陰陽五行の形質と相互作用によって定式的に説明された。そして、自然と人倫に横たわる法則性に着目して社会のあり方、人間の生き方を考究しようとする類推思考を生み出し、中国の学術を特色づけるパラダイム的な役割を果たした。

これまでの研究においては、陰陽五行説の成立過程や配当説、陰陽五行説を援用した漢代の政治思想等に詳しい考察が試みられてきた。しかしながら、三国時代以降の史的展開や理論構造の特質ついては、十分な検討がなされているわけではないように思われる。

自然学の理論形成において、あるいは思想、宗教から文学、占いの諸技芸に至る多彩な分野において、陰陽五行が実際にどのような作用を発揮したのであろうか。そして、サイエンスの理論として見た場合に、どのような理論構造と特色、あるいは限界性があったと考えられるか。そうした問いに対して、多角的、複眼的な見地から考察を加えてみたいと考えている。

『五行』と日書

日夜の交替、季節の推移を陰陽二気の相互作用によって把握する考え方は、中国古代人の自然観を支える基本概念の一つであった。その素朴な二元論による自然認識は、先秦諸子百家の思想空間において、老子や易の自然哲学へと発展し、漢代の天人感応説に受け継がれた。

一方、金・木・水・火・土を万物の根源的物質と見なす五行説も騶衍をはじめとする先秦の思想家達によって大いに主張され、五つの間に想定した相克、相生の関係によって、様々な事象の因果関係や循環サイクルを解き明かそうとした。儒家の周辺では、騶衍よりも以前に子思・孟子が「五行」を唱えていたことが、『荀子』非十二子篇に述べられている。

しかし、五行説の初源的な言説については、ほとんどの著作が早期に散佚したために、神秘なベールに覆われていた。ところが、近年に先秦、漢初の遺跡から発掘された竹簡、帛書に、陰陽五行を素材とする論説が含まれており、黎明期の五行説の具体的な様相を窺うことができるようになった。

子思・孟子の五行説については、1993年に戦国後期の湖北荊門郭店楚墓から出土した『五行』と題する竹簡には、仁義礼智聖の五徳を「五行」とし、『孟子』『詩経』等を引証するユニークな論説が展開されている。しかも、1983年に長沙馬王堆漢墓より出土した帛書（『帛書五行篇』と命名された）の経文とほぼ一致するものであった。それらの五徳説が、騶衍の五徳終始説や『呂氏春秋』の時令説とどのように関連しているのかは判然としないが、儒家の五行説の起源を従来の定説よりも古くまで遡らせたことは確かである。

五行説の史的展開を考えるうえでは、睡虎地秦簡をはじめ各地で発見が相次いだ日書と呼ばれる一群の占術書も大いに注目されるだろう。

日書とは、占いを職業とする人物（日者）が用いたと思われるテクストのことである。そこには、日の吉凶や日選び、夢占い、呪法等の雑多な方面の占いが繰り広げられている。中国の占いといえば易であるが、日書は易占の比重はそれほど多くない。その反面、十二直、二十八宿占、叢辰、暦注に記される技法が中心であり、また、禹歩、呪詛、禁忌の素型となったものも多く見ることができる。

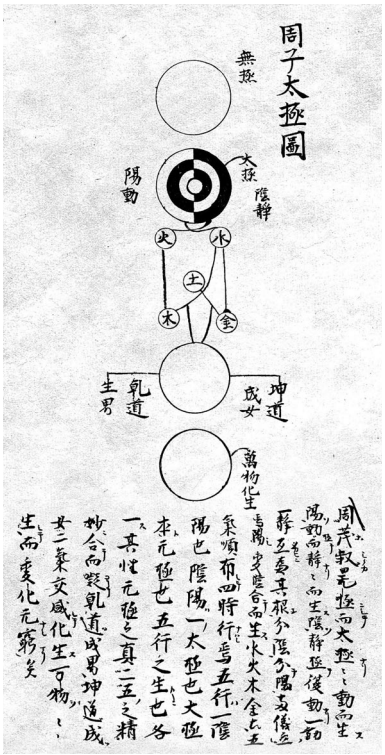
五行について言えば、日時を表記する六十干支に十二直、二十八宿、五音、十二律を配当する論説で、大いに活用されている。民間レベルで、そうした占術の基礎理論として五行説がすでに浸透していたのである。しかも、その流れは近世が終焉するまで綿々と続いたのだから、その連続性もあわせて考察すべきである。

方術から術数学へ

漢代になると、方術の世界で秘かに暗躍していた陰陽五行説は、大儒、董仲舒によって表舞台に引っ張り出され、政治思想や自然科学の諸分野で理論体系化の大役を務め上げる。五惑星の運動論を核とする天文占及びその政治的応用である災異思想、陰陽十二経脈（古くは十一脈）による針灸医学、前漢末に流行した讖緯思想、王莽、光武帝の革命イデオロギー等々。それらの成果は、『漢書』律歴志、五行志や『黄帝内経』に集約され、また陰陽五行によって潤色した古帝王伝説、革命と予言の政治思想は、緯書―孔子が著わした六経の解説書、という形でまとめられた。

三国時代以降の中世的展開は、『隋書』経籍志に著録された一群の書物の存在に、示唆的に語られている。すなわち、子部五行類には、易占、風角、九宮、太乙、遁甲、六壬、風水、相宅、占夢……多種多様な術数書が見られる。それらは、明らかに先秦以来の日書と強い類似性を感じさせるものであり、また緯書との関わりも見受けられる。医方類の多数を占める経方書、あるいは養生書にもそうした傾向が見出せる。

先秦から漢初にかけては、自然学の分野、すなわち算術、天文暦術、医術、本草は煉丹、養生術、占術とともに「方術」と呼ばれていた。漢代に陰陽五行説の流行と並行して、天文律暦学、医薬学が理論化されてサイエンスへと自立する。その一方で、易は儒学（経学）の経典として中核的な存在を占めるようになる。その天文暦数や象数易は、占術の数理に大きな影響を与え、やがて科学と占いが複合的に絡み合って、「術数学」という中国に特有な学問分野が形成されていくのである。



『五行大義』元弘相伝本には、その紙背に諸文献からの抄録文が注釈として書き記されており、周敦頤の太極図をはじめ注目すべき図も数多く描かれている。

日本に伝存する陰陽書

術数学というのは、まだ十分に考究されていない未開拓の領域である。理論構造が難解であるとともに、著作の大部分が散佚してしまっていることも、その学問的輪郭を把握しがたくしている要因である。

我が国は、中国中世の術数学に影響を受け、陰陽道というユニークな占いの文化を発展させたが、中国で失われてしまった書物が数多く今日まで残存している。隋の占い博士（太常の官）として活躍した蕭吉が編纂した『五行大義』は、その代表的な著作の一つである。そこには当時に存在した術数書が引用されており、きわめて貴重な資料集である。また、永観２年（984）に丹波康頼が編纂した『医心方』にもその方面の佚書、佚文が多数残存する。胎産や長生の医術はまじないとも深く関わっており、その接点に術数学の本領が発揮されている。

そこで、会読のテキストにその二書を取り上げることにした。紙面上に書かれた文字情報は断片的であるから、治療や占いの実践をさせることは容易ではない。だから、東洋医学、本草学、天文学等の中国科学史の専門家に加えて中国思想、道教、文学の研究者にも参加してもらって、それぞれの立場から知恵を出し合い、陰陽五行をベースにした中国的パラダイムの解読に挑戦することにした。術数学の世界を探索していると、やがて陰陽五行のサイエンスなるものが浮び上がってくるのではないかと期待している。

班員一覧（班長は除く）

●所内

Wittern, C、佐野誠子、山崎　岳

●学内

宇佐美文理

●学外

長野　仁（森ノ宮医療学園・非常勤講師）
相川佳予子（広島女学院大・生活科学・教授）
吾妻重二（関西大・文・教授）
新井晋司（同志社女子大・非常勤講師）
猪飼祥夫（龍谷大・非常勤講師）
梅川純代（国際日本文化研究センター・共同研究員）
浦山きか（北里研究所・客員研究員）
加藤千恵（大阪市立大・非常勤講師）
木下鉄矢（総合地球環境学研究所・教授）
小林靖弘（仏眼鍼灸理療専門学校・副校長）
坂出祥伸（関西大・名誉教授）
桜井謙介
佐藤　実（関西大・非常勤講師）
佐野博昭（鍼灸師）
辛　賢（大阪大・文・講師）
舘野正美（日本大・文理・助教授）
東郷俊宏（鈴鹿医療科学大・鍼灸・助教授）
中　純夫（京都府立大・文・教授）
仲畑　信（仏教大・非常勤講師）
橋本昭典（奈良教育大・教育・助教授）
橋本敬造（関西大・社会・教授）
真柳　誠（茨城大・人文・教授）
南　喜雄（鍼灸師）
宮島一彦（同志社大・理工学研究所・教授）
宮崎順子（大阪市立大・文・非常勤講師）
森泉和人（鍼灸師）
森村謙一（広島大・医・研究員）
矢野道雄（京都産業大・文化・教授）
伊藤　円（京都大・文・O.D.）
東川祥丈（京都大・文・O.D.）
閻　淑珍（京都大・人環・D.C.）
鄭　宰相（京都大・文・D.C.）
石　立善（京都大・文・D.C.）
永渕正是（京都大・文・D.C.）

マークアップ

理論と実践

班長◆Wittern, Christian

研究者にとっての電子テクストは、これまで印刷物の形を取ってきたテクストを、単に電子化したというだけのものではない。電子テクストは、研究者間の新たな伝達の手段であると同時に、テクストに関する解釈をも伝達する可能性を秘めている。電子テクストの可能性をさぐる本研究班は、2004年に始動したばかりである。したがって以下は、本研究班の結論というよりはむしろ、本研究班の計画として書かれたものとして読んでほしい。

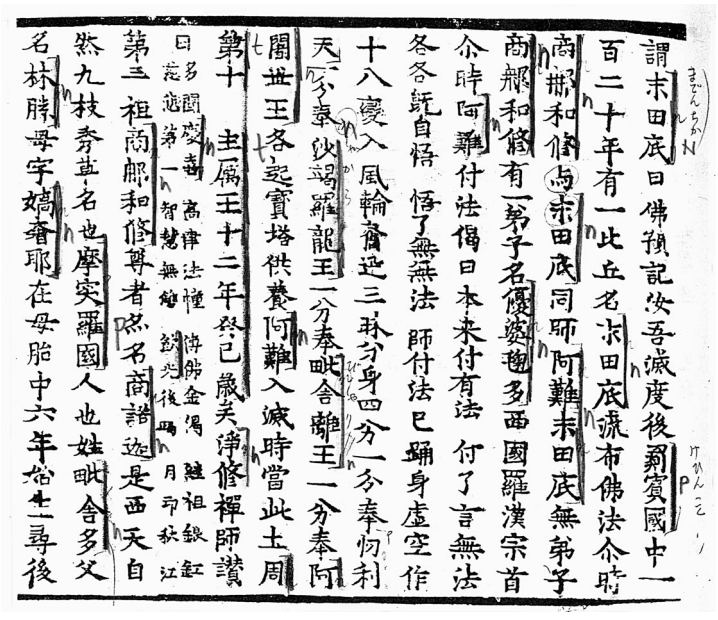
本研究班が対象とするのは、電子テクストそれ自体と、電子テクストの方法論である。方法論の中では特に、東アジアとその周辺の研究において、どのような電子テクストの利用が可能かを考えていく。電子テクストの「ナイーブ」な利用――つまるところ、プレーン・テクストのやりとり――が、現時点では電子テクストの利用方法としては一般的なものであろう。しかし、将来の電子テクストが「ナイーブ」であり続けなければならない理由は、どこにもない。

テクストとは、マークアップとは

テクストに関し問われるべき最も根元的な問いは、もちろん「テクストとは何か」である。我々は、過去に文学・文献学・情報科学が挑んできたこの問いに対し、新たに人文情報学という学問領域を加え、それらの学問領域における種々のモデルを武器として、考察を深めていく予定である。

モデルという視点から見ると、テクストは、たとえば文字の流れとして、あるいは単語の連続体として、あるいは章・段落・文章・言葉・文字を含む書物として、モデル化することが可能だろう。あるモデルにおいては、字数・行数・ページ数・ページ上の文字の位置関係といった物理的な構成要素こそが、テクストだとみなすこともできる。また、あるモデルにおいては、題名・見出し・本文・句読点といった論理的な構成要素こそ、テクストだといえるだろう。我々は、これらのモデルに優劣を付ける気はない。我々が目標とするのは、電子テクストを扱うための包括的なフレームワークであり、そこでは、このようなモデルの全てを扱えると同時に、これらのモデルの間を何らかの形で調整できなければならない。本研究班では、そのようなフレームワーク構築のための基礎研究をおこなう。

大方のモデルにおいて、テクストの内容――その最も基本的なユニットは文字であろう――を、余白や句読点と区別することは、理にかなっている。ふつう、前者がより厳密な意味でテクストとみなされるのに対し、後者はテクストについての付加的な情報だと考えられるからである。この付加的な情報すべてが、一般に、マークアップと呼ばれるものである。



五代南唐の952年に編まれた禅宗史書『祖堂集』の部分。人名、地名、時間に関する語に線が引かれ，書き込みがある。

ただし、電子テクストにおいては、マークアップという概念は、もう少し厳密な意味で用いられる。電子テクストにおけるマークアップは、形式言語で記述できるようなものでなければならないし、それはある種のソフトウェアによって一意に解釈されなければならない。テクストの校正を例に挙げると、印刷媒体では、余白に適当に赤を入れれば、編集者や植字工が適正な判断を下して正しく校正がおこなわれる。これに対し、電子テクストの場合は、どこから校正が始まっていてどこで終わっているのか、それはどの部分に対する校正か、などを明確な形でマークする必要がある。そうしないと、ソフトウェアはどこをどう校正すべきか、全く判断がつかないからである。言い換えるなら、電子テクストのマークアップは曖昧さを排除したものでなければならない。マークアップを受け取る側に「常識」を期待することはできないからである。

マークアップは、電子組版の補助手段として始まり、今なおその影響を色濃く受けている。しかし、マークアップは、テクストの組版指示にとどまるものではない。マークアップは、テクストに関するあらゆる種類のステートメントをなすための道具なのだ。

テクストエンコーディング

電子テクストをマークアップする過程を、我々は、テクストエンコーディングと呼ぶ。この用語は、近代以前に書かれたテクストにマークを付加することを指すことが多く、それはしばしば、テクストの新しい印刷用エディション作成の準備作業であったりする。しかも、テクストエンコーディングは、エディション作成をおこないながらも元の電子テクストを残しているという点で、将来の多種多様なテクスト使用に向けて、門戸を開いたままにしておくことができるという利点がある。また、従来の印刷媒体におけるエディション作成と、テクストエンコーディングは大きく異なっている。印刷媒体におけるエディションは、紙の上にテクストをレイアウトしただけのものであって、どの部分が見出しであるかとか、どの部分が注であるかという情報を理解するのは、読み手に委ねられている。これに対し、テクストエンコーディングは結局のところ、ある種のソフトウェアが必要と考えるだけ詳細に、テクストにマークアップをおこなう、ということに他ならない。たとえ、印刷媒体での見た目が同じであったとしても、節を意味するボールドと、本文中の強調を意味するボールドでは、異なるマークアップをおこなわなければならない。そこには、曖昧さ、未決定、不確定さ、などが存在する余地はほとんどない。しかし現実のテクストは、そのような曖昧さを全く許さないものだろうか？

この点を考えると、必要に応じて記述の詳細さを変更可能なマークアップ戦略が必要であり、それが本研究班が研究すべき課題の一つである。また、そのようなマークアップは、元のテクストによって是認されなければならない。言い換えれば、マークアップと元のテクストとが無矛盾であることが、明示的でなければならないのだ。世に溢れる電子テクストのうち、上に述べた意味での良い実践例となっているものを、本研究班では収集していき、将来のマークアップ・プロジェクトの手引きとして役立てるつもりである。そのような実践例は、その他の成果とともに、本研究班のウェッブサイトで公開して行きたい。

適用と今後の展開

ここまで述べてきたように、テクストとマークアップは密接に関連している。特に電子テクストにおけるマークアップは、元のテクストを正しく表現するためのものでなければならず、それでありながらマークアップ自身はテクストではない。マークアップがテクストの解釈であるのは一面の事実だ。しかし、それは、多岐にわたる解釈、ときには対立する解釈を、同時に可能とし、場合によっては、その多義性や対立性をも明示的に記述できるものでなければならない。さらに、そのような様々な解釈の中から、ユーザの要求に応じて、可能な解釈の一つあるいは複数を取り出せるようになっていなければならない。マークアップの可能性を探り、その評価と展開を可能にするケーススタディが、本研究班の課題の一つとなるだろう。

本研究班の目的は、マークアップという方法論によって開かれる、新たな電子テクストの可能性についての基礎研究である。本研究班では、これを特に漢字文化圏のテクストを中心におこないたい。

班員一覧（班長は除く）

●所内

麦谷邦夫、岩井茂樹、武田時昌、安岡孝一、守岡知彦、山崎　岳

●学内

京都大学COEプロジェクト
岩本明美（技術補佐員）
秋山陽一郎（技術補佐員）
小野達哉（技術補佐員）
中楯はまな（技術補佐員）

●学外

二階堂善弘（関西大学・文・助教授）
山崎直樹（大阪外国語大学・外国語・助教授）
師　茂樹（花園大学・文・専任講師）
後藤　真（大阪市立大学・文・D.C.）

半世紀後の再研究

元代の法制

班長◆岩井茂樹

この共同研究班にさきだつのは、「中国近世社会の秩序形成」という課題を掲げた、2000年から3年計画の研究班である。支配とそれにたいする反抗という二項対立の枠組みではなく、人びとの行為と認識が安定した秩序にむかって収斂したり、既存の秩序への不同意によってそれを発散させたりする多様な場を、集積と相互連関という位相において捉えたい、またそのような試みをつうじて、中国社会の歴史的な形成についての理解を深めることが、その目的であった。3年間に計47回の研究会を開催した。その成果を論文集にまとめ、2004年3月、『中国近世社会の秩序形成』として本研究所から刊行した。

2003年度には、ほぼ同じメンバーで「中国近世法制資料の研究」班を組織した。この班では、徽州文書に含まれる多様な文書資料のなかから、明代（1368-1644)の裁判関係文書を選びだし、それを読んでいくことを計画した。隔週の研究会の席上、担当者が用意した訳注稿にもとづき、全員で検討を加える。具体的な資料についての知見を共有することを通じて、「中国近世社会の秩序形成」班で各人が獲得した視点や方法をさらに深めることが03年度の共同研究班の目的であった。

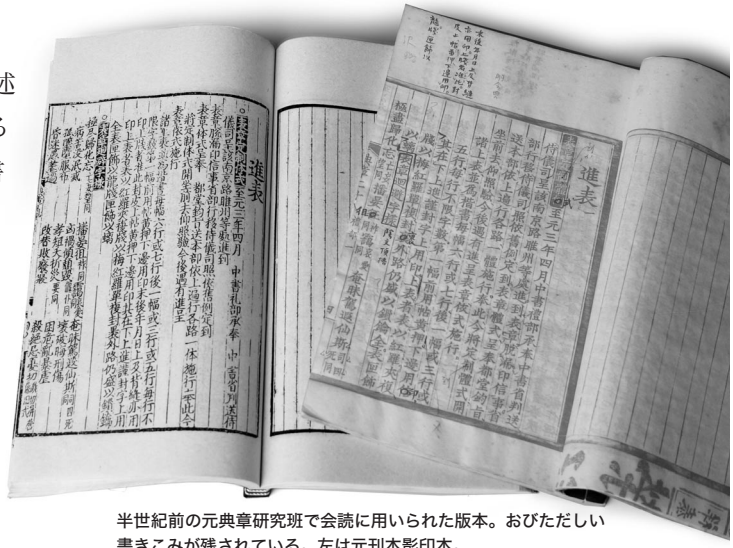
裁判関係文書

徽州文書中の裁判関係の資料については、もともと中国社会科学院歴史研究所の周紹泉氏がその整理・出版を企図されたものである。国際日本文化研究センターの客員教授として京都に滞在していたあいだ、周氏は自らがその編纂にたずさわった『徽州千年契約文書・宋元明編』から裁判関係文書を複写し、それをもとにコンピュータにテキストを入力する作業をおこなわれた。同書に含まれないが、周氏が把握しておられた文書もこれに含まれていた。帰国にさいし、そのファイルを岩井にも恵与されたのであったが、2002年9月、不幸にも周氏は道山に帰され、整理作業はその主を失ってしまった。

そもそも、周氏がこのような仕事に着手されたのは、本学文学研究科の夫馬進教授の企画された国際共同研究「中国明清地方档案の研究」（1997-1999年度）に周氏が参加されたことを機縁とする。岩井は周紹泉氏の遺志を継いで整理作業を完成することの必要性を強く感じていたが、そのことについて周氏の高弟阿風氏に相談したところ、阿風氏は大いに喜び、協力を約束された。裁判関係の文書は、もともと用紙が大きいうえに、小さな文字で書かれたものが多い。『徽州千年契約文書』が掲載する写真版では識読不能の箇所も多々ある。周氏亡きあと、中国社会科学院図書館などが蔵する徽州文書原本と対校する作業をおこなえるのは阿風氏以外になかった。「中国近世法制資料の研究」という研究班を組織したのは、阿風氏の全面的な協力を得ることによって、校訂テキストの精度を高める作業をおこなう見こみが立ったからであった。われわれを喜ばせ、また驚かせたのは、阿風氏が数か月の間に周紹泉氏の遺されたファイルと原文書との対校をおこなったばかりか、『中国明代檔案総匯』のなかであらたに紹介された第一歴史檔案館所蔵の裁判関係文書など、いくつかの裁判関係文書を増補されたことである。

こうして2003年5月からの会読をはじめるにさいし、約110点におよぶ明代裁判関係文書のファイルを利用することができた。このファイルをもとにして岩井が文書の分類をおこない、類別や時代ごとに抽出し、また全体から語句検索をおこなうシステムを作成した。会読をすすめるにさいし、この検索システムは大いに威力を発揮した。１年の研究期間中、会読を終えたのは長短さまざまの15点の文書にとどまったものの、明代の訴訟手続きやその過程で作成される文書について、その原資料を詳細に解読することによって、新たな知

見を多く獲得することができた。編纂資料や記述資料からは得られない豊富な情報を引きだしうることを再確認した。また、ファイルとなった文書の校訂作業はなお完璧でなく、さらに作業を継続する必要があることも判明した。研究班での会読は予定どおり1年間をもって終了したが、その後も岩井が中心となって校訂作業をすすめ、その成果を学界の共有財産とするという周紹泉氏の遺志を実現したいと考えている。



半世紀前の元典章研究班で会読に用いられた版本。おびただしい書きこみが残されている。左は元刊本影印本。

元代文書研究の蓄積

2004年度からは、金文京教授と相談してあらたに「元代の法制」共同研究班を出発させることとなった。これまでの蓄積をもとにして、モンゴル王朝の統治下にあった13世紀後半から約100年の時代を対象として、研究の幅を拡大することがその目的である。具体的には、『大元聖政国朝典章』礼部および関連資料の会読を中心とした研究会を開催している。会読をつうじて資料上の知見をひろげ、この時代の中国社会における秩序形成と法制や文化について考察する手がかりを得ることを期待している。

本研究所では、ちょうど50年前に「元典章研究班」がおこなわれていた。岩村忍、安部健夫、藤枝晃、田中謙二（以上研究所）、吉川幸次郎、宮崎市定、佐伯富、佐藤圭四郎（以上文学部）など学内学外の錚々たる班員が、元典章に取り組んだ。この班が発足したのは1954年のことであるけれども、じつはおなじメンバーによる講読会が先行してもたれており、正規の研究班が発足するまでに刑部と戸部の部分を読了し、さらには『東方学報』京都第24冊に「元典章の研究」特集を組んで論文を掲載している。また、佐伯富氏が採録した語彙カード2万数千枚をもとに、研究班発足の年の10月には『元典章索引稿』（油印、iii＋210頁）を刊行した。その準備の周到さ、注入したエネルギーの大きさには感服するばかりである。佐伯氏はその後も語彙採録を継続し、4冊、計700頁を超える元典章の索引を完成された。また、岩村忍・田中謙二両氏による『校定本　元典章　刑部』（第1冊　1964年、第2冊　1972年）が本研究所から出版された。これら先学の成果は、元代の法制史、社会史の研究にとって貴重な財産であり、本研究所の共同研究が東洋学の分野でなした大きな貢献の一つである。吉川幸次郎「元典章に見えた漢文吏牘の文体」『東方学報』第24冊、および田中謙二氏が旧稿を大幅に増補して完成させた「元典章文書の研究」『田中謙二著作集』第2巻（汲古書院　2000年）は、元典章をはじめとする元代文書のみならず、近世中国の官僚制と政治制度の運用のなかで用いられた官庁文書を読むうえでの最良の手引きとなっている。

50年後にあえて重ねて元典章の会読を試みるのは、中国近世の制度と文化の展開を長期的な時間幅で視野に入れるときに、モンゴル時代とその前後の時代とのあいだの連続や屈折を考える必要性をつよく感じるからである。また、近年韓国で元版『老乞大』や『至正条格』などが発見されたり、カラホトの都城遺跡から出た元代文書が紹介されたりするなど、利用できる資料の幅が広がりつつある。これと並行して、台湾の中央研究院で元代の法制関係資料の電子テキストが作成されるなど、資料検索の利便性も急速に向上した。根本資料たる元典章にもう一度眼をむけた動機の一端はここにある。開拓者たる先学の偉大な成果には及びもつかないが、この研究班でも礼部の文書の本文校訂のほか、元典章全体の電子テキストを作成しネットワーク上での検索・閲覧システムを会読の副産物として提供することを目指している。

班員一覧（班長は除く）

●所内
金　文京、范　金民、古松崇志、
宮宅　潔、矢木　毅、山崎　岳

●学内
寺田浩明（法学研究科・教授）
夫馬　進（文学研究科・教授）

●学外
阿　　風（中国社会科学院歴史研究所・副研究員）
植松　正（京都女子大・文・教授）
小野達哉（漢字情報研究センター）
加藤雄三（総合地球環境研究所・助手）
桂華淳祥（大谷大学・文・助教授）
伍　　躍（大阪経済法科大・教養・教授）
櫻井智美（明治大学・文・講師）
堤　一昭（大阪外国語大学・外国語・助教授）
中島楽章（九州大・人文科学研究院・助教授）
船田善之（学術振興会特別研究員）
森田憲司（奈良大学・文・教授）
Wang Liping（人文研・招聘外国人学者）
石野一晴（京都大・文・D.C.）
市丸智子（九州大学・人文科学府・D.C.）
藤本　猛（京都大・文・D.C.）
毛利英介（京都大・文・D.C.）

東アジア民衆文化を読み解く

共同研究

中国近世日用類書の研究

班長◆金　文京

本研究班は、2003年度まで私が3年間主催した「元代の社会と文化」研究班のうち『事林広記』講読の延長として新設されたものである。前回の研究班では、『事林広記』の多岐にわたる内容のうち、おもに歴史、社会に関係する部分を読んだが、今回は科学技術に関する項目を中心に、前回と同じく講読をおこない、訳注の作成を目標とする。

日用類書とは？

類書というのは一種の百科事典であり、早く三国時代の魏の文帝の命によって、はじめて『皇覧』という類書が作られて以来、歴代かずかずの類書が編纂されてきた。ただし初期の類書は、すべて知識人が詩文を作るための語彙を提供する目的で編まれた言葉の辞典としての性格が強かったのに対して、南宋代には社会の多様化と庶民階層の勃興にともない、知識人だけではなく文字を解する一般民衆にとって、日常生活に必要な多方面の知識を具体的に説明した事柄の事典が登場した。今日知られるそのもっとも早いものが、すなわち『事林広記』である。

『事林広記』　正式の書名は『新編纂図増類羣書類要事林広記』。国立公文書館内閣文庫所蔵。この本とは別系統のテキストだが、元禄年間の和刻本もある。

『事林広記』は南宋末の人、陳元靚によって編纂されたとされるが、南宋時代に出版されたテキストは現存せず、出版されたかどうかも定かではない。しかし次の元代から明代の中期にわたる長い期間に、たびたび改訂をかさねながら、多くのテキストが刊行され、広く用いられた。

一般に、ある時代に特異な事象は、当時の人々の注意をも引き、記録されることも多いため、後世のわれわれにとって、それらの記録を手がかりに理解することが比較的容易であろうが、その時代に当たり前であった常識的な事柄は、かえって記録も少なく、後世の人々には分かりにくいものであろう。『事林広記』をはじめとする日用類書には、まさにそのような当時の人々が常識的に知っていたであろう事柄、あるいは常識として心得ておくべき事柄が書いてある。しかもその範囲は、当時の諸制度や教養としての地理、歴史知識、宗教、算術、医学、音楽から、さまざまな占いの技術、武芸、囲碁などの遊戯、服飾、茶や酒、料理の種類と作り方など、日常生活に必要なあらゆる分野をほぼカバーしている。

これら日用の基礎的な知識は、当時の社会と人々の生活の実態を知るうえで絶好の資料となるばかりでなく、また同じ時代のより高級な文化や芸術を理解するためにも大きな助けとなるであろう。どのような文化や芸術も、すべて生活の中からうまれたものだからである。

『事林広記』は正式の題名を『新編纂図増類群書類要事林広記』（内閣文庫本）などと称するように、事柄の説明のため文章とともに多くの図版を用いてお

り、内容理解の一助となっている。またその記述は、「群書類要」とあるように、基本的に当時のさまざまな書物からの抜書きであるが、それら『事林広記』に引用された書物の今日伝来するテキストと『事林広記』の引用を比較すると、しばしば字句や内容に相違がみられる。これらは当時ふつうに使われていたその書物の通行本の姿を知ることのできる貴重な資料である。さらに引用された書物には、今日すでになくなってしまったものもあり、またどの書物から引用されたのか分からないケースも多く、それらの資料的な価値はいっそう高いであろう。前者の例としては、当時の東南アジア諸国についての知識を記した「方國類」に引用される『島夷雑誌』があり、また後者の例としては、天文知識をあつかう「天文類」にみえる星座の名前をおぼえやすいように韻文にまとめた、いわゆる歌訣などがあげられる。特に後者の歌訣などは、当時の多くの人々にとっては常識であったと考えられ、人々の実際的知識がどのようなものであったのかを知るうえできわめて貴重で、このような部分にこそ日用類書の真の価値があると言えよう。

明・清代の日用類書

『事林広記』の現在知られる最後のテキストは、明の嘉靖20年（1541）刊本であるが、万暦年間（1573-1620）以降になると、あらたに『五車抜錦』『万宝全書』『学海不求人』などさまざまな題名の日用類書が続々と刊行される。それら明代晩期の日用類書の内容は、『事林広記』の内容を継承した部分もあるが、明代の社会状況を反映し、当時の人々の需要を満たすべく改訂が施され、またあらたに加えられた項目や内容も少なくない。たとえば風水に関する多くの記述、また遊里での作法などを説いた項目は、この時代の人々の関心と興味、前代との生活の変化を示すものであろう。総じてこの時期の日用類書は、『事林広記』に比べて情報量が豊富で図版なども充実している。これは当時の印刷術の発達や商業出版の隆盛とも関係している。

次の清代になると、日用類書はほぼ『万宝全書』という題に統一され、さらに多くの版を重ねて民間に普及していった。その流れは西洋文明が社会を大きく変えたはずの20世紀になっても基本的にはあまり変わらず、台湾や香港では現在でも同類の書物が出版されつづけ、人々に広く利用されている。そこからは前近代から近代への激変にもかかわらず、さほど変化しなかった民衆の日常の生活の実態がうかがえよう。

『万宝全書』。京都・建仁寺両足院所蔵。明清代に広く用いられた日用類書。江戸時代にも内容は異なるが『万宝全書』という題の書物が刊行されている。

東アジアの日用類書

『事林広記』など中国の日用類書は、鎌倉・室町におそらく五山の禅僧によって日本にもたらされ、江戸時代にも多くが輸入されて、『事林広記』は元禄時代に和刻本も出版されている。また『大雑書』などの日本版日用類書の出現も、中国の日用類書の影響と無関係ではないであろう。同じような状況は、中国とより関係の深い朝鮮においてもみられる。このように日用類書は、近世の東アジアの人々がかつて共有した知識という一面をももっており、近年関心の集まる東アジア文化交流史や民衆生活史の研究にとっても有用な資料である。

この研究班では『事林広記』の本文を丁寧に読み解いてゆく一方、『万宝全書』に代表される明・清代の日用類書、さらにその東アジア世界への広がりをも視野に入れて、研究をすすめてゆきたいと考えている。

班員一覧（班長は除く）

●所内
武田時昌、宮　紀子、横山俊夫

●学外
新井晋司（同志社女子大・非常勤講師）

研究業績一覧（50音順）

■浅原達郎

訳書

1982 『訓読説文解字注』金冊（共訳）　東海大学出版会
1985 『中国古代度量衡図集』（共訳）　みすず書房
1993 『訓読説文解字注』匏冊（共訳）　東海大学出版会

主要論文

1993 「楚文字の「陵」について」『中国出土文字資料の基礎的研究』pp. 8-12.
1998 「牛不相当穀廿石」『泉屋博古館紀要』15　pp. 47-59.
2000 「西周後期の編鐘の設計－戎肆庵読裘記之三－」『東方学報』京都72　pp. 630-656.
2001 「望山一号墓竹簡の復原」小南一郎編『中国の礼制と礼学』朋友書店　pp. 139-182.
1998 「木雅語語音結構的幾個問題」『内陸アジア言語の研究』XIII　pp. 83-91.
1999 「東洋学と音声記号」『人文学と情報処理』24　pp. 8-14.
1999 「活きていた西夏語？－ムニャ〈木雅〉語の再発見と存亡－」『ことばと社会』2　pp. 62-80.
2000 「西暦1900年に記録されたナムイ語の語彙」『東方学報』京都72　pp. 770-755.
2002 「香港における繁体字の標準字形」『ことばと社会』6　pp. 6-36.
2002 On pitch accent in the Mu-nya language. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area.* 25.2. pp. 27-45.
2003 「西南中国〈川西民族走廊〉地域の言語分布　レファランス資料集」崎山 理編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』(国立民族学博物館調査報告 39)　pp. 63-114.

■李　昇燁

主要論文

1998 「〈新女性〉：植民地時代末期女性の‘皇民化’運動」『韓国民族運動史研究』20（ソウル・韓国民族運動史研究会・原文朝鮮語）　pp. 507-519.
1999 「日帝下緑旗連盟の活動」『韓国近現代史研究』10（ソウル・韓国近現代史研究会・原文朝鮮語）　pp. 329-369.
2000 「内鮮一体運動と緑旗連盟」『歴史批評』50（ソウル・歴史批評社・原文朝鮮語）　pp. 17-38.
2001 「朝鮮人内鮮一体論者の転向と同化の論理：緑旗連盟の朝鮮人イデオローグを中心に」『二十世紀研究』2　pp. 25-46.
2003 「全鮮公職者大会（1924-1930）」『二十世紀研究』4　pp. 95-120.

■池田　巧

著書

1999 『世界のことば100語辞典』アジア編（共著・広東語の項）三省堂
2001 『解読！香港』（共著）　雷鳥社
2002 『デイリー日中英・中日英辞典』（監修）　三省堂
2003 『活きている文化遺産デルゲパルカン―チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』（共著）　明石書店
2003 『中国語でコミュニケーション　発音・学習法編』 アルク
2004 『世界のことば　出会いの表現辞典』（共著・広東語の項）三省堂

主要論文

1994 「漢藏對音資料拾遺 P.3346 （注音本）」H. Kitamura, T. Nishida, Y. Nagano (eds.) *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics,* The Organizing Committee The 26th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Osaka, pp. 1011-1017.
1995 「香港言語学会の《粤語ピンイン方案》について」『山梨県立女子短期大学紀要』28　pp. 121-140.
1998 「廣西客家陸川方言的合口介音－關於高本漢所構擬的兩種合口介音－」『開篇』17　pp. 7-16.　李 如龍／周 日健主編《客家方言研究》暨南大学出版社　pp. 289-304.

■石川禎浩

著書

2001 『中国共産党成立史』（単著）　岩波書店

訳書

1992–1993 金冲及主編『周恩来伝』上、中、下（共訳）　阿吽社
2004 丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』全5巻（共訳）　岩波書店

主要論文

1994 「東西文明論と日中の論壇」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所　pp. 395-440.
1996 「施存統と中国共産党」『東方学報』京都68　pp. 245-358.
1999 「梁啓超と文明の視座」狭間直樹編『共同研究 梁啓超―西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房　pp. 106-131.
2000 「国共合作の崩壊とソ連・コミンテルン―いわゆる「スターリンの五月指示」をめぐって」『五十周年記念論集』神戸大学文学部　pp. 377-400.
2001 「農村革命へのシフト－中国共産党の農民運動方針とコミンテルン」森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所　pp. 335-360.
2002 〈辛亥革命時期的種族主義與中国人類学的興起〉中国史学会編《辛亥革命與20世紀的中国》中央文献出版社　pp. 998-1020.
2002 The Chinese National Revolution and the Eighth ECCI Plenum: Exploring the Role of the Chinese Delegate "Chugunov". M. Leutner et al. (eds.) *The Chinese Revolution in the 1920s: Between Triumph and Disaster*, London, pp. 141-155.
2002 「20世紀初頭の中国における“黄帝”熱――排満・肖像・西方起源説」『二十世紀研究』3　pp. 1-22.
2004 「初期コミンテルン大会の中国代表（1919-1922年）」森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所　pp. 63-94.
2004 「中国共産党第二回大会について――党史上の史実は如何に記述されてきたか」『東洋史研究』63-1　pp. 70-101.

■稲葉　穣

著書

1992 『慧超往五天竺国伝研究』（共著）　京都大学人文科学研究所

1995 『世界に広がるイスラーム』（講座イスラーム世界の歴史３）（共著） 栄光教育文化研究所
2000 『岩波講座世界歴史6 南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開－15世紀』（共著） 岩波書店
2000 『アジアの歴史と文化８ 西アジア史』(共著) 同朋舎出版

主要論文

1988 「ガズナ朝のハージブ」『西南アジア研究』29 pp.18-37.
1991 「七－八世紀ザーブリスターンの三人の王」『西南アジア研究』35 pp. 39-60.
1994 「ガズナ朝の「王都」ガズナについて」『東方学報』京都66 pp. 200-252.
1995 「ガズナ朝のナディーム」『東方学』89 pp. 104-118.
1997 「*Tārikh-i Bayhaqī* に見える王権観と国家観」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』東方学会 pp. 1403-1414.
1999 「ゴール朝と11-12世紀のアフガニスタン」『西南アジア研究』51 pp. 16-42.
2001 「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」『国際文化研究』5 pp. 16-33.
2003 「ナーイ・カラ石窟開窟の歴史的背景について」『西南アジア研究』58 pp. 83-96.
2004 「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』京都76 pp. 313-382.
2004 Nāy Qal'a, Wujiristān and the Khalaj. In: G. Verardi, *Buddhist Caves of Jāgūrī and Qarabāg-e Ghazni, Afghānistān,* Rome, 2004, pp. 105-108.

■井波陵一

著書

2003 『知の座標――中国目録学』 白帝社
2004 『漢籍目録を読む』京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター東方学資料叢刊第12冊

訳書

1997 王国維『宋元戯曲考』 平凡社
2004 丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』（共訳）

主要論文

1976 「林黛玉論――日常的解体を越えんとして」『中国文学報』26 pp. 44-78.
1986 「『金瓶梅』の構想」『東方学報』京都58 pp. 275-325.
1987 「曹寅について」『東方学報』京都59 pp. 163-215.
1990 「躍動する精神――王国維の文学理論について」『中国文学報』42 pp. 120-149.
1991 「躍動する精神（続）――王国維の史学について」『中国文学報』43 pp. 86-125.
1997 「『楝亭五種』の同校者たち」『東方学報』京都69 pp. 73-203
2001 「王国維の国学――記憶よ、語れ。」 狭間直樹編『京都大学人文科学研究所70周年記念シンポジウム論集 西洋近代文明と中華世界』 京都大学学術出版会 pp. 242-258.
2001 「王国維の歴史研究――アヴァンギャルドの時代に」 宇佐美齊編『アヴァンギャルドの世紀』 京都大学学術出版会 pp. 369-390.
2003 「王国維と二重証拠法」冨谷至編『辺境出土木簡の研究』 pp. 1-39.
2004 「中国におけるヴァルター・ベンヤミン研究について」『東方学報』京都76 pp. 256-312.

■岩井茂樹

著書

1993 『戦後日本の中国史論争』（共著） 河合文化研究所
1995 『アジアの歴史と文化５』（共著） 同朋舎出版
1996 『データによる中国近代史』（共著） 有斐閣（同前韓国語版 申一燮訳 図書出版新書苑 1999.9）
1999 『使琉球録解題および研究』（共著） 榕樹書林
2004 『中国近世財政史の研究』 京都大学学術出版会
2004 『中国近世社会の秩序形成』（編） 京都大学人文科学研究所

訳書

1984 ジェローム・チェン『軍紳政権』（共訳） 岩波書店
1991 張継和『最後の宦官――小徳張』(訳注/解説) 朝日新聞社
1992−1993 金冲及主編『周恩来伝』上、中、下（共訳） 阿吽社

主要論文

1995 「張居正的財政課題與方法」『日本中青年学者論中国史 宋元明清巻』上海古籍出版社 pp. 369-411.
1996 「十六・十七世紀の中国辺境社会」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所 pp. 625-659.
1997 「公課負担団体としての里甲と村」『明清時代史の基本問題』汲古書院 pp. 181-202.
2000 「清代の版図順荘法とその周辺」『東方学報』京都72 pp. 381-449.
2000 「嘉靖四十一年浙江厳州府遂安県十八都下一図賦役黄冊残本考」夫馬進編『中国明清地方档案の研究』 京都大学文学部 pp. 37-56.
2001 「武進県の田土推収と城郷関係」森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所 pp. 3-32.
2003 「大清帝国と伝国の璽」『アジア遊学』第56号 pp. 33-41.
2004 「清朝・朝鮮・對島――一九九三年前後東北亞細亞形勢――」『明清史研究』20（韓國）明清史學會創立二十周年記念國際學術大會 特輯號 pp. 87-102.
2004 「清末の外銷経費と地方経費」森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所 pp.191-224.
2004 「十六世紀中国における交易秩序の模索――互市の現実とその認識――」岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所 pp. 99-144.

■ウィッテルン クリスティアン

著書

1998 *Das 'Yulu' des Chan-Buddhismus. Die Entwicklung vom 8.-11. Jahrhundert am Beispiel des 28. Kapitels des Jingde chuandenglu (1004)*. Schweizerische Asiatische Studien, Monographien Bd.31, Peter Lang, Bern et. al.

訳書

2001 Tsuneki Nishiwaki, *Chinesische und Manjurische Handschriften und seltene Drucke, Teil 3: Chinesische Texte vermischten Inhalts aus der Berliner Turfansammlung*. Franz Steiner Verlag Stuttgart.
2004 *Sekkei Harada: Zen-Erwachen zum wahren Selbst*. Werner Kristkeitz Verlag, Heidelberg.

主要論文

1993 Chinese Character Encoding. *The Electronic Bodhidharma* 3, pp. 44-47.
1994 Code und Struktur: Einige vorläufigeÜberlegungen zum Aufbau chinesischer Volltextdatenbanken. *Chinesisch und Computer* 9, pp. 64-70.
1998 「數位化中文佛教大藏經」『佛教圖書館館訊』15 pp. 24-27.
2000 "Buddhist Studies in the Digital Age"『中華佛學學報』 13.2 pp.461-501.
2001 「漢文電子佛典製作興運用之研究――以『瑜伽師地論』為例」（共著）『中華佛學學報』14 pp.43-53.
2002 Charting of Unknown Territory: Application of Topic Maps to Chan-Buddhist Chronicles. *Journal of Electronic Buddhist Texts* 3, pp. 239-251.
2003 Style and Fashion in Early Song Chan Yulu. *Facets of Tibetan Religious Tradition and Contacts with Neighbouring Cultural Areas*, edited by Alfredo Cadonna and Ester Bianchi, pp. 127-151.

■宇佐美 齊

著書

1975 『詩と時空』 深夜叢書社
1979 『ランボー私註』 国文社
1982 『立原道造』（近代日本詩人選17） 筑摩書房
1989 『落日論』 筑摩書房

1991 『フランス・ロマン主義と現代』(編著)　筑摩書房
1992 『詩人の変奏』　小沢書店
1994 『太陽の記憶』(共著)　淡交社
1997 『象徴主義の光と影』(編著)　ミネルヴァ書房
1997 『フランス詩　道しるべ』　臨川書店
2000 新編中原中也全集第３巻『翻訳・解題篇』(編集・執筆)　角川書店
2001 『アヴァンギャルドの世紀』(編著)京都大学学術出版会
2003 新編中原中也全集第5巻『日記／書簡・解題篇』(編集・共同執筆)　角川書店
2003 新編中原中也全集第4巻『評論／小説・解題篇』(編集・共同執筆)　角川書店
2004 『作家の恋文』　筑摩書房

訳書

1974 フェルナンド・アラバール『鰯の埋葬・バビロンの邪神』(新しい世界の文学・67)　白水社
1979 アポリネール『坐る女』(アポリネール全集第３巻)　青土社
1991 ドラエー、イザンバール、マチルド、イザベル『素顔のランボー』(編訳)　筑摩書房
1992 アルベール・メッサン版『アルチュール・ランボー詩集』(《巨匠たちの自筆原稿叢書》訳詩篇・解題付)　臨川書店
1994 『エリュアール詩集』(編訳)　小沢書店
1996 『ランボー全詩集』(編訳・ちくま文庫)　筑摩書房

主要論文

1993 La Conscience du temps chez Rimbaud. *Arthur Rimbaud, un siècle d'errances* (Presses Universitaires de Lille), pp. 11-20.
1993 「韻文詩翻訳の二つの可能性―上田敏と柳澤健によるLE BATEAU IVRE翻訳の試み―」『人文学報』72　京都大学人文科学研究所　pp. 1-38.
1993 「「私」の肥大と解体―啄木詩の変貌をめぐって―」中西進編『日本文学における「私」』河出書房新社　pp. 202-225
1994 「詩歌の起源と転変―人文学における詩学の位置とその課題―」　山田慶兒・阪上孝編『人文学のアナトミー』岩波書店　pp. 135-157.
1997 Les Métamorphoses du diseur du moi-Maurice de Guérin et la recherche d'une nouvelle langue-. *L'Amitié Guérinienne* 171, pp. 8-26.
1998 「詩における曖昧と想像力」　中西進編『日本の想像力』JDC　pp. 285-307
1998 Baudelaire-Foyer de la poésie symboliste-. *Equinoxe* 15, Rinsen Books, pp. 7-18.
1999 O chansons, ô saisons: deux traductions japonaises de *Bonheur* d'Arthur Rimbaud. *Daruma* (Revue d'études japonaises) 5, pp. 105-130.
2000 L'Etude de la littérature française, de Rousseau à Baudelaire, à l'Institut de Recherche en Sciences Humaines de l'Université de Kyoto, *Zinbun* 34 (1), Kyoto University, pp. 165-178.
2001 中原中也とフランス近代詩　井波律子・井上章一編『文学における近代―転換期の諸相―』国際日本文化研究センター　pp. 75-88.

■エスポジト　モニカ

著書

1993 *La porte du dragon-l'école Longmen du Mount Jin'gai et ses pratiques alchimiques d'après le* Daozang xubian (*Suite au canon taoïste*) [The Dragon Gate-The Longmen School of Mt. Jin'gai and its alchemical practices according to the Daozang xubian]. Ph. D. diss. Université de Paris VII.
1995 *Il qigong, la nuova scuola taoista delle cinque respirazioni* [Qigong, a New Daoist School of the Five Breaths]. Padova: Muzzio.
1997 *L'alchimia del soffio* [The Alchemy of Breath]. Roma: Astrolabio-Ubaldini.

主要論文

1992 Il Daozang xubian, raccolta di testi alchemici della Longmen [The Daozang xubian, a collection of alchemical texts of the Longmen school]. *Annali dell' Istituto Universitario Orientale* LII, 4, pp. 429-449.
1988 The different versions of the *Secret of the Golden Flower* and their relationship with the Longmen school. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* XLIII, Tokyo, pp. 90-109.
1998 Chief compiler of articles on Chinese Religion for the *Dictionnaire Encyclopédique de l'Esotérisme*, edited by Jean Servier. Paris: Presses Universitaires de France ["Absorption des effluves cosmiques" 5-6; "Alchimie féminine" 51-52; "Alchimie intérieure" with Isabelle Robinet, 55-58; "Alcôve" 58-60; "Corps Subtil" 343-345; "Daoyin" 365-367; "Délivrance du cadavre" 377-378; "Exorcisme" 500-502; "Géographie sacrée" 532-534; "Immortalité et Taoïsme" 642-645; "Souffle et respiration embryonnaire" 1216-1218; "Tao" 1262-1263].
1998 「イタリアの漢学と道教研究」『中国人と道教』汲古書院　pp. 83-104.
1999 Orakel in China [Oracles in China]. In A. Langer and A. Lutz (eds), *Orakel -Der Blick in die Zukunft* [Oracles-A View into the Future], pp. 304-314. Zürich: Museum Rietberg.
2000 Daoism in the Qing. In L. Kohn (ed.), *Daoism Handbook*, pp. 623-658. Leiden: Brill.
2001 Longmen Taoism in Qing China–Doctrinal Ideal and Local Reality. *Journal of Chinese Religion* 29, pp. 191-231.
2004 The Longmen School and its Controversial History during the Qing Dynasty. In John Lagerwey (ed.) *Religion and Chinese Society*, vol. 2, pp. 621-698. Hong Kong & Paris: The Chinese University Press and École française d'Extrême-Orient.
2004 Thematic and Annotated Bibliography of Isabelle Robinet (revised and enlarged edition). *Cahiers d'Extrême-Asie* 14 (In Memoriam Isabelle Robinet edited by Monica Esposito & Hubert Durt), pp. 1-42.
2004 Sun-worship in China-The Roots of Shangqing Taoist Practices of Light-Part I Yuyi and Jielin: The Taoist God of the Sun and Goddess of the Moon. *Cahiers d'Extrême-Asie* 14 (In Memoriam Isabelle Robinet edited by Monica Esposito & Hubert Durt), pp. 351-408.

■大浦康介

著書

1996 『文学をいかに語るか――方法論とトポス』(編著)　新曜社
2000 『哲学を読む――考える愉しみのために』(共編著)　人文書院

訳書

1989 Kenji Nakagami, *La Mer aux arbres morts*（仏訳、共訳）Paris, Ed. Fayard.
2001 ピエール・バイヤール『アクロイドを殺したのはだれか』筑摩書房

主要論文

1997 「サドが『神』を口にするとき」阪上孝編『統治技法の近代』同文舘　pp. 189-228.
1997 「〈内的独白〉の誕生――E・デュジャルダンの『月桂樹は刈られた』をめぐって」宇佐美齊編『象徴主義の光と影』ミネルヴァ書房　pp. 292-309.
1998 「ひとはなぜ自分自身のテクストが読めないのか――テクストの一般性にかんする受容理論的考察」『人文学報』81 京都大学人文科学研究所　pp. 79-93.
1998 Le monologue symbolique ? ― à propos des *Lauriers sont coupés*. *Equinoxe* 15, Rinsen Books, pp. 44-53.
2000 Figurines chez Sade. *Equinoxe* 17/18, Rinsen Books, pp. 33-40.
2001 「イエナ派と近代――初期ロマン派にみる〈組織化〉の黎明」『人文学報』84 京都大学人文科学研究所　pp. 1-22.
2001 「宣言の時代とアヴァンギャルド」宇佐美齊編『アヴァンギャルドの世紀』京都大学学術出版会　pp. 4-34.
2002 「写生文と小説のあいだ――漱石『草枕』『虞美人草』『坑夫』」北岡誠司・三野博司編『小説のナラトロジー――主題と変奏』世界思想社　pp. 132-165.
2004 Sade entre vie et fiction. Norbert Sclippa (ed.), *Lire Sade*, Paris, l'Harmattan, pp. 83-92.
2004 「フランス構造主義」『岩波講座 文学・別巻 文学理論』岩波書店　pp. 41-71.

■大原嘉豊

主要論文

2001 「九品来迎図研究における顕密体制論の実効性」『哲学研究』572　pp. 60-107.
2004 「山西省平順県大雲院弥陀殿壁画に関する考察」（共著）『佛教藝術』272　pp. 102-127.
2004 「高麗国王大蔵経写経からみた元朝の宗教政策―太山寺所蔵『大吉祥陀羅尼経・宝賢陀羅尼経』の制作年代の問題に寄せて―」岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所　pp. 23-59.

■岡田暁生

著書

1997 『〈バラの騎士〉の夢――リヒャルト・シュトラウスとオペラの変容』　春秋社
2000 朝日百科世界の文学『オペラの誕生』（共同監修）朝日新聞社
2001 『オペラの運命――十九世紀を魅了した「一夜の夢」』中公新書
2003 『ピアノを弾く身体』（編著）　春秋社

訳書

2001 Iba Takashi, *Japanische Musik. Ein chronologischer Überblick,* Florian Noetzel Verlag （独訳）

主要論文

1991 「劇と音楽の間で――文学オペラの中の伝統的ドラマトゥルギー」『音は生きている』勁草書房　pp. 153-166.
1993 「独創としての編曲――ストラヴィンスキー『プルチネルラ』の詩学」『美学』173　pp. 58-68.
1995 「アドルノの軽音楽批判――幾つかの歴史的前提」『アドルノのポピュラー音楽論』、日本ポピュラー音楽学会ワーキングペーパー6　pp. 31-39.
1996 Europäische Klassik in Japan - Eine dütere Diagnose. Silvain Guignard (ed.): *Musik in Japan*, Indicium Verlag, pp. 179-198.
1996 Zwischen Musik und Drama - Traditionelle Operndramaturgie in der Literaturoper. *AESTHETICS* Nr.7, pp. 121-128.
1996 Oper aus dem Geist der symphonischen Dichtung. Über das Formproblem in den Opern von Richard Strauss. *Archiv für Musikwissenschaft* LIII-3，pp. 234-252.
1999 Vorgeschichte des Octavian-Motivs - eine Untersuchung der Skizzenbücher von Richard Strauss zum Rosenkavalier. Hermann Danuser (ed.): *Musik als Text*, Bärenreiter Verlag, pp. 476-479.
2000 「教養主義・根性主義・技術主義――近代日本の西洋音楽理解をめぐって」『近代日本文化論3　ハイカルチャー』岩波書店　pp. 115-133.
2001 「ヴェルディとイタリア・オペラの国民オペラ化」『季刊ExMUSICA』5　pp. 68-74.
2003 「オペラと効果の美学」『音楽学を学ぶ人のために』世界思想社　pp. 149-162.

■岡村秀典

著書

1988 『世界の大遺跡9　古代中国の遺産』（共著）　講談社
1989 『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』（共編著）　京都大学文学部博物館
1993 『番塚古墳』（共編著）　九州大学文学部考古学研究室
1995 『東北アジアの考古学研究』（共著）　同朋舎出版
1997 『青銅器の図象記号による殷後期社会の研究』　科研成果報告書
1998 『三星堆　中国5000年の謎・驚異の仮面王国』（共著）朝日新聞社
1999 『三角縁神獣鏡の時代』　吉川弘文館
1999 『故宮博物院13　玉器』（共著）　日本放送出版協会
1999 『中国古代王朝形成期における畜産と動物犠牲の研究』科研成果報告書
2000 『中国古代都市の形成』（編著）　科研成果報告書
2000 『世界美術大全集　東洋編第1巻　先史・殷・周』（共編著）　小学館
2002 『中国沿海岸における龍山時代の地域間交流』（編著）科研成果報告書
2002 『文家屯　1942年遼東先史遺跡発掘調査報告書』（編著）真陽社
2003 『シンポジウム　三角縁神獣鏡』（共著）　学生社
2003 『夏王朝　王権誕生の考古学』　講談社

訳書

1988 中国社会科学院考古研究所編著『新中国の考古学』（共訳）　平凡社
1988 梁上椿『巌窟蔵鏡』（共訳）　同朋舎

主要論文

1998 「農耕社会と文明の形成」鶴間和幸編『岩波講座　世界歴史』3　岩波書店　pp. 77-102.
1999 「龍山文化後期における玉器のひろがり」『史林』82-2 pp. 103-129.
1999 「中国古代王権と祭祀」『考古学研究』46-2　pp. 73-91.
2000 「殷代における畜産の変革」『東方学報』京都72　pp. 1-48.
2001 「倭王権の支配構造」『考古学の学際的研究』濱田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ　昭和堂　pp. 335-358.
2001 「殷周時代の動物供犠」小南一郎編『中国の礼制と礼学』朋友書店　pp. 11-64.
2002 「中国古代における墓の動物供犠」『東方学報』京都74 pp. 1-181.
2003 「王墓の成立とその祭祀」『古代王権の誕生』I 東アジア編　角川書店　pp. 212-225.
2003 「先秦時代の供犠」『東方学報』京都75　pp. 1-80.
2004 「中国初期国家の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』119　pp. 349-363.

■籠谷直人

著書

1985 『両大戦間期　日本のカルテル』（共著）　御茶の水書房
1991 『新編　岡崎市史　近代　4』（共著）　岡崎市教育委員会
1997 孫中山生誕130周年記念国際シンポジウム実行委員会編『孫文與華僑』（共著）
1998 佐藤常雄他編『日本農書全集52巻　農産加工3』（共著）（社）農山魚村文化協会
1998 日本福祉大学知多半島総合研究所編『知多半島歴史研究の十年』（共著）　校倉書房
1999 杉山伸也、リンダ・グローブ編『近代アジアの流通ネットワーク』（共著）　創文社
1999 日本孫文研究会・神戸華僑華人研究会『孫文と華僑』（共著）　汲古書院
1999 『岩波講座 世界歴史19　移動と移民-地域を結ぶダイナミズム』（共著）　岩波書店
2000 『アジア国際通商秩序と近代日本』（単著）　名古屋大学出版会
2000 『姫路市史第五巻上　本編　近現代1』（共著）姫路市役所
2001 『1930年代のアジア国際秩序』（共編著）　渓水社
2001 『中国近代の都市と農村』（共著）京都大学人文科学研究所
2001 *Commercial Networks in Modern Asia,*（共著）　Curzon
2002 『グローバル・ヒストリーに向けて』（共著）　藤原書店
2002 『姫路市史　第五巻　下　本編　近現代2』（共著）姫路市教育委員会
2002 *Gentlemanly Capitalism, Imperialism, and Global History,*（共著）　Palgrave
2003 『現代南アジア　6　世界システムとネットワーク』（共著）　東京大学出版会
2003 『帝国の研究―原理・類型・関係―』（共著）　名古屋大学出版会
2004 『イギリス帝国と20世紀　第一巻　パクス・ブリタニカとイギリス帝国』　ミネルヴァ書房

主要論文

1994 「来自亜洲的衝擊與日本近代」『国立台湾師範大学歴史学報』22　pp. 447–88.
1995 「開港後の対アジア貿易と直輸出態勢の模索―日本昆布

会社を事例にして―」『オイコノミカ』31,2-4合併号　名古屋市立大学経済学会　pp. 231-259.
1996 The Role of Chinese Merchants in the Development of the Japanese Cotton Industry, 1880-1934. *Zinbun* 30, pp. 149-183.
1996 「日中戦争前の日本経済外交―第二次「日印会商」（1936-37年）を事例に―」『人文学報』77　pp. 99-140.
1997 「1940年代初頭の日本綿布取引をめぐるアジア通商網―日本綿布輸出組合「南方地域向取引調」の検討―」『人文学報』79　pp. 189-216.
1997 Japanese Cotton-textile Diplomacy in the First Half of the 1930s:The Case of the Dutch-Japanese Trade Negotiations in 1934. *Bulletin of Asia-Pacific Studies* 7, Osaka University of Foregin Studies, pp. 35-44.
1998 「日蘭会商（1934年6月-38 年初頭）の歴史的意義―オランダの帝国主義的アジア秩序と日本の協調外交―」『人文学報』81　pp. 1-46.
1999 「戦前期日本人商社によるインド棉花の奥地買付活動―東洋棉花ボンベイ支店を事例にして―」『人文学報』82 pp.1-19.
2000 「1930年代の日本の綿布輸出統制の実態―日本綿糸布印度輸出組合を事例に―」『人文学報』83　pp. 125-141.
2004 「近代日本の『地域』形成についての一考察」『環』17 藤原書店　pp. 148-163.

■加藤和人

著書

2001 『生き物のかたちと数理－近藤滋氏との対話－』（共編）平成12年度教育改善推進費研究報告書・別冊

主要論文

1990 Rapid and transient decrease of N-myc expression in retinoicacid-induced differentiation of OTF9 teratocarcinoma stem cells. *Molecular & Cellular Biology* 10, pp. 486-491.
1991 Tissue distribution of N-myc expression in the early organogenesis period of the mouse embryo. *Development Growth & Differentiation* 33, pp. 29-36.
1993 Single-cell transplantation determines the time when Xenopus muscle precursor cells acquire a capacity for autonomous differentiation. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the USA* 90, pp. 1310-1314.
1993 Community effects and related phenomena in development. *Cell* 75, pp. 831-834.
1994 An inhibitory effect of Xenopus gastrula ectoderm on muscle cell differentiation and its role for dorsoventral patterning of mesoderm. *Developmental Biology* 163, pp. 222-229.
1997 Modern biology and new perspectives on the relationship between science and society. T.S.Okada (ed.) *Developmental Biology in Half a Century*. (The Taniguchi Foundation Publication) pp. 94-97.
2000 「クローン牛が食卓にやってきた―生物学の歴史からみたクローン実験」葛西奈津子編著 『21世紀に何を食べるか』 恒星出版　pp. 116-129.
2000 「現代生命科学における名づけ」 横山俊夫編『言語力の諸相』（京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊 4）pp. 23-36.
2001 A new way to communicate science to the public: the creation of the Scientist Library. *Public Understanding of Science* 10, pp. 231-241.
2003 「必然としての「進化の操作」―現代社会における人と自然の行方を考える」阪上孝編『変異するダーウィニズム―進化論と社会』　京都大学学術出版会　pp. 559-587.

■菊地　暁

著書

2001 『柳田国男と民俗学の近代－奥能登のアエノコトの二十世紀－』　吉川弘文館

主要論文

1993 「〈大路渡〉とその周辺－生首をめぐる儀礼と信仰－」『待兼山論叢　日本学篇』27　pp. 1-18.
1995 「〈猫〉をめぐる〈厚い記述〉－解釈学的歴史人類学のゆくえ－」　『大阪大学日本学報』14　pp. 1-22.
1999 「民俗文化財の誕生：祝宮静と1975年文化財保護法改正をめぐって」　『歴史学研究』726　pp. 1-13.
2000 「うどんとモダン：豊中市岡町における都市民俗誌のこころみ」　『人文学報』83　pp. 195-225.
2000 「世界のかたすみでブンカを叫んだのけもの：あるいは太田好信著『トランスポジションの思想』をめぐる断想」『大阪大学日本学報』19　pp. 183-193.
2000 「柳田国男と民俗写真－あるアエノコト写真のアルケオロジー－」　『日本民俗学』224　pp. 1-33.
2001 「柳田国男が希望だったころ」　『「柳田国男の会」報告集』7　pp. 17-24.
2003 「日本民俗学教科書との比較から」　TIGAR研究会著・発行　『概説書の分析を通して見る戦後日本の民族学・文化人類学教育の再検討　平成14年度公益信託渋澤民族学振興基金プロジェクト助成研究報告書』　pp. 58-62.
2003 「帝国の『不在』－日本の植民地人類学研究をめぐる覚書－」　山本有三編　『帝国の研究－原理・類型・関係－』　名古屋大学出版会　pp. 357-386.

■金　文京

著書

1989 『花関索伝の研究』（共著）　汲古書院
1989 『中国小説選』　角川書店
1991 『教養のための中国語』　大修館書店
1993 『三国志演義の世界』　東方書店
1995 『広東木魚書目録』（共編）　好文出版
1998 『董解元西廂記諸宮調の研究』（共著）　汲古書院
1999 『龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録－総記・言語・文学之部』（共編）　龍谷大学

訳書

2002 『老乞大』（共訳）平凡社

主要論文

1998 「香菱考－試論『紅楼夢』的另一層結構」『海上論叢』2 pp. 94-107.
1998 「中国の語り物文学－説唱文学」『中国通俗文学への視座』東方書店　pp. 85-125.
1999 「広東木魚書与金蘭会」『嶺南学報』1　pp. 473-480.
2000 「敦煌出土文書から見た唐宋代の賓頭盧信仰」『唐代の宗教』　朋友書店　pp. 195-220.
2000 「敦煌変文の文体」『東方学報』京都72　pp. 243-265.
2001 「湯賓尹与晩明商業出版」『晩明与晩清的文学芸術』中央研究院中国文哲研究所（台湾）pp. 79-102.
2001 「大津皇子『臨終一絶』と陳後主『臨行詩』」『東方学報』京都73　pp. 185-210.
2001 「元雑劇『盆児鬼』考－しゃべるお碗の話」『説話論集』10　清文堂出版　pp. 369-397.
2001 「貴州農村市場における書籍の伝播」『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所　pp. 169-194.
2004 「李斉賢在元事跡考」『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』（平成15年度科研報告）　pp. 243-262.

■倉島　哲

主要論文

1999 「はじまりの認識論のために――モース「身体技法論」に見る認識の発生論――」『京都社会学年報』7 pp. 179-192.
2000 「ハビトゥス概念の批判的検討――『プラチック理論の概要』のテクストから――」『ソシオロジ』45（2） pp. 3-19.
2001 「武術教室における言語と実践――型稽古の記述のこころみ――」『スポーツ社会学研究』9 pp. 71-82.
2001 「情報化と身体の変容――身体的メディア・リテラシーに向けて――」『京都社会学年報』9 pp. 165-176.
2002 「武術教室における身体技法の習得――「線」の感覚を手がかりに――」田辺繁治、松田素二編『日常的実践のエスノグラフィ――語り・コミュニティ・アイデンティテ

ィ――』世界思想社　pp. 142-167.
2003 「意味から慣習へ――「わざ言語」再考――」出会いと文化研究会編『出会いと文化』晃洋書房　pp. 158-186.

■小関　隆

著書

1993 『一八四八年：チャーティズムとアイルランド・ナショナリズム』　未来社
1999 『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』（共編著）柏書房
2000 『世紀転換期イギリスの人びと：アソシエイションとシティズンシップ』（編著）　人文書院

訳書

2001 ドロシー・トムプスン『階級・ジェンダー・ネイション：チャーティズムとアウトサイダー』（共訳）ミネルヴァ書房

主要論文

1988 「アイルランドにおけるチャーティスト運動」『西洋史学』148　pp. 31-44.
1989 「1848年のチャーティズムとアイルランド人移民：ロンドンを中心に」『歴史学研究』590　pp. 1-15.
1990 「ナショナリズムと土地問題：フィンタン・ローラーと青年アイルランド派」『一橋論叢』104-2　pp. 148-166.
1992 「チャーティストの『陰謀』とスパイ：ロンドン、一八四八年」『一橋論叢』107-2　pp. 1-21.
1992 Dublin Confederate Clubs and the Repeal Movement, *Hosei University Ireland-Japan Papers*, no.10, pp. 1-49.
1995 「ヘンリ・ソリと労働者クラブ構想：『合理的レクリエイション』の試み」『東京農工大学一般教育部紀要』31 pp. 19-36.
1996 「労働者クラブにおけるイヴェントと人間関係：1890年代のロンドンを中心に」『一橋大学社会科学古典資料センターStudy Series』37号　pp.1-42.
1998 The Portrait of a Clubman, Richard Gaston, 1840-1901, 『人間と社会』9　pp. 1-79.
1999 John Donnellan Balfe and 1848: A Note on a Confederate Informer, *Saothar: Journal of the Irish Labour History Society*. 23, pp. 25-30.
1999 「アイルランド近現代史におけるナショナリズムと共和主義の『伝統』」（共著）『歴史学研究』726　pp. 22-33.

■小牧幸代

主要論文

1993 「インド・イスラームの聖者信仰：ニザームッディーン廟の事例から」『民族学研究』58-2　pp. 198-210.
1997 「北インド・ムスリム社会の婚姻儀礼と贈与交換：ウッタル・プラデーシュ州C町のサイフィー・ビラーダリーの事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』54　pp. 195-214.
1997 「北インド・ムスリム社会の死の儀礼（上）：ふたりのマハル～ムガル皇妃と寡婦」『SOGI』42　表現社　pp. 75-78.
1998 「北インド・ムスリム社会の死の儀礼（下）：シーア派3代イマームの哀悼行事」『SOGI』43　表現社　pp. 73-76.
1999 「『アヨーディヤー症候群』という病い」木畑洋一他編『〈南〉から見た世界 06 グローバリゼーション下の苦闘：21世紀世界像の探求』大月書店　pp. 199-203.
2000 「北インド・ムスリム社会のザート＝ビラーダリー・システム：ムスリム諸集団の序列化と差異化に関する一考察」『人文学報』83　pp. 275-313.
2002 「インド・イスラーム世界の聖遺物信仰：〈遺されたもの〉信仰の人類学的研究に向けて」『人文学報』87　pp. 103-143.
2003 「英領インド期のセンサスと宗教」小谷汪之編『現代南アジア５：社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会 pp. 11-36.
2004 「パンジャービー民族の自文化表象とイスラーム：聖遺物の展示をめぐって」黒崎卓他編『現代パキスタン分析：民族・国民・国家』岩波書店　pp. 151-177.

■小南一郎

著書

1973 『楚辞』　筑摩書房
1984 『中国の神話と物語り』　岩波書店
1991 『西王母と七夕伝承』　平凡社
1995 『中国古代礼制研究』（編著）　京都大学人文科学研究所
2001 『中国の礼制と礼学』（編著）　朋友書店
2003 『楚辞とその注釈者たち』　朋友書店

訳書

1969 『詩経国風・書経』（共訳）筑摩書房
1970 『五経・論語』（共訳）筑摩書房
1982・1989 陳寿『三国志』（共訳）筑摩書房（1993年に、ちくま学芸文庫に収められて再刊）
1984 夏鼐『中国文明の起源』（NHKブックス）日本放送出版協会
1989 張光直『中国青銅時代』（共訳）平凡社
1993 『出三蔵記集・法苑珠林』（大乗仏典　中国日本篇　3）（共訳）中央公論社
2000 張光直『中国古代文明の形成（中国青銅時代二集）』（共訳）平凡社

主要論文

1991 「王逸「楚辞章句」をめぐって――漢代章句の学の一側面」『東方学報』京都63　pp. 61-114.
1993 「神亭壺と東呉の文化」『東方学報』京都65 pp. 223-312.
1994 「漢代の祖霊観念」『東方学報』京都66　pp. 1-62.
1995 「射の儀礼化をめぐって――その二つの段階」『中国古代礼制研究』　pp. 47-116.
1995 「元白文学集団の小説創作――「鶯鶯伝」を中心にして」『日本中国学会報』47　pp. 63-74.
1995 「世説新語の美学 ―― 魏晋の才と情をめぐって」『中国中世史研究続編』　pp. 434-472.
1997・1998 「干寶「捜神記」の編纂」（上）（下）『東方学報』京都69 pp. 1-71、70　pp. 95-202.
1997 「神亭壺に見る仏教受容の一様相」『東方学会創立50周年記念論集』　pp. 585-598.
2000 「十王経をめぐる信仰と儀礼」『唐代の宗教』pp.159-194.
2003・2004 「盂蘭盆経から目連変文へ」（上）（下）『東方学報』京都75 pp. 81-122、76　pp. 1-84.

■坂本優一郎

著書

2001 『知の教科書・ウォーラーステイン』（共著・解説）講談社

主要論文

2001 「18世紀のロンドン・シティとイギリス政府公債」『西洋史学』200　pp. 2-25.
2002 「オランダ資金と大西洋貿易：18世紀後半イギリスの国際収支をめぐって」『洛北史学』4　pp. 44－66.
2002 「財政軍事国家とスコットランド：19世紀前半の周辺地域政策と国家の変容」『人文学報』87　pp.145－192.

■佐野誠子

主要論文

1999 「二十巻本『捜神記』紫玉条について」『東京大学文学部中国語中国文学研究室紀要』2　pp. 1-24.
2001 「台湾大学所蔵『太平広記』孫潜校本について」『東京大学文学部中国語中国文学研究室紀要』4　pp. 244-253.
2001 「五行志と干宝『捜神記』」『東京大学文学部中国語中国文学研究室紀要』4（「志怪と伝奇―小南一郎先生の研究をめぐって―」の一部）　pp. 67-82.
2002 「五行志と志怪書―「異」を巡る視点の相違―」『東方学』104　pp. 21-35.
2002 「雑伝書としての志怪書」『日本中国学会報』54　pp. 77-91.
2003 「志怪書誕生の素地としての『風俗通義』―『風俗通義』における災異と怪異」『中国―社会と文化』18　pp. 102-119.

■曾布川　寛

著書

1981 『崑崙山への昇仙―古代中国人が描いた死後の世界』中央公論社
1992 『上海博物館　中国・美の名宝　第４巻』（共編著）　日本放送出版協会
1998 『世界美術大全集　東洋編第２巻　秦・漢』（共編著）　小学館
2000 『龍門石窟石刻集成』（編）　東洋学文献センター叢刊第９冊　京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター
2000 『世界美術大全集　東洋編第3巻　三国・南北朝』（共編著）　小学館
2003 『中国五千年の名宝　上海博物館展』（共編著）　大広

主要論文

1977 「五代北宋初期山水画の一考察―荊浩・関仝・郭忠恕・燕文貴―」『東方学報』京都49　pp. 123-214.
1977 「郭熙と早春図」『東洋史研究』35-4　pp. 61-86.
1980 「許道寧の伝記と山水様式に関する一考察」『東方学報』京都52　pp. 451-500.
1982 「明末清初の江南都市絵画」『明清の美術』 平凡社　pp. 165-176.
1986 「秦始皇陵と兵馬俑に関する試論」『東方学報』京都58　pp. 355-462.
1988 「龍門石窟における唐代造像の研究」『東方学報』京都60　pp. 199-397.
1990 「響堂山石窟考」『東方学報』京都62　pp. 165-207.
1991 「南朝帝陵の石獣と磚画」『東方学報』京都63　pp. 115-263.
1993 「漢代画像石における昇仙図の系譜」『東方学報』京都65　pp. 23-221.
1994 「董其昌の文人画」『中華文人の生活』　平凡社　pp. 386-433.

■高木博志

著書

1997 『近代天皇制の文化史的研究―天皇就任儀礼・年中行事・文化財』　校倉書房
1997 『新札幌市史』４、通史四（共著、文化担当）　札幌市
2002 『文化財と近代日本』（共編）　山川出版社

主要論文

1991 「史蹟・名勝の成立」『日本史研究』351　pp. 63-88.
1992 「1880年代、大和における文化財保護」『歴史学研究』629　pp. 15-22.
1995 「初詣の成立―国民国家形成と神道儀礼の創出」　西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社　pp. 201-226.
1995 「日本美術史の成立・試論―古代美術史の時代区分の成立」『日本史研究』400　pp. 74-98.
1999 「桜とナショナリズム―日清戦争以後のソメイヨシノの植樹」　西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房　pp. 147-170.
2000 「近代における神話的古代の創造―畝傍山・神武陵・橿原神宮、三位一体の神武「聖蹟」『人文学報』83　京都大学人文科学研究所　pp. 19-38.
2001 「陵墓の近代―皇霊と皇室財産の形成を論点に」　篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房　pp. 130-152.
2001 「近世の内裏空間・近代の京都御苑」　島薗進ほか編『岩波講座、近代日本の文化史2』岩波書店　pp. 275-310.
2002 「近代天皇制と古代文化―『国体の精華』としての正倉院・天皇陵」　網野善彦ほか編『岩波講座、天皇と王権を考える５』岩波書店　pp. 245-272.
2004 「日本美術史／朝鮮美術史の成立」(朝鮮文)『国史の神話を越えて』 ヒューマニスト社（大韓民国）　pp. 165-195.

■高階絵里加

著書

2000 『異界の海―芳翠・清輝・天心における西洋』 三好企画

訳書

1988 チャールズ・スタッキー『モネ　睡蓮』（共訳）　中央公論社
1989 ドナルド・レノルズ『19世紀の美術』（共訳）　岩波書店
1992 ジャン=ポール・クレペル『モネ』　岩波書店
1993 マリー=ロール・ベルナダック/ポール・デュ・ブーシェ『ピカソ』　創元社
1993 ロバート・ローゼンブラム『オルセー美術館の絵画』（共訳）　中央公論社
1994 サラ・カー=ガム『マネ』　岩波書店
1996 コリン・アイスラー『エルミタージュ美術館の絵画』（共訳）　中央公論社
1997 ピーター・モース『北斎　百人一首うばがゑとき』　岩波書店
2000 ルーシー・ミクルスウェイト『たんけんしよう　なぞとき美術館』　フレーベル館
2001 モニカ・ボーム=デュシェン『シャガール』　岩波書店
2003 カーラ・ラックマン『モネ』　岩波書店

主要論文

1993 「19世紀の絵画における芸術家のイメージ（要旨）」『日仏美術学会会報』12　pp. 60-61.
1993 「山本芳翠《十二支》についての一試論」『近代画説』2　pp. 52-74.
1995 「パリ時代の山本芳翠」『近代画説』4　pp,42-71
1995 Un décor japonais en bretagne. *Revue de l'Art* 109, pp. 60-62.
1996 「黒田清輝の岡倉天心像―《智感情》の主題と成立をめぐって―」『美術史』139　pp. 31-43.
1997 「異種交配の海―山本芳翠《浦島》をめぐって―」『近代画説』5　pp. 49-72.
1997 「パリ時代の山本芳翠［資料編］」『近代画説』6　pp. 53-75.
1998 「山本芳翠の沖縄訪問に関する一試論」『美術史』144　pp. 141-151.
2002 「明治30年代の日本絵画における大気・空間表現―栖鳳・大観と西洋絵画―」『美術フォーラム21』7　pp. 124-129.

■高田時雄

著書

1988 『敦煌資料による中國語史の研究――九・十世紀の河西方言』　創文社
1994 『法顯傳索引』（共編）（京都大学人文科学研究所東洋学文献センター索引叢刊２）
1994 『中國語史の資料と方法』（編著）　京都大学人文科学研究所
1995 *Inventaire sommaire des manuscrits et imprimés chinois de la Bibliothèque Vaticane*, par Paul Pelliot（編）Italian School of East Asian Studies
1996 『東洋学の系譜（欧米篇）』（編著）　大修館書店
1997 『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目録補編』（*Supplément à l'Inventaire sommaire des livres chinois de la Bibliothèque Vaticane.*）（京都大学人文科学研究所東洋学文献センター叢刊７）
1997 『漢字ワードボックス』（共著）　大修館書店
1999 『西域行記索引叢刊 I 大唐西域記』(共編)　京都、松香堂
2000 『西域行記索引叢刊 II 大唐大慈恩寺三藏法師傳』（共編）京都、松香堂
2001 『西域行記索引叢刊 III 洛陽伽藍記・法顯傳・釋迦方志』京都、松香堂
2001 『明清時代の音韻学』（編著）　京都大学人文科学研究所
2002 『草創期の敦煌学』（編著）　知泉書館

訳書

1990 『中国の諸言語』（共訳）　大修館書店

主要論文

1985 「ウイグル字音考」『東方学』70　pp. 150-134
1991 「五姓を説く敦煌資料」『国立民族学博物館研究報告』別冊14　pp. 249-268
1992 「慧超『往五天竺國傳』の言語と敦煌寫本の性格」『慧超往五天竺國傳研究』京都大学人文科学研究所　pp. 197-212
1993 「チベット文字書寫「長巻」の研究（本文編）」『東方学

報』京都65　pp.313-380
1994 「可洪隨函録と行瑫隨函音疏」『中國語史の資料と方法』京都大学人文科学研究所　pp. 109-156
1997 「清代官話の資料について」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』　pp.771-784
1998 「藏文社邑文書二三種」『敦煌吐魯番研究』第三巻 pp.183-190
2000 Multilingualism in Tun-huang. *Acta Asiatica*, 78, pp.49-70
2002 A Note on a 16th Century Manuscript of the "Chinese Alphabet". *A Life Journey to the East, Sinological Studies in Memory of Giuliano Bertuccioli (1923-2001)*, ISEAS, Kyoto, pp. 165-183. edited by Antonino Forte and Federico Masini. Kyoto, Italian School of East Asian Studies, pp. 165-183
2004 The Chinese Language in Turfan with a Special Focus on the Qieyun Fragments. Desmond Durkin-Meisterernst et al. (ed.) *Turfan Revisited – The First Century of Research into the Arts and Culture of the Silk Road*. Dietrich Reimer Verlag, Berlin, pp.333-340

■竹沢泰子

著書

1994 『日系アメリカ人のエスニシティー強制収容と補償運動による変遷』　東京大学出版会
1995 *Breaking the Silence: Redress and Japanese American Ethnicity*. Ithaca: Cornell University Press.
2003 『人種概念の普遍性を問う―植民地主義、国民国家、創られた神話』(編著)　京都大学人文科学研究所
2003 『日系人コミュニティから見た現代アメリカ社会と市民活動』(編著)　国際交流基金　(同英語版2004)
2004 *New Wave: Studies on Japanese Americans in the 21st Century.* (Co-ed. with Brian Hayashi). Institute for Research in Humanities, Kyoto University
2004 『人種概念の普遍性を問う』(編著)　人文書院

主要論文

1987 「アメリカ合衆国におけるステレオタイプとエスニシティー―広告とジョークにみられる民族像」『民族学研究』52　pp. 363-90.
1991 Children of Inmates: The Effects of the Redress Movement among Third Generation Japanese Americans. *Qualitative Sociology* 14, pp. 39-56.
1996 「『白人』と『黒人』の間で―日系アメリカ人の自己と他者」青木保他編『講座　文化人類学　第7巻　移動の民族誌』　岩波書店　pp. 263-292
1997 「アジア人移民の帰化権問題と『人種』」　三輪公忠編『日米危機の起源と排日移民法』　論創社　pp. 219-255.
1998 「グローバリゼーションと移民研究」『移民研究年報』5 pp. 68-81.
1999 Racial Boundaries and Stereotypes: An Analysis of American Advertising. *The Japanese Journal of American Studies* 10 pp. 430-450.
1999 「アメリカ合衆国におけるアジアとヨーロッパ―アジア移民とヨーロッパ系アメリカ人の遭遇と葛藤」『岩波講座世界歴史』23　岩波書店　pp. 111-134.
2002 Nikkeijin and 'Multicultural Coexistence' in Japan: Kobe after the Great Earthquake. Lane Ryo Hirabayashi, et.al. (ed.) *New Worlds, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan,* Stanford University Press, pp. 310-330.
2003 「人種とアメリカ人類学」綾部恒雄編『文化人類学のフロンティア』　ミネルヴァ書房　pp. 3-30.
2003 「アメリカ人類学にみる進化論と人種」阪上孝編『変異するダーウィニズム―進化論と社会』　京都大学学術出版会　pp. 452-489.

■武田時昌

著書

1986 『易の世界』(共著)　新人物往来社
2000 『中国思想の流れ（中)』(共著)　晃陽書房

訳書

1989 『易のニューサイエンス―八卦・太極図とコンピュータ』(共訳)　東方書店
2000 現代語訳『黄帝内経霊枢』下巻（共訳）東洋学術出版社

主要論文

1989 「緯書暦法考―前漢末の経学と科学の交流」　山田慶兒編『中国古代科学史論』京都大学人文科学研究所　pp. 55-120.
1991 「『海島算経』の数理構造」 山田慶児・田中淡編『中国古代科学史論続編』京都大学人文科学研究所　pp. 173-208.
1993 「京房の災異思想」　中村璋八編『緯学研究論叢』平河出版社　pp. 66-84.
1998 「灸経から針経へ―黎明期の中国医学とその史的展開」田中淡編『中国技術史の研究』京都大学人文科学研究所 pp. 555-598.
2000 「祖沖之の数学的業績(1) 円周率の算定」『東方学報』京都72　pp. 658-690.
2000 「孔子の予言書―緯書の偽作と孔子説話」『説話・伝承学』8　pp. 14-27.
2001 「明治期の洋算と和算」狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会　pp. 394-409.
2002 「中世の数学と術数学―科学と宗教の習合点をめぐって」麥谷邦夫編『中国中世社会と宗教』道気社　pp. 203-221.
2003 「物類相感をめぐる中国的類推思考」『中国21』15　pp. 107-126.
2003 「加藤弘之の進化学事始」阪上孝編『変異するダーウィニズム―進化論と社会』京都大学学術出版会　pp. 265-317.

■田中　淡

著書

1975 『茨城県指定文化財鹿島神宮仮殿修理工事報告書』鹿島神宮
1978 『世界の博物館 第21巻 故宮博物院』(共著)　講談社
1980 『伊賀新大仏寺発掘調査報告書』(共著)　新大仏寺
1980 『世界の文化史蹟 第17巻 中国の古建築』(共編)　講談社
1989 『中国建築史の研究』　弘文堂
1991 『中国古代科学史論 続篇』(共編)　京都大学人文科学研究所
1992 『中国科学史国際会議:1987京都シンポジウム報告書』(共編)　京都大学人文科学研究所
1997 『中国造園史文献目録』(編)　京都大学人文科学研究所
1998 『中国技術史の研究』(編)　京都大学人文科学研究所
2003 『中国古代造園史料集成―増補哲匠録疊山篇 秦漢-六朝』(共編)　中央公論美術出版

訳書

1976 劉敦楨『中国の住宅』(共訳)　鹿島出版会
1979 アンドリュー・ボイド『中国の建築と都市』　鹿島出版会
1979 ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明 第10巻 土木工学』(共訳)　思索社
1981 中国建築史編集委員会編『中国建築の歴史』　平凡社
1982 劉敦楨『中国の名庭－蘇州古典園林』　小学館
1982 中国建築科学研究院『中国の建築』(共訳)　小学館
1984 于倬雲『紫禁城宮殿』(共訳)　講談社
1993 祁英涛『中国古代建築の保護と維持修理』(監訳)　古都調査保存協力会

主要論文

1983 「昆明円通寺の碑文と建築・池苑」『佛教藝術』151 pp. 56-71.
1985 「古代中国画像の割烹と飲食」『論集東アジアの食事文化』 平凡社 pp. 245-316.
1987 「中国建築からみた寝殿造の源流」『古代文化』 39-11 pp. 7-27.
1988 「中国建築、庭園と鳳凰堂－天宮楼閣、神仙の苑池」『平等院大観 第1巻 建築』　岩波書店　pp. 73-84.
1988 「『墨子』城守諸篇の築城工程」『古代中国科学史論』京都大学人文科学究所　pp. 395-448.
1990 「中国造園史における初期的風格と江南庭園遺構」『東方学報』京都62　pp. 125-164.
1990 「中国の高床住居－その源流と展開」『住宅建築』181

pp. 28-34.
1992 Early Japanese Horticultural Treatises and Pure Land Buddhist Style: Sakuteiki and Its Background in Ancient Japan and China. *Garden History-Issues, Approaches, Methods,* ed. Hunt, Dumbarton Oaks,Washington, pp. 79-95.
2000 「『營造法式』自序看詳総釈部分校補訳註(上)」『東方学報』京都72　pp. 771-813.
2001 「中国建築の知識は如何なる媒体を通じて日本に伝えられたか―工匠、模型・図面、そして書籍」『考古学の学際的研究―濱田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ』　昭和堂　pp. 85-114.

■田中雅一

著書

1997 *Patrons, Devotees and Goddesses: Ritual and Power among the Tamil Fishermen of Sri Lanka*. New Delhi: Manohar.
1997 『島根半島の祭祀と祭祀組織』（編著）島根県古代文化センター
1998 『暴力の文化人類学』（編著）京都大学学術出版会
1998 『女神――聖と性の人類学』（編著）平凡社
1999 *Living with Śakti: Gender, Sexuality and Religion in South Asia.*(co-ed.) (*Senri Ethnological Studies* 50) National Museum of Ethnology.
2002 『供犠世界の変貌――南アジアの歴史人類学』法藏館
2002 『植民地主義と人類学』（共編）関西学院大学出版会
2004 『ミクロ人類学の課題』（共編）　世界思想社
2004 『ジェンダーから学ぶ文化人類学』（共編）　世界思想社

訳書

1995 アデル・ゲティ『女神――生ける自然の母』（平凡社イメージの博物誌30）（共訳）(*Goddess: Mother of Living Nature* by Adele Getty. London: Thames and Hudson, 1990)　平凡社
2001 ルイ・デュモン著『ホモ・ヒエラルキクス――カースト体系とその意味』（共訳）(Louis Dumont, *Homo Hierarchicus: Le systéme des castes et ses implications* 1979)　みすず書房

主要論文

1999 「射精する性――男性のセクシュアリティ言説をめぐって」　西川祐子・荻野美穂編『共同研究　男性論』人文書院　pp. 183-200.
2000 Sacrifice Lost and Found: Colonial India and Postcolonial Lanka. *Zinbun* 34(1): pp. 127-146.
2000 「大東亜共栄圏のインド――戦中の邦語文献におけるカーストと民衆ヒンドゥー教」中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社　pp. 45-69.
2001 「英国における実用人類学の系譜――ローズ・リヴィングストン研究所をめぐって」『人文学報』84　pp. 83-109.
2002 「南インドの太陽崇拝――タイ・ポンガル祭をめぐって」松村一男・渡辺和子編『世界の太陽神と太陽信仰』LITHON.　pp. 121-131.
2002 「主体からエージェントのコミュニティへ――日常的実践への視角」田辺繁治・松田素 二編『日常的実践のエスノグラフィ――語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社　pp. 337-360.
2003 Hinduism in Singapore: Ethno-nationalization in Process. Junji Koizumi (ed.) *Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies*. Osaka University Press, pp. 15-34.
2003 Religion in Everyday Life. Veena Das (ed.) *The Oxford India Companion to Sociology and Anthropology*. Oxford University Press, pp. 861-883.
2003 「親族研究における進化概念の受容――進化から変容へ」阪上孝編『変異するダーウィニズム ―― 進化論と社会』京都大学学術出版会　pp. 159-189.
2003 「もう一つの在日――米軍基地の人類学的研究をめぐって」大阪大学21世紀COEプログラム　インターフェイスの人文学　2002-2003年度報告書『トランスナショナリティ研究 ――場を越える流れ』（小泉潤二、栗本英世責任編集）大阪大学　pp. 31-41.

■田中祐理子

主要論文

2000 「疲れの病理学――P.ジャネにおける『病気』と『治療』」『超域文化科学紀要』5　東京大学大学院超域文化科学専攻　pp. 102-118.
2000 「免疫的生態と『身体』の接触」　小林康夫・松浦寿輝編『表象のディスクール3・身体――皮膚の修辞学』東京大学出版会　pp. 177-198.
2001 「主題としての『臨床』――臨床経験の人間学的寄与について」『臨床死生学』6　pp. 1-7.
2003 「1900年的臨床身体・試論」『表象文化論研究』1　pp. 84-97.

■谷川　穣

著書

2000 『吉田清成関係文書　三』（吉田清成関係文書研究会・共編）　思文閣出版

主要論文

2000 「教部省教化政策の転回と挫折―『教育と宗教の分離』を中心として―」『史林』83-6　pp. 977-1009.
2002 「〈奇人〉佐田介石の近代」『人文学報』87　pp. 57-102.
2003 「明治前期における僧侶養成学校と『俗人教育』―真宗本願寺派普通教校の設置をめぐって―」『日本の教育史学』46　pp. 25-43.
2003 「明治六年松本小教院事件―教部省教化政策の地方的展開、あるいは『教化』と『教育』のはざま―」『日本史研究』492　pp. 1-28.

■富永茂樹

著書

1973 『健康論序説』エッソ・スタンダード石油（再刊：1977河出書房新社）
1980 『生と死の弁証法』（共著）　岩波書店
1981 『アンデス高地都市』（共著）　刀水書房
1984 『自尊と懐疑－文芸社会学をめざして』(共編)　筑摩書房
1989 『学問の現在』(共編)　駸々堂
1991 『日本の環境教育』(共著)　ぎょうせい
1996 『都市の憂鬱－感情の社会学のために』　新曜社
1998 『ミュージアムと出会う』　淡交社
2001 『資料 権利の宣言―1789』(編著)　京都大学人文科学研究所
2002 『文化社会学への招待』(共編)　世界思想社

訳書

1979 『資料 初期社会主義』(共訳)　平凡社
1985 ジラール『身代わりの山羊』(共訳)　法政大学出版局
1989 『資料 フランス革命』(共訳)　岩波書店
1990 デュムシェル / デュピュイ『物の地獄－ルネ・ジラールと経済の論理』(共訳)　法政大学出版局
1995 フュレ / オズーフ『フランス革命事典』(共訳)　みすず書房
1997 『ラルース社会学辞典』(共訳)　弘文堂
2000 ゴーシェ『代表制の政治哲学』(共訳)　みすず書房

主要論文

1993 「立法者の死－政治の宗教社会学のために」『社会学評論』175　pp. 284-297.
1994 L'impossible groupement intermédiaire: été-automne 1791, *Zinbun*, 28, Kyoto University, pp. 1-22.
1996 Voice and Silence in the Public Space : the French Revolution and the Problem of the Secondary Group, *Cahier d'épistémologie*, 9607, pp. 3-22.
1997 「バスティーユからビセートルへ－ひとはどのようにして《市民》となるのか」阪上孝編『統治技法の近代』同文舘出版 pp. 51-84.
1997 Conserver et exposer : la naissance du musée, *Annuaire de la Société franco-japonaise de Sociologie*, no. 9, pp. 1-9.
1998 Conversation and Debate : Transformation of Sociability in Late

Eughteenth-Century France, *Zinbun*, 32, Kyoto University, pp. 51-69.

1999 Autour de la liberté de la presse, *Zinbun,* 34(1), Kyoto University, pp. 147-163.

2002 「記憶の重層―パトリック・モディアノ『新婚旅行』その他」亀山・富永・清水編『文化社会学への招待』世界思想社　pp. 236-258.

2003 「フランス革命と社会学」『社会学雑誌』20　pp. 42-61.

2003 「中間集団の声と沈黙」『人文学報』88　pp. 33-82.

■冨谷　至

著書

1992 校注『本朝度量権衡考』１・２　平凡社

1994 『ゴビに生きた男たち－李陵と蘇武』　白帝社

1995 『古代中国の刑罰－髑髏が語るもの』　中央公論社

1998 『秦漢刑罰制度の研究』　同朋舎

2001 『流沙出土の文字資料』　京都大学学術出版会

2002 『中国人物列伝』（共著）　恒星出版

2003 『辺境出土木簡の研究』　朋友書店

2003 『韓非子』　中央公論新社

2003 『木簡・竹簡の語る中国古代――書記の文化史』　岩波書店

訳書

1986 『漢書五行志』（共訳）　平凡社

主要論文

1998 「二一世紀の秦漢史研究――簡牘資料」『岩波講座　世界歴史』3　岩波書店　pp. 251-276.

1999 「復讐と刑罰――前近代中国の場合」新田義之編『文化のダイナミズム』大学教育出版　pp. 146-159.

2000 「秦漢の律と令」『日本秦漢史学会会報』第１号　pp. 111-122.

2000 「晋泰始律令への道　第1部　秦漢の律と令」『東方学報』京都72　pp. 79-131.

2001 「晋泰始律令への道　第2部　魏晋の律と令」『東方学報』京都73　pp. 49-84.

2001 「スウェーデン国立民族学博物館所蔵未発表紙文書」『流沙出土の文字資料』京都大学学術出版会　pp. 177-214.

2001 「３世紀から４世紀にかけての書写材料の変遷」『流沙出土の文字資料』京都大学学術出版会　pp. 477-526.

2003 「亭制に関する一考察」冨谷至編『辺境出土木簡の研究』pp. 367－499.

2004 「江陵張家山漢墓出土『二年律令』訳注稿　その（１）」『東方学報』京都76　pp. 109-208.

2004 「二年律令に見える法律用語　その（１）」『東方学報』京都76　pp. 221-255.

■中西裕樹

著書

2003 『畲語海豐方言基本詞彙集』（編集）（京都大學人文科學研究所言語史叢刊第一冊）

主要論文

1999 「從歷時的角度看萬載客家話的語音特点」『開篇』18、pp. 62-68.

2001 “A preliminary report on She language.” 池田巧編『論集：東・東南アジアの少数言語の現地調査』文部科学省科学研究費特定領域研究（A）　環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究　pp. 97-106.

2003 “200 basic sentences of She language.”　池田巧編『論集：東・東南アジアの少数言語の現地調査2』文部科学省科学研究費特定領域研究　環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究　pp. 259-284.

2003 「畲語海豐方言故事四則」　北野浩章編『論集：東・東南アジアの少数言語の現地調査3』文部科学省科学研究費特定領域研究　環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究　pp. 119-154.

■藤井律之

主要論文

2001 「特進の起源と変遷―列侯から光禄大夫へ―」『東洋史研究』59-4　pp. 1-38.

■藤井正人

訳書

1988 R.G.ワッソン+W.D.オフラハティ著『聖なるキノコ―ソーマ』（共訳）せりか書房

主要論文

1984 On the unexpressed gāyatra-sāman in the Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa.『印度学仏教学研究』32-2 pp. 1123-1121(1-3).

1986 The Bahiṣpavamāna Ritual of the Jaiminīyas. 大阪大学文学部『待兼山論叢』20 哲学篇　pp. 3-25.

1987 The Gāyatra and Ascension to Heaven (Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 1,1-7; 3,11-14).『印度学仏教学研究』35-2, pp. 1005-1002 (16-19).

1990 「二道説の成立――後期ヴェーダの再生説――」『日本仏教学会年報』 55　pp. 43-56.

1994 On the Textual Formation of the Nīlamata-Purāṇa. In: Y. Ikari (ed.), *A Study of the Nīlamata ―Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir―*, Institute for Research in Humanities, Kyoto University, pp. 55-82.

1995 「古代インド宗教歌詠の思想性 ――哲学生成の一断面――」 山田慶兒・阪上孝編『人文学のアナトミー』 岩波書店　pp. 99-114.

1996 「Kena-Upaniṣad (=Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 4,10 [4,18-21])」『今西順吉教授還暦記念論集 インド思想と仏教文化』 春秋社　pp. 842-107(107-128).

1997 On the Formation and Transmission of the Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa. In: Michael Witzel (ed.), *Inside the Texts, Beyond the Texts: New Approaches to the Study of the Vedas*, Harvard Oriental Series, Opera Minora 2, Cambridge, pp. 89-102.

2000 A Common Passage on the Supreme Prāṇa in the Three Earliest Upaniṣads (JUB 1, 60-2,12; BĀU 1, 3; ChU 1, 2). *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanites, Kyoto University*, 34(2), pp. 51-86.

2001 The Brahman Priest in the History of Vedic Texts. In: K. Karttunen & P. Koskikallio (eds.), *Vidyārṇavavandanam: Essays in Honour of Asko Parpola, Studia* Orientalia 94, Helsinki, pp. 147-160.

■藤原辰史

主要論文

2000 「農用トラクターの〈ナチズム体験〉――トラクターと農民はどのように〈変身〉を遂げたのか」『現代文明論』 1 pp. 123-153.

2001 「ナチ期農民の〈変身〉過程――化学肥料とトラクターの普及のなかで」『現代文明論』2　pp. 123-222.

2002 「もうひとつのチャヤーノフ受容史――橋本伝左衛門の理論と実践」『現代文明論』3　pp. 101-129.

2003 「有機農業の〈ナチズム体験〉」『現代文明論』4　pp. 82-107.

2004 「総力戦とエコロジズム――「戦時農業」をめぐるナチスの言説から」『現代文明論』5　pp. 35-52.

■船山　徹

主要論文

1995 Arcaṭa, Śāntarakṣita, Jinendrabuddhi, and Kamalaśīla on the Aim of a Treatise (*prayojana*). *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie* 39. pp. 181-201.

1995 「六朝時代における菩薩戒の受容過程――劉宋・南斉期を中心に」『東方学報』京都67　pp. 1-135.

1998 「陶弘景と仏教の戒律」吉川忠夫編『六朝道教の研究』

春秋社　pp. 353-376.
1998 「『目連問戒律中五百軽重事』の原形と変遷」『東方学報』京都70　pp. 203-290.
1999 Kamalaśila's Interpretation of 'Non-erroneous' in the Definition of Direct Perception and Related Problems. *Dharmakirti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. pp. 73-99.
2000 「カマラシーラの直接知覚論における「意による認識」(mānasa)」『哲学研究』569　pp. 105-132.
2000 「梁の僧祐撰『薩婆多師資伝』と唐代仏教」吉川忠夫編『唐代の宗教』朋友書店　pp. 325-353.
2001 On the Date of Vinītadeva. Raffaele Torella (ed.) *Le Parole e i Marmi*. Roma: IsIAO, pp. 309-325.
2002 「捨身の思想――六朝仏教史の一断面」『東方学報』京都74　pp. 358-311.
2002 「「漢訳」と「中国撰述」の間――漢文仏典に特有な形態をめぐって」『仏教史学研究』45-1　pp. 1-28.

■古松崇志

著書

2002 『学びの世界―中国文化と日本―』(共著) 京都大学附属図書館・総合博物館・大学院文学研究科 (pp. 43-56.「禅籍と五山版」)

主要論文

1998 「宋代における役法と地方行政経費―財政運営の一研究―」『東洋史研究』57-1　pp. 29-66.
1999 「唐代後半の進奉と財政」『古代文化』51-4,　pp. 15-27.
2000 「元代河東塩池神廟碑研究序説」『東方学報』京都72 pp. 347-379.
2002 「『勅修百丈清規』版本小考」『古典学の再構築ニューズレター』12　pp. 72-77.
2003 「元代江南の禅宗と日本五山―『勅修百丈清規』の成立と流伝―」『古典学の現在』V　pp. 127-147.
2003 「脩端「辯遼宋金正統」をめぐって―元代における『遼史』『金史』『宋史』三史編纂の過程―」『東方学報』京都75　pp. 123-200.
2003 「女真開国伝説の形成―『金史』世紀の研究―」「古典学の再構築」研究成果報告集V『論集　古典の世界像』pp. 184-197.
2004 「附属図書館谷村文庫蔵『勅修百丈清規』元刊本・五山版―元代江南禅宗と日元文化交流の歴史を解明する重要資料―」『京都大学附属図書館報　静脩』40-3　pp. 7-11.

■前川和也

著書

1967 『世界の歴史２　古代オリエント』(共著) 河出書房新社
1973 『世界史年表』(共著) 河出書房新社
1993 『家族・世帯・家門　工業化以前の世界から』(編著) ミネルヴァ書房
1997 『ステイタスと職業　社会はどのように編成されていたか』(編著) ミネルヴァ書房
1998 『世界の歴史１　人類の起原と古代オリエント』(共著) 中央公論社
2001 『コミュニケーションの社会史』(編著), ミネルヴァ書房

主要論文

1992 The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (VIII). *Acta Sumerologica* 14, pp. 173-243.
1993 The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (IX). *Acta Sumerologica* 15, pp. 107-129.
1994 The management of fatted sheep (udu-niga) in Ur III Girsu-Lagash. Supplement 2, BM 87494. *Acta Sumerologica* 16, pp. 165-176.
1995 The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (X). *Acta Sumerologica* 17, pp. 176-231.
1996 Confiscation of private properties in the Ur III period. A study of é-dul-la and níg-GA. *Acta Sumerologica* 18, pp. 103-168.
1996 The governor's family and the "temple households" in Ur III Girsu. in: K. Veenhof (ed.). *Houses and Households in Ancient Mesopotamia. Papers read at the 40th Rencontre Assyriologique Internationale, Leiden, July 5-8, 1993*, Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten (Leiden), pp. 171-179.
1997 Confiscation of private properties in the Ur III Period. A Study of é-dul-la and níg-GA (2). Supplement 1. *Acta Sumerologica* 19, pp. 273-291.
1997 The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (XI). *Acta Sumerlogica* 19, pp. 113-145.
1999 The "temples" and the "temple personnel" of Ur III Girsu-Lagash. in: K. Watanabe (ed.) *Priests and Officials in the Ancient Near East. Papers of the Second Colloquium on the Ancient Near East: The City and its Life, held at the Middle Eastern Culture Center in Japan (Mitaka, Tokyo), March 22-24 1996*, Universitätsverlag C. Winter (Heidelberg), pp. 61-102.
2001 The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (XII). *Zinbun* 34(2), pp. 145-166.

■真下裕之

著書

2002 *Royal Asiatic Society classics of Islam.* (編著) RoutledgeCurzon
2002 『英国・アイルランド王立アジア協会の単行書シリーズについて』Edition Synapse

主要論文

1995 「16世紀前半のグジャラートとポルトガル－港市ディーウをめぐる諸関係－」『東洋史研究』53-4　pp. 102-140.
1996 「Jos. J. L. Gommans 著 *The Rise of Indo-Afghan Empire c. 1710-1780*」『西南アジア研究』44　pp. 45-55.
1999 「インドの図書館案内－イスラーム写本研究のために－」『イスラム世界』52　pp. 106-114.
1999 「*Akbar Nāmah* と *Ṭabaqāt-i Akbarī* －manṣab 制度史研究序説－」『西南アジア研究』51　pp. 43-74.
2000 「16世紀前半北インドの Muġul について」『東方学報』京都 72　pp. 738-720.
2001 The discrepancy of chronology of *Ṭabaqāt-i Akbarī*: An introduction to a survey of manuscripts. *Zinbun* 35, pp. 39-71.
2002 A historiographical study of the so-called *Aḥwāl-i Asad Bīg*. *Zinbun* 36-1, pp. 51-103.

■水野直樹

著書

1991 『「アリランの歌」覚書』(共編著)　岩波書店
1996 『朝鮮近現代史における金日成』(共著)　神戸学生青年センター出版部
1996 『論集 朝鮮近現代史』(共編)　明石書店
1997 『京都における朝鮮人の歴史・資料集（第１冊）――『社会時報』関係記事――』　世界人権問題研究センター
1998 『戦時期　植民地統治資料』全７巻（編集）　柏書房
2001 『朝鮮総督論告・訓示集成』全６巻・別冊（編集）　緑蔭書房
2001 『日本の植民地支配――肯定・賛美論を検証する――』(共編著)　岩波ブックレット
2002 『歴史教科書の可能性――「つくる会」史観を超えて――』(共編)　青木書店
2003 『日朝交渉――課題と展望――』(共編)　岩波書店
2004 『生活の中の植民地主義』(編著)　人文書院

訳書

1985 姜萬吉著『韓国民族運動史論』御茶の水書房
1994 朝鮮民衆新聞社編『写真集　朝鮮解放１年』新幹社

主要論文

1992 「東方被圧迫民族連合会（1925-27）について」狭間直樹編『中国国民革命の研究』京都大学人文科学研究所報告 pp. 309-350.
1996・97 「在日朝鮮人・台湾人参政権『停止』条項の成立」世界

人権問題研究センター『研究紀要』1　pp. 43-65　2　pp. 59-82.
1996 「在満朝鮮人親日団体民生団について」『論集 朝鮮近現代史』明石書店　pp. 329-361.
1997 「戦時期の植民地支配と『内外地行政一元化』」『人文学報』79　pp. 77-102.
1999 「朝鮮人の国外移住と日本帝国」岩波講座『世界歴史』第19巻　pp. 255-275.
2000 「治安維持法の制定と植民地朝鮮」『人文学報』83 pp.97-123.
2000 「満洲抗日闘争の転換と金日成」『思想』912 pp. 133-161.
2001 「国籍をめぐる東アジア関係――植民地期朝鮮人国籍問題の位相――」古屋哲夫・山室信一編『近代日本における東アジア問題』吉川弘文館　pp. 211-237.
2002 「朝鮮植民地支配と名前の『差異化』――『内地人ニ紛ハシキ姓名』の禁止をめぐって――」山路勝彦・田中雅一編著『植民地主義と人類学』関西学院大学出版会　pp. 143-164.
2004 「植民地独立運動に対する治安維持法の適用――朝鮮・日本『内地』における法運用の落差――」浅野豊美・松田利彦編『植民地帝国日本の法的構造』信山社　pp. 417-459.

■宮　紀子

著書

2002 『学びの世界――中国文化と日本――』（共著）京都大学附属図書館・総合博物館・文学研究科
2004 『NHKスペシャル文明の道⑤モンゴル帝国』（共著）NHK出版社

主要論文

1998 「『孝経直解』の挿絵をめぐって」『東方学』95　pp.79-93.
1998 「『孝経直解』の出版とその時代」『中国文学報』56　pp. 20-57.
1999 「鄭鎮孫と『直説通略』（上）（下）」『中国文学報』58　pp. 46-74.　59　pp. 99-132.
1999 「大徳十一年『加封孔子制誥』をめぐる諸問題」『中国――社会と文化』14　pp.135-154.
2001 「程復心『四書章図』出版始末攷――大元ウルス治下における江南文人の保挙――」『内陸アジア言語の研究』16 pp. 71-122+6pls
2001 「モンゴル朝廷と『三国志』」『日本中国学会報』53　pp. 165-179.
2002 「『廟学典礼』箚記」『東方学』104　pp. 50-63.
2003 「『対策』の対策――大元ウルス治下における科挙と出版――」木田章義編『古典学の現在V』文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「古典学の再構築」　pp. 5-126.
2003–2004 「モンゴルが遺した『翻訳』言語――旧本『老乞大』の発見によせて――（上）（下）」『内陸アジア言語の研究』18　pp. 53-96.　19　pp. 157-209.
2004 「『混一疆理歴代国都之図』への道――14世紀四明地方の『知』の行方――」藤井譲治・杉山正明・金田章裕編『絵図・地図からみた世界像』京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」　pp. 3-130.

■宮宅　潔

主要論文

1995 「漢令の起源とその編纂」『中国史学』5　pp. 109-129.
1996 「漢代請讞考－理念・制度・現実－」『東洋史研究』55-1 pp.1-34.
1998 「秦漢時代の裁判制度－張家山漢簡《奏讞書》より見た－」『史林』81-2　pp. 35-68.
2000 「秦漢時代の爵と刑罰」『東洋史研究』58-4　pp.1-32.
2001 「『勃』小考－中国古代裁判制度の展開－」『神女大史学』18　pp. 22-42.
2003 「漢代の敦煌戦線と食糧管理」冨谷至編『辺境出土木簡の研究』朋友書店　pp. 205-244.
2004 「張家山漢簡《二年律令》解題」『東方学報』京都76 pp. 209-220.

■麥谷邦夫

著書

1985 『老子想爾注索引』　朋友書店
1991 『眞誥索引』　京都大学人文科学研究所
2000 『眞誥研究（譯注篇）』（共編）　京都大学人文科学研究所
2002 『道樞一字索引』（共編）　松香堂
2002 『中國中世社會と宗教』（編著）　道氣社
2003 『周氏冥通記研究（譯注篇）』（共編）　京都大学人文科学研究所
2003 『周氏冥通記索引』　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター
2003 『太上老君説常清靜經註索引』　道氣社

訳書

1983 『老子・列子』学習研究社
1987 『養性延命録訓注』（昭和61年度文部省科学研究費補助金一般研究（A）「中國古代養生思想の總合的研究」研究報告書）

主要論文

1986 「南北朝隋初唐道教教義學管窺――以《道教義樞》爲綫索」『日本學者論中國哲學』中華書局　pp. 267-323.
1992 「『大洞眞經三十九章』をめぐって」『中國古道教史研究』同朋舎出版　pp. 55-87.
1993 「梁天監十八年紀年銘墓磚と天監年間の陶弘景」『中國中世の文物』京都大学人文科学研究所　pp. 291-314.
1995 Daoqi: Existence Between God and Man. *The Comparison between Concepts of Life-Breath in East and West*. Ishiyaku EuroAmerica Inc. pp. 67-80.
1998 「陶弘景の醫藥學と道教」『六朝道教の研究』春秋社 pp. 313-330.
1999 「唐玄宗《道德眞經》注疏之撰述與其思想特徵」『道家文化研究』15　pp. 357-374.
2000 「唐代老子注釋學と佛教」『北朝隋唐　佛教思想史』法藏館　pp. 456-474.
2000 「穀食忌避の思想－辟穀の傳統をめぐって－」『東方学報』京都72　pp. 181-212.
2002 「眞父母考－道教における眞父母の概念と孝をめぐって－」『中國中世社會と宗教』道氣社　pp. 19-38.
2004 「竹中通庵『古今養性録』と貝原益軒『願生輯要』『養生訓』」『宮澤正順博士古希記念　東洋　－比較文化論集－』pp. 181-196.

■村上　衛

主要論文

2000 「清末廈門における交易構造の変動」『史学雑誌』109-3 pp. 43-68.
2000 「五港開港期廈門における帰国華僑」『東アジア近代史』3 pp. 112-130.
2003 「閩粤沿海民の活動と清朝――九世紀前半のアヘン貿易活動を中心に－」『東方学報』京都75　pp. 201-271.
2004 「清朝と漢奸－アヘン戦争時の福建・広東沿海民対策を中心に－」森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所　pp. 3-34.

■森　時彦

著書

1983 『五四時期の民族紡績業』『五四運動の研究』第２函　同朋舎
1985 『中国歴史学の新しい波』（共編著）　霞山会
1985 『留法勤工倹学運動小史』（史会来・尚信共訳）　河南人民出版社
1996 『データでみる中国近代史』（共著）　有斐閣
2001 『中国近代の都市と農村』（編著）　京都大学人文科学研究所
2001 『中国近代綿業史の研究』　京都大学学術出版会
2003 『中国近代社会の変容についての数量データと基礎的資料の収集と分析－研究と資料－』（編著）平成12～14年度

科学研究費補助金　基盤（B）(1) 研究成果報告書
2004 『中国近代化の動態構造』(編著)　京都大学人文科学研究所

訳書

1976 何長工『フランス勤工倹学の回想－中国共産党の一源流』(共訳)　岩波新書
1992–1993 金冲及主編『周恩来伝』上、中、下（共訳）　阿吽社

主要論文

1987 「第二次広東軍政府時期の孫文」愛知大学法経学会『法経論集』法律編113　pp. 199-239.〔(中文訳)「第二次広東軍政府時期的孫中山」『孫中山和他的時代』中華書局1989年、上册　pp. 790-820.〕
1989 「論民族工業 “黄金時期” 和国内市場的形成」『五四運動与中国文化建設』社会科学文献出版社、下册　pp. 1071-1099.
1992 「日本棉紡工業資本対華投資与中国花紗市場－関於印棉運華聯益会的歴史意義」蒋永敬等編『近百年中日関係論文集』中華民国史料研究中心　pp. 283-297.
1994 「土紗与機紗在近代中国的対抗－関於価格関係的剖析」『辛亥革命与近代中国』中華書局、下册　pp. 937-955.
1995 「人口論の展開からみた一九二〇年代の中国」狭間直樹編『一九二〇年代の中国』汲古書院　pp. 159-186.
1999 「梁啓超の経済思想」狭間直樹編『共同研究　梁啓超』みすず書房　pp. 229-254.〔(中文訳)「梁啓超的経済思想」　『梁啓超・明治日本・西方』社会科学文献出版社2001年　pp. 218-243.〕
2000 「生計学と経済学の間」『東方学報』京都72　pp. 503-523.〔(英文訳) Liang Qichao and Western Modernity: An Analysis of His Translations of the Term “Political Economy”, in Joshua A. Fogel (ed.) *The Role of Japan in Liang Qichao's Introduction of Modern Western Civilization to China,* Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley, 2004, pp. 15-39.〕
2001 「武進工業化と城郷関係」森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所　pp. 253-276.
2002 「辛亥革命前後河北省新河県的人口動態」『辛亥革命与20世紀的中国』中央文献出版社　pp. 1446-1471.
2004 「中国綿業近代化の動態構造」森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所　pp. 225-242.

■守岡知彦

著書

2001 『インターネット時代の文字コード』（共著）共立出版

主要論文

1997 Structure of User Interface Module for Practical Internet Messages. *Lecture Notes in Computer Science* 1345, pp. 373-374.
1998 Architecture of a User Interface Modul for Structured Internet Messages. *Lecture Notes in Computer Science* 1368, pp. 462-471.
2000 「GNU Emacsen における複数の MUA で共有な可能な Internet Messageのための汎用部品の開発」『平成12年度「未踏ソフトウェア創造事業」開発成果論文』　情報処理振興事業協会 (http://www.ipa.go.jp/NBP/12nendo/12mito/mdata/2-25h/2-25h.pdf)
2001 「文字データベースに基づく文字オブジェクト技術の構築」(共著)『平成13年度「未踏ソフトウェア創造事業」開発成果論文』 情報処理振興事業協会(http:/www.ipa.go.jp/NBP/13nendo/reports/explorat/charadb/charadb.pdf)
2002 「文字知識に基づく文書処理環境の現状と未来」*Linux Conference 2002* (http://lc.linux.or.jp/lc2002/papers/morioka0919p.pdf)
2002 「ポスト文字コード時代の文書処理技術に関する展望」全国文献・情報センター人文社会科学学術セミナーシリーズ 12『データベースの活用と人文社会科学』　神戸大学経済経営研究所附属政策研究リエゾンセンター　pp. 59-70.
2003 「文字画像のマークアップの試み」『東洋学へのコンピュータ利用』第14回研究セミナー
2003 CHISE Project（共著）漢字文献情報処理研究編『漢字文献情報処理研究』4　好文出版　pp. 58-69.
2003 「文字知識処理環境 CHISE の基盤ソフトウェア」(共著)『Linux Conference 抄録集』第1巻　日本リヌックス協会
2004 「文字定義のこと」『シンポジウム「文字情報処理のフロンティア 過去・現在・未来」予稿集』 花園大学 国際禅学研究所

■森本淳生

著書

2002 『小林秀雄の論理――美と戦争』 人文書院

主要論文

1997 Signe et opération. Une étude du formalisme valéryen à l'époque des premiers Cahiers, *Zinbun* 31, pp. 135-168.
1997 Genèse du sujet ― Les premiers Cahiers de Valery et les idées contemporaines―, *Zinbun* 32, pp. 1-50.
1999 Agathe ou la genèse du sujet ― Valery dans les idées contemporaines ―, *Etudes de langue et littérature françaises* 74, Société japonaise de langue et littérature françaises, pp. 111-124.
1999 Le dédoublement impossible ― Une lecture du Mémoire sur l'attention 『ヴァレリー研究』 1　pp. 1-50.
1999 「『危機』のディスクール－ヴァレリーと『ヨーロッパ精神』の隘路－」『仏文研究』30　京都大学フランス語学フランス文学研究会　pp. 165-184.
2000 Entre Agathe et le Mémoire sur l'attention－Essai sur l'imaginaire valéryen－, *Etudes de langue et littérature françaises* 76, Société japonaise de langue et littérature françaises, pp. 141-153.
2000 「ポール・ヴァレリーと表象=代理の『危機』」『人文学報』83　pp.315-336
2001 Du schématisme à l'imaginaire－quelques remarques sur le problème de l'image chez Valéry　『ヴァレリー研究』 2　pp. 39-54.
2001 「近代の表裏－ヴァレリーとブルトン」宇佐美齊編著『アヴァンギャルドの世紀』　京都大学学術出版会　pp. 35-72.
2001 L'imaginaire valéryen et le schématisme kantien, *in Valéry, 'en somme'* (Colloque à Sète, 9-11 mai 2000), éd. Serge Bourjea, *Bulletin des études valéryennes*, 88/89, L'Harmattan, pp. 175-187.

■矢木　毅

主要論文

1994 「高麗王言考」『史林』77-1　pp. 95-115.
1995 「朝鮮における進士概念の変遷」『東洋史研究』54-3　pp. 118-148.
1996 「朝鮮初期の徒流刑について」梅原郁編『前近代中国の刑罰』　pp. 467-495.
1998 「高麗における軍令権の構造とその変質」『東方学報』京都70　pp. 291-327.
1999 「朝鮮初期の笞杖刑について」『史林』82-2　pp. 69-102.
2000 「高麗国初の広評省と内議省」『東方学報』京都72　pp. 267-301.
2000 「高麗時代の銓選と告身」『東洋史研究』59-2　pp. 1-30.
2001 「朝鮮における漢語・吏文の習読について」小南一郎編『中国における通俗文学の発展及びその影響』　pp. 65-90.
2002 「高麗時代の内侍と内僚」『朝鮮学報』184　pp. 43-76.
2003 「高麗時代の宰相制度――合坐制とその周辺――」『朝鮮学報』189　pp. 1-30.

■安岡孝一

著書

1992 『誰にでも使えるUNIX講座』 ソフトバンク
1993 *Logic Synthesis and Optimization.* (T.Sasao ed.) Kluwer Academic Publishers

1999 『文字コードの世界』(共著) 東京電機大学出版局
2001 『インターネット時代の文字コード』(共編) 共立出版

主要論文

1992 An Efficient Algorithm for Generating Mixed-Polarity Reed-Muller Expansions Using Shared Binary Decision Diagrams, *International Symposium on Logic Synthesis and Microprocessor Architecture in ISKIT '92*, pp. 196-199.
1995 A New Method to Represent Sets of Products, *IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications, and Computer Sciences*, Vol. E78-A, No. 12, pp. 1722-1728.
1996 「コンピュータ異体字典の制作」 『第9回語彙・辞書研究会』 pp. 1-10.
1997 「「𠮟」はなぜJIS X 0221に含まれているのか―Unicode幽霊字研究―」 『情報処理学会研究報告』 Vol. 97, No. 80 (人文科学とコンピュータ研究報告No.35), 97- CH-35-9, pp. 49-54.
2000 「JIS X 0213の符号化表現」 『人文学と情報処理』 第26号, pp. 9-17.
2000 The Fastest Multiplier on FPGAs with Redundant Binary Representation, *Proceedings of 10th International Conference FPL 2000,* pp. 515-524.
2001 「分散メモリ型ベクトル並列計算機上での高速整数ソーティングアルゴリズムの実装」 『情報処理学会論文誌: ハイパフォーマンスコンピューティングシステム』 Vol.42, No.SIG 9(HPS 3), pp. 45-53.
2001 「日本における最新文字コード事情」 『システム/制御/情報』 Vol.45, No. 9, pp. 528-535.（前編）No.12, pp. 687-694.（後編）
2003 「キー配列の規格制定史 日本編 ― JISキー配列の制定に至るまで」『システム/制御/情報』Vol.47, No.12, pp. 559-564.
2004 「キー配列の規格制定史 アメリカ編 ― ANSIキー配列の制定に至るまで」『システム/制御/情報』Vol.48, No.2, pp. 39-44.

■山崎　岳

主要論文

2003 「巡撫朱紈の見た海――明代嘉靖年間の沿海衛所と『大倭寇』前夜の人々」 『東洋史研究』62-1 pp. 1-38.

■山室信一

著書

1984 『法制官僚の時代―国家の設計と知の歴程―』 木鐸社
1985 『近代日本の知と政治』 木鐸社
1988 『学問と知識人』(共編) 岩波書店
1990 『言論とメディア』(共編) 岩波書店
1992 『近代日本の意味を問う』(共著) 木鐸社
1993 『キメラ―満洲国の肖像』 中央公論社
1998 『日本・中国・朝鮮間の相互認識と誤解の表象』(編) 京都大学人文科学研究所
1999 『中江丑吉文庫目録』(編) 京都大学人文科学研究所
1999 『明六雑誌』上 (校注・共編) 岩波書店
2001 『近代日本における東アジア問題』(共編) 吉川弘文館
2001 『思想課題としてのアジア―基軸・連鎖・投企―』 岩波書店
2001 『近代日本的東北亜区域秩序構想』中央研究院東北亜区域研究
2002–2003 『アジア新世紀』(共編) 全８巻 岩波書店
2003 『ユーラシアの岸辺から―同時代としてのアジアへ―』 岩波書店
2003 『多にして一のアジア』(ハングル版) ソウル・チャンギ出版
2004 『増補版・キメラ―満洲国の肖像―』 中央公論新社

主要論文

1994 「明治国家の制度と理念」『岩波講座・日本通史17・近代2』 岩波書店 pp. 113-148.
1997 「民族協和の幻像―満洲帝国の逆説」山内昌之他編『帝国とは何か』岩波書店 pp. 225-249.
1997 「政治社会における倫理―忘却と未到の間で―」鶴見俊輔他編『現代日本文化論9・倫理と道徳』岩波書店 pp. 69-100.
1998 「植民帝国・日本の構成と満州国－統治様式の遷移と統治人材の周流」ピーター・ドウス、小林英夫編『帝国という幻想―「大東亜共栄圏」の思想と現実―』青木書店 pp. 155-202.
2000 Form and Function of the Meiji State in Modern East Asia. *Zinbun* 34-1, pp. 179-196.
2001 「帝国と民族」『20世紀の定義〔４〕―越境と難民の世紀―』岩波書店 pp. 19-34.
2002 「空間アジアをめぐる認識の拡張と変容」青木保・山室信一ほか編『アジア新世紀・空間』岩波書店 pp. 29-56.
2003 「『国民帝国』論の射程」山本有造編『帝国の研究―原理・類型・関係―』名古屋大学出版会 pp. 87-128.
2004 「明治維新とアジアの変革」井上勲編『日本の時代史・20―開国と幕末の動乱―』吉川弘文館 pp. 271-307.
2004 「面向未来的回憶―他者認識和価値創建的視角―」中国社会科学研究会編『中国与日本的認識』中国社会科学文献社 pp. 14-31.

■横山俊夫

著書

1986 『京都大学人文科学研究所蔵日本関係欧文図書総覧 ― 1950年以前刊行分』(編著) 京都大学人文科学研究所調査報告 34
1987 *Japan in the Victorian Mind, A Study of Stereotyped Images of a Nation, 1850-80.* London: Macmillan Press
1988 『一八、一九世紀節用集の政治社会学的研究』(編著) 昭和60年度文部省科学研究費補助金 一般研究（B）報告書 京都大学人文科学研究所
1989 『安定期社会における人生の諸相 ― 老人と子供』(共編著) 京都ゼミナールハウス
1991 『安定期社会における人生の諸相 ― 仕事と余暇』(共編著) 京都ゼミナールハウス
1992 『視覚の一九世紀 ―人間・技術・文明』(編著) 思文閣出版
1992 『安定期社会における人生の諸相 ― 年中行事』(共編著) 京都ゼミナールハウス
1995 『貝原益軒 ― 天地和楽の文明学』(編著) 平凡社
1996 『安定社会の総合研究 ― ものをつくる・つかう』(共編著) 京都ゼミナールハウス
1997 『安定社会の総合研究 ― ことがおこる・つづく／なかだちをめぐって』(共編著) 京都ゼミナールハウス
1998 『日用百科型節用集の使われかた ― 地小口手沢相の電算画像処理による使用類型析出の試み』(共著) 京都大学人文科学研究所調査報告 38
1998 『安定社会の総合研究 ― ことがゆらぐ・もどる／なかだちをめぐって』(共編著) 京都ゼミナールハウス
1998 『二十一世紀の花鳥風月 ― 熱き風流を語る』(共編著) 中央公論社
1999 『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』(共編著) 平成8-10年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (A)(1) 研究成果報告書 京都大学人文科学研究所
1999 『上江洲家・吉濱家・與世永家・宮城家文書目録（稿）』(共編著) 平成8-10年度文部省科学研究費補助金 基盤研究 (A)(1) 研究成果報告書 京都大学人文科学研究所
2000 『人文学の新時代―現代自然科学との対話をもとめて』(共編著) 京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊２
2000 『安定社会の総合研究 ― 安定社会をみる・かたる／ことばをめぐって』(共編著) 京都ゼミナールハウス
2000 『言語力の諸相 ― 試行的共同研究報告』 京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊４
2001 *A Prelude-Symposium for Future Seoul/Kyoto Symposia on Language Problems in the Modern Sciences.*(共編著) 京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊５
2002 『鮫島尚信在欧書簡集』(共編著) 思文閣出版
2002 『前近代久米島文化の復元―未公開の家文書群の学際的実地検証をふまえた解読による』(共編著) 平成11-13年度科学研究費補助金 基盤研究(A)(1) 研究成果報告書

京都大学人文科学研究所

2002 『前近代久米島文化の復元　上江洲家・與世永家・吉濱家・宮城家文書目録』（共編著）上記科学研究補助金　研究成果報告書別冊Ⅰ　京都大学人文科学研究所

2002 *The Kyoto/Seoul Symposium on Linguistic Challenges in the Modern Sciences: First Movement.*（共編著）　京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊７

2004 『十九世紀日本における日用百科書による礼法知識伝播についての政治社会学的研究』平成14-15年度科学研究費補助金　基盤研究（C）(2)　研究成果報告書　京都大学大学院地球環境学堂

訳書

1973 A. クレイグ、D. シャイヴリ編『日本の歴史と個性（上）― 近世』（共訳）ミネルヴァ書房

1988 M. フレイザー著、H. コータッツィ編『英国公使夫人の見た明治日本』淡交社

主要論文

1992 「画像処理による節用集（日用百科書）の使用実態の分析」（共同執筆）『情報処理学会研究報告』92=45/CH-92-45. pp. 37-44.

1995 Die Rolle der Setsuyoshu im Zivilizations- und Kulturprozess. S. Formanek & S. Linhart (eds.) *Buch und Bild als gesellschaftliche Kommunikationsmittel in Japan einst und jetzt.* Wien: Literas, pp. 75-92.

1995 「達人への道 ―『楽訓』を読む」上記『貝原益軒』pp. 25-68.

2000 In Quest of Civility: Conspicuous Uses of Household Encyclopedias in Nineteenth-Century Japan. *Zinbun* 34(1), pp. 197-222.

2000 「方言の力」上記『言語力の諸相』京都大学人文科学研究所所収　pp. 1-21.

2002 「大雑書考 ― 多神世界の媒介」『人文学報』86　pp. 25-79.

2002 「上江洲家の語彙集―久米島書物文化の一断章」上記科学研究費補助金　基盤研究（A）(1)　研究成果報告書所収 pp. 97-110.

2002 Civilising the Usage of the Word, *Civilisation*. 上記 The Kyoto/Seoul Symposium on Linguistic Challenges..., *Occasional Seminar Reports of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University* 7, pp. 87-99.

2003 「久米島具志川間切の日選び」久米島西銘誌編集委員会編『久米島　西銘誌』所収　pp. 820-835.

2004 Experiencing a Sustainable Society-Thoughts on the Civilising Role of *Setsuyôshû* and *Ôzassho*, Two Popular Household Encyclopedias in Premodern Japan. 上記科学研究費 補助金　基盤研究（C）(2）研究成果報告書所収　pp. 17-31.

個人研究（2004年度）

人文学研究部

教授●	宇佐美齊	フランスの詩学
	大浦康介	文学理論の研究
	富永茂樹	フランス革命と近代的主体の成立
	前川和也	シュメール行政・経済文書の研究
	田中雅一	在日米軍を中心とする軍事共同体の人類学的研究
	藤井正人	ヴェーダ文献の生成と伝承の研究
	水野直樹	近代朝鮮の政治と社会
	山室信一	近代東アジアにおける日本の法と政治
	横山俊夫	前近代日本の文明史的研究
助教授●	岡田暁生	音楽におけるロマン派とメロドラマ的音楽
	籠谷直人	戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク
	加藤和人	現代社会における生物学・生命科学
	小関　隆	19世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム
	高木博志	近代天皇制の文化史的研究
	高階絵里加	近代日本の芸術と西洋
	竹沢泰子	人種・エスニシティ論
助手●	李　昇燁	近代朝鮮在住日本人社会の研究
	菊地　暁	近代日本民俗誌システムの研究
	倉島　哲	身体技法の認識論
	小牧幸代	南アジア・ムスリム社会の社会構造
	坂本優一郎	近世ヨーロッパの国際金融研究
	田中祐理子	近代西洋医学発展史研究および身体論
	谷川　穣	近代日本における教育／教化／宗教の関係史
	藤原辰史	ナチス・ドイツの農業問題
	森本淳生	ポール・ヴァレリーと20世紀の思想

東方学研究部

教授●	浅原達郎	先秦時代の金文
	井波陵一	清代の文化と社会
	岩井茂樹	近代中国の財政と社会
	金　文京	中国の小説、演劇及び講唱文学の歴史
	小南一郎	中国古代の伝承文化研究
	曽布川寛	中国美術の様式と意味
	高田時雄	敦煌写本の言語史的研究
	武田時昌	中国伝統科学の思想史的考察
	田中　淡	中国建築の様式・技術・空間
	冨谷　至	中国古代中世の法制
	麥谷邦夫	道教思想研究
	森　時彦	近代中国の綿紡績業
助教授●	池田　巧	川西走廊の漢藏諸語の記述研究
	石川禎浩	中国共産党史の研究
	稲葉　穣	イスラーム東漸史の研究
	Wittern, Christian	仏教研究知識ベース―禅仏教を例として―
	Esposito, Monica	清代の道教龍門派の歴史及び内丹の研究
	岡村秀典	古代中国の考古学研究
	船山　徹	インド・中国における仏教の学術と実践
	宮宅　潔	秦漢制度史の研究
	矢木　毅	高麗官僚制度研究
	安岡孝一	文字コード理論
助手●	大原嘉豊	中国仏教絵画の研究
	佐野誠子	中国魏晋南北朝志怪の成立背景
	中西裕樹	客家語およびその周辺言語の記述研究
	藤井律之	中国古代中世の官制史
	古松崇志	中国近世の国家支配の研究
	真下裕之	ムガル朝時代の歴史叙述の研究
	宮　紀子	モンゴル時代の文化政策と出版活動
	村上　衛	近代華南沿海地域の社会経済変動
	守岡知彦	文字定義情報に基づく文書表現系に関する研究
	山崎　岳	明代後期「北虜南倭」時代の中国社会

施設

京都大学の本部がある時計台の西、吉田神社の社頭東一条に人文科学研究所の本館がある。1975年5月落成。鉄筋4階建、敷地2,097m²、建坪4,405m²、人文学研究部の全部と東方学研究部の一部が使用、事務室もここにある。設計は棚橋諒氏。本館と日仏会館の間に見えるのが、本所西館（旧日独文化研究所）である。

本館の東北1キロ、北白川の住宅地にある分館。東方文化学院京都研究所の所屋として1930年11月峻工。設計は東畑謙三氏。スペインの僧院を模したロマネスク様式に東洋風を加味した美しい建物。中央の尖塔の左側が書庫、背後に研究棟を持つ。敷地4,228m²、建坪2,712m²。現在は漢字情報研究センターと東方学研究部が共同で使用している。

「本館」は、地上４階、地下１階からなっている。１階には、所長室、事務室、会議室、ロビー、応接室などの諸施設があり、２階には、大・小会議室、談話室、図書室ならびに閲覧室があり、そのほかは研究室にあてられている。３階・４階は主として研究室となっているが、会議室もある。また、地階は、機械室、電気室、倉庫などにあてられている。書庫は、４層である。また、西側に隣接していたドイツ文化研究所を当研究所が1983年９月より使用することになり、「西館」と命名された。「西館」は研究用会議室、書庫、資料収蔵室等として利用されている。

「分館」は、北白川の住宅街にあり、地上２階、地下１階。１階は、ホールのほか、漢字情報研究センター事務室、会議室、応接室、および研究室などにあてられ、２階は、講堂（平常は閲覧室として使用）、書庫、図書室となっている。書庫は、鉄骨３層で採光に留意した特殊な構造で、主として漢籍を収蔵する。建物の老朽化対策と書庫の収容能力向上のため、1996年から翌年にかけて「分館」の大規模な改修工事が行われた。これにともない、旧管理人室および地下のかなりの部分が書庫として利用されるようになったが、将来における蔵書の確実な増加を見込んだ解決策とはなっていない。また、学術的評価の高い考古発掘資料、考古美術参考品、雲岡石窟調査資料、拓本、古地図等の莫大な量にのぼるこれら資料を収蔵するため、資料収蔵庫が分館の敷地内に1980年３月に新築されている。

「本館」ならびに「分館」の、敷地面積などは、つぎのとおりである。

建物名称	敷地面積	建築面積	建物延面積
本館	2,097㎡	1,068㎡	4,405㎡
西館	469㎡	201㎡	487㎡
分館	4,228㎡	1,692㎡	2,712㎡

（収蔵庫・管理人室を含む）

歴代職員(1949年　統合以後)

【歴代所長】

貝塚茂樹	1949.10.1〜1955. 9.30
塚本善隆	1955.10.1〜1959. 9.30
桑原武夫	1959.10.1〜1963. 9.30
森　鹿三	1963.10.1〜1967. 9.30
	1969. 4.1〜1970. 3.31
薮内　清	1967.10.1〜1969. 3.31
河野健二	1970. 4.1〜1974. 3.31
	1978. 4.1〜1980. 3.31
林屋辰三郎	1974. 4.1〜1978. 3.31
福永光司	1980. 4.1〜1982. 3.31
上山春平	1982. 4.1〜1984. 3.31
吉田光邦	1984. 4.1〜1985. 3.31
柳田聖山	1985. 4.1〜1986. 3.31
竹内　實	1986. 4.1〜1987. 3.31
尾崎雄二郎	1987. 4.1〜1989. 3.31
谷　泰	1989. 4.1〜1991. 3.31
吉川忠夫	1991. 4.1〜1993. 3.31
阪上　孝	1993. 4.1〜1997. 3.31
	2001.11.1〜2003. 3.31
山本有造	1997. 4.1〜1999. 8.31
桑山正進	1999. 9.1〜2001.10.31
森　時彦	2003. 4.1〜現在

【名誉所員】

牧田諦亮
日比野丈夫
太田武男
飯沼二郎
梅棹忠夫
上山春平
柳田聖山
竹内　實
尹田道太郎
林巳奈夫
中村賢二郎
尾崎雄二郎
山田慶兒
荒井　健
古屋哲夫
山下正男
小野和子
梅原　郁
谷　泰
吉川忠夫
荒牧典俊
狹間直樹
礪波　護
阪上　孝
井狩彌介
山本有造
佐々木　克

【事務長】

吉田良馬	1949. 8〜1951. 8
生駒正教	1951. 8〜1954.11
上野左門	1954.11〜1958. 3
宮谷慶四郎	1958. 4〜1960. 3
石本弥一	1960. 4〜1962. 2
上田明吉	1962. 2〜1967. 3
西村源次	1967. 4〜1970. 3
位ノ花一郎	1970. 4〜1973. 3
岩井良吉	1973. 4〜1975. 3
笠原茂樹	1975. 4〜1977. 3
伊佐憲治	1977. 4〜1979. 1
丸田義雄	1979. 1〜1981. 3
渡邊徳造	1981. 4〜1982. 3
人見輝雄	1982. 4〜1984. 3
須羽治夫	1984. 4〜1986. 3
長谷川心	1986. 4〜1988. 3
中澤　清	1988. 4〜1991. 3
山本安武	1991. 4〜1993. 3
川合教博	1993. 4〜1996. 3
木村重雄	1996. 4〜1998. 3
永井　修	1998. 4〜2000. 3
竹内克己	2000. 4〜2002. 3
舟山逸子	2002. 4〜2004. 3
井本雅昭	2004. 4〜現在

【所員・助手】

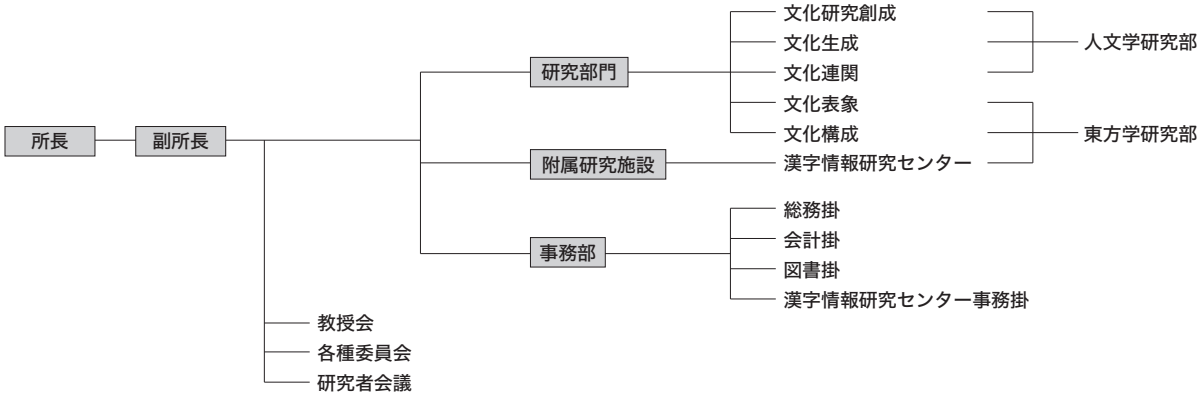
1949年統合以後に本研究所を去った研究職員

	在職期間
木村英一	1940. 5〜1949. 8
大島利一	1934. 4〜1949. 3
荒木敏一	1940. 4〜1949. 8
喜多村俊夫	1939.11〜1949. 5
柏　祐賢	1939.11〜1949. 5
上村鎮威	1940. 4〜1949.10
宮川尚志	1939. 1〜1949.11
小畑龍雄	1940. 2〜1949.12
長尾雅人	1937. 3〜1950. 2
松田一政	1946. 2〜1951. 6
杉之原寿一	1946. 2〜1951. 6
永井道雄	1944.10〜1951.11
前川貞次郎	1946.12〜1952. 3
安達生恒	1943. 2〜1952. 4
重松俊明	1939.10〜1952. 4
梅溪　昇	1950. 5〜1953. 2
紀篤太郎	1947. 7〜1953. 4
溝川喜一	1950. 6〜1953. 6
鶴見俊輔	1948.11〜1953.12
新井（伊藤）洋子	1950. 4〜1954. 3
越智　昇	1950. 6〜1954. 4
飯田晶子	1950. 9〜1954. 4
森口兼二	1949. 2〜1954. 5
天野元之助	1948.11〜1955. 5
入矢義高	1939. 4〜1955. 7
後藤　靖	1950. 3〜1956.10
田中　裕	1949. 3〜1957. 4
岡崎　敬	1951. 9〜1957.10
本山幸彦	1949.12〜1958. 3
吉田静一	1953. 4〜1958. 4
坂本慶一	1951.10〜1958.11
安部健夫	1940. 3〜1959. 2
伊藤道治	1950. 3〜1959. 6
富岡次郎	1956. 4〜1960. 2
塚本善隆	1929. 5〜1961. 2
米田賢次郎	1950. 3〜1961. 4
勝藤　猛	1956.10〜1963. 3
楠瀬　勝	1954. 6〜1964.12
山田　稔	1951. 1〜1964.12
今西錦司	1949. 6〜1965. 3
倉田淳之助	1934. 3〜1965. 3
松岡　保	1958.11〜1965. 3

宮崎市定　1946.10〜1949.5
　　1959.4〜1961.3
　　1963.4〜1965.3
鹿子木幹雄　1965.4〜1966.3
江口圭一　1958.4〜1966.3
藤吉慈海　1943.4〜1966.3
中村　哲　1959.5〜1966.3
牧　康夫　1949.9〜1966.12
貝塚茂樹　1932.5〜1968.3
桑原武夫　1948.11〜1968.3
水野清一　1930.12〜1968.3
清水盛光　1947.6〜1968.3
竺沙雅章　1958.4〜1968.3
加藤秀俊　1953.9〜1968.1
薮内　清　1935.3〜1969.3
長広敏雄　1929.4〜1969.3
岩村　忍　1950.6〜1969.3
古原宏伸　1965.10〜1969.3
米田治泰　1966.7〜1969.3
坂田吉雄　1943.3〜1970.3
森　鹿三　1929.5〜1970.3
小川環樹　1965.6〜1970.3
福島吉彦　1965.9〜1970.3
佐伯　富　1968.4〜1970.3
井口和起　1966.6〜1970.6
松尾尊兌　1953.10〜1970.12
石毛直道　1965.11〜1971.3
藤岡喜愛　1951.11〜1972.3
筧　文生　1963.6〜1964.11
　　1967.4〜1972.3
脇本　繁　1948.11〜1972.3
望月（栖川）節子
　　1968.10〜1973.3
衣川　強　1968.10〜1973.3
竹内成明　1965.4〜1973.4
平岡武夫　1938.11〜1973.4
小野川秀美　1933.4〜1973.4
梅棹忠夫　1965.8〜1973.4
船越昭生　1961.7〜1973.5
井上忠司　1969.4〜1973.9
橋本敬造　1966.6〜1974.3
三宅一郎　1957.4〜1974.3
愛宕　元　1970.8〜1974.7
永田英正　1962.4〜1975.3
市原亨吉　1950.10〜1975.4
田中重雄　1942.7〜1975.4
藤枝　晃　1937.7〜1975.4
中西恵子　1966.4〜1975.4
松原正毅　1971.10〜1975.9
島田虔次　1949.12〜1975.10
野村雅一　1972.7〜1976.3
樺山紘一　1969.12〜1976.3
田中謙二　1949.6〜1950.6
　　1956.4〜1976.4
牧田諦亮　1946.4〜1948.3
　　1950.11〜1976.4
井上　清　1954.1〜1977.4
日比野丈夫　1936.3〜1977.4
三浦國雄　1972.5〜1977.3
林屋辰三郎　1970.5〜1978.4
熊倉功夫　1971.4〜1978.5
秋山元秀　1973.12〜1978.10
内井惣七　1967.4〜1979.3
茂木信之　1975.3〜1979.3
副島昭一　1970.12〜1979.3
夫馬　進　1974.9〜1979.3
松田　清　1974.3〜1979.3
會田雄次　1952.5〜1979.3
深沢一幸　1977.5〜1980.3
河野健二　1947.5〜1960.2
　　1968.4〜1980.4
池田秀三　1975.12〜1980.4
見市雅俊　1974.3〜1981.3
大前　真　1974.12〜1981.3
渡部　徹　1948.11〜1981.4
太田武男　1948.11〜1981.4
飯沼二郎　1954.2〜1981.4
江村治樹　1975.4〜1981.11
御牧克己　1975.12〜1982.3
福永光司　1947.3〜1948.3
　　1961.4〜1982.4
今井　清　1945.9〜1983.3
田中峰雄　1977.4〜1983.3
松井　健　1976.4〜1983.3
コーニッキー・ピーター
　　1983.4〜1984.12
濱田正美　1976.8〜1984.3
川勝義雄　1950.12〜1984.4
上山春平　1954.4〜1984.3
吉田光邦　1949.12〜1985.3
矢淵孝良　1980.4〜1985.3
平田昌司　1981.10〜1985.3
園田英弘　1974.4〜1985.6
柳田聖山　1976.4〜1986.3
天野史朗　1979.5〜1987.3
竹内　實　1973.5〜1987.3
宮嵜法子　1980.4〜1987.3
井上章一　1980.4〜1987.5
赤松明彦　1983.7〜1987.10
夛田道太郎　1949.12〜1988.3
樋口謹一　1949.10〜1955.6
　　1961.4〜1988.3
杉山正明　1979.4〜1988.3
鈴木祥二　1979.4〜1988.3
林　武実　1985.11〜1988.3
細川弘明　1983.7〜1988.3
淺田　彰　1981.10〜1989.2
江田憲治　1985.4〜1989.3
尾崎雄二郎　1975.4〜1989.3
林巳奈夫　1957.12〜1989.3
中村賢二郎　1965.4〜1989.3
山田慶兒　1959.10〜1966.3
　　1970.5〜1989.3
杉本俊宏　1980.4〜1989.10
村田裕子　1980.7〜1990.3
甚野尚志　1983.4〜1990.3
佐原康夫　1986.4〜1990.3
三浦秀一　1985.11〜1991.2
小林敦子　1987.4〜1991.3
井上　進　1984.7〜1991.3
平田由美　1982.4〜1991.3
奥村　弘　1986.4〜1991.3
河野道房　1987.6〜1991.11
岩熊幸男　1980.4〜1992.3
辻　正博　1988.10〜1992.5
礪波　護　1965.4〜1971.11
　　1975.4〜1993.3
荒井　健　1961.4〜1967.3
　　1970.8〜1993.3
古屋哲夫　1971.4〜1994.3
藤井譲治　1983.4〜1994.3
山下正男　1968.8〜1994.3
塚本　明　1989.4〜1995.3
小野和子　1954.4〜1985.3
　　1991.4〜1995.3
中砂明徳　1990.12〜1995.3
光永雅明　1989.11〜1995.3
佐々木博光　1990.5〜1995.3
鈴木啓司　1987.4〜1996.3
斎藤希史　1991.4〜1997.3
梅原　郁　1969.7〜1997.3
横手　裕　1991.9〜1997.3
谷　泰　1960.6〜1968.4
　　1974.4〜1997.3
藤田隆則　1988.4〜1997.3
新井晋司　1986.4〜1997.6
安富　歩　1991.4〜1997.10
飛鳥井雅道　1958.4〜1998.3
谷井陽子　1991.12〜1999.3
濱田麻矢　1997.4〜1999.3
稲本泰生　1992.11〜1999.4
吉川忠夫　1974.4〜2000.3
荒牧典俊　1966.5〜1974.6
　　1991.4〜2000.3
勝村哲也　1975.10〜2000.3
高田京比子　1996.1〜2000.3
狹間直樹　1968.10〜1974.3
　　1977.4〜2001.3
小山　哲　1995.4〜2001.3
上野成利　1993.4〜2001.3
安田敏朗　1996.6〜2001.3
瀧井一博　1995.4〜2001.3
髙嶋　航　1997.11〜2001.9
桑山正進　1971.5〜1975.3
　　1979.4〜2002.3
木島史雄　1992.4〜2002.3
北垣　徹　1996.5〜2002.3
森賀一惠　1992.4〜2002.9
多田博美　1965.4〜2003.3
阪上　孝　1966.4〜1973.3
　　1976.4〜2003.3
宇佐美文理　2001.4〜2003.3
落合弘樹　1991.4〜2003.3
井狩彌介　1982.4〜2004.3
山本有造　1967.4〜1973.3
　　1981.4〜2004.3
佐々木克　1977.5〜2004.3
小林博行　1997.4〜2004.3
東郷俊宏　1998.4〜2004.3
古勝隆一　1998.4〜2004.4
堂山英次郎　2001.12〜2004.4

組織・所員

人文科学研究所は、5部門、1附属研究施設からなる大部門制をとっている。研究の遂行と運営の便宜上、これらは人文学研究部、東方学研究部の2部に分けられているが、複数の部・部門にまたがる共同研究、学際的な共同研究を組織、運営することによって、学問が過度に専門化する弊害を防ぐことを目標としている。



人文科学研究所

所長　森　時彦

副所長　水野直樹

高田時雄

教授

人文学研究部●　宇佐美齊
大浦康介
田中雅一
富永茂樹
藤井正人
前川和也
水野直樹
山室信一
横山俊夫

東方学研究部●　浅原達郎
井波陵一
岩井茂樹
金　文京
小南一郎
曾布川寛
高田時雄
武田時昌
田中　淡
冨谷　至
麥谷邦夫
森　時彦

客員●　丸山　宏（名城大学農学部教授）
李　俊植（2004.2～2004.7）
Marmande, Francis（2004.4-2004.7）

助教授

人文学研究部●　岡田暁生
籠谷直人
加藤和人
小関　隆
高木博志
高階絵里加
竹沢泰子

東方学研究部●　池田　巧
石川禎浩
稲葉　穣
Wittern, Christian
Esposito, Monica
岡村秀典
船山　徹
宮宅　潔
矢木　毅
安岡孝一

客員●　緒形　康（神戸大学文学部助教授）

助手

人文学研究部●　李　昇燁
菊地　暁
倉島　哲
小牧幸代
坂本優一郎
田中祐理子
谷川　穣
藤原辰史
森本淳生

東方学研究部●　大原嘉豊
佐野誠子
中西裕樹
藤井律之
古松崇志
真下裕之
宮　紀子
村上　衛
守岡知彦
山崎　岳

漢字情報研究センター

センター長　森　時彦

センター主任　井波陵一

教授

井波陵一
武田時昌

助教授

Wittern, Christian
安岡孝一

助手

梶浦　晋
守岡知彦
山崎　岳

研究・教育経費

歳出決算等

（単位円）

	平成13年度	平成14年度	平成15年度
人件費	693,128,297	653,748,422	654,521,583
物件費	101,617,689	89,566,679	95,650,109
出版費	2,995,048	5,794,498	5,612,550
図書費	25,472,412	28,314,604	25,565,146
その他	147,194,917	134,606,853	162,047,804
総決算額	970,408,363	912,031,056	943,397,192

科学研究費補助金採択状況

（単位千円）

種目	2001年度 件数	2001年度 金額	2002年度 件数	2002年度 金額	2003年度 件数	2003年度 金額
特定領域研究Ａ１	1	2,300			1	400
特定領域研究Ａ２	7	13,300	8	20,500	4	12,800
基盤研究Ａ１	1	11,830				
基盤研究Ａ２	1	6,110	1	10,010	2	26,000
基盤研究Ｂ１	2	10,600	3	14,700	2	9,600
基盤研究Ｂ２	7	22,100	4	14,600	5	22,100
基盤研究Ｃ２	6	8,900	5	5,900	9	8,500
萌芽研究	1	800	2	1,800	2	1,600
奨励研究Ａ	3	3,000				
若手研究Ｂ			4	3,320	4	5,300
	29件	78,940	27件	70,830	29件	86,300

科学研究費補助金研究題目・代表者

●平成14年度

（単位千円）

課題名	種目	研究代表者	金額
元明代散曲の解釈	特定領域研究２	金　文京	1,400
10～13世紀東アジア史の文献学的研究	特定領域研究２	古松崇志	1,400
中国広東省の消滅の危機に瀕した言語、ショオ語の緊急調査	特定領域研究２	中西弘樹	1,800
新・旧キリスト教ミッションの東アジアにおける出版活動	特定領域研究２	高田時雄	2,200
東アジアにおける仏教典籍の開版とその流通	特定領域研究２	梶浦　晋	1,800
北宋期における古典校刻の学術史的意義に関する研究	特定領域研究２	古勝隆一	1,000
ゲノム研究の歴史と社会との相互作用に関する研究－日本とアジアを中心に	特定領域研究２	加藤和人	8,000
チャガタイ・トルコ語、ペルシャ語文献の諸写本研究	特定領域研究２	真下裕之	2,900
東アジアにおける法と習慣－死刑をめぐる諸問題	基盤研究Ａ２	冨谷　至	10,010
中国近代社会の変容についての数量データと基礎的資料の収集と分析	基盤研究Ｂ１	森　時彦	4,200
朝鮮・台湾における植民地支配の制度・機構・政策に関する総合的研究	基盤研究Ｂ１	水野直樹	4,700
初期コミンテルンと東アジアに関する歴史文献学的研究	基盤研究Ｂ１	石川禎浩	5,800
中国学に関する南欧所在資料の研究	基盤研究Ｂ２	高田時雄	3,100
「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究	基盤研究Ｂ２	竹沢泰子	4,900
現存ヴェーダ伝承の調査と研究	基盤研究Ｂ２	井狩彌介	4,000
六朝隋唐精神史の研究	基盤研究Ｂ２	宇佐美文理	2,600
国民帝国としての近代日本国家の統治システムの展開とその法政理論に関する総合的分析	基盤研究Ｃ２	山室信一	800
明治維新と京都文化の変容－19世紀における「日本文化」の近代的再編・同質化	基盤研究Ｃ２	高木博志	1,100
南宋・金・元代文学の総合的研究	基盤研究Ｃ２	金　文京	1,100
米軍と自衛隊に属する女性兵士の実態と表象についての文化人類学的研究	基盤研究Ｃ２	田中雅一	1,600
日中戦争期の中国山西省における調査資料の再検討	基盤研究Ｃ２	岡村秀典	1,300
戦前期日本の対アジア調査機関と「帝国」内経済連関についての研究	萌芽研究	山本有造	700
欧州における東アジア伝統医学の受容と伝播に関する基礎的研究	萌芽研究	東郷俊宏	1,100
北宋時代を中心とした中国仏教絵画の研究	若手研究Ｂ	大原嘉豊	1,000
10～13世紀における東アジア世界国際関係の研究	若手研究Ｂ	古松崇志	800
モンゴル時代の出版文化と諸制度の研究	若手研究Ｂ	宮　紀子	1,100
出土文字史料からみた中国古代裁判制度の展開	若手研究Ｂ	宮宅　潔	420

●平成15年度

（単位千円）

課題名	種目	研究代表者	金額
「東アジア出版文化の研究」調整班（Ａ）出版機構研究	特定領域研究１	金　文京	400
新・旧キリスト教ミッションの東アジアにおける出版活動	特定領域研究２	高田時雄	1,700
東アジアにおける仏教典籍の開版とその流通	特定領域研究２	梶浦　晋	1,600
ゲノム研究の歴史と社会との相互作用に関する研究－日本とアジアを中心に	特定領域研究２	加藤和人	8,000
中国近世の商業出版と文人	特定領域研究２	金　文京	1,500
東アジアにおける法と習慣－死刑をめぐる諸問題	基盤研究Ａ２	冨谷　至	10,790
中国県制の総合研究	基盤研究Ａ２	森　時彦	15,210
朝鮮・台湾における植民地支配の制度・機構・政策に関する総合的研究	基盤研究Ｂ１	水野直樹	4,900
初期コミンテルンと東アジアに関する歴史文献学的研究	基盤研究Ｂ１	石川禎浩	4,700
「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究	基盤研究Ｂ２	竹沢泰子	3,200
現存ヴェーダ伝承の調査と研究	基盤研究Ｂ２	井狩彌介	3,900
江南道教の研究	基盤研究Ｂ２	麥谷邦夫	3,500
中国美術の図像学的研究	基盤研究Ｂ２	曽布川寛	7,400
1960年代の研究－生活文化と意識における変容の国際比較	基盤研究Ｂ２	富永茂樹	4,100
国民帝国としての近代日本国家の統治システムの展開とその法政理論に関する総合的分析	基盤研究Ｃ２	山室信一	700
明治維新と京都文化の変容－19世紀における「日本文化」の近代的再編・同質化	基盤研究Ｃ２	高木博志	1,100
南宋・金・元代文学の総合的研究	基盤研究Ｃ２	金　文京	1,100
米軍と自衛隊に属する女性兵士の実態と表象についての文化人類学的研究	基盤研究Ｃ２	田中雅一	500
日中戦争期の中国山西省における調査資料の再検討	基盤研究Ｃ２	岡村秀典	1,200

宝巻の研究－宗教文芸としての視点から	基盤研究Ｃ２	小南一郎	900
南西アジア地域へのイスラーム伝播ルートと初伝伝説の基礎的研究	基盤研究Ｃ２	稲葉　穣	900
前近代インドにおけるイスラーム諸国家制度の動態的研究	基盤研究Ｃ２	真下裕之	1,000
南斉・竟陵文宣王蕭子良撰『浄住子』の訳注作成を中心とする中国六朝仏教史の基礎研究	基盤研究Ｃ２	船山　徹	1,100
戦前期日本の対アジア調査機関と「帝国」内経済連関についての研究	萌芽研究	山本有造	500
欧州における東アジア伝統医学の受容と伝播に関する基礎的研究	萌芽研究	東郷俊宏	1,100
モンゴル時代の出版文化と諸制度の研究	若手研究Ｂ	宮　紀子	1,100
南アジア・ムスリム社会における「預言者信仰」の詩学と政治学	若手研究Ｂ	小牧幸代	1,500
「沈黙期」ヴァレリーの思索の展開と『若きパルク』の成立及びその思想に関する研究	若手研究Ｂ	森本淳生	1,300
魏晋南朝における遷官制度	若手研究Ｂ	藤井律之	1,400

各種助成金 (単位円)

■ 委任経理金

●平成13年度

16・17世紀アジアにおける言語接触とキリスト教布教団の言語戦略	高田時雄	1,000,000	(財) 松下国際財団
20世紀前半の日本「国民帝国」論とアジアをめぐる知の集積・還流に関する基礎的研究	山本有造	250,000	(財) 三菱財団
在華紡と中国社会	森　時彦	3,000,000	(財) 日中友好会館

●平成14年度

在華紡と中国社会	森　時彦	3,000,000	(財) 日中友好会館
古シルクロードの軍事・行政システム－河西回廊を中心にして	冨谷　至	1,800,000	(財) なら・シルクロード博記念国際交流財団
近代中国東南沿海地域の変動と華人世界の再編	村上　衛	1,000,000	(財) 松下国際財団
現代科学術語の再構築―ソウル／京都シンポジウム第１楽章	横山俊夫	550,000	(財) 京都大学教育研究振興財団

●平成15年度

明治美術における神話伝説主題の研究－歴史画と裸体画の出会いをめぐって	高階絵里加	1,000,000	(財) 稲盛財団
アジアの軍隊の歴史・人類学的研究－ジェンダー規範、地域社会、表象を中心に	田中雅一	2,000,000	(財) 京都大学教育研究振興財団
在華紡と中国社会	森　時彦	300,000	(財) 日中友好会館
古シルクロードの軍事・行政システム－河西回廊を中心にして	冨谷　至	1,659,000	(財) なら・シルクロード博記念国際交流財団

■ その他

●平成15年度

研究成果公開促進費（データベース）	全国漢籍データベース	高田時雄	20,500,000	日本学術振興会
研究成果公開促進費（データベース）	「東洋学文献類目」データベース	井波陵一	10,600,000	日本学術振興会

●平成16年度

上記全国漢籍データベース			19,400,000	
上記全国東洋学文献類目データベース			9,100,000	

人文科学研究のフロンティア 2004年
京都大学人文科学研究所要覧

2004年11月 5日　印刷
2004年11月10日　発行
非売品

編集・発行◆京都大学人文科学研究所
〒606-8501　京都市左京区吉田牛ノ宮町
Phone 075-753-6902
編集協力◆木村　滋
デザイン、DTP◆柴永事務所
印刷◆凸版印刷株式会社

©京都大学人文科学研究所 2004
＊無断転載を禁じます